新潟県埋蔵文化財調査報告書　第96集

上信越自動車道関係発掘調査報告書Ⅶ

裏山遺跡

2000

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団

上信越自動車道関係発掘調査報告書Ⅶ

裏山（うらやま）遺跡

2000

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

上信越自動車道は、首都圏と上越地方を結ぶ幹線道路として、群馬県藤岡インターチェンジから分岐し、群馬県・長野県を経て新潟県上越市に至る全長203キロメートルの高速自動車道です。これによって、関越・磐越自動車道と並び、日本海側と太平洋側を結ぶ大動脈として、沿線地域の発展に多大な効果をもたらすものと期待されています。

新潟県教育委員会は、昭和63年度から建設用地内の埋蔵文化財について調査を開始し、平成７年度には長野県境～中郷インターチェンジ間の発掘調査を、平成９年度には中郷インターチェンジ～上越ジャンクション間の発掘調査を終了して、県内全線の調査業務を完了しました。

本書は上信越自動車道上越ジャンクション建設地内において、平成８年度に行った裏山遺跡の発掘調査報告書です。調査の結果、縄文時代・弥生時代・古代（平安時代）・中世の生活跡が発見されました。特に一つの弥生時代の集落が全面的に調査されたのは新潟県内では初めてのことであり、濠を巡らせた弥生時代の高地性集落の全容がほぼ明らかになりました。また古代の竪穴建物跡、中世の塚群も検出されました。遺物は土器・石器をはじめ鉄器や玉類などが多量に出土しました。

今回の調査成果が、歴史を解明するための資料として広く活用され、埋蔵文化財に対する理解と認識を深める契機となれば幸いであります。

最後に、この調査に関して多大なご協力とご援助を賜った上越市教育委員会、並びに地元の方々をはじめ、日本道路公団新潟建設局（現、日本道路公団北陸支社）・同上越工事事務所に対して厚く御礼申し上げます。

平成12年３月

新潟県教育委員会

教育長　野　本　憲　雄

例　　言

1．本書は新潟県上越市大字岩木字裏山ほかに所在する裏山遺跡の発掘調査記録である。

2．発掘調査は上信越自動車道上越ジャンクションの建設に伴い、新潟県が日本道路公団から受託して実施したものである。

3．発掘調査は新潟県教育委員会（以下、県教委）が調査主体となり、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）が平成７年度・８年度に実施した。

4．整理および報告にかかる作業は平成10年度・11年度に実施し、埋文事業団職員がこれにあたった。

5．出土遺物と整理にかかる資料はすべて県教委が保管・管理している。遺物の註記記号は「ウラ山」とし、出土地点・層位などを併記した。

6．本書で示す北方位は日本平面国家座標第八系のＸ軸方向を指しており、真北から０度10分15秒西偏している。

7．作成した挿図・図版のうち、既存の図を使用した場合にはそれぞれの出典を記した。

8．掲載した遺物の番号は、土器・土製品、石器・石製品・金属器でそれぞれ通し番号であり、図面図版と写真図版の番号は一致している。

9．引用・参考文献は著者および発行年を［　］で示し、巻末に一括して掲載した。

10．本書の編集は小池義人（埋文事業団主任調査員）、野水　仁（同）が担当し、加藤　学（同文化財調査員）、石田守之（同嘱託員）・轡田克史（同嘱託員）の協力を得た。執筆分担は以下に示すが、第Ⅴ章はパリノサーヴェィ株式会社に委託し、付編は矢田俊文氏（新潟大学人文学部）に依頼した。第Ⅱ章は過去の新潟県埋蔵文化財調査報告書をもとに加筆・修正したものである。

第Ⅳ章３・４（軽石製研磨具のみ）……野水

第Ⅳ章４（砥石、軽石製研磨具、墨書礫・礫を除く石器・石製品）……加藤・石田

上記分担を除く部分……小池

11．本遺跡について、『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』等に概要の報告がなされているが、本書の記述をもって正式な報告とする。上記『年報』等と本書に齟齬のある点は、本書の記述をとるものとする。

12．発掘調査から本書の作成に至るまで下記の方々から多大なご教示と協力を賜った。厚く御礼申し上げる。（五十音順　敬称略）

赤澤徳明　石川日出志　岩瀬由美　甘粕　健　川村浩司　金子拓男　木田　清　楠　正勝　小島幸雄
坂井秀弥　佐々木勝　笹沢正史　関　雅之　高野武男　滝澤規朗　立木宏明　栃木英道　冨山正明
橋本博文　林　大智　久田正弘　村上恭通　安　英樹　渡邊朋和

目　次

第Ⅰ章　序　説

1　調査に至る経緯 …… 1
2　調査の方法と経過 …… 1
（1）一次調査 …… 1
（2）二次調査 …… 3
（3）調査体制 …… 6
3　裏山遺跡の取り扱いをめぐる経緯 …… 6
4　整理の経過と体制 …… 7

第Ⅱ章　遺跡を取りまく環境

1　高田平野周辺の地形 …… 9
2　頸城における弥生・古墳時代の遺跡 …… 10
A　弥生時代 …… 10
B　古墳時代 …… 12
（1）古　墳 …… 12
a）高田平野沖積面の古墳あるいは周溝遺構 …… 12
b）西頸城丘陵東縁の古墳群 …… 13
c）矢代川中流域の古墳群 …… 14
d）飯田川・櫛池川扇状地の古墳群 …… 14
（2）集落跡・遺物包含地 …… 15

第Ⅲ章　層序と遺構

1　裏山遺跡と遺跡周囲の地形 …… 17
2　グリッドの設定 …… 19
3　層　序 …… 20
4　遺構各説 …… 20
A　弥生時代 …… 20
（1）竪穴建物 …… 22
（2）環　濠 …… 23
（3）土坑・溝 …… 24
（4）その他 …… 25
B　古　代 …… 26
C　中　世 …… 26

第Ⅳ章　遺　物

1　概　況 …… 29
2　土　器 …… 29
A　弥生土器 …… 29
（1）出土状況と数量 …… 29
（2）調整・文様・胎土 …… 30

a）調　整 …… 30　b）文　様 …… 30
c）胎　土 …… 31
（3）分　類 …… 32
a）甕形土器 …… 32　b）壷形土器 …… 38
c）高杯形土器 …… 40　d）器台形土器 …… 40
e）鉢形土器 …… 44　f）有孔鉢形土器 …… 44
g）蓋形土器 …… 44
（4）各　説 …… 44
a）竪穴建物出土の土器 …… 44　b）土坑・溝出土の土器 …… 45
c）環濠出土の土器 …… 46　d）主丘頂上Ⅱ層の土器 …… 48
e）主丘Ⅰ層の土器 …… 49　f）南環濠下－小谷出土の土器 …… 50
g）付帯調査区A出土の土器 …… 50
B　縄文時代の土器 …… 50
C　古代の土器 …… 50
D　中世以降の陶器・磁器 …… 51
3　土製品 …… 51
a）有孔土製品 …… 51　b）紡錘車 …… 52
c）盤状土製品 …… 52　d）塊状土製品 …… 52
4　石器・石製品 …… 53
A　縄文時代・弥生時代 …… 53
（1）石器 …… 53
a）砥石 …… 53　b）軽石製研磨具 …… 54
c）線状溝を有する石器 …… 55　d）磨石類 …… 55
e）尖頭器 …… 55　f）石　鏃 …… 56
g）磨製石斧 …… 56　h）その他の剥片石器 …… 57
i）石　核 …… 57
（2）玉作関連資料 …… 57
a）翡翠原石 …… 57　b）剥片剥離から研磨に至る資料 …… 58
c）管　玉 …… 58　d）勾　玉 …… 58
e）裏山遺跡における玉作 …… 59
（3）ガラス小玉 …… 59
（4）礫 …… 59
B　中　世 …… 60
a）数　珠 …… 60　b）加工痕のある礫 …… 60
c）石　仏 …… 60　d）墨書礫・礫 …… 60
5　金属器・銭貨 …… 60
A　弥生時代 …… 60
B　中　世 …… 62
C　近世・近代 …… 62
6　炭化種実・種実痕 …… 62

第Ⅴ章　裏山遺跡出土の礫石経について

1 …… 63
2 …… 63
3 …… 65
4 …… 65

第Ⅵ章　自然科学分析

1　試　料 …… 89
2　方　法 …… 89
A　放射性炭素年代測定 …… 89
（1）前処理 …… 89
（2）測定試料の調整 …… 89
（3）測　定 …… 89
（4）計　算 …… 90
B　樹種同定 …… 90
3　結　果 …… 90
A　放射性炭素年代測定 …… 90
B　樹種同定 …… 90
4　考　察 …… 90
A　各遺構の年代 …… 90
B　用材について …… 91

第Ⅶ章　まとめ

1　新潟県域の防禦的集落 …… 93
（1）地形的条件 …… 93
（2）時　期 …… 94
2　環濠と竪穴建物 …… 95
3　弥生後期の土器 …… 97
（1）柏崎・刈羽の編年 …… 97
（2）裏山遺跡の土器 …… 97
a）出土土器の概略 …… 98　b）4号竪穴の土器 …… 98
附　下馬場遺跡の概要 …… 100

《要約》 …… 102
《引用・参考文献》 …… 103
別表 …… 107

挿図・表目次

第１図　裏山遺跡の位置 …… 2
第２図　裏山遺跡一次調査トレンチ位置 …… 4
第３図　上越ジャンクションと裏山遺跡の位置関係 …… 7
第４図　高田平野周辺の地形と弥生時代・古墳時代の遺跡 …… 11
第５図　裏山遺跡調査着手時の地形 …… 17
第６図　裏山遺跡周辺の地形 …… 18
第７図　グリッドの設定 …… 19
第８図　土層柱状図 …… 20
第９図　主丘の概況 …… 21
第10図　塚群の位置 …… 26
第11図　塚群全体図 …… 27
第12図　弥生土器分類図（１） …… 33
第13図　弥生土器分類図（２） …… 34
第14図　弥生土器分類図（３） …… 36
第15図　弥生土器分類図（４） …… 37
第16図　弥生土器分類図（５） …… 39
第17図　弥生土器分類図（６） …… 41
第18図　弥生土器分類図（７） …… 42
第19図　弥生土器分類図（８） …… 43
第20図　南環濠の弥生土器出土状況 …… 47
第21図　主丘頂上の弥生土器出土状況 …… 48
第22図　モモの炭化種実 …… 62
第23図　新潟県域の防禦的集落 …… 93
第24図　斐太遺跡概略図 …… 95
第25図　斐太遺跡の竪穴建物 …… 96
第26図　下馬場遺跡概略図 …… 96
第27図　後生山遺跡３号住居跡の弥生土器 …… 99
第28図　下馬場遺跡・斐太遺跡の位置 …… 100
第29図　下馬場遺跡の「続縄文」類似土器 …… 100
第30図　下馬場遺跡　石偶 …… 100
第31図　下馬場遺跡　高杯のスタンプ文（１） …… 100
第32図　下馬場遺跡　高杯のスタンプ文（２） …… 100
第１表　１号竪穴の礫一覧 …… 22
第２表　主丘Ⅱ層の礫重量分布 …… 59
第３表　弥生時代の鉄器一覧 …… 61
第４表　新潟県域における弥生時代の鉄器一覧 …… 61
第５表　炭化種実一覧 …… 62
第６表　新潟県域の防禦的集落 …… 94
別表１　弥生土器観察表 …… 107
別表２　土製品観察表 …… 143
別表３　石器・石製品観察表 …… 144
別表４　縄文土器観察表 …… 152
別表５　古代・中世の土器観察表 …… 152

図版目次

〔図面〕

図版１　裏山遺跡主丘全体図
図版２　裏山遺跡周辺の地形立体視図
図版３　主丘立体視図（１）
図版４　主丘立体視図（２）
図版５　１号竪穴実測図
図版６　２号竪穴実測図
図版７　３号竪穴・４号竪穴実測図
図版８　４号竪穴遺物出土位置図　６号竪穴・５号竪穴実測図
図版９　７号竪穴・８号竪穴実測図
図版10　環濠断面図位置図
図版11　環濠断面図（１）
図版12　環濠断面図（２）
図版13　環濠断面図（３）
図版14　環濠断面図（４）
図版15　環濠断面図（５）
図版16　環濠断面図（６）
図版17　土坑・溝実測図（１）
図版18　土坑・溝実測図（２）
図版19　Ｈ１号竪穴実測図・遺物出土位置図
図版20　１号塚実測図
図版21　２号塚実測図
図版22　３号塚実測図
図版23　弥生時代後期の土器実測図（１）
図版24　弥生時代後期の土器実測図（２）
図版25　弥生時代後期の土器実測図（３）
図版26　弥生時代後期の土器実測図（４）
図版27　弥生時代後期の土器実測図（５）
図版28　弥生時代後期の土器実測図（６）
図版29　弥生時代後期の土器実測図（７）
図版30　弥生時代後期の土器実測図（８）
図版31　弥生時代後期の土器実測図（９）
図版32　弥生時代後期の土器実測図（10）
図版33　弥生時代後期の土器実測図（11）
図版34　弥生時代後期の土器実測図（12）
図版35　弥生時代後期の土器実測図（13）
図版36　弥生時代後期の土器実測図（14）
図版37　弥生時代後期の土器実測図（15）
図版38　弥生時代後期の土器実測図（16）
図版39　弥生時代後期の土器実測図（17）
図版40　弥生時代後期の土器実測図（18）
図版41　弥生時代後期の土器実測図（19）
図版42　弥生時代後期の土器実測図（20）
図版43　弥生時代後期の土器実測図（21）
図版44　弥生時代後期の土器実測図（22）
図版45　弥生時代後期の土器実測図（23）
図版46　弥生時代後期の土器実測図（24）
図版47　弥生時代後期の土器実測図（25）
図版48　弥生時代後期の土器実測図（26）
図版49　弥生時代後期の土器実測図（27）
図版50　弥生時代後期の土器実測図（28）
図版51　弥生時代後期の土器実測図（29）
図版52　縄文土器・古代の土器実測図
図版53　古代・中世・近現代の土器実測図
図版54　土製品実測図（１）
図版55　土製品実測図（２）
図版56　石器・石製品実測図（１）
図版57　石器・石製品実測図（２）
図版58　石器・石製品実測図（３）
図版59　石器・石製品実測図（４）
図版60　石器・石製品実測図（５）
図版61　石器・石製品実測図（６）
図版62　石器・石製品実測図（７）
図版63　石器・石製品実測図（８）
図版64　石器・石製品実測図（９）
図版65　石器・石製品実測図（10）
図版66　石器・石製品実測図（11）
図版67　石器・石製品実測図（12）
図版68　石器・石製品実測図（13）
図版69　石器・石製品実測図（14）
図版70　石器・石製品実測図（15）
図版71　石器・石製品実測図（16）
図版72　石器・石製品実測図（17）
図版73　石器・石製品実測図（18）
図版74　石器・石製品実測図（19）
図版75　石器・石製品実測図（20）
図版76　鉄器実測図・銭貨拓影

〔写真〕

図版77　遺跡周辺の景観（１）
図版78　遺跡周辺の景観（２）・（３）
図版79　遺跡全景（１）・遺跡遠景
図版80　遺跡全景（２）・（３）
図版81　遺跡遠景　基本層序　２号竪穴調査風景
図版82　遺跡全景（５）　２号竪穴調査風景
図版83　主丘頂上の状況　１号竪穴・２号竪穴周辺の状況
図版84　１号竪穴・２号竪穴
図版85　３号竪穴・６号竪穴
図版86　７号竪穴・８号竪穴
図版87　４号竪穴・５号竪穴・１号竪穴
図版88　１号竪穴土層断面　１号竪穴礫出土状況　１号竪穴周辺の状況
図版89　２号竪穴土層断面　２号竪穴周辺の状況　３号竪穴土層断面
図版90　４号竪穴土層断面　４号竪穴土器出土状況（１）　４号竪穴土器出土状況（２）
図版91　５号竪穴土層断面　６号竪穴土層断面　６号竪穴炭化材出土状況
図版92　７号竪穴土層断面　７号竪穴炭化材出土状況　８号竪穴炉断面
図版93　Ｈ１号竪穴土器出土状況　Ｈ１号竪穴カマド土器出土状況　Ｈ１号竪穴土層断面
図版94　１号土坑　２号土坑断面　２号土坑　３号土坑　4号土坑　５号土坑　６号土坑　７号土坑
図版95　８号土坑　９号土坑　10号土坑　11号土坑遺物出土状況　11号土坑　12号土坑　１号溝
　　１号溝中央部の土器出土状況
図版96　南環濠全景　南環濠の調査風景
図版97　南環濠８～15ライン　南環濠８～12ライン
図版98　南環濠Ｎ～Ｌライン・東環濠南端　南環濠Ｎ～Ｌライン
図版99　東環濠全景　東環濠北半部　北環濠遠景
図版100　南環濠断面０地点　南環濠断面１地点　南環濠断面２地点　南環濠断面３地点
　　南環濠断面４地点　南環濠13ライン土器出土状況　南環濠断面６地点　南環濠断面７地点
図版101　南環濠断面８地点　南環濠断面９地点　南環濠断面10地点　南環濠断面11地点
　　南環濠断面12地点　南環濠Ｍ・Ｌライン調査風景　南環濠の足場と階段　東環濠断面19地点
図版102　東環濠断面13地点　東環濠断面14地点　東環濠断面15地点　東環濠土器出土状況
　　東環濠調査風景　北環濠Ａ区土器出土状況　北環濠断面17地点　北環濠Ｂ区土器出土状況
図版103　３号塚・２号塚調査風景　３号塚盛土除去状況　２号塚盛土除去状況
図版104　２号塚調査風景　２号塚・１号塚土層断面　１号塚検出状況
図版105　３号塚検出状況　３号塚土層断面　３号塚主体被覆礫　３号塚主体礫　３号塚主体断面
　　３号塚主体完掘　３号塚完掘　３号塚葺石・主体礫
図版106　２号塚土層断面　２号塚主体被覆礫　２号塚主体断面　２号塚主体完掘　２号塚葺石・主体礫
　　１号塚土層断面　１号塚掘り出し土土層断面　１号塚の礫
図版107　鉄器・石製品等
図版108　弥生時代後期の土器（１）
図版109　弥生時代後期の土器（２）
図版110　弥生時代後期の土器（３）
図版111　弥生時代後期の土器（４）
図版112　弥生時代後期の土器（５）

図版113　弥生時代後期の土器（６）
図版114　弥生時代後期の土器（７）
図版115　弥生時代後期の土器（８）
図版116　弥生時代後期の土器（９）
図版117　弥生時代後期の土器（10）
図版118　弥生時代後期の土器（11）
図版119　弥生時代後期の土器（12）
図版120　弥生時代後期の土器（13）
図版121　弥生時代後期の土器（14）
図版122　弥生時代後期の土器（15）
図版123　弥生時代後期の土器（16）
図版124　弥生時代後期の土器（17）
図版125　弥生時代後期の土器（18）
図版126　弥生時代後期の土器（19）・縄文土器
図版127　古代の土器（１）
図版128　古代の土器（２）・中世陶器・土製品
図版129　石器・石製品（１）
図版130　石器・石製品（２）
図版131　石器・石製品（３）
図版132　石器・石製品（４）
図版133　石器・石製品（５）
図版134　石器・石製品（６）
図版135　石器・石製品（７）
図版136　石器・石製品（８），金属器
図版137　墨書礫（１）
図版138　墨書礫（２）
図版139　墨書礫（３）
図版140　種実圧痕

第Ⅰ章　序　　説

1　調査に至る経緯

上信越自動車道（旧名称は関越自動車道上越線。以下、上信越道）は、群馬県藤岡ジャンクション～新潟県上越ジャンクション間の総延長203kmにわたる高速自動車国道である。本路線は、関越自動車道と北陸自動車道を結ぶ基幹輸送体系として、また、沿線地域の各種開発整備計画と関連して社会経済活動に大きな役割を果たすものである。

裏山遺跡にかかる上信越道第十一次施工命令区間（新潟県中頸城郡中郷村～新潟県上越市）は、昭和48年11月に基本計画が、平成元年１月に整備計画がそれぞれ決定され、平成２年11月に施工命令が出された。施工命令に先立ち、新潟県教育委員会（以下、県教委）は日本道路公団（以下、公団）の依頼を受けて平成２年４月に第十一次区間３市村（中郷村・新井市・上越市）の踏査を行い、周知の遺跡18か所、新発見の遺跡10か所、遺跡推定地25か所の埋蔵文化財包蔵地が存在することを確認し、この結果を公団へ通知している。県教委は、用地内に存在する観音平・天神堂古墳群、斐太遺跡、春日山城跡（以上、国指定史跡）、鮫ヶ尾城跡（県指定史跡）が現状保存に価する遺跡であること、春日山城周辺は、上越市の第一種規制区域（『史跡春日山城跡保存管理計画書』昭和55年３月、上越市教委）にあるため、上越市と早急に協議する必要があることなど、意見を添えている。この時点で裏山遺跡は9,100㎡の範囲が遺跡推定地No．25として取り上げられていた。

裏山遺跡が所在する上越ジャンクション用地については、北陸自動車道（以下、北陸道）建設の時点でも、春日山城外郭と目される通称御馬山の扱いが問題となっていた。昭和55年10月から12月に上越市教育委員会が実施した発掘調査では御馬山に遺構は見出されず、翌56年２月の県教委・公団協議では、「御馬山自体に問題はないが、木田までの平地部分（北陸道春日・木田地区遺跡群）の調査が必要である」との合意がなされた。さらに上信越道用地の踏査を行った平成２年の９月には、上越市教委に「当該地区の埋蔵文化財の取扱いについては関係者で別途協議することとする」と通知している。平成７年10月、炭山遺跡の一部として調査した御馬山の東斜面・南西斜面でも、遺構・遺物の検出がなく、この時点では御馬山に集約されていた埋蔵文化財と上越ジャンクション建設の問題は一応の帰結をみていた。

平成７年７月、埋文事業団職員が現状を確認した折、裏山遺跡は立木のほぼ全体が伐採され、遺跡斜面部はジグザグ状の作業道がすでに掘削されていたが、北側斜面裾の掘削面から両掌ほどの弥生土器片が採集され、山頂では塚状の高まりが確認された。ここで裏山遺跡が弥生時代の高地性集落・墳墓であることが予想された。

2　調査の方法と経過

（１）一次調査

平成７年10月２日から27日、11月20日から24日に実施した［田海1996］。調査トレンチを主丘部に８か所（２か所は立木伐採作業道の掘削面精査）、南斜面裾部に21か所、北斜面裾部に３か所の計32か所設定

日本地理院地形図　1：50,000
〔高田東部〕平成３年・〔高田西部〕平成５年・〔柿崎〕昭和63年

第１図　裏山遺跡の位置

して遺構・遺物の有無を確認し（第２図）、土層堆積状況などを記録した。なお、トレンチは主丘部では人力で、斜面裾部では重機で掘削し、墳墓状遺構を観察するため灌木・下草の刈り取りを行った。

主丘部では、墳墓状遺構２～３基（本書では１・２・３号塚）、竪穴住居跡２基（本書では５号竪穴・北環濠）・段切り（本書では東環濠）などを、北斜面裾部では崖崩れの痕跡を確認した。また、主丘部では30・31トレンチ（本書では北環濠・５号竪穴の位置）で多量の弥生土器、南斜面裾部では18トレンチ（Ｈ１号竪穴付近）で平安期の土師器を採集した。この結果、二次調査は主丘部11,450㎡と北斜面裾部400㎡の計11,850㎡を対象とすることとなった。

（２）二次調査

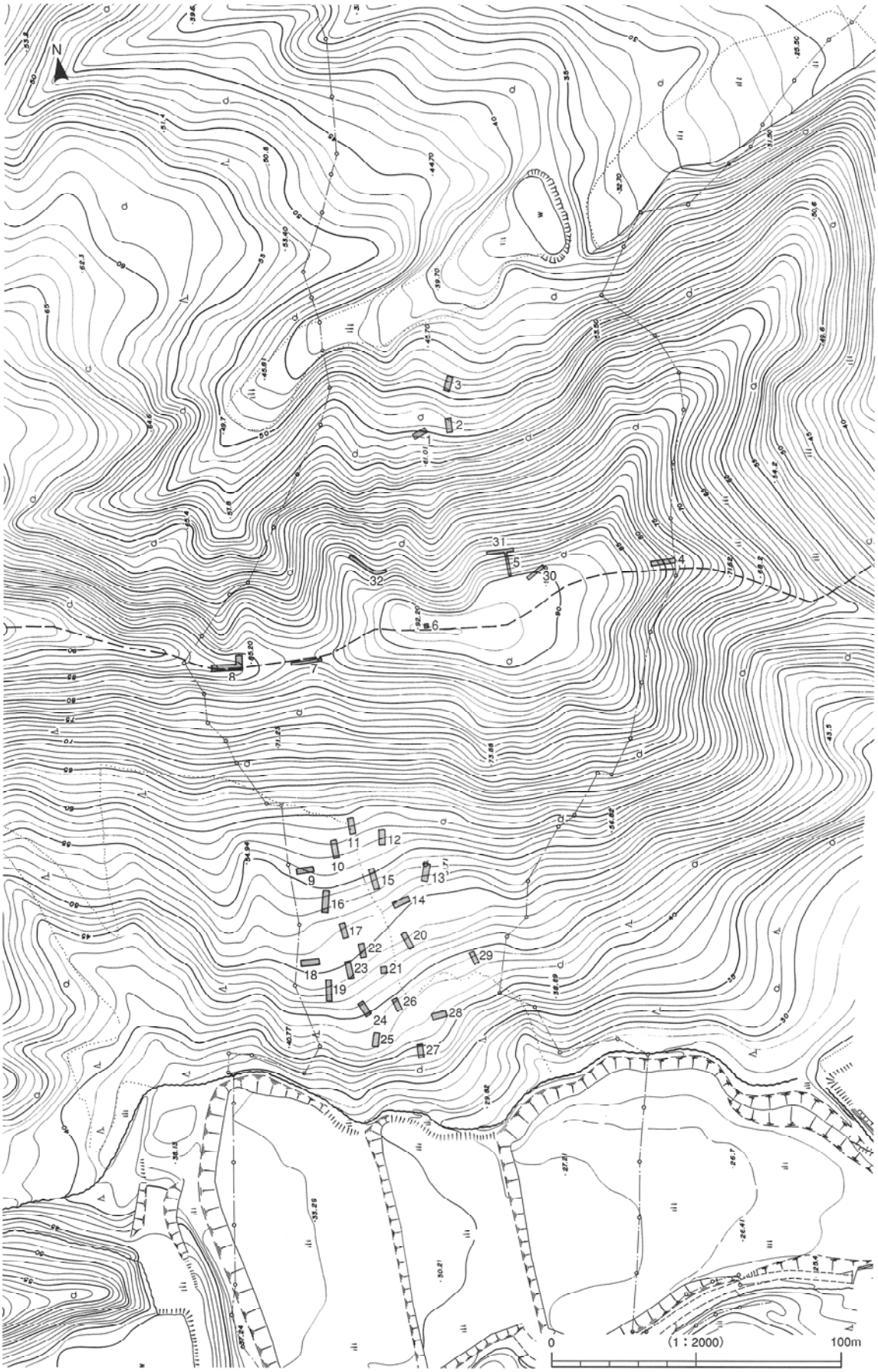
実質的な作業は平成８年５月13日に始まるが、４月10日からこれに先立って諸作業を開始している。調査区域には立木伐採時の枝材等が大量に残置されており、作業員10名前後と重機１台でこの処理にあたり、約２週間を費やした。また、遺跡主丘裾に通じる十分な（４ｔ車通行可能の）進入路がなかったため、岩木集落から西へ延びる農道を砕石敷で改良し、上信越自動車道用地内では、旧水田地に砕石敷の進入路を新たに造成した。急峻な地形と調査区域の制約上、調査事務所（プレハブ２階建て３棟）は主丘南裾、標高50ｍの地点とし、地山を削平してその用地を造成した。その際、平安期の竪穴建物（Ｈ１号竪穴）の存在に気づかず、その一部を重機で削り取る結果となった。

５月14日、地形測量のためセスナ機による航空撮影を行い、以後、主丘頂部から発掘調査を開始した。調査は主丘頂部の中世塚群・弥生時代の包含層発掘から着手し、これに併行して、主丘斜面のトレンチ掘削を順次行って遺構の確認を進めた。主丘頂部は、７月１日に中世墳墓の調査を終了して、その後は弥生時代の竪穴建物に比重を移した一方、主丘斜面にはそれを取りまくように存在する環濠が確認された。８月下旬には遺構の全容がほぼ明らかになり、31日には埋文事業団が現地説明会を実施して390名の見学者を得た。包含層発掘は9月上旬にほぼ終了し、竪穴建物以外にも土坑10数基の存在が確認できた。主丘斜面の環濠は、６月20日、南環濠から実質的な調査を開始した。10月下旬には全体を通じて掘削を主とする作業を概ね終了し、それ以後少数の作業員で遺構調査・図化作業を進めたが、11月は雨天が多く、さらに地形上風雨が強いため、作業は思わしく進展しなかった。この間、10月22日にはセスナ機で、11月６日にはラジコンヘリコプターで航空測量・写真撮影を実施した。主丘頂部で出土した礫はすべて調査事務所付近まで下して11月下旬に重量の計測を行い、その際に中世墳墓の礫に墨書のあるものを多数発見した。

11月４日、主丘北裾のボックスカルバート工事区域では、大規模な掘削が地滑りを誘発し、付帯調査区Ａを含む標高55ｍ前後のラインで地山に大きな亀裂が走ったが、調査には直接支障とならなかった。

付帯調査区Ａは、主丘からの排土が減少した８月中旬に着手したが、作業の都合によって断続的に調査し、10月末に終了した。黒褐色の旧表土には遺物がほとんどなく、主丘斜面からの崩落土と見られる褐色土に散漫な遺物の出土があったのみである。また、付帯調査区Ｂは11月下旬にようやく着手し、12月６日、平安期竪穴建物の記録を終え、すべての作業を終了した。なお、県教委による終了確認は平成８年12月４日付けとなっている（教文第1263号の２、平成９年２月25日）。

しかしながら、平成９年1月10日、上越市教育委員会から未調査の遺構・遺物包含層が存在するとの指摘を受け、同月13・14日、現地で中世塚群周溝の掘り残しと16Ｊ・15Ｍグリッド付近の遺物包含層残存を確認し、16・17日に追加調査を行った。



日本道路公団作成
上信越自動車道設計図

第２図　裏山遺跡一次調査トレンチ位置

作業通路

調査区域内は立木伐採時の作業道をそのまま使用して、人員・重機の通路とした。急斜面には必要に応じて建設用鉄パイプ（いわゆる単管）を用いた階段を設置した。ただし、南環濠東端部東側と北東尾根周囲は、環濠からの排土を処理するため、やむなく地山を掘削して重機の通路とした。調査職員・作業員は南側斜面裾の調査事務所から、あるいは北側裾（炭山遺跡）から主丘頂部までの標高差約40ｍを日々上り下りした。また、ベルトコンベヤ等の重量機器は重機をこまめに往復させて荷揚げした。

足場の設置

環濠の調査では足元の確保という安全上の問題を優先的に考え、単管を打設して足場を組んだ（図版101）。足場の組み立てと解体に多くの労力を費やしたが、地形の改変を最小限に留めることができ、作業は安全かつ容易に進行できた。

排土・土留め

ベルトコンベヤは主丘頂部で10台前後を使用した。排土は北側斜面に落下させ、重機でさらに斜面下方へ移動させた。環濠の排土はベルトコンベヤを使用せず、人力の投げ下ろしと重機を併用した。しかし、斜面部では重機のアームが届く範囲まで鋤簾で土砂を掻き落とすほか方法がなく、作業員が安全ロープを装備して対応した。主丘東縁部では排土スペースがなく、できる限り南北方向への排土を図ったが、法線外への流出を防止するため、丸木杭と背割り板による防護柵を設置した。

散水・乾燥防止

西側を除く三方が急斜面である主丘は、晴天が続くと激しく乾燥して固結した。また、地山と遺物包含層・遺構覆土が似かよって識別しがたく、常に散水が必要な状態にあった。

作業用水は西岩木集落付近で正善寺川から汲み上げ、調査事務所前に設置した10キロリットルのタンク２槽に備蓄した。これを南斜面中腹の10キロリットルタンクに口径1.5インチのエンジンポンプで揚水し、さらに頂部の１キロリットルタンクに移した。頂部では、口径１インチの農業用小型エンジンポンプで散水したほか、中腹のタンクから1.5インチポンプで直接散水した。また、水道を引けない状況にあったので、正善寺川の水は飲用以外のすべての作業に使用した。遺構の乾燥防止にはフェルト様の生コンクリート養生マット（厚さ約５㎜）を使用した。マットは日光を遮断して飛散しづらく、また雨水を溜めないという利点があり、散水して保水させればその効果を高めることができた。長期にわたる乾燥防止には、マットに梱包用ポリエチレンシート（厚さ約１㎜）を重ねて被覆し、水分の蒸散を抑えた。

写真記録

35㎜リバーサルフィルムと６×７版モノクロネガフィルムで同一の対象物を記録し、必要に応じて６×７版リバーサルフィルムを使用した。図版79上・図版83等の写真は８段から10段のヤグラを組んで撮影している。なお、調査着手時の地形と全掘状態の記録は空中写真を外部の業者に委託した。

測　量

上述の空中写真撮影と同時に地形測量・遺構測量を委託し、全掘状態はデジタルデータで記録した。図面図版３・４の立体視図はこのデータを編集したものである。また、平成12年度の整理では遺跡周辺の地形についても地形のデータをデジタル化してこれを図版２に利用した。

（3）　調査体制

平成7年度（一次調査）

主　　体　新潟県教育委員会（教育長　本間栄三郎）
調査受託　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長　本間栄三郎）
管　　理　藍原直木（専務理事兼事務局長）
　　山上利雄（総務課長）亀井　功（調査課長）
庶　　務　泉田　誠（総務課主事）
調査指導　藤巻正信（調査課調査第一係長）
調査職員　田海義正（調査課主任調査員）・三ツ井朋子（調査課文化財調査員）

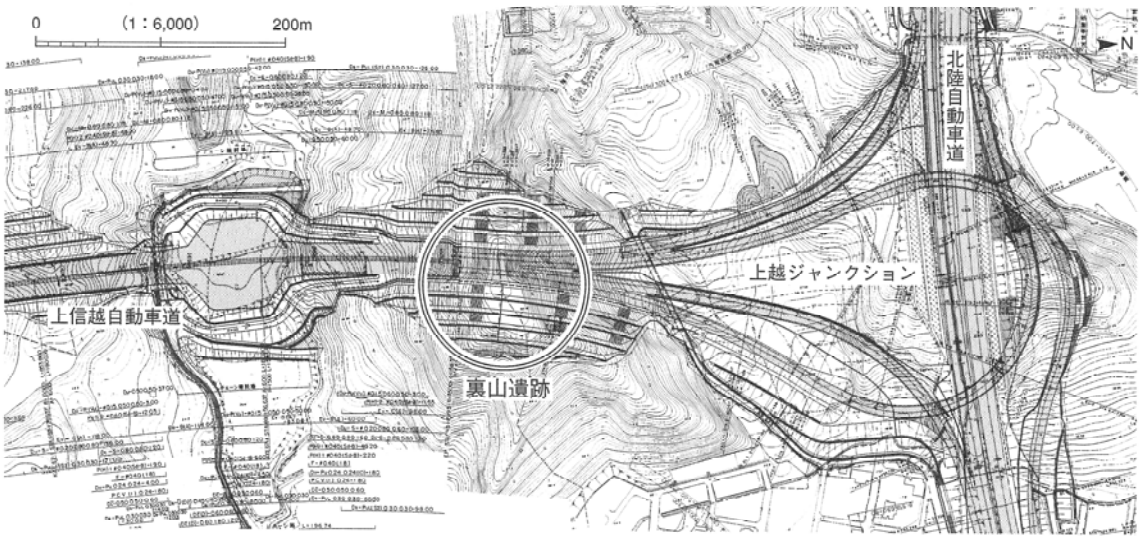
平成8年度（二次調査）

主　　体　新潟県教育委員会（教育長　本間栄三郎）
調査受託　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長　本間栄三郎）
管　　理　藍原直木（専務理事兼事務局長）
　　山上利雄（総務課長）亀井　功（調査課長）
庶　　務　泉田　誠（総務課主事）
調査指導　藤巻正信（調査課調査第一係長）
調査職員　村木　弘（調査課主任調査員）・小池義人（同）・渡邉尚紀（調査課文化財調査員）
　　村山良紀（調査課嘱託員）

3　裏山遺跡の取り扱いをめぐる経緯

裏山遺跡の発掘調査が一般に周知されたのは、現地説明会の実施に前後する平成8年8月下旬であり、最初の報道は「高地性集落の遺構出土、弥生時代後期し烈な抗争示す資料」との見出しがついた朝日新聞、8月24日の記事である。その後、他紙でも紹介記事が相次いで掲載された結果、8月31日の当日には390名の見学を受け、9月3日には上越市文化財保護審議会が視察に来訪した。9月20日、市議会の文教経済・新幹線高速道関係の合同委員会では、裏山遺跡の取扱いをめぐって議事があり、市教育委員会が文化財保護審議会の審議結果として、裏山遺跡の現状保存を要望したいとする方向を出す一方、日本道路公団（以下、「公団」）上越工事事務所からは、調査終了後工事着工の方針が示された。なお、同日に合同委員会は同市の黒田古墳群とともに裏山遺跡を視察している。

このような動きの中で、新潟県考古学会（甘粕健会長、以下「県考古学会」）は、10月4日、文化庁長官・新潟県知事・上越市長・北陸地方建設局長あてに「上越市岩木裏山遺跡の保存に関する要望書」を提出し、1）自動車道路設計を変更して遺跡の現状を保存すること、2）遺構・遺跡の劣化を防ぐ長・短期的な対策を速やかに実行すること、3）国史跡に指定し、史跡公園として遺跡の整備・活用を計ること、以上3項目を申し入れた。さらに10月28日、日本考古学協会が裏山遺跡の保存要望書を提出した。11月3日には上越市裏山遺跡を守る会、上越郷土研究会の主催で「裏山遺跡を考えるシンポジウム」が上越市立春日小学校で開催され、この席で裏山遺跡を守る会（中村辛一会長、以下「守る会」）が発足し、以後、裏山遺跡をめぐる動きは、主に守る会・県考古学会と県教委・市教委の間で進行した。なお、翌4日、丘陵北裾で地山掘削に誘引された地滑りが発生している。



第３図　上越ジャンクションと裏山遺跡の位置関係

日本道路公団作成
上信越自動車道設計図

11月13日、県教委は考古学会の要望書に対して、保存は技術的に困難であると回答し、12月４日には上越市教委が市議会文教経済常任委員会（以下、「文教委員会」）で、掘り尽くされた遺跡は保存・活用の意義が低いとして、保存する考えがない旨発言している。平成９年１月30日には、県教委・市教委・守る会・県考古学会の四者で会談がもたれ、県教委は、保存状況が悪く国史跡の指定は困難であること、ジャンクションの構造上、トンネルの設計は不可能であることを説明した。一方、市議会文教委員会は２月６日に、市議会では18日に相次いで、守る会などから提出された「裏山遺跡の保存と整備を求める請願」を採択し、この間の13日には、上越市長が市議会の一般質問で、裏山遺跡を保存したいと答弁し、19日には、市議長・文教委員長が県教委・公団新潟建設局へ保存要望の意見書を提出した。しかし、公団上越工事事務所は、ジャンクション合流地点に接近したトンネルが事故の誘因となること、軟弱地盤でのトンネル建設は技術的に困難であると市長に回答している。また、県教委は２月25日に裏山遺跡調査終了確認を公団・埋文事業団あてに通知し、工事着工を事実上認めている。４月３日、上信越自動車道須坂上越間建設促進期成同盟の県内五市町村長が、保存の姿勢を示した上越市長に対して、上信道建設の早期実現に協力するよう申し入れを行い、これに対しても上越市長は、保存の可能性を重ねて公団に求めているのでもう少し待って欲しいと、五市町村長に理解を求めた。しかしながら、５月12日に市長は、トンネル建設は技術的・財政的に困難として、遺跡の保存を断念すると発言し、翌13日には公団が遺跡主丘部の掘削工事に着手した。

4　整理の経過と体制

平成10年度は４月～７月の間に職員１名で、土器の計量、掲載遺物の選択、一部原稿の記述をしたが、同年度末に報告書を刊行する予定であった和泉Ａ遺跡の整理を最優先することになり、８月～12月の間は作業を中断した。ようやく11年１月から職員1名・整理作業員３名で土器の接合と実測を始めた。

平成11年度は体制を充実させ、職員２名・整理作業員７名が整理を担当した。遺物の実測・トレース、遺構のトレース、それらの図版作成等、主要な作業を11月にまでにおおむね終了し、それ以降は図の修正・補足、写真撮影等を行った。また、原稿は作業に並行して適宜記述を進めた。なお、12月・１月には砥

石・軽石製研磨具を除く一部の石器実測に加藤学（調査課文化財調査員）の協力を得た。体制は以下のとおりである。

平成10年度

主　　体　新潟県教育委員会（教育長　野本憲雄）
整理受託　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長　野本憲雄）
管　　理　須田益輝（専務理事兼事務局長）　若槻勝則（総務課長）　本間信昭（調査課長）
庶　　務　椎谷久雄（総務課主事）
指　　導　寺崎裕助（調査課調査第一係長）
整理職員　小池義人（調査課主任調査員）
整理作業員　吉原智子・中川祥子・広野　澄・小林千恵子（いずれも土器復元・土器実測）

平成11年度

主　　体　新潟県教育委員会（教育長　野本憲雄）
整理受託　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長　野本憲雄）
管　　理　須田益輝（専務理事兼事務局長）　若槻勝則（総務課長）　本間信昭（調査課長）
庶　　務　椎谷久雄（総務課主事）
指　　導　寺崎裕助（調査課調査第一係長）
整理職員　小池義人（調査課主任調査員）・野水　仁（同）
整理作業員　小林智美（土器の実測・トレース、トレース図修正、遺構トレース）・馬場弘子（石器実測、統計処理、写真撮影）・小熊紀子（土器・土製品・石器一部の実測とトレース）・田口和子（遺構のトレース、石器・土器の実測）・小山たか子（石器の実測とトレース、全測図トレース・写真撮影）広野　澄（土器・石器の実測とトレース）・鈴木芳子（土器・石器の実測・トレース）

第Ⅱ章　遺跡を取りまく環境

1　高田平野周辺の地形

裏山遺跡は新潟県南西部に展開する高田平野の西側丘陵（西頸城丘陵）上に位置する。遺跡は関川支流の正善寺川沿いにあり、遺跡と日本海との最短距離は3.5㎞である。

高田平野第一の河川である関川は、同じく妙高山系から流れる矢代川とともに平野南部に広大な扇状地を形成し、また、関田山系から流れる飯田川・別所川・櫛池川・大熊川も丘陵沿いに連続した扇状地を発達させている。これらの扇状地と平野北縁の潟町砂丘を除けば、高田平野の大半は氾濫原性低地で占められる。氾濫性低地は上位の高田面、下位の関川面、関川両岸の関川氾濫原面に区分されており［高田平野団体研究グループ1981］、高田面が氾濫原性低地の大きな比率を占めている。高田・関川の両沖積段丘は、関川河口附近ではその比高差が明らかでないが、内陸に向かってそれを増し、最大約６ｍを測る。さらに、関川とこれに合流する河川はその流域に自然堤防を発達させており、保倉川・旧保倉川流路沿いは自然堤防と旧河道との差異を、今日でも明瞭に認めることができる。高田面上の現集落は大半がこれらの自然堤防上にあり、畠地も自然堤防を中心に展開している。低位の関川面は、関川やその支流が高田面を開析して形成したもので、現河道沿いの狭い範囲で存在するに過ぎない。

弥生時代以降の集落跡のほとんどは、高田面および高田面上の自然堤防にあり、最古級の遺跡は、弥生時代後期の中島廻り遺跡（上越市大字戸野目）、古墳時代前期の北割遺跡（上越市大字東中島）・前田遺跡（上越市大字川端）である［小島1990、小島・笹澤1995、小島・中西ほか1996］。特に北割遺跡は飯田川支流の谷内川沿いに存在し、現表土下1.2ｍの深度に遺物包含層および遺構が発見されているため、高田面の遺跡は古代以降であるという、これまでの常識は揺らいでいる。

平野に面する西頸城丘陵東縁には、洪積段丘が南北に連なる。高位にある愛の風段丘は標高40ｍ程度で、表層に赤色土をのせている。一方、下位の平山段丘は標高20ｍ程度であり、開析が進んでいる愛の風段丘に比べて平坦な面を形成している。これらの段丘上には頸城ロームと呼ばれる層が堆積しており、大塚遺跡（上越市大字灰塚）・蛇谷遺跡（上越市大字向橋）・下馬場遺跡（上越市大字下馬場遺跡）のローム層中で旧石器が出土している［山田1996、星1997、小池1998］。

裏山遺跡～正善寺川上流域の丘陵地を構成する地質は新第三系の能生谷層であり、裏山遺跡がのる中門前層は能生谷層の上位にある。能生谷層・中門前層はともに軟弱で、この一帯を含む西頸城丘陵は地滑りの密集地帯となっている。裏山遺跡の北側に隣接する炭山遺跡の緩斜面は地滑り土塊によるものであるが、縄文時代早期末葉以降の遺物が出土しており［三ツ井1997］、地滑りは早期末葉以前に発生したものと考えられる。裏山遺跡主丘の地質は、上部からローム層・シルト層・砂礫層であり、砂礫層には中間に砂層・シルト層などが挟まれる。

裏山遺跡の北方は、比較的起伏の少ない丘陵地が連なり、春日山城の外郭とされる佐渡山・白山・正養寺山、林泉寺などがこの丘陵上に位置する。また、丘陵東側の大字大豆・中屋敷は西～東に緩く傾斜する扇状地であり、いわゆる春日山城下にあたる地域となっている。東方の大字山屋敷は洪積段丘平山面に相当し、古墳時代後期の集落、山畑遺跡などが存在する。

2　頸城における弥生・古墳時代の遺跡

『和名抄』に記載される頸城郡10郷には「沼川」があり、古代の行政区分では糸魚川・西頸城郡域も頸城に含まれるが、ここでは高田平野とその周辺地域－上越市・新井市・中頸城郡－をさす地域名として狭義的に「頸城」を用いることにしたい。また、妙高山麓から新井市南西部については、「頸城」南部を省略して「頸南」とする。通例「平野」は、関東平野のように、標高200ｍ以下の丘陵等をも包括する語であり、その意味ではここでの「頸城」と「高田平野」はほぼ同義となるが、「高田平野」は沖積平野・扇状地・砂丘などを指す地形上の用語として考え、地域名とは区別しておく。

A　弥生時代

遺跡の分布域は潟町潟湖群周辺・関川流域の沖積地・西頸城丘陵東縁・妙高山麓に４分できるが、遺跡数は限られている。特に関川流域の沖積地では分布が薄く、裏山遺跡を含めた「高地性集落集落」の存在が際立っている。沖積段丘高田面の完全な乾陸化は、近年の上越市内の発掘調査によれば、平安時代より溯ると見られるが、前述の傾向は乾陸化の状況と無関係ではないと思われる。

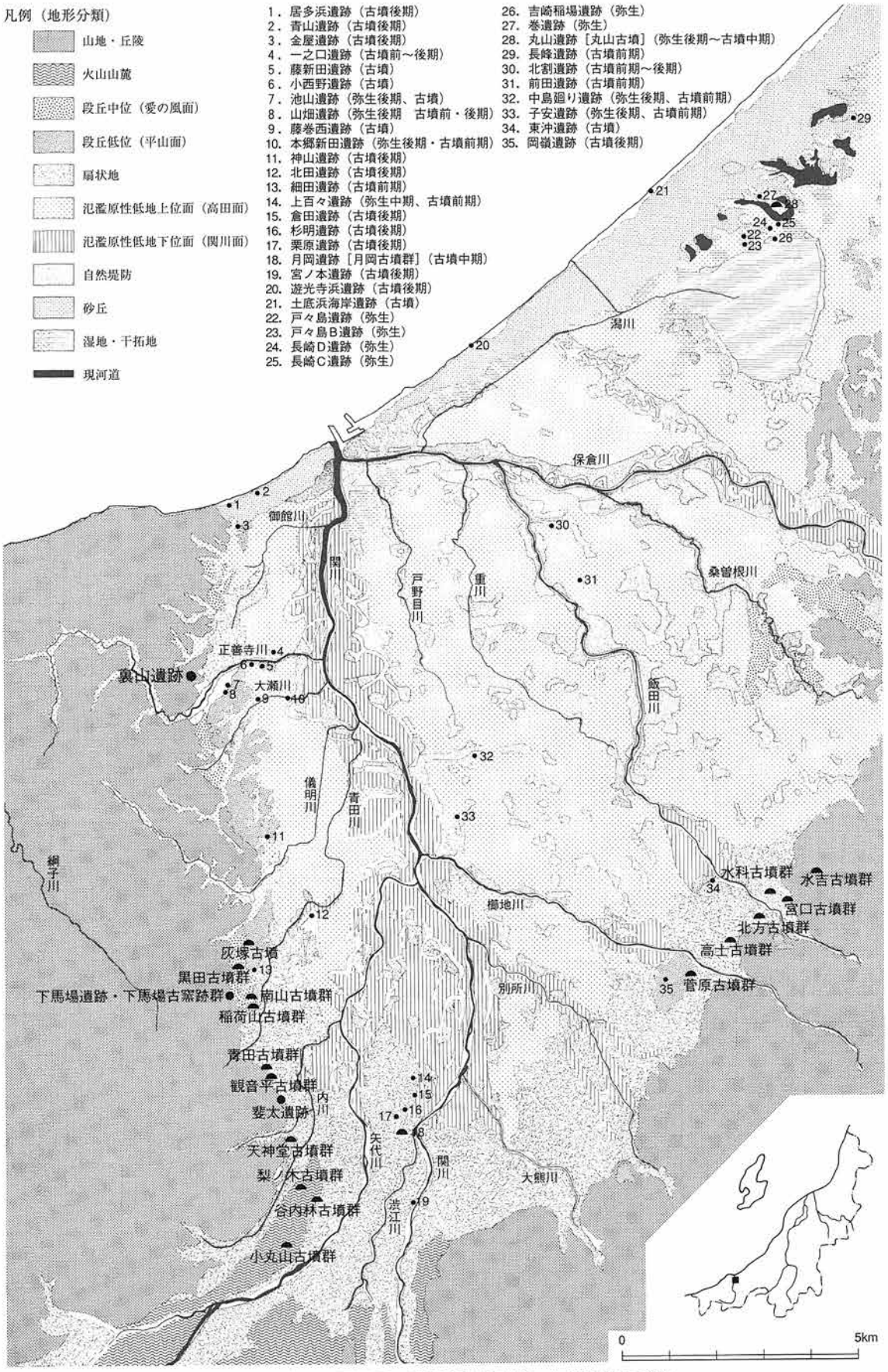
潟湖群周辺は、もっとも分布密度が高い地域であり、巻遺跡のクリス形石戈、坂の下の銅鏃、長崎・吉崎間の石剣［室岡1981・1983］など、著名な遺物が知られるものの、発掘調査された遺跡は丸山古墳のみに止まる。丸山古墳の盛土下には、旧表土を掘り込んだ竪穴建物の一角が後期後半期の土器少量とともに検出されている［小野・桑原1988］。第４図にはないが、柿崎町木崎山館にも後期東北系土器の出土が報告されている［室岡1990］。潟湖群周辺は、縄文時代前期後半以降に継続して遺跡が存在しており、潟湖を含む内水面が安定した生活資源の場であったことを示している。

関川流域の沖積地では中島廻り遺跡（上越市大字戸野目）・子安遺跡（上越市大字子安）本郷新田遺跡（上越市大字藤巻）・池山遺跡（上越市大字藤新田）・上百々遺跡（新井市大字上百々）の５か所がある。中島廻り遺跡では、後期末葉の土器片が少量あり［小島1990］、子安遺跡では、周溝墓・土坑などに後期後半のまとまった資料がある［笹沢2000］。また、上百々遺跡では中期の栗林式・後期の箱清水式がややまとまって出土している。［高橋1985］。本郷新田遺跡・池山遺跡は詳細分布調査によって発見されたもので、詳細は不明である。なお、関川流域の沖積地で、中期まで溯るものは上百々遺跡のみである。

平山段丘上では、山畑遺跡（上越市大字岩木）で終末期の竪穴建物１棟などが検出されている［小島・中村ほか1979］。

丘陵部には、高地性集落である斐太遺跡（新井市大字宮内）・下馬場遺跡（上越市大字下馬場）・裏山遺跡（上越市大字岩木）の３遺跡がある。斐太遺跡は弥生時代末期から古墳時代初頭の比較的短い期間営まれた遺跡であり、1955～58年にかけて東京大学考古学研究室によって調査され、完全に埋まりきっていない竪穴建物らしい窪みが百両山地区で47か所、上ノ平・矢代山地区で24か所確認されている。その中の６基が発掘され、１基のみが方形の土坑、その他は方形を呈する竪穴建物であった。また、竪穴建物群のある平坦面の東西に、南北方向の溝が巡り、環濠集落であることが明らかになっている［駒井・吉田ほか1962］。近年、滝沢によって出土土器が再検討されている［滝沢1994］。

下馬場古窯跡群（上越市大字下馬場）は、1988年に上越市教委がトレンチ調査を行っており、尾根状の舌状台地で埋まりきっていない竪穴建物４基が確認され、２号住居とその周辺から弥生時代後期の土器が出土している。また、弥生時代末～古墳時代の台状墓、あるいは古墳が１基確認されている［小島1989］。



第４図　高田平野周辺の地形と弥生時代・古墳時代の遺跡

北陸地方建設局北陸技術事務所1981
新潟県農地部農村総合整備課1980・1981を改変

1997年には下馬場古窯跡群に隣接した下馬場遺跡を県教委・県埋文事業団が発掘調査を行っている。対象地は古窯跡群とは異なる広大な緩斜面で、後期後半の14基の竪穴建物と土坑およびピット23基が検出されている。Ⅶ章４に概要を別途記述した。

妙高山麓では、平野部と対照的に後期の資料が乏しい。また、その大半が中部高地系の土器で占められる。後期の資料は、伏見遺跡（妙高高原町大字田切）の箱清水式土器１片［新潟県埋蔵文化財包蔵地カードによる］、籠峰遺跡（中郷村大字稲荷山新田）の箱清水式土器10数片［親跡・野村編2000］、大洞原Ｃ遺跡の北陸北部系甕２個体［三ツ井ほか1997］、上中島遺跡（中郷村大字大字二本木）の箱清水式土器数片［飯坂ほか2000］に止まる。中期は上中島遺跡で栗林式土器数片が出土しているのみである［前掲1999］。縄文時代晩期末葉～弥生時代前期については、籠峰遺跡に隣接する和泉Ａ遺跡（中郷村大字稲荷山新田）で、
県内ではもっともまとまった資料が出土している［荒川・加藤1999］。

B　古墳時代

近年、上越市域の沖積地調査が相次いだ結果、地表１ｍ以下にも遺跡の存在することが常識化し、頸南地域でも良好な包含地が見つかっているため、資料は大幅に増加している。特に丘陵地に前期古墳のない高田平野において、沖積層に埋もれた前期の集落、古墳あるいは周溝墓の検出が注目される。また、黒田古墳群の調査が行われた結果、これまで後期の築造と一括されていた頸城の群集墳について、時期を見直す必要が出てきている。

後期については、頸城は県内最大の古墳分布域であるにもかかわらず、これらの造営主体である集落は最近まで発見例が乏しい状況にあった。しかし、新井市北部の大規模な調査により、古墳時代後期から古代にわたる集落跡が発見され、頸城西部古墳群と古墳時代集落との関係、古墳時代在地勢力の律令官人層への形成過程など、いくつかの課題に展望が見込まれている。

（１）古　墳

ａ）高田平野沖積面の古墳あるいは周溝遺構

子安遺跡（上越市大字子安）では、古墳時代初期の「周溝遺構」が２基あり、ＳＸ004は直径15ｍ程度と推定されている［上越市教委1993］。中島廻り遺跡（上越市大字戸野目）でも、古墳時代初期の「古墳」が２基発見されており、隅円方形の周溝をもつ１号墳の規模は長辺16ｍ、短辺14ｍを測る［小島1991］。これらの遺構は内部主体を持たないために、「墓制の一形態」［前掲1993］と推定されているが、不明な点が多い。月岡遺跡（新井市大字月岡）では３基の円墳が認められ、１号墳がもっとも大きく、径20ｍを測る。圃場整備等により墳丘上半部を失っているものの基底部は残存しており、掘り形および石材の散乱が認められないことから、主体部は竪穴系の埋葬施設が推定されている。築造時期について明言されていないが、周辺の出土遺物は５世紀頃を主としている［高橋1985］。

新井市栗原周辺では、時期は明らかになっていないが、後期頃の小円墳が３基検出されている。杉明遺跡（新井市大字栗原）では弧状の溝１基があり、径４ｍほどの小円墳が推定されている［高橋1993］。栗原遺跡ＳＫ207は、径３ｍほどの円形周溝であり、その類例と考えられる［新井市教育委員会1984ｂ］。宮ノ本遺跡の古墳も周溝直径は４ｍを測る小規模なものである［新井市教育委員会1995］。

鵜ノ池に張り出す半島状の砂丘には丸山古墳（大潟町大字潟町）がある。規模は一辺約18.5ｍを計り、墳丘は二段築成で構築されている。内部主体は既に残存していなかったが、石材や礫が認められないことや、墓壙が存在すること、埋土下層に粘土のブロックが存在することから粘土槨が推定されている。周溝底から出土した供献土器から構築時期は４世紀後半から５世紀前半であると考えられている［小野・桑原1988］。

ｂ）西頸城丘陵東縁の古墳群

高田平野は南魚沼と並んで群集墳が集中する地域であり、西頸城丘陵東縁には７群、総計190基前後の古墳が分布している。後述する矢代川中流域の古墳群と合わせて「頸城西部古墳群」と総称される［金子拓男・高橋・秦ほか1979］。北から灰塚古墳（上越市大字灰塚）・黒田古墳群（上越市大字黒田）・南山古墳群（上越市大字下馬場）・稲荷山古墳群（上越市大字下馬場）・青田古墳群（新井市大字青田）・観音平古墳群（新井市大字宮内）・天神堂古墳群（新井市大字乙吉・篭町）があり（国の史跡指定では、青田・観音平・天神堂古墳群を「観音平・天神堂古墳群」としている）、卓越した首長墳は認められないが、少数のやや大形の古墳と多数の小形円墳で構成される。飯田川・櫛池川扇状地、矢代川扇状地周辺に分布するものが横穴式石室をもつのに対し、当該域の古墳群は横穴式石室をもたないとういう対照的な構成を示している。また、調査例が少ないことにもよるが、副葬品は質量ともに乏しい。この差異は年代差としてとらえられ、前者は７世紀前半を中心に造営されたもの、前者は６世紀を中心に造営されたものと考えられている［甘粕1986・坂井1995］。

灰塚古墳

径10ｍ、高さ約２ｍを測る円墳で、墳麓には周溝が巡る。しかし、発掘調査は行われていないので、内部主体・出土遺物などは不明である［新潟県埋蔵文化財包蔵地カードによる］。

黒田古墳群

23基の古墳からなる。'96年に５基の古墳と１基の木棺墓が、'97年に８基の古墳が発掘調査された。埋葬主体部が調査できたものはすべて木棺直葬であった。３号墳は当古墳群中、また上越市域で最大であり、墳丘の直径は22.7ｍを測る。総体的に副葬品は貧弱であるが、２号・３号・５号・21号墳で鉄製品が出土している。また、５号・23号墳では、墳丘盛土に鉄斧の埋納があった。なお、６号墳周溝の底部では須恵器瑳の出土があり、年代は５世紀後半とされている［沢田1997・田海1998］。

南山古墳群・稲荷山古墳群

前者が６基、後者が15基で構成される円墳の群集墳である。かつては２者を合一して下馬場古墳群と呼称していた。両古墳群は昭和51年にボーリング調査されたが、主体部は明らかにならなかった［新潟県埋蔵文化財包蔵地カードによる］。これらの古墳は石室をもたないものと考えられる。

観音平古墳群

38基から構成される古墳群である。ほとんどが円墳で３号墳のみが方墳である。発掘調査がされておらず、出土品も知られていない［植木・杉田ほか1977］。

天神堂古墳群

118基から構成される頸城地方最大の群集墳で、何度か調査が行われている。1925年に斉藤修平氏によって90号墳が調査され、内部主体は木炭層の上に砂を敷き、その上に床面が砂利の敷かれた石室を持ち、天井石はなかったという。石室内からは直刀・刀子・四乳鏡・鉄鏃が出土している。また、墳丘封土から直

刀が出土している。同年高橋健自も41号墳の発掘を行っており、砂・木炭粉の攪乱層の下から勾玉・直刀が出土している。また、1957年にも東京大学考古学研究室によって2基が発掘され、鉄剣・土師器壺・高杯が出土しているが、明確な内部主体はなかったという［中川・岡本1961、駒井・吉田1962、植木・杉田ほか1977］。

青田古墳群

14基の円墳から構成される古墳群である。径5.5～20ｍを測るが、主体部の有無、出土遺物等は知られていない。［植木・杉田ほか1977］

c）矢代川中流域の古墳群

新井市南西部にあり、地形的には妙高山の火山性堆積物が形成した緩斜面に立地する。かつては、梨ノ木古墳群（新井市大字梨ノ木）・谷内林古墳群（新井市大字谷内林新田）・小丸山古墳群（新井市大字小丸山新田）・三ツ俣古墳群（新井市大字三ツ俣）・上中古墳群（新井市大字新井・上中）・小出雲古墳群（新井市大字小出雲）の6群、約50基と認識されていたが、三ツ俣古墳群については1号・2号墳が、上中古墳群については1号・4号墳が古墳でないことが明らかとなっており［吉田・山本1981］、小出雲古墳群を含めた3群については、古墳であることの可否を含めて不明な点が多いが、発掘調査された3古墳群は西頸城丘陵東縁の古墳群とは石室を有する点で大きく異なる。

梨ノ木古墳群

総数4基を数える。1975年、県営圃場整備事業に伴って1号墳が発掘調査された。しかし、1号墳を除く他の3基は壊滅している。1号墳は径16ｍの墳丘、片袖式横穴石室であったと推定されている。出土遺物には碧玉製管玉・須恵器高杯・土師器高杯がある。また、石室前庭部には石室長軸と方向を同じくする2×3間の掘立柱建物が検出されている［金子・高橋ほか1976］。

谷内林古墳

6基から構成される古墳群であった。2・3号墳はすでに壊滅しており、また、1977年に行われた調査の結果、4・5・6号墳は古墳と認められず、確実に古墳と考えられるものは1号墳のみとなった。1号墳の墳丘は削平されていたものの径10.5ｍの円墳で、周囲に幅1～3ｍの周溝をもつ。周溝内からは須恵器・土師器が出土している。内部主体は無袖型横穴式石室であったが、玄室中央から奥壁にかけて損失していた。石室内からは、ガラス小玉68点、滑石製臼玉2点、金銅製品の破片が多数出土している。出土遺物から7世紀の築造と考えられている［宮越・山本1978］。

小丸山古墳群

25基から構成される群集墳である。しかし、ほとんどが開発や盗掘によって壊滅し、石室や墳丘の一部が残存するものは4基である。これらは径11～21ｍの円墳で、石室の一部が露呈している。おそらく横穴式石室を有するものと考えられている。また、5号墳は、現在水田化され壊滅しているが、過去に盗掘を受けた際、直刀・金環・小玉・勾玉が出土したという［植木・杉田ほか1977］。

d）飯田川・櫛池川扇状地の古墳群

総体として、頸城東部古墳群と称される［金子・高橋・秦1979］。これには水吉古墳群（三和村大字水吉）・水科古墳群（同村大字水科）・宮口古墳群（牧村大字宮口）・高士古墳群（上越市大字南方）・北方古墳群（同市大字北方）・菅原古墳群（清里村大字岡野町）があり、総数200基以上が存在すると言わ

れる。

水吉古墳群

10数基のマウンドが確認されている。すべてが古墳であるとは断定できないが、そのうちの1基が小松芳春氏によって調査され、内部全体に全長約2.12ｍの横穴式石室をもつことが明らかになっているが、出土遺物はなかったという［中川・岡木1961、秦・関・戸根1976］。

宮口古墳群

31基から構成される古墳群である。1939・40両年に小松芳春氏によって丘陵尾根上（八幡堂地区）に位置する4基と水田中（清水田地区）の2基が、1975年には村教育委員会によって水田中の11基が調査されている。また、1978年には小松芳春氏が調査した丘陵上の4基の石室の再調査が行われている。これらの結果、調査された墳墓の石室は28号墳が片袖型横穴式石室であるほかは、すべて無袖型横穴式石室であった。また、尾根上に立地するものを除いて無袖型横穴式石室をもつもののほとんどが、石室の周囲を大小の円礫で覆った「石室外被礫」をもっている。出土遺物は、須恵器・土師器の他、装身具としてガラス丸玉・ガラス小玉・切子玉・棗玉・金環、武器として直刀・刀子・鉄鏃・鐔・鞘尻などがある。特に11号墳出土の金銅装円頭大刀は注目される［秦・関・戸根1976、秦・関ほか1979］。

水科古墳群

34基の円墳で構成される古墳群で、9基が発掘調査されている。内部主体はすべて無袖型横穴式石室をとし、石室の石材には飯田川の川原石を使い、野面積みで構築されている。出土遺物としては、土師器・須恵器をはじめ、直刀・刀子・金環・銀環・切子玉・ガラス小玉・棗玉などがあり、造墓時期は7世紀前半を中心とする時期が求められている。また、古墳群の配置から墓道の復原がされている［金子・高橋・秦ほか1979］。

高士古墳群

かつては10基以上を数えたが、現在では開発などにより1基を残して壊滅している。1958年にその内の1基が調査されている。径約8ｍの円墳で、内部主体は長さ約3.5ｍの横穴式石室であった。出土遺物としては、直刀・鉄鏃・銀環・水晶切子玉・勾玉・アスファルト塗の土玉等がある［桜井・小松・山田1959］。

菅原古墳群

頸城東部古墳群の中核である。前方後円墳1基と円墳41基が現存しており、かつては108基以上であったという。前方後円墳は、「菅原古墳」と呼ばれ、主軸長約30ｍを測る。後円部墳頂平坦面に天井石・側壁の一部が露呈しており、内部主体は横穴式石室が推定されている。また、過去に円墳群のうちの4基が梅山寿三郎によって発掘が行われており、いずれも横穴式石室をもつことが確認されている。また、4基とも直刀が出土しており、1基からは鎧の断片、2基からは馬具が出土している［秦・関・戸根1976、中川・岡本1961］。なお、平成11年には4基の古墳が発掘調査されている［秦・小林ほか2000］。

北方古墳群

一切調査が行われずに壊滅してしまったもので、規模・出土遺物・内部主体などはまったく知られていない［秦・関・戸根1976］。

（2）集落跡・遺物包含地

前期は未だ大規模集落の調査がない。一之口遺跡東地区（上越市大字木田）で竪穴建物2棟、多数の土坑・溝が［鈴木・春日ほか1994］、山畑遺跡（上越市大字藤新田）で竪穴建物2棟と土坑1基が［小島

1979]、長峰遺跡（吉川町大字長峰）で竪穴建物１棟が［関ほか1974］それぞれ検出されている。また、上百々遺跡（新井市大字上百々）でも前期の土師器が多量に出土し、竪穴建物と見られる円形の落ち込みが検出されている［高橋1985]。前田遺跡（上越市大字川端）では、竪穴建物はないが、土坑・溝・井戸・円形溝状遺構が検出され、遺物もこの地域ではまとまった量が出土している。なお、円形溝状遺構ではグリーンタフの剥片・砕片が出土しており、玉作遺構と考えられている［小島・中西ほか1996]。北割遺跡では表土下1.2ｍの深度で土坑・溝とともに土器が出土している［小島・笹澤1995]。

妙高山麓では大洞原Ｃ遺跡に前期のまとまった資料があり、東海系・畿内系など多系統の土器が交錯している［三ツ井1997]。小野沢西遺跡では前期を主体に古墳時代全時期にわたる遺物が多量に出土している［武田1996]。

籠峰遺跡では東海系Ｓ字甕・畿内系布留式甕の出土が知られる［川村1988、親跡・野村編2000]。

中期の遺跡は少ない。関川・矢代川間の沖積地に位置する月岡遺跡（新井市大字月岡）において、５世紀前半の土器を伴う井戸・土坑等が検出されている［高橋1985]。北割遺跡にも中期・後期の遺物の出土がある［小島・笹澤1995]

後期の遺跡は、杉明遺跡（新井市大字栗原）・倉田遺跡（新井市大字上百々）・栗原遺跡（新井市大字栗原）・宮ノ本遺跡（新井市大字高柳）など、近年新井市栗原周辺に発見が相次いでいる。杉明遺跡では、頸城の沖積地では最大規模である30基の竪穴建物が検出されている［高橋1989・1993、新井市教委1996]。倉田遺跡では６世紀代の小区画水田跡・河川跡・用水路と、７世紀代の竪穴建物２棟が検出されている[高橋1996]。宮ノ本遺跡では６世紀代の竪穴建物１棟がある。竪穴建物は径約８ｍを測り、竪穴周囲に小ピットが巡るという構造が注目される［高橋1993]。

山畑遺跡は（上越市大字藤新田）６世紀後半～７世紀前半に形成された集落であり、32棟の竪穴建物が検出されている。14号・22号住居では須恵器の伴出がある［小島・中村ほか1979]。一之口遺跡東地区でも６世紀前半～７世紀後半の竪穴建物が21基以上検出されている。岡嶺遺跡（清里村大字武士）は頸城東部古墳群周辺では唯一の集落跡で、７世紀代の竪穴建物が２基検出されている。床面・床面附近から土師器・須恵器・金環・鉄器等が出土しており、台地の背後に位置する菅原古墳群との関連が注目される。

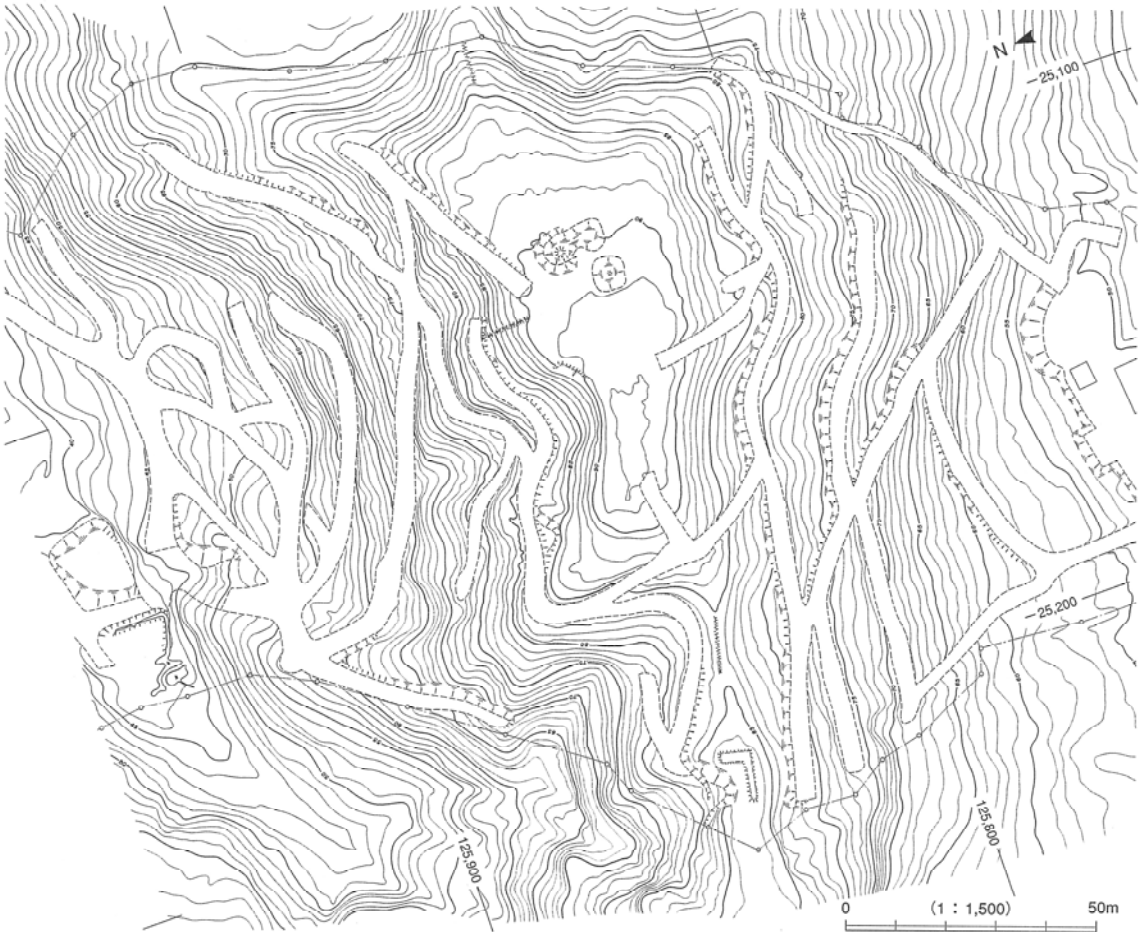
補記：本項は『一之口遺跡東地区』・『大洞原Ｃ遺跡』における同内容の文章［高橋1994・星1997］を再編し、一部に補足や訂正を加えたものである。脱稿後、新井市西俣１号墳・同市観音平古墳群の前方後円墳など、新知見が公表されたが（平成11年度　新井市遺跡確認調査報告書)、今回はとりあげなかった。

第Ⅲ章　層序と遺構

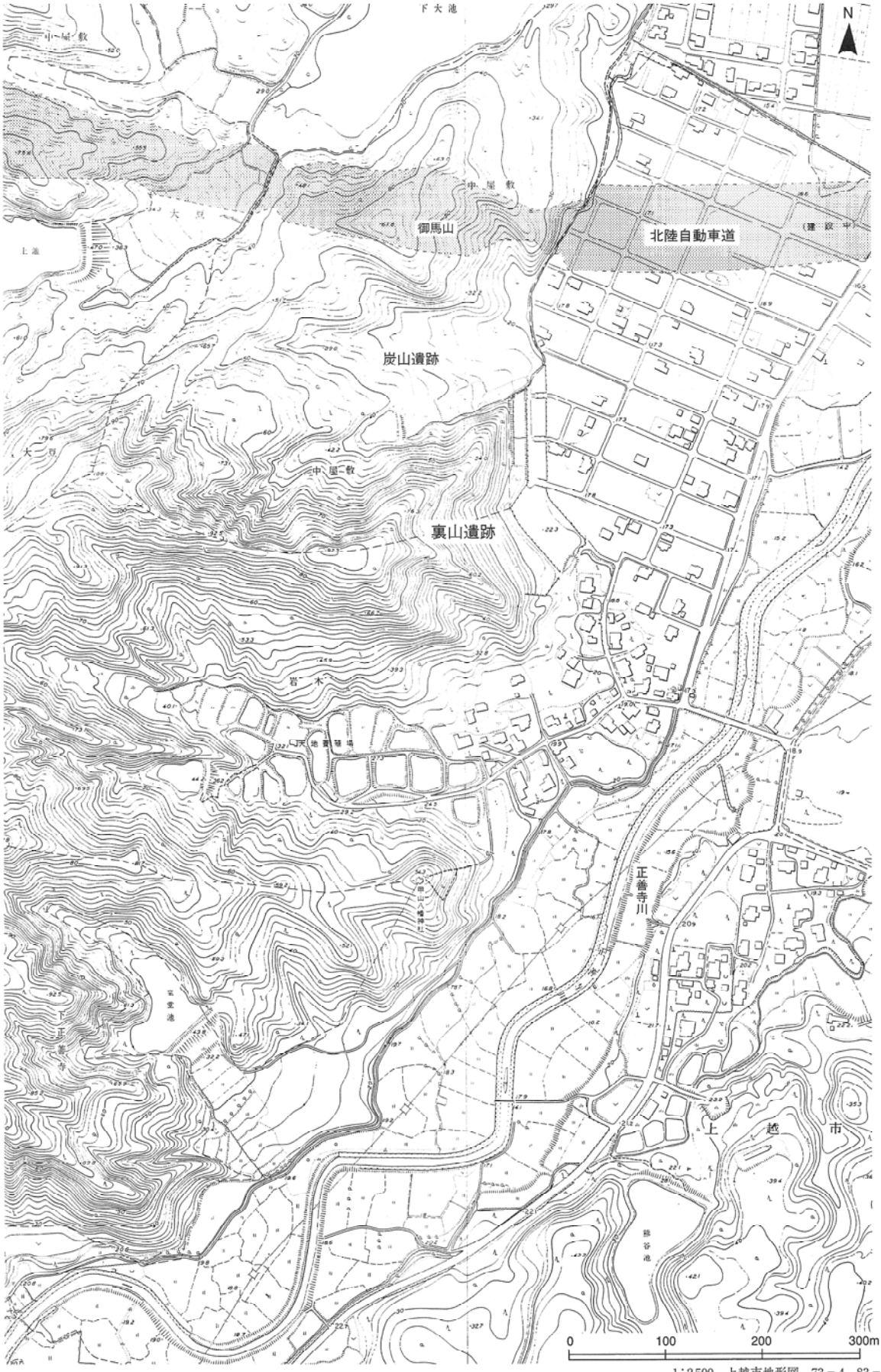
1　裏山遺跡と遺跡周囲の地形

裏山遺跡は西頸城丘陵の東端が沖積地に接する台地、あるいは尾根に位置しており、海岸線からの距離は3.6kmを測る。この台地の西方約700ｍには南北に延びる標高150ｍ前後の尾根があり、この尾根は春日山城本丸方向に連なっている（第１図）。正善寺川はこれら丘陵の南側をＵ字状に流れ、裏山遺跡の東方で北西から東に流れを変えて関川に注ぐ。裏山遺跡の東方は、正善寺川の対岸、上越教育大一帯に洪積段丘平山面の森林が広がる他は、（第1図・図版76・77）一面が高田平野となる。遺跡北方は炭山遺跡がある緩斜面を挟んで、春日山城の外郭施設といわれる御馬山があり、南方は甲山八幡神社から西方に尾根が延びる（第６図）。

裏山遺跡がのる台地は最高点の標高が92ｍを測り、西から東へごく緩く傾斜している。西側は細い尾根が長く伸びて標高108ｍの小ピークに至り、東側は３条の尾根が沖積地に向かう。台地の南北は急勾配の斜面となり、裾野で傾斜を弱くしている。特に北側斜面上部は傾斜が強く、7号竪穴に接する谷頭では小さな崩落を起こし、北側の沢地に落ち込む沢頭は鋭く深い。一方、南側斜面は北側に比較して傾斜は小さく、台地の断面は非対称である。



第５図　裏山遺跡調査着手時の地形



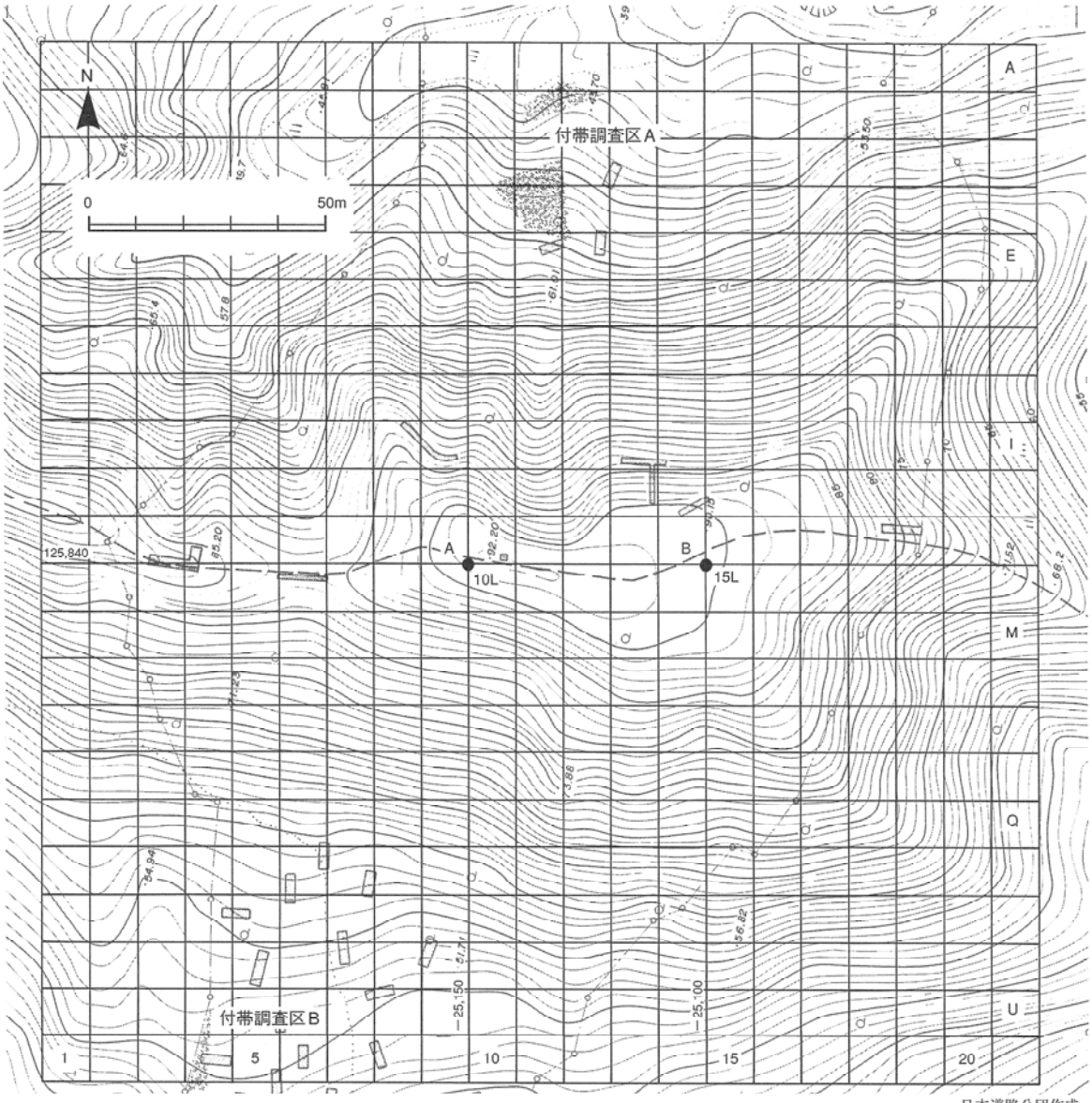
1：2,500　上越市地形図　73－4，83－2
昭和56年測量

第6図　裏山遺跡周辺の地形

2　グリッドの設定

国土座標の数値上で東西方向に50ｍの距離を持つＡ点［Ｘ＝125,840.000，Ｙ＝－25,150.000］とＢ点［Ｘ＝125,840.000，Ｙ＝25,100.000］を基準に、国土座標の軸に合わせてグリッドの軸方向を設定した（第９図）。大グリッドは10ｍ四方とし、その呼称は軸方向の西から東へ算数字、北から南へアルファベットの昇順として、これを組み合わせて表示した。上記基準点Ａに接する南東側の区画をＬ10グリッドとしているため、付帯調査区Ａ・Ｂ（第２図）を含む対象地域は南北にＡ～Ｗ、東西に２～19の広がりを有するが、弥生時代の遺構が存在する範囲はＨ～Ｎ－７～19の位置を占めるに過ぎない。付帯調査区ＡはＡ～Ｅ－10～12グリッドに、付帯調査区Ｂは４Ｖ・４Ｗグリッドにそれぞれ対応する。

小グリッドは大グリッドを２ｍ四方に25分して算数字で表示した。北西隅を１、北東隅を５、北から２列目の東端を６として、大グリッド東西方向の数字が進む方向と一致させた。小グリッドを含む地点名は３Ｄ17のように表示した。なお、環濠については別の区分けを使用しており、環濠の項で後述する。



第７図　グリッドの設定

日本道路公団作成
上信越自動車道設計図

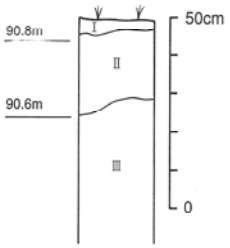
3　層　序

裏山遺跡の台地は礫・砂・シルト・ローム質土の累重的堆積物で構成されている。土壌は台地頂上を覆うように薄く堆積しており、ここに縄文時代以降の遺物が含まれる。

Ⅰ　層：腐植・草木根を主とし、層厚５～10㎝程度の暗褐色～極暗褐色土壌である。丘陵全体を覆っており、主丘頂上では中世以降の遺物を包含する。

Ⅱ　層：層厚20㎝前後の褐色を呈するローム質土壌である。乾燥すると著しく固結する。弥生時代を主に、縄文時代・古代の遺物を包含する。主丘頂部にのみ存在する。

Ⅲ　層：明褐色～赤褐色を呈するローム質土である。主丘頂部ではⅢ層上面を最終的な遺構確認面とした。Ⅲ層はⅡ層に比較して色調はやや明るいが、乾燥すると固結する土質は共通しており、差異は不明瞭である。ローム質土は７～10ｍ程度の厚さを持ち、西から東に向かって傾斜している（環濠の断面図：図版10～15参照）。また、下部に向かって粘性は低くなり、色調は赤みを増す。ローム質土の下位は、数十メートルにわたって礫混じりシルト層・礫混じり砂層・砂混じり礫層などの互層となる。



第８図　土層柱状図
（14Ｋグリッド）

南斜面の裾部はローム質土が厚く、これには少量の礫が含まれる。おそらく崩落したⅢ層に礫が混じり、再堆積したと思われる。古代のＨ１号竪穴もこのローム質土を掘りこんでいる。

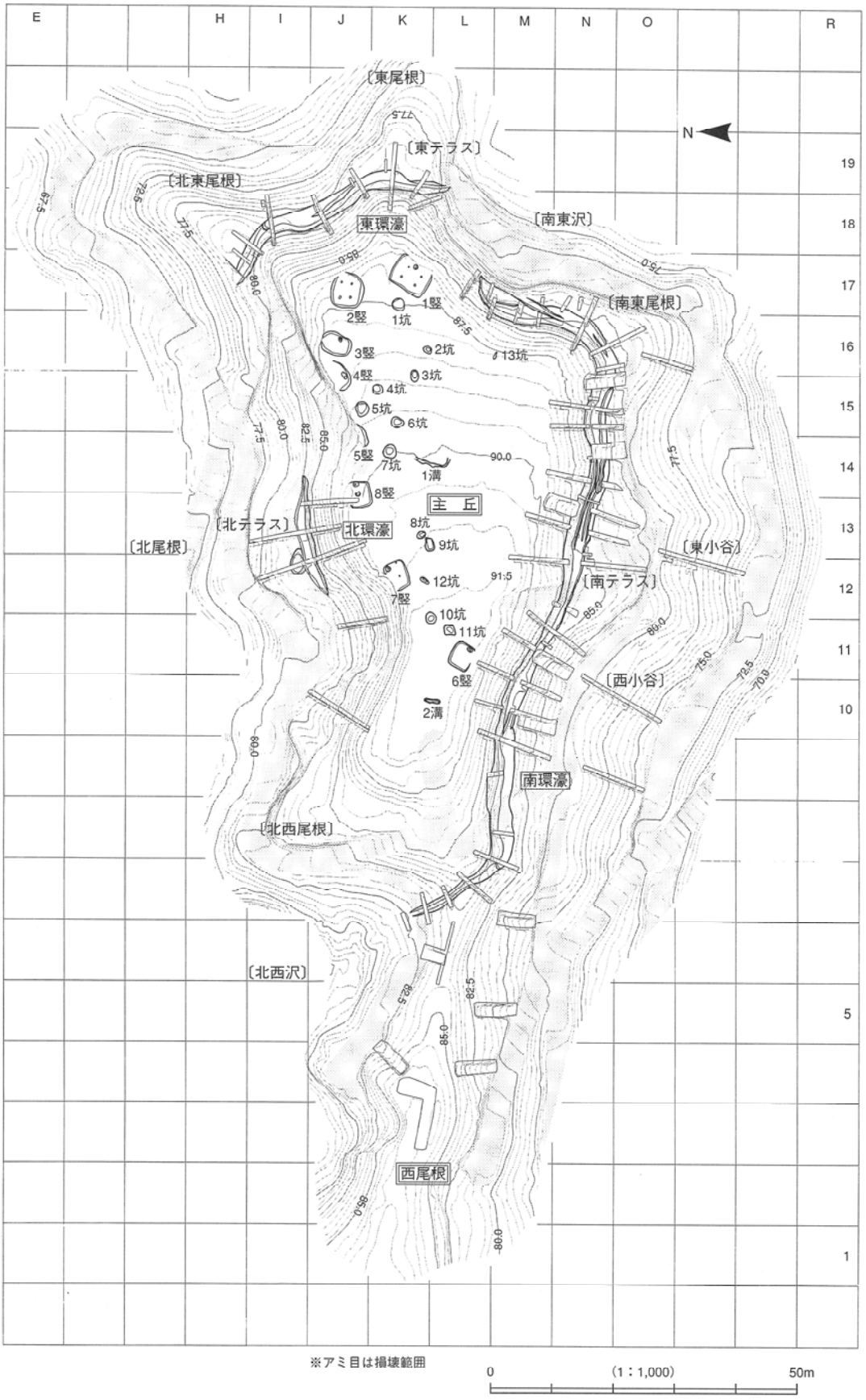
4　遺構各説

古代の竪穴建物１基を除くすべての遺構が「主丘」と呼ぶ台地部分にある。第10図に中世の塚群を除く主丘の概況を示した。

A　弥生時代

主丘は最高点で標高92ｍを測り、西から東へ緩く傾斜する約2,000㎡の平坦な面となっている。平坦面は集落の造営に関わって一部削平された個所もあろうが、傾斜の方向は地山層のそれと概ね一致しており、「段丘面である可能性」［地団研高田平野団体研究グループ1997］も指摘されている。この主丘頂部に「高地性集落」が形成されており、８基の竪穴建物・12基の土坑・２条の溝と主丘を取り巻く３条の環濠が検出されている。このほか、南斜面の谷地形２か所には土器片を含む土が堆積している。

主丘頂上は頸城平野西縁の岩木集落とは70ｍ程度の比高差を有する。この平坦面は、日本海－米山－東頸城丘陵－関田山脈－南葉山系－西頸城丘陵に囲まれた世界を一望できる良好な地所を占めているが、南方は金谷山以南を見通すことはできず、新井市街も丘陵に視界を遮られている。



第９図　主丘の概況（中世塚群を除く）

（1）竪穴建物

1号竪穴（図版5）

17Kグリッド位置する半埋没の竪穴建物である。一次調査の報告では「地表面から観察されるくぼみ」と認識されており、調査着手時の地形図（第11図）にも蛇行する等高線が表現されている。このような竪穴は新井市大字宮内の斐太遺跡に多数存在するほか［駒井ほか1962］、上越市大字下馬場の下馬場遺跡にも3基が検出されている［小池1998］。

覆土土層断面図のラインで4分して北東をA区とし、時計回りにA～D区に区分する。平面形はやや不整な部分があるもののほぼ長方形を呈し、長軸6.2m、短軸推定4.8mを測る。東辺は崖線上にあり、北東隅のごく一部を除いて立ち上がりは見られない。床面は長軸方向では中央が窪み、短軸方向では西から東に向かって緩く傾斜している。柱穴は長軸を中心として対称な位置に4基が配され、pit 1・pit 4には柱痕が観察される。東辺の中央にはこれと近接して、ほぼ円形の土坑－いわゆる貯蔵穴－がある。竪穴中央にある炉跡は掘り込みがなく、最大径0.4mの範囲で橙変するのみである。硬化もみられない。B区を除く3区に焼土ブロックがあり、C・D区のそれは床面との間に別の土層を挟む。C区壁際には拳大程度の亜円礫が計19点集積されている。

第1表　1号竪穴の礫一覧

長さ・幅・厚さ：mm、重量：g、№3は欠番。

番号	長さ	幅	厚さ	重量
1	105	78	45	511
2	108	68	35	421
4	79	76	40	231
5	123	86	54	606
6	134	76	45	570
7	95	82	35	331
8	109	76	57	496
9	112	77	56	470
10	112	68	60	542
11	121	80	32	360
12	145	65	39	660
13	93	84	44	524
14	91	71	53	502
15	117	82	47	575
16	121	74	48	624
17	141	82	54	643
18	122	74	44	499
19	82	82	64	634
20	120	58	44	386

2号竪穴（図版6）

17Jグリッドに位置する。1号竪穴同様、一次調査の時点で「くぼみ」と認識されており、1号竪穴ほどではないものの、それが地形図の等高線に表れている。

覆土土層断面図のラインで4分して北東をA区とし、時計回りにA～D区に区分する。平面形は東辺が弧状に張り出すが、その他の3辺は直線的で北西隅・南西隅は円みを帯びる。長軸の東西は5.6m、南北4.7mを測る。柱穴は長軸を中心として対称な位置に4基が配される。炉は中央からやや東寄りの位置にあり、最大径0.3mの範囲で橙変している。1号竪穴同様、掘り込みを持たない。なお、炉跡ではないが西壁に接して焼土・炭化物の分布域が2か所見られ、これらは床面に接している。床面の硬化は認められない。

3号竪穴（図版7）

16Jグリッドに位置する。これも半埋没の竪穴建物である。東側に木株の盛り上がりがあったことで、窪みは特に明瞭であった。

覆土土層断面図のラインで4分して北東をA区とし、時計回りにA～D区に区分する。平面形は不整の楕円形を呈し、長軸4.9m、短軸3.5mを測る。竪穴内部のピットは東壁に接して貯蔵穴があるのみで柱穴は検出されていない。覆土は床面と接する4層に焼土・炭化物の混入が著しく、床面には長軸上に4か所に焼土ブロックの堆積がある。炉跡は最大の焼土ブロック下にあり、1号・2号同様に床面の橙化のみが認められる。床面の硬化は認められない。

4号竪穴（図版7・8）

15J・16Jグリッドに位置する。立木伐採時の作業道掘削によって北半を大きく欠いている。北縁まで

腐植土が被り、その下層も北に向けて傾いているため、掘削前には版埋没の状態であったと推定される。覆土土層断面図のラインで２分して東半をＡ区、西半をＢ区とする。東西の幅は5.0ｍ、南北の長さは最大3.1ｍを測る。西壁下端から0.7ｍの位置では床面が径0.35ｍ程度の範囲で橙化している。床面の硬化は認められない。８基の竪穴建物のうち、もっとも多くの弥生土器をもっており、器体全容を知り得るものが４個体存在する。

５号竪穴（図版８）

14Ｊ・15Ｊグリッドに位置する。立木伐採時の作業道掘削によって大半を失い、壁および床面の一部しか残存しない。東西の幅は3.9ｍ、南北の長さは1.1ｍを測る。

６号竪穴（図版９）

11Ｌグリッドに位置する。覆土土層断面図のラインで４分して北東をＡ区とし、時計回りにＡ～Ｄ区に区分する。平面形は隅円方形を呈し、長軸4.1ｍ、短軸3.7ｍを測る。北壁および西壁に接して炭化材が良好に残存しており、北壁東半では壁に密着して６本の炭化材が直立する。また、北壁西半中央は壁面が赤変・硬化している。竪穴内部のピットは、東壁に接して最大深度0.2ｍの貯蔵穴があるのみで柱穴は検出されていない。周溝は竪穴北半にしか存在しない。床面の硬化は認められない。

７号竪穴（図版９）

12Ｋにグリッド位置する。調査着手時の地形図には蛇行する等高線が表現されているが、これは崖面の崩落による影響と見ている。南北ラインの覆土土層断面も１～４号竪穴の状況と異なる。

覆土土層断面図のラインで４分して北東をＡ区とし、時計回りにＡ～Ｄ区に区分する。平面形はやや胴の張る隅円方形を呈し、長軸4.4ｍ、短軸推定3.5ｍを測る。床面は南から北に向かって緩く傾斜している。竪穴内部のピットは東西のほぼ一直線上に３基があるものの、中央の１基のみ深く、他の２基は皿状に浅い。北東隅には、深度0.55ｍの貯蔵穴がある。北半部の覆土には焼土・焼土ブロックの混在が多く、これは他所から投棄されたものと見られる。また、南縁東半部には炭化材ややまとまって存在するが、これも投棄によるものであろうか、６号竪穴のように整然としていない。炉跡はなく、床面の硬化や橙変の見られる部分もない。

８号竪穴（図版９）

14Ｊグリドに位置する。竪穴建物としての認識が遅れたために、覆土の記録に乏しい。長軸となる東西は4.2ｍ、南北は北縁が崖面となり、一部一次調査トレンチに切られるが、3.4ｍと推測できる。床面は南から北へ緩く傾斜する。床面の硬化は認められない。掘りこみのある炉は８号竪穴にのみ存在し、炉の内部には焼土ブロックも形成されている。貯蔵穴の断面図は最深部を通っていないが、床面からの深度は最大0.36ｍを測る。

（２）環　濠

主丘を取りまくように存在する３条の段切り（部分的には溝である）を「環濠」とする。立木伐採の作業道や崖面の崩落などで失われた部分があるとしても、３者が連結することは標高差から見て不自然であり、別個の遺構として造作されたものである。

環濠の区割りついては、大グリッドの算数字またはアルファベットを用いて10ｍごとの「大ライン」を用いる。東西方向に走る環濠またはその部分（南環濠の大部分、北環濠）は算数字で、南北方向に走るそれはアルファベットのラインで表される。したがって、南環濠は屈折する地点で両者が多少錯綜している。

小ラインは大ラインを２ｍ幅で５分し、北または西から「12－１」・「Ｌ－５」のように呼称する（第20図）。

南環濠（図版１・10～14）

主丘西端から１号竪穴の南方に横たわり、総延長130ｍを測る。

西端は尾根線を切って北西沢に落ちるが、断面０地点の深さは0.5ｍ程度でしかない。８～12ラインは、10ライン西側で最大0.3ｍの立ち上がりが南縁にある他は、Ｌ字状またはスプーンカット状となる。この間の底面レベルは83～85.5で東に向けて標高を上げている。

南斜面テラスの東側にあたる13・14ライン（断面４・５・６地点）は、壁際が壁溝状に掘られ底面内にも小溝が見られる。このラインは多くの炭化物・弥生土器が覆土に含まれる地点でもある。また、15ライン（断面７地点）では二段の底面となり、16ライン（断面10地点）、では再び壁溝状の掘り方が見られる。

Ｍ・Ｎライン（断面11地点）では底面に浅い溝がみられるもの、13・14ラインに見られるような立ち上がりの明瞭なものではない。東末端はＬラインで明らかな底面を持たずに北東沢に落ち込む。この地点は東環濠の南末端と５ｍ前後の比高差を有する。

東環濠（図版１・15・16）

東尾根から北東尾根に延び、総延長43ｍを測る。南環濠より５～６ｍ低いレベルで造作されているのは、断ち切る対象のテラスまたは尾根のレベルが異なることによるもので、基盤のローム質土・礫層などが西から東に向けて下傾していることと無関係ではあるまい。

東尾根テラスを断ち切る断面19・13地点、北東尾根テラスを断ち切る断面15地点では整った断面形で掘削される。中間のＪラインでは２段の底面となり、Ｉラインではやや広い底面となる。北末端の底面レベルは78.8ｍである。

北環濠（図版１・16）

北斜面テラス上にあり、長さ20.4ｍを測る。両端と北側縁部は斜面の崩落と立木伐採の作業道によって消失している。それを考慮しても斜面自体の傾斜が大きく、テラスより東西に大きく延長していたとは考えにくい。ただし、西側は北西尾根付近が作業道で失われた可能性も否定できない。13ラインでの底面レベルは82.2ｍ前後である。覆土は炭化物・弥生土器を含む層と崩落土が交互に重なって縞状の堆積となる。なお、断面18地点では環濠と段差を持った皿状の土坑が付随する。

（３）土坑・溝

１号土坑（図版17）

17Ｋ11に位置する。不整円形を呈し、長径1.9ｍ、最大深度0.4ｍを測る。

２号土坑（図版17）

16Ｋ22に位置する。不整長円形を呈し、長径1.22ｍ、短径0.9ｍ、最大深度0.5ｍを測る。

３号土坑（図版17）

15Ｋ20に位置する。長円形を呈し、長径1.8ｍ、短径1.1ｍ、最大深度0.56ｍを測る。

４号土坑（図版17）

15Ｋ４に位置する。上面周縁は不整円形を、底面は弦形を呈する。長径は最大1.62ｍ、最大深度0.4ｍを測る。

5号土坑（図版17）

15Ｊ23に位置する。不整形を呈し、長径2.24ｍ、最大深度0.38ｍを測る。

6号土坑（図版17）

15K11に位置する。卵形を呈し、長径1.94ｍ、最大深度0.56ｍを測る。

7号土坑（図版18）

14K９に位置する。上面周縁は略円形を、底面は弦形を呈する。最大径2.14ｍ、最大深度0.56ｍを測る。

8号土坑（図版18）

13K22に位置する。長円形を呈し、長径1.23ｍ、短径0.96ｍ、最大深度0.32ｍを測る。

10号土坑（図版18）

12K21に位置する。トレンチに切られているが、長円形を呈すると推定される。長径1.76m、最大深度0.43ｍを測る。

11号土坑（図版18）

11Ｌ10に位置する。不整形を呈し、長径1.94ｍ、最大深度0.2ｍを測る。多量の土器片と亜角礫（最大人頭大）10点程度を覆土に含む。

12号土坑（図版18）

12K24に位置する。不整錐形を呈し、長径1.48ｍ、最大深度0.26ｍを測る。

13号土坑（図版18）

16M２に位置する。不整錐形を呈し、長径1.36ｍ、最大深度0.15ｍを測る。底面は西から東に向かって緩く傾斜している。西側壁面にはこれに沿って焼土の分布があり、被熱した遺構である。

１号溝（図版18）

１号塚・３号塚間に弧を描いて南北方向に走る延長6.8ｍの溝である。最大幅0.54ｍ、最大深度0.24ｍを測る。多量の弥生土器を覆土に含む。

２号溝（図版18）

10K24～10Ｌ４に位置し、南北方向に延びる溝である。延長2.45ｍ、最大幅0.46ｍを測る。

（４）その他

南環濠下－東小谷

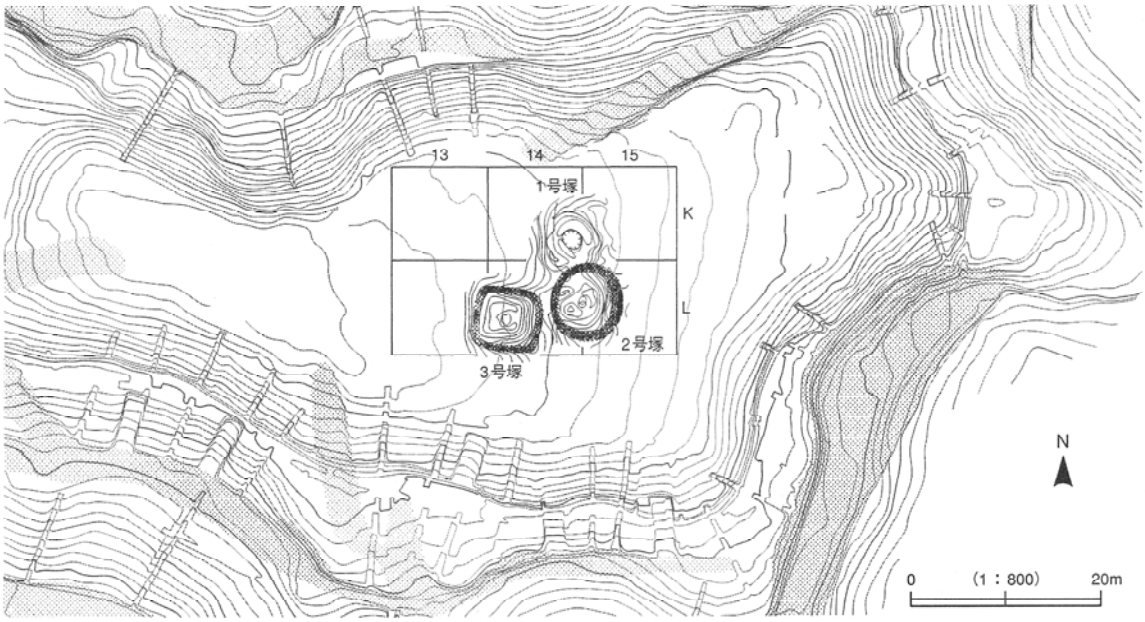
南テラス東側下方の浅い谷地形で、12・13－Ｐグリッドに位置する。幅11.2ｍ、長さ6.6ｍの範囲に土器・炭化物を含む最大厚80㎝の土層が堆積している。谷の底部は両肩と最大1.0ｍの比高を測る。

南環濠下－西小谷

南テラス西側下方の浅い谷地形で、10・11－Ｎ・Ｏグリッドに位置する。幅16.0ｍ、長さ8.6ｍの範囲に土器・炭化物を含む最大厚60㎝の土層が堆積している。谷の底部は両肩と最大0.8ｍの比高を測る。土器は10Ｎグリッドを中心に分布する。

付帯調査区Ａ（第11図）

遺構ではないが、Ａ～Ｅ－10～12グリッド約300㎡で1.1kgの弥生土器が出土している。60～80㎝程度のローム質土下に最大20㎝程度の黒褐色土があり、弥生土器は黒褐色土とその直上付近に散布している。ローム質土は最大７枚に分離でき、径50ｍｍ以下の礫を含んでいる。黒褐色土はおそらく弥生時代の旧表土であり、ローム質土は斜面からの小規模な崩落土が累重したものと見られる。第Ⅰ章１で前述しているよう



第10図　塚群の位置

に、土器は立木伐採時の作業道開削によって地表に露出したもので、一次調査ではここで3基のトレンチを発掘している。

B　古　代

H－1号竪穴（図版19）

付帯調査区B（19頁、第7図）の4Vグリッドに位置する。一次調査では竪穴の周囲にごく少量の土器が出土していたが、調査不要区域としていたため、調査事務所への進入路開削によって遺構の大半を消失させた。幸いにして西辺部とカマドの一部が残存し、良好に遺存していた遺物をえることができた。カマドが竪穴の南西隅に位置していたと仮定すれば、一辺2.5m程度と推測できる小竪穴である。カマドを除いた壁の下端に床面とのレベル差5cm以内の壁溝がめぐる。

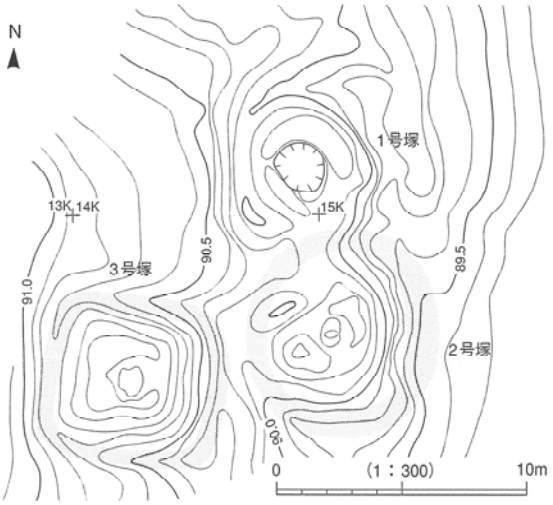
9号土坑（図版18）

主丘頂上の13K21グリッドに位置する。南辺をトレンチに切られるが、底面付近深度0.2mほどが残存している。隅円長方形を呈し、長径2.0m、短径1.23m、最大深度0.5mを測る。覆土に弥生土器以外の遺物はないが、形態と古代の土器出土状況から古代の遺構としておく。糸魚川市岩野E遺跡［高橋・小池ほか1986］などの土壙墓に共通するものであろう。

C　中　世

主丘頂部中央に3基の塚が存在する。それらは同一個体の珠洲焼片（904）を出土することから、同時、あるいは極めて近接した時期に構築されたものと考えられる。しかしながら、平面形態や礫石経（経文等が墨書された礫）・金属器・数珠など、遺物の在り方がそれぞれ異なり、塚の構築仕様は同一ではない。1号・3号塚は盛土下に礫石経などを納める「経塚」の一形態であるが、中心土坑に墨書礫のない2号塚は他の2基とは異なる。3頁で前述しているように、礫石経の存在は裏山遺跡の調査終了間際に確認されたもので、塚群調査中には意識されていなかった。

盛土はいずれもⅡ層（弥生時代の遺物包含層）の上に、Ⅱ層土・Ⅲ層土の混土を乗せる単純なもので整地や版築は認められない。盛土は、2号・3号塚が周溝、1号塚が塚周囲の環状落ち込みにそれぞれ由来していると見られる。なお、裏山遺跡に接する炭山遺跡には、これらから北方約210ｍの距離に1基の塚が存在し、それは15世紀以降の構築とされている。[三ツ井1997]。



第11図　塚群全体図

1号塚（図版20）

高まりの中心は14K20・25に位置する。'95年7月の発見時、既に中心部は径約2ｍ、深さ約0.8ｍの掘削を受けていた。掘削坑の断面が内弯している状況から、掘削は比較的最近に行われたものと思われる。平面形はほぼ円形を呈し、2号・3号塚のように明瞭な周溝はないが、東西径5.6ｍの盛土がなされている。塚表面には202点の葺き石が残存する。南方へ2号塚と連結するように出された掘削土には1,614点の礫が含まれており、その重量は葺き石202点と合計して734.5kgを計る。掘削土中の礫は、葺き石だけとしては数量が特に多く、大半は塚盛土下の主体土坑を填塞していた、あるいは土坑を覆っていたものと思われる。礫は掘削土中のものと葺き石のものとを混合して主丘から運搬したために出土位置を区別できないが、墨書されたものが26点ある。これらはおそらく主体土坑中にあったものであろう。石仏頭部（249）も出土位置が不明であるが、2号・3号塚の調査時にそれを認識しなかったとは思えず、掘削土中に存在していた可能性が高い。また、掘削土からは珠洲焼片口鉢（904）の破片2点が出土している。

2号塚（図版21）

中心は15L11に位置する。塚本体の平面形態は不整形であるが、周囲の溝は整った楕円形にめぐり、溝内側は長径（南北）6.3ｍ、短径5.7ｍを測る。中心部は下部の主体土坑とほぼ同様の平面形で窪むが、主体土坑を覆う礫はほぼ水平にあり、主体土坑の陥没によるものとは考え難い。塚表面にはやや散漫に拳大以下の礫936点・347.3kgが分布する。主体土坑は295点・110.8kgの礫が北西に偏ってこれを覆っている。ただし、3号塚のように土坑を填塞する礫がない。墨書が消失している、あるいは墨書を見失っていることもあろうが、主体土坑を覆う礫に墨書は全くみられない。葺き石の礫は墨書のあるものが2点存在するものの、総量に比較して極めて少ない。これらは2号塚葺き石と不可分な状況にあった1号塚掘削土の礫が、2号塚葺き石の礫として扱われた可能性が高い。主体土坑では、その上面に刀装具である銅製の柄頭1点（265）、その埋土には珠洲焼片口鉢（904）破片1点が出土している。土壌水洗でもそれ以外の遺物は見出せない。

3号塚（図版22）

中心は14L16に位置する。隅の円い長方形を呈し、溝内側は長径（東西）5.9ｍ、短径（南北）5.5ｍを測る。中心部は下部の主体土坑とほぼ同様の平面形で窪む。塚表面には1,099点・356.8kgの葺き石が分布する。これには1点のみ僅かな墨痕のある礫が存在する。主体土坑は中心部を残して人頭大以下の礫がこれを填塞し、さらにその上面を拳大程度の礫がこれを被覆する。これら礫は合計1070点を数え、重量410.2kgを計る。礫が欠落する主体土坑の中心部には埋納容器が据えられていたものと思われる。

主体土坑中の礫3点には墨書があり、1点には3基の塚を通してもっとも長文の経文が墨書されている。

また、主体土坑埋土からは、火打鎌１点・刀子１点（３破片）不明鉄製品１点・水晶製数珠玉25点・珠洲焼片口鉢（904）破片１点が見出土している。なお、数珠玉は２点（いずれも球形）が塚表面から、23点が中心土坑の土壌水洗で見つかっている。

第Ⅳ章　遺　物

1　概　況

裏山遺跡の遺物は、縄文時代早期から近・現代に及び、このうち弥生時代後期のそれが主体を占める。

弥生時代の遺物は、主丘の頂上面の集落と主丘を取り巻く環濠の弥生土器が遺物の大多数であり、主丘南斜面の小谷にもやや纏まった量の弥生土器がある。また、主丘から北斜面を下った付帯調査区Ａには、崩落土・旧表土中に少量の弥生土器が含まれる。土器の時期は北陸南西部の法仏式、「新潟シンポ」編年の２期［田嶋1993］にほぼ相当する。砥石をはじめとする石器、勾玉などの石製品、鉄器なども主丘頂上面に集中する。なお、主丘頂上には縄文時代の遺物も少量存在する。

古代の遺物は、付帯調査区Ｂの竪穴建物１基に良好な一括資料があるほか、主丘頂上にも９号土坑周辺に散在している。

中世塚群の遺物には、墨書礫・石製品（数珠）・鉄製品・陶器がある。

本遺跡で出土した土器（陶器・磁器を含む広義の土器［加藤唐九郎編1972］）は、縄文土器、弥生土器、古代の土師器・須恵器、中世の珠洲系陶器、近現代の陶磁器である。ここでは時代時期の順序にかかわらず、大多数を占める弥生時代後期の土器から記述を始める。

2　土　器

A　弥生土器

（１）出土状況と数量

土器は、付帯調査区Ｂ（19頁、第７図）以外の区域でまんべんなく出土しており、平箱200箱程度、総重量675.3kgに及ぶ。この数字は県内の法仏式期の遺跡としては纏まった数量であるが、細片が多く器体全体を知り得る個体に乏しい。土器の細片化は狭い面積内で人間が活動したこと、あるいは何らかの廃棄行為が関係しているのであろうか。客観的な数量は口縁部の残存度などに従うべきであろうが、口径を推定できない資料が多いため、器種の数量比などは感覚的な概数でなされることもある点を断っておく。ただし、計量化できる甕・壷の底部片については、1/16単位で底部周残存度を計測し、個体数を提示した。

主丘頂上で出土した弥生土器の重量は442.9kgであり、弥生土器総重量の66％に及ぶ。内容は遺構覆土47.4kg、Ⅰ・Ⅱ層土377.2kg、中世塚群の盛土中・溝覆土18.3kgである。Ⅱ層は主丘頂上の中央にあたる14Ｌに60kgあまりが集中する（第21図）。南環濠は13ラインに密であり、計166.4kgが出土している。北環濠は全体を通じて比較的密度が高く、計30.0kgを計る。東環濠は散漫で計16.7kgある。南環濠下の東小谷・西小谷には計19.8kgの出土がある。主丘斜面は傾斜が強いためか遺物は少なく、Ⅰ層中の1.7kgを計るに過ぎない。西尾根およびその斜面では、一次・二次調査を通じて遺物の出土は皆無である。広さ約300㎡の付帯調査区Ａ（19頁、第７図）では1.1kgを計るに過ぎない。

（2）調整・文様・胎土

a）調　整

遺存状況は一般に不良で、風化（凹凸のある面的な欠損）・磨耗（器面の均一な減衰）が進行している。さらに水洗時にもある程度の人為的な磨耗を受けている。特にハケ目調整される甕・壺については、器面の密度が低いためか風化・磨耗が顕著で、焼成不良の印象をも受けることとなる。

ハケ目は条線がごく繊細なものから条痕状のものまである。甕では2種類のハケ目調整具を用いるものが確認できる。(28) は底面を除く全面がハケ目調整であるが、底部内面にのみ、粗い調整具が使われている。(771)・(772) 等の底部も内面が粗いハケ目で、調整具の使い分けが予想できる。粗い条痕状のハケ目調整具は、輪肋・放射肋を持つ二枚貝を使用する場合もあろう。調整具の使い分けは、さらに肩部などの圧痕文にも反映しているようである。

口縁部の横ナデは、水平方向の痕跡が際立つものが多くある。巻末の観察表では「擬凹線に類するヨコナデ」としているものが22点ある。それらは擬凹線文などを意識した調整、あるいは矮小化した擬凹線文とも思われる。ただし、実測図ではそれを表現していない。

内面をヘラ削りする甕は当該期の土器に一定量存在するといわれる。図版中では特に体部破片を特に取り上げていないこともあって2点 (177)・(258) に止まる。砂礫の移動痕はナデによっても生じるものであり、移動痕のある土器片は30点ほど存在するが、ヘラ削りの輪郭が確認できる甕は (528) 1個体にすぎない。

b）文　様

裏山遺跡では沈線文系の文様をもつ有段口縁文の甕は1割程度であり、北陸南西部と比較してかなり低調である。主丘頂上Ⅱ層の図面図版で有文土器を冒頭に提示しているとおり、文様は多様な形状の甕に施文されるため、口縁部形態を優先した算数字・アルファベットの分類に反映させていない。文様については、滝沢が凹線文系と刺突文を中心に地域差・時間差を含めて概観しており［滝沢1993］、この分類を考慮に入れつつ、裏山遺跡で見られる文様を列挙しておく。

①沈線文系

『紫雲出』の記述を引用すれば、凹線文は「ヨコナデ手法によってほどこした一種の沈線文」で、「すべて一本ずつ、べつにほどこしている」文様、擬凹線文は「突出している部分をもヨコナデしている点では凹線文と一致しているが、‥‥一度の操作でほどこしている」文様と規定されている［小林・佐原1964］。

擬凹線文　櫛歯状工具による平行沈線で、比較的間隔が狭いもの。沈線部分以外の口縁部外面は平坦となる。明瞭に擬凹線文と判別できるものは、3点にとどまる。

平行沈線文　広義の擬凹線文であるが、櫛歯状工具によらない、1本描きの平行沈線あるいは凹線。「ヘラ描き沈線による疑似擬凹線文」［品田1990］を含む。沈線が厳密に平行に描かれた場合、擬凹線文との判別が難しくなるが、沈線の途切れる位置や間隔の変化を見ることで、両者の区別は可能である。沈線の幅が比較的細いものを平行沈線文Aとする。また、太い沈線（凹線）間に平坦面を残すものを平行沈線文B1、太い沈線が密接して施文され、波板状となるものを平行沈線文B2とする。(571) は同一器面上でも密接する部分と幅の広がる部分があり、これを別に呼称する合理性はないと考えるが、描出効果は異なる。平行沈線文は全器種

を通じて多用される文様である。

凹線文A　ヨコナデに類した起伏の弱い波板状の凹線文である。(422) がこの例である。ヨコナデと分別できない程度のものもある。

凹線文B　幅の大きいヨコナデを2条連ねたもので、接点には断面三角形の稜が残される。この文様を使う場合、口頸稜には粘土が付加され有段口縁が強調されている。(143)・(811) がこの例である。

凹線文C　断面半円状の弧が連続するもので、滝沢の「擬凹線文B」に相当しようか。(708) 1点に限られる。文様はべつべつの操作で施されたと見て、凹線文とする。

凹線・沈線　1条のみの凹線・沈線。口縁端面に沈線を置くものについては有文土器として扱わないでおく。また、口縁直下や口頸稜の上下に、それを強調するための調整がなされて沈線のようになることがあるが、これらも除く。

②圧痕文・刺突文系

紡錘状　板状工具・ヘラ状工具の端を用いたもの。甕肩部・口頸稜などになされる。施文具は器面に対して角度をもって押圧し、左回り方向（土器を上から見て反時計回り）に短く引きずることが通有である。器面調整のハケ目とは条線幅が異なっている例もあり、それらには条痕状のハケ目と同様に、二枚貝使用の可能性があろう。

線　　状　紡錘状と共通するものだが、押圧の角度が大きく、線状となるもの。

角　　状　先端角状の工具を、器面に対して角度を持って押圧するもの。

丸　　状　先端半円状の工具を押圧するもの。器面に対して垂直にあてるもの、やや角度をもつものがある。

そ の 他　環状 (253・747)・爪形 (321)・馬蹄形 (320)・D字状 (863) などの圧痕がある。

③スタンプ文

渦紋が型押しされる器台 (312) が南環濠に1点のみ存在する。

④櫛描文

信州系の台付甕 (119)、畿内・東海系と思われる壺 (674) の2点にのみ認められる。

⑤貼り付け文

円形浮文・棒状浮文の使われる壺が比較的多くあるほか、器台と見られる (719) にも棒状浮文が使われている。

⑥集合沈線文

矢羽状の沈線文が壺 (303)・(679) に使われている。

c）胎　土

胎土は各器種を通じてスイカ種実大以下のチャート亜角礫～亜円礫の混入が特徴的である。ヘラミガキされる壺・高杯・器台などは、砂・砂礫の混入が少ない傾向にあるが、割れ口などで器壁に押しこまれた大粒の礫が散見できる。ハケ目調整されるものは器面の風化・磨耗が進行していることもあって砂・砂礫が目だち、事実基本的にやや多くの砂と少量の砂礫を含んでいる。チャートのほかには石英などが認められ、(119)・(173) にのみ金色の雲母が確認できる。なお、観察表の砂・礫は、粒径で「砂」(径2㎜未満)、「砂礫」(径2㎜前後)、「礫(中)」(径3～4㎜前後)、「礫(大)」(径6～7㎜前後)に区分している。

色調は、甕・ハケ目調整される壷などが、にぶい黄褐色～灰白色～浅黄橙色（Hue10YR)[小山・竹原1994]（一般的には黄色味がかった灰白色）を呈する一方、ヘラミガキされるものは褐灰～灰黄褐（Hue10YR)の落ち着いたものとなる。ただし、壷などの一部に、明褐色（Hue7.5YR)を呈し、緻密さに欠ける生地土を用いているものがある。

（3）分　類

第12図～19図に示すとおりである。図化は口頸部破片を中心にしているため、分類も基本的に口頸部の形態・調整手法によって行っている。しかし、壷などは口頸部形態の差異で分類することが有効であるとは思われず、全体として統一を欠いた分類になっている。大きさの分別については文中で多少ふれるが、資料が制約されており、分類の要素には含めない。なお、比較的小さな破片も図示採用しているので、口径や傾きなどが正確さを欠いている部分も少なからずあるかと思われる。ご容赦願いたい。以下、器種ごとに分類の概要を述べ、出土地点別に個別の説明を加える。詳細については巻末に観察表を別掲しているので、参照されたい。

a）甕形土器（第12図～15図）

「有段口縁」のA・B・C類、「有段口縁」状の口頸部をもつD・E類、いわゆる「くの字」甕のF・G・H類、信州系甕のI類に大別することが可能である。A～E類の差異は漸移的なもので、区分は必ずしも明瞭ではない。したがって、細別についても判別が可能な最低限のものにとどめ、分別困難なものは観察表に複数の類別名を併記した。なお、縄文土器としている（882）については、天王山式系土器の可能性が高い。

有段口縁甕の器体上部の部位名称は、「長頸壷」などの用語が指す「頸」と共通性のある部分を「頸部」とし、「口縁部」を狭く限定して使用する。ただし、一般に使用される「有段口縁」の語は「有段の口頸部」の意でここでも使用し、口縁部と頸部の境界は「口頸稜」と表現する。「くの字」甕は体部より上位を口縁部として、頸部の語を用いない。

甕A類

北陸に通有な有段口縁の甕である。A1～A3に細分する。特にA1・A2は、個々の遺物にあたれば差異は微妙であるが、おおまかな形態差を示すことにした。

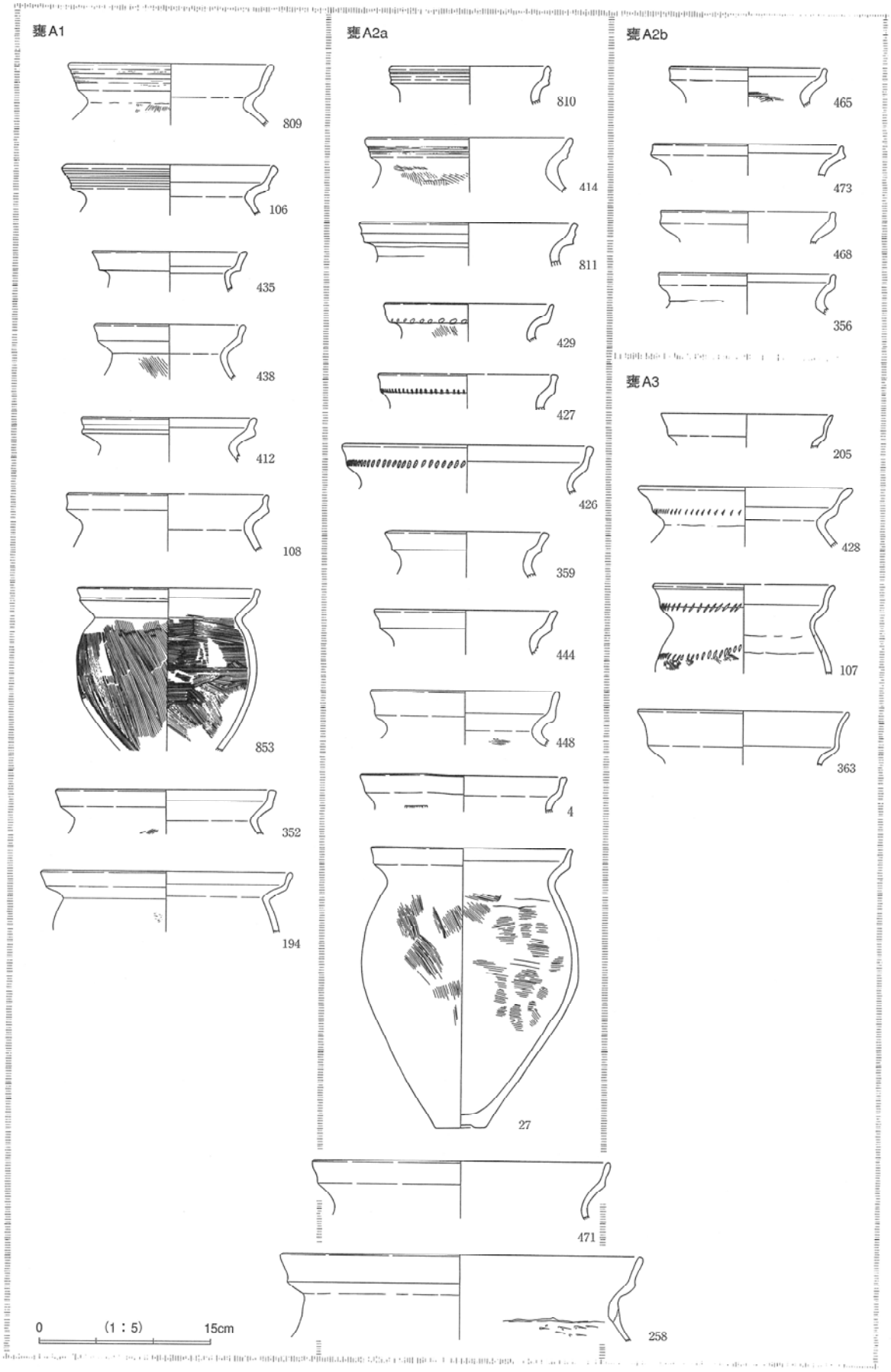
A1は口頸部、頸～体部上位の屈折がともに明瞭なものである。A1の数量は少なく、図示できる例は提示したほか数点にとどまる。直線的な口縁部がやや外傾して付く（106）・（194）などが典型例である。

A2は口頸稜が角張り、頸～体部が円く弯曲するものである。口縁部がごく短いものをA2bとして、A2aと分離した。口縁は円みを帯びた角状に、あるいは円く収められる。小型から超大型のものがある。

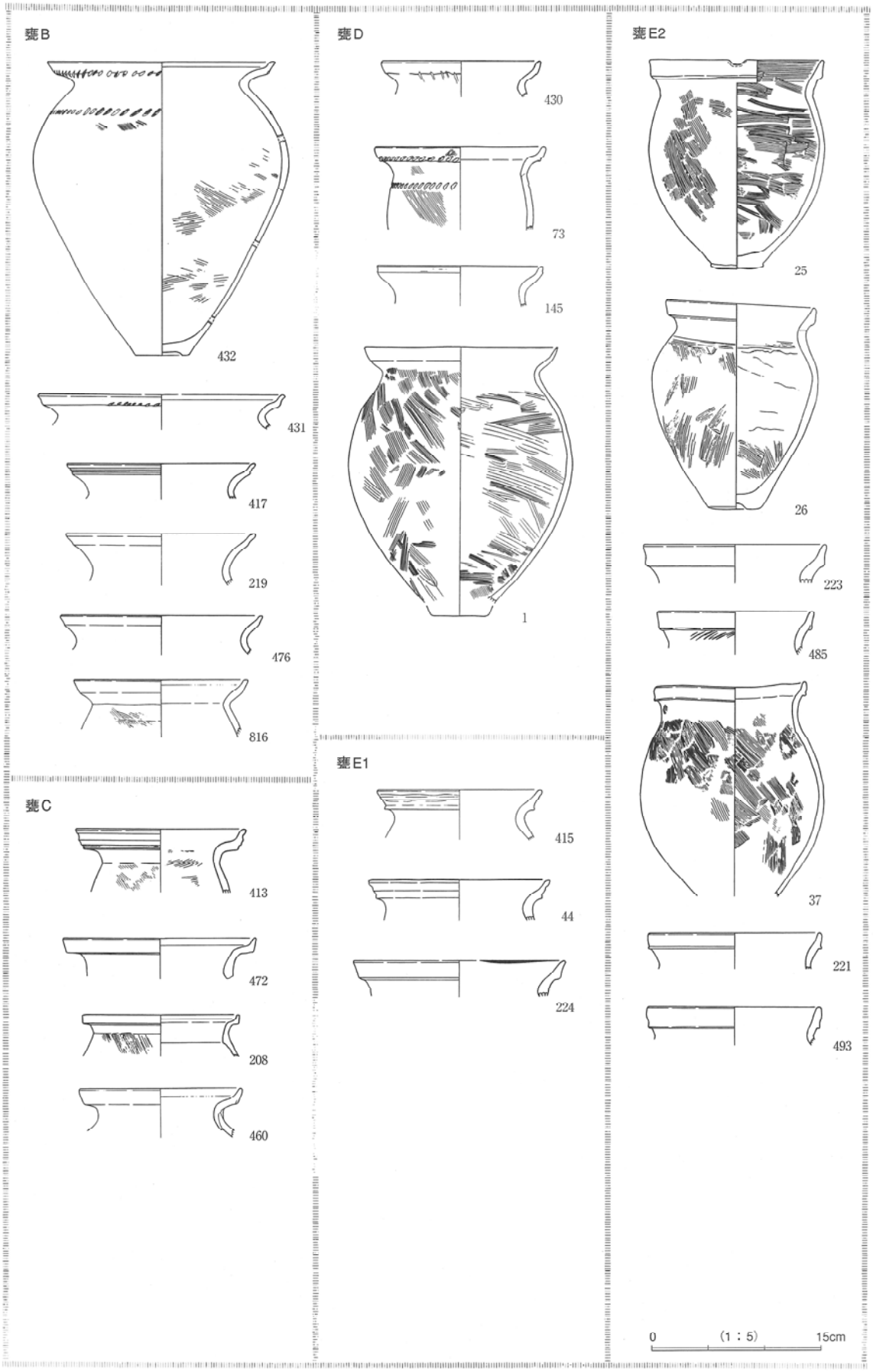
A3は口縁部が長く、深い口頸部となるものである。口縁部が外反する傾向があり、（428）はそれが特に強い。圧痕文は（428）・（107）の口頸稜にあるが、凹線文・擬凹線文はないようである。

甕B類

比較的長い頸部が強く外傾し、短い口縁部も外傾して付く有段口縁甕である。（219）以下は頸部の外傾が弱く、A2bにも類似する。近江系甕、あるいはそれが変容したものを含む。



第12図　弥生土器分類図（1）



第13図　弥生土器分類図（2）

甕C類

強く屈曲した受け口状の口頸部となるものである。これらも近江系甕が変容したものであろうか。(413)のみが幅広で施文された口縁部を持つ。C類は提示したほかに明確な例はない。

甕D類

口頸部の屈曲が緩く、曲線的に作り出されるものである。(1)は器壁が薄く、口縁も尖る。

甕E類

口頸稜を強調し、有段口縁状に作り出すものである。E1・E2に2分した。いずれも口頸の内面は緩く弯曲するか直線的であり、有段化は外面の成形による。同じEに包めたが、E2は大別すれば「くの字」甕に扱われるものである。E2以降の分類を「くの字」甕とした場合、主丘Ⅱ層では掲載した甕口縁部破片の50%が「くの字」甕である。

口頸稜の強調は、ナデによって粘土を引き出す、引き出した粘土を垂下させる、あるいは粘土を付加して撫でるなどの手法が取られるが、それらは複合しており区別することは難しい。

E1は口縁部の外傾が強いものである。E類に含めたが、A2の中で口縁部が外傾するものやBとの関係性が強いかもしれない。(224)は尖った口縁が特徴的である点、E2とも共通する。

E2は口縁部外面がほぼ直立するものである。付加状口縁の甕とも言われる。口縁の断面形がを長三角形になるものと、口縁を円く収めるものがある。前者は4号竪穴の完形個体2点が典型例である。

甕F類

口縁外端を肥厚あるいは垂下させるものである。下端に明らかなオーバーハングがあるため正面形では口縁部を認めるが、断面に口縁部と呼ぶべき部位を欠いており、「くの字」甕に含める。(177)・(370)・(371)が口縁を摘み上げるようにしているのに対し、(508)・(509)は摘み出しが弱く、口縁外面を厚く引き出す、または付加している。口縁が薄く、外面下端を鋭く引き出す(371)の例は、他に(422)がある程度で、これには凹線文がある。

甕G類

口頸部から体部上位の断面が「く」の字状を呈するものである。

G1は口頸部～体部の屈折が明瞭なものである。口縁外端が強調されるものはF類との分別が難しい。摘み上げられるもの、外面が凹線状になでられ窪むもの、面取りされるもの、丸く収めるものなど多彩だが、分別せず一括した。口縁端面近くまでをハケ目調整とする(248)は例外的である。

G2は口頸部～体部が円く弯曲するものである。口縁部はG1と同様、多様な形態がある。

甕H類

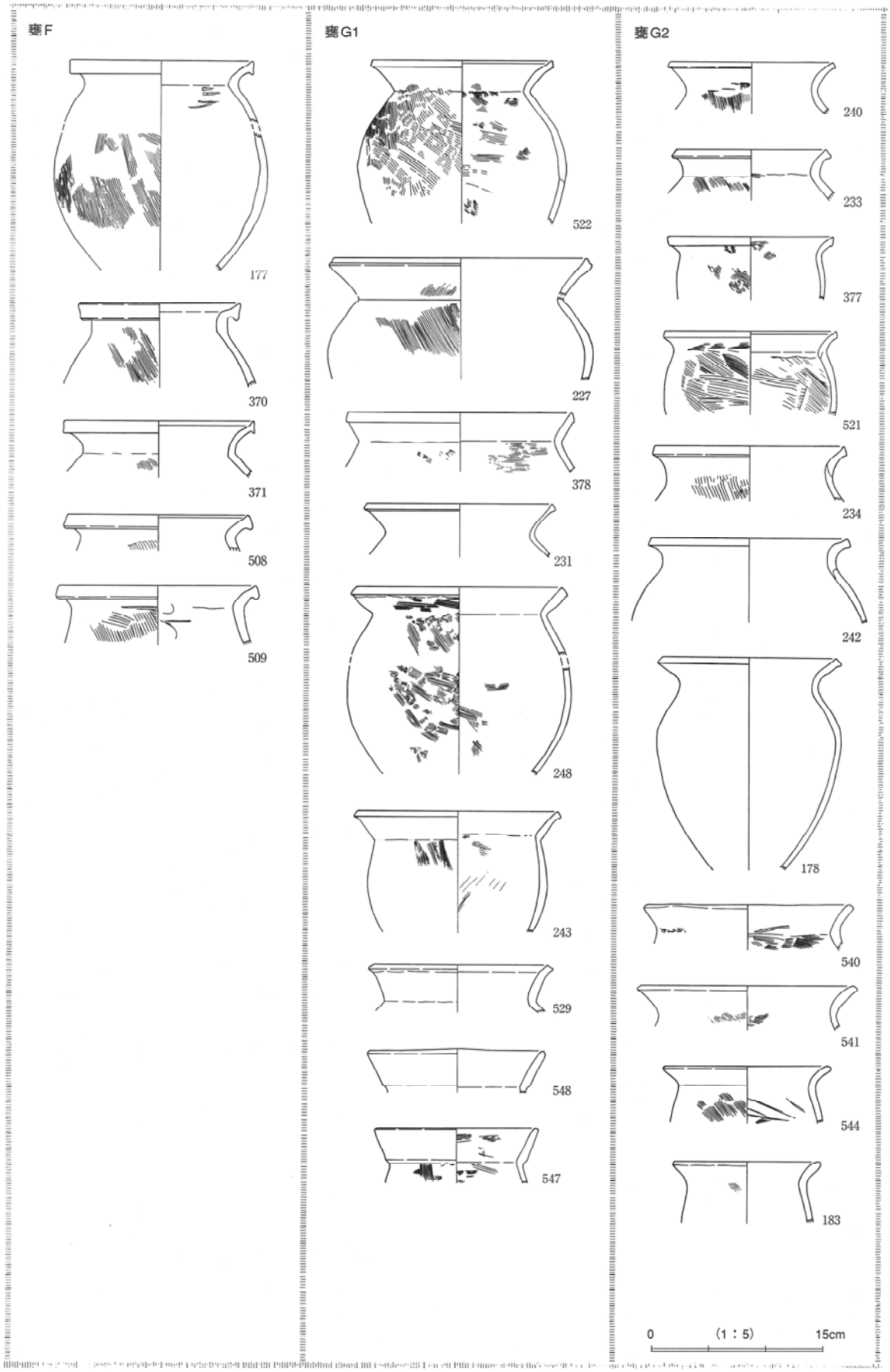
口縁部外面、または内外面をハケ目調整とし、口縁を以下の形態とする「く」の字甕である。H1は口縁端面を水平に面取りするものである。H2は口縁を円く収めるもので、器壁は他の類型に比較して薄い。

甕I類

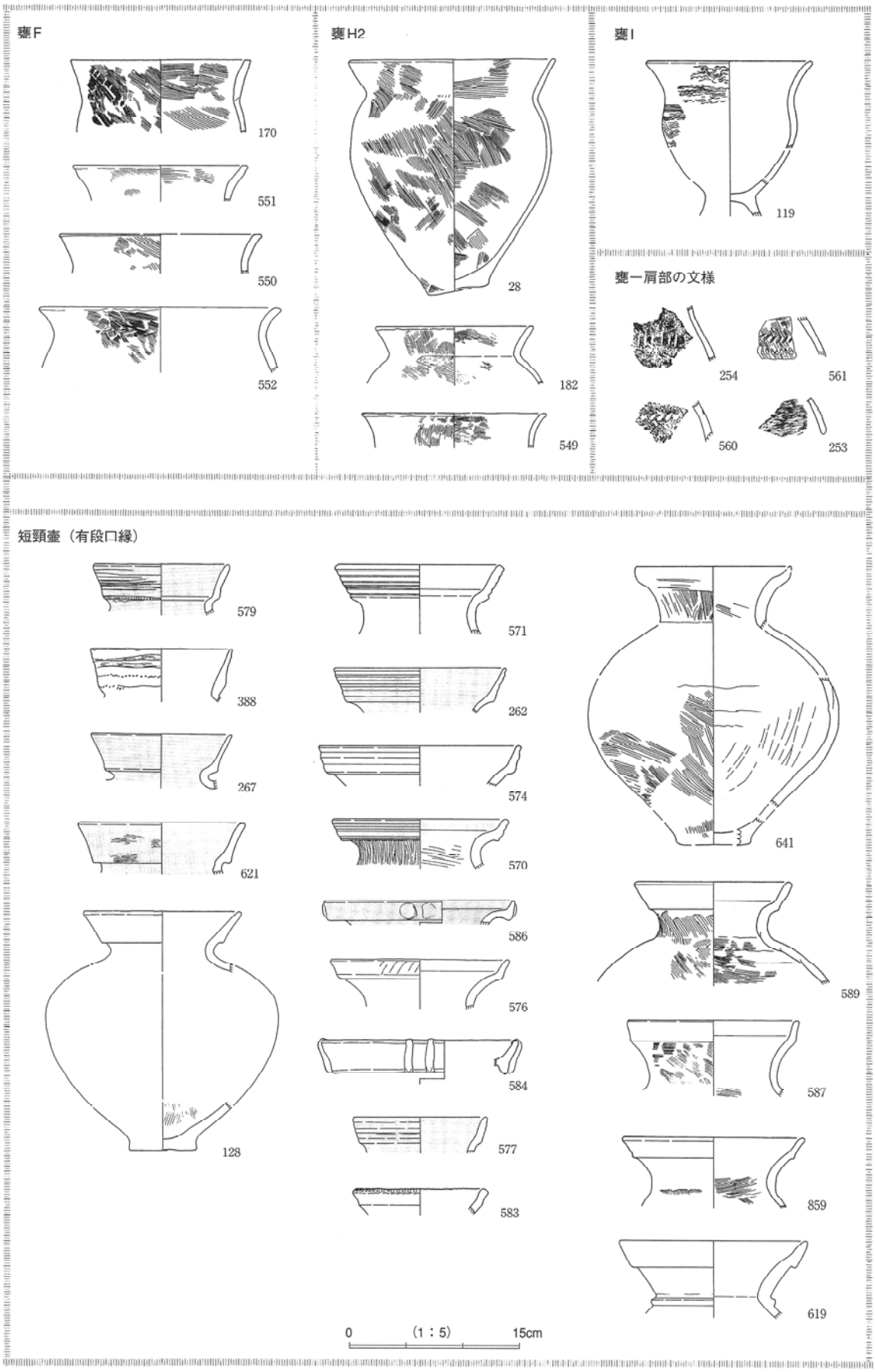
櫛描文のある小型の台付き甕(119)1個体である。文様は信州系の櫛描文であろうが、器形はそれらの甕とやや異なるし、小形である。台を除く器体の上2/3に、6本程度を1単位とする櫛描文が付される。(120)は口縁部の形態が(119)に近似するが、文様がなく雲母を含まない。

底部片

底部はハケ目調整の壺形土器と区分できないものが多数であるため、ヘラミガキされる壺を除いたものをすべてをここで記述する。3,766点の底部片を1/16単位で残存度を数量化すると、1,391個体となる。底



第14図　弥生土器分類図（3）



第15図　弥生土器分類図（4）

部がその構造上、破損しにくいということを考慮しても、竪穴建物8基という集落の構成に対して1,391個体は不相応な数値であり、弥生土器は単に集落の廃棄物で構成されるものでないのであろう。

底面を上げ底とするものが1404点あり、不明1087点を除いた比率は52%に及ぶ。45%を占める平底のものも蛇の目状の痕跡を残している例はかなり多い。

b）壺形土器（第15図～17図・19図）

甕と同様に全形を知り得るものはほとんどない。甕のように口頸部の形態差で分類することが有効と思えないので、ある程度の大分別を行った上で名称を与え、必要に応じて細分を行うこととする。器形はバラエティーに富む。

ハケ目調整されるものは、色調・焼成度合いも含めて基本的に甕と同様の胎土であり、甕との分別は難しい。ミガキ調整されるものは比較的堅緻な焼成であるが、やはりチャート亜角礫～亜円礫の混入が目立つ。なお、調整は分類に反映していないので、観察表を参照されたい。

文様については、凹線文・擬凹線文・圧痕文のほかに、上下を区画された櫛描の波状文（674）、矢羽状文（303）・（679）、棒状浮文（581）・（585）・（680）、円形浮文（586）・（862）、擬縄文（678）など、甕にはないものが加わる。圧痕文は紡錘形（579）・（581）のほかに、爪形（582）・丸状（583）、D字状（863）がある。また、パレススタイル壷（862）は新潟県域では稀な例である。装飾については、頸部と体部の境目付近を箍状に粘土付加するものが山頂Ⅱ層に多く見られる。

短頸壺（有段口縁）、長頸壺（有段口縁）

分類図では分離して掲載しているが、長頸壺・短頸壺の区別は口頸部の長短を感覚的に捕らえた便宜的なものでしかない。細分を控えるが、比較的口縁部が長い（267）・（621）・（128）は、広口壺に対応して細口壺とでも称するべきかもしれない。長頸壺は凹線文・擬凹線文に乏しい。

短頸壺（くの字口縁）、長頸壺（口縁無段・直口）

短頸壺は口縁の成形、口頸部の形態が多様で、やはり細分困難である。文様は（580）に凹線文が予想される程度である。長頸壺は口縁端部の形態に変化はあるが、大きな違いはない。（397）は口頸部中央に圧痕文のある唯一の例である。

有段壺

長い口縁部が直線的に外傾、または外反し、ミガキ調整の体部が想定されるものである。（627）のほかに（626）にもその可能性がある。

広口壺

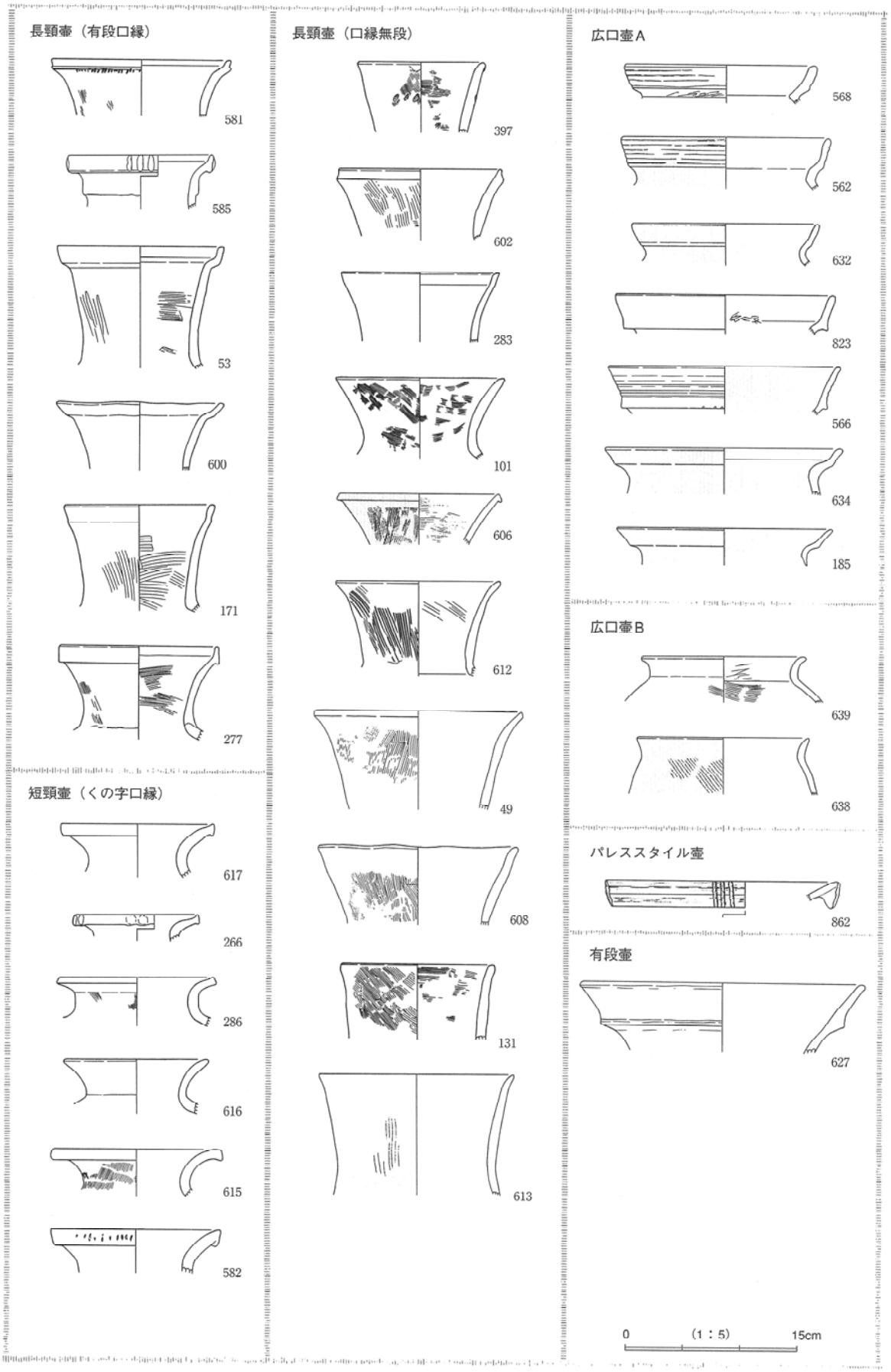
広口広頸となるものである。

A類はミガキ調整されるもので、頸の括れが緩く、また口径に対して口縁部が短い。口縁部の形態は多様であるが、主丘Ⅱ層で見られるように、沈線文系の文様が多様される傾向にあり、その大半は併行沈線文Aで占められる。

B類は体部がハケ目調整される広口壺である。数量は少なく、提示した他に（637）がある。加飾されるAとは区別して別の呼称を用いるべきかもしれない。

台付壺

体部下半に最大径があるもので、台付と推測されるものである。装飾台付壺もここに含める。口縁・脚台部と接合するものはない。凹線・擬凹線を施す（681）、凸帯を貼り付ける（682）、棒状浮文を付した凸



第16図　弥生土器分類図（5）

帯を貼り付ける（680）、半隆起線を作り出す（683）がある。（672）は文様・装飾を欠く。第19図の脚台部などがこれらに対応するであろう。

細頸壷

頸部が細く長い、中・小型壷である。頸が無段の（157）と段をもつ（685）がある。

小型壷

ミガキ調整されるものと、ナデ調整のものとがある。前者のうち、口縁部に文様のあるものは（125）が見あたるくらいで、施文される傾向は低い。

無頸壷

最大径を体部の下位に持ち、口縁に向かって内屈する器高の低い壷。提示したほかに（299）・（300）がある。鉢に含めている（803）も無頸壷に類する。

壷頸部・体部・底部

頸部下端または頸下部に装飾されるもの、体部に装飾されるものを図示した。（649）の凸帯には、D字状の圧痕が連続する。（863）には沈線２条と逆D字状の圧痕文、（679）・（303）はヘラ描きの矢羽状沈線、（678）は原体不明の擬縄文、（674）は上下に帯状区画のある波状文がそれぞれ施される。（863）はパレススタイル壷である（862）と同一個体である可能性が高い。

底部の数量については、甕底部の項目で数量に触れている。なお、底面に十字状のヘラ記号の描かれる（807）・（808）がある。

c）高杯形土器（第17図）

器体の全形を知り得るものがないため、甕と同様に杯部の形態のみで分類を行う。胎土は有文の壷・ヘラミガキされる壷と基本的に共通する。

A類は杯部が有段で、口縁部の高さが比較的小さいもの。口縁端面を水平に長く作り出すA１、口縁端面を垂直にあるいは外傾させて面取るA２、丸く収めるA３に分別できる。ただし、口縁と脚台部形態との相関関係は不明である。アーチ状の把手が付されるA２の（687）はおそらく新潟県域に類例がないものである。

B類は杯部が緩く内湾して、浅いボウル状となるものである。

C類はいわゆる有脚鉢である。杯部に２段の稜を作り出す（827）は、（311）の屈折点を強調したものと考えてCに含める。

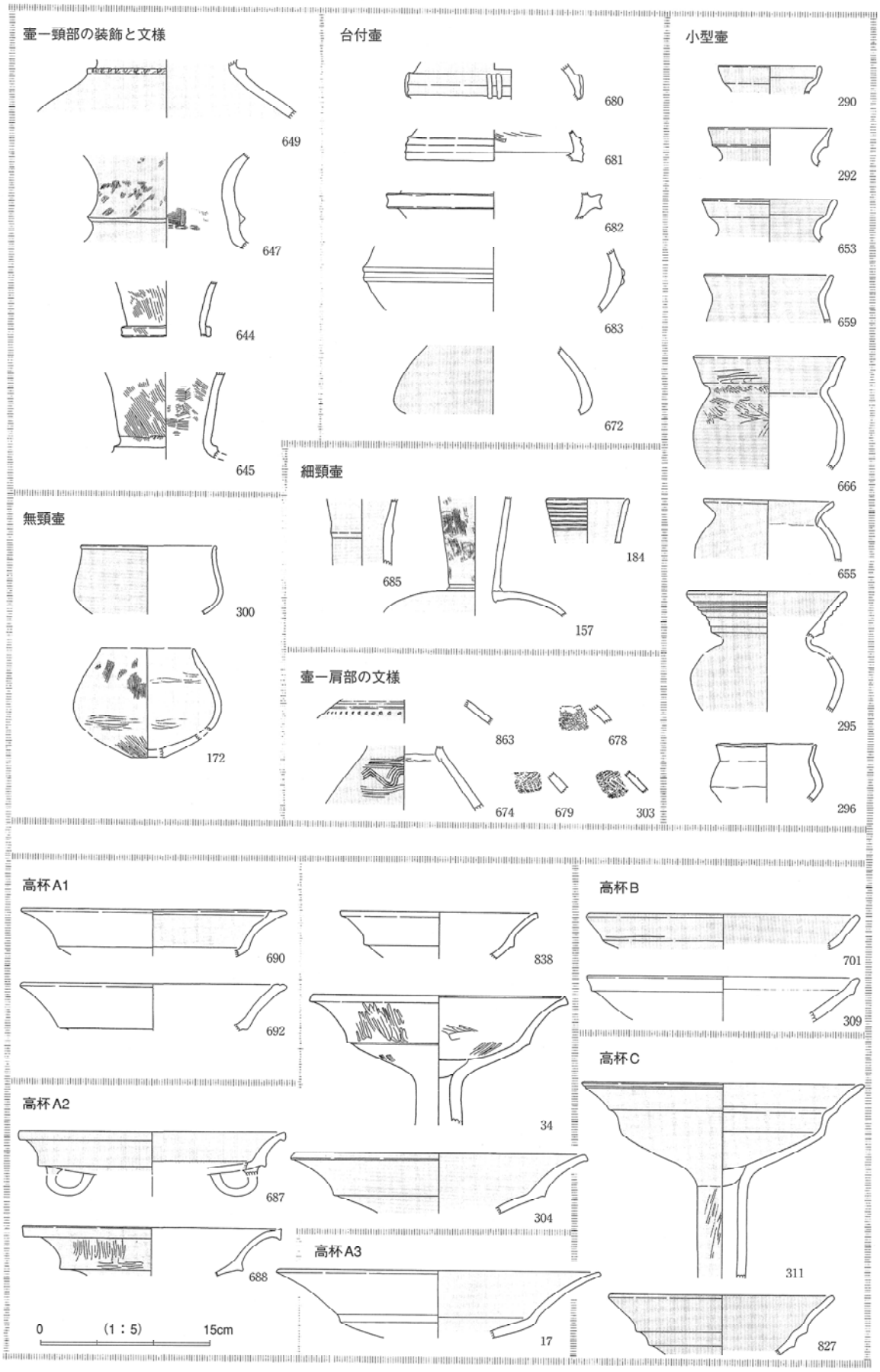
分類図に掲載しなかったが、口径が小さく口縁部が外典する（19）があり、これをD類とする。

脚台部・脚柱部

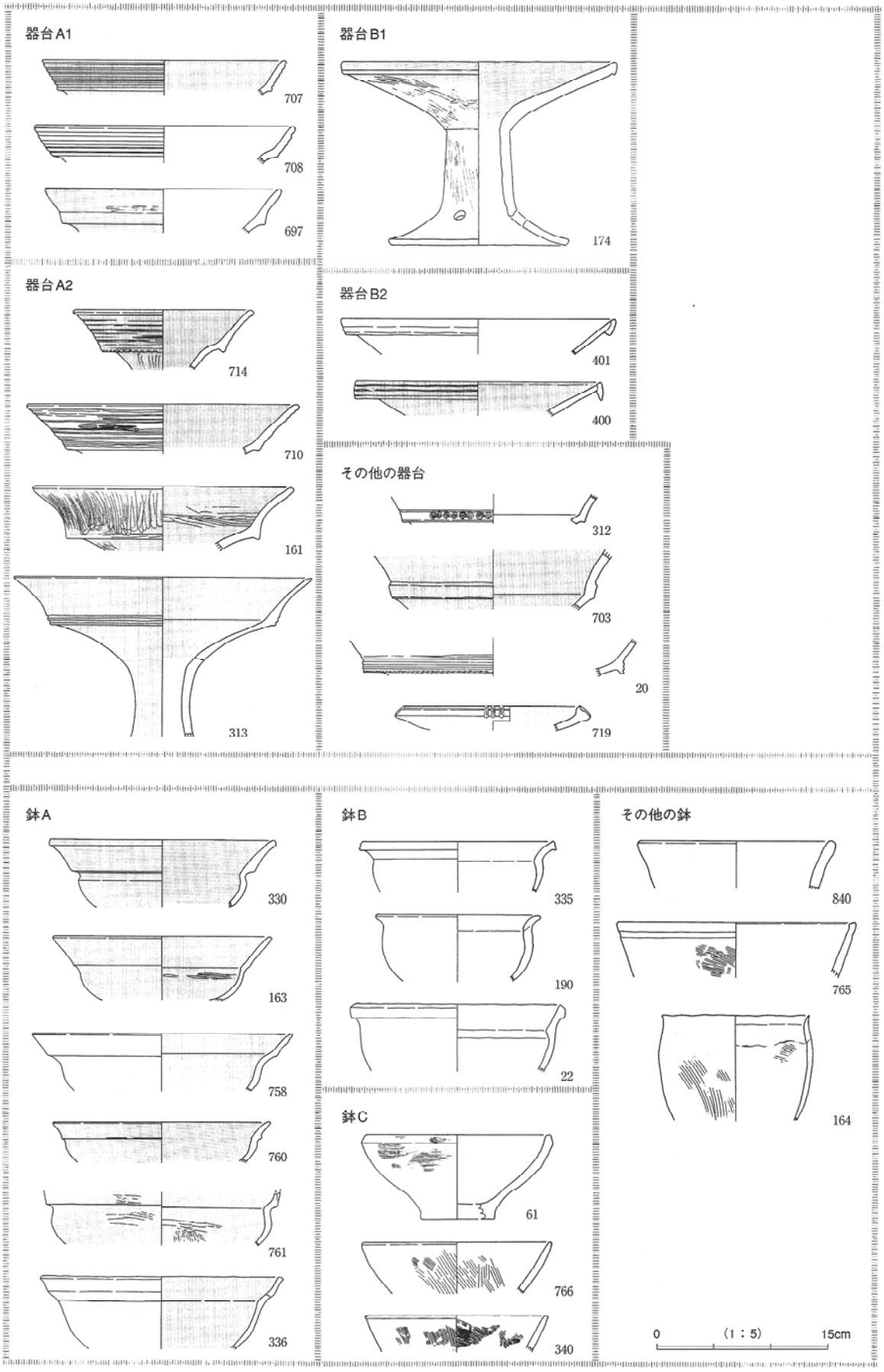
ここでは高杯・器台をまとめて記述する。脚部に限っても全形状の明らかなものが少ない。八の字状長脚・八の字状有段脚・棒状有段脚・棒状無段脚に大きく区分できる。（716）は段の作り出しが外面のみで、八の字状長脚に近い。文様は擬凹線文のほかに、脚端の縁帯に圧痕文を連続させるものがあり、（320）には馬蹄状の、（321）には爪形の圧痕文が巡る。なお、透孔数の不明なものは３孔と仮定して図化した。

d）器台形土器（第18図）

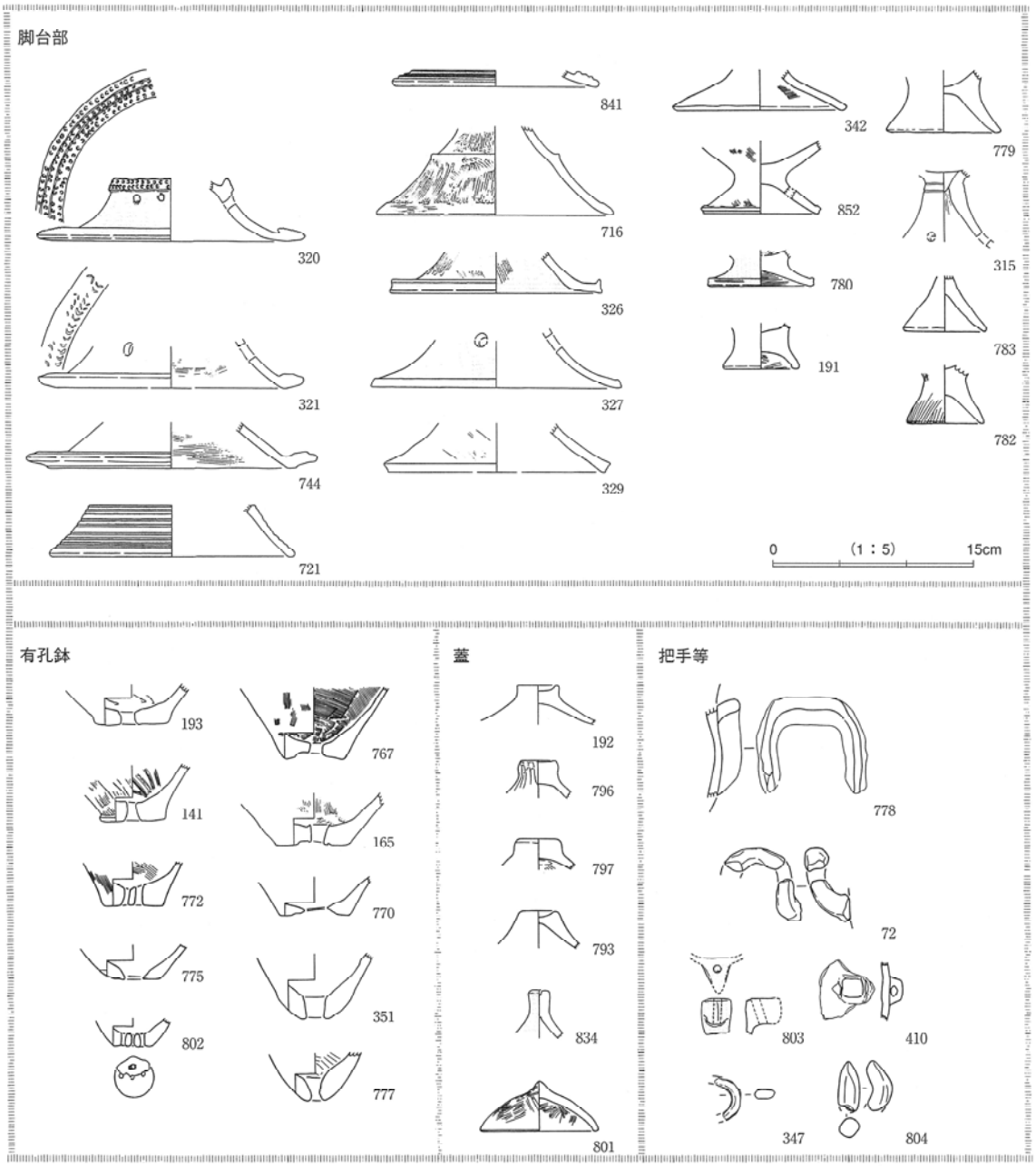
器体の全容を知り得るのは（174）１点のみである。以下３分類のほかに、器種判別しがたい（718）・（719）も器台に含めておく。また、擬凹線が施文されるものは壷との分別が微妙で、両者を混同している



第17図　弥生土器分類図（6）



第18図　弥生土器分類図（7）



第19図　弥生土器分類図（8）

ものもあろうかと思われる。有文器台の受け部文様は高杯と同様に擬凹線文を基調とするが、(706)・(714)は段部に丸状圧痕文を、(312)はスタンプ渦文をそれぞれ持つ。

A類は受け部が有段を呈するもので、受け部上段が短いものをA1、上段が長く、外傾あるいはく外反するものをA2とした。前者は脚柱部が筒状となろうが、図版48でみるように特に太いものはない。後者は棒状の脚柱となろう。

B類は受け部が無段のもので、口縁外周に粘土帯を付加して有文とするB2と、そうでないB1がある。前者は近江・東海、後者は近江の系譜状にあるものであろう。

脚部・その他

脚部は高杯の項で記述しているとおりである。(312)は帯状の段が作り出され、スタンプ渦文が連続する。渦文は栃木分類［栃木1987］によるD類である。(703)は段部が凸帯で強調される。(20)は段部が垂下し、擬凹線・圧痕文が加わる。棒状浮文のある(720)はごく小片である。これも近江・東海系であろう。

e）鉢形土器（第18図）

有段口縁鉢（A類）、口縁部が外傾する無段の鉢（B類）、椀状の鉢（C類）、その他の鉢（D類）に大別できる。このほかに体部が球状となる大形の把手付鉢(778)、突起に蓋結束孔を設ける(803)がある。基本的にDを除いてミガキ調整がなされる。Aは口径に大きな変化はなく、特に小型となるものはない。口縁の形状は多彩で、段部の矮小化したもの、屈曲の弱いものがある。その他には有孔鉢の一部が含まれるかもしれない。

f）有孔鉢形土器（第19図）

体部上位にいたる個体はなく、いずれも底部に穿孔がなされるものである。底部は上げ底状、平底、尖底状、尖底ぎみの平底の4形態がある。

g）蓋形土器（第19図）

紐の形状は、中央が強く窪んで高台状となるもの、中央が緩く窪むもの、平面状もしくはごくわずかに窪むものが多く、半円状に尖る(801)・細長い(834)は例外的である。

（4）各　説

a）竪穴建物出土の土器（図版23～25）

包含層の土器と同様に細片が多く、図示できないものが大半を占める。遺棄遺物と断定できるものは4号竪穴の一括土器と、その他竪穴の若干の個体に限られ、時期を比定する資料に恵まれていない。半埋没の竪穴建物（以下、竪穴と略す）である1・2・3・4号竪穴は壁付近の一次体積土が薄く、それ以外は現代までの時間幅を持つもつ堆積土である。5号竪穴はごく一部が残存したのみで不明な点が多い。6号竪穴は壁高が小さく、そもそも覆土の容積が少ない。7号竪穴は焼土を多量に含む土で埋められており、土器は細片が多い。8号竪穴は竪穴建物であることの認識が遅れたために覆土断面の記録は少ないが、弥生土器が少量であることと関係はない。

1号竪穴（図版23）

計5.3kgの土器が出土している。（1）・（9）を除いていずれも細片である。掲載した他に図示できる破片はほとんどない。（1）は西壁至近の3層で出土しており、甕Dの典型例である。（6）は口縁部中央と下端が沈線、口縁下が凹線あるいはそれに類するヨコナデである。

2号竪穴（図版25）

計7.3kgの土器が出土している。1号竪穴に比較すれば鶏卵大の破片は多いが、やはり図示できるものが乏しい。甕の（44）は凹線文Bである。（49）・（50）は同一個体の可能性が高い。

3号竪穴（図版23）

計4.9kgの土器が出土している。やや大型の甕体部破片は少量あるが、やはり口縁部を欠く。掲載していない体部片に内面をヘラ削りするものが5点（2個体）ある。器台の（21）は受け部の上半と脚台部が全周しているのみで、受け部下半はほぼすべてを欠いている。

4号竪穴（図版24）

計9.7kgの土器が出土している。完形・半完形個体の接合しない破片を除けば、掲載した以外はほとんどが細片である。甕の（25）・（26）は口縁部内面が平坦となるE2類の、（28）は口縁部をヨコナデしないH2類の完形個体例である。甕の底面はやや張りだし気味の形態をとる（25）・（30）が丁寧になでられ、（28）は上げ底の周縁部がなでつぶされてレンズ状の凹面となる。（26）・（32）は半球状に窪む。（25）・（31）の内面は条痕状のハケ目が明瞭である。（28）の底面にはモミ圧痕が1点ある。

5号竪穴（図版25）

計3.1kgの土器が出土している。竪穴の大半を欠失している割には多量の土器片がある。甕の（52）は1/3個体ほどの破片があるものの接合せず、図示は口縁部に止まる。器台の（54）は1本描きの平行沈線文が描かれる。

6号竪穴（図版25）

計2.2kgの土器が出土している。掲載したもの以外は細片である。甕の（55）は凹線文Aとも取れるごく浅いヨコナデが2条見られる。鉢の（60）はほぼ完形、（60）は背面側のほぼ半分を欠くがもっとも遺存度のよいものである。甕の（56）は圧痕文の上に1条の沈線を引くが、同一個体の別破片にはなく、ヨコナデによって生じた無意のものであろう。

7号竪穴（図版24）

計2.6kgの土器が出土している。甕（37）と北東隅のピット1で出土した甕（62）のみがまとまったもので、（62）には体部片もあるが接合しない。（37）は口縁部外面下端を強調することで外面からは有段状を呈する。これらのほかは細片である。壺（64）の圧痕文は工具の角を押圧するのみで、押し曳く手順がない。

8号竪穴（図版25）

計2.1kgの土器が出土しているが、いずれも小破片である。

b）土坑・溝出土の土器（図版26～29）

1号溝に7.3kg、3号土坑に4.7kg、11号土坑に3.1kgのややまとまった物量があるものの、その他の土坑は1.1kg以下で細片が混じる程度の状況である。なお、甕・壺の底部片は計83点、38.2個体（1/16単位の底周残存度計測値）である。9号土坑は長方形の平面形から古代の土坑墓と見られるが、弥生時代以外

の土器はない。

1号溝（図版27・28）

中央付近に土器片の集中があり、底部片も計43点、21.4個体がある。しかし、他の部分では平安期の遺物が混在しており、土器が一括して埋納・あるいは廃棄されたとはしがたい。

甕の（106）は典型的な擬凹線文が描かれ、ナデも端整である。（107）は口頸稜が線状の圧痕文であるが、肩部は押し曳く手順のない単純な刺突である。台付甕の（119）は中部高地系の櫛描文が描かれ、金雲母を含む。赤褐色の色調も他とは異質である。

壷の（125）は平行沈線文が描かれる。（127）・（128）は形態・色調がごく近似する。

器台脚台部の（136）も平行沈線文Ｂ１・Ｂ２が描かれる。

3号土坑（図版28）

覆土は単一で、やや大形の土器片が比較的多く含まれる。

甕の（143）は口縁部下端に粘土を貼り付けた凹線文Ｂが明瞭である。（145）には擬凹線文とも取れるヨコナデが見られる。底面がなでられる（155）にはモミ圧痕が１点ある。器台の（161）は遺存状態が例外的に良好でヘラミガキの痕跡が特に明瞭である。

11号土坑（図版29）

器体の全容が知られる（174）・（172）以外は細片である。（174）は近江系の器台である。口縁外面にはごく浅い沈線が１条巡る。赤彩の痕跡は微妙でその範囲を明示できないが、外面はほぼ全面と見られる。甕の（166）は口頸稜に丸状圧痕がある唯一の例である。

ｃ）環濠出土の土器（図版28～36）

弥生土器のみで他の時代の土器は皆無である。環濠覆土の土器は、東環濠が13.4kg、南環濠が166.4kg、北環濠が30.0kg、総重量209.8kgを計る。環濠総計の甕・壷底部片は932点、323.4個体（1/16単位の底周残存度計測値）がある。南環濠は13ラインに濃密な分布があり、南環濠のほぼ半量が出土している（第20図）。また、比較的大形の土器片がまとまっている。13ライン付近の覆土は多量の炭化材を含んでおり、土器は主に主丘頂上から廃棄されたものと見られる。南環濠下小谷の土器も南環濠13ライン付近に由来する土器が再堆積したか、南環濠・南テラスを越えて落下したものであろう。東環濠の土器は総じて散漫である。北環濠はＤ区がやや少なくが、他区は比較的密度が高く、覆土は多量の炭化物を含む。

東環濠（図版29）

絶対量が少ない上、甕・壷は口縁部破片に乏しく、多くを図示できない。（177）・（178）は器体の1/2程度が残存するのみで、まとまった個体はない。甕の（177）は口縁部に近い体部内面上端をケラケズリしているが、その他はなでられている。甕の（182）は口縁部をヨコナデしないＨ２類である。細頸壷の（184）の文様は摩耗して平行沈線文か擬凹線文か不明である。

南環濠（図版30～35）

沈線文・凹線文を用いる有段口縁有文の甕は、１条の凹線を用いる（212）１点のみである。（225）はごく浅い２条の窪みが見られるが、ヨコナデと判断する。また、（203）には口頸稜を強調する凹線状のヨコナデはあるが、文様とは見られない。口頸部の圧痕文も低調で、（196）・（215）のほかに紡錘状の１点があるに過ぎない。

「くの字」甕は口縁外面を凹線状に窪ませる例が（229）・（233）・（234）・（235）に見られる。（234）

はその内部に細条線があり、ハケ目調整具を使ったと見られるが、体部のハケ目とは条線幅が異なって間隔がごく狭い。(227) は口縁部をハケ目調整した後にヨコナデしており、H類とは異なる。(248) は口縁部外面にハケ目を残している。大型甕の (258) は体部内面をヘラケズリする。

肩部の文様は口縁部と同様に少ない。環形圧痕文のある (253) は甕とは断定できない。(256) は粗大な紡錘形圧痕で押圧する手順を欠く。

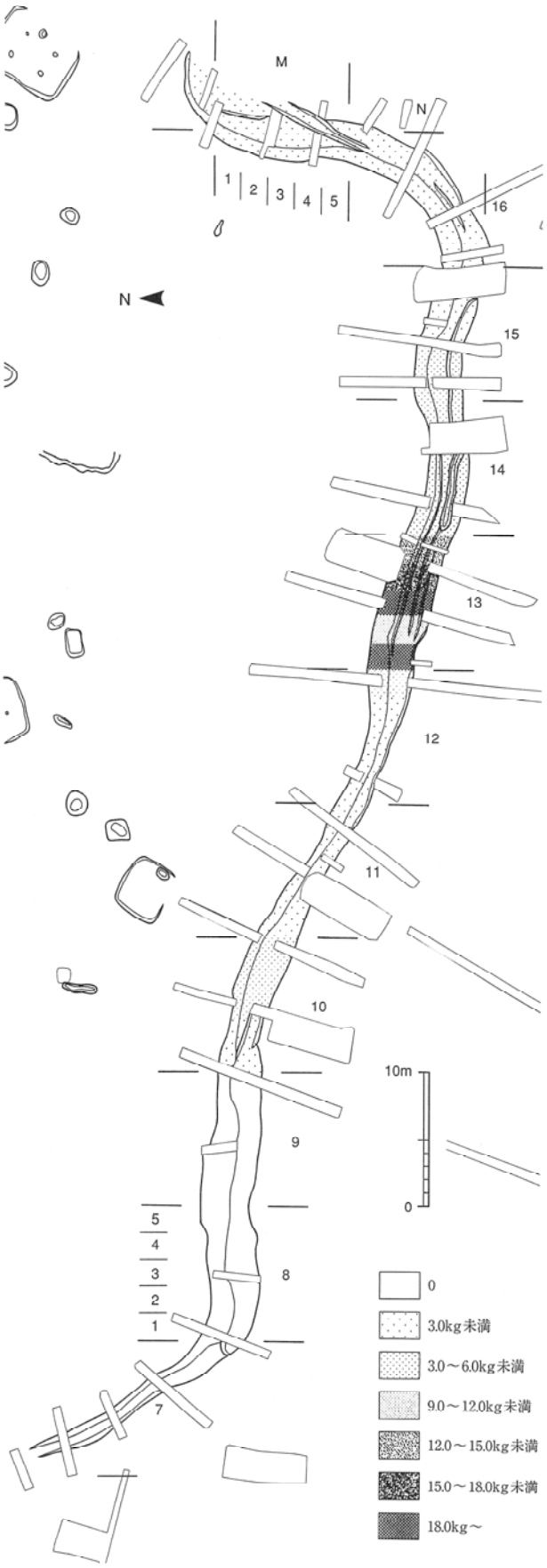
壺には一定量の有文土器がある。(261)・(262)・(263)・(302) が平行沈線文であり、(264) は凹線文Cである。図示したものに擬凹線文はない。(302) は沈線間の間隔が特に不揃いで櫛歯状工具を考えるのは不合理である。(265) は摩耗が進んでおり、文様の有無は微妙である。(266) は円形浮文が付着していた痕跡のみが残る。文様として扱わないが、(270) の口縁端面には細い沈線が1条引かれる。(303) の矢羽状文は、連続した圧痕文で描かれる (679) とは異なり、平行沈線による。

高杯・器台も甕と同様に有文土器が低調である。(312)は裏山遺跡唯一のスタンプ文のある器台で、渦文は栃木分類［栃木1987］による「D類Z字Ⅲ A_1・Mサイズ」である。(310) は脚台部かも知れない。(311) は有脚鉢とも言われる。(313) は受け部稜上に2条の沈線が引かれるが、文様としてではなく、稜強調の意味合いが強いと思われる。脚台部の (320)・(321) は脚端などに連続圧痕文をもつ。(320) は径3㎜ほどの馬蹄状圧痕であり、透孔は2孔1対3か所である。(321) はペン先に近い爪形状である。

鉢の形態はバラエティーに富む。大型の (338)・(339) はあるいは壺であろうか。(341) は結合器台を想定した図としているが、蓋結束孔を持つ壺とも思われる。(347) は (687) のように把手をもつ高杯の一部であろう。

北環濠（図版36・37）

沈線文・凹線文をもつ有段口縁甕は皆無であ



第20図　南環濠の弥生土器出土状況

る。圧痕文も線状のそれが見られる（367）に限られる。甕の中では（363）の器壁が極めて薄いこと、（370）が受け口状の「く」の字甕とも言うような厚い口縁部を持っていることが異質である。

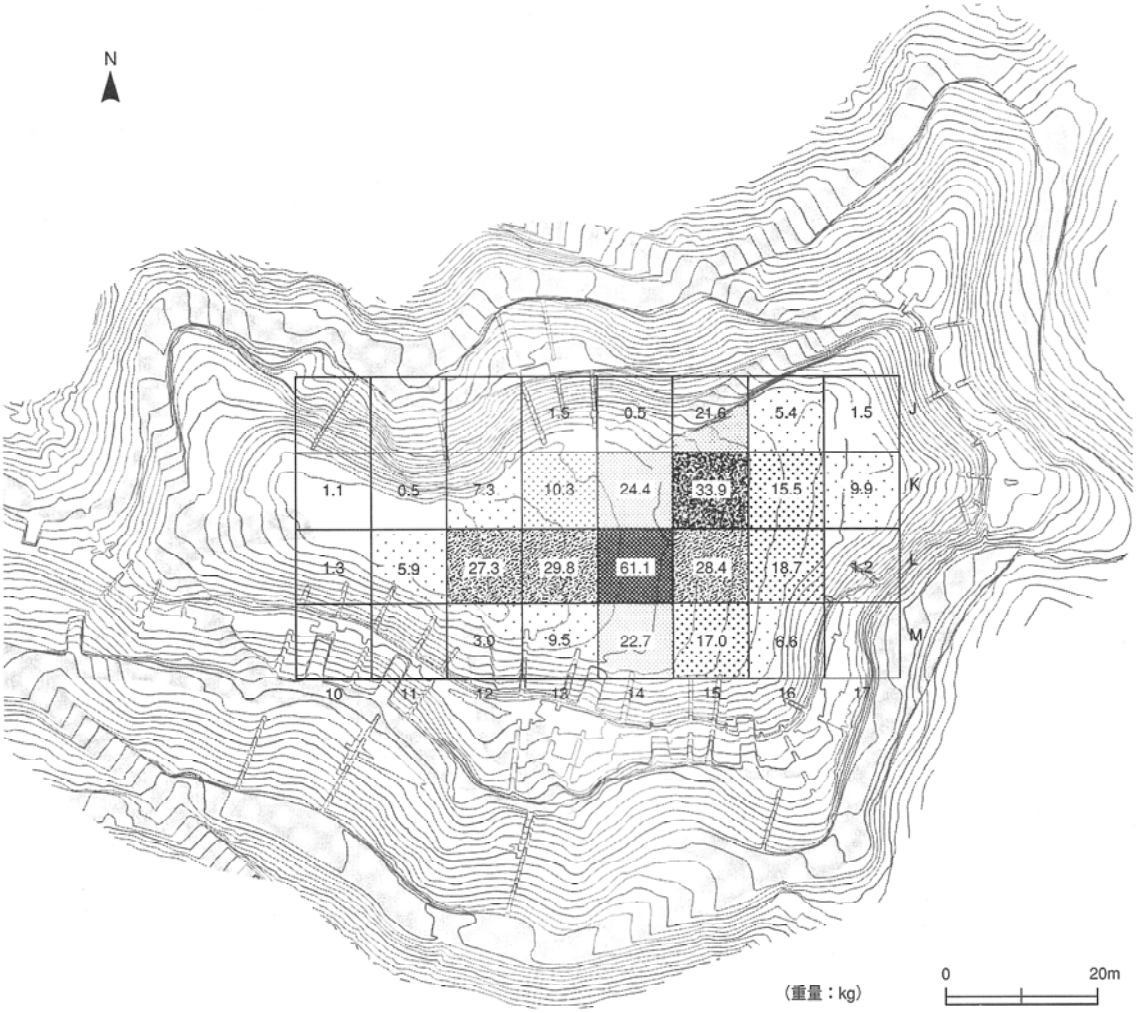
壷には若干の有文土器あがる。（386）は凹線文B、（387）は平行沈線文A、（388）は凹線文Aである。また、（388）には四角形（1×2㎜）の刺突が2段にわたって連続する。（393）は台付壷であろうか、箍状の凸帯に棒状浮文がある。（397）は口縁部中央に紡錘形の圧痕文がある稀な例である。

器台には受け部無段で縁帯に平行沈線を巡らせる（400）・（410）がある。近江・東海の系譜上にあるものだろうか。（401）は摩耗が進んで文様が明らかでない。

d）主丘頂上Ⅱ層の土器（図版37～49）

竪穴・土坑・溝覆土を除いた主丘頂上の土器重量は総計377.2kgであり、総出土重量の65％を占める。この重量は仮に甕1個体を0.8kgとした場合、471個体に相当するものである。出土状況は第23図に示すとおりで、竪穴群の内側、特に13～15ラインK・Lに濃密な分布がある。甕・壷の底部片は2,232点、835.8個体（1/16単位の底周残存度計測値）があり、遺跡における底部個体総数の約60％となる。

環濠覆土には主丘斜面に投棄された多量の土器が堆積したのに対し、これらの土器は意識して主丘頂上に残置されたものであろう。狭い主丘頂上面が廃棄物の置かれる空間であったとは思われない。



第21図　主丘頂上の弥生土器出土状況

甕形土器

図版では、有文土器ををはじめに提示している。他の地点とは異なり有文土器が一定量存在し、沈線文系にもバラエティーがある。詳細は巻末の観察表を参照されたい。紡錘状の圧痕は、(425)・(426)・(434)の文様内部に明瞭な条線が見られる。(429)の楕円形の圧痕はごく浅いものである。(555)・(556)の肩部の圧痕文は周囲のハケ目とは条線幅が異なる。

(431)・(432)は在地的変容の少ない近江系甕である。胎土は他と変わらないが、器壁はやや薄いようである。上げ底の底面は通常特に調整をしないが、(432)は底面を丁寧になでている。

「くの字」甕の形態は多様である。(499)・(533)などは、口縁端面あるいは外面の調整痕が明瞭で、擬凹線文様のヨコナデとなる。尖った口縁とするG類は、摘み上げるようにするものと外面を凹線状にヨコナデするものとがある。(509)・(528)は内面をヘラ削りする。(549)～(553)は口縁部をハケ目調整とする甕H類であるが、(551)は口縁部下半にヨコナデを施す。

壺形土器

甕と同様に、有文土器をはじめに提示した。有文土器は広口壺に偏る傾向が見られる。沈線文系の文様は多様であり、南環濠と同様に平行沈線文が多数を占める。有段口縁の口縁部には棒状浮文・円形浮文がある。その他の事項は（2）分類の項と重複するので省略する。

高杯形土器・器台形土器

有文土器は、凹線文Cである(708)、文様が不明瞭な(709)のほかは、平行沈線文が使われる。(713)は下部の3条が擬凹線文とも見られるが、上部2条はやや太くおそらく平行沈線文B1である。(710)は中央部で沈線が交錯している。(711)は沈線がやや蛇行して直線的でない。(712)は沈線間になで残された沈線が明瞭である。(714)は沈線間が狭く平行沈線文B2に近い。脚台部の(721)～(723)も平行沈線文Aである。(719)はごく細片であるが、東海・近江系器台の口縁部であろう。棒状浮文が付加される。

図版48上部には脚柱部を羅列している。脚端部は高杯・器台の判別が不明のものを(744)～(757)にまとめているが、屈曲するもの、折り返しなどで肥厚するものは高杯であろう。また、これらに台付壺の脚台部が含まれる可能性もある。器台では、東海・近江系に相当する(731)・(732)があり、このほかに筒状の脚柱、棒状の脚柱がある。

有孔鉢形土器

多孔底の(802)は唯一の例である。

その他

(778)は唯一の把手付き鉢であるが、把手部のみである。蓋(801)の紐は背の尖る船底状となる。(803)は有孔（蓋結束孔）突起が付く鉢であろうか。石川県杉谷チャノバタケ遺跡A地区CP87［栃木1995ほか］などが類例である。(804)は(72)のような把手であろうか。

e）主丘Ⅰ層の土器（図版49）

頂上に10.2kg、斜面に1.7kg、計11.9kgがある。前者には塚の盛土・溝覆土の土器も含めており、掲載したものの多数はそれらである。有文土器は甕の(809)が擬凹線文あるいは併行沈線文A、(810)が平行沈線文A、(811)が凹線文Bであり、器台の(825)は平行沈線文B1・B2併用、(828)は摩耗して不明瞭なものの平行沈線文Aである。

f）南環濠下－小谷出土の土器（図版51）

東小谷で8.0kg、西小谷で11.8kg、計19.8kgの弥生土器がある。前述したように、南環濠13ライン付近に由来する土器が再堆積したか、環濠を越えて頂上から落下したものであろう。西小谷にいくぶんか良好な破片がある。甕（853）のハケ目は外面が櫛描きしたように条線が特に深い。有文土器は（847）・（861）が平行沈線文A、（863）が擬凹線文あるいは平行沈線文A、（862）が凹線文A、（864）が凹線文Bである。パレススタイル壷の（862）に相当する文様の体部片は（863）であろう。

g）付帯調査区A出土の土器

計1.1kgの弥生土器が出土した。厚く堆積する黒色土中に土器は少なく、その下の褐色土に含まれる。北接する炭山遺跡の弥生土器はなく、これらは裏山遺跡主丘に由来する廃棄物の一部であろう。小片が多数であるため、図示は省略している。

B　縄文時代の土器

縄文土器は早期の条痕文系土器6点、中期の新保・新崎式系土器2点（同一個体）、後期前葉と思われる11点（2個体）、晩期2点（同一個体）の計21点が出土している。

縄文時代早期

（872）は口縁直下と口縁下約2.5cmを横位1条の絡条体圧痕で区画し、その間に右下がりの絡条体圧痕を配置する。いわゆる駒返り十二社タイプ［小熊1989］である。胎土には白色砂粒が多く含まれる。（873）は口縁直下の破片で、横位3条の絡条体圧痕が認められる。やはり、白色砂粒が多く含まれる。関川左岸の低丘陵地では大塚遺跡［山田1996］・裏山遺跡に北接する炭山遺跡［三ツ井1997］（いずれも上越市）でも条痕文系土器が出土している。

縄文時代中期

口縁部と胴部を区画する3条の半隆起線とそこから垂下する半隆起線で構成される。地文は単節のＲＬである。

縄文時代後期

（879）、（880）・（881）、（882）の3個体が識別できる。いずれも口縁部がやや内弯する深鉢で、地文は単節縄文ＬＲ。（882）は弥生後期・天王山式系土器の可能性が残る。

縄文時代晩期

縄文帯で三角形・逆三角形などのモチーフを描くものである。器形は判然としないが、浅鉢であろうか。

C　古代の土器

主丘頂上面と付帯調査区BのＨ1号竪穴に一定量の出土がある。前者は13Ｌ・14Ｍグリッドに分布しており、土壙墓（9号土坑）の存在に関係するものと思われる。Ｈ1号竪穴は破壊された部分が大きいものの、カマド周辺が残存していたために器体の全容を知り得る個体が比較的多い。掘立柱建物が主で、竪穴建物の検出が少ない頸城平野一帯では、数少ない一括資料である。

Ｈ1号竪穴

掲載図には土師器長甕2、土師器小甕3、須恵器杯2、須恵器長頸壷1、土師器杯1の個体が有る。そ

の他に土師器小甕底部４点、土師器椀底部３点の破片がある。須恵器長頸壷（887）・土師器杯（888）を除く個体はカマド内に存在し、煮沸具は折り重なって混在した。須恵器杯（885）は質量感のない胎土で、底面に「七」と墨書される。土師器杯（888）は口縁部内側にタール状炭化物、内外面に帯状のスス状炭化物が付着する。小甕３個体はよく近似した形態で破片では個体の判別は不能である。長甕（892）は内端を引出し、端面をほぼ水平にする特徴的な口縁を有する。須恵器長頸壷（887）は還元状態で焼成されておらず、橙色を呈する。滝寺古窯跡の製品であろう。黒色土器・施釉陶器を欠いていて詳細は不明だが、春日編年のⅥ期［春日1999］に置かれる。

主丘頂上

平箱２箱程度の土師器・須恵器がある。掲載した他に、土師器小甕（回転糸切り平底）３、土師器鍋１、土師器椀４、須恵器無台杯１の個体が識別される。長甕（901）は体・底部が接合しないが、底部片の中から胎土の混入物・色調を判断して平底とした。須恵器蓋（894）・杯（895）が春日編年のⅣ期（８世紀後葉～９世紀初頭）、その他は時期を決定する食膳具に乏しいが、同Ⅵ期（９世紀後半～10世紀初頭前後）に相当しよう。

D　中世以降の陶器・磁器

中世は珠洲焼鉢（904）が１個体のみ出土している。Ⅰ層中のほか、細片が１号・２号・３号塚の主体土坑などに混在している。内面のオロシメは中心から口縁に向かう直線と、直線から樹枝状に伸びる弧線で構成される。口縁部は薄く、外削ぎ状に面取りされる。珠洲編年［吉岡1994など］Ⅱ期（13世紀前半）に相当しようか。

近世以降は万古焼系の急須（905・906）・香炉あるいは茶釜（908）、磁器茶碗（909・910）、施釉陶器急須蓋（907）などがある。（905）には「君子之友」の刻書がある。香炉には装飾のある菱形状の文様が連続してスタンプ押印される。（909）・（910）は磁器染付けで、（909）は型紙による。

３．土製品

ａ）有孔土製品（911～948）

計44点の出土があり、Ⅱ層出土の35点は12M・15Ｊグリッド付近に集中している。第３号・４号・７号竪穴で各１点見られるほか、環濠覆土でも４点出土している。胎土に細砂を多く含むものと５㎜～８㎜程の小礫を含むものがある。軸長・最大径の値が大きくなるにつれ、焼成がよくないために端部が剥落しているものが多く、器面整形も粗雑になっている。また、９点の孔内側には長軸に平行した条痕が認められる。これは製作時に心棒が直線的に引き抜かれたことを示しており、焼成前の痕跡である。「土錘」と報告される例は多いが、機能を断定できないため形態で呼称する。なお、鳥取県青谷上寺地遺跡では、土製品が樹枝製環を通した状態で発見されており［朝日新聞社1999］、錘として使われた可能性は低いと思われる。

円筒形（911～919・927）

円柱状で軸長より最大径が小さいもの。総数は球形に次いで多い12点。図版未掲載２点。（912）・（920）を除いてはほとんど完形に近い。（914）の孔軸が孔内下方広がりで、段差がついているのは、複数の操作で穿孔されているためである。上下の端面は平坦なものと丸みを帯びるものがある。

短円筒形（920～926）

円柱状で軸長より最大径が大きいもの。および軸長と最大径がほぼ等しいもの。総数は７点。完形品はなく、上下の端部が破損して角が落ちていたり、胴部が欠損または軸方向に割れていたりするものが多い。短円筒形７点と他形態との平均孔径を比べると、前者が12㎜と最も大きい。

また、柏崎市西岩野遺跡［品田1987］で同形の土製品が３点出土し、土錘として報告されている。

球　形（928～943）

軸長と最大径がほぼ同じで球形のもの。全体数の約三分の一を占める17点。図版未掲載１点。（929）の大型のものから（943）の小型のものがあるが、いずれもほぼ正円球を呈している。（941）は不整な球形で、短円筒形にも近い形である。

算盤珠形（945～947）

胴部に稜がたつ形態。総数は６点。図版未掲載３点で完形品はない。胴部に稜がたち最大径が計測できるのは（945）の１点のみである。軸長・最大径・孔径に大きな差はなく、ほぼ同等のものと考えられる。（945）は孔軸が斜めに傾き、上端と下端では孔口の位置が大きくずれている。（946）は孔軸がやや湾曲している。

下膨形（944）

胴部最大径が軸長の中心より下方にある形態。総数は（944）の１点のみ。これは全体が滑らかに磨かれいる。上端面の孔口は３㎜、下端面の孔口は10㎜を測り、下広がりになっている。

突起のある球状（948）

突起部が残存している（948）の１点のみ。球形の体部を持っていると思われる。

ｂ）紡錘車（949）

南環濠13－３グリッドから出土した。下面周縁の一部がやや欠損しているがほぼ完形に近い。側面・上面は直線的で特に丁寧に撫でられている。下面は周縁から中心に向かってややくぼんでいる。中央部の孔の径は上面６㎜、下面８㎜である。

ｃ）盤状土製品（950・951）

15Ｊ19グリッドから同一個体と思われる破片が計22点（総重量2030ｇ）出土している。いずれも接合面が少なく、器体の形状を把握できないが、中央がくぼむ四角形となろう。厚さは最大部で47㎜を計る。図の裏面はほぼ平板に整えられているが、指撫でが粗雑で指の圧痕が残る。それに対して図正面は平滑に撫でられている。粘土塊を集めて成形され、各破片は塊状に破損している。また径20㎜以下の亜円礫を比較的多く含んでいる。

ｄ）塊状土製品

不定形で鶏卵大程度の土製品が３点ある。不要となった粘土塊か焼成されたものか、ある土製品の一部と思われる。胎土には径２㎜～８㎜前後の小礫を含み、ほぼ平らに整形された面や指撫でによって整形された面を持っている。

4　石器・石製品

石器・石製品の大半は、主丘頂上面Ⅱ層からの出土である。Ⅱ層は縄文時代から古代の遺物包含層であるため、砥石の一部に古代以降の可能性を残すものの、基本的に縄文時代・弥生時代の所産である。

中世塚群に関係する石製品は、３号塚の数珠・加工痕のある礫、１号塚の石仏、各塚の墨書礫がある。

A　縄文時代・弥生時代

（１）石　器

ａ）砥　石（１～64）

長さ・幅・厚さのいずれかが計測できるもの63点を全て図示し、かつて石剣としていた（29）を砥石に加えた。（33）は磨耗面が明瞭でないが形状から砥石に含めた。線状溝のみで磨耗面がない（62）も砥石とした。図示したほかに57点の砥石破片（磨耗面のある石片および磨耗面のない凝灰岩石片）がある。このうち25点は（25）・（27）・（28）の石質に近似しており個体数として計量できないが、（29）のように多角柱の砥石が数個体あるようで、遺跡に存在した個体数は70点あまりと見られる。かつて事業団年報［小池1997］で（29）・（107）をもって石剣２点と報告したが、（29）を砥石と改める。

図示した64点のうち、竪穴から出土したものは５点で、その他は包含層・環濠覆土などから出土している。図示しない破片に竪穴出土のものはない。前述のように古代以降の砥石の混入を全否定できないが、仮にあるとしてもごく少数で砥石は基本的に弥生時代後期の所産と考えている。砥石の数は北陸の弥生後期の遺跡としては突出したもので、四角柱状砥石の多出は特筆される。実測図は石材を分離して掲載しており、（１）～（29）が凝灰岩、（30）～（62）が砂岩、（64）がホルンフェルス、（64）が泥岩である。

凝灰岩製の砥石は素材礫の円みを残すものが多く見られ、四角柱状を呈するものも当初から定型的に成形されたものではなく、四角柱状を意識した擦り切りと、使用の結果による。（17）～（19）は円礫を切断、（24）は敲打成形して使用されている。また、破損には使用による負荷、廃棄後の自然営力のほかに、意識的な形状の改変や砥面の更新を目的にした敲打・分割もあるかと思われる。四角柱状砥石の用途は主に鉄器研磨と言われているが、凝灰岩製のそれは鉄製刃器の研磨に特化したものであろう。鉄製刃器によると見られる擦痕以外の線状溝、あるいは切断の痕跡は多くの個体で確認できる。ただし、（11）・（27）・（28）には断面半円形の溝を持っており、玉砥石としても併用されるようである。弥生後期の玉穿孔には鉄製針が使用されるという報告があるが［冨山1997など］、（13）には右側面に１ヵ所、裏面に３ヵ所、径１㎜の針状工具による浅い穿孔がある。

砂岩製砥石は六面体に整った小型品が少なく、四角柱状砥石は概して大型である。また、砂の粒子も中粒～粗粒（一定の数値基準に従っているわけではない）である。明確に刃器の切断痕と判断できる例は（46）のみで、擦痕以外の線状溝も石材の粒子が粗いために成因を判断できない。断面半円形の滑沢な溝を持つものに（45）・（48）・（50）・（52）・（53）・（56）・（59）の７点がある。このうち（59）のみ溝が直線的で一定した幅・深さを持つ。（59）を除くこれら有溝砥石は四角柱状の形態であり、玉および鉄製刃器の研磨を用途にしていると見られる。（55）・（57）・（33）は極めて軟質な石材であり、指頭の接触によってさえ消耗する。ともに葉理面を利用して成形されている。（59）は周縁が殻状に剥落している。（60）・（64）は円礫が直接使われている。（66）は２塊に分離した後、上半のみが使用されている。

正面の磨耗面は節理面である。裏山遺跡は研磨される鉄製刃器・玉と、これらを研磨する砥石が共に在り、鉄の使用と玉作の関係が窺われる好例であると言える。

b）軽石製研磨具（65～165）

計165点、総重量1798ｇを計る。そのうち遺構内出土は27点を数える。軽石の石質は均質な海綿質で鉱物斑晶を全く認めないものである。面的に磨耗しているものが多いことを重要視して研磨具とした。研磨具も砥石と同義ではあるが、刃器や玉の研磨を想定した砥石とは区別した。大きさ・形状・重さに一貫性がなく、穿孔されているものについても孔が穿かれた方向や場所に一貫性がない。またひとつの軽石に複数の痕跡が見られるものが多いため分類を行わず、観察表に個々の詳細を掲載したので参照されたい。

器面に認められる痕跡には以下のものがある。

面状磨耗痕

表面が平らに磨耗した痕跡。自然面か人為的磨面かの判別がつきにくいものが多くあるが、掲載中の57点については人為的磨面を持つものと判別してあげている。全面に渡って磨耗痕がみらる（91）・（112）は筋状擦痕、（123）・（124）は刺突孔、（135）は溝状擦痕と刺突孔などの他の痕跡も見られる。また多面体を呈している。その他は、局部的に磨耗したり、角が磨耗して丸みを帯びていたりするものがほとんどである。（161）の側面にある面状磨耗痕はやや内側に湾曲している。

溝状擦痕

円柱状物体の摩擦によってついた擦痕。断面は半円状、あるいは弧状を呈する。掲載中19点に見られ、形状は丸みを帯びていたり面状磨耗痕が見られたりする。（89）は全面に面状磨耗痕があり、側面に最大幅９㎜最長23㎜の擦痕がある。また（111）には最大幅８㎜最長23㎜、（117）には最大幅12㎜最長39㎜、（147）には幅３㎜で長さ19㎜、20㎜、22㎜の同様の痕跡が見られる。

筋状擦痕

鋭利な刃先などによってついた擦痕。断面は最深部が細くなり角張っている。掲載中27点に見られる。（137）には最大幅８㎜最長32㎜最深６㎜、（151）には最大幅３㎜最長62㎜最深５㎜の太く深い擦痕がみられる。（126）は細く浅い擦痕が多数見られ、その擦痕はほぼ一方向に向いている。（161）は擦痕が一直線上にならず割れた後に別々に使用されている。

刺突孔

錐状・箸状の物体で刺突された孔。43点に刺突孔が見られる。（149）は長軸35㎜短軸22㎜最深20㎜を測る孔があり、繰り返し刺突された痕跡がみられる。またこのほかに大小合わせて34個の刺突孔がみられる。（156）には最大径10㎜最深10㎜、（165）には最大径30㎜最深23㎜の孔が穿たれている。いずれも、角がとれて全体的に丸みを帯びている。

円錐形穿孔

口径が比較的大きく浅いもので、回転運動や抉り取りによるもの。（133）・（152）・（164）の３点に見られる。（133）の側面には最大径10㎜最深６㎜、底面に最大径15㎜最深20㎜と最大径10㎜最深10㎜の円錐形穿孔がある。（152）の正面には最大径９㎜最深９㎜のものが刺突孔と隣接してある。（164）には最大径12㎜最深23㎜を測る大きい穿孔がある。

他に、回転穿孔が（131）の１点のみにある。回転穿孔は円錐形穿孔よりも口径が小さく、針状の細い物体の回転運動によって穿たれた孔である。形状は不定形であり穿孔のある側面以外は面状磨耗痕が見ら

れる。穿孔は３点あり、それぞれの最大径：最深の数値は、２㎜：５㎜、２㎜：３㎜、２㎜：2.5㎜を測る。３点の間隔は12㎜・９㎜・11㎜で三角形状に並んでいる。いずれも孔口が広がり中で先細している。孔内は平滑になっている。

また（138）・（146）には刃物等による切削部分があり、平らになっている。（122）・（132）にも刃物等による切削痕があるが、Ｖ字状に切削され大きくくぼんでいる。軽石製研磨具は弥生時代後期後半の土器群とほぼ同じ層序であり、同時期に属すると考えられる。

ｃ）線状溝を有する石器（166）

実測図下半に一条のくびれが全周を廻る特異な形態である。くびれのほかに幅１～２㎜ほどの線状の溝が多数認められる。線状の溝は、くびれの上にも形成されており、くびれと溝の切り合いは「溝が後」ということになる。また、溝の位置・方向に規則性は認められず、その性格は不明である。あえていえば、砥石に認められる線状の傷と共通するが、粗粒の安山岩を用いている。他の砥石と同様に金属製品を対象としたと考えるのであれば、不適切な石材選択といえる。

ｄ）磨石類（167～169）

磨石類は、楕円形を呈する円礫の長軸両端に敲打痕が観察される。この敲打痕により、両端には平坦面が作出されている。また、（167）・（168）には凹痕が観察される。凹痕は、より平坦な表裏面のほか側面にも観察され、金属でえぐりとったかのような滑らかさがある。このような凹痕を有する磨石類は、縄文時代に一般的な凹痕と比べると特異であり、弥生時代の所産である可能性を指摘したい。

ｅ）尖頭器（170・171）

２点について尖頭器と判断した。（170）は、チャート製の縦長剥片を素材とし、その打面側を先端部に充てている。二次加工は、裏面から表面に向かう片面加工が主体であるが、先端右側のみは両面加工になっている。表面から裏面に向かう加工は、器厚や器体の反りを調整した可能性がある。このような形態は、旧石器時代の尖頭器に類例が求められる。しかし、単独出土であり石器群として確実に捉えられないこと、縄文時代の石器でないことを否定できないことから、その可能性を指摘するに留めたい。なお、裏山遺跡が立地する段丘には、ローム層が確認されており[地団研新潟支部高田班高田平野団体研究グループ1997]、旧石器時代の石器が出土したとしても矛盾しない。

（171）は、研磨痕を伴う尖頭器である。ガラス質安山岩製の剥片を素材としている。二次加工は、裏面から表面に向かう急角度の加工が左右両側面と下面に観察されるほか、側面から裏面にむかう加工が認められる。その結果、作出される横断面は台形を呈する。前者の加工により、鋭利な先端部が作出され、後者の加工により器厚と器体の反りが調整される。その後、器体の広い範囲に研磨が加えられる。この研磨は、剥離によって成形された形態を大きく修正するようなものではなく、横断面を菱形に近付け両側縁を鋭利に仕上げようとする意図は見受けられない。したがって、「鋭利な尖端と両側辺とを有する狭長な刺突用打石器で、讃岐石を用い両面ともに入念な打調を加えて中央部を鎬状に高くし断面菱形を呈するを常とする［末永ほか1943］」という弥生時代の尖頭器（石槍）においては、特異な断面形態といえる。一方、平面形態においては、「畿内式尖頭器」「打製大型尖頭器」「石槍状石器」などと呼称される形態［平井1991］と類似し、石材についても、畿内で一般的に使用されるサヌカイトと同質のガラス質安山岩が充て

られている。しかし、裏山遺跡出土例は、畿内の尖頭器より小ぶりである。このように、畿内の尖頭器とシルエットが似ているものの、断面形態・大きさにおいて顕著な相違点が認められる。研磨痕の存在を考えられば、磨製石剣の未完成品の可能性を指摘しておきたい。なお、先端から基軸と平行するように観察される剥離痕は、研磨痕以降の剥離痕であり、衝撃剥離痕の可能性がある。研磨痕が器体の全面を覆わないものの、道具として使用されたのかもしれない。

f）石鏃（172～175）

石鏃は、3点出土した。そのうち（172）・（173）・（174）がチャート製である。基部の抉りが顕著な（172）・（173）は、凹基無茎鏃［鈴木1974］に分類される。（172）がより寸詰まりであるのに対し、（173）は縦長である。両側縁の形態も、（172）が緩いカーブを描くのに対し、（173）はより直線的であり対照的である。（174）は、下半を欠損しており基部の形態は不明であるが、尖頭器の先端部と考えられるかもしれない。

また、（175）は黒曜石製で、石鏃の未完成品と考えられる。幅広の剥片を、主要剥離面の剥離軸が基軸に対して直交するように用いている。左側縁は裏面から表面に向かう平坦な片面加工により平面形態を整え、右側面は折断により成形している。素材の形態・大きさ・用い方および二次加工の在り方において、石鏃の未完成品とされる資料と共通点が認められる。

g）磨製石斧（180～185）

（181）・（182）は、偏平で側面の面取りは明瞭ではなく、横断面形は凸レンズ状を呈する。刃部は両刃に近いが片刃を意識して研磨しているようであり、平面形は円刃である。また、刃部には使用痕と考えられる微細剥離痕やつぶれが認められる。この2点の磨製石斧は、岩野E遺跡［小池1986］等における縄文時代早期の出土例と共通する。本遺跡からも縄文時代早期後半の土器片が出土しており、縄文時代早期に属する可能性がある。

（180）は、偏平で側面を明瞭に作り出したいわゆる定角式磨製石斧である。刃部と基部の幅に大きな差はなく短冊形を呈す。刃部は両刃の平面形は偏刃で、使用痕と考えられるつぶれが主に刃部右側に認められる。こういった形態は、長者ヶ原遺跡［木島1994］、寺地遺跡［阿部1987］、和泉A遺跡［荒川・加藤1999］等から出土した中期の磨製石斧に類似する。本遺跡からも縄文時代中期前葉の土器片が出土しており、縄文時代中期に属する可能性がある。

（183）は、小形の定角式磨製石斧で刃部を欠損する。全体的に風化が著しく、研磨の方向も明瞭でない。

（184）は、閃緑岩製の磨製石斧である。刃部は両刃で、使用痕と考えられる顕著な刃潰れや剥離痕が認められる。この使用の結果、刃部平面形は直刃に近い状態を呈する。基端部は敲打により平坦に整えられ、基部にも敲打痕を残す。側面は、刃部付近により明瞭な面取りが認められる。これら形態的特徴や、閃緑岩を用いている点において、信州方面の弥生時代の磨製石斧と共通するところが大きい。

（185）は、いわゆる環状石斧である。平面形は直径11.5㎝の正円で、その中央に直径3.2㎝の孔が穿たれている。表裏面ともに中央孔を中心として概ね放射状の方向に研磨されている。中央孔の縁には穿孔の際の敲打痕が認められる。刃部は両刃で使用痕と考えられる細かいつぶれや剥離痕が全周で認められる。

環状石斧の形態は、概ね直径11㎝前後、厚さ2㎝前後、中央孔2㎝前後で、時期・地域による変化はあまりない［日下部1983ほか］。全国的に分布するが、特に長野県では多く出土している［小林1988ほか］。地

域的に見ると東日本に縄文時代資料が多く、西日本に弥生時代資料が多く見られるようである［日下部1983］。使用方法は中央孔内部に見られる光沢や刃部に直交する磨耗痕から、中央孔に柄を装着して使用していたようである［井藤1986ほか］。用途については武器や斧、土掘り具などの諸説があるがはっきりしていない［平井1991ほか］。

h）その他の剥片石器（176～179）

（176）は、チャート製の楔形石器である。上端には「表裏に細かい砕屑の剥落した痕跡が連続的に認められ［岡村1976］」、縦断面が楔形を呈する。下端は欠損しているが、上端と対置する剥離痕が一部に認められ、楔形石器の定義に相当する形態と考えられる。薄手な形態は、両極打撃により作出されたものと考えられる。

（178）は、片岩製の両面調整石器である。節理面に沿って板状に割れた薄い剥片を素材としており、その一辺に両面調整が施されている。作出された刃部の平面形態は、直線に近い外弯形を呈する。このような形態は、上越地方では縄文中期初頭の和泉A遺跡下層石器群で多数出土しており［荒川・加藤1999］、共通性が窺える。流理構造という石材がもつ物性を巧みに利用した特徴的な石器である可能性がある。

（179）は、ガラス質安山岩製のスクレイパーである。実測図の表面下側に、直線状の刃部が様々な大きさの剥離痕により作出され、鋸歯縁状を呈する。刃部は、様々な大きさの剥離痕の組み合わせから形成されており、刃部右側の外弯形をなす範囲には微細剥離痕が加わっている。なお、表面・右側面に認められる剥離面は、剥片剥離時の作業面である可能性が高く、石核から転用されたものと考えられる。

（177）は、微細剥離痕を有する剥片である。黒曜石製であり、1㎜ほどの剥離痕が連続的に分布する。

i）石　核（186）

チャート製の石核1点が出土した。180度の打面転位が行われ、打面と作業面を頻繁に入れ換えている。打面調整や頭部調整といった剥片剥離のための入念な準備を行わず、適当な打角を見つけては剥片剥離を繰り返している。こうして得られる剥片は、作業面の形状の観察から幅広で寸詰まりであることがわかる。

（2）玉作関連資料

a）翡翠原石（187～195）

翡翠の原石が9点出土している。原石と一括しているものの、ここには様々な資料が含まれる。（187）～（190）・（194）は、明瞭な剥離痕が認められず、不規則に破損している。そのうち、（187）・（189）・（190）は、黒色に変色し、ひび割れするなど明らかな被熱の痕跡が認められる。（188）・（191）・（213）などについても、明瞭ではないが被熱の可能性を窺うことができる。原石の分割に熱が利用された可能性がある。また、分割に際しては、節理面の巧みな利用（191）や、擦切技術の利用（213）といった、他の石材にはない工夫が認められる。このような工夫は、硬度6.7～7度と固く、繊維状結晶を呈しているため極めて強靭であるという翡翠の性質をすでに知っていた表れということができよう［寺村1987］。また、原産地から離れた裏山遺跡で、翡翠がこのようなかたちで多数出土したことは、遺跡の性格を考える上で興味深い点である。

b）剥片剥離から研磨に至る資料（196～205）

剥片剥離から研磨に至る玉作の製作過程を示す資料である。（201）がチャート、（202）が翡翠、（205）が凝灰岩であるほかは、すべて緑色凝灰岩である。特に緑色凝灰岩においては、剥片剥離から完成品まで一連の資料が揃っており、玉作の在り方を窺うことができる。

（196）は、石核である。（199）も、左側面に作業面が認められ、石核としての一面も窺うことができる。剥片剥離の様子を最もよく理解できる（196）からは、打面転位を頻繁に行い、80度ほどの打角を準備していることがわかる。この石核からは、横長の剥片が得られているが、一定の形態を連続的に得ているわけではない。弥生時代中期の管玉製作において一般的な擦切は、翡翠以外の石材には認めらず、柱状剥片のような斉一的な形態を作出していない。したがって、様々な形態の剥片が素材となっている。

それらの剥片は、折断（197）や調整剥離（199）・（203）により柱状に整えることを基本とするが、原石や剥片を直に研磨する例（195）・（202）・（203）・（204）・（205）も認められる。すなわち、調整剥離による整形を経ずに研磨をしている場合もある。とはいえ、（203）と（204）のように、調整剥離の有無に関わらず、台形状の断面形態が作出されているという共通点が認められる。製作者が、適当な形態と判断すれば、研磨を開始している様子が理解される。これらの資料は、基本的には縦長を意識した形態であり、管玉の製作過程を示す可能性が高い。

c）管玉（206～211）

完成品4点（208）～（211）と未完成品2点（206）・（207）がある。完成品のうち、（208）・（209）が2号竪穴、（211）が4号竪穴からの出土である。

（206）は、赤色のチャート製で、多角柱状の未完成品である。一部には研磨段階以前の剥離痕が残っており、調整剥離により断面形を整えてから研磨に移行したことがわかる。ちなみに、（201）の剥片は、この未完成品の石材とよく似ており、赤色のチャートが玉作に用いられていたと考えられる。

（207）は、穿孔を開始して間もない段階を示す資料である。あるいは、孔をあける位置を窪ませた段階であるかもしれない。いずれにしても、径が小さく、極めて細い工具（針）を用いていることがわかる。断面形は、（206）より円形に近付いているが、完成品と比べると不完全である。側面には平坦面が残され、断面形は多角形を呈する。円形に仕上げる前段階で穿孔を開始しているが、残された平坦面がストッパーとなり、穿孔に有利な条件をもたらしたのかもしれない。

孔が貫通している完成品（208）～（211）は、直径3～5㎜ほどとバラエティーに富むが、断面は整った円形に仕上げられている。孔径は、すべて1㎜ほどであり直径とは対照的に個体差がない。中でも直径3㎜に対して直径1㎜の孔が穿たれている（210）・（211）は、穿孔が研磨の最終段階に先行して行われたことを示唆している。研磨に伴う線状痕は肉眼ではほとんど確認できず、細かな粒子の砥石で仕上げられていることがわかる。

d）勾玉（212～216）

完成品1点（216）と未完成品4点（212）～（215）がある。（212）が緑色凝灰岩であるほかは翡翠製である。平面D字形に整えられた特徴的な形態（212）～（214）は、勾玉の素材と考えられる。（215）は、この素材と完成品の中間の過程を示している。これは、素材の中央と実測図左側縁に接する位置の2ヶ所

に穿孔されている。前者は最終的に活かされる穿孔と考えられるが、後者は勾玉特有の「くびれ」を作出する一過程と考えたい。すなわち、穿孔によりくびれの位置を決定し、その周囲を研磨して整形した可能性がある。大きさをみても、(215) は (216) の未完成品のようではあるが、多量に製作している遺跡の例を検討して製作工程を復原する必要があろう。唯一の完成品 (216) は、小形ではあるが、優美な形態である。穿孔は (215) と比べると孔径が小さく、むしろ管玉の孔径に近い。

e）裏山遺跡における玉作

裏山遺跡からは、管玉と勾玉の製作過程を示す資料が出土した。これには、原石や石核から完成品に至る一連の過程を示す資料が含まれるが、その数は少ない。一方、各過程の資料が揃っているのにも関わらず、製作時に生じる剥片や砕片はほとんど出土していない。遺跡内で積極的に製作していたのであれば、製作時に生じる剥片や砕片といった「残滓」が多量に残されるはずである。また、多量に出土している砥石についても、金属器の研磨に使用された可能性が高く、玉作との関連性を積極的に認めることはできない。すなわち、裏山遺跡から出土した玉作関連の資料は、搬入された形状に近い可能性が高い。もちろん、すでに搬出されてしまった資料の存在も予想されるが、搬入形態や消費遺跡における玉作の作業範囲を検証する上で貴重な資料といえよう。

（3）ガラス小玉（217～222）

ガラス小玉が、6点出土した。そのうち1号竪穴から2点（217）・(218)、4号竪穴から3点（219）・（221）・（222）出土している。色調は、透明感のあるスカイブルーであるが、気泡が多く存在する。弥生時代の小玉のほとんどすべては、「タネ」を芯線にまきつけて芯線を平行する方向にのばし、管状にしたものをカットして製品化したといわれており、実際、気泡が孔に対して平行する［木下1986］という。実体顕微鏡下で気泡を観察したが、そのことが明瞭にわかる資料を確認できなかった。むしろ、鋳型製作［清水1992］等、別途の製作技法による可能性が高い。大きさは、直径3～4㎜、孔径1～2㎜ほどと小さく、孔の両端は研磨により平坦面が作出されている。研磨によって整形されたものと考えられる。

（4）礫

主丘頂上Ⅱ層で2,748点、総重量2241.4kgの礫が出土している。重量の分布を第2表に示した。環濠でも、東環濠に84点、181,3kgの礫がある。南環濠・北環濠でも礫は出土しているが、地山礫層中の礫と区分しえないので、記録を欠いている。これらの礫は他所から運搬されたのではなく、おそらく環濠の掘削によって産出したものであろう。

1号竪穴では19点の礫の集積があった（22頁参照）。

第2表　主丘Ⅱ層の礫重量分布

重　量(g)	点 数	比 率
0~200	1720	62.6%
501~1000	400	14.6%
1001~1500	280	10.2%
1501~2000	85	3.1%
2001~2500	56	2.0%
2501~3000	70	2.5%
3001~3500	36	1.3%
3501~4000	16	0.6%
4001~4500	11	0.4%
4501~5000	14	0.5%
5001~5500	12	0.4%
5501~6000	5	
6001~6500	3	
6500~7000	5	
7001~7500	8	
7501~8000	3	
8001~8500	4	
8501~9000	3	
9001~9500	2	
9501~10000	4	
10001~10500	1	
15001~11000	0	
11001~11500	2	
11501~12000	0	
12001~12500	1	
12501~13000	3	
13001~13500	3	
13501~14000	0	
14001~14500	0	
14501~15000	0	
15001~15500	1	
計	2748	

B　中　世

a）数　珠（223～247）

3号塚主体土坑覆土の水洗で23点、3号塚表面で2点、計25点の水晶製数珠が見つかっている。水洗分の形状は球状22点、滴状1点である。表面の2点はいずれも球状である。主体土坑中の数珠の詳細な位置は不明である。塚主体土坑は掘削を受けていないので、表面の2点は埋納されていたものの流出ではない。

塚の主体土坑から出土した数珠玉は、（246）が滴状であるほかは、すべて球状を呈する小珠である。小珠は、直径6～9㎜ほどで、その中央に直径1.5㎜ほどの孔が穿たれている。（247）は、長さ11㎜、幅7㎜を測り、最大径が一端に偏って滴状を呈する。これらは、1連の数珠であったと考えられる。

b）加工痕のある礫（248）

10㎜ほどの幅の中に溝が認められる。溝の幅は、3㎜ほどの単位で刻まれており、断面形からは極めて鋭利な道具で彫られていることがわかる。金属製の鑿のような道具で加工されたと想定される。

c）石　仏（249）

1号塚掘削土（盗掘土）中の礫に紛れて出土した。1号塚に設置または埋納されていたものと思われる。

d）墨書礫・礫（図版137～139）

『妙法蓮華経』などが墨書された礫が出土している。これらは「礫石経」［松原ほか1994］と総称されるものである。塚造築に用いられた礫を数量化する作業中に墨書礫を発見し、すべての礫を見直した結果、計46点の礫に墨書が確認された。内訳は1号塚掘削土および葺石の26点、2号塚葺石の2点、3号塚主体土坑の3点、帰属する塚が不明の15点である。2号塚主体土坑にはない。

最も出土数が多い1号塚は、いわゆる盗掘行為によって、あるいは松根油採取等の抜根作業によってか、礫が大きく移動しているものの、おそらく大半は塚主体土坑に埋納されていたものであろう。また、掘削土の堆積する1号塚南側は、葺石と掘削土中の礫を分離することができなかったため、それらを区分しなかった。出土数の少ない2号塚・3号塚葺石の墨書礫は、1号塚からの移動によることも考えられる。3号塚主体土坑は、これを被覆する礫と主体土坑上半に円礫・亜円礫があり、墨書礫の出土地点を特定できない。帰属する塚が不明の15点は、塚群の礫を数量化後に一括して遺物として持ち帰り、埋文事業団で墨書を追加確認したものであるが、出土数の比率からして、これらは1号塚に関係する可能性が高い。

礫の数量は、1号塚計1,816点734.5kg、2号塚主体土坑295点110.8kg、2号塚葺石936点347.4kg、3号塚主体土坑1,070点410.2kg、3号塚葺石1,099点356.8kg、総量5,216点1,959.7kgである。なお、各墨書の釈文は第Ⅴ章に掲載する。

5　金属器・銭貨

A　弥生時代

鋤先（方形板刃先）6点・鉄鏃3点・鉈1点、不明製品1点の計11点である。（255）のみ1号溝覆土、

第３表　弥生時代の鉄器一覧

番号	種別	出土地点・層位	幅（㎜）	長さ（㎜）	厚さ（㎜）	備　　考
250	鋤先Ａ	16Ｌ・Ⅱ	（刃）82，（基）72	49	1	
251	鋤先Ａ	14Ｍ・Ⅱ	（刃）75，（基）68	41	1	
252	鋤先Ａ	15Ｋ・Ⅱ	58	41		
253	鋤先Ａ	16Ｌ・Ⅱ	57	45		
254	鋤先Ｂ	14Ｌ・Ⅱ	（刃）53，（基）50	62		
255	鋤先Ｂ	14Ｌ・１号溝	（刃）47，（基）48	49	1.5	背面は錆膨れが著しい。
256	鉄鏃	15Ｊ・Ⅱ	22	38	2	有抉単孔。
257	鉄鏃	12Ｌ・Ⅱ	10	45	（茎）3.3	身部上半を欠失。
	鉄鏃	12Ｌ・Ⅱ				257の銹塊中に存在。
258	鉈	15Ｌ3・Ⅱ	17	59	（茎）4	あるいは刀子か。
259	不明	15Ｌ・Ⅱ	19	40	1.5	刃器の一形態か。

他はすべてⅡ層からの出土で、Ⅱ層の砥石と同様、厳密に弥生時代後期と断定できるものではない。調査担当者の不留意もあり、いずれも出土状況が不明である。詳細を下表に記す。実測図は保存処理前の状態を、Ｘ線撮影像を参照して表現している。

新潟県域で出土している弥生時代の鉄製品は、橋本によれば97年12月現在で９遺跡18例を数えている［橋本1997］。これには具体的な遺跡名・遺物名の提示を欠いているが、最近の成果を含めて確認できる鉄器を第４表に列記する。

発掘調査中は、鉄器の存在には気づいていたが、弥生時代のそれという意識を全く欠いていたため、鉄器を発見する努力がなされなかった。福井県林・藤島遺跡の膨大な鉄製品は［冨山1997］、土壌の水洗と磁石選別によるものであり、弥生時代後期の遺跡調査は、鉄の存在を前提に行う必要があろう。焼土や赤化した床面についても、鍛冶工房の可能性を考える必要があり、３号竪穴の焼土などに十分注意を払う必要があったと思われる。

計11点という数字は、月影式期の100点ほどの鉄器が出土している石川県塚崎遺跡［林1999］、玉作用の錐が多数ある福井県林・藤島遺跡の突出した２例を除けば、北陸全域を通しても１遺跡としては多数であり、特に鋤先６点の出土は最多である。鋤先には幅広のＡと、幅・長さがほぼ同等のＢがある。基部縁辺の観察では、鋤先の折り返し部はあまり弧を描かず角状に整って鍛折されている。（250）は基部側面が明瞭に観察できる遺存度のよいものであるが、鉄板の厚みは１㎜程度である。多量の砥石の存在は、鋤先が

第４表　新潟県域における弥生時代の鉄器一覧

番号	遺　跡　名	遺　　構	種　別	文　　献	備　　考
1	糸魚川市後生山遺跡	１号住居跡	刀子１点	木島 1986	
2	上越市下馬場遺跡	１号竪穴	鉄鏃１点	小池 1998	未報告、県教委保管
3	〃	２号竪穴	鉄鏃１点	〃	〃
4	〃	７号竪穴	鉄鏃１点	〃	〃
5～8	〃	13号竪穴	鉄製錐４？点	〃	〃
9	新井市上ノ平・矢代山遺跡	１号住居址	刀子１点	駒井・吉田 1962	
10～13	〃	１号・２号・24号住居址	不明４点	〃	
14	三条市経塚山遺跡	３号住居址	板状鉄斧１点	金子 1999	
15	和島村姥ヶ入南遺跡	墳墓	袋状鉄斧１点	菅井 1998・和田 1997	
16	〃	〃	鉄剣１点	〃	
17	和島村奈良崎遺跡		刀子１点	春日 2000	未報告、県教委保管
18	新津市八幡山遺跡	２号方形周溝墓主体部	鉄剣	渡辺 1995	
19	〃	ＳＩ13号住居址	鉄鏃	川上 1994	未報告、新津市教委教示
20・21	村上市砂山遺跡		不明２点	県埋蔵文化財カード	
22～32	上越市裏山遺跡		11点	本書	

研磨される刃器であることを意味するのであろうか。鉄族の1点は中部高地の磨製石鏃で多く見られる有抉単孔のものである。

一方、弥生時代と特定できる石器は、磨石類３点（167～169）、尖頭器１点（171）、磨製石斧１点（184）、環状石斧１点（185）である。70点あまりの砥石は玉作の砥石として使われたものもあろうが、それらは基本的に鉄器の保守具であり、165点の軽石製研磨具もそれ自体独立した工具ではないと思われる。

B　中　世

鉄製品は１号塚掘削土の火打鎌１点、３号塚主体土坑の火打鎌１点・刀子１点・不明１点がある。

１号塚の（262）は腐食が進んでいるが、X線撮影では火打鎌様の像が認められる。３号塚主体土坑は水洗を前提に覆土を掘り出したので、（260）の火打鎌以外は詳細な出土位置が不明である。（260）は葵葉形・三叉状の孔を持つ。（261）は端部が上方に反りあがる山形のもので、火打鎌にも類似するが、底縁が（260）・（262）のように張りだした孤を描かない。県内の火打鎌出土例は妙高高原町関川谷内遺跡の1点（９～10世紀）［小池・江口1998］、新井市旧得法寺跡の１点（中世？）［石川1998］がある。黒埼町釈迦堂遺跡［関ほか1973］にも類似の鉄製品がある。（263）は両関の刀子で、鋒・柄を欠失する。

銅製品は２号塚主体土坑上面で出土した柄頭（264）１点がある。楕円形の舟底状で装飾はない。

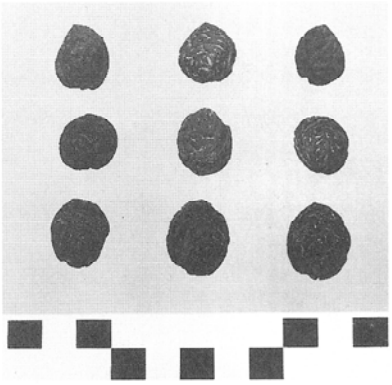
C　近世・近代

寛永通宝１点、一銭銅貨２点がある。銅貨の鋳造年は明治十三年、大正二年である。前者裏面の上部には「百枚換一圓」とあり、正面の文様は龍。後者の正面文様は旭日である。

6　炭化種実・種実痕

Ⅱ層および環濠覆土から、モモ種実12点・クルミ種実6点が出土している。詳細は第５表のとおりである。Ⅱ層は縄文時代～古代の年代幅をもっているが、種実はいずれも弥生時代の所産と考えられる。モモは魔除けの果物と言われ、『記紀』にも伊邪那岐が黄泉の国から逃げる際に追ってに桃を投げつけたという記述がある。

イネのモミ圧痕は24点の底部に総計31か所（１か所19点・２か所４点・４か所１点）が認められる。そのうち、遺構出土の３点にそれぞれ１か所の圧痕がある。図版140に写真を掲載した。



第22図　モモの炭化種実

第５表　炭化種実一覧

番号	種実名	出土地点・層位	状態	計測値（mm）	番号	種実名	出土地点・層位	状態	計測値（mm）
1	モモ	南環濠15-1, 12・13層（BT7）	完存	長19.8, 幅15.9	10	モモ	南環濠13-4, ５層（BT６）	完存	長16.9, 幅17.0
2	クルミ	南環濠15-1, 12・13層（BT7）	約1/6	－	11	モモ	南環濠13-4, ５層（BT６）	一部破損	長22.1
3	クルミ	南環濠11-4, 床面直上	約1/2	－	12	クルミ	南環濠13-4, ５層（BT６）	一部破損	長24.7, 幅20.6
4	クルミ	南環濠13-2, ６層（BT5）	小片６点	－	13	モモ	13L4, Ⅱ層	完存	長20.2, 幅17.2
5	クルミ	南環濠11-4, ３層（BT3）	約3/4	長20.7	14	モモ	２号竪穴, ２b層	完存	長22.1, 幅18.3
6	モモ	７号竪穴北東区, ４層	一部破損	長18.6, 幅17.7	15	モモ	南環濠13-3, ６層（BT５）	完存	長19.7, 幅15.9
7	モモ	７号竪穴北東区, ４層	完存	長17.2, 幅16.5	16	モモ	南環濠13-3, ６層（BT５）	約1/2	長11.4
8	モモ	１号溝（14L）	一部破損	長22.5, 幅18.9	17	モモ	南環濠13-4, ５層（BT６）	完存	長18.2, 幅14.4
9	モモ	１号溝（14L）	約1/2	長20.3	18	クルミ	南環濠13-4, ５層（BT６）	約1/4	－

第Ⅴ章　裏山遺跡出土の礫石経について

新潟大学人文学部　矢田俊文

1

本稿は、裏山遺跡出土礫石経46点の資料集とその作成についての説明と裏山遺跡出土の礫石経について若干の考察を行ったものである。

裏山遺跡は弥生時代の高地性集落と中世の塚群で構成される遺跡である。写経石は、主丘頂部中央にある３基の塚から出土した。

裏山遺跡出土の礫石経資料集は、以下の要領で作成した。

文字は、３倍率のルーペで読んだ。判読にあっては、新潟県埋蔵文化財調査事業団撮影の赤外線写真も活用した。

文字は通用の字体を使用した。判読できない文字は、字数を推定して□□□で示し、字数が推定できない時は、□□□□□□で示した。文字の推定できるものは、（　）と傍注した。また、（　カ）と傍注して編者の意見を付した。文意の通じない時は、（ママ）と傍注し編者の意見を示した。釈文には行ごとに数字を付けた。編者の加えた按文には、冒頭に○を付して本文と区別した。

写経石の法量は、タテ×ヨコをセンチメートルで示した。写経石はすべてが扁平ではないので、厚さは計測しなかった。大きさはタテ・ヨコともに最大値を示した。重量はグラムで示した。

掲げた写真は、新潟県埋蔵文化財調査事業団撮影の赤外線写真を使用した。赤外線写真には、釈文と同じ行に同じ数字を付けた。

2

裏山遺跡の礫石経の経典名、タテ×ヨコ、重量は以下の通りである。石は、角礫・円礫の二つに分ければ、すべて円礫であるといってよかろう。№７は角張っているが、角はとれているので角礫ではない。№３・７・13・22・23・25・26は扁平な石である。№19・21は球体である。残りの写経石は、扁平と球体の中間的な形態である。扁平な石が写経石に使用されたわけではないことがわかる。写経石の写真は、報告書図版137～139に掲げられているのでご覧いただきたい。写経石に書かれた字はすべて墨書であり、朱書はない。

なお、下記の№32～46の「地点不明」の写経石とは、１号塚・２号塚・３号塚のいずれかから出土したものの、現在その区別ができなくなっている写経石のことである。

№１．１号塚１号　妙法蓮華経化城喩品第七　9.0×8.9　480ｇ

№２．１号塚２号　妙法蓮華経薬草喩品第五　12.6×6.7　800ｇ

№３．１号塚３号　妙法蓮華経従地涌出品第十五　9.0×5.3　160ｇ

№４．１号塚４号　妙法蓮華経法師功徳品第十九　12.4×5.9　590ｇ

№５．１号塚５号　妙法蓮華経譬喩品第三　8.3×6.6　345ｇ

№６．１号塚６号　妙法蓮華経方便品第二　8.5×6.9　365ｇ

No.7．1号塚7号　6.8×5.5　180g

No.8．1号塚8号　般若波羅蜜多心経　9.5×7.0　590g

No.9．1号塚9号　9.6×5.3　240g

No.10．1号塚10号　妙法蓮華経法師功徳品第十九　10.8×6.2　490g

No.11．1号塚11号　妙法蓮華経薬草喩品第五　7.5×6.6　440g

No.12．1号塚12号　妙法蓮華経授学無学人記品第九　10.3×7.0　565g

No.13．1号塚13号　妙法蓮華経従地涌出品第十五　9.4×4.6　175g

No.14．1号塚14号　9.4×5.3　240g

No.15．1号塚15号　7.3×6.5　290g

No.16．1号塚16号　8.2×7.5　600g

No.17．1号塚17号　5.5×4.2　90g

No.18．1号塚18号　12.7×6.3　530g

No.19．1号塚19号　7.8×6.6　430g

No.20．1号塚20号　妙法蓮華経従地涌出品第十五　8.7×5.5　280g

No.21．1号塚21号　8.3×8.0　720g

No.22．1号塚22号　妙法蓮華経普賢菩薩勧発品第二十八　9.7×5.3　210g

No.23．1号塚23号　6.9×6.0　160g

No.24．1号塚24号　6.4×4.5　140g

No.25．1号塚25号　6.4×4.5　140g

No.26．1号塚26号　15.2×7.3　130g

No.27．2号塚葺石1号　7.3×6.6　195g

No.28．2号塚葺石2号　無量義経十功徳品第三　10.0×7.2　540g

No.29．3号塚主体土坑1号　7.2×4.5　145g

No.30．3号塚主体土坑2号　8.6×6.7　245g

No.31．3号塚主体土坑3号　妙法蓮華経如来寿量品第十六、妙法蓮華経分別功徳品第十七
9.7×5.1　270g

No.32．地点不明1号　8.6×6.0　340g

No.33．地点不明2号　8.6×6.0　340g

No.34．地点不明3号　8.0×5.8　200g

No.35．地点不明4号　6.0×5.3　110g

No.36．地点不明5号　5.0×4.1　115g

No.37．地点不明6号　9.1×6.9　510g

No.38．地点不明7号　9.5×5.5　295g

No.39．地点不明8号　11.0×8.8　1030g

No.40．地点不明9号　7.5×4.7　120g

No.41．地点不明10号　6.0×4.9　160g

No.42．地点不明11号　9.8×4.8　325g

No.43．地点不明12号　8.3×4.9　305g

№44．地点不明13号　9.4×7.3　340ｇ
№45．地点不明14号　9.5×5.8　400ｇ
№46．地点不明15号　10.2×5.1　270ｇ

3

現時点で明らかな裏山遺跡の礫石経の経典は、妙法蓮華経方便品第二、妙法蓮華経譬喩品第三、妙法蓮華経薬草喩品第五、妙法蓮華経化城喩品第七、妙法蓮華経授学無学人記品第九、妙法蓮華経従地涌出品第十五、妙法蓮華経如来寿量品第十六、妙法蓮華経分別功徳品第十七、妙法蓮華経法師功徳品十九、妙法蓮華経普賢菩薩勧発品第二十八、般若波羅蜜多心経、無量義経十功徳品第三である。

裏山遺跡の礫石経は、すべて経典を書写したものと考えられる。年月日や人名を記したものはない。筆蹟からみると、書写した人物は石ごとに異なると思われる。

書写された経文の書風は中世のものである。１～３号塚出土の珠洲の片口鉢は、本報告書が述べているように、珠洲編年Ⅱ期13世紀前半のものなので、経典が書写された時期は13世紀前半である。

書風から書写された時期を考えてみよう。写経石の経文の書風を観察できる図版がほとんどないので、経塚出土の紙本経が掲載された図版(1)から類似の書風を探し出してみたい。

比較した裏山遺跡の礫石経は、妙法蓮華経如来寿量品第十六、妙法蓮華経分別功徳品第十七を書写した写経石№31である。№31の書風と一番似ているのは保安３年（1122）８月18日銘と天治元年（1124）11月12日銘の銅製経筒を出土させている東城寺経塚（茨城県新治村）の紙本経（妙法蓮華経如来寿量品第十六)(2)である。浄土寺南田町経塚出土の正応年（1289）７月９日の奥書をもつ紙本経（妙法蓮華経巻第三)(3)も似ているものの、東城寺経塚の紙本経の方が似ているように思われる。

字数は、石の大きさ、字の大きさによりさまざまであるが、字数の多いもので、明確に字数を計算できる写経石（№31．9.7×5.1，270ｇ）の字数を計算すると約266字であった。

写経石の大きさは、最大がタテ15.2cm、ヨコ8.9cm。最小がタテ5.5cm、ヨコ4.1cmである。

重量は、最大が1030ｇ、最小は110ｇである。

本礫石経の経文は法華経がほとんどであるが、書写の方法は、法華経の各巻の冒頭から書写された形跡はない。№31は、妙法蓮華経如来寿量品第十六の末尾部分と妙法蓮華経分別功徳品第十七の冒頭部分が書写されている。このことからも、本礫石経の法華経の書写は、法華経の各巻の冒頭からなされたのではないことがわかる。

4

裏山遺跡の礫石経と類似した写経石を出土した遺跡としては、次の３例を上げることができる(4)。

山寺廃寺遺跡(5)（長野県大町市）

大きさは、25.4×23.5×10cm。経文は、法華経常不軽菩薩品第二十。６面全面にわたり整然と書写。共伴遺物から出土地点は墓所。共伴遺物の骨蔵器としての古瀬戸の瓶子と四耳壷は、14世紀第２四半世紀のもの。

東照寺址遺跡第Ⅲ区集石土壙墓群(6)（長野県下諏訪町）

写経石は30個。礫石経の一つ（大きさ，9.0×9.0×4.0cm）には、般若経61字を書写。集石墓は23基で、13～14世紀代に造営。

三木だいもん遺跡(7)（石川県加賀市）

大きさは、8.2×6.1cm。経文は、金光明経巻三除病品第十五。経文44字を扁平な石の表裏に墨書。13世紀中頃の大型建物柱穴から出土。病気平癒を願った呪術的な遺物。

以上の3例はいずれもかなりの字数で経文が書写された事例である。遺跡の時期も13世紀中頃～14世紀中頃までのものである。裏山遺跡の礫石経とほぼ同様の遺跡であると考えられる。礫石経を出土した裏山遺跡はこれらの事例との比較検討を行なう中で、遺跡の性格の特徴を明らかにしていくことができるのではなかろうか。

裏山遺跡の礫石経は、一字一石経(8)ではない。経塚埋納の書写された経典が紙に書かれている場合、紙本経とよばれている(9)。本遺跡の礫石経は、石に経典が書写されて埋納されたということであって、経塚出土の紙本経と本質的には違いはない(10)。では、紙に経典が書写されて埋納される場合と、裏山遺跡の礫石経のように石に書写されて埋納される場合とはどうしてそのような違いが生じるのか。それは、地域差の問題(11)なのか。検討が必要である。

注

（1）『法華経の美術』奈良国立博物館、1979年、『特別展観　経塚－関東とその周辺』東京国立博物館、1986年、関秀夫『経塚とその遺物』（日本の美術292号）至文堂、1990年

（2）『特別展観　経塚－関東とその周辺』東京国立博物館、1986年

（3）関秀夫前掲『経塚とその遺物』

（4）本稿では、礫石経は、埋納された経典が書写されている小石という意味で使用している。経塚に埋納されたものに限定して使用してはいない。他に、鎌倉の「やぐら」出土の礫石経（14世紀前後）などがある（松原典明「経典埋納と墳墓」『立正史学』78号、1995年）。

（5）松原典明「関東・甲信越」『考古学論究』3号、1994年

（6）宮坂光昭「〔長野〕東照寺址遺跡」『仏教芸術』182号、毎日新聞社、1989年、『殿村・東照寺址遺跡』下諏訪町教育委員会、1990年

（7）垣内光次郎「北陸」『考古学論究』3号、1994年

（8）一字一石経・礫石経研究は、現状では中世後期から近世にかけての遺物として扱われる傾向が強いように思われる。岡本桂典「一字一石経の世界」『季刊考古学』26号、1989年、関秀夫前掲『経塚とその遺物』、田代孝『山梨の経塚信仰』山梨日日新聞社出版局、1995年、松原典明「礫石経研究序説」『考古学論究』3号、1994年など。

（9）『特別展観　経塚－関東とその周辺』東京国立博物館、1986年など

（10）かわらけに経典が書写される例もある（『第50回企画展　岩手の経塚』岩手県立博物館、2000年、寺ノ上遺跡、かわらけの年代観は12世紀後半代）。

（11）小原仁（「中世における埋経の展開とその基調」『日本歴史』307号、1973年）は、14世紀半ばに書かれた「親鸞聖人正明伝」に、「東国ノ風ナレバ、小石ヲアツメ、三部ノ経典ヲ書キ、カノ墓所ニ埋ミ」とあるところから、小石の埋経が関東一帯に普く浸透していた宗教行為であったとするが、小原氏が依拠する「親鸞聖人正明伝」は、近世に高田派の学徒が存覚に托して偽撰したもの（平松令三「解題」『真宗資料集成　第七巻　伝記・系図』同朋舎、1975年）であり、小原氏の説を採用することはできない。

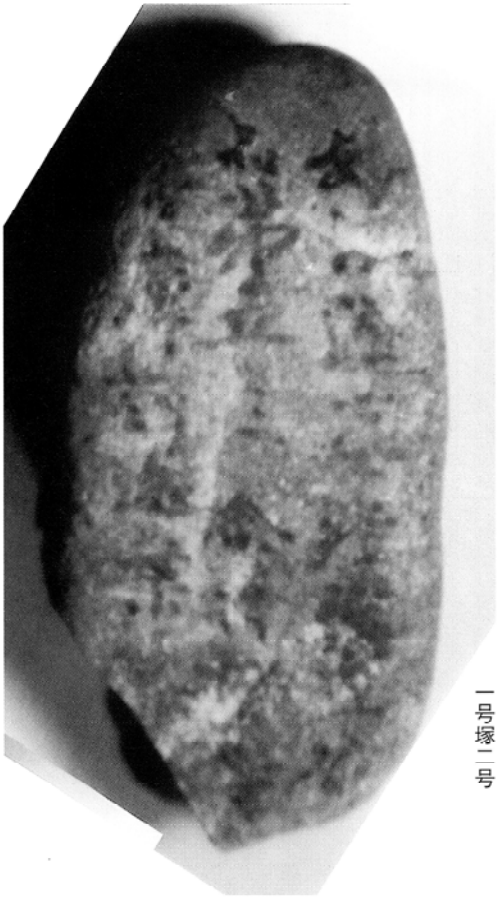
一号塚一号B

一号塚一号A

一　裏山遺跡一号塚一号

1　□□天中天
2　迦陵任即□
3　即□□
4　□□□
5　□
6　□□有□
7　□有□
8　□百八十劫空

○本文は妙法蓮華経化城喩品第七と思われる。AとBは同一個体。5～8は、1～4の裏面に書かれている。九・〇×八・九。四八〇グラム。



一号塚二号

一号塚三号

二　裏山遺跡一号塚二号

1 妙法蓮華経薬草□
2 品第五□爾時世□
3 □摩訶迦葉□□（及カ）
4 □善哉□

○妙法蓮華経薬草喩品第五。1～4以外にも墨痕があるように見えるが判読不能。十二・六×六・七。八〇〇グラム。

三　裏山遺跡一号塚三号

1 □
2 所成□甚□（就カ）
3 衆□如実□（疑カ）
4 □

○妙法蓮華経従地涌出品第十五。裏面にも墨痕が見えるが判読不能。九・〇×五・三。一六〇グラム。

一号塚四号C

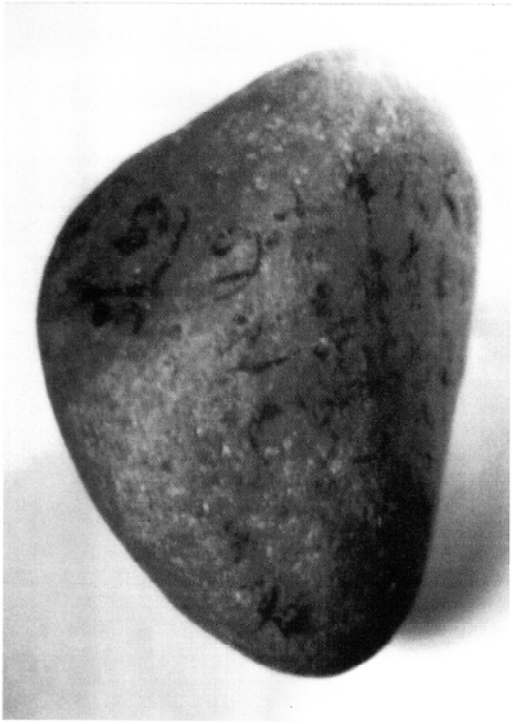
一号塚四号A

一号塚四号B

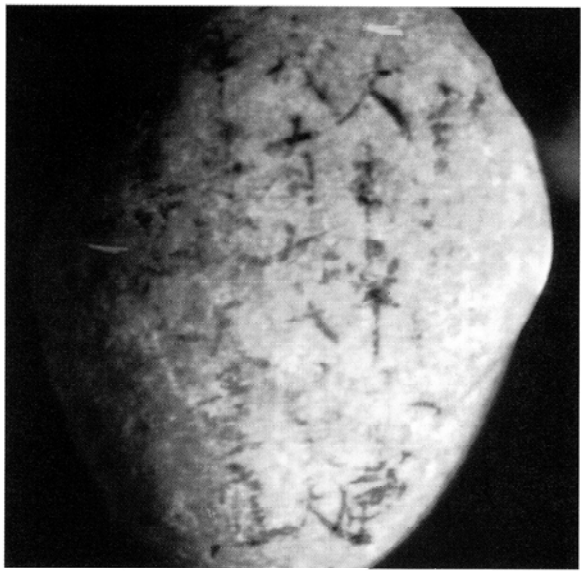
四　裏山遺跡一号塚四号

1 □□善説法故婆□
2 □□□其形寿□
3 □(侍カ)供養又□□(諸声)聞□□(辟支)仏□□(菩薩)
4 諸仏□(常)楽□□
5 □方面諸仏皆向□□
6 悉□(能)受付一切仏法
7 □□妙法□
8 □欲重宣□
9 □□(而説)偈言是人□□(舌根)
10 浄終□□□
11 □□□以深浄□
12 □於大□□以諸□□
13 □引道(導)衆□心聞者□歓□□諸上
14 供養□□□

○妙法蓮華経法師功徳品十九。A～Cは同一個体。
十二・四×五・九。五九〇グラム。



一号塚五号A



一号塚五号B

五　裏山遺跡一号塚五号

6 □

7 大車寧□□（塚カ）

1 我有如□□宝大

2 車其数無量応

3 当等心各□

4 与之□□□

5 別所

○妙法蓮華経譬喩品第三。番号は経文の順にふった。6の右にも墨痕がみえるが判読不能。他の面にも墨痕が見えるが判読不能A・Bは同一個体。八・三×六・六。三四五グラム。割れている。

六　裏山遺跡一号塚六号

1 諸苦□□（毒カ）

2 □之徴形

3 常増長□

4 福人衆□□（苦カ）

5 □

6 □□（等カ）

7 □

8 □□□（不カ）

○妙法蓮華経方便品第二。八・五×六・九。三六五グラム。

一号塚七号A

一号塚七号B

七　裏山遺跡一号塚七号

1　□衆□□

○1と2の間に墨痕はあるが判読不能。行数不明。

2　□□□(不カ)座

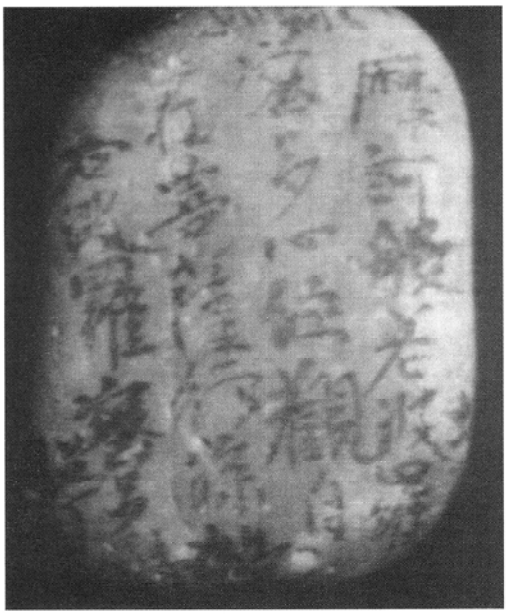
3　□□□

○4は1～3の下方の側面。一行三字。

4　比丘尼

○他の面にも墨痕は見えるが判読不能。A・Bは同一個体。六・八×五・五。一八〇グラム。

一号塚八号B



一号塚八号A

一号塚八号D

一号塚八号C

八　裏山遺跡一号塚八号

1 摩訶般若波羅
2 蜜多心経観自
3 在菩薩行深般
4 若波羅蜜多□(時)
5 照見□(五)
6 蘊皆空度
7 □□(一切苦)厄舎
8 □(利子)□色□(不)
9 □
10 □
11 色受想
12 行□(識)亦復如是
13 舎利子是□(諸法)□
14 空相不生
15 □
16 不増不滅
17 是○(故)空中無
18 色不無受
19 想行
20 識
21 無眼耳鼻□(舌)
22 □(身)意無色
23 聲香味
24 触法

○般若波羅蜜多心経。A～Dは同一個体。
九・五×七・〇。五九〇グラム。

一号塚九号A

一号塚九号B

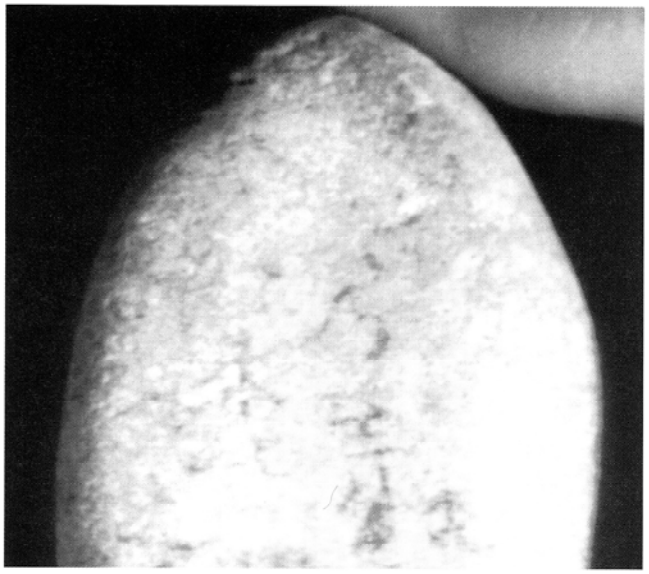
一号塚九号C

九　裏山遺跡一号塚九号

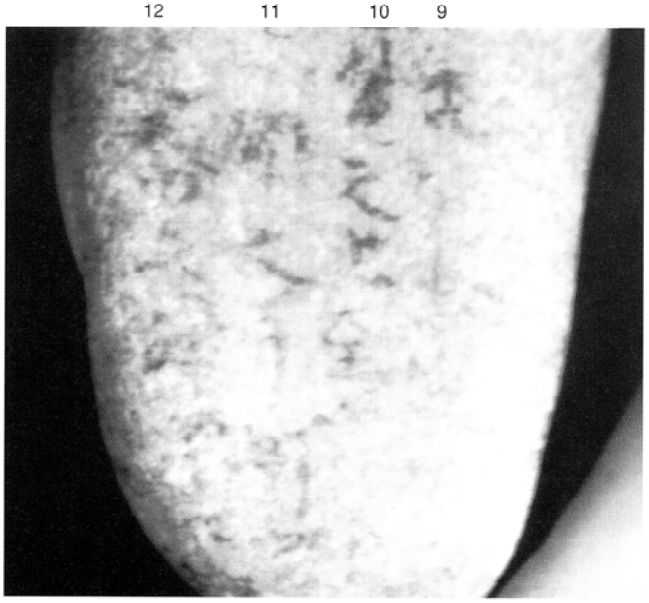
1 □波羅三藐三菩
2 提為諸衆生□
3 □一切世間□事□
4 □□菩提□
5 □諸□諸□
6 信之法□□□

○A～Cは同一個体。九・六×五・三。二四〇グラム。

一号塚一〇号A



一号塚一〇号B



一〇　裏山遺跡一号塚一〇号

1 □□沈水香□□□
2 □□□香□□□
3 □□□□□□
4 □□於此間□□□
5 □□水□□□香諸□□□
6 □□是等天香和合□(所カ)出之□
7 □□聞□又聞諸天身□□

○7と8の間に墨痕が見えるが判読不能。行数も一行か二行か不明。

8 □□□□(時カ)為□□□

○8と9の間に墨痕があるが判読不明。行数不詳。

9 □□香□□□
10 □□乃至梵天上至□□
11 □□亦皆聞之并聞□□
12 □□香□□□

○妙法蓮華経法師功徳品十九。12と1の間にも墨痕があるが判読不能。A・Bは同一個体。一〇・八×六・二。四九〇グラム。

一号塚二号

一一　裏山遺跡一号塚二号

1 正遍□
2 善逝□
○墨痕はみえるが判読不能。二行あるようであるが不明。
3 □（摩カ）
○3と4の間に別の面あり。墨痕はみえるものの判読不能。
4 一切見者知□（道カ）
5 者開道者□
6 道□
7 点□
○妙法蓮華経薬草喩品第五。残りの一面にも墨痕がみられるものの判読不能。七・五×六・六。四四〇グラム。

二一　裏山遺跡一号塚一二号

1 □
2 仏□□（瞋羅カ）蜜□
3 □□（能知カ）之□
4 □諸□
5 千万□
6 □
7 人□
8 □人等
9 当供□五□
10 □（空カ）□
○妙法蓮華経授学無学人記品第九。一〇・三×七・〇。五・五グラム。

一号塚一三号A

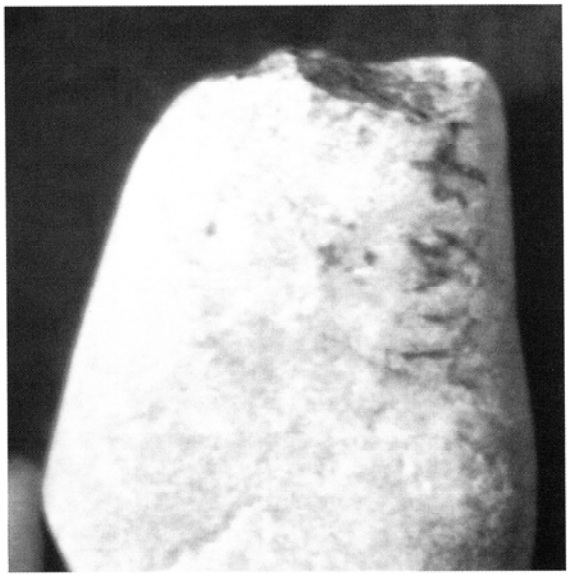
一号塚一三号B

一三　裏山遺跡一号塚一三号

1 □
2 □
3 □等皆□
4 是諸□□（薩カ）衆本末之□
5 □無量□□（徳）□
6 決□□（疑カ）
7 爾時釈迦牟□□
8 分身諸佛従無量
9 □
10 □子座

○本文は、妙法蓮華経従地涌出品第十五。A・Bは同一個体。九・四×四・六。一七五グラム。

1



一号塚一四号

2　1

一号塚一七号A

3

一号塚一七号B

一四　裏山遺跡一号塚一四号

1□□（善或カ）

○他にも墨痕が見えるが判読不能。九・四×五・一。二四〇グラム。

一五　裏山遺跡一号塚一五号

○墨痕が見えるものの判読不能。七・三×六・五。二五〇グラム。

一六　裏山遺跡一号塚一六号

○複数の面に墨痕が確認できるものの判読不能。八・二×七・五。六〇〇グラム。

一七　裏山遺跡一号塚一七号

1□□（松カ）諸

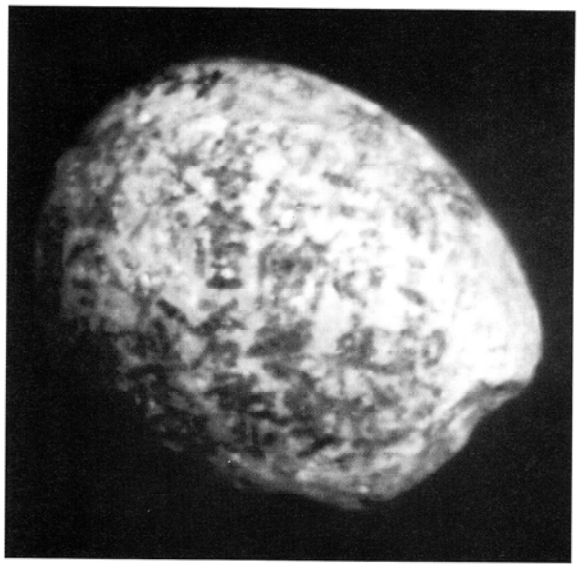
2□□□（難長カ）

○3は1・2の左側面にある。

3□□□

○1・2の裏面に墨痕が確認できるが判読不能。3は肉眼では明瞭には見えない。A・Bは同一個体。五・五×四・二。九〇グラム。

一号塚一九号A



一号塚一九号B

一八　裏山遺跡一号塚一八号

1 □一□（同カ）（月カ）
2 □方
3 □
4 □
5 □
6 □（半カ）
7 □□（曾カ）

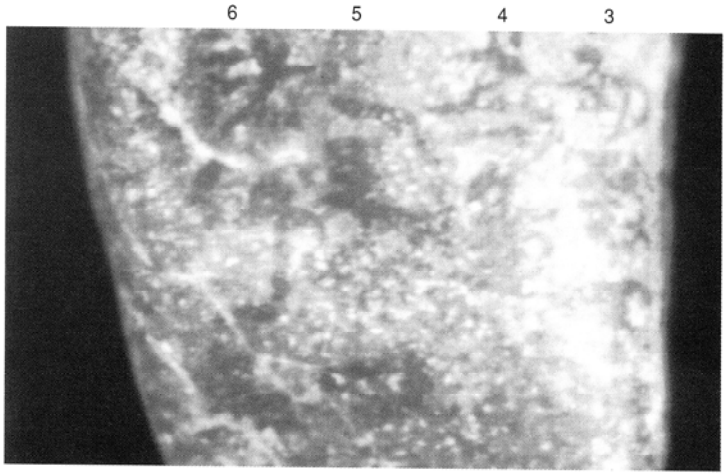
○3の左の面に4がある。一二七×六三。五三〇グラム。

一九　裏山遺跡一号塚一九号

1 □
2 □□□□
3 □□□□
4 □□法□□
5 □□□若□
6 □□□□□（爾カ）
7 □法合□衆□
8 □□既
9 不□□□衆生□□有

○A・Bは同一個体。七・八×六・六。四三〇グラム。

一号塚二〇号A



一号塚二〇号B

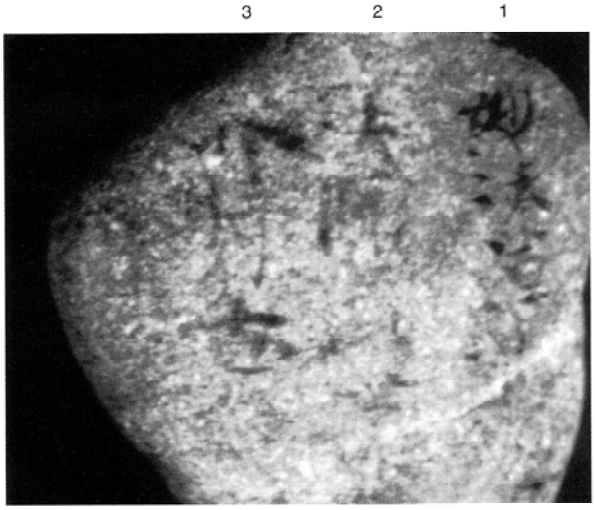
二〇　裏山遺跡一号塚二〇号

1 大菩薩衆
2 仮使有人於千
3 万億却数不□□（能尽）
4 不得其辺□□
5 久遠己来□
6 無辺諸仏□□諸
7 □
8 道常修梵行
9 □□□
10 指年少言
11 是我
12 是我子其
13 □□人亦
14 □
15 □
16 □□□□百歳人言

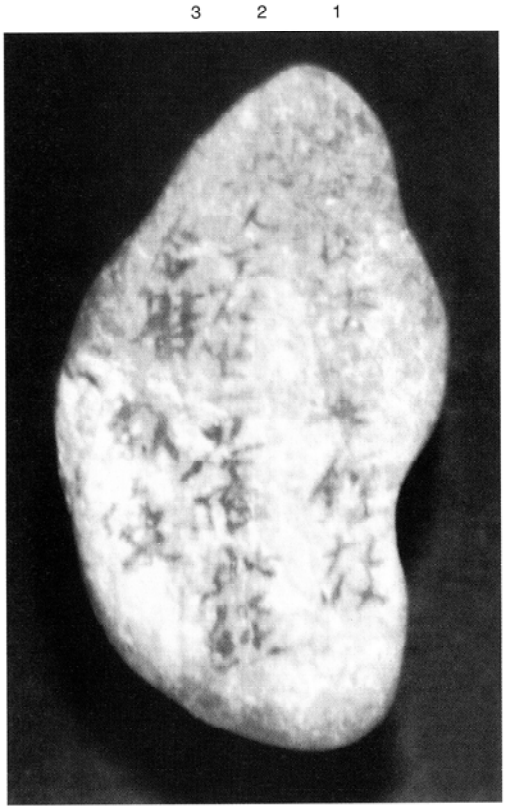
○妙法蓮華経従地涌出品第十五。A・Bは同一個体。1～9と10・11と12・13と14～16は、それぞれ石の別の面に記されている。八・七×五・五。二八〇グラム。

二一　裏山遺跡一号塚二一号

○全面に墨痕が見えるが判読不能。八・三×八・〇。七二〇グラム。



一号塚二三号



一号塚二二号

二二　裏山遺跡一号塚二二号

1□法華経故
2□人若坐思惟此経
3□(爾カ)時我復
4□白象□
5而自□

○二行分間隔が開いている。

6　□為

○妙法蓮華経普賢菩薩勧発品第二十八。4は1～3の左の面に記されている。5は1～3の裏面に記されている。九・七×五・三。二〇グラム。

二三　裏山遺跡一号塚二三号

1妙法蓮□□
2法□□□
3□時世
4□□
5□□
6□□
7□□
8無量□諸□
9□□

○5～8は1～4の裏面。六・九×六・〇。一六〇グラム。

3

二号塚葺石一号A

二号塚葺石一号B

二四　裏山遺跡一号塚二四号

○墨痕は見えるものの判読不能。六・四×四・五。一四〇グラム。

二五　裏山遺跡一号塚二五号

○墨痕はあるものの判読不能。六・四×四・五。一四〇グラム。

二六　裏山遺跡一号塚二六号

○墨痕はあるものの判読不能。一五・二×七・二。二三〇グラム。

二七　裏山遺跡二号塚葺石一号

1 □
2 □
3 □□（無カ）

○1～3以外の面にも墨痕は見られるが判読不能。七・三×六・六。割れている。一九五グラム。

二号塚葺石二号A

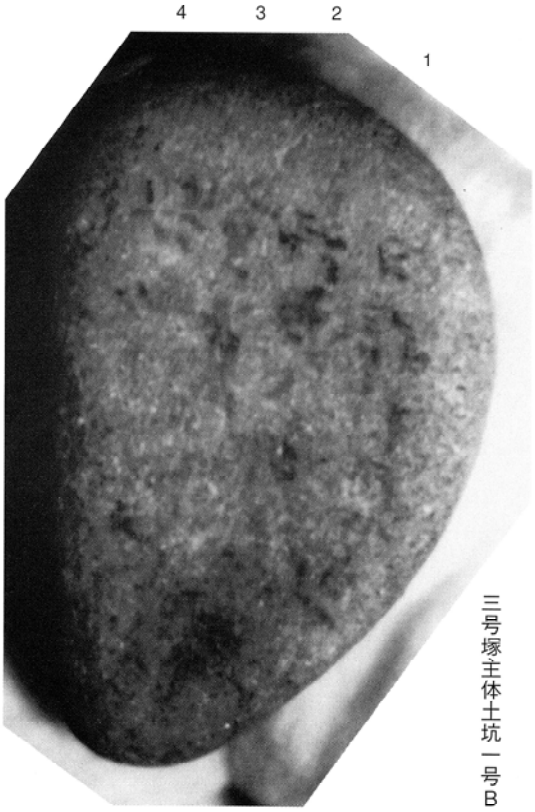
二号塚葺石二号B

二八　裏山遺跡二号塚葺石二号

1 担負衆生死道未能自（出生脱カ）
2 度已能度彼猶如□（船）
3 師身嬰重病□
4 □有□□□□常
5 □諸度彼者□具□（之）（給与）
6 而去是□
7 復如是□
8 □有□
9 □□□無□□□□而
10 □
11 □

○9と10の間に二・三行あると思われるが不明。

○無量義経十功徳品第三。A・Bは同一個体。一〇・〇×七・二。五四〇グラム。



三号塚主体土坑一号B

三号塚主体土坑一号A

二九　裏山遺跡三号塚主体土坑一号

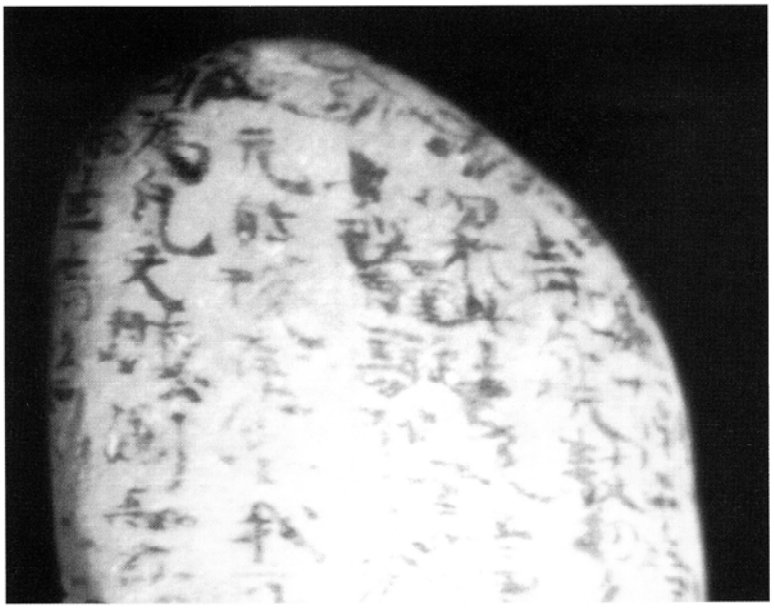
1 □□□□□
2 □□人間□
3 □(皆カ)□□
4 □(興カ)□□
5 □□□(間カ)□
6 □(共カ)□□□
7 為□□

○5・6は1～4の裏面。5の右にも墨痕が見られるが何行あるか不明。7は5・6の上部に別の方向で書かれている。1～7以外にも墨痕は見えるものの判読不能。A・Bは同一個体。七・二×四・五。一四五グラム。

三〇　裏山遺跡三号塚主体土坑二号

○全体に墨痕が見られるものの判読不能。八・六×六・七。二四五グラム。

6 5 4 3 2 1

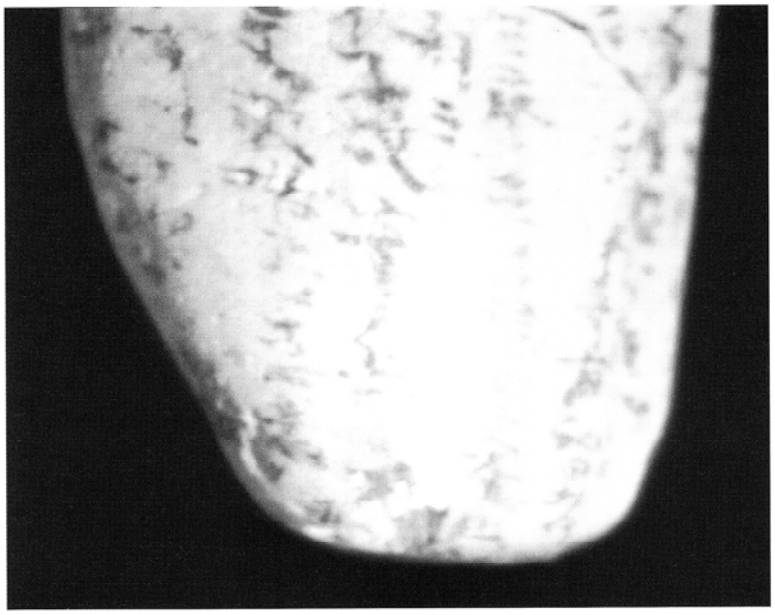


三号塚主体土坑三号A

4 3 2 1

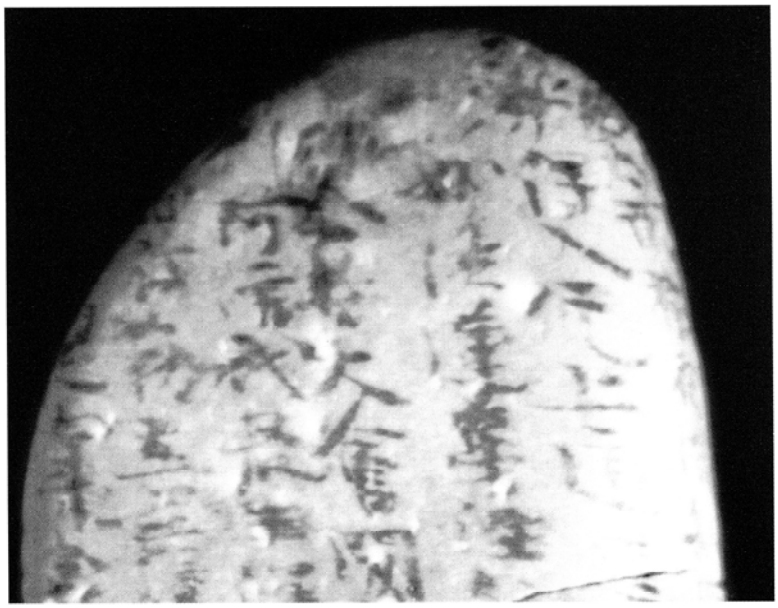
三号塚主体土坑三号B

4 3 2 1



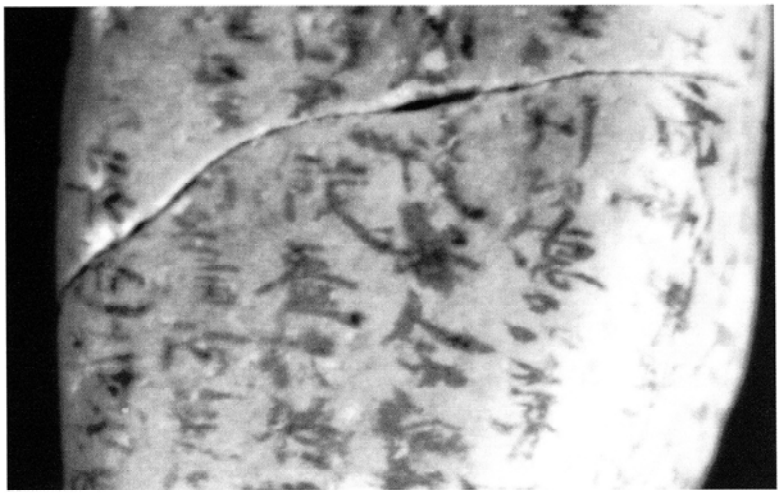
三号塚主体土坑三号C

14　13　12　11　10　9　8



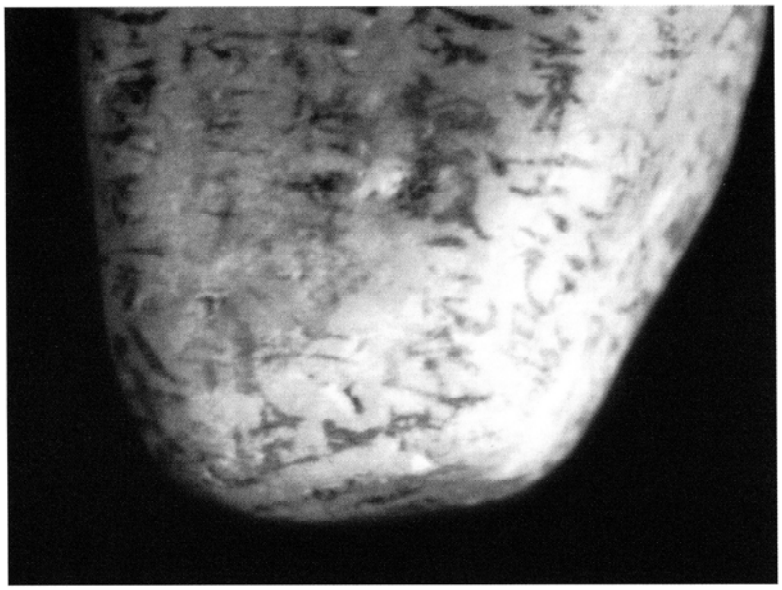
三号塚主体土坑三号D

14　13　12　11　10

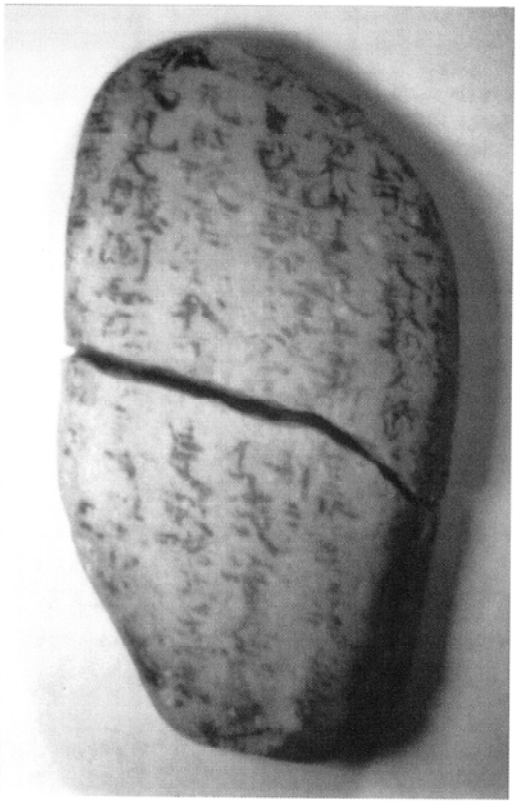


三号塚主体土坑三号E

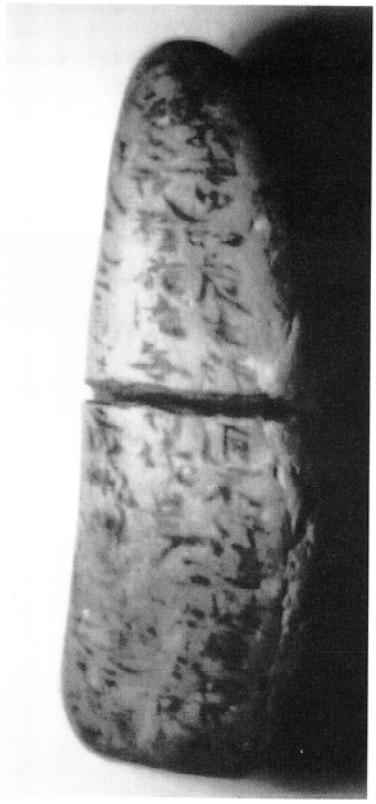
14　13　12　11　10



三号塚主体土坑三号F



三号塚主体土坑三号G



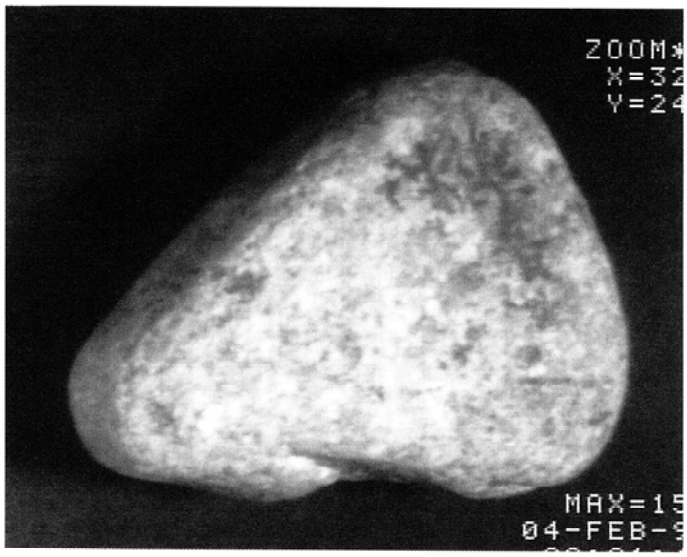
三号塚主体土坑三号H

三一　裏山遺跡三号塚主体土坑三号

1 寿命無数却久修□所得□等有智者
2 勿於此□(生疑)□当断□実不□(虚)
3 如醫善□□(方便為治狂)□□子故実在而□□(言死)
4 無能説□(虚妄)□我亦□(為)世父□(救)諸□(苦)患者
5 為凡天顛倒□(実)在□
6 而生憍恣心□
7 我常知衆生行道不行道随応所可度
8 為説種種法毎自作是□(念)□
9 得入無上道□(速)成就仏身
10 妙法蓮華経分別功徳品第□七
11 □大会聞□□□(寿命却数長遠)□
12 阿僧□得□益於時世□
13 □□(弥勒菩薩摩訶薩)□□阿□
14 是如来□□長遠時□□万(マ)八(マ)十□
15 那由他恒河沙衆生得無生法忍
16 復有千倍菩薩□摩訶薩得□

○1～9は妙法蓮華経如来寿量品第十六。10～16は妙法蓮華経分別功徳品第十七。約二二六字。
A～Hは同一個体。九七×五・一。二七〇グラム。

1



地点不明二号

三一　裏山遺跡地点不明一号

1 □
2 □
3 富□大□
4 □
5 □
6 □□□（巻別カ）
7 □□（無カ）
8 □
9 □我□

○1～9以外にも墨痕が見えるが判読不能。
八・六×六・〇。三四〇グラム。

三二　裏山遺跡地点不明二号

1 楽□□□（著カ）
2 □□

○他の面にも墨痕は見られるが判読不能。
八・六×六・〇。三四〇グラム。

三四　裏山遺跡地点不明三号

1 皆□
2 □死□
3 □是経□
4 □
5 □於凡天□
6 善易□□
7 □上□□（久カ）
8 量□信□□
9 □
10 □

○八・〇×五・八。二〇〇グラム。

三五　裏山遺跡地点不明四号

1 逆供養
2 我□□
3 上□

○BはAの左上部側面に書かれている。Bは肉眼では見えない。A・B以外にも墨痕は見えるが判読不能。六・〇×五・三。一一〇グラム。

三六　裏山遺跡地点不明五号

1 □
2 □
3 □
4 □宝□
5 □
6 □□□（皆カ）
7 □
8 □

○六・五×四・一。一二五グラム。

三七　裏山遺跡地点不明六号

1 □□
2 □□（有又カ）□

○1・2以外にも墨痕が見えるが判読不能。九・一×六・九。五一〇グラム。

三八　裏山遺跡地点不明七号

○全面に墨痕が見えるものの判読不能。九・五×五・五。二九五グラム。

三九　裏山遺跡地点不明八号

○全面に墨痕が見えるが肉眼では判読不能。一二・〇×八・八。一〇三〇グラム。

四〇　裏山遺跡地点不明九号

○墨痕が見えるものの判読不能。七・五×四・七。割れている。一二〇グラム。

四一　裏山遺跡地点不明一〇号

○墨痕が見られるものの判読不能。六・〇×四・九。一六〇グラム。

四二　裏山遺跡地点不明一一号

○墨痕は見られるものの判読不能。九・八×四・八。三三五グラム。

四三　裏山遺跡地点不明一二号

○墨痕は見られるものの判読不能。八・三×四・九。三〇五グラム。

四四　裏山遺跡地点不明一三号

1 □□有□
2 □□滅□
3 □□

○赤外線写真では下に掲げた写真のように字が写っているが、肉眼では判読できない。九・四×七・三。三四〇グラム。

四五　裏山遺跡地点不明一四号

○全面に墨痕が見えるが判読不能。九・五×五・八。四〇〇グラム。

四六　裏山遺跡地点不明一五号

○全面に墨痕が見えるが判読不能。一〇・二×五・一。二七〇グラム。

地点不明一三号

第Ⅵ章　自然科学分析

裏山遺跡から出土した炭化材の年代と樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

裏山遺跡は、弥生時代後期の高地性集落であり、竪穴建物、環濠、土坑などが検出されている。このうち、6号竪穴はいわゆる焼失住居で、住居構築材などと考えられる炭化材が出土しており、7号竪穴からも炭化材が出土している。

本報告では、出土した炭化材の放射性炭素年代測定を行い、各竪穴の構築・使用時期を推定する。また、炭化材の樹種同定を行い、用材に関する資料を得る。

1　試　料

試料は6号竪穴から出土した炭化材2点（Cb2,4）と、7号竪穴から出土した炭化材1点（Cb11）である。樹種同定は全点について行い、放射性炭素年代測定は、6号竪穴のCb2と7号竪穴のCb11について行う。

2　方　法

A　放射性炭素年代測定

（1）前処理

乾燥、粉砕したものを水に入れて、浮上してきたものを除去した。次に水酸化ナトリウム溶液で煮沸した。室温まで冷却した後、水酸化ナトリウム溶液を傾斜法で除去した。この作業を除去した水酸化ナトリウム溶液の色が薄い褐色になるまで繰返した。次に濃硝酸を加えて煮沸した。室温まで冷却した後、傾斜法により除去した。充分水で洗浄した後、乾燥して蒸し焼き（無酸素状態で　400℃に加熱）にした。蒸し焼きにした試料は純酸素中で燃焼して二酸化炭素を発生させた。発生した二酸化炭素は捕集後、純粋な炭酸カルシウムとして回収した。7号竪穴Cb11については、試料が少量のため、水酸化ナトリウム溶液による処理を省略し、硝酸の代わりに塩酸で煮沸した。

（2）測定試料の調製

前処理で得られた炭酸カルシウムから真空状態で二酸化炭素、アセチレン、ベンゼンの順に合成した。最終的に得られた合成ベンゼン3mlにシンチレイターを含むベンゼン2mlを加えたものを測定試料とした。

（3）測　定

測定は、1回の測定時間50分間を20回繰返す計1,000分間行った。未知試料の他に、値が知られているス

タンダード試料と自然計数を測定するブランク試料を一緒に測定した。

（4）計　算

放射性炭素の半減期としてLIBBYの半減期5,570年を使用した。

B　樹種同定

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

3　結　果

A　放射性炭素年代測定

年代測定結果を表1に示す。6号竪穴Cb2は1790年前、7号竪穴Cb11は1650年前の年代値が得られた。

表1　放射性炭素年代分析結果

遺構名	試料名	試料の質	年代値	誤差		PAL－№
				+2σ	−2σ	
6号住	Cb2	炭化材（クリ）	1790	150	140	612
7号住	Cb11	炭化材（キハダ）	1650	210	210	613

B　樹種同定

樹種同定結果を表2に示す。炭化材は、いずれも落葉広葉樹で、2種類（クリ・キハダ）に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

表2　樹種同定結果

遺構名	時　代	試料名	用　途	樹　種
6号住	弥生時代後期	Cb2	住居建築材	クリ
		Cb4	住居建築材	クリ
7号住	弥生時代後期	Cb11	住居建築材	キハダ

・クリ（Castanea crenata Sieb. et Zucc.）
ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は1～4列、孔圏外でやや急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

・キハダ（Phellodendron amurense Ruprecht）　　ミカン科キハダ属

環孔材で、孔圏部は2～5列、孔圏外で急激に管径を減じのち漸減、塊状に複合して接線・斜方向に配列して紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1～4細胞幅、1～30細胞高。

4　考　察

A　各遺構の年代

年代測定を行った各遺構は、調査所見から弥生時代後期の住居跡と考えられている。年代測定結果は、6号竪穴Cb2が1790年前、7号竪穴Cb11が1650年前であった。これらの年代値は、同位体効果の補正を行っていないため、歴年代との比較を単純に行うことはできないが、ほぼ2～3世紀頃の年代が得られており、誤差範囲も考慮すれば、出土遺物などから推定される年代観と調和的である。遺構による年代の差は、各住居の構築時期の違いを示している可能性もあるが、誤差範囲で年代が一致することや、樹齢の問題（東

村1990）等もあるため、断定には至らない。

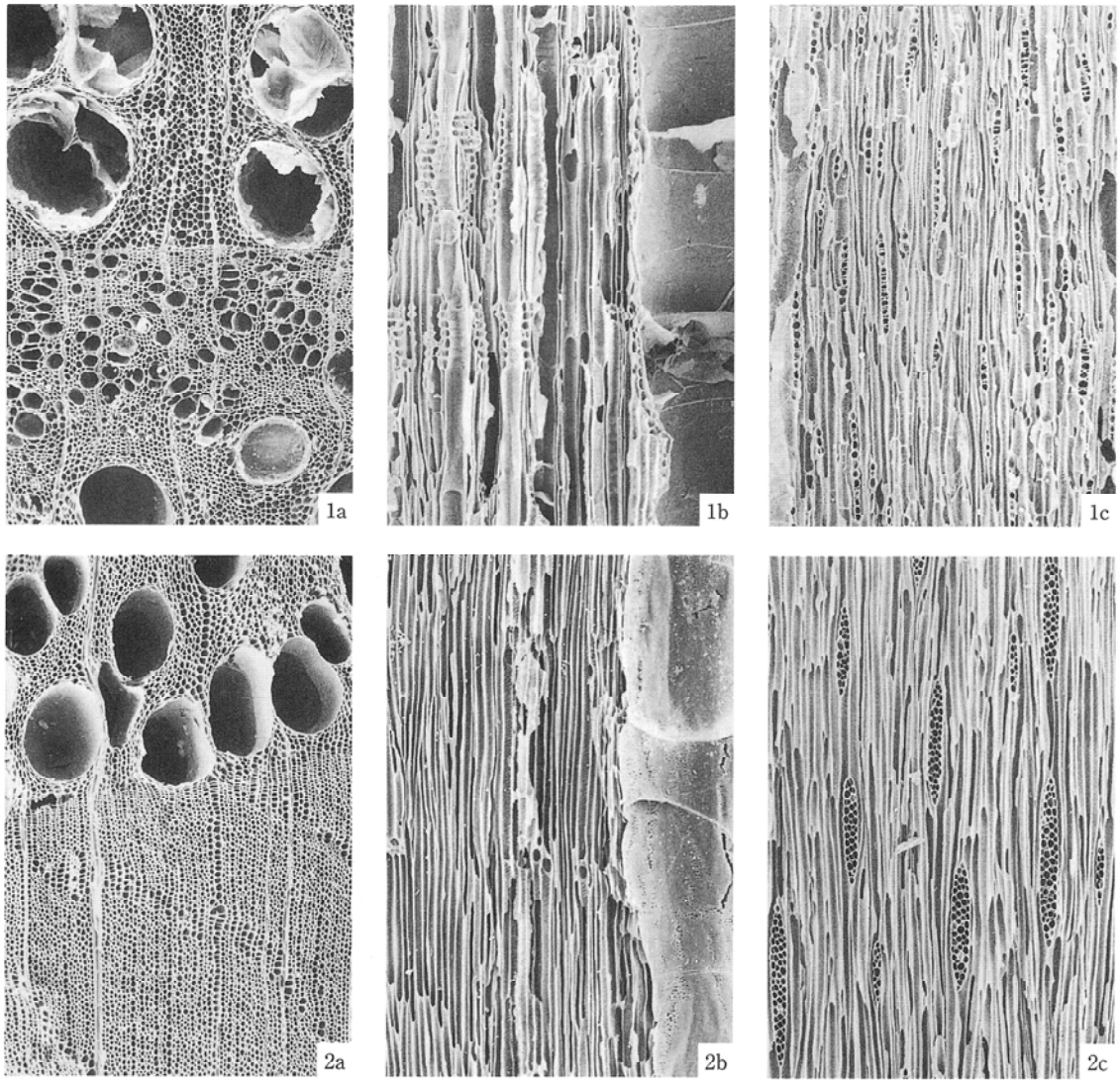
B　用材について

各竪穴から出土した炭化材は、6号竪穴が2点ともクリ、7号竪穴がキハダであった。このうち、クリは縄文時代の住居構築材などにも多く利用されていたことが知られている（千野1983, 1991　高橋・植木1994）。新潟県内では、弥生時代の住居構築材に関する資料がほとんどない。しかし、沖ノ原遺跡では縄文時代の住居構築材にクリとブナ属が認められている（西田1977）。また、岩田遺跡や曽根遺跡では、平安時代の住居構築材や柱材などにクリが多数認められている（川村1983　パリノ・サーヴェイ株式会社1992, 1997）。これらの結果と今回の結果から、縄文時代から平安時代にかけて、住居構築材などにクリが多数利用されていたことが推定される。この背景には、クリが強度や耐朽性に優れた材質を有していることが挙げられる。一方、キハダは、関川谷内遺跡の平安時代の住居構築材に認められた例がある（パリノ・サーヴェイ株式会社　1998）。キハダは、クリほど強度や耐朽性は高くないが、樹幹が真っ直ぐに伸びるため、垂木や柱に適した形状・長さを有する材を得やすい。また、落葉広葉樹林に普通に見られる種類であり、これらの点が利用された背景に考えられる。

今回の樹種同定結果では、住居によって種類が異なる結果が得られた。このことから、住居によって用材が異なっていた可能性がある。しかし、試料数が少ないため、現時点では詳細は不明である。今後さらに資料を蓄積していきたい。

引用文献

千野裕道　1983　縄文時代のクリと集落周辺植生．東京都埋蔵文化財センター研究論集Ⅱ，p. 27-42
千野裕道　1991　縄文時代に二次林はあったか－遺跡出土の植物性遺物からの検討－東京都埋蔵文化財センター研究論集X. p. 215-249
東村武信　1990　改訂　考古学と物理化学．212p.，学生社．
川村恵洋　1983　曽根遺跡出土木材の識別．新大演報，16, p. 75-82
西田正規　1977　樹種同定．津南町文化財調査報告№12「新潟県中魚沼郡津南町　沖ノ原遺跡発掘調査報告書」，p. 40-41，津南町教育委員会．
パリノ・サーヴェイ株式会社　1992　岩田遺跡出土遺物自然科学分析報告書．33p.，越路町教育委員会　パリノ・サーヴェイ株式会社
パリノ・サーヴェイ株式会社　1997　岩田遺跡第2次調査における自然科学分析調査報告．越路町文化財報告書第21輯「岩田遺跡　第2次発掘調査報告書」，p. 18-25，越路町教育委員会．
パリノ・サーヴェイ株式会社　1998　関川谷内遺跡における自然科学分析．新潟県埋蔵文化財調査報告書　第90集「上信越自動車道関係発掘調査報告書Ⅳ　関川谷内遺跡Ⅰ」，p. 55-59，新潟県教育委員会　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
高橋　敦・植木真吾　1994　樹種同定からみた住居構築材のの用材選択．PARYNO, 2, P. 5-18



1.クリ（6号住　Cb4）
2.キハダ（7号住　Cb11）
　a：木口，b：柾目，c：板目

200 μm：a
200 μm：b，c

炭化材の組織顕微鏡写真

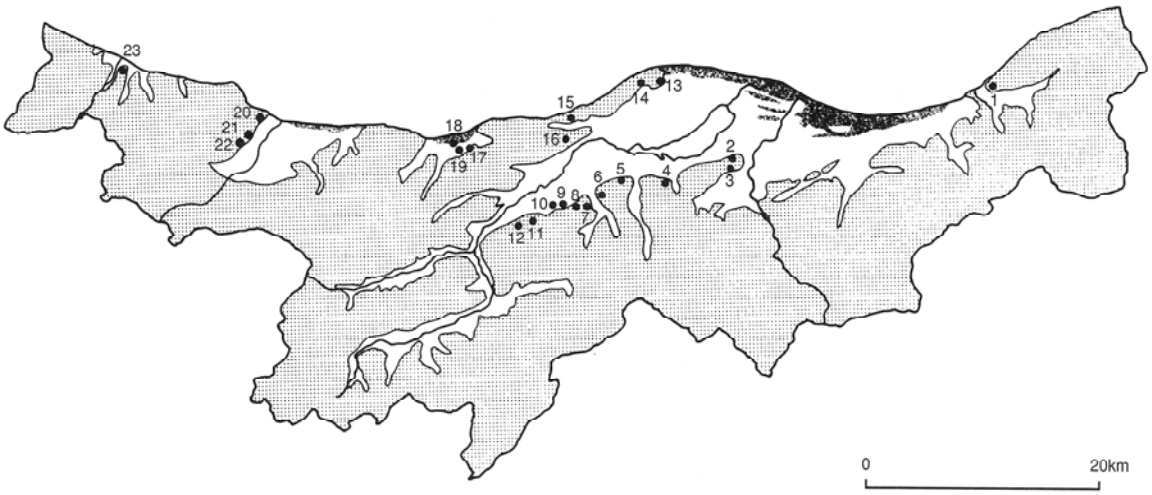
第Ⅶ章　まとめ

1　新潟県域の防禦的集落

（1）地形的条件

甘粕が防衛的集落として掲げた遺跡は31に及び、越後は能登一国と比較して異常な高密度であると言われている［甘粕1993］。しかし、これらには丘陵・台地等で弥生土器が出土しているのみの遺跡も含まれており、竪穴・環濠などの遺構や一定量の遺物が認められるのは第6表の23遺跡である。発掘調査がなされて環濠を含むある程度の集落構造を把握できるものは、八幡山遺跡・横山遺跡・斐太遺跡（註1）・裏山遺跡の4遺跡、集落の全容が明らかになったのは裏山遺跡のみである。保内三王山古墳群1号墳（標高101ｍ、現水田との比高85ｍ）のように、少量の弥生土器が出土する遺跡のとらえ方で分布状況の理解は多少異なる。

かつて麻柄は、水稲耕作が可能で居住に適した平坦地からの比高が40ｍを越え、しかも回りが急峻な斜面に囲まれたもので、立地も沖積平野に面した独立丘陵の頂部にあるものを「高地性集落」、比高20ｍ程度の丘陵上の集落をかりに「低丘陵上集落」と呼んで二者を区別した［麻柄1982・1983］。新潟県域の防禦的集落の地形的なあり方は、①麻柄の「高地性集落」グループ、いわゆる狭義の高地性環濠集落。②比高はそれほどなく積極的には高地性集落と評価しがたい大沢遺跡・山谷古墳などのグループ、「低丘陵上集落」に相当する高稲場遺跡・横山遺跡などの3グループがあり、萱場遺跡の溝を環濠と評価すれば沖積地上の防禦集落も存在する。①グループは比高60ｍを越える経塚山遺跡・大平城跡・裏山遺跡などと、比高40ｍ前後の八幡山遺跡・斐太遺跡とに分けられる。比高は無前提に与えられた地理的条件の中で、集落造営集団が地所を選択した結果の数値でしかないとしても、前者が立地する地形はより急峻である。なお、裏山遺跡は環濠で囲まれた範囲が約4,500㎡、竪穴建物が存在する平坦面は東西80ｍ、南北最大40ｍでその範囲は約2,200㎡を測る。この点では、48,000㎡の広がりをもつ八幡山遺跡、南北500ｍに及ぶ斐太遺跡に比較すれば大きな隔たりがある。



第23図　新潟県域の防禦的集落

第６表　新潟県域の防禦的集落

番号	遺　跡　名	報告文献	遺　　構	地　　形	備　　考
1	村上市滝ノ前遺跡	関 1972	竪穴住居３	標高 42m、三面川河口の段丘上	
2	新津市八幡山遺跡	川上 1994、 渡辺 1995	Ｖ字状溝４、竪穴住居 27 ほか 前方後方形墳墓１、方形周溝墓２	標高 55m、比高 50m。	面積 48,000㎡以上。
3	五泉市大倉山遺跡	川上 1994		標高 74m、比高 60m。	
4	三条市二ツ山山頂遺跡	長谷川・本間 1989	溝？	標高 95m。比高 80m。	県地図二ツ山遺跡とは別地点。
5	三条市経塚山遺跡	金子正 1999	Ｖ字状溝２、竪穴住居３	標高 72m、比高 67m。	
6	見附市大平城跡	関ほか 1974	Ｖ字状溝１、墳墓？２	標高 100m、比高 70～80m。	
7	見附市岩沢遺跡	田中 1988	竪穴住居４	標高 55～62m、比高 40m	
8	見附市高稲場遺跡	田中 1988	Ｖ字状溝１、竪穴住居１	標高 40～45m、比高 15～20m	
9	長岡市横山遺跡	駒形ほか 1987	Ｖ字状溝３、竪穴住居４、方形周溝１	標高 26m、比高 6m。水田中の独立丘陵	
10	長岡市原山遺跡	長岡市 1992	Ｕ字状溝１（連続しない）	標高 34m、比高 14m。水田中の小丘陵	
11	長岡市堅正寺遺跡	長岡市 1992		標高 86m、比高 45m。	
12	長岡市阿部山遺跡	長岡市 1992		標高 100m。比高 65m。	
13	巻町大沢遺跡	小野ほか 1982	竪穴住居４、方形周溝墓１	標高 38m、比高 30m。	
14	巻町山谷古墳	甘粕ほか 1984		標高 55m、比高 40m。	
15	和島村奈良崎遺跡	藤巻 1993	竪穴住居４、Ｖ字状溝４種	標高 34m、比高 22m。	
		春日 2000	竪穴住居３	標高 28.5m。比高 10～14m。	
16	和島村赤坂遺跡	田中・鈴木 1996	溝、竪穴住居	標高 90m前後。比高 80m。	遺構は掘削面の観察による。
17	刈羽村西谷遺跡	滝沢ほか 1992	Ｖ字状溝１	標高 13m。比高 4m。	
18	柏崎市西岩野遺跡	品田 1987	住居１、Ｕ字状溝１	標高 25～30、比高 20～25m。段丘上。	
19	柏崎市萱場遺跡	品田 1990	溝１、土壙？	標高５～6m、沖積地上。	
20	上越市裏山遺跡	本書	住居８、Ｌ字状溝３	標高 92m、比高 75m。	
21	上越市下馬場遺跡・ 下馬場古窯跡群	小島 '1989	竪穴住居４、墳墓１	標高 60～78m、比高 20～40m。	
		小池 1998	竪穴住居 14		
22	新井市斐太遺跡（上ノ平・ 矢代山遺跡、百両山遺跡）	駒井・吉田 1962	竪穴住居約 70、溝５	標高 80～88m、比高 45m以上。	
23	糸魚川市後生山遺跡	木島 1998 ほか	竪穴住居４	標高 39～42m、比高 34～37m。	

※遺跡名は新潟県遺跡地図［1983］による。

報告文献
1　関　雅之　1972『滝ノ前遺跡 新潟県村上市滝ノ前遺跡緊急調査概報』村上市教育委員会
2　川上　貞雄　1994『八幡山遺跡Ⅰ』新津市教育委員会
2　渡辺　朋和　1995「新津市八幡山遺跡：高地性環濠集落と方形周溝墓」『新潟県考古学会第７会大会研究発表会研究要旨』
3　川上　貞雄　1994「大倉山遺跡」『五泉市史』資料編一　原始・古代・中世　五泉市
4　長谷川二三夫・本間　桂吉　1989『新潟県考古学談話会会報』第３号
5　金子　正典　1999『内野手遺跡　経塚山遺跡』三条市教育委員会
7・8　田中　靖　1988『耳取遺跡等範囲確認調査報告書』見附市教育委員会
6　関　雅之・戸根与八郎　1974「大平城跡・双ツ塚遺跡調査報告」『北陸自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』新潟県教育委員会
9　駒形　敏朗ほか　1987『横山遺跡』長岡市教育委員会
10・11・12　長岡市　1992『長岡市史』資料編１考古　長岡市
13　小野　昭ほか　1982『大沢遺跡・Ⅱ』新潟大学考古学研究室
14　甘粕　健ほか 1984『山谷古墳』巻町教育委員会
15　藤巻　正信　1993「和島村奈良崎遺跡の第二期調査」『新潟県考古学会第５会大会研究発表会発表要旨』
15　春日　真実　2000「奈良崎遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成 11 年度
16　田中　靖・鈴木　俊成　1996「弥生時代の和島村」『和島村史』資料編１　和島村
17　滝沢　規朗ほか　1992『西谷遺跡』刈羽村教育委員会
18　品田　高志　1987『西岩野』柏崎市教育委員会
19　品田　高志　1990「萱場遺跡」『吉井遺跡群Ⅱ』柏崎市教育委員会
21　小島　幸雄　1989『下馬場古窯跡群確認調査報告書』上越市教育委員会
22　駒井　和愛・吉田章一郎　1962『斐太』慶友社
23　木島　勉　1998『平成９年度遺跡発掘調査概報』糸魚川市教育委員会

（２）時　期

集落の存続時期については、発掘調査例が少ないことから自ずと不明な点は多い。品田が中期以降の竪穴建物を平面形態と構造から検討する中で、既に時期的な動向は示されていたが［品田1992］、その後、滝沢が新潟シンポ（日本考古学協会新潟大会、東日本における古墳出現期の再検討）編年の時期区分［田嶋1993］を用いて集落の消長を詳細にまとめ［滝沢1995］、防禦的集落の消失時期が大きく２期（漆町編年の法仏式［田嶋1986］）と５期（同編年の月影Ⅱ式～白江式）に分かれるとした。前者には経塚山遺跡・大平城跡・山谷古墳・裏山遺跡・後生山遺跡、後者には八幡山遺跡・横山遺跡・大沢遺跡注（註２）・西谷遺跡・斐太遺跡が掲げられる。後生山遺跡・八幡山遺跡など後期前半に遡る例が多少ありながらも、越後で防禦的集落が盛行するのは概ね法仏式以降であり、裏山遺跡は大平城跡・経塚山遺跡と同様、ほぼ法仏式単純の高地性集落である。

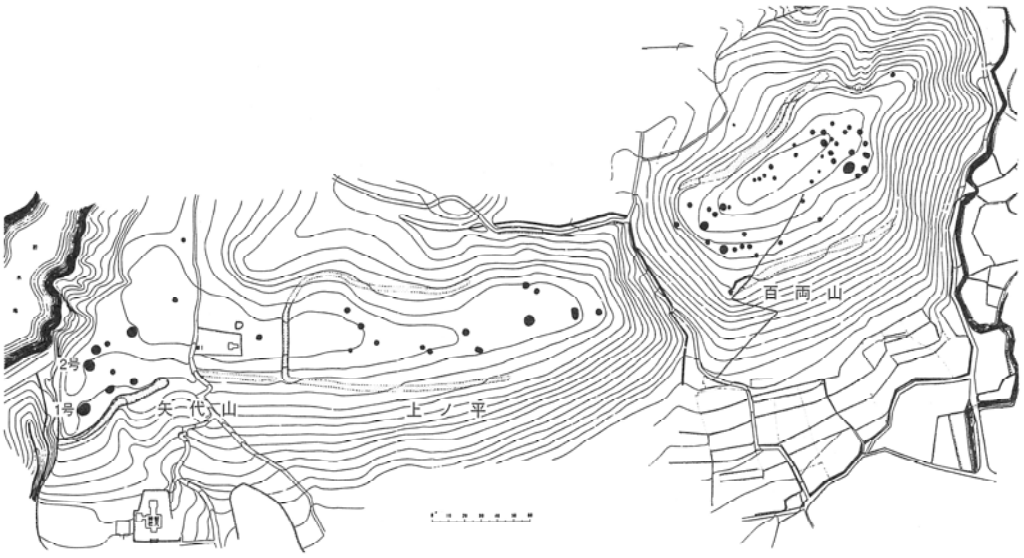
以上は、北陸系の土器を対象に一定の年代が与えられているものであるが、天王山式・天王山式系土器が一定量出土する新潟平野周辺・阿賀野川以北の遺跡については、それらの土器と北陸系土器との併行関係について再検討し、年代を与える必要があろう。甘粕は新潟平野東西縁に防禦的集落が密集し、これらに東北系の天王山式土器が出土することを敷衍して、北陸系土器が在地の東北系土器と交代する過程を想定した［甘粕1993ａ・1993ｂ］。このことは５期での防禦的集落の消失を、東北南部との緊張状態の解消が要因と想定している滝沢と共通するものである。

2　環濠と竪穴建物

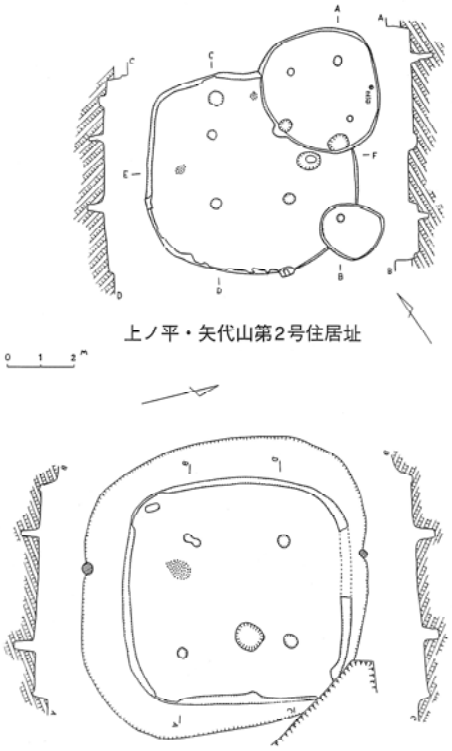
裏山遺跡の環濠は、尾根線を断ち切る部分のみが断面U字状、その他は斜面を段切りするようなL字状の造作で一部に小溝が付帯する部分がある。断面観察をするかぎり覆土は下底部から傾斜して堆積しており、溝状の環濠の斜面下方側が崩落したとは考え難い。同様な濠は小松市江田山遺跡にも存在し、同遺跡では「地形が尾根筋状に膨らむ部分に設けて、えぐれる谷地形部では省かれている。」と報告されている［樫田1993］。また、斐太百両山遺跡の環濠は「西側のものは深さ一米位もある溝状をなしており、‥‥東側のものには、このような溝の形は見られず、大体平坦なテラス状をなしている。‥‥このように壕は一応山の傾斜の強い所にはなく、ゆるやかな方面にあるわけであるが、‥‥断面V字形の壕とはいささか違っていて」とあり、矢代山遺跡の環濠は「東側のも西側のも‥‥テラス状をなしているにすぎない。」と記載されている［駒井・吉田1962］。両遺跡の環濠にはトレンチ調査がなされていないが、裏山遺跡の環濠と造作の意図を同じくするものと推測する。ただし、裏山遺跡の場合は、ごく傾斜の強い沢地形部のみを除外して環濠が掘削されている。このような環濠は北陸全域でも特異なものであろう。なお、新井市教育委員会が矢代山南西部付近を部分的に発掘した図面［坂井・金沢・川村1988］では断面U字形の環濠が示されている。

裏山遺跡の南環濠13・14ラインでは覆土の低位に炭化物を伴って土器が濃密に含まれており、それらは竪穴のそれと時期的に明らかな差はないので、集落が機能している間、既に廃棄物が投棄され、同時に埋没が進行していると思われる。南環濠の断面6地点・10地点に掘り直しが認められるが大規模なものではないことからも、環濠が当初の形状を保っていたのはごく短期間と考えられる。

竪穴建物の構造については、川村・品田・滝沢が都出の方法［都出1989］を基に地域的な系統性を問題にしており、川村は斐太上ノ平・矢代山遺跡1号住居址・同2号住居址を北陸・北信濃の折衷的な構造ととらえ［川村1996］、滝沢は5・6期に平面プランの方形化と求心構造への統一化が進むとした［滝沢1995］。裏山遺跡では、1号・2号竪穴が柱穴4基を方形に配置して炉を中央に置くいわゆる求心構造であるが、他の竪穴は定型的な柱穴配置をもっていない、あるいは柱穴を確認できない。炉は8号竪穴に明



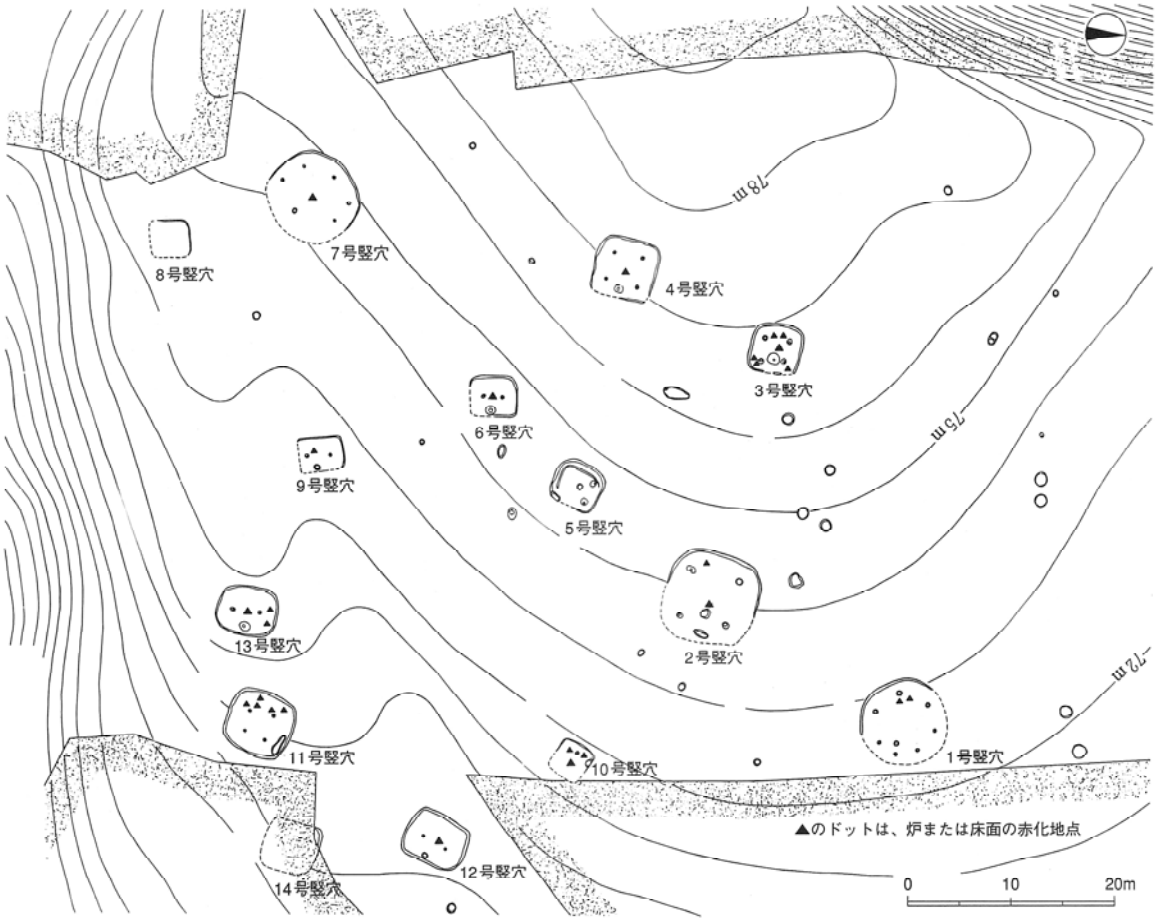
第24図　斐太遺跡概略図　〔駒井・吉田1962〕を一部改変



確な掘り込みが認められるが、1号・2号・3号・4号竪穴は地山整地面が赤変・橙変する程度でその範囲も広くない。ちなみに下馬場遺跡の竪穴建物では、炉以外に床面の硬化・赤化の認められるものがあり（第26図）、それらは床面より数cm台状に高まっているものが多い。また、上ノ平・矢代山遺跡1号住居址は「床面が焼けたところは・・・幾つかあった」、同2号住居跡も「炉と覚しい焼土」は2か所あったと記述されている［駒井・吉田1962］。したがって、裏山遺跡4号竪穴・上ノ平・矢代山遺跡住居址2基の「炉」が偏在しているとは一概に言えず（註3）、裏山遺跡では明確に北信濃の影響を見ることができない。なお、平面形が長方形を呈する7号竪穴は下馬場遺跡のB類［小池1998］に関係するものと見られる。時期的に大きな差がない裏山遺跡竪穴群の平面形・構造の相違は、主に竪穴の規模に関係するものと思われる。

裏山遺跡の竪穴群はすべて同時期に廃絶したわけではない。7号竪穴は覆土中に特に多量の焼土があり、1号・2号

第25図　斐太遺跡の竪穴建物〔吉田・駒井1962〕



第26図　下馬場遺跡概略図

〔小池1998〕を一部改変

竪穴でも覆土中に部分的な焼土の堆積が見られる。炉周辺に焼土が堆積する３号竪穴の例に疑問は残るが、これらの焼土は存続していたほかの竪穴からもたらされたと考えるのが自然で、火災による竪穴周辺土の被熱・落下、その場所での燃焼行為とは考えにくい。ただし、６号竪穴は炭化材の残存状況と壁の熱変から、最終的に上屋構造の一部あるいは全部が燃えたことは明らかである。また、近接し合う３号・４号が同時存在したとは思われず、両者間にも新旧関係があろう。

3　弥生後期の土器

（１）柏崎・刈羽の編年

「内越編年」［横山・坂井1983］が弥生時代後期から古墳時代初頭を、第Ⅰ期－畿内第Ⅴ様式末期－塚崎Ⅰ式期、第Ⅱ期－庄内式期－月影式期、第Ⅲ期－布留（古）式期－古府クルビ式期と位置付けて以降、弥生時代後期の土器は、良好な遺構出土資料がなかったという現状もあって、加賀・能登の編年を軸にそれとの併行関係が主に問題とされた。今日、加賀・能登では細分が進んで法仏式を４細分する編年が示されているが［栃木1995、楠1996］、新潟県域では大幅に資料が増加したとはいえ、１遺跡の中で長期的な土器の変遷を追いうる具体的なそれに恵まれていない。

頸城平野の東北に位置する柏崎・刈羽の平野部は、後期の土器が多く出土し、かつ編年の整備が進んでいる地域であり、裏山遺跡の土器を比較検討する上でこれまでの経緯を概観しておきたい。品田は87年に試案として、西岩野遺跡Ⅲ層主体的土器群から西岩野遺跡ＳＸ－50出土土器群・内越遺跡へという変化を考えていたが［品田1987］、90年には内越遺跡を古く見て「(内越)、戸口Ａ、西岩野」とする後期後半期の変遷を示した［品田1990ａ］また、『吉井遺跡群Ⅱ』ではそれを補足して「(内越段階)、戸口ＡⅠ期〈Ａ３地区11③グリッド第Ⅶ層一括土器〉、戸口ＡⅡ期〈ＳＤ－67溝およびその周辺出土土器群〉、西岩野段階〈第Ⅲ層出土の主体的土器群〉、(西岩野ＳＸ－50)」という序列をより明確に説明している［品田1990］。

滝沢は西谷遺跡の土器を主に畿内との併行関係でとらえ、後期後半～終末の編年を「Ⅴ－３〔法仏Ⅰ〕、Ⅵ－１（古）〔法仏Ⅱ〕、Ⅵ－１（新）、Ⅵ－２〔月影Ⅰ〕、Ⅵ－３〔月影Ⅱ〕」と整理して、Ⅵ－１（古）に西谷遺跡のⅤｂ層・砂層・Ⅴａ－２層出土土器を、Ⅵ－１（新）に西谷遺跡のⅤａ層出土土器をそれぞれあてた。また、戸口遺跡をⅤ－３、内越遺跡をⅥ－１（新）に置いて品田とは逆転した序列を示した［滝沢1992］。96年、品田は西谷遺跡の成果によって、西岩野段階の後に内越遺跡の資料が位置付けられることが改めて確認されたとし、月影式を除く後期後半期を４細分する編年を提示した。ここで内越遺跡（１号住居址・ＳＫ24）は西谷遺跡Ⅴａ層出土土器とともに最終の第14期とされ、滝沢がⅥ－１（古）にまとめていた土器（Ⅴｂ層・砂層・Ⅴａ－２層）も12期・13期に二分された［品田1996］。しかしながら、『新潟県の考古学』で内越遺跡は２期（［栃木1997］の法仏式）古段階に置かれており［金子・滝沢・丸山1999］、標識とした資料に質的制約があることもあり、内越遺跡をめぐって共通理解を欠いた状況にある。

（２）裏山遺跡の土器

栃木の編年観［栃木1987］にしたがって、谷内尾の法仏Ⅰ式・Ⅱ式［谷内尾1983］をいったん解消して考える時、越後では後出する月影Ⅰ式に相当する時期の資料が少なく、何を新旧の要素とするかは大きな問題である。また、新潟シンポ編年［田嶋1993］も各地域のそれを北陸全域の中で再整理したものであり、具体的な編年をもたない越後にあっては、これによって示されたものも同様、具体性に欠ける（註４）。

裏山遺跡の土器は、遺棄された出土状況を示している４号竪穴のほかは、遺構覆土の土器を含めてある時間幅の中で堆積したものである。これらは糸魚川市後生山遺跡３号住居跡（以下３住）［大森1986・木島1987］段階以降で、新井市斐太の上ノ平・矢代山遺跡24号住居址［滝沢1994］段階を含まない時期、概ね能登編年の３期［栃木1995］、西念・南新保編年における７期［楠1996］（法仏式）に相前後する時期のものと考えているが、ここでは主に後生山遺跡３号住居跡と比較する中で位置付けにふれておきたい。

ａ）出土土器の概略

甕　甕４者（口縁部に沈線文系の文様を持つ有段口縁甕＝Ａ、口縁部に沈線文系の文様を欠く有段口縁甕＝Ｂ、口頸部の断面形が「くの字」状の甕＝Ｃ、外来系の甕＝Ｄ）の比率は地域差を表す値としてしばしば比較され、北陸では北東部にゆくほどＡの比率が低いと言われる。主丘頂上Ⅱ層の掲載分では、甕Ｅ２類からＨ２類までを上記Ｃとした場合、分類不明を除く口縁部破片139点のうちＣが50％を占める（註５）。ただし、近江系甕あるいはそれが変容したと見られるものを含むＢ・Ｃ・Ｄ類は、分類の合理性に疑問が残るとはいえ、数値化に躊躇する。これらのとらえ方で数値は異なるが、Ａは10％を超えない。これは西谷遺跡（古）段階と同（新）段階［滝沢1993］に似通った値である。凹線文・沈線文系の文様については、別表のとおり非櫛描きの平行沈線文Ａが多数で、この傾向は壷・器台においても同様である。西念・南新保編年では、法仏式期に近江（北部）系甕が在来化し［楠1996］、新潟県内の資料でも法仏Ⅱ式併行期（Ⅵ－１）下る資料が若干存在するにすぎないと言われる［滝沢1993］が、これをもって具体的な時期を与えることはできない。外来系の甕はこのほかに小型の信州系甕（119）があり、縄文地文の（882）は天王山式系である可能性が多分にある。内面の調整については、（528）以外にヘラ削りの輪郭を認めるものがなく、北陸・北東部の中でも特異な状況にある。

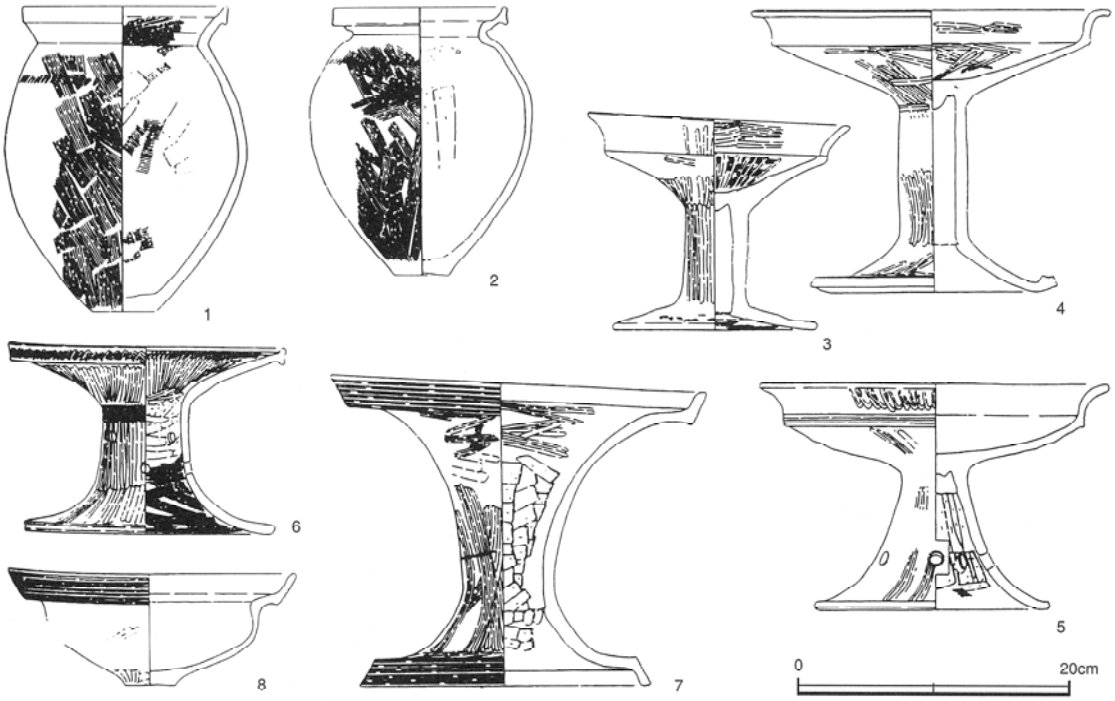
壷　沈線文系の文様は、甕とは対照的に多用され、広口壷に多く小型壷に少ない。その他の文様は、柏崎・刈羽ではごく少ない円形浮文・棒状浮文が散見でき、東海系パレススタイル壷（862・863）も含まれる。また、台付き（装飾）壷が一定量存在することも柏崎・刈羽とは異なる。裏山遺跡は祭式土器としての壷の比率が高いのであろうか。細頸壷は頸部に段をもつものが１点のみ見られる。

高杯・器台　法仏式～月影式の時期は、大局的には口縁部の伸長・外展と器高の小型化が進む傾向にあると言われる。高杯Ａには口縁部の長い（17）や身の浅い（687・688）など形態の差はあるが、個々の土器をとって新旧を示すことは難しい。しかし、３号竪穴の高杯は（17）・（19）が伸長した口縁部で、同竪穴の器台（21）とは形態に隔たりがある。このことは後者が覆土上層の、後者が一次堆積土の遺物であることとも一致する変化と思われる。11号土坑の近江系器台（Ｂ１類）は、後生山遺跡［木島1987］・戸口遺跡［品田1990］・大平城跡［滝沢1993］にも存在する。

鉢　有段口縁のＡ類は段部の形態に個体差があり、形骸化した（760）、口縁部が伸長する（330）など、やや後出的なものも見られる。ただし、著しく口径の小さいものはない。

ｂ）４号竪穴の土器

覆土中の混入物を除けば、４号竪穴に直接関係する甕は、口頸稜を付加状に厚くする25・26、有段口縁無文の27、口縁部を内外面ハケ目調整とする「くの字口縁」の28があり、後生山３住と同様、有段口縁有文の土器を欠く。ほかの竪穴においても沈線文系の有文甕は２号竪穴に出土層位不明の１点があるのみで、竪穴群の内側で帯状に配置される土坑群にも有文土器が見あたらない。したがって、竪穴のほぼ半分が欠



第27図　後生山遺跡３号住居跡の弥生土器　〔木島1987〕

失して不明であるものの、４号竪穴に有文の甕が存在した可能性は低いと見られる。内面の調整は後生山３住にヘラ削りするものがあるのに対して、４号竪穴には見いだせない。そもそも裏山の甕はヘラ削りするものが皆無に等しい。しかしながら、両竪穴の甕には有段口縁が未発達で、付加状の口縁部が主をなし、沈線文系の文様に乏しいという共通性をみることができよう。高杯は棒状脚と八の字状長脚の２者があるものの、後生山３住のように口縁部が直立気味にたちあがって強く外展するものなく、包含層の土器にもそれは存在していない。後生山の例は西念・南新保編年［楠1996］では主に２期（猫橋式期）末から３期（法仏式期）前半に置かれているものである。後生山に見られる近江系器台が裏山11号竪穴にもあることは前述した。余談ではあるが、裏山遺跡の鉄器が突出して多いことは、あながち外来系土器の存在と無関係ではあるまい。後期前半期は資料が少ないこともあって、後生山３住の位置付けは保留されているが［滝沢2000］、裏山４号竪穴の土器はこれに近接した時期にあると考えられる。上ノ平・矢代山２号住の土器は、裏山・後生山のように同時性の高いものではないものの、甕に有段口縁有文のものがあり、有段口縁の鉢に身の深いやや小型のものがあることなどからすれば、裏山４号竪穴の土器はこれに先行するのであろう。

近年、高田平野では子安遺跡［笹沢2000］のように当該期の資料が増え、頸城の様相が明らかになりつつある。これには後述する下馬場遺跡が重要な鍵となろう。内越遺跡住居址の土器については、裏山４号竪穴と大きな差異があるとは思われないが、柏崎・刈羽の中でも位置付けが揺らいでおり、今後の検討課題としたい。また、後期後半の最初とされている戸口遺跡については、後生山・裏山とは有文土器の比率や甕口縁部の形態などに隔たりがあると考えられる。

附　下馬場遺跡の概要

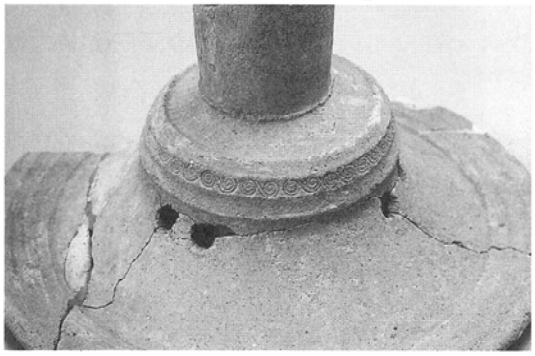
第28図　下馬場遺跡・斐太遺跡の位置
（国土地理院「重倉山」1:25,000 平成3年発行）

下馬場古窯跡群・下馬場遺跡は斐太遺跡の北方約2.5km、裏山遺跡の南方約7.3kmにある集落跡であるが、両者とも報告された情報が少ないため、若干の補足を加えて裏山と斐太を関連付ける一助としておきたい。前者は上越市教育委員会の調査によって弥生時代の竪穴建物・墳墓が確認され［小島1989］、後者は裏山遺跡発掘調査の翌年に、県教委が上信越自動車道用地内16,300㎡の調査を行って、14基の竪穴建物などが検出された［小池1998］。県教委の調査地点（上越市大字下馬場字浦山）は、狭い尾根に位置する上越市教委の調査地点とは地形的に区別される。県教委の地点は30,000㎡以上の広がりを有すると推定されるが、昭和46年前後に台地の大半が牧草地として造成されている。集落の火葬場であった部分は造成を免れ、４基の竪穴は斐太遺跡・裏山遺跡と同様な半埋没の状況にあった。

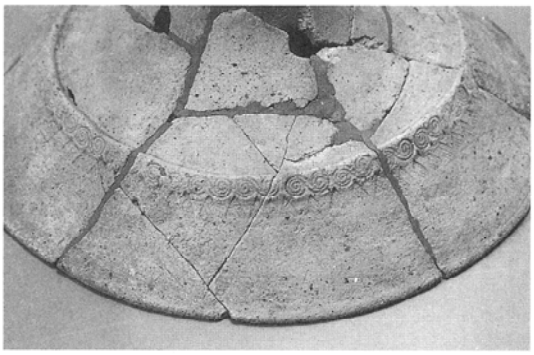
遺跡が位置する台地は、東方に向かって緩やかに傾斜し、現水田面とは40ｍほどの比高を測るが、北方の現水田面（標高約50ｍ）とは25ｍ前後で、周囲が急峻な地形にあるとは言えない。竪穴は、平面形が隅円方形で柱穴４本求心構造のＡ、長方形あるいは隅円方形で二本主柱構造のＢ、ほぼ円形で柱穴を環状に配する、その他または不明に分類でき、Ｂの竪穴がすくなくとも４基存在する（第26図）。この構造の竪穴は能登の後期後半にも継続して見られるものであるが、これま

第29図　下馬場遺跡「続縄文」類似土器

第30図　下馬場遺跡　石偶



第31図　下馬場遺跡　高杯のスタンプ文（１）



第32図　下馬場遺跡　高杯のスタンプ文（２）

で越後の類例は上ノ平・矢代山24号住居址でのみであった。

土器は「月影式に併行するものが主体」とされているが［小池1998］、法仏式に併行するものが主体と訂正しておく。8号竪穴でスタンプ文のある高杯が2点（一方は渦文D類・他方は渦文D類と鋸歯文併用、渦文は裏山と同様にZ字ⅢA$_1$・Mサイズ）あるほか、いわゆる続縄文土器に類似する破片が包含層中で出土している。また、北方系の文物である黒耀石製の石偶も注目される。玉作関連の剥片・砕片は、1号・7号竪穴で多出しており、玉作工房跡とされている後生山1号住居跡が平面円形であることとも共通しいている。管玉は製品・半製品が少なく、緑青色の石材より赤褐色のそれが圧倒的に多い。

おわりに

裏山遺跡発掘調査の、もうひとつの成果であった中世塚群については、検討をくわえられなかった。他日にゆずることとしてご容赦いただきたい。

註

（1）新潟県埋蔵文化財包蔵地カードの遺跡名を使用した。斐太遺跡は、［駒井・吉田1962］では百両山遺跡と同上ノ平・矢代山遺跡であり、［坂井1985］以降、山谷古墳は山谷古墳下層遺跡、大平城跡は大平城遺跡と呼称することが一般化している。

（2）滝沢は、大沢遺跡4号住居跡を新潟シンポ5期としているが、巻町史では法仏式に相前後する時期としている［荒木1994］。

（3）川村らが対称構造としている上ノ平・矢代山1号住居跡［川村1996ｂ］についても、同様の可能性がある。

（4）各編年の対応関係を以下に示す。

<table>
<tr><th>新潟シンポ
田嶋 1993</th><th>漆町遺跡
田嶋 1986</th><th colspan="2">西念・南新保Ⅳ
楠 1996</th><th>谷内・杉谷
栃木 1995</th><th>新潟県
滝沢 2000</th><th>越　後
坂井・川村 1993</th></tr>
<tr><td>1</td><td>1群</td><td>猫橋</td><td>2期</td><td></td><td>1期</td><td rowspan="6">Ⅰ（最新）</td></tr>
<tr><td>2</td><td>2群</td><td rowspan="2">法仏</td><td rowspan="2">3期</td><td rowspan="2">7期</td><td>2期（古）</td></tr>
<tr><td>3</td><td>（＋）</td><td>2期（新）</td></tr>
<tr><td>4</td><td>3群</td><td rowspan="2">月影</td><td rowspan="2">4期</td><td rowspan="2">8期</td><td rowspan="2">3期</td></tr>
<tr><td rowspan="2">5</td><td>4群</td></tr>
<tr><td>5群</td><td rowspan="2">白江</td><td rowspan="4">5期</td><td rowspan="4">9期</td><td rowspan="4">4期</td><td>Ⅱ－1
Ⅱ－2</td></tr>
<tr><td>6</td><td>6群</td></tr>
<tr><td>7</td><td>7群</td><td rowspan="2"></td><td>Ⅱ－3</td></tr>
<tr><td>8</td><td>8群</td><td>Ⅲ</td></tr>
</table>

［田嶋 1993］・［楠 1996］・［滝沢 2000］をもとに作成。

（5）残存率に関係なく破片数の比率。同一個体は1と数えた。掲載外の破片を含めても分類できないものが多く、データの信頼性は高まらないと思われる。

要　約

1．裏山遺跡は上越市大字岩木字裏山に所在する。

2．遺構は最高点が標高92mを測る台地と斜面、その裾で検出された。

3．発掘調査は上信越自動車道建設に伴い、平成７年度・８年度に実施した。調査地点は北陸自動車道と上信越自動車道が交叉する上越ジャンクション南端部にあたる。

4．遺跡は弥生時代後期の高地性環濠集落（竪穴８基・環濠３条）が主たるもので、古代平安期の竪穴建物（１基)、中世の塚群（３基）が複合する。

5．ひとつの高地性集落全域が発掘調査された例は、新潟県内では裏山遺跡が初例である。

6．出土遺物の大半は、弥生時代後期の土器・石器などであり、ほかに縄文時代早期から現代に及ぶ遺物がある。

7．弥生時代の遺物は、11点の鉄製品が注目され、鋤先が６点と多数であることは北陸全域でも特異である。また、角柱状の砥石が60点あまり出土しており、鉄器使用が浸透していた状況が窺われる。玉作関連の遺物もあり、集落で玉作工程の一部が行われていたことが推測できる。

8．中世の塚は写経石を埋納した経塚の一種で、経文は妙法蓮華経・無量義経・般若波羅蜜多心経がある。塚の築造は13世紀前半である可能性が高い。塚には写経石のほかに数珠・火打鎌などが埋納されていた。

引用・参考文献

ア　朝日新聞社　1999「99古代史発掘総まくり」『アサヒグラフ』1999．12．24増大号

阿部朝衛　1987「磨製石斧生産の様相」『史跡　寺地遺跡』新潟県青海町

甘粕　健ほか　1981『大沢遺跡Ｂ．Ｂ’地区の調査概報』巻町・潟東村教育委

甘粕　健・小野　昭ほか　1984『山谷古墳』巻町教育委員会

甘粕　健　1986「群集墳の展開」『新潟県史』通史編１　新潟県

甘粕　健　1993ａ「基調報告　東日本における古墳の出現－みちのくをめざして－」『東日本における古墳出現期の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会

甘粕　健　1993ｂ「古墳文化形成過程の新潟平野と会津盆地」『磐越地方における古墳文化形成過程の研究』平成２年度文部省科学研究費補助金（総合研究Ａ）研究成果報告書（研究代表者　甘粕　健）

甘粕　健ほか　1998『明日への文化財』41号　シンポジウム弥生の砦・裏山遺跡と『倭国大乱』特集　文化財保存全国協議会

新井市教育委員会　1995　『高柳遺跡群』（パンフレット）

新井市教育委員会　1996　『栗原遺跡第10次発掘調査経過現地説明会資料』（パンフレット）

荒川隆史・加藤　学　1999『上信越自動車道関係発掘調査報告書Ⅴ　和泉Ａ遺跡』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

荒木勇次　1994「大沢遺跡Ｂ’地区」『巻町史』資料編１考古　新潟県巻町

荒木勇次　1994「山谷古墳」『巻町史』資料編１考古　新潟県巻町

飯坂盛泰ほか　2000『上信越自動車道関係発掘調査報告書Ⅵ　上中島遺跡・野林遺跡』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

石川智紀ほか　1998『上信越自動車道関係発掘調査報告書Ⅲ　旧得法寺跡』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

井藤　徹　1986「４戦い　１石の武器　Ｄ環状石斧」『弥生文化の研究　9弥生人の世界』雄山閣

植木　宏・杉田幸治ほか　1977『新井市の古墳群－新潟県新井市古墳群詳細分布調査報告書－』新井市教育委員会

大森　勉　1986『後生山遺跡　新潟県糸魚川市後生山遺跡発掘調査概報』糸魚川市教育委員会

岡本　勇　1973「古墳とその時代」『新井市史』上巻　新井市

小熊博史　1989「縄文時代早期終末における絡条体圧痕文土器の一様相－新潟県中魚沼地方の資料を中心に」『信濃』第41巻第４号　信濃史学会

小野　昭・桑原陽一ほか　1988　『丸山遺跡発掘調査報告書』大潟町教育委員会

小野　昭ほか　1982『大沢遺跡・Ⅱ（第３次調査概報）』新潟大学考古学研究室

岡本淳一郎・三島道子・町田賢一・上田尚美　1999　「佐野台地における古墳出現期の土器について」『富山考古学研究』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査研究所

岡村道雄　1976「ピエス・エスキーユについて－岩手県大船渡市碁石遺跡出土資料を中心として－」『東北考古学の諸問題』東北考古学会

カ　樫田　誠　1993「北陸南西部の集落各説　河田山遺跡」『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会

春日真実　1999「土器編年と地域性」『新潟県の考古学』新潟県考古学会

金子拓男　1969「中部地方における斜刃石斧と擦截技法」『古代文化』21巻３・４号　財団法人古代学協会

金子拓男・高橋　保・秦　繁治ほか　1980　『水科古墳群発掘調査報告書』三和村教育委員会

＊同　1975　『水科古墳群発掘調査報告書（昭和50年度発掘調査報告書）』・同　1979　『国指定史跡　水科古墳群（第二次発掘調査報告書）』の合冊

金子拓男・宮腰公健・高橋　保　1976『梨ノ木古墳群万五郎古墳（１号墳）発掘調査報告書』新井市教育委員会

金子正典・滝沢規朗・丸山一昭　1999「第３項　弥生後期」『新潟県の考古学』新潟県考古学会

金子正典　1999「経塚山遺跡」『新潟県三条市　内野手遺跡　経塚山遺跡　市内遺跡発掘調査報告書』三条市教育委員会

河合　忍・林　大智　1999「方形板刃先・Ｕ字形刃先」『石川県考古資料調査・集成事業報告書』『農工具』石川考古学研究会

川村浩司　1988「新潟県籠峰遺跡の外来系土師器３例」『新潟考古学談話会会報』第１号

川村浩司　1990「倭国大乱と越後」『新潟史学会例会会報』第12号　新潟史学例会運営委員会

川村浩司　1993「北陸北東部の古墳出現前後の様相」『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会

川村浩司　1993「北陸北東部における古墳出現前後の土器組成」『環日本海地域比較史研究』第２回新潟大学環日本海地域比較史研究

川村浩司　1996「越の土器と古墳の展開」『越と古代の北陸』古代王権と交流３　名著出版

川村浩司　1996ｂ「弥生後期における北信濃と北陸」『考古学と遺跡の保護－甘粕　健先生退官記念論集』甘粕健先

生退官記念論集刊行会
木島　勉　1987「新潟県後生山遺跡」『日本考古学年報』38（1985年度版）日本考古学会
木島　勉　1998『平成9年度遺跡発掘調査概報』糸魚川市教育委員会
木島　勉　1994「Ⅳ遺物　2石器、Ⅷまとめ　1遺物　（2）磨製石斧について」『国指定史跡長者ヶ原遺跡－8次調査概報－』糸魚川市埋蔵文化財調査報告書24糸魚川市教育委員会
木島　勉　1999「第2章　第6節　第3項　磨製石斧　1　蛇紋岩製磨製石斧の生産と流通」『新潟県の考古学』高志書院
木下尚子　1986「2．ガラスの技術」『弥生文化の研究6　道具と技術Ⅱ』雄山閣
木村英祐　1998「市民の心に刻まれた裏山遺跡」『明日への文化財』41号　文化財保存全国協議会
日下部善己　1983「3石器Ⅱ　環状石斧」『縄文文化の研究　7道具と技術』雄山閣
楠　正勝・栃木英道　1999「弥生時代」『金沢市史』資料編19考古　石川県金沢市
楠　正勝　1996「弥生時代中期後葉から古墳時代前期前半の土器」『西念・南新保Ⅳ』金沢市・金沢市教育委員会
小池義人　1986「第Ⅲ章　遺跡各説　C.岩野E遺跡　5遺物　b石器，6まとめ　b石器について」『中原遺跡・岩野　A遺跡・岩野E遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第45集　新潟県教育委員会
小池義人　1998「下馬場遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成9年度
小池義人　1997「裏山遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成8年度
小池義人　1997b「上越市裏山遺跡の概要」『新潟県考古学会第9回大会研究発表会発表要旨』
小池義人・江口志麻　1998『上信越自動車道関係発掘調査報告書Ⅳ　関川谷内遺跡Ⅰ』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
小島幸雄・中村美恵子ほか　1979『岩木地区遺跡群発掘調査報告書』上越市教育委員会
小島幸雄　1989『下馬場古窯跡群確認調査報告書』上越市教育委員会
小島幸雄　1990『中島廻り遺跡範囲確認調査報告書』上越市教育委員会
小島幸雄　1991『中島廻り遺跡発掘調査報告書』上越市教育委員会
小島幸雄・中西　聰ほか　1995「東中島地区ほ場整備事業地内（前田遺跡）」『市内遺跡確認調査概要報告書』上越市教育委員会
小島幸雄・笹澤正史　1995『北割遺跡発掘調査報告書』上越市教育委員会
小島幸雄・中西　聰ほか　1996『前田遺跡発掘調査報告書』上越市教育委員会
小林康男　1988「Ⅲ生産と生活の道具　2縄文時代の道具　（2）石器　工具　環状石斧・多頭石斧」『長野県史考古資料編　遺構・遺物　全一巻（四）』長野県史刊行会
小林行雄　佐原　真ほか　1964『紫雲出』香川県三豊郡詫間町文化財保護委員会
駒井和愛・吉田章一郎　1962『斐太』慶友社
駒形敏朗ほか　1987『横山遺跡』長岡市教育委員会
サ　坂井秀弥　1985「越後の弥生後期についての覚書」『新潟県史研究』17　新潟県
小山正忠・竹原秀雄　1994『新版標準土色帖』日本色研事業株式会社
坂井秀弥・金沢道篤・川村浩司　1988「斐太遺跡群」『弥生時代の環濠集落をめぐる諸問題』埋蔵文化財研究会・東海埋蔵文化財研究会
坂井秀弥・川村浩司　1993「古墳出現期における越後の土器様相－越後・会津・能登」『磐越地方における古墳文化形成過程の研究』平成2年度文部省科学研究費補助金（総合研究A）研究成果報告書（研究代表者　甘粕健）
坂井秀弥　1995「越後・佐渡」『全国古墳編年集成』雄山閣出版
桜井清彦・小松芳男ほか　1959「新潟県高士村塚田1号墳調査報告」『古代』第33号　早稲田大学考古学会
笹沢正史　2000「子安遺跡」『第9回　東日本埋蔵文化財研究会　東日本弥生時代後期の土器編年』東日本埋蔵文化財研究会福島県実行委員会・福島県立博物館
沢田　敦　1997「黒田古墳群」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成8年度
品田高志　1996「編年編　越後」『ＹＡＹ！』弥生土器を語る会20回到達記念論文集
品田高志　1987「総括　柏崎平野における弥生時代後期」『西岩野』柏崎市教育委員会
品田高志　1990「総括　後期弥生土器の変遷」『吉井遺跡群Ⅱ』柏崎市教育委員会
品田高志　1992「越後の弥生集落－集落調査の現状と住居形態を中心に－」『柏崎市立博物館』館報№7
清水眞一　1992「ガラス小玉鋳型についての一考察」『考古学と生活文化』同志社大学考古学シリーズⅣ
下條信行・村上恭通・田崎博之　1998『日本における石器から鉄器への転換形態の研究　平成7年度～平成9年度科学研究費補助金（基礎研究B）研究成果報告書』
上越市教育委員会　1993「子安遺跡」『市内確認調査概要報告書』
末永雅雄ほか　1943『大和唐古弥生式遺跡の研究』
菅井良咲　1998「姥ヶ入南遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成9年度
鈴木　暁　1997「上越市裏山遺跡の保存運動」『新潟史学』第38号　新潟史学会
鈴木俊成・春日真実ほか　1994『北陸自動車道関係発掘調査報告書　一之口遺跡東地区』新潟県教育委員会・（財）

新潟県埋蔵文化財調査事業団
鈴木道之助　1974「縄文時代晩期における石鏃小考－所謂飛行機鏃と晩期石鏃について－」『古代文化』26－7　古代學協會
関　秀夫　1985『経塚遺文』東京堂出版
関　秀夫　1990『経塚とその遺物』日本の美術9　至文堂
関　雅之　1972『滝ノ前遺跡　新潟県村上市滝ノ前遺跡緊急調査概報』新潟県村上市教育委員会
関　雅之ほか　1973　『埋蔵文化財発掘調査報告書　北陸自動車道』新潟県教育委員会
関　雅之ほか　1974『長峰遺跡発掘調査報告』
関　雅之・戸根与八郎ほか　1974　「大平城跡・牛ヶ沢双ツ塚調査報告」『北陸高速自動車道　埋蔵文化財発掘調査報告書』新潟県教育委員会
関　雅之　1998「裏山遺跡と越後の高地性集落」『明日への文化財』41号　文化財保存全国協議会
タ　高橋一功　1994「遺跡の位置と環境」『北陸自動車道関係発掘調査報告書　一之口遺跡東地区』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
高橋　勉　1985『昭和59年度　新井市遺跡確認調査報告書　上百々遺跡・高柳宮ノ本遺跡』新井市教育委員会
高橋　勉　1984a　『月岡遺跡発掘調査報告書』新井市教育委員会
高橋　勉　1984b　『栗原遺跡　第7次・第8次発掘調査報告書』新井市教育委員会
高橋　勉　1985『月岡遺跡範囲確認緊急調査報告書』新井市教育委員会
高橋　勉　1989『杉明遺跡発掘調査報告書』新井市教育委員会
高橋　勉　1993『平成4年度　新井市遺跡確認調査報告書　杉明遺跡　姫川原地区　猿橋城跡　宮ノ本遺跡』新井市教育委員会
高橋　勉　1996「水田跡の発見と調査方法」『平成8年度新潟県市町村埋蔵文化財専門職員研修会』新潟県教育庁文化行政課
滝沢規朗　1992a　「西谷遺跡の編年的位置付け」『西谷遺跡』刈羽村教育委員会
滝沢規朗　1992b　「底部径の変遷とその製作技法について－柏崎平野を中心に－」『新潟考古学談話会会報』第10号
滝沢規朗　1993「古墳出現期における集落の動向－越後の集落を考える上での基礎整理として－」『研究紀要』（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
滝沢規朗　1993「越後における弥生後期以降の土器文様－凹線文系と刺突文を中心に－」『北越考古学』第6号北越考古学研究会
滝沢規朗　1994「新井市斐太遺跡群の出土土器について」『新潟考古』5　新潟県考古学会
滝沢規朗　1995「古墳出現前後における集落の動向－越後の集落を考える上での基礎整理として」『研究紀要』（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
滝沢規朗　2000「新潟県における弥生後期の土器編年」『第9回　東日本埋蔵文化財研究会　東日本弥生時代後期の土器編年』東日本埋蔵文化財研究会福島県実行委員会・福島県立博物館
田嶋明人ほか　1986「考察－漆町遺跡出土土器の編年的考察－」『漆町遺跡』石川県埋蔵文化財センター
田嶋明人　1993　北陸南西部の古墳確立期前後の様相」『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会
親跡　喬・野村忠司編　2000　『籠峰遺跡発掘調査報告書Ⅱ　遺物編』中郷村教育委員会
地学団体研究会新潟支部高田班・高田平野団体研究グループ　1997　『新潟県上越市岩木裏山遺跡周辺地域の地形と地質』
都出比呂志　1989「竪穴式住居の平面形」『日本農耕社会の成立過程』岩波書店
鶴田典昭　1997「がまん淵遺跡」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』13－小布施町内・中野市内その1・その2－（財）長野県埋蔵文化財センターほか
寺村光晴　1987「硬玉工房址と攻玉技術－寺地遺跡の硬玉生産をめぐって－」『史跡　寺地遺跡』新潟県青海町
田海義正　1996「上信越自動車道関係一次調査の概要」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成7年度
田海義正　1998「黒田古墳群」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成9年度
栃木英道　1991「石川県（加賀・能登地域）土器編年と東海系土器『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器』東海埋蔵文化財研究会
栃木英道　1995「考察」『谷内・杉谷遺跡群』石川県立埋蔵文化財センター
栃木英道　1993「能登の集落の概要」『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会
栃木英道　1987「考察　「月影式」土器をめぐる編年的な問題について」『古竹遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
冨山正明　1997「福井県林・藤島遺跡出土の鉄製品弥生時代後期の玉作工具を中心に－」『東日本における鉄器文化の受容と展開　発表要旨集』鉄器文化研究会
ナ　長岡市　1992「横山遺跡」『長岡市史』資料編1　考古
中川成夫・岡本　勇　1961『新潟県考古遺跡要覧Ⅱ－上越考古篇－』新潟県教育委員会
新潟市史編さん原始古代中世史部会　1994　「六地山遺跡」『新潟市史』資料編1　新潟市

日本考古学協会新潟大会実行委員会編　1993　『東日本における古墳出現過程の再検討』
西井龍儀ほか編　1999　『富山県の出現期古墳＜発表要旨・資料集＞』富山考古学会創立50周年記念シンポジウム　富山考古学会
ハ　橋本澄夫　1998「北陸の高地性集落」『明日への文化財』41号　文化財保存全国協議会
橋本博文　1997b「北陸における鉄器の普及と展開」『東日本における鉄器文化の受容と展開　発表要旨集』鉄器文化研究会
秦　繁治・関　雅之・戸根与八郎　1976　『宮口古墳群』牧村教育委員会
秦　繁治・関　雅之・戸根与八郎　1979　『宮口古墳群Ⅱ』牧村教育委員会
秦　繁治・小林義廣ほか　2000『菅原古墳群発掘調査報告書』清里村教育委員会
林　大智　1999「石川県における農具の鉄器化と手工業生産の導入について」『石川県考古資料調査・集成事業報告書　『農工具』石川考古学研究会
平井　勝　1991『弥生時代の石器』考古学ライブラリー64　ニュー・サイエンス社
藤巻正信・品田高志ほか　1985　『刈羽大平・小丸山』東京電力新潟原子力発電所建設地内埋蔵文化財発掘調査報告書　柏崎市教育委員会
星　奈津子　1997「歴史的環境」『上信越自動車道関係発掘調査報告書Ⅱ　大洞原Ｃ遺跡』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
マ　松原典明　1994「礫石経の諸相－特に中世の墳墓出土例を中心として」『立正考古』第33号　立正大学考古学研究会
麻柄一志　1983「北陸の高地性集落とその評価」『富山市考古資料館紀要』第２号
麻柄一志　1982「北陸の高地性集落とその評価」『考古学と古代史』　同志社大学考古学シリーズ刊行会
三ツ井朋子ほか　1997　『上信越自動車道関係発掘調査報告書Ⅱ　大洞原Ｃ遺跡』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
宮腰公健・山本　肇1978　『谷内林古墳群１号墳発掘調査報告書』新井市教育委員会
村上恭通　1998『倭人と鉄の考古学』　青木書店
室岡　博　1981『頸城地方の海と海底海浜遺跡』増補改訂版　上越市立総合博物館教養選書第一篇
室岡　博　1983「弥生時代の遺跡」『ふるさと大潟町』中頸城郡大潟町
室岡　博　1990『木崎山館城跡』柿崎町教育委員会
森岡秀人　1998「年代論と邪馬台国論争」『古代史の論点』４　権力と国家と戦争　小学館
森岡秀人　1998「高地性集落の現状と課題」『明日への文化財』41号　文化財保存全国協議会
ヤ　谷内尾晋司　1983「北加賀における古墳出現期の土器について」『北陸の考古学』石川考古学研究会
山田　聡　1996「大塚遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成７年度
横山勝栄・坂井秀弥ほか　1983『国道116号線埋蔵文化財発掘調査報告書　内越遺跡』新潟県教育委員会
吉岡康暢　1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館
吉田恵二・山本　肇ほか　1981『昭和55年度新井市埋蔵文化財調査報告書－遺跡確認調査－』新井市教育委員会
ラ　立正大学考古学会　1994　『特集・礫石経の世界』考古学論究　第３号
ワ　和田寿久　1997「姥ヶ入製鉄遺跡・姥ヶ入南遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成８年度
和田晴吾　1985「漁猟具」『縄文文化の研究』５道具と技術Ⅰ　雄山閣出版
渡邊朋和　1995「新津市八幡山遺跡：高地性環濠集落」『新潟県考古学会第７回大会研究発表会発表要旨』

■弥生土器観察表（1）　主丘頂上遺構

［層位］　環壕の（BT）は断面図の地点番号。　　［色調］　新版標準土色帖 1994 年版の表記による。　　［法量］　単位は㎜。
［胎土］　砂：径 2㎜未満の粗粒砂。砂礫：径 2㎜前後。礫（中）：径 3～4㎜程度。礫（大）：径 6～8㎜程度。空欄の場合は、砂・砂礫を少量～やや多く含む。鉱物は記載がない限り、チャートおよび少量の石英。

報告No.	地点大別	遺構	出土地点	層位	器種	分類	法量	残存率	胎土	色調	調整・文様等
1	主丘頂上遺構	1号竪穴	D区	3	甕	D	口：171 底：－	0/16	砂・砂礫の混入比較的少ない。	外：浅黄橙～褐灰 内：浅黄橙～褐灰	口縁部のみヨコナデ。その他はハケ目調整。体下半部のハケ目は多方向に交差する。
2	主丘頂上遺構	1号竪穴	D区	3	甕	G2	口：146 底：－	1/16		外：浅黄橙 内：浅黄橙	
3	主丘頂上遺構	1号竪穴	D区	3	甕	G	口：138 底：－	1/16		外：赤橙 内：赤橙	二次被熱か全面的に赤化著しい。
4	主丘頂上遺構	1号竪穴	D区	1・2	甕	A2a	口：180 底：－	3/16	砂・礫比較的少ない。	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	口縁端面に1条の沈線。
5	主丘頂上遺構	1号竪穴	D区	3	壺	有段口縁	口：135 底：－	1/16	砂はほとんど含まない。	外：明赤褐 内：明赤褐	内外面ヘラミガキ。
6	主丘頂上遺構	1号竪穴	D区	3	壺	有段口縁	口：133 底：－	2/16	礫（中・大）疎らに含む。	外：浅黄橙 内：浅黄橙	口縁下は凹線、あるいはそれに類するヨコナデ。口縁部中位・口頸稜上に沈線。
7	主丘頂上遺構	1号竪穴	D区	3	甕	底部	口：－ 底：49		礫（中・大）比較的多い。	外：浅黄橙 内：浅黄橙	
8	主丘頂上遺構	1号竪穴	D区	3	壺	底部	口：－ 底：26		砂礫・礫（中）多く見られる。	外：灰白 内：灰	器面の風化やや強い。
9	主丘頂上遺構	1号竪穴	C区	3	器台	脚台部	口：－ 底：－		砂礫やや多い。	外：浅黄橙 内：にぶい橙	内面ヘラケズリ。
10	主丘頂上遺構	1号竪穴	C区	3	蓋		口：30 底：－	16/16		外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	外面は縦方向のヘラミガキ。内面はハケ目調整とナデ。
11	主丘頂上遺構	3号竪穴	C区	1・2	甕	A2a	口：145 底：－	0/16	砂礫やや多い。	外：灰白～にぶい黄橙 内：灰白～にぶい黄橙	外面にスス状炭化物。
12	主丘頂上遺構	3号竪穴		トレンチ	甕	G2	口：156 底：－	2/16		外：灰白～浅黄橙 内：灰白～浅黄橙	
13	主丘頂上遺構	3号竪穴		3	壺？		口：131 底：－	1/16		外：淡黄～黄灰 内：褐灰	口縁部外面は、擬凹線文に類するヨコナデ。
14	主丘頂上遺構	3号竪穴	C区	3	甕	体部	口：－ 底：－		礫（大・中）疎らに含む。	外：灰白～黄灰 内：灰白～にぶい黄橙	
15	主丘頂上遺構	3号竪穴	C区	1・2	器台	脚台部	口：－ 底：146		砂・礫の混入少ない。	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	平行沈線文A。内面はハケ目調整とナデ。
16	主丘頂上遺構	3号竪穴		2	壺／鉢		口：151 底：－	1/16	砂・礫の混入少ない。	外：浅黄橙 内：浅黄橙	稜を強調する浅い沈線。内外面ヘラミガキ。
17	主丘頂上遺構	3号竪穴	A区	1・2	高杯	A2	口：285 底：－	2/16	砂礫を疎らに含む。	外：灰～黒 内：浅黄橙～にぶい黄橙	
18	主丘頂上遺構	3号竪穴	C区	1・2	高杯		口：－ 底：－		砂・礫ほとんど含まない。	外：灰白～にぶい黄橙 内：灰白	
19	主丘頂上遺構	3号竪穴	C区	1・2	器台	脚台部	口：－ 底：133		砂・礫ほとんど含まない。	外：灰白～にぶい黄橙 内：浅黄橙～にぶい黄橙	外面はヘラミガキ。脚端内面にスス状炭化物。
20	主丘頂上遺構	3号竪穴	C区	1・2・3	器台		口：－ 底：－		砂やや多く、礫（中）疎らに含む。	外：灰白～黄灰 内：灰白～黄灰	稜上に逆D字状の刺突文。平行沈線文A。
21	主丘頂上遺構	3号竪穴	B区	3	器台	A2	口：295 底：－	5/16	砂・砂礫の混入ごく少ない。	外：橙～暗灰 内：黄橙～暗灰	口縁部ヘラミガキ。他は不明。
22	主丘頂上遺構	3号竪穴		トレンチ	鉢	B	口：181 底：－	3/16	砂は比較的少ない。	外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：浅黄橙	
23	主丘頂上遺構	3号竪穴	B区	3	壺？	有段口縁	口：159 底：－	1/16		外：浅黄橙～灰 内：浅黄橙～灰	
24	主丘頂上遺構	3号竪穴	B区	3	有孔鉢		口：－ 底：44		礫（中）疎らに含む。	外：灰白～黒 内：灰白～黄灰	穿孔は不整円形。焼成後の穿孔か。

■弥生土器観察表（2）　主丘頂上遺構

報告No	地点大別	遺構	出土地点	層位	器種	分類	法量	残存率	胎土	色調	調整・文様等
25	主丘頂上遺構	4号竪穴	B区	4	甕	E2	口：154 底：34	2/16	礫（中・大）ごく疎らに含む。	外：浅黄橙～褐灰 内：浅黄橙～褐灰	外面はハケ目調整がナデ消されている面積が多い。ハケ目は粗く、凹凸明瞭。下半にスス状炭化物。底面赤化。
26	主丘頂上遺構	4号竪穴	B区	4	甕	E2	口：131 底：40	7/16	礫（大）ごく稀に含むが、砂・砂礫ほとんど含まない。	外：浅黄橙～橙 内：褐灰～橙	口縁部は擬凹線文に類するヨコナデ。外面ほぼ全面に炭化物。底部は赤化。
27	主丘頂上遺構	4号竪穴	B区	4	甕	A2a	口：174 底：43	0/16	礫（中・大）疎らに含む。	外：浅黄橙～褐灰 内：黄橙～褐灰	内外面ともハケ目調整とナデ。ハケ目不明瞭となる。底部赤化。外面は全面的にスス状炭化物。
28	主丘頂上遺構	4号竪穴	B区	4	甕	H2	口：180 底：44	6/16	砂礫、特に多い。	外：灰白～にぶい黄橙 内：灰白～褐灰	全面的にハケ目調整だが、底部内面のみハケ目が粗く、凹凸明瞭。底部を除く全面にスス状炭化物。底面にモミ圧痕1か所。
29	主丘頂上遺構	4号竪穴	B区	4	甕	G2	口：163 底：－	2/16		外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	口縁に僅かなスス状炭化物。。口縁赤化。
30	主丘頂上遺構	4号竪穴	B区	4	壷？	体・底部	口：－ 底：44			外：灰白～褐灰 内：灰白～褐灰	内外面ハケ目調整とナデだが、ほとんどナデ消されている。
31	主丘頂上遺構	4号竪穴	B区	4	甕	体・底部	口：－ 底：41		砂・砂礫のほとんど含まない。	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	外面は底部附近のハケ目がナデ消される。ハケ目は粗く、内面は外面より凹凸明瞭。
32	主丘頂上遺構	4号竪穴	B区	4	甕	体・底部	口：－ 底：46		礫（中）疎らに含む。	外：浅黄橙～橙 内：浅黄橙～灰	内外面ともハケ目調整とナデ。底面赤化。底面にモミらしき圧痕1か所。
33	主丘頂上遺構	4号竪穴	B区	4	鉢	A	口：204 底：－	1/16	礫（中）疎らに含む。	外：浅黄橙～褐灰 内：浅黄橙	外面にスス状炭化物。
34	主丘頂上遺構	4号竪穴	B区	4	高杯	A2	口：224 底：－	2/16	砂・礫の混入ごく少ない。	外：にぶい黄橙～暗灰 内：にぶい黄橙～褐灰	口縁部外面は擦痕明瞭なヨコナデと部分的なヘラミガキ。杯底部外面はハケ目調整を残すナデ。内面はヘラミガキ。
35	主丘頂上遺構	4号竪穴	B区	4		脚台部	口：－ 底：144		礫（中）まばらに見られるが、砂は少ない。	外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：浅黄橙～にぶい黄橙	
36	主丘頂上遺構	4号竪穴	B区	4	器台	脚台部	口：－ 底：－		砂・礫ほとんど含まない。	外：浅黄橙 内：浅黄橙	透孔数不明。
37	主丘頂上遺構	7号竪穴	C区	4	甕	E2	口：133 底：－	6/16	砂・礫ほとんど含まない。	外：にぶい黄橙～褐灰 内：にぶい黄橙～褐灰	体部外面はハケ目調整後とナデ。ハケ目は条線が細密。口縁の上面形は卵形に歪む。
38	主丘頂上遺構	8号竪穴		？	甕	G2	口：168 底：－	0/16	砂礫多い。	外：浅黄橙 内：灰白	器面は摩耗強い。
39	主丘頂上遺構	8号竪穴		1～4	甕	底部	口：－ 底：49			外：灰白～黄灰 内：褐灰	外周の一部橙化。
40	主丘頂上遺構	8号竪穴		？	甕	底部	口：－ 底：33			外：にぶい黄橙～黄灰 内：にぶい黄橙～黄灰	内外面、ハケ目調整とナデ。
41	主丘頂上遺構	8号竪穴		1～4	壷	小型壷	口：139 底：－	1/16	砂礫疎らに含む。	外：浅黄橙 内：にぶい黄橙	
42	主丘頂上遺構	8号竪穴		1～4	壷	底部	口：－ 底：33		砂・礫少ない。	外：浅黄橙～褐灰 内：浅黄橙	内外面ヘラミガキ。
43	主丘頂上遺構	8号竪穴		1～4		脚台部	口：－ 底：164		礫はほとんど含まない。	外：灰白～にぶい黄橙 内：灰白	透孔数不明。
44	主丘頂上遺構	2号竪穴	D区	1・2・3	甕	E1	口：160 底：－	2/16		外：にぶい黄橙～暗灰 内：浅黄橙	凹線文B。外面にスス状炭化物。
45	主丘頂上遺構	2号竪穴	D区	3	甕	A2b	口：154 底：－	1/16	砂礫多い。	外：浅黄橙～橙 内：浅黄橙～淡赤橙	外面は強い赤化。器面の摩耗やや強い。
46	主丘頂上遺構	2号竪穴	D区	3	甕	G2	口：140 底：－	1/16	砂・礫は比較的少ない。	外：にぶい黄橙 内：浅黄橙～にぶい黄橙	
47	主丘頂上遺構	2号竪穴	D区	3	甕	？	口：115 底：－	1/16		外：浅黄橙～褐灰 内：浅黄橙～褐灰	
48	主丘頂上遺構	2号竪穴	D区	3	壷？		口：155 底：－	0/16	砂・礫の混入ごく少ない。	外：灰白～にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	外面橙化。
49	主丘頂上遺構	2号竪穴	C区	3	壷	無段口縁長頸	口：180 底：－	0/16	礫（中）やや多い。	外：浅黄橙～淡黄 内：浅黄橙～淡黄	内面の摩耗強い。
50	主丘頂上遺構	2号竪穴	C区	3	壷	体部	口：－ 底：－		礫（中）やや多い。	外：灰白～浅黄橙 内：浅黄橙	内外面、ハケ目調整とナデ。内面の摩耗強い。

■弥生土器観察表（3）　主丘頂上遺構

報告No.	地点大別	遺構	出土地点	層位	器種	分類	法量	残存率	胎土	色調	調整・文様等
51	主丘頂上遺構	2号竪穴	D区	3		脚台部	口：－ 底：－		砂・礫をほとんど含まない。	外：にぶい橙～淡赤橙 内：にぶい橙～淡赤橙	内面はヘラケズりの後に四角柱状にナデられ、沈線が1条巡る。全面的な橙化。
52	主丘頂上遺構	5号竪穴	B区	3	壺	無段口縁短頸	口：174 底：－	0/16	砂・砂礫をほとんど含まない。	外：灰～褐 内：灰白～褐	外面はハケ目調整と丁寧なヨコナデ。堅緻な焼成。
53	主丘頂上遺構	5号竪穴	B区	3	壺	有段口縁長頸	口：146 底：－	0/16	礫ごく少ない。	外：灰白～明黄褐 内：灰白～明黄褐	外面は縦方向のヘラミガキ。内面はハケ目調整とナデ。
54	主丘頂上遺構	5号竪穴	B区	3	器台	脚台部	口：－ 底：189		砂礫・礫（中）疎らに含む。	外：浅黄橙～にぶい黄褐 内：浅黄橙～明黄褐	平行沈線文A。内面はハケ目調整。
55	主丘頂上遺構	6号竪穴	pit 1		甕	A2a	口：166 底：－	14/16	砂・礫ほとんど含まない。	外：浅黄橙～黄橙 内：浅黄橙～黄橙	口縁部は凹線文に類する2条のヨコナデ。内面は凹凸明瞭なヨコナデ。
56	主丘頂上遺構	6号竪穴	pit 1		甕	体部	口：－ 底：－			外：灰黄褐 内：にぶい黄橙	紡錘状圧痕文。
57	主丘頂上遺構	6号竪穴	pit 1		壺	小型壺？	口：146 底：－	0/16	砂・礫ほとんど含まない。	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	内外面ヘラミガキ。
58	主丘頂上遺構	6号竪穴	A区	6	壺	体部	口：－ 底：－		砂・礫ほとんど含まない。	外：にぶい黄橙～暗灰 内：にぶい黄橙～褐灰	外面はヘラミガキ。内面はハケ目調整。
59	主丘頂上遺構	6号竪穴	D区	4	高杯/器台		口：－ 底：－		砂・礫ほとんど含まない。	外：灰白～にぶい黄橙 内：灰白	外面は縦方向のヘラミガキ。
60	主丘頂上遺構	6号竪穴	D区	6	鉢	A	口：198 底：－	7/16	砂・礫ほとんど含まない。	外：にぶい橙～橙 内：にぶい橙～にぶい黄	底部附近の内外面に平滑なヘラミガキが残存。赤彩はほとんど剥落。
61	主丘頂上遺構	6号竪穴	pit 1		鉢	C	口：163 底：64	13/16	砂・礫ほとんど含まない。	外：明黄褐～褐灰 内：明黄褐～褐灰	外面はハケ目調整と丁寧なナデ。内面はナデ。
62	主丘頂上遺構	7号竪穴	pit 1		甕	E2/G2	口：134 底：－	1/16	砂礫少量含むが、砂は少ない。	外：にぶい黄橙～橙 内：橙	全面橙化。
63	主丘頂上遺構	7号竪穴	B区	2・3	甕	G2	口：135 底：－	1/16		外：灰白 内：灰白～明黄褐	
64	主丘頂上遺構	7号竪穴	B区	2・3	壺	有段口縁	口：136 底：－	0/16		外：灰白～黄橙 内：灰白～黄橙	稜上に紡錘状圧痕文。
65	主丘頂上遺構	7号竪穴	A区	2・3	壺	小型壺	口：115 底：－	1/16	砂・礫ほとんど含まない。	外：灰白～にぶい橙 内：灰白～にぶい橙	内外面ヘラミガキ。
66	主丘頂上遺構	7号竪穴	B区	2・3	高杯		口：－ 底：－		砂礫少量含むが、砂は少ない。	外：灰白～にぶい黄橙 内：灰白～明黄褐	
67	主丘頂上遺構	1号土坑			器台	A2	口：210 底：－	0/16	砂礫やや多い。	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	平行沈線文A。外面赤彩か。
68	主丘頂上遺構	1号土坑			高杯/器台		口：195 底：－	0/16	砂・礫少ない。	外：灰白 内：浅黄橙	外面はヘラミガキ。内面はヨコナデ。脚台部か。
69	主丘頂上遺構	1号土坑			鉢/壺		口：151 底：－	1/16		外：にぶい黄橙～灰 内：にぶい黄橙	外面はヘラミガキ。内面はヨコナデ。
70	主丘頂上遺構	1号土坑			壺	無頸壺	口：105 底：－	1/16		外：灰白～にぶい黄橙 内：灰白～にぶい黄橙	
71	主丘頂上遺構	1号土坑			甕/壺	底部	口：－ 底：44		砂礫・礫（中）多い。	外：にぶい黄橙～淡赤橙 内：にぶい黄橙	器面の摩耗強い。
72	主丘頂上遺構	2号土坑				把手	口：－ 底：－			外：浅黄橙～淡黄 内：	
73	主丘頂上遺構	4号土坑			甕	D	口：149 底：－	1/16		外：黒 内：灰白～にぶい黄橙	口頸稜・肩部に圧痕文。外面は全面黒変。
74	主丘頂上遺構	4号土坑			甕	E2/G2	口：118 底：－	0/16		外：灰白 内：浅黄橙	
75	主丘頂上遺構	4号土坑			壺	底部	口：－ 底：45			外：にぶい黄橙～褐灰 内：灰白～褐灰	底面ヘラケズリ。外面ヘラミガキ。
76	主丘頂上遺構	4号土坑				脚台部	口：－ 底：－		チャート砂・石英砂多く含む。	外：浅黄橙～灰 内：浅黄橙	

■弥生土器観察表（4）　主丘頂上遺構

報告No	地点大別	遺構	出土地点	層位	器種	分類	法量	残存率	胎土	色調	調整・文様等
77	主丘頂上遺構	5号土坑			甕	G2	口：141 底：－	0/16		外：灰白 内：灰白～灰	
78	主丘頂上遺構	5号土坑			甕	底部	口：－ 底：39			外：浅黄橙～黄灰 内：にぶい黄橙～黄灰	外面にスス状炭化物。底面赤化。
79	主丘頂上遺構	5号土坑			壷	頸・体部	口：－ 底：－			外：黄橙 内：浅黄橙	内外面摩耗強い。
80	主丘頂上遺構	6号土坑			甕	A2a	口：158 底：－	1/16		外：浅黄橙 内：浅黄橙～にぶい黄橙	外面にスス状炭化物。
81	主丘頂上遺構	6号土坑			甕	G1	口：135 底：－	1/16		外：灰白～にぶい黄橙 内：灰白～にぶい黄橙	外面にスス状炭化物。
82	主丘頂上遺構	6号土坑			甕	G2	口：150 底：－	2/16		外：灰白～褐灰 内：にぶい黄橙	口縁端面は擬凹線文に類するヨコナデ。
83	主丘頂上遺構	6号土坑			壷	小型壷底部	口：－ 底：29		砂・礫ほとんど含まない。	外：にぶい黄橙 内：明黄褐	
84	主丘頂上遺構	7号土坑			甕	F	口：199 底：－	1/16	石英砂粒めだつ。	外：灰 内：明黄褐～褐灰	
85	主丘頂上遺構	7号土坑			甕	G2	口：171 底：－	1/16		外：浅黄橙～褐灰 内：にぶい黄橙	
86	主丘頂上遺構	8号土坑			甕	E2/A2	口：175 底：－	1/16	砂・礫ほとんど含まない。	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	
87	主丘頂上遺構	8号土坑			壷	体部	口：－ 底：－			外：灰白～黄灰 内：褐灰	外面の風化著しい。
88	主丘頂上遺構	8号土坑			壷	底部	口：－ 底：28			外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙～褐灰	
89	主丘頂上遺構	9号土坑			甕	G1	口：166 底：－	0/16		外：浅黄橙～明黄褐 内：浅黄橙	外面にスス状炭化物。
90	主丘頂上遺構	9号土坑			壷	底部	口：－ 底：45			外：にぶい橙～灰 内：橙～褐灰	内面縦方向のナデ顕著。底面にモミ痕1点。
91	主丘頂上遺構	9号土坑			鉢	A	口：144 底：－	1/16		外：灰白～灰 内：灰白～にぶい黄橙	
92	主丘頂上遺構	10号土坑			壷	有段口縁	口：161 底：－	1/16		外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	
93	主丘頂上遺構	10号土坑			?	底部	口：－ 底：75			外：灰白 内：黄灰	
94	主丘頂上遺構	10号土坑			壷？	底部	口：－ 底：135		礫の混入ごく少ない。	外：暗赤褐～明褐 内：赤橙～褐	全面赤化著しい。底部の厚さ33mm前後。
95	主丘頂上遺構	12号土坑			壷	有段口縁	口：120 底：－	1/16		外：にぶい黄橙～明黄褐 内：明黄褐	
96	主丘頂上遺構	12号土坑			?	底部	口：－ 底：41			外：浅黄橙 内：褐灰	
97	主丘頂上遺構	12号土坑			壷	小型壷底部	口：－ 底：25			外：灰白～にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	
98	主丘頂上遺構	12号土坑			高杯		口：－ 底：－			外：灰白～褐灰 内：灰白～褐灰	外面下半は横方向のヘラミガキ。
99	主丘頂上遺構	2号溝			甕	A2a	口：168 底：－	2/16		外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：浅黄橙～にぶい黄橙	
100	主丘頂上遺構	2号溝			甕	G2	口：143 底：－	2/16		外：にぶい黄橙～にぶい黄褐 内：にぶい黄橙～にぶい黄褐	
101	主丘頂上遺構	2号溝			壷	無段口縁長頸	口：146 底：－	1/16		外：灰白～にぶい黄橙 内：灰白～にぶい黄橙	
102	主丘頂上遺構	2号溝			甕	底部	口：－ 底：49			外：にぶい黄橙～黄灰 内：にぶい黄橙～黄灰	ハケ目は粗く、凹凸明瞭。底面にモミらしき痕跡3か所。

■弥生土器観察表（5）　主丘頂上遺構

報告No	地点大別	遺構	出土地点	層位	器種	分類	法量	残存率	胎土	色調	調整・文様等
103	主丘頂上遺構	2号溝			甕	底部	口：－ 底：54		底面に長さ13㎜のチャート礫1点あり。	外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：灰白～にぶい黄橙	
104	主丘頂上遺構	2号溝			高杯/器台		口：195 底：－	8/16	砂・礫ほとんど含まない。	外：にぶい黄橙～褐灰 内：にぶい黄橙～褐灰	内外面平滑なヘラミガキ。
105	主丘頂上遺構	2号溝			壺	小型壺底部	口：－ 底：40		砂・礫ほとんど含まない。	外：にぶい黄橙～灰 内：にぶい黄橙	
106	主丘頂上遺構	1号溝			甕	A1	口：183 底：－	4/16	砂・礫ごく少ない。	外：にぶい黄橙～橙 内：明黄褐～黄橙	擬凹線文。施文具の動きは左回り。
107	主丘頂上遺構	1号溝			甕	A3	口：156 底：－	0/16	緻密さに欠ける生地土。砂・砂礫少ない。	外：にぶい黄橙～明黄褐 内：にぶい黄橙～橙	口頸稜・肩部に刺突文。
108	主丘頂上遺構	1号溝			甕	A1	口：174 底：－	0/16	緻密さに欠ける生地土。	外：にぶい黄橙～橙 内：にぶい黄橙～橙	器面の摩耗強い。全面橙化。
109	主丘頂上遺構	1号溝			甕	A2a	口：146 底：－	1/16		外：浅黄橙 内：浅黄橙	
110	主丘頂上遺構	1号溝			甕？		口：148 底：－	1/16		外：浅黄橙 内：浅黄橙～褐灰	
111	主丘頂上遺構	1号溝			壺	有段口縁	口：210 底：－	1/16	砂礫・礫（中）やや多い。	外：にぶい黄橙～にぶい橙 内：にぶい黄橙～明黄橙	
112	主丘頂上遺構	1号溝			甕	A2a/E2	口：169 底：－	3/16	砂・礫ほとんど含まない。	外：赤橙～橙 内：赤橙～淡赤橙	全面的に赤化。
113	主丘頂上遺構	1号溝			甕	E2？	口：139 底：－	0/16		外：橙 内：橙	外面の摩耗やや強い。全面的な赤化。
114	主丘頂上遺構	1号溝			？		口：106 底：－	0/16	砂礫多い。	外：灰白～明黄褐 内：灰白～灰黄褐	
115	主丘頂上遺構	1号溝			甕	G2	口：173 底：－	2/16	砂・砂礫ごく少ない。	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	口縁端面は凹線状に窪む。外面にスス状炭化物。
116	主丘頂上遺構	1号溝			甕	G2	口：159 底：－	1/16	礫（中・大）疎らに含む。	外：淡黄～褐灰 内：浅黄橙～灰	外面にスス状炭化物。
117	主丘頂上遺構	1号溝			甕	G2	口：146 底：－	4/16	礫（中）疎らに含む。	外：にぶい橙～にぶい黄褐 内：にぶい黄橙～褐灰	
118	主丘頂上遺構	1号溝			甕	G2	口：199 底：－	0/16	礫（大）疎らに含む。	外：浅黄橙 内：浅黄橙	
119	主丘頂上遺構	1号溝			甕	I	口：144 底：－	1/16	チャート砂礫を含まず、微細な金雲母片を多く含む。	外：にぶい黄橙～にぶい橙 内：にぶい黄橙～明赤褐	全面橙化著しい。櫛描きの波状文と直線文。
120	主丘頂上遺構	1号溝			？		口：121 底：－	2/16	砂礫を多く含む。	外：にぶい黄橙～橙 内：にぶい黄橙～橙	全面橙化。
121	主丘頂上遺構	1号溝			甕	体部	口：－ 底：－			外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	紡錘状圧痕文。
122	主丘頂上遺構	1号溝			甕	底部	口：－ 底：48		砂礫やや多い。	外：にぶい黄橙～橙 内：浅黄～黄灰	全面的に弱い橙化。
123	主丘頂上遺構	1号溝			甕	底部	口：－ 底：43		砂礫（中）多く含む。	外：にぶい橙～褐灰 内：にぶい黄橙～灰	底面の橙化。
124	主丘頂上遺構	1号溝			甕	底部	口：－ 底：36			外：黒 内：褐灰	外面黒変。
125	主丘頂上遺構	1号溝			壺	小型壺	口：140 底：－	6/16	砂礫・礫（大）ごくまれに含む。	外：浅黄橙～灰 内：浅黄橙～灰	平行沈線文B1・E2。
126	主丘頂上遺構	1号溝			壺	有段口縁	口：109 底：－	2/16	砂礫やや多い。	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙～灰	外面黒変。
127	主丘頂上遺構	1号溝			壺	有段壺	口：120 底：－	4/16	緻密さに欠ける生地土。砂・礫を含まない。	外：黄橙～橙 内：にぶい黄橙～黄橙	
128	主丘頂上遺構	1号溝			壺	有段壺	口：136 底：58	1/16	127に近似する生地土。	外：橙～明黄褐 内：浅黄橙～にぶい黄橙	形態も127に近似するが、口径異なる。口縁部にごく僅かな赤彩。

■弥生土器観察表（6）　主丘頂上遺構

報告No.	地点大別	遺構	出土地点	層位	器種	分類	法量	残存率	胎土	色調	調整・文様等
129	主丘頂上遺構	1号溝			壺	無段口縁	口：120 底：－	1/16	緻密さに欠ける生地土。砂礫を含まない。	外：にぶい黄橙～淡黄 内：にぶい黄橙～淡黄	
130	主丘頂上遺構	1号溝			壺	無段口縁	口：113 底：－	3/16	砂・砂礫疎らに見られる。	外：にぶい黄橙～淡黄 内：にぶい黄橙～淡黄	
131	主丘頂上遺構	1号溝			壺	無段口縁長頸	口：131 底：－	2/16	砂やや多い。	外：灰白～にぶい黄橙 内：灰白～にぶい黄橙	
132	主丘頂上遺構	1号溝			壺	頸・体部	口：－ 底：－		礫（中）疎らに含む。	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	外面はハケ目を残すヘラミガキ。内面は肩部がヨコナデ。その他は指ナデ。
133	主丘頂上遺構	1号溝			壺	底部	口：－ 底：46			外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：浅黄～黄灰	
134	主丘頂上遺構	1号溝			壺	底部	口：－ 底：55		砂礫やや多い。	外：淡黄～黄灰 内：浅黄橙～淡橙	外面にスス状炭化物。器面の摩耗やや強い。
135	主丘頂上遺構	1号溝			甕	G1	口：210 底：－	0/16	緻密さに欠ける生地土。砂・礫ほとんど含まない。	外：橙 内：橙～淡黄	全面橙化。
136	主丘頂上遺構	1号溝			器台	脚台部	口：－ 底：－			外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	外面は平行沈線文B1・B2。内面はヨコナデ。
137	主丘頂上遺構	1号溝			器台	B2	口：274 底：－	0/16	砂・礫をほとんど含まない。	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	滑沢なヘラミガキ。外面にハケ目を僅かに残す。
138	主丘頂上遺構	1号溝				脚台部	口：－ 底：170		砂・礫をほとんど含まない。	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	脚端内側に幅3㎜程度の接地面あり。滑沢なヘラミガキ。
139	主丘頂上遺構	1号溝			鉢	C	口：140 底：－	2/16	砂・礫をほとんど含まない。	外：黄灰 内：にぶい黄橙	ハケ目は粗く、内部に微細な条線。
140	主丘頂上遺構	1号溝			有孔鉢		口：－ 底：41		礫（中・大）やや多い。	外：灰白～浅黄橙 内：浅黄橙	穿孔は不正円形。
141	主丘頂上遺構	1号溝			有孔鉢		口：－ 底：48		チャート礫（中・大）多く含む。	外：浅黄～黒褐 内：黒褐	内面は棒状具の角を用いたナデ。穿孔は正円で底面側に広がる。
142	主丘頂上遺構	1号溝			有孔鉢		口：－ 底：49		砂礫やや多い。	外：浅黄橙 内：浅黄橙	焼成後の穿孔か。
143	主丘頂上遺構	3号土坑			甕	A2a	口：231 底：－	1/16	砂礫多く、礫（中）疎らに含む。	外：灰白 内：浅黄橙～にぶい黄橙	凹線文B。器面の摩耗やや強い。
144	主丘頂上遺構	3号土坑			甕	A3	口：176 底：－	0/16	礫（中）まれに含む。	外：灰白～にぶい黄橙 内：灰白～黄灰	
145	主丘頂上遺構	3号土坑			甕	D	口：146 底：－	0/16	砂礫多い。	外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：灰白～黄灰	口縁部は擬凹線文に類するヨコナデ。外面にスス状炭化物。
146	主丘頂上遺構	3号土坑			甕	G2	口：160 底：－	0/16	チャート砂礫・石英砂礫疎らに含む。	外：灰 内：淡黄～灰黄	外面にスス状炭化物。
147	主丘頂上遺構	3号土坑			甕	G1	口：149 底：－	0/16		外：浅黄橙～灰黄褐 内：黄橙～灰黄	外面に厚い炭化物。
148	主丘頂上遺構	3号土坑			甕	G2	口：170 底：－	1/16		外：淡黄 内：淡黄	器面の摩耗やや強い。
149	主丘頂上遺構	3号土坑			甕	G2	口：170 底：－	3/16		外：灰白～にぶい黄橙 内：灰白～にぶい橙	口縁端部、凹線状に窪む。
150	主丘頂上遺構	3号土坑			甕	G2	口：138 底：－	1/16		外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：浅黄橙	口縁端面に1条の沈線。外面にスス状炭化物。
151	主丘頂上遺構	3号土坑			甕	G	口：150 底：－	0/16	砂礫多い。	外：浅黄橙 内：灰黄	内面の一部にスス状炭化物。
152	主丘頂上遺構	3号土坑			甕	G1	口：135 底：－	0/16		外：にぶい黄橙 内：灰白～にぶい黄橙	外面に厚い炭化物。
153	主丘頂上遺構	3号土坑			甕	G2	口：130 底：－	1/16	砂礫やや多く、礫（大）疎らに含む。	外：灰白～にぶい黄橙 内：灰白～にぶい黄橙	
154	主丘頂上遺構	3号土坑			甕	底部	口：－ 底：46		砂礫多く、礫（中・大）疎らに見られる。	外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：灰白～黄灰	

■弥生土器観察表（7） 主丘頂上遺構

報告№	地点大別	遺構	出土地点	層位	器種	分類	法量	残存率	胎土	色調	調整・文様等
155	主丘頂上遺構	3号土坑			甕	底部	口：－ 底：46		礫（中）疎らに含む。	外：褐灰 内：褐灰	底面にモミ圧痕1か所。
156	主丘頂上遺構	3号土坑			壷	有段口縁	口：140 底：－	2/16	礫（中）まれに含む。	外：浅黄橙～褐灰 内：にぶい黄橙～にぶい橙	内面橙化。
157	主丘頂上遺構	3号土坑			壷	細頸壷	口：－ 底：－			外：灰白～にぶい黄橙 内：灰白～にぶい黄橙	頸部外面はハケ目を残したミガキ、頸部内面はナデ。肩部外面は平滑なヘラミガキ。
158	主丘頂上遺構	3号土坑			壷	小型壷体部	口：－ 底：－		軟質の褐色砂礫（鉱物不明）疎らに含む。	外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	
159	主丘頂上遺構	3号土坑			壷	小型壷体・底部	口：－ 底：33		砂・砂礫比較的少ない。	外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：褐灰～黄灰	外面は滑沢なヘラミガキ。外面にスス状炭化物。
160	主丘頂上遺構	3号土坑				脚台部	口：－ 底：239		礫（中）・砂礫疎らに含む。	外：灰白～淡黄 内：淡黄	器面の摩耗強い。
161	主丘頂上遺構	3号土坑			器台	A2	口：225 底：－	4/16	礫（大・中）疎らに含むが、器面への露出少ない。。	外：灰白～橙 内：灰～にぶい橙	口縁部外面は特に明瞭なヘラミガキ。
162	主丘頂上遺構	3号土坑				脚台部	口：－ 底：175			外：灰白 内：灰白	透孔数不明。
163	主丘頂上遺構	3号土坑			鉢	A	口：190 底：－	4/16	砂は含むが、砂礫はごく少ない。	外：灰白～浅黄橙 内：灰白～浅黄橙	内外面、平滑なヘラミガキ。
164	主丘頂上遺構	3号土坑			鉢		口：130 底：－	0/16	砂礫多く、礫（大）まれに含む。	外：灰白～にぶい黄橙 内：褐灰	外面の摩耗強いが、ハケ目おぼろげに残る。
165	主丘頂上遺構	3号土坑			有孔鉢		口：－ 底：55		砂礫やや多い。	外：灰白～暗灰 内：浅黄橙	正円形の穿孔。内面に向かって広がる。
166	主丘頂上遺構	11号土坑			甕	A2a	口：148 底：－	1/16		外：にぶい黄橙～褐灰 内：にぶい黄橙～黄灰	口頸稜に丸状圧痕。外面に薄いスス状炭化物。
167	主丘頂上遺構	11号土坑			甕	E2	口：156 底：－	0/16		外：灰白～明黄褐 内：にぶい黄橙	外面に薄いスス状炭化物。
168	主丘頂上遺構	11号土坑			甕	G2	口：170 底：－	2/16	砂礫少量含むが、砂は少ない。	外：浅黄橙 内：浅黄橙	口縁外面は凹線状に窪む。外面に厚い炭化物。169と同一個体。
169	主丘頂上遺構	11号土坑			甕	G2	口：161 底：－	1/16		外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：浅黄橙～にぶい黄橙	口縁外面の窪み少ないが、168と同一個体。
170	主丘頂上遺構	11号土坑			甕	H1	口：160 底：－	5/16	礫（中・大）疎らに含む。	外：褐灰～黒 内：褐灰～褐	内外面、口縁直下からハケ目調整。内面のハケ目は粗く、凹凸明瞭。
171	主丘頂上遺構	11号土坑			壷	有段口縁長頸	口：129 底：－	1/16		外：浅黄橙～にぶい橙 内：にぶい黄橙～にぶい橙	器面の摩耗強くハケ目不明瞭。
172	主丘頂上遺構	11号土坑			壷	無頸壷	口：81 底：30	0/16	砂・礫を含まない。ただし、中粒砂は多い。	外：にぶい橙～褐灰 内：にぶい黄橙～にぶい黄褐	内外面ヘラミガキ。
173	主丘頂上遺構	11号土坑			高杯	A	口：－ 底：－		砂・礫ごく少ない。金雲母ごく少量含む。	外：褐灰～黄灰 内：にぶい黄橙～灰	内外面ヘラミガキ。
174	主丘頂上遺構	11号土坑			器台	B1	口：238 底：151	2/16	砂礫・礫（中）疎らに含む。	外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：浅黄橙～にぶい黄橙	受け部外面は部分的にハケ目を残すヘラミガキ。端部外面にごく浅い沈線、あるいはヨコナデ。受け部内面はミガキ。脚台部はナデ。 外面の赤彩は口縁部にのみ明瞭で、他はごく薄く部分的。
175	主丘頂上遺構	11号土坑			器台	B1	口：－ 底：－		砂は含むが、礫はごく少ない。	外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：浅黄橙	内外面ミガキ。
176	主丘頂上遺構	11号土坑			器台	脚台部	口：－ 底：－		砂・礫を含まない。	外：灰黄褐 内：にぶい黄橙	外面ヘラミガキ。内面はナデ。透孔数不明。

■弥生土器観察表（8）　環　　濠

報告No.	地点大別	出土地点	層位	器種	分類	法量	残存率	胎土	色調	調整・文様等
177	東環濠	K-5	ユカ	甕	F	口：159 底：－	3/16	砂礫・礫（中）多く含む。	外：浅黄橙～橙 内：浅黄橙	外面全体に厚い炭化物。内面はナデ、屈曲部付近はヘラケズリ。外面橙化。
178	東環濠	I-2	ユカ	甕	G2	口：153 底：－	7/16	砂礫・礫（中）多く、チャート礫（大）疎らに含む。	外：灰白～褐灰 内：灰白～褐灰	器面の摩耗強く、調整不明。外面に炭化物。
179	東環濠	J-1	ユカ	甕	G2	口：140 底：－	0/16		外：浅黄橙 内：褐灰	外面にスス状炭化物。
180	東環濠	I-3	ユカ	甕	F/G2	口：138 底：－	4/16	礫（中）疎らに含む。	外：浅黄橙 内：浅黄橙	
181	東環濠	J-3	ユカ	甕	A2	口：171 底：－	0/16	砂礫多く含む。	外：灰白 内：灰白	器面の摩耗強い。
182	東環濠	K-4	ユカ	甕	H2	口：138 底：－	1/16		外：橙 内：浅黄橙	内外面、口縁直下からハケ目調整。外面に厚い炭化物。
183	東環濠	I-3	ユカ	甕	G2	口：126 底：－	1/16		外：浅黄橙～褐灰 内：褐灰	
184	東環濠	K-4	ユカ	壺	細頸壺	口：71 底：－	1/16	砂・礫ごく少ない。	外：灰白 内：灰白	外面摩耗強い。平行沈線文Aか。
185	東環濠	K-5	ユカ	壺	広口壺A	口：185 底：－	3/16	礫（中・大）ごく疎らに含む。	外：灰白 内：灰白	
186	東環濠	I-2	ユカ	壺	広口壺B？	口：138 底：－	1/16	砂は多いが、礫は含まない。	外：灰白～褐灰 内：灰白	口縁端面は凹線状に浅く窪む。
187	東環濠	I-5	ユカ	高杯	A2	口：229 底：－	1/16	砂礫多く、礫（中）疎らに含む。	外：浅黄橙 内：浅黄橙	器面の風化著しい。
188	東環濠	J-1	5（BT 16）		脚台部	口：－ 底：259			外：褐灰～灰黄 内：褐灰～灰黄	
189	東環濠	J-2	ユカ	鉢	A	口：199 底：－	1/16	砂多く、礫（中）疎らに見られる。	外：浅黄橙～褐灰 内：浅黄橙～褐灰	内外面ミガキ。内面の摩耗やや強い。
190	東環濠	K-4	ユカ	鉢	B	口：143 底：－	2/16	砂多く、礫（中～大）ごく疎らに見られる。	外：にぶい橙 内：橙	外面にスス状炭化物。内外面橙化。外面の摩耗やや強い。
191	東環濠	K-4	ユカ		脚台部	口：－ 底：55		礫を含まない。	外：橙 内：にぶい橙	内面はハケ目調整とナデ。
192	東環濠	K-5	ユカ	蓋		口：30 底：－	16/16	砂・砂礫多く含む。	外：橙 内：浅黄橙	
193	東環濠	J-18	1	有孔鉢		口：54 底：－	14/16	砂礫多く、礫（中）疎らに含む。	外：灰白～黒褐 内：灰白	
194	南環濠	15-2	6（BT 8）	甕	A1	口：216 底：－	1/16	砂多く、礫（大）疎らに見られる。	外：灰 内：灰白	外面は摩耗著しい。
195	南環濠	13-4	5・7（BT 6）	甕	A1/A2	口：193 底：－	3/16	礫（中・大）疎らに含む。	外：浅黄橙 内：浅黄橙	外面に厚い炭化物。
196	南環濠	14-1	1～3（BT 6）	甕	A2a	口：－ 底：－			外：黄灰 内：にぶい黄橙～褐灰	口頸稜にギザギザのある線状圧痕文。
197	南環濠	M-1	9（BT 12）	甕	A1	口：155 底：－	1/16	礫（中）疎らに含む。	外：浅黄橙～橙 内：浅黄橙～橙	
198	南環濠	11-5	1・2（BT 3）	甕	A2a	口：154 底：－	2/16		外：灰白 内：灰白	
199	南環濠	13-1	9～12（BT 4）	甕	A2a	口：159 底：－	4/16	礫（中）多い。	外：淡黄～黄灰 内：黄灰	器面の摩耗強い。
200	南環濠	M 4-5		甕	A2b	口：165 底：－	2/16	礫（中）疎らに含む。	外：黄灰 内：灰白～浅黄橙	外面に厚い炭化物。
201	南環濠	11-1		甕	A2a	口：170 底：－	2/16	チャート・石英砂礫多い。	外：灰黄 内：淡黄	器面の摩耗強い。
202	南環濠	9-5	6・8（BT 2）	甕	A2a	口：140 底：－	1/16	礫（中）多く見られる。	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	器面の摩耗やや強い。外面にスス状炭化物。

■弥生土器観察表（9） 環　濠

報告No	地点大別	出土地点	層位	器種	分類	法量	残存率	胎土	色調	調整・文様等
203	南環濠	10-1	8（BT2）	甕	A2a	口：176 底：－	1/16		外：灰白 内：褐灰	口縁部外面はヨコナデ、あるいは擬凹線文。外面にスス状炭化物。
204	南環濠	12-1	1・2（BT3）	甕	A2/D	口：159 底：－	1/16	礫（中）疎らに含む。	外：淡黄 内：浅黄橙～明黄褐	
205	南環濠	9-5	6～8（BT2）	甕	A3	口：149 底：－	2/16		外：灰白 内：褐灰～黄灰	
206	南環濠	13-4	1・3（BT6）	甕	C	口：185 底：－	4/16		外：灰白 内：灰白～浅黄橙	口縁部内外面、擬凹線文に類するヨコナデ。
207	南環濠	13-4	5・7（BT6）	甕	C/A2b	口：175 底：－	2/16	礫（中）疎らに含む。	外：灰白～にぶい黄橙 内：灰白	
208	南環濠	13-1	1・2・4・5（BT4）	甕	C	口：139 底：－	2/16		外：浅黄橙～橙 内：浅黄橙～橙	外面にスス状炭化物。
209	南環濠	13-5	5・7（BT6）	甕	A2？	口：110 底：－	2/16		外：浅黄橙～灰 内：浅黄橙	圧痕文は摩耗して不明瞭。
210	南環濠	10-1	ユカ	甕	A2b	口：169 底：－	1/16	砂礫多い。	外：浅黄橙～灰黄 内：淡黄～灰	口縁部に僅かなスス状炭化物。器面の摩耗強い。
211	南環濠	10-2		甕	D？	口：131 底：－	2/16		外：淡黄～灰 内：淡黄	
212	南環濠	10-3		甕	D	口：149 底：－	4/16		外：浅黄橙～灰 内：浅黄橙～明黄褐	口縁部に１条の凹線。頸部外面にスス状炭化物。
213	南環濠	N-1	ユカ	甕	A2	口：175 底：－	1/16		外：浅黄橙 内：淡黄	
214	南環濠	14-2	1～3（BT7）	甕	A1	口：156 底：－	3/16		外：浅黄橙～褐灰 内：浅黄橙～灰	
215	南環濠	13-4	5・7（BT6）	甕	A2	口：178 底：－	2/16	砂礫多い。	外：淡黄～灰黄 内：淡黄	口頸稜に紡錘状圧痕文。外面の摩耗やや強い。
216	南環濠	12-4	1・2・4・5（BT4）	甕	A2b/B	口：146 底：－	2/16	チャート・石英礫（中）やや多い。	外：浅黄橙～灰褐 内：浅黄橙～にぶい黄橙	
217	南環濠	10-4		甕	B/A2b	口：155 底：－	1/16	礫ほとんど含まない。	外：浅黄橙～明黄褐 内：灰～明黄褐	
218	南環濠	13-3	1・2・4・5（BT4）	甕	A2a	口：168 底：－	0/16	礫（中）疎らに含む。	外：にぶい橙～淡赤橙 内：にぶい橙～淡赤橙	全面橙化。
219	南環濠	13-4	5・7（BT6）	甕	B	口：168 底：－	2/16		外：浅黄橙 内：浅黄橙	
220	南環濠	11-5	1・2（BT3）	甕	A2b	口：175 底：－	0/16	砂礫・礫（中）多い。	外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：浅黄橙	外面にスス状炭化物。器面の摩耗強い。
221	南環濠	排土		甕	E2	口：151 底：－	2/16	砂・礫ほとんど含まない。	外：黒褐 内：灰黄～黒褐	
222	南環濠	9-5	6・8（BT2）	甕	E2	口：161 底：－	0/16	砂礫の混入少ない。	外：浅黄橙 内：浅黄橙～にぶい橙	223と同一個体。
223	南環濠	10-1	ユカ	甕	E2	口：163 底：－	2/16		外：浅黄橙 内：浅黄橙～黄橙	222と同一個体。
224	南環濠	9-5	6・8（BT2）	甕	E2	口：188 底：－	0/16	礫（中）疎らに含む。	外：浅黄橙 内：浅黄橙	器面の摩耗やや強い。
225	南環濠	13-3	6（BT5）	甕	G1	口：228 底：－	4/16	礫（中）疎らに含む。	外：灰白～浅黄橙 内：淡黄～黄灰	
226	南環濠	13-1	1・2・4・5（BT4）	甕	G1	口：168 底：－	0/16		外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	
227	南環濠	10-4		甕	G1	口：221 底：－	1/16	砂礫多く含む。	外：浅黄橙～にぶい橙 内：浅黄橙～黄灰	口縁～体部上半に厚い炭化物。
228	南環濠	13-3	6（BT5）	甕	F/G1	口：184 底：－	2/16	砂やや多いが、礫ごく少ない。	外：にぶい橙 内：にぶい黄橙～黄橙	口縁部外面にスス状炭化物。

■弥生土器観察表（10）　環　　濠

報告No.	地点大別	出土地点	層位	器種	分類	法量	残存率	胎土	色調	調整・文様等
229	南環濠	14-?	1～3（BT7）	甕	G1	口：155 底：－	0/16	チャート・石英砂礫多い。	外：浅黄橙 内：浅黄橙～明黄橙	器面の摩耗強い。
230	南環濠	11-3	1～3（BT3）	甕	G2	口：117 底：－	2/16	礫（中）疎らに含む。	外：淡黄～黄灰 内：淡黄～灰	
231	南環濠	15-2	6（BT8）	甕	G1	口：163 底：－	1/16	礫（中）疎らに含む。	外：浅黄橙 内：浅黄橙	
232	南環濠	9-5	6・8（BT2）	甕	G2	口：143 底：－	2/16	砂礫の混入少ない。	外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：浅黄橙～にぶい黄橙	口縁外面はごく浅い2条の凹線状ヨコナデ。
233	南環濠	13-3	4（BT6）	甕	G2	口：130 底：－	2/16	砂・礫ごく少ない。	外：浅黄橙～橙 内：浅黄橙～橙	口縁端面は凹線状に浅く窪む。
234	南環濠	10-4		甕	G2	口：166 底：－	1/16		外：橙～褐灰 内：黄橙	口縁外面は凹線状に浅く窪む。
235	南環濠	13-2	9～12（BT4）	甕	G2	口：161 底：－	2/16	砂礫やや多い。	外：にぶい黄橙 内：浅黄橙	口縁外面は凹線状に浅く窪む。器面の摩耗やや強い。
236	南環濠	13-3	6（BT5）	甕	G1	口：146 底：－	1/16	礫（中）疎らに含む。	外：浅黄橙 内：浅黄橙	外面はハケ目調整とヨコナデ。
237	南環濠	10-5		甕	G2	口：190 底：－	0/16	砂礫やや多い。	外：灰白～浅黄橙 内：灰白	
238	南環濠	13	1・2・4・5（BT4）	甕	G2	口：194 底：－	0/16	砂・砂礫の混入少ない。	外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：浅黄橙～淡黄	
239	南環濠	9-5	6・8（BT2）	甕	G1？	口：126 底：－	0/16		外：浅黄橙 内：黄灰	
240	南環濠	10-1		甕	G2	口：141 底：－	1/16	砂・砂礫多い。	外：明黄褐～灰黄褐 内：浅黄橙	内面の摩耗強い。
241	南環濠	11-5	1・2（BT3）	甕	F/G2	口：156 底：－	1/16	砂・礫の混入少ない。	外：灰白 内：淡黄	
242	南環濠	13-5	1～3（BT6）	甕	G2	口：171 底：－	0/16	チャート・石英砂礫多い。	外：灰白～浅黄橙 内：黄灰～浅黄橙	口縁部にごく薄いスス状炭化物。器面の摩耗やや強い。
243	南環濠	14-5	1～3（BT7）	甕	G1	口：175 底：－	2/16		外：灰白～明黄褐 内：灰白～黄褐	
244	南環濠	11-2	4（BT3）	甕	G2	口：175 底：－	1/16	砂礫やや多い。	外：浅黄橙 内：浅黄橙	
245	南環濠	10-1		甕	G2	口：173 底：－	1/16	砂礫・礫（中）多い。	外：浅黄橙 内：灰白	器面の摩耗強い。
246	南環濠	13-2	12（BT4）	甕	G1	口：185 底：－	0/16	砂礫多い。	外：浅黄橙 内：浅黄橙	器面の摩耗やや強い。
247	南環濠	13-1	1・2・4・5（BT4）	甕	G1？	口：121 底：－	0/16		外：浅黄～灰黄 内：浅黄橙～灰黄	器面の摩耗強い。
248	南環濠	10-3		甕	G1	口：180 底：－	1/16	砂礫多い。	外：灰白～にぶい黄橙 内：灰白～にぶい黄橙	外面に厚い炭化物。
249	南環濠	13-1	6・7（BT4）	甕	G	口：179 底：－	0/16	砂礫の混入ごく少ない。	外：灰白 内：浅黄橙～褐灰	外面にスス状炭化物。
250	南環濠	13-1	6・7（BT4）	甕	H1	口：183 底：－	0/16		外：にぶい黄橙～褐灰 内：にぶい黄橙	口縁部内外面にハケ目調整。
251	南環濠	13-5	5・7（BT5）	壺？		口：151 底：－	4/16		外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：浅黄橙～にぶい黄橙	口縁部外面は丁寧なヨコナデ。
252	南環濠	13-3	6（BT5）	甕？		口：196 底：－	2/16		外：灰白～褐灰 内：灰白	端面に1条の沈線。
253	南環濠	12-3	1・2（BT3）	甕	体部	口：－ 底：－			外：褐灰 内：灰白～浅黄橙	直径5.5㎜の環状圧痕文。
254	南環濠	14-1	1～3（BT6）	甕	体部	口：－ 底：－			外：灰 内：暗灰	紡錘状圧痕文。

■弥生土器観察表（11）　環　　濠

報告No	地点大別	出土地点	層位	器種	分類	法量	残存率	胎土	色調	調整・文様等
255	南環濠	9-5	6・8（BT 2）	甕	体部	口：－ 底：－			外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：暗灰	紡錘状圧痕文。
256	南環濠	9-1	6・8（BT 2）	甕	体部	口：－ 底：－			外：黄橙 内：浅黄橙～黄橙	紡錘状形圧痕文。器面を掻き取るような手法。
257	南環濠	11	2・4（BT 3）	甕	E1	口：266 底：－	4/16	チャート・石英砂礫の混入多い。	外：浅黄橙～明黄橙 内：浅黄橙～明黄橙	器面の摩耗やや強い。
258	南環濠	11	2・4（BT 3）	甕	A2 a	口：313 底：－	3/16		外：灰白 内：灰白～黄灰	内面は屈曲部付近へラケズり。
259	南環濠	13-1	1・2・4・5（BT 2）	甕	体部	口：－ 底：－		砂礫やや多く、礫（大）まばらに含む。	外：灰白～灰 内：黄灰	
260	南環濠	14-3	1～3（BT 7）	甕	体・底部	口：－ 底：56		砂多く、礫（大）疎らに含む。	外：灰白～灰 内：黄灰	
261	南環濠	13-5	6（BT 6）	壺	有段壺	口：193 底：－	1/16	砂礫の混入ごく少ない。	外：灰白～にぶい黄橙 内：灰白～にぶい黄橙	平行沈線文A。
262	南環濠	排土		壺	有段口縁	口：153 底：－	1/16	砂礫の混入ごく少ない。	外：灰白～にぶい黄橙 内：灰白～にぶい黄橙	平行沈線文A。
263	南環濠	14-5	12・13（BT 7）	壺	有段口縁短頸	口：136 底：－	2/16	砂礫の混入ごく少ない。	外：灰白～にぶい黄橙 内：灰白～にぶい黄橙	平行沈線文A。
264	南環濠	10-4		壺	有段口縁	口：141 底：－	1/16		外：褐灰～淡黄 内：淡黄	凹線文C。
265	南環濠	11-3	1～3（BT 3）	壺/甕	有段口縁	口：139 底：－	1/16	砂礫やや多い。	外：灰白～淡橙 内：褐灰	外面摩耗強く文様は不明。
266	南環濠	9-5	6～8（BT 2）	壺	有段口縁短頸	口：108 底：－	1/16	砂礫含まない。	外：浅黄燈 内：浅黄燈～褐灰	円形浮文は付着していた痕跡のみ。
267	南環濠	13-3	6（BT 5）	壺	有段壺	口：123 底：－	1/16	砂礫の混入ごく少ない。	外：灰白 内：灰白～にぶい赤褐	
268	南環濠	10-1	ユカ	壺	有段口縁	口：155 底：－	0/16	砂礫やや多い。	外：灰白～明黄橙 内：灰白	内面の摩耗やや強い。
269	南環濠	15-1	ユカ	壺	有段口縁	口：158 底：－	0/16	礫（中）疎らに含むが、砂・砂礫少ない。	外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：灰白～明黄橙	内外面丁寧なヨコナデ。
270	南環濠	9-5	6～8（BT 2）	壺	有段口縁短頸	口：154 底：－	1/16		外：浅黄橙 内：灰白～浅黄橙	口縁端面に1条の沈線。
271	南環濠	13-4	5・7（BT 6）	壺	有段口縁短頸	口：121 底：－	8/16	砂礫含むが、器面への露出少ない。	外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：浅黄橙～にぶい黄橙	内外面丁寧なヨコナデ。
272	南環濠	13-2	1・2・4・5（BT 4）	壺	有段口縁	口：183 底：－	0/16	礫（大）疎らに含む。	外：浅黄橙～淡橙 内：浅黄橙～淡橙	
273	南環濠	13-3	6（BT 5）	壺	有段口縁短頸	口：151 底：－	2/16		外：浅黄橙 内：浅黄橙～褐灰	
274	南環濠	13-3	6（BT 5）	壺	有段口縁長頸	口：130 底：－	1/16		外：灰白～褐灰 内：灰白	
275	南環濠	13-5	1～3（BT 5）	壺	有段口縁長頸	口：139 底：－	0/16	礫（中・大）疎らに含む。	外：灰白～浅黄橙 内：灰白～浅黄橙	口縁部内外面は、擬凹線文に類するヨコナデ。
276	南環濠	11-2	1～3（BT 3）	壺	有段口縁長頸	口：163 底：－	1/16		外：灰白～黄灰 内：浅黄橙～明黄褐	
277	南環濠	11-2		壺	有段口縁長頸	口：138 底：－	0/16	礫（中・大）疎らに含む。	外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：浅黄橙	
278	南環濠	13-4	5・7（BT 6）	壺	有段口縁	口：159 底：－	1/16		外：灰黄褐 内：浅黄橙～にぶい黄橙	
279	南環濠	12-3	1・2（BT 3）	壺	有段口縁短頸	口：163 底：－	2/16	砂礫の混入少ない。	外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：浅黄橙～黄橙	
280	南環濠	13-4	5・7（BT 6）	壺	有段口縁	口：161 底：－	4/16		外：灰白～浅黄橙 内：灰白	

■弥生土器観察表（12）　環　　濠

報告№	地点大別	出土地点	層　　位	器　種	分　　類	法　量	残存率	胎　　土	色　　調	調　整　・　文　様　等
281	南環濠	15-1	12・13（BT7）	壷	無段口縁長頸	口：118 底：－	3/16		外：灰白～灰 内：灰白	
282	南環濠	M-2	ユカ	壷	無段口縁長頸	口：139 底：－	1/16	砂礫の混入ごく少ない。	外：浅黄橙～にぶい橙 内：にぶい橙	器面の剥落やや多い。
283	南環濠	M-1	ユカ	壷	無段口縁長頸	口：138 底：－	2/16	礫（大）疎らに含む。	外：灰白～にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	内面は擦痕明瞭なヨコナデ。
284	南環濠	9-5	6～8（BT2）	壷	無段口縁長頸	口：156 底：－	0/16	砂礫の混入少ない。	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙～にぶい橙	外面はハケ目調整とナデ。
285	南環濠	13-3	6（BT5）	壷	無段口縁短頸	口：105 底：－	1/16	緻密さに欠ける粉っぽい生地土。	外：浅黄橙 内：褐灰～淡黄	
286	南環濠	13-5	5・7（BT6）	壷	無段口縁短頸	口：135 底：－	0/16		外：淡黄～灰 内：淡黄	
287	南環濠	16-1	ユカ	壷	無段口縁長頸	口：133 底：－	3/16	砂粒多い。	外：淡黄 内：淡黄	
288	南環濠	13-3	6（BT5）	壷	体部	口：－ 底：－		砂礫の混入ごく少ない。	外：灰白～黄灰 内：灰黄～黄灰	外面はハケ目を残すミガキあるいはナデ。内面はやや凹凸のあるナデ。
289	南環濠	13-5	4～7（BT6）	壷	体部	口：－ 底：－			外：灰白 内：暗灰	
290	南環濠	10-5		壷	小型壷	口：91 底：－	1/16		外：浅黄橙 内：浅黄橙	
291	南環濠	11-2	ユカ	壷	小型壷	口：110 底：－	1/16	砂礫の混入少ない。	外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：橙	
292	南環濠	13-5	1～3（BT6）	壷	小型壷	口：110 底：－	0/16	砂礫やや多いが器面への露出少ない。	外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：浅黄橙	内面の剥落著しい。
293	南環濠	11-3	3・4（BT3）	壷	小型壷	口：81 底：－	0/16	ごく薄い器壁だが、砂粒の含まれる通有の胎土。	外：浅黄橙 内：浅黄橙	
294	南環濠	13-3	6（BT5）	壷	小型壷	口：130 底：－	0/16	砂礫多い。	外：浅黄橙～暗灰 内：浅黄橙～暗灰	内面の剥落著しい。
295	南環濠	10-5		壷	小型壷	口：115 底：－	0/16		外：灰白～橙 内：灰白～橙	
296	南環濠	13-1	1・2・4・5（BT4）	壷	小型壷	口：88 底：－	0/16		外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	
297	南環濠	13-1	9～12（BT4）	壷	小型壷	口：98 底：－	0/16		外：灰白 内：灰白	
298	南環濠	13-3	6（BT5）	壷	無頸壷	口：131 底：－	1/16		外：灰白 内：灰白	
299	南環濠	15-3	6（BT8）	壷	無頸壷	口：108 底：－	1/16		外：明褐灰～褐灰 内：にぶい黄橙	
300	南環濠	13-1	1・2・4・5（BT4）	壷	無頸壷	口：119 底：－	1/16		外：黄灰～にぶい黄橙 内：黄灰	
301	南環濠	13-4	5・7（BT6）	壷	細頸壷	口：－ 底：－		砂・礫の混入ほとんどない。	外：にぶい黄橙～にぶい黄褐 内：にぶい黄橙～にぶい黄褐	
302	南環濠	M-5		壷	有段口縁短頸	口：314 底：－	1/16	礫（中・大）疎らに含む。	外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	平行沈線文A。内面に横方向のヘラミガキ。
303	南環濠	16-1	ユカ	壷	壷	口：－ 底：－			外：明黄褐 内：浅黄橙～にぶい黄橙	沈線による矢羽状文。
304	南環濠	13-1	1・2・4～7（BT4）	高杯	A2	口：256 底：－	1/16	砂・礫の混入ほとんどない。	外：浅黄橙 内：淡赤橙～灰白	外面橙化。赤彩はほとんど残存していない。
305	南環濠	13-1	1・2・4～7（BT4）	高杯	A1	口：274 底：－	0/16	砂・砂礫の混入あるが、器面への露出少ない。	外：灰白～褐灰 内：灰白～褐灰	外面はハケ目を残したヘラミガキ。内面はミガキ。
305	南環濠	13-2	6・7（BT4）						外：灰白～褐灰 内：灰白～褐灰	

■弥生土器観察表（13）　環　　濠

報告№	地点大別	出土地点	層　位	器　種	分　類	法　量	残存率	胎　土	色　調	調　整・文　様　等
306	南環濠	13-3	6（BT3）	高杯	A2	口：291 底：－	2/16	礫（大）疎らに含む。	外：浅黄橙 内：浅黄橙	内面は滑沢なミガキ。赤彩良好に残存。
307	南環濠	14-5	1～3（BT7）	高杯	A2	口：196 底：－	2/16	礫（中・大）疎らに含む。	外：黄橙～褐灰 内：黄橙～褐灰	
307		15-1・2	6（BT2）					砂・砂礫ごく少ない。	外：黄橙～褐灰 内：黄橙～褐灰	
308	南環濠	13-3	6（BT3）	高杯	A2	口：218 底：－	4/16	砂・砂礫多く、礫（大）疎らに含む。	外：浅黄橙 内：黄橙	口縁の整形は端整でなく歪む。内面底部の剥落著しい。内面口縁部に薄い炭化物。
309	南環濠	11-5	1・2（BT3）	高杯	B	口：238 底：－	1/16		外：灰白～褐灰 内：浅黄橙	
310	南環濠	15-1	ユカ	高杯	A1？	口：295 底：－	1/16	砂・礫をほとんど含まない。	外：にぶい橙 内：にぶい橙	内外面ヘラミガキ。赤彩はほとんど剥落している。
311	南環濠	13-3	6（BT5）	高杯	C	口：248 底：－	3/16	砂・砂礫ごく少ない。	外：浅黄橙～淡黄 内：浅黄橙	口縁直下に1条の沈線。杯部は内外面ともミガキ。脚台部はハケ目を残すミガキ。
312	南環濠	12-5	トレンチ	器台		口：－ 底：－		砂・砂礫少ない。	外：浅黄橙 内：黄橙	スタンプ渦文。
313	南環濠	13-1	6（BT4）	器台	A2	口：263 底：－	0/16	礫（中・大）疎らに含む。	外：にぶい黄橙～淡赤橙 内：黄褐～淡赤橙	全面的な橙化。脚台内面はヘラケズリとナデ。外面の半周は器面剥落。受け部稜上に2条の沈線。
314	南環濠	9-5	6～8（BT2）	器台	A2	口：248 底：－	2/16	礫（中・大）ごく疎らに含む。	外：灰白～浅黄橙 内：灰白～浅黄橙	内外面ハケ目を残すミガキあるいはナデ。
315	南環濠	13-4	1～3（BT6）		脚台部	口：－ 底：－			外：灰白～明黄褐 内：灰白～明黄褐	脚台上端に2条の沈線。内面は絞り目を残すナデ。透孔数不明。
316	南環濠	13-4	1～3（BT6）		脚台部	口：－ 底：－		砂は含むが、砂礫をほとんど含まない。	外：浅黄橙 内：浅黄橙	外面ヘラミガキ。
317	南環濠	13-2	6・7（BT4）		脚台部	口：－ 底：－		礫（中・大）やや多い。	外：灰白 内：灰白～黄灰	絞り目から縦長の4片に破損している。
318	南環濠	11-1	ユカ		脚台部	口：－ 底：－		砂・砂礫やや多く、礫（中）疎らに含む。	外：灰白～明黄褐 内：灰白～明黄褐	内面は多角柱状のナデ。
319	南環濠	13-5	1～3（BT6）	器台	脚台部	口：－ 底：－		砂はやや多く、砂礫・礫（中）疎らに含む。	外：淡赤橙～淡橙 内：淡赤橙	全面的に橙化し、器面の風化強い。
320	南環濠	13-1	4（BT4）		脚台部	口：－ 底：179		砂・砂礫の混入ごく少ない。	外：灰白～明黄褐 内：灰白～明黄褐	直径2.5㎜の馬蹄形圧痕文が連続。内面ヨコナデ。2孔一対3か所の透孔。
321	南環濠	15-2	1（BT8）		脚台部	口：－ 底：173		砂礫疎らに含む。	外：灰白～褐灰 内：灰黄褐～褐灰	内面はハケ目調整とナデ。連続する爪形圧痕文。
322	南環濠	14-5	12・13（BT7）		脚台部	口：－ 底：155		礫（中）疎らに含む。	外：灰白～黄灰 内：灰白～黄灰	内面の剥落著しい。
323	南環濠	13-3	6（BT5）		脚台部	口：－ 底：－		器面に礫は露出していないが、割れ口に砂礫散見できる。	外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：浅黄橙～にぶい黄橙	透孔4か所。外面ミガキ。内面ヨコナデ。
324	南環濠	13-4	5・7（BT6）		脚台部	口：－ 底：－		砂・砂礫の混入ほとんどない。	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	突帯直下に1条、または2条の沈線。内面はハケ目調整とナデ。
325	南環濠	11-2	ユカ		脚台部	口：－ 底：－		砂礫やや多い。	外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：浅黄橙～にぶい黄橙	内面の摩耗強い。
326	南環濠	11-3	1～3（BT3）		脚台部	口：－ 底：158		砂礫・礫（中）やや多いが、器面への露出少ない。	外：褐灰 内：灰黄褐～褐灰	外面ヘラミガキ。内面ハケ目調整とヨコナデ。端面は凹線状に窪む。
327	南環濠	10-4			脚台部	口：－ 底：186		礫（中・大）疎らに見られる。	外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：浅黄橙	器面の摩耗強い。
328	南環濠	13-3	6（BT5）		脚台部	口：－ 底：155		砂・砂礫をほとんど含まない。	外：にぶい赤褐～黒 内：褐灰	外面は方向の交差するヘラミガキ・内面はヨコナデ。
329	南環濠	13-5	5・7（BT6）		脚台部	口：－ 底：163		砂を含むが、器面への露出少ない。	外：灰白～灰 内：灰白～浅黄	外面はハケ目調整を残すミガキ。内面はヨコナデ。端面は凹線状に窪む。
330	南環濠	10-3	ユカ	鉢	A	口：196 底：－	4/16	砂・礫の混入少ない。	外：浅黄橙～黒褐 内：灰白～淡黄	口縁部直下は太い凹線状の窪み。

■弥生土器観察表（14）　環　　濠

報告No.	地点大別	出土地点	層位	器種	分類	法量	残存率	胎土	色調	調整・文様等
331	南環濠	10-4		鉢	A	口：236 底：－	1/16	砂・礫の混入少ない。	外：灰白～灰 内：灰白～灰	内面の赤彩は口縁部の一部にのみ残存。
332	南環濠	13-1	1・2・4・5（BT4）	鉢	A	口：212 底：－	0/16		外：灰白 内：灰白～暗褐	
333	南環濠	14-5	1～3（BT7）	鉢	A	口：165 底：－	2/16	砂・礫は少ない。	外：灰白～にぶい橙 内：灰白	
334	南環濠	13-1	1・2・4・5（BT4）	鉢	B	口：203 底：－	1/16	砂・礫をほとんど含まない。	外：浅黄橙 内：褐灰	
335	南環濠	13-3	6（BT5）	鉢	B	口：168 底：－	2/16	砂・礫は少ない。	外：灰白 内：灰白～黄灰	口縁端面は擬凹線文に類するヨコナデ。
336	南環濠	13-1	1（BT4）	鉢	A	口：210 底：－	1/16	砂・礫は少ない。	外：浅黄橙 内：にぶい黄橙	内面の赤彩はごく一部に残存。外面の剥落著しい。
337	南環濠	12-4	1・2・4・5（BT4）	鉢	B	口：193 底：－	0/16	礫の混入はほとんどない。	外：にぶい橙～褐灰 内：にぶい橙	外面の摩耗強い。
338	南環濠	12-5	8・9（BT4）	鉢？		口：299 底：－	0/16	砂礫やや多く、礫（中・大）疎らに含む。	外：灰白～浅黄橙 内：浅黄橙	339と同一個体か。内外面の摩耗やや強い。
339	南環濠	13-1	6・7（BT4）	鉢？		口：360 底：－	0/16	砂礫・礫（中・大）疎らに含む。	外：浅黄橙 内：灰白	338と同一個体か。内外面の摩耗やや強い。
340	南環濠	14-5	1～3（BT7）	鉢	C	口：155 底：－	2/16	砂・礫をほとんど含まない。	外：にぶい黄橙～灰黄褐 内：にぶい黄橙～灰黄褐	外面はハケ目を残すナデまたはミガキ。内面はハケ目調整
341	南環濠	13-4	1～3（BT6）	結合器台？		口：－ 底：164		器面に礫の露出少ないが、割れ口に砂礫・礫（中）散見できる。	外：浅黄橙～にぶい橙 内：にぶい橙	透孔1か所以上。
342	南環濠	13-2	1・2・4・5（BT4）	台付壷？	脚台部	口：－ 底：126		礫（中・大）疎らに含む。	外：灰白～明黄褐 内：灰白～にぶい黄橙	内面はハケ目調整とナデ。
343	南環濠	12-5	1・2・4・5（BT4）	鉢？	底部	口：－ 底：54		礫（中・大）疎らに含む。	外：灰白～明黄褐 内：灰白～明黄褐	底部周囲指オサエ。
344	南環濠	13-3	4（BT5）	蓋		口：36 底：－	2/16	砂・砂礫少ない。	外：灰白～浅黄橙 内：にぶい橙	ハケ目調整を残すナデまたはミガキ。
345	南環濠	13-1	1・2・4・5（BT4）	蓋		口：20 底：－	9/16	砂・砂礫少ない。	外：灰白～黄灰 内：褐灰	
346	南環濠	13-1	1・2・4・5（BT4）	蓋		口：18 底：－	12/16	砂礫・礫（中）多く見られる。	外：灰白～灰 内：灰白～灰	器面の摩耗強い。
347	南環濠	13-1	6・7（BT4）	高杯？	把手	口：－ 底：－		砂礫の混入ほとんどない。	外：にぶい黄橙 内：にぶい橙	
348	南環濠	13-5	5・7（BT6）	有孔鉢		口：－ 底：46		砂礫・礫（中）多く含む。	外：灰白～橙 内：灰白～浅黄橙	正円形の穿孔。
349	南環濠	13-1	1・2・4・5（BT4）	有孔鉢		口：－ 底：27		礫（中・大）疎らに含む。	外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：浅黄橙～にぶい黄橙	ほぼ正円形の穿孔。内面に向かって広がる。
350	南環濠	14		？		口：－ 底：20		砂・礫を含まず、緻密さに欠ける生地土。	外：灰白 内：灰白～明黄褐	反転して脚台部か。
351	南環濠	15-2	6（BT8）	有孔鉢		口：－ 底：20		砂礫・礫（中）やや多い。	外：灰白～淡黄 内：淡黄	
352	北環濠	B区	6～10（BT17）	甕	A1	口：191 底：－	4/16	砂礫含むが、砂は少ない。	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	頸部にスス状炭化物。
353	北環濠	C区	10（BT18）	甕	A2a	口：145 底：－	4/16		外：浅黄橙～黄灰 内：黄灰	
354	北環濠	B区	6～10（BT17）	甕	A2a	口：136 底：－	1/16		外：浅黄橙 内：灰白	口頸稜、突出する。
355	北環濠	B区	6～10（BT17）	甕	A2a	口：164 底：－	1/16	砂礫比較的多い。	外：にぶい橙～橙 内：浅黄橙～橙	器面の摩耗やや強い。
356	北環濠	B区	6～10（BT17）	甕	A2b	口：154 底：－	1/16		外：にぶい黄橙 内：浅黄橙	

■弥生土器観察表（15）　環　　濠

報告No.	地点大別	出土地点	層位	器種	分類	法量	残存率	胎土	色調	調整・文様等
357	北環濠	B区	12・13（BT17）	甕	A2b	口：136 底：－	0/16		外：浅黄橙 内：にぶい橙	
358	北環濠	A区	11～13（BT16）	甕	A2a	口：166 底：－	1/16	砂礫多い。	外：灰白～褐灰 内：灰白～褐灰	器面の摩耗やや強い。
359	北環濠	B区	1・2（BT19）	甕	A2a	口：136 底：－	1/16	礫（中・大）疎らに見られる。	外：浅黄橙 内：灰白	外面にスス状炭化物。
360	北環濠	C区	10・11～14（BT18）	甕	E2	口：156 底：－	5/16		外：にぶい橙 内：浅黄橙	口縁部内外面は擬凹線文に類するヨコナデ。外面にスス状炭化物。
361	北環濠	C区	10～16（BT18）	甕	A2a	口：126 底：－	1/16	砂礫多く含む。	外：灰白 内：灰白～明黄褐	外面の摩耗やや強い。
362	北環濠	A区	11～13（BT16）	甕	A3	口：145 底：－	1/16		外：にぶい黄褐 内：灰白～褐灰	
363	北環濠	C区	16（BT18）	甕	A3	口：184 底：－	2/16	器壁薄く緻密さ欠く生地土。砂・礫の混入少ない。	外：灰白 内：灰白	
364	北環濠	A区	11～13（BT16）	甕	A3	口：180 底：－	2/16		外：灰白 内：にぶい黄橙～褐灰	外面にスス状炭化物。
365	北環濠	C区	10（BT18）	甕	E1	口：174 底：－	0/16	礫（中）疎らに含む。	外：灰白 内：灰白	
366	北環濠	C区	16（BT18）	甕	D/A2b	口：145 底：－	1/16	砂礫多く含む。	外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：浅黄橙	頸部外面にスス状炭化物。器面の摩耗やや強い。
367	北環濠	C区	10（BT10）	甕	D/A2b	口：159 底：－	0/16	砂礫多く含む。	外：灰白～浅黄橙 内：灰白～黄灰	線状圧痕文は摩耗して不明瞭。口頸稜にスス状炭化物。器面の摩耗強い。
368	北環濠	C区	16（BT18）	甕	G？	口：171 底：－	0/16	砂礫やや多い。	外：淡黄 内：淡黄	器面の摩耗強い。
369	北環濠	A区	11～13（BT16）	甕	D	口：167 底：－	1/16	礫（中）やや多い。	外：浅黄橙 内：にぶい黄橙	外面に僅かなスス状炭化物。器面の摩耗やや強い。
370	北環濠	B区	12・13（BT17）	甕	F	口：140 底：－	5/16	砂礫多く、礫（大）疎らに含む。	外：浅黄橙 内：浅黄橙～灰黄褐	外面に厚い炭化物。器面の摩耗やや強い。
370		B区	1・2（BT19）						外：浅黄橙 内：浅黄橙～灰黄褐	
370		C区	16（BT18）						外：浅黄橙 内：浅黄橙～灰黄褐	
371	北環濠	C区	10（BT18）	甕	F	口：166 底：－	1/16		外：浅黄橙 内：にぶい橙	外面にスス状炭化物。
372	北環濠	C区	15（BT18）	甕	F	口：139 底：－	4/16	礫（中）疎らに含む。	外：浅黄橙～にぶい橙 内：浅黄橙～にぶい橙	内外面弱い橙化。
373	北環濠	B区		甕	G1	口：174 底：－	4/16	緻密さを欠く生地土。	外：浅黄橙 内：灰白	外面に厚い炭化物。
374	北環濠	A区	11～13（BT16）	甕	G1	口：160 底：－	1/16	砂礫ほとんど含まない。	外：灰白 内：浅黄橙	
375	北環濠	A区	11～13（BT16）	甕	G1	口：158 底：－	1/16		外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	
376	北環濠	A区	1～8（BT16）	甕	G2	口：140 底：－	1/16		外：灰白 内：灰白	
377	北環濠	B区	12・13（BT17）	甕	G2	口：144 底：－	1/16		外：灰白～淡赤橙 内：灰白～淡赤橙	内外面橙化。
378	北環濠	C区	16（BT18）	甕	G1	口：198 底：－	1/16	チャート・石英砂が比較的多い。	外：灰白 内：灰白～褐灰	
379	北環濠	B区	6～10（BT17）	甕	G2	口：160 底：－	0/16		外：灰白 内：灰白	
380	北環濠	A区	11～13（BT16）	甕	G2？	口：159 底：－	4/16	砂礫多い。	外：浅黄橙～褐灰 内：にぶい橙～褐灰	内外面橙化。器面の摩耗やや強い。

■弥生土器観察表（16）　環　　濠

報告No.	地点大別	出土地点	層位	器種	分類	法量	残存率	胎土	色調	調整・文様等
381	北環濠	B区	6～10（BT 17）	甕	G2	口：170 底：－	1/16	砂礫多い。	外：浅黄橙～褐灰 内：浅黄橙	器面の摩耗強い。
382	北環濠	B区		甕	G2	口：171 底：－	1/16		外：灰白～灰黄褐 内：褐灰	口縁端面は凹線状に窪む。
383	北環濠	A区	11～13（BT 16）	甕	G1	口：150 底：－	3/16		外：にぶい黄橙 内：浅黄橙～橙	外面に厚い炭化物。
384	北環濠	A区	11～13（BT 16）	甕	G2	口：160 底：－	1/16	砂・砂礫やや多い。	外：にぶい黄橙 内：浅黄橙	器面の摩耗やや強い。
385	北環濠	B区		甕	G2	口：170 底：－	1/16		外：灰白～褐灰 内：灰白～褐灰	
386	北環濠	A区	10（BT 16）	甕	A2a	口：131 底：－	2/16	緻密さに欠ける生地土。砂礫やや多い。	外：浅黄橙 内：浅黄橙	凹線文B。
387	北環濠	B区	12・13（BT 17）	壷	有段口縁	口：144 底：－	1/16	緻密さに欠ける生地土。砂礫は少ない。	外：浅黄橙 内：浅黄橙	平行沈線文A。
388	北環濠	C区	10（BT 18）	壷	有段口縁短頸	口：125 底：－	2/16	緻密さに欠ける生地土。砂・砂礫をほとんど含まない。	外：橙 内：橙	やや蛇行する凹線文A。長さ2㎜程度の長方形列点。
389	北環濠	C区	10（BT 18）	壷	有段口縁短頸	口：122 底：－	2/16	砂・砂礫をほとんど含まない。	外：灰白 内：灰白	
390	北環濠	B区	6～10（BT 17）	壷	有段口縁短頸	口：121 底：－	1/16	砂・砂礫は少ない。	外：浅黄橙 内：灰白	外面摩耗・橙化。
391	北環濠	B区	6～10（BT 17）	壷	有段口縁短頸	口：146 底：－	1/16	砂礫やや多く、礫（中）疎らに含む。	外：灰白 内：灰白～褐灰	器面弱く摩耗し、赤彩は一部にのみ残存。
392	北環濠	C区	11～14（BT 18）	壷	広口壷A	口：154 底：－	1/16		外：灰白～黄灰 内：灰白～黄灰	外面の摩耗強い。
392		C区	16（BT 18）						外：灰白～黄灰 内：灰白～黄灰	
393	北環濠	B区	6～13（BT 17）	壷	台付壷	口：－ 底：－		砂少量含む。	外：灰白 内：灰白	箍状の突帯上に棒状浮文。
394	北環濠	B区	11～13（BT 16）	壷	有段口縁短頸	口：180 底：－	0/16	緻密さ欠く生地土。砂礫（中・大）多い。	外：灰白 内：灰白	器面の摩耗やや強い。
394		A区	12・13（BT 17）						外：灰白 内：灰白	
395	北環濠	C区	11～13（BT 18）	壷	有段口縁長頸	口：136 底：－	2/16	礫（大）疎らに含む。	外：浅黄橙 内：浅黄橙～褐灰	
396	北環濠	C区	10～16（BT 18）	壷	有段口縁	口：160 底：－	1/16		外：浅黄橙 内：灰白	
397	北環濠	B区		壷	無段口縁長頸	口：109 底：－	1/16		外：浅黄橙 内：浅黄橙	紡錘状圧痕文。
398	北環濠	B区	6～10（BT 17）	鉢/高杯		口：209 底：－	1/16	緻密さ欠く生地土。砂礫・礫（中）多く、礫（大）疎らに含む。	外：灰白 内：淡黄	器面の摩耗やや強い。
399	北環濠	C区	11～16（BT 18）	器台/高杯		口：207 底：－	1/16	砂は含むが、礫をほとんど含まない。	外：浅黄橙 内：浅黄橙	
400	北環濠	C区	11～14（BT 18）	器台	B2	口：215 底：－	1/16	砂・礫をほとんど含まない。	外：浅黄橙～明黄褐 内：にぶい黄橙～明黄褐	縁帯に平行沈線文A。外面はハケ目を僅かに残すミガキ。
401	北環濠	C区	11～14・16（BT 18）	器台	B2	口：240 底：－	1/16	緻密さ欠く生地土。礫（中・大）疎らに見られる。	外：浅黄橙～黄灰 内：浅黄橙～黄灰	縁帯の文様は不明瞭だが、平行沈線文Aか。器面の摩耗やや強い。
402	北環濠	C区	16（BT 18）	器台	A2	口：214 底：－	1/16	砂・砂礫多い。	外：淡黄 内：淡黄	器面は弱く摩耗。
403	北環濠	B区	6～10（BT 17）	鉢/器台		口：161 底：－	1/16		外：灰白～灰 内：灰白	器面摩耗しているが、平行沈線文A。
404	北環濠	B区	6～10（BT 17）	鉢	A	口：204 底：－	2/16	砂礫比較的多い。	外：灰白～明黄褐 内：灰白	器面は弱く摩耗。

■弥生土器観察表（17）　環　　濠

報告No.	地点大別	出土地点	層位	器種	分類	法量	残存率	胎土	色調	調整・文様等
405	北環濠	A区	11～13（BT 16）	鉢	A	口：176 底：－	2/16	砂礫の混入少ない。	外：灰白～明黄褐 内：明黄褐	外面に調査以前の旧期切傷あり。内面は平滑なミガキ。
406	北環濠	C区	10（BT 18）	鉢	A	口：173 底：－	2/16	砂・礫ごく少ない。	外：灰白～浅黄橙 内：灰白～橙	稜を強調するようなごく浅い沈線。内面はハケ目調整とナデ。
407	北環濠	C区	16（BT 18）	鉢		口：194 底：－	1/16	砂・礫ごく少ない。	外：浅黄橙 内：灰白	
408	北環濠	A区	11～13（BT 16）	鉢？		口：122 底：－	1/16		外：灰白～灰 内：灰白	
409	北環濠	C区	11～14（BT 18）		脚台部	口：－ 底：74			外：灰 内：灰白～灰	
410	北環濠	A区	11・13（BT 16）		有孔突起	口：－ 底：－		礫をほとんど含まない。	外：にぶい黄橙 内：灰白	破片の上下左右の関係不明。

■弥生土器観察表（18）　主丘頂上包含層

報告No	地点大別	グリッド	層位	器種	分類	法量	残存率	胎土	色調	調整・文様等
411	主丘頂上	13K	Ⅱ	甕	A2a	口：134 底：－	1/16		外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	擬凹線文。
412	主丘頂上	13L	Ⅱ	甕	A1	口：153 底：－	2/16		外：浅黄橙 内：浅黄橙	口頸稜上に１条の凹線。外面にスス状炭化物。
413	主丘頂上	12K	Ⅱ	甕	C	口：150 底：－	2/16		外：にぶい黄橙 内：浅黄橙	２条の平行沈線文Ｂ1。外面にスス状炭化物。
414	主丘頂上	14L	Ⅱ	甕	A2a	口：180 底：－	2/16		外：にぶい黄橙 内：浅黄橙	２条の平行沈線文Ｂ2。
415	主丘頂上	14J	Ⅱ	甕	E1	口：145 底：－	3/16	砂礫やや多い。	外：灰白～にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	文様不明稜だが、平行沈線文Ａか。外面にスス状炭化物。
416	主丘頂上	16K	Ⅱ	甕	E1	口：126 底：－	1/16		外：灰白 内：灰白～浅黄橙	凹線文Ａ。
417	主丘頂上	14M	Ⅱ	甕	B	口：166 底：－	1/16		外：浅黄橙～にぶい橙 内：にぶい黄橙～褐灰	２条の平行沈線文Ａ、あるいは擬凹線文。内面の摩耗強い。
418	主丘頂上	15L	Ⅱ	甕	A1	口：188 底：－	0/16		外：灰白 内：浅黄橙	３条の平行沈線文Ａ。外面にスス状炭化物。
419	主丘頂上	15K	Ⅱ	甕	A1？	口：－ 底：－		砂・礫ごく少ない。	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	２条の平行沈線文Ａ。外面に薄いスス状炭化物。
420	主丘頂上	14L	Ⅱ	甕	E2	口：156 底：－	2/16	砂・礫含むが、器面への露出少ない。	外：にぶい橙 内：にぶい黄橙	口頸稜の上側に１条の浅い沈線。
421	主丘頂上	17K	Ⅱ	甕	A2a	口：115 底：－	2/16		外：灰白 内：灰白	平行沈線文Ｂ2。外面にスス状炭化物。
422	主丘頂上	14K	Ⅱ	甕	F	口：186 底：－	1/16		外：灰白 内：灰白	凹線文Ａ、あるいはそれに類するヨコナデ。
423	主丘頂上	12L	Ⅱ	甕	A2a	口：206 底：－	1/16	砂礫・礫（中）多く含む。	外：灰白 内：浅黄橙	凹線文Ａ、あるいはそれに類するヨコナデ。
424	主丘頂上	14K	Ⅱ	甕	A2a	口：231 底：－	0/16	礫（中）疎らに含む。	外：浅黄橙 内：にぶい黄橙	器面の摩耗して不明稜だが、平行沈線文Ａ。
425	主丘頂上	14L	Ⅱ	甕	A2a	口：104 底：－	1/16	礫（中）疎らに含む。	外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：浅黄橙	口頸稜直上に１条の凹線。口頸稜・肩部に紡錘状圧痕文。外面にスス状炭化物。
426	主丘頂上	14L	Ⅱ	甕	A2a	口：216 底：－	2/16	礫（大）疎らに含むが、砂・砂礫は少ない。	外：浅黄橙 内：浅黄橙	口頸稜に紡錘状圧痕文。口縁部外面は擬凹線文に類するヨコナデ。
427	主丘頂上	12K	Ⅱ	甕	A2a	口：153 底：－	1/16		外：浅黄橙 内：にぶい黄橙	口頸稜に右下がりの紡錘状圧痕文。
428	主丘頂上	14L	Ⅱ	甕	A3	口：185 底：－	0/16	砂礫多い。	外：灰黄 内：浅黄～黄灰	器面の摩耗強く不明稜だが、口頸稜に紡錘状圧痕文。
429	主丘頂上	15L	Ⅱ	甕	C	口：146 底：－	0/16	砂に石英含まれる。	外：浅黄橙～褐灰 内：浅黄橙	口縁部外面は擬凹線文に類するヨコナデ。口頸稜にごく浅い丸状圧痕文。
430	主丘頂上	14M	Ⅱ	甕	D	口：140 底：－	1/16	砂・砂礫少ない。	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	口頸稜に線状圧痕文。
431	主丘頂上	13L	Ⅱ	甕	B	口：216 底：－	0/16		外：浅黄橙 内：浅黄橙	口頸稜に紡錘状圧痕文。外面にスス状炭化物。
432	主丘頂上	14L	Ⅱ	甕	B	口：201 底：48	5/16	砂やや多い。	外：灰白～灰 内：灰白～暗灰	口頸稜・肩部に紡錘状圧痕文。上げ底の底面は丁寧なナデ。
433	主丘頂上	15J	Ⅱ	甕	E2	口：158 底：－	4/16		外：浅黄橙 内：にぶい黄橙	狭い口縁部に線状圧痕文。外面にスス状炭化物。
434	主丘頂上	16L	Ⅱ	甕	A2b	口：148 底：－	0/16	砂・砂礫をほとんど含まない。	外：浅黄橙～にぶい橙 内：にぶい褐	肩部に紡錘状圧痕文。
435	主丘頂上	16L	Ⅱ	甕	A1	口：135 底：－	0/16	砂・砂礫をほとんど含まない。	外：灰白～黄灰 内：黒褐	頸部にスス状炭化物。
436	主丘頂上	15L	Ⅱ	甕	A2a	口：130 底：－	1/16	砂・砂礫をほとんど含まない。	外：浅黄橙 内：にぶい黄橙	

■弥生土器観察表（19）　主丘頂上包含層

報告No.	地点大別	グリッド	層位	器種	分類	法量	残存率	胎土	色調	調整・文様等
437	主丘頂上	15J		甕	A2a	口：136 底：－	1/16		外：浅黄橙 内：にぶい黄橙	
438	主丘頂上	15L		甕	A1	口：131 底：－	2/16	砂礫多く、礫（中）疎らに含む。	外：灰白 内：浅黄橙	外面にスス状炭化物。
439	主丘頂上	12L		甕	A2a	口：154 底：－	1/16		外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙～にぶい黄褐	外面にスス状炭化物。
440	主丘頂上	17K		甕	A2a	口：134 底：－	3/16		外：灰白 内：浅黄橙～にぶい黄橙	
441	主丘頂上	15K		甕	A2a	口：154 底：－	1/16	礫（中）疎らに含む。	外：浅黄橙 内：褐灰	
442	主丘頂上	15J		甕	A2a	口：155 底：－	4/16	礫（中・大）疎らに含む。	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	
443	主丘頂上	14L		甕	A2a	口：178 底：－	1/16	砂礫多く含む。	外：浅黄橙 内：浅黄橙	
444	主丘頂上	14M		甕	A2a	口：159 底：－	1/16		外：にぶい黄橙 内：褐灰	外面にスス状炭化物。
445	主丘頂上	14L		甕	A2a	口：166 底：－	1/16		外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	外面にスス状炭化物。
446	主丘頂上	15K		甕	A2a	口：150 底：－	0/16	砂多く、礫（中）疎らに含む。	外：灰白 内：褐灰	
447	主丘頂上	17K		甕	A2a	口：148 底：－	2/16	砂に石英含まれる。	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	外面にスス状炭化物。
448	主丘頂上	15K		甕	A2a	口：164 底：－	0/16		外：浅黄橙 内：にぶい黄橙	口縁部外面は擬凹線文に類するヨコナデ。外面にスス状炭化物。454と同一個体。
449	主丘頂上	12K		甕	A2a	口：138 底：－	0/16		外：浅黄橙 内：浅黄橙	器面の摩耗強い。
450	主丘頂上	10L		甕	A1？	口：183 底：－	1/16	礫（中）疎らに含む。	外：灰白～にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	
451	主丘頂上	14L		甕	A2a	口：124 底：－	2/16	砂やや多い。	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	
452	主丘頂上	13M		甕	A2a	口：144 底：－	1/16		外：灰白～にぶい黄橙 内：灰白～にぶい黄橙	
453	主丘頂上	15J		甕	A2a	口：143 底：－	3/16		外：灰白～黄橙 内：にぶい黄橙	器面の摩耗強い。
454	主丘頂上	15K		甕	A2a	口：164 底：－	1/16	砂礫多く含む。	外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	448と同一個体。外面にスス状炭化物。
455	主丘頂上	16K		甕	D	口：129 底：－	1/16		外：浅黄橙 内：にぶい黄橙	
456	主丘頂上	15L		甕	A3	口：178 底：－	1/16		外：灰白 内：灰白	器面の摩耗やや強い。
457	主丘頂上	10L		壷？		口：151 底：－	0/16		外：にぶい黄橙 内：浅黄橙～にぶい黄橙	外面は丁寧なヨコナデ。内面は剥落部分多い。
458	主丘頂上	14L		甕	E1	口：139 底：－	1/16		外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	
459	主丘頂上	14M		甕	A2a	口：159 底：－	1/16	礫（大）疎らに含む。	外：にぶい黄橙～にぶい橙 内：にぶい黄橙	外面にスス状炭化物。
460	主丘頂上	15K		甕	C	口：141 底：－	3/16		外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	
461	主丘頂上	15J		甕	A2b	口：136 底：－	1/16		外：灰白～にぶい黄橙 内：灰白～にぶい黄橙	
462	主丘頂上	13L		甕	A2a	口：146 底：－	0/16		外：灰白 内：灰白～浅黄橙	

■弥生土器観察表（20）　主丘頂上包含層

報告No	地点大別	グリッド	層位	器種	分類	法量	残存率	胎土	色調	調整・文様等
463	主丘頂上	16L		甕	A2a	口：119 底：－	1/16		外：灰白 内：浅黄橙	
464	主丘頂上	14M		甕	A2a	口：173 底：－	0/16		外：浅黄橙 内：浅黄橙	外面にスス状炭化物。
465	主丘頂上	15J		甕	A2b	口：136 底：－	6/16	砂・砂礫多い。	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	
466	主丘頂上	15M		甕	A2b	口：154 底：－	0/16		外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	外面にスス状炭化物
467	主丘頂上	17K		甕	A2b	口：136 底：－	3/16		外：黄灰 内：灰	外面に厚い炭化物。
468	主丘頂上	11K		甕	A2b	口：150 底：－	1/16		外：浅黄橙 内：浅黄橙	外面にスス状炭化物。
469	主丘頂上	16K		甕	A2b	口：156 底：－	2/16		外：浅黄橙 内：にぶい黄橙	
470	主丘頂上	16K		甕	A2b	口：146 底：－	1/16		外：浅黄橙 内：浅黄橙	外面にスス状炭化物。
471	主丘頂上	16L		甕	A2a	口：259 底：－	0/16	礫（中）疎らに含む。	外：浅黄橙 内：浅黄橙	内面の摩耗強い。
472	主丘頂上	13L		甕	C	口：171 底：－	1/16	砂は含むが礫は少ない。砂に石英多く含む。	外：灰白～にぶい黄橙 内：浅黄橙	
473	主丘頂上	12L		甕	A2b	口：165 底：－	1/16		外：灰白～浅黄橙 内：浅黄橙	口縁部外面は擬凹線文に類するヨコナデ。
474	主丘頂上	13L		甕	A2b	口：146 底：－	1/16		外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：浅黄橙	外面にスス状炭化物。
475	主丘頂上	13K		甕	A2b	口：118 底：－	1/16	砂・砂礫をほとんど含まない。	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	外面にスス状炭化物。
476	主丘頂上	15M		甕	B	口：179 底：－	0/16		外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：浅黄橙	外面にスス状炭化物。
477	主丘頂上	14M		甕	B	口：179 底：－	1/16		外：灰白～灰黄褐 内：灰白	外面に厚い炭化物。
478	主丘頂上	12L		甕	A2b	口：156 底：－	1/16		外：にぶい黄橙 内：浅黄橙～にぶい黄橙	外面にスス状炭化物。
479	主丘頂上	14L		甕	D？	口：133 底：－	0/16		外：浅黄橙 内：灰白～褐灰	
480	主丘頂上	12M		甕		口：155 底：－	1/16		外：浅黄橙 内：にぶい黄橙	外面にスス状炭化物。
481	主丘頂上	16K		甕	A2	口：136 底：－	1/16		外：灰白 内：にぶい黄橙	
482	主丘頂上	15J		壺？		口：144 底：－	1/16		外：にぶい黄橙 内：浅黄橙～にぶい黄褐	
483	主丘頂上	12L		甕	E2？	口：150 底：－	1/16		外：浅黄橙 内：浅黄橙	
484	主丘頂上	13M		甕	E2	口：145 底：－	0/16	砂・砂礫をほとんど含まない。	外：浅黄橙 内：にぶい黄橙	
485	主丘頂上	15K		甕	E2	口：136 底：－	2/16	砂礫はごく少ない。	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	口縁部外面は擬凹線文に類するヨコナデ。
486	主丘頂上	12K		甕	E1？	口：156 底：－	1/16	砂礫はごく少ない。	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	
487	主丘頂上	12K		甕	E2	口：189 底：－	0/16	砂礫やや多い。礫（中）疎らに含む。	外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：浅黄橙～黄橙	
488	主丘頂上	14M		甕	E2	口：120 底：－	4/16	砂・砂礫をほとんど含まない。	外：にぶい黄橙～褐灰 内：にぶい黄橙	口縁部外面は擬凹線文に類するヨコナデ。

■弥生土器観察表（21）　主丘頂上包含層

報告No	地点大別	グリッド	層位	器種	分類	法量	残存率	胎土	色調	調整・文様等
489	主丘頂上	13L	Ⅱ	甕	E2	口：163 底：－	0/16		外：浅黄橙 内：にぶい黄橙	外面にスス状炭化物。
490	主丘頂上	15J	Ⅱ	甕	E2	口：140 底：－	1/16	砂礫含むが、砂はごく少ない。	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	491と同一個体の可能性あり。
491	主丘頂上	13J23	Ⅱ	甕	E2	口：158 底：－	2/16	砂礫含むが、砂はごく少ない。	外：にぶい黄橙～褐灰 内：黒	外面にスス状炭化物。490と同一個体の可能性あり。
492	主丘頂上	15K	Ⅱ	甕	E2	口：158 底：－	1/16	砂・砂礫をほとんど含まない。	外：浅黄橙 内：浅黄橙	外面にスス状炭化物。
493	主丘頂上	17K	Ⅱ	甕	E2	口：153 底：－	2/16		外：浅黄橙～灰黄褐 内：浅黄橙～にぶい黄橙	外面にスス状炭化物。
494	主丘頂上	12L	Ⅱ	甕	E2	口：194 底：－	0/16	砂礫やや多く、礫（中）ごく疎らに含む。	外：浅黄橙 内：浅黄橙	外面に厚い炭化物。
495	主丘頂上	12K	Ⅱ	甕	F	口：135 底：－	2/16		外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	
496	主丘頂上	17K	Ⅱ	甕	F	口：130 底：－	2/16	砂・砂礫やや多い。	外：浅黄橙 内：浅黄橙～にぶい黄橙	
497	主丘頂上	15L	Ⅱ	甕	F	口：156 底：－	2/16		外：灰白～褐灰 内：にぶい黄橙	
498	主丘頂上	14L6	Ⅱ	甕	F	口：151 底：－	1/16		外：灰白～にぶい黄橙 内：浅黄橙	口縁部にスス状炭化物。
499	主丘頂上	12L 12K	Ⅱ	甕	F	口：169 底：－	0/16		外：明黄褐 内：明黄褐	口縁部外面は擬凹線文に類するヨコナデ。
500	主丘頂上	16J	Ⅱ	甕	F	口：148 底：－	0/16		外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	
501	主丘頂上	13K	Ⅱ	甕	A2b	口：164 底：－	0/16		外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	
502	主丘頂上	15J	Ⅱ	甕	E2	口：153 底：－	0/16		外：にぶい黄橙 内：橙	
503	主丘頂上	15L	Ⅱ	甕	E2	口：169 底：－	0/16		外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	
504	主丘頂上	15J	Ⅱ	甕	E2	口：186 底：－	1/16		外：橙 内：黄橙	
505	主丘頂上	14L	Ⅱ	甕	F	口：200 底：－	0/16		外：浅黄橙 内：浅黄橙	外面にスス状炭化物。
506	主丘頂上	14M	Ⅱ	甕	F？	口：151 底：－	0/16		外：灰白 内：浅黄橙	外面にスス状炭化物。
507	主丘頂上	16K	Ⅱ	甕	F	口：151 底：－	1/16		外：浅黄橙 内：にぶい黄橙	
508	主丘頂上	14L	Ⅱ	甕	F	口：159 底：－	0/16	礫（中）疎らに含む。	外：浅黄橙 内：黄橙	509と同一個体。
509	主丘頂上	14L	Ⅱ	甕	F	口：175 底：－	0/16	砂礫多く、礫（中）多く含む。	外：浅黄橙 内：浅黄橙	内面ヘラケズリか。508と同一個体。
510	主丘頂上	14L	Ⅱ	甕	F/G2	口：136 底：－	0/16	砂礫多く含む。	外：浅黄橙 内：浅黄橙	
511	主丘頂上	12L	Ⅱ	甕	F	口：186 底：－	0/16		外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	
512	主丘頂上	16L	Ⅱ	甕	E2	口：166 底：－	0/16		外：浅黄橙 内：にぶい黄橙	外面にスス状炭化物。
513	主丘頂上	13K	Ⅱ	甕	F	口：118 底：－	0/16	礫（大）疎らに含む。	外：灰白 内：灰白	
514	主丘頂上	16M	Ⅱ	甕	G	口：186 底：－	0/16		外：浅黄橙 内：浅黄橙～褐灰	

■弥生土器観察表（22）　主丘頂上包含層

報告No.	地点大別	グリッド	層位	器種	分類	法量	残存率	胎土	色調	調整・文様等
515	主丘頂上	15M	Ⅱ	甕	G2	口：181 底：－	0/16	砂礫やや多い。	外：浅黄橙 内：浅黄橙	外面にスス状炭化物。
516	主丘頂上	14M	Ⅱ	甕	G2	口：148 底：－	0/16		外：浅黄橙 内：浅黄橙	
517	主丘頂上	16L	Ⅱ	甕	G1	口：169 底：－	2/16		外：浅黄橙 内：にぶい黄橙	
518	主丘頂上	14L	Ⅱ	甕	G2	口：155 底：－	0/16		外：浅黄橙 内：浅黄橙	外面にごく薄いスス状炭化物。
519	主丘頂上	15L	Ⅱ	甕	G2	口：148 底：－	4/16	砂礫やや多い。	外：にぶい橙 内：にぶい橙	外面にスス状炭化物。
520	主丘頂上	16K	Ⅱ	甕	G2	口：189 底：－	0/16		外：灰白 内：灰白～褐灰	
521	主丘頂上	15L	Ⅱ	甕	G2	口：150 底：－	0/16		外：浅黄橙 内：黄橙	
522	主丘頂上	13L	Ⅱ	甕	G1	口：158 底：－	2/16	礫（大）疎らに含む。	外：浅黄橙 内：浅黄橙	体部下半に薄いスス状炭化物。
523	主丘頂上	13L	Ⅱ	甕	G1	口：150 底：－	2/16		外：浅黄橙 内：浅黄橙	外面に厚い炭化物。
524	主丘頂上	14M	Ⅱ	甕	G	口：125 底：－	0/16		外：明黄褐 内：黄褐	外面にスス状炭化物。
525	主丘頂上	12L	Ⅱ	甕	G1	口：138 底：－	0/16	礫（大）疎らに含む。	外：浅黄橙 内：褐灰	
526	主丘頂上	15L	Ⅱ	甕	G	口：204 底：－	3/16		外：浅黄橙 内：浅黄橙	外面に薄いスス状炭化物。
527	主丘頂上	14L	Ⅱ	甕	G1	口：130 底：－	0/16		外：浅黄橙 内：浅黄橙	外面に薄いスス状炭化物。
528	主丘頂上	16K	Ⅱ	甕	G2	口：134 底：－	0/16	砂・砂礫比較的少ない。	外：浅黄橙 内：にぶい黄橙	肩部内面は横方向のヘラケズリ。
529	主丘頂上	13M	Ⅱ	甕	G1	口：154 底：－	1/16	砂やや多い。	外：灰白 内：灰白～褐灰	
530	主丘頂上	15J	Ⅱ	甕/壷		口：121 底：－	1/16		外：浅黄橙～橙 内：橙	
531	主丘頂上	15K	Ⅱ	甕	G2	口：173 底：－	3/16	礫（大）疎らに含む。	外：灰白～浅黄橙 内：浅黄橙～褐灰	
532	主丘頂上	11L	Ⅱ	甕	F/G2	口：165 底：－	0/16		外：にぶい黄橙 内：浅黄橙	外面に厚い炭化物
533	主丘頂上	15K	Ⅱ	甕	G2	口：143 底：－	4/16		外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	口縁端面は擬凹線文に類するヨコナデ。
534	主丘頂上	14K	Ⅱ	甕	G2	口：154 底：－	1/16		外：浅黄橙 内：橙	
535	主丘頂上	14K	Ⅱ	甕	G2	口：144 底：－	1/16		外：灰白 内：にぶい黄橙	口縁端面は凹線状に浅く窪む。
536	主丘頂上	14L	Ⅱ	甕	G2	口：163 底：－	2/16		外：浅黄橙 内：にぶい黄橙	口縁端面に１条の沈線。
537	主丘頂上	15L	Ⅱ	甕	G2	口：154 底：－	0/16	礫（中）多く含む。	外：浅黄橙 内：浅黄橙	
538	主丘頂上	15J	Ⅱ	甕	G2	口：161 底：－	5/16	砂・砂礫比較的少ない。	外：灰白～にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	
539	主丘頂上	12L	Ⅱ	甕	G2	口：120 底：－	2/16		外：灰白～にぶい黄橙 内：灰白～にぶい黄橙	
540	主丘頂上	13K	Ⅱ	甕	G2	口：179 底：－	6/16		外：灰白～灰黄 内：灰白～浅黄	

■弥生土器観察表（23）　主丘頂上包含層

報告No.	地点大別	グリッド	層位	器種	分類	法量	残存率	胎土	色調	調整・文様等
541	主丘頂上	14K	Ⅱ	甕	G2	口：186 底：－	4/16	礫（大）疎らに含む。	外：灰白 内：灰白	
542	主丘頂上	15L	Ⅱ	甕	G2	口：218 底：－	3/16	礫（中・大）疎らに含む。	外：灰白 内：浅黄橙	外面にスス状炭化物。
543	主丘頂上	14K	Ⅱ	甕	G2	口：153 底：－	1/16	砂礫多く、礫（中・大）多く含む。	外：灰白～灰 内：灰白	
544	主丘頂上	15K	Ⅱ	甕	G2	口：144 底：－	1/16	砂・砂礫少ない。	外：灰白 内：にぶい黄橙	外面に薄いスス状炭化物。
545	主丘頂上	16J	Ⅱ	甕	G2	口：198 底：－	1/16		外：にぶい黄橙 内：浅黄橙～にぶい黄橙	外面に薄いスス状炭化物。
546	主丘頂上	12K	Ⅱ	甕	G2	口：139 底：－	0/16	礫（中）疎らに含む。	外：灰白～浅黄橙 内：灰白～浅黄橙	
547	主丘頂上	13L	Ⅱ	甕	G1	口：140 底：－	2/16		外：にぶい黄橙 内：黄橙	口縁部直下を強くヨコナデ。外面にスス状炭化物。
548	主丘頂上	13L	Ⅱ	甕	G1	口：153 底：－	2/16	砂・砂礫比較的少ない。	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	口縁部直下を強くヨコナデ。外面にスス状炭化物。
549	主丘頂上	11K	Ⅱ	甕	H2	口：163 底：－	0/16		外：浅黄橙 内：にぶい黄橙	口縁部内外面、口縁直下からハケ目調整。
550	主丘頂上	15L	Ⅱ	甕	H1	口：178 底：－	1/16		外：灰白 内：浅黄橙	口縁部外面は口縁直下からハケ目調整。外面にスス状炭化物。内面は摩耗して調整不明。
551	主丘頂上	14L	Ⅱ	甕	H1	口：154 底：－	1/16		外：浅黄橙 内：浅黄橙	口縁部内外面、口縁直下からハケ目調整。一部にナデ。外面に薄いスス状炭化物。
552	主丘頂上	15L	Ⅱ	甕	H1	口：204 底：－	0/16	チャート礫（中）疎らに含む。	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	口縁部外面、口縁直下からハケ目調整。内面はナデ。外面に薄いスス状炭化物。
553	主丘頂上	15M	Ⅱ	甕	H1	口：158 底：－	1/16		外：浅黄橙 内：灰白	口縁部外面、口縁直下からハケ目調整。内面はナデか。
554	主丘頂上	14L	Ⅱ	甕	体部	口：－ 底：－			外：浅黄橙～灰 内：橙	肩部に紡錘状圧痕文。
555	主丘頂上	16L	Ⅱ	甕	体部	口：－ 底：－			外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	紡錘状圧痕文。施文具はハケ目とは別か。
556	主丘頂上	16L	Ⅱ	甕	体部	口：－ 底：－		砂礫やや多い。	外：灰白 内：浅黄橙	紡錘状圧痕文。施文具はハケ目とは別か。下部に薄いスス状炭化物。
557	主丘頂上	14L	Ⅱ	甕	体部	口：－ 底：－		砂・礫ごく少ない。	外：灰白～にぶい黄橙 内：浅黄橙～にぶい黄橙	紡錘状圧痕文。
558	主丘頂上	14L	Ⅱ	甕	体部	口：－ 底：－			外：灰白～浅黄橙 内：黄灰	線状圧痕文。
559	主丘頂上	13K	Ⅱ	甕	体部	口：－ 底：－			外：浅黄橙 内：浅黄橙	くさび形の圧痕文。
560	主丘頂上	13L	Ⅱ	甕	体部	口：－ 底：－			外：浅黄橙 内：にぶい黄橙	紡錘状圧痕文。
561	主丘頂上	15K	Ⅱ	甕	体部	口：－ 底：－			外：浅黄橙 内：灰白	紡錘状圧痕文と角状圧痕文。
562	主丘頂上	14L	Ⅱ	壷	広口壷A	口：179 底：－	0/16	砂・砂礫比較的少ない。	外：淡黄 内：にぶい黄橙～淡黄	擬凹線文か。外面の摩耗強い。
563	主丘頂上	14L	Ⅱ	壷	有段口縁	口：－ 底：－		砂・礫をほとんど含まない。	外：にぶい橙 内：浅黄橙	平行沈線文A。
564	主丘頂上	14L	Ⅱ	壷	有段口縁	口：158 底：－	0/16		外：にぶい黄橙 内：灰白～灰	平行沈線文A。
565	主丘頂上	14M	Ⅱ	壷	有段口縁	口：171 底：－	0/16		外：浅黄橙 内：浅黄橙～褐灰	平行沈線文Aか。外面の摩耗強い。567と同一個体。
566	主丘頂上	16L	Ⅱ	壷	広口壷A	口：201 底：－	0/16	砂・礫をほとんど含まない。	外：褐灰 内：橙	平行沈線文A。口頸稜にゴマ粒大の圧痕。

■弥生土器観察表（24）　主丘頂上包含層

報告No	地点大別	グリッド	層位	器種	分類	法量	残存率	胎土	色調	調整・文様等
567	主丘頂上	15M	Ⅱ	壷	有段口縁	口：－ 底：－			外：灰白～にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	平行沈線文A。下端のみ太い。565と同一個体。
568	主丘頂上	15K	Ⅱ	壷	広口壷A	口：165 底：－	4/16	砂礫・礫（中）含むが、器面への露出少ない。	外：浅黄橙 内：灰白	平行沈線文A。
569	主丘頂上	17K	Ⅱ	壷	有段口縁？	口：156 底：－	1/16		外：浅黄橙 内：浅黄橙	平行沈線文A。
570	主丘頂上	15M	Ⅱ	壷	有段口縁短頸	口：154 底：－	3/16	砂礫・礫（中）含むが、器面への露出少ない。	外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：にぶい黄橙～灰	平行沈線文A。頸部は滑沢な縦方向のヘラミガキ。
571	主丘頂上	12K	Ⅱ	壷	有段口縁短頸	口：143 底：－	2/16		外：灰白～にぶい黄橙 内：浅黄橙～にぶい黄橙	平行沈線文Aと平行沈線文B2。
572	主丘頂上	15L	Ⅱ	壷	広口壷A？	口：203 底：－	1/16		外：黄灰 内：灰白～黄灰	擬凹線文
573	主丘頂上	13M	Ⅱ	壷	有段口縁長頸	口：－ 底：－		砂・礫ごく少ない。	外：浅黄橙 内：浅黄橙	平行沈線文Aか。
574	主丘頂上	12L	Ⅱ	壷	有段口縁	口：176 底：－	0/16		外：浅黄橙～黄橙 内：灰白～にぶい黄橙	凹線文B。
575	主丘頂上	16M	Ⅱ	壷	有段口縁長頸	口：－ 底：－		礫（中・大）疎らに含む。	外：浅黄橙 内：淡黄～黄灰	凹線文B。
576	主丘頂上	15J	Ⅱ	壷	有段口縁	口：156 底：－	1/16		外：浅黄橙～淡黄 内：灰白～灰黄	擬凹線文に類するヨコナデと線状圧痕文。
577	主丘頂上	16L	Ⅱ	壷	有段口縁	口：118 底：－	3/16		外：浅黄橙 内：浅黄橙	外面の摩耗強いが、平行沈線文Aか。
578	主丘頂上	14M	Ⅱ	壷	有段口縁	口：126 底：－	1/16		外：浅黄橙 内：浅黄橙	平行沈線文A。
579	主丘頂上	15K	Ⅱ	壷	有段口縁短頸	口：119 底：－	2/16		外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	平行沈線文A。口頸稜にごく短い紡錘状圧痕文。
580	主丘頂上	15M	Ⅱ	壷	有段口縁短頸	口：－ 底：－		砂礫の混入ごく少ない。	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	平行沈線文か。
581	主丘頂上	12L	Ⅱ	壷	有段口縁長頸	口：－ 底：－		砂礫の混入ごく少ない。	外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：にぶい黄	口頸稜に紡錘状圧痕文。
582	主丘頂上	16L	Ⅱ	壷	有段口縁	口：149 底：－	1/16	礫（中）疎らに含む。	外：浅黄橙 内：淡黄	口縁外面に爪形状の圧痕文。
583	主丘頂上	14L	Ⅱ	壷	有段口縁	口：114 底：－	2/16		外：浅黄橙 内：浅黄橙	口縁外端に楕円形の圧痕文。
584	主丘頂上	13L	Ⅱ	壷	有段口縁	口：173 底：－	1/16	礫（中）疎らに含む。	外：灰白 内：灰白	棒状浮文。条数不明。
585	主丘頂上	15K	Ⅱ	壷	有段口縁長頸	口：126 底：－	1/16	砂は含むが、礫をほとんど含まない。	外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：にぶい黄褐～淡黄	棒状浮文。
586	主丘頂上	15J	Ⅱ	壷	有段口縁	口：168 底：－	2/16		外：浅黄橙 内：にぶい黄橙	円形浮文。
587	主丘頂上	12L	Ⅱ	壷	有段口縁短頸	口：151 底：－	3/16	礫（大）疎らに含む。	外：にぶい黄橙～にぶい黄褐 内：浅黄橙～にぶい黄褐	
588	主丘頂上	12L	Ⅱ	壷	有段口縁長頸	口：135 底：－	0/16	砂・砂礫比較的少ない。	外：浅黄橙～黄褐 内：にぶい橙～黄褐	外面はハケ目調整とナデ。
589	主丘頂上	13J23	Ⅱ	壷	有段口縁短頸	口：134 底：－	2/16	砂・砂礫やや多い。	外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：灰白～にぶい黄橙	
590	主丘頂上	14L	Ⅱ	壷	有段口縁短頸	口：175 底：－	2/16	礫（中）疎らに含む。	外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：にぶい黄橙～淡黄	
591	主丘頂上	15K	Ⅱ	壷	有段口縁	口：158 底：－	1/16	礫をほとんど含まない。	外：灰白 内：灰白～にぶい黄橙	
592	主丘頂上	16L	Ⅱ	壷	有段口縁	口：145 底：－	2/16	礫をほとんど含まない。	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	

■弥生土器観察表（25）　主丘頂上包含層

報告No.	地点大別	グリッド	層位	器種	分類	法量	残存率	胎土	色調	調整・文様等
593	主丘頂上	14K	Ⅱ	壷	有段口縁短頸	口：148 底：－	2/16	礫をほとんど含まない。	外：浅黄橙 内：浅黄橙	
594	主丘頂上	16M	Ⅱ	壷	有段口縁短頸	口：131 底：－	1/16		外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：浅黄橙～にぶい黄橙	
595	主丘頂上	15M	Ⅱ	壷	有段口縁短頸	口：173 底：－	2/16	礫はごく少ない。	外：浅黄橙 内：浅黄橙	外面はハケ目調整とヨコナデ。
596	主丘頂上	12L	Ⅱ	壷	有段口縁	口：163 底：－	2/16	砂礫やや多く、礫（中）疎らに含む。緻密さに欠ける生地土。	外：灰白～にぶい黄橙 内：灰白	
597	主丘頂上	14L	Ⅱ	壷	有段口縁	口：140 底：－	2/16	礫をほとんど含まない。	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	
598	主丘頂上	13L	Ⅱ	壷	有段口縁	口：150 底：－	1/16	砂礫・礫（大）疎らに含む。	外：浅黄橙 内：浅黄橙	口縁部外面は擬凹線文に類するヨコナデ。頸部はハケ目調整とヨコナデ。
599	主丘頂上	16M	Ⅱ	壷	有段口縁長頸	口：121 底：－	1/16	礫（大）疎らに含む。	外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：浅黄橙	
600	主丘頂上	15M	Ⅱ	壷	有段口縁長頸	口：144 底：－	4/16	礫は比較的少ない。	外：灰白～灰 内：にぶい黄橙	
601	主丘頂上	12L	Ⅱ	壷	有段口縁長頸	口：173 底：－	1/16	砂礫多く、礫（中）疎らに含む。	外：淡黄 内：にぶい黄橙	
602	主丘頂上	13L	Ⅱ	壷	無段口縁長頸	口：140 底：－	1/16	礫（中）疎らに含む。	外：灰白～浅黄 内：淡黄	頸部外面はハケ目調整とナデ。
603	主丘頂上	12M	Ⅱ	壷	無段口縁長頸	口：138 底：－	2/16		外：浅黄橙 内：にぶい黄橙～淡黄	頸部外面はハケ目調整とナデ。
604	主丘頂上	12K	Ⅱ	壷	無段口縁長頸	口：159 底：－	2/16	礫をほとんど含まない。	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	
605	主丘頂上	14M	Ⅱ	壷	無段口縁長頸	口：155 底：－	2/16	礫（中・大）疎らに含む。	外：浅黄橙 内：浅黄橙	
606	主丘頂上	11K	Ⅱ	壷	無段口縁	口：140 底：－	1/16		外：浅黄橙～褐灰 内：浅黄橙～にぶい黄橙	外面はハケ目を残したヘラミガキ。
607	主丘頂上	15J	Ⅱ	壷	無段口縁長頸	口：163 底：－	4/16	礫をほとんど含まない。	外：灰白～にぶい黄橙 内：灰白	
608	主丘頂上	15M	Ⅱ	壷	無段口縁長頸	口：173 底：－	2/16	礫をほとんど含まない。	外：浅黄橙～褐灰 内：灰白～にぶい黄橙	口縁付近のみヨコナデ。
609	主丘頂上	14L	Ⅱ	壷	無段口縁長頸	口：145 底：－	1/16	礫をほとんど含まない。	外：灰白～にぶい黄橙 内：灰白～にぶい黄橙	
610	主丘頂上	10L	Ⅱ	壷	無段口縁長頸	口：149 底：－	2/16		外：褐灰 内：灰白～にぶい黄橙	
611	主丘頂上	14M	Ⅱ	壷	無段口縁長頸	口：115 底：－	3/16	礫はごく少ない。	外：灰白～にぶい黄橙 内：灰白～にぶい黄橙	
612	主丘頂上	15J	Ⅱ	壷	無段口縁長頸	口：143 底：－	0/16	礫（大・中）疎らに含む。	外：灰白～にぶい黄橙 内：灰白～にぶい黄橙	
613	主丘頂上	17K	Ⅱ	壷	無段口縁長頸	口：169 底：－	1/16	礫（大・中）多く含む。	外：浅黄橙 内：褐灰	外面はハケ目を残したミガキ、またはナデ。内面の摩耗強い。
614	主丘頂上	17L	Ⅱ	壷	無段口縁	口：150 底：－	2/16		外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	
615	主丘頂上	16K	Ⅱ	壷	無段口縁短頸	口：144 底：－	4/16		外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：灰	内面広く剥落。
616	主丘頂上	14L	Ⅱ	壷	無段口縁短頸	口：125 底：－	1/16		外：浅黄橙 内：浅黄橙～にぶい黄橙	内面広く剥落。
617	主丘頂上	16L	Ⅱ	壷	無段口縁短頸	口：133 底：－	7/16		外：灰白～浅黄橙 内：浅黄橙～にぶい黄橙	
618	主丘頂上	13L	Ⅱ	壷	有段口縁状	口：143 底：－	1/16	礫比較的少ない。	外：浅黄橙～明黄褐 内：灰白～橙	

■弥生土器観察表（26）　主丘頂上包含層

報告No	地点大別	グリッド	層位	器種	分類	法量	残存率	胎土	色調	調整・文様等
619	主丘頂上	12K	Ⅱ	壷	有段口縁短頸	口：165 底：－	1/16	礫をほとんど含まない。	外：灰白～褐 内：灰白～褐	頸体境界に箍状の突帯。
620	主丘頂上	15J	Ⅱ	壷		口：174 底：－	2/16	礫をほとんど含まない。	外：灰白～浅黄橙 内：灰白～浅黄橙	内面はハケ目調整とナデ。
621	主丘頂上	15M	Ⅱ	壷	有段口縁短頸	口：145 底：－	2/16	礫は比較的少ない。	外：浅黄橙～灰 内：にぶい黄橙	外面は横方向のヘラミガキ。
622	主丘頂上	13K	Ⅱ	壷	有段口縁短頸	口：150 底：－	2/16	礫（大）まれに含む。	外：灰白～灰 内：にぶい黄橙	
623	主丘頂上	14L	Ⅱ	壷	有段口縁短頸	口：138 底：－	2/16	礫（大）まれに含む。	外：浅黄橙 内：灰白	
624	主丘頂上	13M	Ⅱ	壷	有段口縁短頸	口：146 底：－	7/16	礫（中・大）疎らに含む。	外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	
625	主丘頂上	15J	Ⅱ	壷	有段口縁短頸	口：168 底：－	3/16	砂・礫をほとんど含まない。	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	
626	主丘頂上	16M	Ⅱ	壷	有段壷	口：361 底：－	1/16	礫（大）疎らに含む。	外：浅黄橙 内：にぶい黄橙	口縁直下・口頸稜直上に、整形を強調するヨコナデあるいは沈線。外面横方向のヘラミガキ。
627	主丘頂上	15M	Ⅱ	壷	有段壷	口：245 底：－	2/16	砂礫多く、礫（中）疎らに含む。	外：浅黄橙 内：灰白～にぶい黄橙	内面広く剥落。全面的に橙化。
628	主丘頂上	15J	Ⅱ	壷	広口壷A	口：153 底：－	1/16	砂・礫をほとんど含まない。	外：浅黄橙 内：浅黄橙	
629	主丘頂上	15L	Ⅱ	壷	広口壷A	口：195 底：－	1/16		外：浅黄橙 内：浅黄橙	
630	主丘頂上	17K	Ⅱ	壷	有段口縁	口：131 底：－	1/16		外：灰白 内：にぶい黄橙	内外面ヘラミガキ。
631	主丘頂上	17K	Ⅱ	壷	広口壷A	口：156 底：－	0/16	礫をほとんど含まない。	外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	
632	主丘頂上	16K	Ⅱ	壷	広口壷A	口：163 底：－	1/16		外：にぶい黄橙～灰黄褐 内：浅黄橙～にぶい黄橙	
633	主丘頂上	14L	Ⅱ	壷	広口壷A	口：243 底：－	1/16		外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	
634	主丘頂上	16L	Ⅱ	壷	広口壷A	口：205 底：－	6/16		外：灰白～灰 内：浅黄橙～にぶい黄橙	
635	主丘頂上	14L	Ⅱ	壷	広口壷A？	口：151 底：－	3/16	砂礫やや多く、礫（中）疎らに含む。	外：にぶい黄橙～褐灰 内：にぶい黄橙	
636	主丘頂上	16L	Ⅱ	壷	広口壷/ 有段口縁短頸	口：175 底：－	2/16	砂・砂礫比較的少ない。	外：浅黄橙 内：浅黄橙～褐灰	外面、ハケ目とヘラによるナデ。内面、ヘラによるナデ。
637	主丘頂上	14L	Ⅱ	壷	広口壷B	口：166 底：－	5/16		外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：浅黄橙～にぶい黄橙	
638	主丘頂上	14L	Ⅱ	壷	広口壷B	口：150 底：－	2/16		外：にぶい黄橙～灰 内：にぶい黄橙	
639	主丘頂上	16M	Ⅱ	壷	広口壷B	口：141 底：－	0/16		外：浅黄橙～にぶい赤褐 内：にぶい黄橙～黄橙	口縁部、内外面ヘラミガキ。
640	主丘頂上	10N	Ⅱ	壷	頸・体部	口：－ 底：44		砂・礫をほとんど含まず、緻密さに欠ける生地土。	外：灰白～灰 内：灰白～明黄褐	体部外面下半にスス状炭化物。外面の摩耗強い。
641	主丘頂上	12L12	Ⅱ	壷	有段口縁短頸	口：136 底：63	2/16	砂・砂礫やや少なく、緻密さに欠ける生地土。	外：浅黄橙～淡赤橙 内：浅黄橙～にぶい赤褐	内面指ナデ。
642	主丘頂上	15K	Ⅱ	壷	頸部	口：－ 底：－		砂・礫をほとんど含まない。	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	内外面、ハケ目調整とナデ。
643	主丘頂上	14K	Ⅱ	壷	頸部	口：－ 底：－		石英砂礫多い。	外：灰白～褐灰 内：灰白～にぶい黄褐	内面の摩耗強い。
644	主丘頂上	15L	Ⅱ	壷	頸部	口：－ 底：－			外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	外面、ハケ目調整とナデ。内面ほぼ剥落。

■弥生土器観察表（27）　主丘頂上包含層

報告№	地点大別	グリッド	層位	器種	分類	法量	残存率	胎土	色調	調整・文様等
645	主丘頂上	14K	Ⅱ	壷	頸部	口：－ 底：－		礫（中）疎らに含む。	外：淺黄橙 内：灰白～淺黄橙	頸下端を強くヨコナデ。内外面ハケ目調整とナデ。
646	主丘頂上	16L	Ⅱ	壷	頸部	口：－ 底：－		砂礫やや多い。	外：淺黄橙～にぶい黄橙 内：灰白～明黄褐	外面、ハケ目調整とナデ。内面２種類のハケ目調整具使われる。。
647	主丘頂上	14K	Ⅱ	壷	頸部	口：－ 底：－		砂・礫は少ない。	外：灰白～褐灰 内：灰白～褐灰	外面はハケ目を残したミガキ。
648	主丘頂上	13L	Ⅱ	壷	頸・体部	口：－ 底：－			外：淺黄 内：灰白～にぶい黄橙	
649	主丘頂上	13M	Ⅱ	壷	頸・体部	口：－ 底：－		礫（中）疎らに含む。	外：淺黄橙～橙 内：にぶい黄橙～にぶい褐	D字状の圧痕文。内面は摩耗強く、被熱によるのか赤化。外面はヘラミガキ。
650	主丘頂上	13K	Ⅱ	壷	頸部	口：－ 底：－		礫（大）疎らに含む。	外：灰白 内：灰白	
651	主丘頂上	12K	Ⅱ	壷	頸部	口：－ 底：－			外： 内：	
652	主丘頂上	15K	Ⅱ	壷	体部	口：－ 底：－			外：にぶい黄橙 内：黒褐	
653	主丘頂上	16K	Ⅱ	壷	小型壷	口：115 底：－	4/16	砂・礫のごく少ない。	外：浅黄橙 内：浅黄橙	
654	主丘頂上	15L	Ⅱ	壷	小型壷	口：134 底：－	1/16		外：淡黄 内：にぶい黄橙	
655	主丘頂上	15・16K	Ⅱ	壷	小型壷	口：130 底：－	2/16	砂・砂礫含むが、外面への露出少ない。	外：灰白～明黄褐 内：灰白～明黄褐	丁寧なヘラミガキ。
656	主丘頂上	13K	Ⅱ	壷	小型壷	口：103 底：－	0/16		外：灰白～浅黄橙 内：灰白～浅黄橙	外面摩耗しているが、内外面ミガキか。
657	主丘頂上	12L	Ⅱ	壷	小型壷	口：119 底：－	0/16	砂・礫ごく少ない。	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	内外面ミガキ。
658	主丘頂上	14L6	Ⅱ	壷	小型壷	口：114 底：－	1/16	砂・礫ごく少ない。	外：浅黄橙 内：浅黄橙	内外面、ハケ目を残したミガキ。
659	主丘頂上	16L	Ⅱ	壷	小型壷	口：100 底：－	1/16	砂・礫ごく少ない。	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙～にぶい赤褐	口縁部外面、振凹線文に類するヨコナデ。頸下端ヘラミガキ。
660	主丘頂上	16L	Ⅱ	壷	小型壷	口：101 底：－	1/16		外：浅黄橙 内：灰白～褐灰	
661	主丘頂上	12L	Ⅱ	壷	小型壷	口：132 底：－	2/16		外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	
662	主丘頂上	14L	Ⅱ	壷？		口：89 底：－	3/16		外：灰白～浅黄橙 内：灰白～浅黄橙	被熱によるか、外面赤化。
663	主丘頂上	16K	Ⅱ	壷？		口：98 底：－	2/16		外：灰白～浅黄橙 内：灰白～浅黄橙	
664	主丘頂上	13K	Ⅱ	壷	小型壷	口：79 底：－	3/16	砂・砂礫含むが、器面への露出少ない。	外：灰白～浅黄橙 内：灰白～浅黄橙	
665	主丘頂上	15L	Ⅱ	壷	小型壷	口：119 底：－	2/16	礫（中）疎らに含むが、砂は少ない。	外：浅黄橙～にぶい橙 内：褐	内外面ヘラミガキ。
666	主丘頂上	11L	Ⅱ	壷	小型壷	口：113 底：－	2/16	砂・礫をほとんど含まない。	外：にぶい赤褐 内：灰白～にぶい褐	内外面滑沢なミガキ。
667	主丘頂上	15L	Ⅱ	壷	小型壷	口：126 底：－	2/16	砂・礫をほとんど含まない。	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	内外面滑沢なミガキ。
668	主丘頂上	14K	Ⅱ	壷	小型壷体部	口：－ 底：－		砂礫・礫（中）疎らに含むが、砂は少ない。	外：にぶい黄橙～褐灰 内：にぶい黄橙～褐灰	外面ミガキ。
669	主丘頂上	14L	Ⅱ	壷	小型壷体部	口：－ 底：－		砂・礫（中）含むが、器面への露出少ない。	外：浅黄橙 内：にぶい黄橙	外面ミガキ。
670	主丘頂上	16K	Ⅱ	壷	小型壷体部	口：－ 底：－		砂・礫少ない。	外：灰白～暗灰 内：灰～暗灰	外面はハケ目を残すミガキ。内面はハケ目調整と丁寧なナデ。

■弥生土器観察表（28）　主丘頂上包含層

報告№	地点大別	グリッド	層位	器種	分類	法量	残存率	胎土	色調	調整・文様等
671	主丘頂上	14L	Ⅱ	壷	小型壷体部	口：－ 底：－		砂含むが、礫は少ない。	外：灰白 内：灰白～にぶい黄橙	
672	主丘頂上	13M	Ⅱ	壷	台付壷体部	口：－ 底：－		砂・礫ごく少ない。	外：灰白～にぶい黄橙 内：灰白～にぶい黄橙	
673	主丘頂上	14L	Ⅱ	壷	体部	口：－ 底：－			外：灰白 内：褐灰	
674	主丘頂上	14L	Ⅱ	壷	体部	口：－ 底：－		砂を含むが、礫を含まない。	外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	櫛描きの波状文とそれを区画する平行線文。
675	主丘頂上	14L	Ⅱ	壷	広口壷体・底部	口：－ 底：50		砂を少量含むが、礫は含まない。	外：浅黄橙～黒褐 内：浅黄橙～黒褐	外面は丁寧なヘラミガキ。内面はハケ目を残す平滑なナデ。
676	主丘頂上	16L11	Ⅱ	壷	底部	口：－ 底：36		礫を含まず、砂もほとんど含まない。	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	内外面ヘラミガキ。
677	主丘頂上	16L11	Ⅱ	壷	底部	口：－ 底：28		砂礫を少量含むが、礫を含まない。	外：にぶい黄橙 内：浅黄橙～褐灰	外面ヘラミガキ、内面はハケ目調整とナデ。
678	主丘頂上	13L	Ⅱ	壷	肩部？	口：－ 底：－			外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	原体不明の擬縄文。
679	主丘頂上	15K	Ⅱ	壷	底部	口：－ 底：－			外：灰白 内：にぶい黄橙	線状圧痕（内部にギザギザあり）による矢羽状文。
680	主丘頂上	14M	Ⅱ	壷	台付壷	口：－ 底：－		砂・砂礫ほとんど含まない。	外：にぶい黄橙 内：灰	凹線文B＋棒状浮文。
681	主丘頂上	14K	Ⅱ	壷	台付壷	口：－ 底：156			外：浅黄橙 内：灰白	凹線文B。
682	主丘頂上	12・13M	Ⅱ	壷	台付壷	口：－ 底：－		砂・礫（大）少量含むが、器面への露出少ない。	外：にぶい黄橙～灰 内：にぶい黄橙	断面台形の厚い突帯。
683	主丘頂上	13L	Ⅱ	壷	台付壷	口：－ 底：－		砂礫多く含む。	外：にぶい黄橙 内：浅黄橙	粘土の貼り付けによる凹線文B。
684	主丘頂上	14M	Ⅱ	壷	細頸壷	口：－ 底：－		砂礫少量含むが、外面に露出していない。	外：灰白～にぶい黄褐 内：灰白～にぶい黄褐	外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリとナデ。
685	主丘頂上	12L	Ⅱ	壷	細頸壷	口：－ 底：－		砂・砂礫少ない。	外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：浅黄橙～にぶい黄橙	頸途中に僅かな段を作り出す。
686	主丘頂上	14L	Ⅱ	壷	細頸壷	口：－ 底：－		砂・礫ほとんど含まない。	外：浅黄橙 内：灰	内面は線状痕を残すナデ。
687	主丘頂上	15M	Ⅱ	高杯	A2	口：236 底：－	1/16	砂礫少量含むが、砂は少ない。	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	杯部底面側に環状把手。
688	主丘頂上	12L	Ⅱ	高杯	A2	口：229 底：－	2/16	砂礫・礫（中）多い。	外：浅黄橙 内：灰黄	内面摩耗強い。
689	主丘頂上	12L	Ⅱ	高杯	A2	口：230 底：－	0/16	砂・礫比較的少ない。	外：浅黄橙 内：浅黄橙	内面ヨコナデ。
690	主丘頂上	14M	Ⅱ	高杯	A1	口：233 底：－	4/16	砂礫・礫（中）含むが、器面への露出少ない。	外：灰白～にぶい黄橙 内：灰白～褐灰	
691	主丘頂上	15M	Ⅱ	高杯	A1	口：236 底：－	0/16	砂礫・礫（中）含むが、外面への露出少ない。	外：灰白 内：灰白	内面のほぼ半分が剥落。
692	主丘頂上	12K	Ⅱ	高杯	A1	口：230 底：－	0/16	砂・礫ほとんど含まない。	外：にぶい褐 内：褐	口縁端面に１条の浅い沈線。
693	主丘頂上	14L	Ⅱ	高杯	A1	口：276 底：－	2/16	礫（中・大）疎らに含む。	外：灰白～にぶい黄橙 内：褐灰	
694	主丘頂上	15M	Ⅱ	高杯	A2	口：218 底：－	1/16	砂・砂礫やや多い。	外：浅黄橙 内：灰白	
695	主丘頂上	15L	Ⅱ	高杯	A2	口：224 底：－	0/16		外：灰白 内：淡黄	稜を強調するように、稜直上に１条の沈線。
696	主丘頂上	13K	Ⅱ	高杯	A2	口：244 底：－	0/16	礫（大）疎らに含む。	外：にぶい黄橙 内：灰白	

■弥生土器観察表（29）　主丘頂上包含層

報告No.	地点大別	グリッド	層位	器種	分類	法量	残存率	胎土	色調	調整・文様等
697	主丘頂上	13M	Ⅱ	器台	A1	口：204 底：－	2/16	砂礫やや多く、礫（大）疎らに含む。	外：浅黄橙 内：淡黄	外面ヘラミガキ。内面摩耗強い。
698	主丘頂上	12L	Ⅱ	高杯	A	口：－ 底：－		砂礫含むが、器面への露出少ない。	外：灰白～にぶい黄橙 内：浅黄橙～褐	
699	主丘頂上	14L6	Ⅱ	高杯	A	口：－ 底：－		砂礫・礫（中）含むが、器面への露出少ない。	外：浅黄橙 内：浅黄橙	外面ヘラミガキ。内面の赤彩ほぼ剥落。
700	主丘頂上	16M	Ⅱ	高杯	A2	口：299 底：－	2/16	黒色砂粒多く含む。緻密さに欠ける生地土。	外：浅黄～橙 内：淡黄～橙	歪み強い。内外面の摩耗強い。
701	主丘頂上	16K	Ⅱ	高杯	B	口：238 底：－	2/16	礫（大）疎らに含む。	外：浅黄橙 内：浅黄橙	内外面の赤彩ほぼ剥落。
702	主丘頂上	14L	Ⅱ	高杯		口：218 底：－	2/16	礫（中）疎らに含むが、外面への露出少ない。	外：にぶい黄褐 内：にぶい黄褐	
703	主丘頂上	15L	Ⅱ	器台	A2	口：－ 底：－		砂礫含むが、器面への露出少ない。	外：浅黄橙 内：浅黄橙	稜部に帯状の突帯。
704	主丘頂上	13L	Ⅱ	高杯？		口：154 底：－	1/16		外：浅黄橙 内：浅黄橙～にぶい黄橙	
705	主丘頂上	16J	Ⅱ	高杯？		口：－ 底：－		砂礫（多くは石英）多く含む。	外：浅黄橙 内：にぶい黄橙	内面は全面的に剥落。
706	主丘頂上	14K	Ⅱ	器台？		口：－ 底：－		砂・礫はごく少ない。	外：にぶい黄橙 内：浅黄橙	稜上に圧痕文確認できるが、摩耗強く不明瞭。
707	主丘頂上	15K	Ⅱ	器台	A1	口：213 底：－	2/16	砂・礫ほとんど含まない。	外：浅黄橙～黄灰 内：にぶい黄橙	平行沈線文A。
708	主丘頂上	15L	Ⅱ	器台	A1	口：228 底：－	2/16	砂・砂礫少ない。	外：浅黄橙 内：浅黄橙～灰	凹線文C。下端は沈線文。
709	主丘頂上	16K	Ⅱ	器台	A1	口：178 底：－	1/16		外：浅黄橙 内：灰白	外面摩耗強いが、平行沈線文Aか。
710	主丘頂上	16K	Ⅱ	器台	A2	口：238 底：－	1/16	砂・礫は少なく、器面への露出も少ない。	外：灰白～黄灰 内：灰白～浅黄橙	平行沈線文A。外面の赤彩は一部に残存。
711	主丘頂上	14L	Ⅱ	器台	A2	口：189 底：－	0/16	砂・礫をほとんど含まない。	外：浅黄橙 内：浅黄橙	平行沈線文A。
712	主丘頂上	13M/13L	Ⅱ	器台	A2	口：186 底：－	4/16	砂・礫をほとんど含まない。	外：浅黄橙 内：浅黄橙	平行沈線文A。沈線間にナデ残された沈線の痕跡あり。外面の赤彩ほとんど残っていない。
713	主丘頂上	15L	Ⅱ	器台	A	口：－ 底：－		砂・砂礫は少ない。	外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：浅黄橙	上半は平行沈線文B1。下半は擬凹線文、あるいは平行沈線文A。内面はほとんど剥落。
714	主丘頂上	14L	Ⅱ	器台	A2	口：155 底：－	2/16	砂・礫はごく少ない。	外：灰白～浅黄橙 内：浅黄橙～黄橙	間隔の狭い平行沈線文A。稜上に浅い円形の圧痕文。
715	主丘頂上	15L	Ⅱ	器台	A2	口：－ 底：－		砂・砂礫の混入少なく、器面への露出も少ない。。	外：浅黄橙 内：にぶい黄橙	平行沈線文A。
716	主丘頂上	16j	Ⅱ	器台	脚台部	口：－ 底：176		砂・礫をほとんど含まない。	外：にぶい黄橙～褐灰 内：にぶい黄橙～明黄褐	外面は滑沢なヘラミガキ。内面はヨコナデ。
717	主丘頂上	13K	Ⅱ	器台		口：169 底：－	1/16	砂礫少量含む。	外：灰白～にぶい黄橙 内：灰白～にぶい黄橙	内外面ヘラミガキ。
718	主丘頂上	13M	Ⅱ	器台？		口：220 底：－	2/16		外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：浅黄橙～にぶい黄橙	内外面摩耗強い。
719	主丘頂上	14L	Ⅱ	器台？		口：154 底：－	0/16		外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：浅黄橙～にぶい黄橙	凹線文Aと刻みのある棒状浮文。摩耗強い。
720	主丘頂上	13M	Ⅱ	器台	脚台部	口：－ 底：－		砂礫・礫（中）含むが、外面への露出少ない。	外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：浅黄橙～にぶい黄橙	外面ヘラミガキ。
721	主丘頂上	15M	Ⅱ	器台	脚台部	口：－ 底：183		砂礫・礫（中）含むが、外面への露出少ない。	外：浅黄橙 内：浅黄橙	平行沈線文A。
722	主丘頂上	16K	Ⅱ	器台	脚台部	口：－ 底：156		砂礫やや多く、礫（中）疎らに含む。	外：浅黄橙 内：浅黄橙	平行沈線文A。器面の摩耗強い。

■弥生土器観察表（30）　主丘頂上包含層

報告No.	地点大別	グリッド	層位	器種	分類	法量	残存率	胎土	色調	調整・文様等
723	主丘頂上	12L	Ⅱ	器台	脚台部	口：－ 底：－		砂は含むが、礫をほとんど含まない。	外：浅黄橙 内：浅黄橙	平行沈線文A。内面は全面的に剥落。
724	主丘頂上	12L	Ⅱ	高杯	脚台部	口：－ 底：－		礫（中・大）多い。	外：浅黄橙～灰黄褐 内：浅黄橙	外面は約半分の範囲が剥落。
725	主丘頂上	12K	Ⅱ	高杯	脚台部	口：－ 底：－			外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：浅黄橙	内面ヘラケズリ。
726	主丘頂上	12L	Ⅱ	高杯	脚台部	口：－ 底：－		礫（中・大）多い。	外：灰白～明黄褐 内：黄褐	内面はやや角張ったナデ。外面は約半分の範囲が剥落。
727	主丘頂上	14L	Ⅱ	高杯	脚台部	口：－ 底：－		礫（中・大）多い。	外：浅黄橙～黄橙 内：にぶい黄橙	外面は約半分の範囲が剥落。
728	主丘頂上	14L	Ⅱ	高杯	脚台部	口：－ 底：－			外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：浅黄橙～にぶい黄橙	透孔数不明。
729	主丘頂上	15K	Ⅱ	高杯	脚台部	口：－ 底：－		礫（中）やや多い。	外：灰白～にぶい橙 内：灰～にぶい橙	外面は約半分の範囲が剥落。
730	主丘頂上	14M	Ⅱ	高杯	脚台部	口：－ 底：－		礫（中・大）疎らに含む。	外：にぶい黄橙～淡橙 内：浅黄橙～淡橙	
731	主丘頂上	14L	Ⅱ	器台	脚台部	口：－ 底：－		砂礫多いが、外面への露出少ない。	外：浅黄橙 内：にぶい黄橙	内面絞り目明瞭。上部はヘラケズリ。
732	主丘頂上	14L6	Ⅱ	器台	脚台部	口：－ 底：－		礫（中）疎らに含む。	外：浅黄橙～灰 内：浅黄橙	内面ヘラケズリ。透孔数不明。外面は約1/3の範囲が剥落。
733	主丘頂上	15L	Ⅱ	器台	脚台部	口：－ 底：－		礫（大）疎らに含む。	外：にぶい黄橙 内：浅黄橙	
734	主丘頂上	16L	Ⅱ	器台	脚台部	口：－ 底：－			外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：浅黄橙～にぶい黄橙	
735	主丘頂上	14M	Ⅱ	器台	脚台部	口：－ 底：－		礫（中・大）多く含む。	外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：灰白～にぶい黄橙	内面は全面的に剥落。外面も約1/3の範囲が剥落。
736	主丘頂上	13M	Ⅱ	器台	脚台部	口：－ 底：－			外：浅黄橙 内：浅黄橙	内面ヘラケズリ。
737	主丘頂上	14L	Ⅱ	器台	脚台部	口：－ 底：－		礫（中・大）疎らに含む。	外：浅黄橙 内：浅黄橙	内面はヘラケズリとナデ。
738	主丘頂上	16L	Ⅱ	器台	脚台部	口：－ 底：－		砂礫多く、礫（中・大）疎らに含む。	外：灰黄～灰 内：灰黄	内外面とも摩耗強い。
739	主丘頂上	14L	Ⅱ	器台	脚台部	口：－ 底：－		砂含むが、礫は見られない。	外：浅黄橙～黄橙 内：浅黄橙	内面ヘラケズリ。
740	主丘頂上	17K	Ⅱ	器台	脚台部	口：－ 底：－		砂礫やや多く、礫（中）疎らに含む。	外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：浅黄橙～にぶい黄橙	
741	主丘頂上	12K	Ⅱ	器台	脚台部	口：－ 底：－		礫（中・大）疎らに含む。	外：にぶい黄橙～淡橙 内：にぶい黄橙	外面は約半分の範囲が剥落。
742	主丘頂上	15J	Ⅱ	器台	脚台部	口：－ 底：－			外：灰黄～黄灰 内：浅黄橙	外面はハケ目を残すナデ。内面は受け部にハケ目が残る。
743	主丘頂上	17K	Ⅱ	器台	脚台部	口：－ 底：－		礫・礫ほとんど含まない。	外：黄灰～にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	外面は約半分の範囲が剥落。
744	主丘頂上	16M	Ⅱ	高杯	脚台部	口：－ 底：186		礫（中・大）疎らに含む。	外：浅黄橙 内：にぶい黄橙	脚端屈折。内面は脚端部を除いてハケ目調整。
745	主丘頂上	13K	Ⅱ	高杯	脚台部	口：－ 底：165			外：にぶい黄橙～灰 内：淡黄～黄灰	
746	主丘頂上	16M	Ⅱ	高杯	脚台部	口：－ 底：216			外：灰白 内：にぶい黄橙	脚端肥厚。透孔数不明。
747	主丘頂上	14K	Ⅱ	高杯	脚台部	口：－ 底：184		砂礫やや多い。	外：灰白 内：浅黄橙	肥厚する脚端に径4㎜の環形圧痕文。摩耗強い。
748	主丘頂上	15M	Ⅱ	高杯	脚台部	口：－ 底：213		礫（中・大）疎らに含む。	外：にぶい黄橙 内：浅黄橙～にぶい黄橙	脚端屈折、肥厚。

■弥生土器観察表（31）　主丘頂上包含層

報告№	地点大別	グリッド	層位	器種	分類	法量	残存率	胎土	色調	調整・文様等
749	主丘頂上	12K	Ⅱ	高杯	脚台部	口：－ 底：126		礫（中）疎らに含むが、外面への露出少ない。	外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：浅黄橙～にぶい黄橙	内面はハケ目調整とヨコナデ。脚端屈折。
750	主丘頂上	13L	Ⅱ	高杯	脚台部	口：－ 底：184		砂礫含むが、器面への露出少ない。	外：浅黄橙 内：浅黄橙～にぶい黄橙	内面はハケ目調整とヨコナデ。脚端折り返し。
751	主丘頂上	13M	Ⅱ	高杯/器台	脚台部	口：－ 底：－		砂・礫ほとんど含まない。	外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	ごく浅いゴマ粒大の圧痕文。
752	主丘頂上	14M	Ⅱ	高杯/器台	脚台部	口：－ 底：－		砂・礫ほとんど含まない。	外：にぶい黄橙 内：褐灰	
753	主丘頂上	17K	Ⅱ	高杯/器台	脚台部	口：－ 底：－		礫（中）疎らに含む。	外：灰白～にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	外面ヘラミガキ。
754	主丘頂上	12K	Ⅱ	高杯/器台	脚台部	口：－ 底：－		砂礫含むが、器面への露出少ない。	外：灰白～にぶい黄橙 内：浅黄橙	
755	主丘頂上	14M	Ⅱ	高杯/器台	脚台部	口：－ 底：159		礫（大）疎らに含む。	外：灰白～にぶい黄橙 内：灰白～にぶい黄橙	透孔数不明。脚端肥厚。
756	主丘頂上	15L	Ⅱ	高杯/器台	脚台部	口：－ 底：184		砂・礫をほとんど含まない。	外：浅黄橙 内：にぶい黄橙～褐灰	外目ヘラミガキ。内面ヨコナデ。透孔数不明。
757	主丘頂上	16L	Ⅱ	高杯/器台	脚台部	口：－ 底：189			外：灰白～浅黄橙 内：浅黄橙	
758	主丘頂上	14M	Ⅱ	鉢	A	口：229 底：－	0/16		外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：浅黄橙～にぶい黄橙	内外面の摩耗強い。
759	主丘頂上	15L	Ⅱ	鉢	A	口：215 底：－	1/16		外：浅黄橙～灰 内：浅黄橙～にぶい黄橙	
760	主丘頂上	15K	Ⅱ	鉢	A	口：190 底：－	1/16	砂・礫ほとんど含まない。	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	段の作りだしは外面のみ。
761	主丘頂上	14K	Ⅱ	鉢	A	口：205 底：－	0/16	砂・礫ほとんど含まない。	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙～にぶい黄褐	内外面ヘラミガキ。体部外面に薄い炭化物。
762	主丘頂上	16K	Ⅱ	鉢/壷		口：181 底：－	4/16	礫（中）疎らに含むが、外面への露出少ない。	外：灰白～淡黄 内：灰黄～淡黄	
763	主丘頂上	15L	Ⅱ	鉢/壷		口：185 底：－	2/16		外：浅黄橙 内：にぶい黄橙	
764	主丘頂上	14L	Ⅱ	鉢	A	口：218 底：－	1/16	礫（中）疎らに含む。	外：灰白～淡黄 内：灰黄	
765	主丘頂上	14K	Ⅱ	鉢	その他	口：209 底：－	1/16		外：灰白～灰 内：浅黄橙～にぶい黄橙	口縁直下に1条の凹線。
766	主丘頂上	16J	Ⅱ	鉢	C	口：164 底：－	1/16	砂・礫ほとんど含まない。	外：灰白～浅黄橙 内：灰白	ハケ目調整とヨコナデ。
767	主丘頂上	15K	Ⅱ	有孔鉢		口：－ 底：44		礫（中）疎らに含む。	外：浅黄橙～黄灰 内：灰白～にぶい黄橙	上げ底。ほぼ正円形の穿孔。
768	主丘頂上	11L	Ⅱ	有孔鉢		口：－ 底：30		砂は含むが、砂礫はごく少ない。	外：褐灰 内：褐灰	尖底ぎみの上げ底。不整形の穿孔。
769	主丘頂上	14L	Ⅱ	有孔鉢		口：－ 底：38		チャート・石英砂礫多く含む。	外：浅黄橙 内：浅黄橙	弱い上げ底。中心をそれた穿孔。
770	主丘頂上	13J	Ⅱ	有孔鉢		口：－ 底：51			外：灰白～灰 内：灰白	上げ底。孔径大きく20㎜前後。
771	主丘頂上	13L	Ⅱ	有孔鉢		口：－ 底：41			外：にぶい黄橙～灰 内：にぶい黄橙	内外面からの穿孔。
772	主丘頂上	14L	Ⅱ	有孔鉢		口：－ 底：44		礫（大）疎らに含む。	外：灰白～灰 内：浅黄橙	正円形の穿孔2か所。内面のハケ目は粗く、凹凸明瞭。
773	主丘頂上	17K	Ⅱ	有孔鉢		口：－ 底：40			外：灰白～灰 内：灰	ほぼ正円形の穿孔。
774	主丘頂上	13K	Ⅱ	有孔鉢		口：－ 底：32			外：にぶい黄橙～灰 内：灰白	貫通しない孔が内外面に1か所ずつ。

■弥生土器観察表（32）　主丘頂上包含層

報告No.	地点大別	グリッド	層位	器種	分類	法量	残存率	胎土	色調	調整・文様等
775	主丘頂上	14L	Ⅱ	有孔鉢		口：－ 底：35		砂・礫ごく少ない。	外：浅黄橙 内：にぶい黄橙	尖底ぎみの平底。
776	主丘頂上	15J	Ⅱ	有孔鉢		口：－ 底：19		礫（中・大）疎らに見られる。	外：浅黄橙 内：浅黄橙	ほぼ正円形の穿孔。
777	主丘頂上	15J	Ⅱ	有孔鉢		口：－ 底：14			外：にぶい橙 内：にぶい黄橙	内面は目の粗いハケ目調整と粗いナデ。ほぼ正円形の穿孔。外面赤化。
778	主丘頂上	16M	Ⅱ	把手付鉢		口：－ 底：－		砂礫多く、礫（中・大）疎らに含む。	外：灰白 内：灰白	
779	主丘頂上	12M5	Ⅱ		脚台部	口：－ 底：78		礫（大）少量含むが、外面への露出はない。。	外：灰白～黄灰 内：灰白～黄灰	端面の作りは端整さを欠く。
780	主丘頂上	13K	Ⅱ	台付壷？	脚台部	口：－ 底：75		砂礫含むが、外面への露出少ない。	外：浅黄橙 内：浅黄橙	内面はハケ目調整。
781	主丘頂上	12L	Ⅱ	台付壷？	脚台部	口：－ 底：78			外：浅黄橙 内：浅黄橙	外面は弱い橙化。
782	主丘頂上	15K	Ⅱ		脚台部	口：－ 底：58		内面に礫（大）1粒見られる。	外：灰白～淡橙 内：黄灰	外面は粗いハケ目調整とナデ。
783	主丘頂上	15K	Ⅱ		脚台部	口：－ 底：59		礫（中）少量含む。	外：灰白 内：にぶい黄橙	
784	主丘頂上	16M	Ⅱ			口：－ 底：－			外：浅黄橙 内：にぶい黄橙	外面の摩耗著しい。
785	主丘頂上	14L	Ⅱ		底部・脚台部	口：－ 底：－		礫（大）少量含む。	外：灰白 内：灰	
786	主丘頂上	13M	Ⅱ	鉢？		口：99 底：－	2/16		外：浅黄橙 内：にぶい黄橙	
787	主丘頂上	14L	Ⅱ	鉢？	底部	口：－ 底：50		礫（大）少量含み、長さ14mmの礫も1粒見られる。	外：浅黄橙 内：黄橙	
788	主丘頂上	12K	Ⅱ	鉢？		口：－ 底：40			外：灰黄褐 内：にぶい黄橙	外面・器壁赤化。
789	主丘頂上	13K	Ⅱ		底部	口：－ 底：30			外：灰白～灰 内：灰	あるいは蓋か。
790	主丘頂上	15L	Ⅱ	ミニチュア土器	壷底部	口：－ 底：21		黒色軟質の砂多い。	外：浅黄橙 内：淡黄	
791	主丘頂上	16L	Ⅱ		底部	口：－ 底：13		砂礫やや多い。	外：灰 内：浅黄橙	丸底の底部。
792	主丘頂上	17M	Ⅱ	蓋		口：24 底：－	10/16	砂やや多いが、外面への露出少ない。	外：灰白～にぶい黄橙 内：にぶい黄橙～灰	
793	主丘頂上	11L	Ⅱ	蓋		口：28 底：－	16/16	砂・砂礫ごく少ない。	外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	
794	主丘頂上	14K	Ⅱ	蓋		口：20 底：－	16/16	礫（中）疎らに含む。	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	
795	主丘頂上	12L	Ⅱ	蓋		口：19 底：－	2/16	砂・砂礫ごく少ない。	外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	
796	主丘頂上	16L	Ⅱ	蓋		口：26 底：－	7/16	砂・礫を含まない。	外：にぶい橙 内：にぶい黄橙	外面ヘラミガキ。
797	主丘頂上	15M	Ⅱ	蓋		口：30 底：－	16/16	砂礫やや多い。	外：浅黄橙 内：黄橙	
798	主丘頂上	15L	Ⅱ	蓋		口：16 底：－	16/16		外：浅黄橙 内：にぶい橙	
799	主丘頂上	15M	Ⅱ	蓋		口：21 底：－	16/16	砂少なく、礫を含まない。	外：浅黄橙～灰 内：にぶい黄橙	
800	主丘頂上	11L	Ⅱ	蓋		口：－ 底：71		砂・礫ごく少ない。	外：にぶい黄褐 内：褐	端部面取り

■弥生土器観察表（33）　主丘頂上包含層

報告№	地点大別	グリッド	層位	器種	分類	法量	残存率	胎土	色調	調整・文様等
801	主丘頂上	17K	Ⅱ	壺		口：－ 底：86		砂礫含むが、器面への露出少ない。	外：灰 内：にぶい黄橙	頂部は紡錘形に張り出す。内外面ヘラミガキ。
802	主丘頂上	15M	Ⅱ	鉢		口：－ 底：－			外：浅黄橙 内：にぶい黄橙	多孔。
803	主丘頂上	15K	Ⅱ	鉢/壷		口：－ 底：－			外：黄橙～褐 内：明黄褐	突起に正円形の穿孔。
804	主丘頂上	15K	Ⅱ		把手/突起	口：－ 底：－		緻密さに欠ける生地土。	外：灰白 内：----	
805	主丘頂上	16K	Ⅱ	甕	底部	口：－ 底：55		砂含むが、礫は見られない。	外：灰 内：褐灰	平行２条の沈線。外面黒変。
806	主丘頂上	13K	Ⅱ	甕	底部	口：－ 底：56		砂少なく、礫は見られない。	外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：褐灰	２～３条の十字状ヘラ描き線。内面のハケ目は粗く、凹凸明瞭。
807	主丘頂上	15J	Ⅱ	壷	底部	口：－ 底：50		砂・砂礫ごく少ない。	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	直角でない交差沈線。外面ヘラミガキ。
808	主丘頂上	14K	Ⅱ	壷	底部	口：－ 底：45		砂・砂礫ごく少ない。	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙～灰	十字状の沈線。外面ヘラミガキ。
809	主丘頂上	14L	Ⅰ	甕	A1	口：175 底：－	5/16	礫（中）少量含む。	外：灰白～にぶい黄橙 内：灰白～にぶい黄橙	擬凹線文あるいは平行沈線文Ａ。口縁部内面は明瞭なヨコナデ。
810	主丘頂上	17J	Ⅰ	甕	A2a	口：139 底：－	1/16		外：灰白～黄灰 内：灰白～黄灰	平行沈線文Ａ。外面にスス状炭化物。
811	主丘頂上	18K	Ⅰ	甕	A2a	口：188 底：－	1/16	砂礫・礫（中）少量多く含む。	外：浅黄橙 内：浅黄橙	凹線文Ｂ。
812	主丘頂上	15J	Ⅰ	甕	A2b	口：183 底：－	1/16		外：灰白～浅黄橙 内：明黄褐～灰黄褐	外面摩耗している。口頸稜に紡錘状圧痕文。
813	主丘頂上	19K	Ⅰ	甕	A	口：140 底：－	2/16		外：灰白～浅黄橙 内：黄灰	
814	主丘頂上	3号塚	盛土	甕	A2b	口：141 底：－	3/16		外：灰白 内：灰黄～灰	
815	主丘頂上	14M	Ⅰ	甕	A2a	口：153 底：－	1/16		外：淡黄～黄灰 内：灰	外面にスス状炭化物。
816	主丘頂上	3号塚	盛土	甕	B	口：153 底：－	3/16	砂含むが、礫は見られない。	外：浅黄橙 内：浅黄橙～にぶい黄橙	
817	主丘頂上	2号塚	盛土	甕	E2？	口：135 底：－	2/16	礫（中）疎らに含む。	外：灰黄～灰 内：褐灰	外面にスス状炭化物。
818	主丘頂上	14L	Ⅰ	甕	F	口：144 底：－	2/16		外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：浅黄橙～にぶい黄橙	口縁外面は凹線状に浅く窪む。
819	主丘頂上	19K	Ⅰ	甕	G	口：158 底：－	6/16		外：淡黄～浅黄 内：灰白～浅黄橙	
820	主丘頂上	19K	Ⅰ	甕	G2	口：170 底：－	2/16	砂礫含むが、砂はごく少ない。	外：淡黄 内：浅黄	
821	主丘頂上	14L	Ⅰ	甕	G	口：166 底：－	1/16		外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	口縁下外面は擬凹線文に類するヨコナデ。外面にスス状炭化物。
822	主丘頂上	2号塚	盛土	壷	有段口縁短頸	口：－ 底：－		礫（中）多い。	外：灰白～にぶい黄橙 内：浅黄橙	
823	主丘頂上	2号塚	盛土	壷	広口壷Ａ	口：190 底：－	1/16		外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	
824	主丘頂上	3号塚	盛土	壷	小型壷	口：119 底：－	3/16	砂・礫少なく、器面への露出も少ない。	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	外面ヘラミガキ。
825	主丘頂上	2号塚	盛土	器台	A1	口：203 底：－	0/16	砂・砂礫含むが、器面への露出少ない。	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙～褐灰	平行沈線文Ｂ1・Ｂ2。
826	主丘頂上	2号塚	盛土	高杯？		口：208 底：－	1/16	砂・礫（中）含むが、器面への露出少ない。	外：にぶい黄橙～褐灰 内：にぶい黄橙	

■弥生土器観察表（34）　主丘頂上包含層

報告No.	地点大別	グリッド	層位	器種	分類	法量	残存率	胎土	色調	調整・文様等
827	主丘頂上	2号塚	盛土	高杯	D	口：198 底：－	2/16	礫（中）少量含むが、器面への露出少ない。	外：灰白～にぶい黄橙 内：浅黄橙	内面は摩耗強い。
828	主丘頂上	12N	I	器台	A2	口：234 底：－	1/16	砂礫やや多い。	外：淡黄～灰 内：浅黄橙～にぶい黄橙	外面の摩耗強く、不明瞭だが平行沈線文A。
829	主丘頂上	13N	I	器台	脚台部	口：－ 底：－		礫（大）疎らに含む。	外：浅黄橙～淡橙 内：浅黄橙～淡橙	透孔4か所。外面の摩耗強い。
830	主丘頂上	14M	I	高杯/器台	脚台部	口：－ 底：－		砂礫・礫（中）疎らに含むが、砂は少ない。	外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：浅黄橙～にぶい黄橙	
831	主丘頂上	14M	I	高杯/器台	脚台部	口：－ 底：155			外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：浅黄橙～にぶい黄橙	内面はハケ目調整。
832	主丘頂上	13M	I		脚台部	口：－ 底：－		礫（中）疎らに含む。	外：にぶい黄橙～淡橙 内：明黄褐	
833	主丘頂上	2号塚	盛土	有孔鉢		口：－ 底：51		礫（大）少量含む。	外：浅黄橙～淡赤橙 内：灰白～淡赤橙	上げ底。中心からはずれた穿孔。
834	主丘頂上	2号塚	盛土	蓋		口：13 底：－	16/16	砂・礫ほとんど含まない。	外：灰 内：灰	
835	主丘斜面	11N	I	甕	G2	口：165 底：－	2/16	礫（中）疎らに含む。	外：灰白～明黄褐 内：灰白～明黄褐	
836	主丘斜面	12N	I	甕	G2	口：140 底：－	2/16		外：淡黄～黄灰 内：黄灰	
837	主丘斜面	11O	I	壺	無段口縁短頸	口：110 底：－	3/16	（中）疎らに含む。	外：灰白 内：灰白～にぶい黄橙	内面に環形の圧痕文1か所。
838	主丘斜面	13J	I	高杯	A2	口：174 底：－	1/16		外：灰白～黒褐 内：灰白～黄褐	
839	主丘斜面	12N	I	高杯/器台		口：236 底：－	2/16	砂・礫ほとんど含まない。	外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：浅黄橙～にぶい黄橙	
840	主丘斜面	13N	I	鉢		口：169 底：－	3/16	砂礫多い。	外：浅黄橙 内：浅黄橙～黄灰	
841	主丘斜面	18I	I	器台	脚台部	口：－ 底：151		砂・礫ほとんど含まない。	外：明黄褐 内：灰白～黄褐	平行沈線文B2。
842	主丘斜面	15J	I	有孔鉢		口：－ 底：46			外：にぶい黄橙～褐灰 内：浅黄～黄灰	内外両面からの穿孔。

■弥生土器観察表（35）　南環濠下小谷

報告No.	地点大別	グリッド	器種	分類	法量	残存率	胎土	色調	調整・文様等
843	南環濠下 東小谷	13P	甕	G2	口：139 底：－	1/16		外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：浅黄橙～灰黄	
844	南環濠下 東小谷	13P	甕	G2	口：140 底：－	2/16		外：灰白 内：灰白	
845	南環濠下 東小谷	13P	壷	G2	口：131 底：－	2/16	礫（中）少量含む。	外：灰白 内：灰白～浅黄橙	
846	南環濠下 東小谷	12P	高杯	A	口：－ 底：－		砂・砂礫ごく少ない。	外：灰白 内：灰白～浅黄橙	
847	南環濠下 東小谷	12P	器台	A2	口：－ 底：－		チャート・石英砂の混入多い。	外：浅黄橙 内：浅黄橙～褐灰	平行沈線文A。
848	南環濠下 東小谷	12P	器台	脚台部	口：－ 底：165		砂礫・礫（中）含むが、砂は少ない。	外：灰白 内：灰白	
849	南環濠下 東小谷	13P	器台	脚台部	口：－ 底：－		砂・礫ほとんど含まない。	外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：浅黄橙～にぶい黄橙	
850	南環濠下 東小谷	13P	鉢	A	口：206 底：－	1/16	礫（中）少量含む。	外：にぶい黄橙～淡黄 内：淡黄	口縁・体部境界に強いヨコナデ。
851	南環濠下 東小谷	12P	鉢？		口：103 底：－	3/16	砂多い。	外：浅黄橙 内：浅黄橙	
852	南環濠下 東小谷	13P	壷	台付壷？	口：－ 底：110		礫（中・大）疎らに含むが、器面への露出少ない。	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙～褐灰	外面はハケ目を残すヘラミガキ。内面もミガキ。
853	南環濠下 西小谷	10O	甕	A2	口：156 底：－	1/16		外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：浅黄橙～暗灰	ハケ目は櫛歯を使ったように条線が深い。外面全体にスス状炭化物。
854	南環濠下 西小谷	10N	壷？		口：140 底：－	2/16	砂・礫ごく少ない。	外：にぶい黄橙～褐灰 内：灰白～褐灰	外面はヨコナデとヘラミガキ。
855	南環濠下 西小谷	10N	甕	A2a	口：183 底：－	2/16	砂礫多い。	外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：浅黄橙～明褐	
856	南環濠下 西小谷	10O	甕	A2a	口：149 底：－	3/16	砂礫・礫（中）多い。	外：灰白～にぶい黄橙 内：浅黄橙～にぶい黄橙	
857	南環濠下 西小谷	10N	甕	F	口：139 底：－	10/16	砂礫やや多く、礫（中・大）多い。	外：浅黄橙～橙 内：浅黄橙～橙	
858	南環濠下 西小谷	10N	甕	A2a/E2	口：139 底：－	0/16	砂礫多く含む。	外：浅黄橙～にぶい橙 内：浅黄橙～にぶい黄褐	外面にスス状炭化物。
859	南環濠下 西小谷	10N	壷	有段口縁短頸	口：159 底：－	0/16	砂・礫少量含むが、外面への露出少ない。	外：灰白～にぶい橙 内：灰白～にぶい橙	
860	南環濠下 西小谷	10O	壷	広口壷A	口：199 底：－	2/16	砂礫やや多い。	外：灰白～にぶい橙 内：にぶい黄橙	内外面ヘラミガキ。
861	南環濠下 西小谷	10O・10N	壷	有段口縁短頸	口：125 底：－	7/16	礫（中・大）疎らに見られる。	外：灰白～にぶい黄橙 内：灰白～にぶい黄橙	外面摩耗しているが、平行沈線文Aか。
862	南環濠下 西小谷	10O	壷	パレススタイル	口：203 底：－	3/16	砂礫・礫（中）少量含むが、器面への露出少ない。	外：灰白～黄灰 内：灰白～にぶい橙	凹線文Aに棒状浮文を付加。
863	南環濠下 西小谷	10N	壷	体部	口：－ 底：－		砂は含むが、礫は見られない。	外：灰白 内：灰白～黄灰	擬凹線文あるいは平行沈線文Aと逆D字状の圧痕文。
864	南環濠下 西小谷	10N	壷	台付壷	口：－ 底：－		砂は含むが、礫はごく少ない。	外：灰白～褐灰 内：灰白～淡黄	凹線文B。
865	南環濠下 西小谷	11N	壷	無段口縁長頸	口：119 底：－	1/16	砂多い。	外：褐灰 内：浅黄橙～褐灰	
866	南環濠下 西小谷	10N	高杯	A2	口：214 底：－	5/16	砂礫含むが、外面への露出少ない。	外：灰白～明黄褐 内：灰白～明黄褐	
867	南環濠下 西小谷	10C・12P	高杯/器台		口：236 底：－	1/16	砂礫・礫（中）ごく少量含む。	外：浅黄橙～にぶい黄橙 内：浅黄橙～にぶい黄橙	
868	南環濠下 西小谷	10C・10N	高杯/器台	脚台部	口：－ 底：180		砂礫やや多い。	外：黄橙～淡赤橙 内：黄橙～橙	内面上位はヘラケズリ、下半はヨコナデ。

■弥生土器観察表（36）　南環濠下小谷

報告No	地点大別	グリッド	器種	分類	法量	残存率	胎土	色調	調整・文様等
869	南環濠下 西小谷	10O・10N	高杯/器台	脚台部	口：－ 底：－		砂礫やや多く、礫（中・大）疎らに含む。	外：浅黄橙～橙 内：浅黄橙～橙	外面と内面脚柱部橙変。
870	南環濠下 西小谷	10O	壷	台付壷？	口：－ 底：－			外：にぶい褐 内：にぶい褐	
871	南環濠下 西小谷	10N	有孔鉢		口：－ 底：41			外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	弱い上げ底。内面からの穿孔。

■土製品観察表

報告No	地点大別	遺構	グリッド	出土地点	層位	種類	形態・形状	軸長(mm)	最大径(推定径)(mm)	胴幅指数 最大径/軸長	孔径(推定径)(mm)	重さ(g)	備考
911	主丘頂上		15K		Ⅱ	有孔土製品	円筒形	46	41	0.89	11	69	孔内側に条痕・一部欠損
912	主丘頂上遺構	4号竪穴		A区	3層	有孔土製品	円筒形	47	32	0.68	6	32	欠損(2/3残存)
913	主丘頂上		15J		Ⅱ	有孔土製品	円筒形	44	28	0.64	7	35	一部欠損
914	主丘頂上		15J19		Ⅱ	有孔土製品	円筒形	42	32	0.76	7	42	孔軸内ずれ有・完形
915	主丘頂上		15J19		Ⅱ	有孔土製品	円筒形	39	30	0.77	7	37	完形
916	主丘頂上		15J19		Ⅱ	有孔土製品	円筒形	41	30	0.73	10	40	完形
917	主丘頂上		15J19		Ⅱ	有孔土製品	円筒形	38	32	0.84	7	42	完形
918	主丘頂上		16K		Ⅱ	有孔土製品	円筒形	41	28	0.68	8	32	孔内側に条痕・完形
919	主丘頂上		15J		Ⅱ	有孔土製品	円筒形	33	31	0.94	9	27	孔内側に条痕・一部欠損
920	主丘頂上		14L		Ⅰ	有孔土製品	短円筒形	47	(46)	(0.98)	(10)	50	欠損(1/2残存)
921	主丘頂上		12L		Ⅱ	有孔土製品	短円筒形	45	48	1.07	13	83	一部欠損
922	主丘頂上		12M		Ⅱ	有孔土製品	短円筒形	42	51	1.21	13	76	欠損(2/3残存)
923	主丘頂上		12M		Ⅱ	有孔土製品	短円筒形	43	50	1.16	16	84	一部欠損
924	主丘頂上		12M		Ⅱ	有孔土製品	短円筒形	39	(45)	(1.15)	(12)	34	欠損(1/3残存)
925	主丘頂上		12L		Ⅱ	有孔土製品	短円筒形	36	(45)	(1.25)	(13)	42	欠損(1/2残存)
926	主丘頂上		14L		Ⅱ	有孔土製品	短円筒形	25	(37)	(1.48)	(8)	13	孔内側に条痕・欠損(1/2残存)
927	主丘頂上		14L		Ⅱ	有孔土製品	円筒形	−	29	−	10	9	欠損
928	主丘頂上		13K		Ⅱ	有孔土製品	球形	42	47	1.12	10	57	下部剥落
929	主丘頂上		13L		Ⅱ	有孔土製品	球形	45	46	1.02	10	75	完形
930	北環濠			B区	1～2層(BT17)	有孔土製品	球形	41	44	1.07	10	66	完形
931	北環濠			B区	6～10層(BT17)	有孔土製品	球形	42	45	1.07	10	64	完形
932	主丘頂上遺構	3号竪穴		Pit 1	Ⅱ	有孔土製品	(球形)	(41)	(41)	1.00	(9)	18	欠損(1/4残存)
933	主丘頂上		15J19		Ⅱ	有孔土製品	球形	39	41	1.05	7	51	完形
934	主丘頂上		15J19		Ⅱ	有孔土製品	球形	38	40	1.05	8	50	一部欠損
935	主丘頂上		15J19		Ⅱ	有孔土製品	球形	(37)	37	(1.00)	6	40	孔内側に条痕・一部欠損
936	主丘頂上		16J		Ⅱ	有孔土製品	球形	34	(34)	(1.00)	(9)	11	欠損(1/3残存)
937	主丘頂上		13K		Ⅱ	有孔土製品	球形	35	36	1.03	3	36	一部欠損
938	主丘頂上		13K		Ⅱ	有孔土製品	球形	30	31	1.03	5	23	一部欠損
939	主丘頂上遺構	7号竪穴		D区	2～4層	有孔土製品	(球形)	−	(40)	−	(9)	17	欠損(1/4残存)
940	主丘頂上		16J		Ⅱ	有孔土製品	球形	32	(35)	(1.09)	6	34	一部欠損
941	主丘頂上		13K		Ⅱ	有孔土製品	球形	33	36	1.09	10	35	孔内側に条痕・孔軸斜め・完形
942	主丘頂上		14M		Ⅰ	有孔土製品	球形	28	30	1.07	7	24	一部欠損
943	主丘頂上		13M		Ⅱ	有孔土製品	球形	(27)	29	(1.07)	6	18	孔内側に条痕・破損
944	南環濠			14-1	1～3層(BT6)	有孔土製品	下膨形	22	25	1.14	3	12	完形・孔口下広がり
945	主丘頂上		16L		Ⅱ	有孔土製品	算盤珠形	(40)	50	(1.25)	8	68	孔軸斜め・一部欠損
946	主丘頂上		12L		Ⅱ	有孔土製品	算盤珠形	(39)	(49)	(1.26)	(9)	43	孔内側に条痕・欠損(2/3残存)
947	主丘頂上		16L		Ⅱ	有孔土製品	算盤珠形	(36)	(45)	(1.25)	(8)	28	欠損(1/2残存)
948	主丘頂上		14K		Ⅱ	有孔土製品	突起のある球状	−	−	−	正面 6 裏面 8	30	欠損
949	南環濠			13-3	6層(BT5)	紡錘車		32	上部 28 下部 49	1.53	上面 6 下面 8	70	一部欠損
950	主丘頂上		15J19		Ⅱ	盤状土製品	−	−	−	−	−	178	951と同一固体
951	主丘頂上		15J19		Ⅱ	盤状土製品	−	−	−	−	−	292	950と同一固体
	主丘頂上		12M		Ⅱ	有孔土製品	円筒形	−	−	−	(13)	32	孔内側に条痕・欠損
	南環濠			14-1	1～3層(BT6)	有孔土製品	円筒形	−	−	−	−	12	欠損
	主丘頂上		12M		Ⅱ	有孔土製品	球形	−	(41)	−	(12)	17	欠損
	主丘頂上		14K		Ⅱ	有孔土製品	算盤珠形	−	(40)	−	(10)	22	欠損
	主丘頂上		12L		Ⅱ	有孔土製品	算盤珠形	−	−	−	(10)	19	欠損
	主丘頂上		12L		Ⅱ	有孔土製品	算盤珠形	−	−	−	−	17	欠損
	南環濠			廃土		塊状土製品	不明	−	−	−	−	44	
	主丘頂上		12L		Ⅱ	塊状土製品	不明	−	−	−	−	54	
	主丘頂上		12L		Ⅱ	塊状土製品	不明	−	−	−	−	36	

■石器・石製品観察表（1）　砥　　石

報告No.	地点大別	分　類	遺　構	グリッド	出土地点	層　位	石　材（素材）	長（mm）	幅（mm）	厚（mm）	重さ（g）	備　考
1	主丘頂上	砥石		16M		Ⅱ	凝灰岩	34	29	14	17.5	6面使用。
2	南環濠	砥石			13-1	1･2･4･5層（BT4）	凝灰岩	30	30	26	32.7	下半欠損。
3	南環濠	砥石			16-1	ユカ	凝灰岩（赤シマ）	43	30	18	25.6	下半・裏面欠損。
4	主丘頂上遺構	砥石	13号土坑				凝灰岩（赤シマ）	68	26	25	60.3	上端欠損。
5	東環濠	砥石			Ⅰ4	ユカ	凝灰岩	83	36	31	152.8	6面使用。
6	主丘頂上	砥石		11L		Ⅱ	凝灰岩	74	38	31	135.3	上端欠損。
7	主丘頂上	砥石		15J		Ⅱ	凝灰岩	54	39	33	114.5	下半欠損。
8	主丘頂上	砥石		12L		Ⅱ	凝灰岩	70	52	40	217.6	6面使用。
9	主丘頂上遺構	砥石	1号竪穴			3層	凝灰岩	77	37	14	60.9	6面使用。
10	主丘頂上	砥石		15K		Ⅱ	凝灰岩（赤シマ）	116	44	36	145.4	下端・下半裏面欠損。
11	主丘頂上	砥石			2号塚	盛土	凝灰岩	110	38	34	238.0	下端使用、上端は礫面か。
12	主丘頂上	砥石		15J19		Ⅱ	凝灰岩	90	53	30	198.1	6面使用。
13	主丘頂上	砥石		12M		Ⅱ	凝灰岩	127	39	28	232.3	下端は礫面あるいは敲打面。側面・裏面に針先状の穿孔が計4ヶ所。
14	主丘頂上	砥石		15K		Ⅱ	凝灰岩	68	39	37	114.6	上端・下端欠損。
15	主丘頂上	砥石		14K		Ⅱ	凝灰岩	95	40	39	182.1	上半欠損。
16	主丘頂上	砥石		15M16		Ⅱ	凝灰岩	101	59	51	527.1	上端は破損後に一部再使用。
17	主丘頂上	砥石		15K		Ⅱ	凝灰岩	113	59	41	412.2	上端・下端は礫の形状残す。
18	主丘頂上	砥石		13K		Ⅱ	凝灰岩	79	43	31	176.0	裏面は両方向からの擦り切り。上端は礫の形状残す。
19	主丘頂上遺構	砥石	4号竪穴		B区	1･2層	凝灰岩	103	39	32	166.3	円礫から擦り切ったものか。下端面使用。
20	主丘頂上	砥石		17L		Ⅱ	凝灰岩	153	64	37	676.2	上端は使用しているが、礫の形状残す。
21	主丘頂上	砥石		14L		Ⅱ	凝灰岩（ゴマ粒大含む）	60	61	23	131.9	上下破損後に敲打か、正面右側の平行線は擦り切り痕か。
22	主丘頂上	砥石			1号塚	掘削土	凝灰岩	69	54	49	165.6	破損した一部。
23	南環濠	砥石			10-1		凝灰岩	111	34	38	177.7	両側面は節理面で破損。裏面は礫面。
24	主丘頂上遺構	砥石	3号竪穴			6層	凝灰岩	135	72	50	659.2	礫の形状よく残す。
25	主丘頂上	砥石		13L		Ⅱ	凝灰岩（赤シマ）	112	93	82	730.7	被熱したか、細かく破損。
26	主丘頂上	砥石		14M		Ⅱ	凝灰岩	57	47	11	34.9	裏面は剥離した面を再使用か。
27	主丘頂上	砥石		11K22		Ⅱ	凝灰岩（赤シマ）	150	130	129	3130.0	上半・下端の一部欠損。
	主丘頂上	砥石		11L		Ⅱ	凝灰岩（赤シマ）					
28	主丘頂上	砥石		11L		Ⅱ	凝灰岩（赤シマ）	167	145	34	901.2	裏面は節理面で破損、下半欠損。
29	主丘頂上	砥石		14M3		Ⅱ	凝灰岩	59	37	13	24.9	破損した一部。多面体の砥石。
30	主丘頂上遺構	砥石	2号竪穴			3層	砂岩（細）	73	27	26	39.7	
31	南環濠下東小谷	砥石		13P			砂岩（中～粗）	60	26	20	47.7	
32	主丘頂上	砥石		15J		Ⅱ	砂岩（細）	73	27	14	44.4	
33	主丘頂上	砥石		15K		Ⅱ	砂岩（細）	72	30	20	41.5	明らかな砥面は観察できず。
34	主丘頂上	砥石		17K		Ⅱ	砂岩（中～細）	85	41	27	119.5	上半欠損。
35	主丘頂上	砥石		15K		Ⅱ	砂岩（中～粗）	58	52	43	155.1	上端は敲打面、下半欠損。
36	主丘頂上	砥石		13L		Ⅱ	砂岩（中）	40	61	42	135.1	上下欠損。
37	主丘頂上	砥石		14M		Ⅱ	砂岩（中～細）	61	51	46	121.2	
38	主丘頂上	砥石		14K		Ⅱ	砂岩（細）	60	51	23	86.9	
39	主丘頂上	砥石		15K		Ⅱ	砂岩（粗）	-	63	13	99.0	裏面・上下欠損。
40	主丘頂上遺構	砥石	2号竪穴			3層	砂岩（中）	114	64	48	459.7	左半・下半欠損、上端は礫の形状残す。
41	主丘頂上	砥石		13L14		Ⅱ	砂岩（中）	106	94	47	533.3	上半欠損。
42	主丘頂上	砥石		15J		Ⅱ	砂岩（粗）	132	68	57	804.8	上端欠損。
43	南環濠	砥石			9-4		砂岩（中～細）	98	78	41	620.4	上半欠損、右側面上端は破損後に稜部を丸めている。 裏面は緩やかな凹面だが、滑らかでない。左側面も使用しているが、剥離痕残す。
44	主丘頂上	砥石		15K		Ⅱ	砂岩（粗）	176	87	66	1790.0	裏面の大部分・上端欠損。下端は破損後に敲打か。

■石器・石製品観察表 (2)　砥　　石

報告No.	地点大別	分　類	遺　構	グリッド	出土地点	層　位	石　材（素材）	長（mm）	幅（mm）	厚（mm）	重さ（g）	備　考
45	主丘頂上	砥石		15J		Ⅱ	砂岩〔粗〕	104	102	58	901.6	上半欠損。
46	主丘頂上	砥石		16L		Ⅱ	砂岩〔中〕	101	95	56	706.6	破損した一部。意図的な分割か。
47	主丘頂上	砥石		15M16		Ⅱ	砂岩〔中～粗〕	155	66	50	710.8	上端・下端は破損後に敲打か。
48	主丘頂上	砥石		15K8		Ⅱ	砂岩〔細～粗〕	144	110	77	1910.0	上半欠損。
49	主丘頂上	砥石		16M		Ⅱ	砂岩〔中～細〕	132	112	69	885.6	破損した一部。
50	主丘頂上	砥石		13L14		Ⅱ	砂岩〔中〕	177	133	115	3700.0	上面・下面は破損後に敲打か。正面は剥落後に再使用、あるいは意図的な砥面再生。
51	主丘頂上	砥石		14L		Ⅱ	砂岩〔中～粗〕	126	85	49	656.9	上端は破損後に敲打か。
52	主丘頂上	砥石		15J		Ⅱ	砂岩〔中～粗〕	212	154	95	3290.0	上端は破損後に敲打か。
53	主丘頂上	砥石		13L1		Ⅱ	砂岩〔細〕	230	109	51	1560.0	左側面は破損後に稜部を再使用。
54	主丘頂上	砥石		12L2		Ⅱ	砂岩〔中～細〕	236	135	89	3810.0	礫の形状よく残す。
55	主丘頂上	砥石		14K18		Ⅱ	砂岩〔中～細〕	213	151	47	1820.0	脆弱な未固結の砂岩。
56	主丘頂上	砥石		16M20			砂岩〔中～粗〕	274	130	78	5770.0	正面上部は意図的な砥面再生か。
57	主丘頂上遺構	砥石	6号竪穴		S2		砂岩〔中〕	242	168	72	2660.0	脆弱な未固結の砂岩。被熱して細片化。
58	主丘頂上	砥石		13M10		Ⅱ	砂岩〔中～粗〕	229	142	95	4870.0	上端は破損後に敲打か。
59	主丘頂上	砥石		15M		Ⅱ	砂岩〔中～粗〕	64	77	24	158.7	周縁は礫面が風化して剥落。
60	主丘頂上	砥石		15L		Ⅱ	砂岩〔中～細〕	77	85	50	439.7	礫の形状よく残す。下端は節理面で破損。
61	南環濠	砥石			15-2	6層（ET8）	砂岩〔中～粗〕	87	36	37	156.0	破損した一部。
62	主丘頂上	砥石		15L		Ⅱ	砂岩〔中～粗〕	53	39	17	44.0	脆弱な未固結の砂岩。
63	主丘頂上	砥石		12K		Ⅱ	頁岩	140	80	47	688.0	分割した後に上半のみ砥石として使用。
	南環濠	砥石			13-1	10層（BT4）						
64	主丘頂上	砥石		15K		Ⅱ	泥岩	112	48	45	252.3	礫の形状よく残す。

■石器・石製品観察表 (3)

報告No.	地点大別	分類	遺構	グリッド	出土地点	層位	重さ(g)	備考	面状磨耗痕	溝状擦痕	筋状擦痕	刺突孔	円錐形穿孔
65	主丘頂上遺構	軽石製研磨具	8号竪穴			1～4層	0.7	最大厚8㎜と非常に薄いが上面と底面に面状磨耗痕あり。小破片。	○				
66	主丘頂上	軽石製研磨具		10K		Ⅱ	0.7	角がとれ丸みを帯びる。面状磨耗痕あり。側面に最大幅3㎜・最長22㎜の溝状擦痕あり。	○	○			
67	主丘頂上	軽石製研磨具		15L		Ⅱ	1.2	丸みを帯びているが不定形である。最大幅4㎜・最長15㎜の溝状擦痕がある。	○	○			
68	主丘頂上遺構	軽石製研磨具	1号竪穴		C区	3層	1.3	底面は磨れ、角は丸みを帯びている。側面は破損または截断により平らになっている。	○				
69	主丘斜面	軽石製研磨具		15J		Ⅱ	1.3	丸みを帯び俵形を呈する。大小の刺突孔あり。				○	
70	主丘頂上	軽石製研磨具		11K		Ⅱ	1.3	面状磨耗痕あり。自然面は截断によるものか摩耗によるものか区別がつかない。	○				
71	主丘頂上遺構	軽石製研磨具	3号竪穴			2層	1.8	三角柱状で面状磨耗痕からなる。	○				
72	主丘頂上	軽石製研磨具		14K		Ⅱ	1.8	全体的に滑らかで丸みを帯びている。					
73	主丘頂上	軽石製研磨具		14L		Ⅱ	1.5	全体が滑らかで丸みを帯び、上面に最長22㎜の溝がある。底面に面状磨耗痕と刺突孔あり。	○	○		○	
74	主丘頂上	軽石製研磨具		15L		Ⅱ	1.9	面状磨耗痕部に筋状擦痕あり。他は自然面と破損面。破損。	○		○		
75	主丘頂上遺構	軽石製研磨具	6号竪穴		Pit 1		1.8	底面に面状磨耗痕あり。側面は滑らかで、上面に長軸20㎜・短軸15㎜の大きな抉りがある。	○				
76	主丘頂上遺構	軽石製研磨具	1号竪穴		D区	3層	2.2	角がとれ丸みを帯びた面と面状磨耗痕部からなる。面状磨耗痕は湾曲するように磨られている。	○				
77	主丘頂上遺構	軽石製研磨具	4号竪穴			3層	2.9	角がとれた自然塊状礫であるが、側面に最長5㎜の筋状擦痕がある。一部破損。			○		
78	主丘頂上	軽石製研磨具		14M		Ⅱ	2.1	角がとれて丸い自然塊状礫だが、上面に面状磨耗痕、側面に最長11㎜・最深2㎜の溝状擦痕がある。一部破損。	○	○			
79	主丘頂上	軽石製研磨具		16L		Ⅱ	2.4	截断面、底面以外は面状磨耗痕。側面に最大幅8㎜の筋状擦痕あり。	○		○		
80	主丘頂上	軽石製研磨具		14K		Ⅱ	2.2	底面に面状磨耗痕あり。上面と側面に筋状擦痕がある。	○		○		
81	主丘頂上	軽石製研磨具		16K		Ⅱ	2.3	丸みを帯びているが、底部は面状磨耗痕。側面に最大径6㎜・最深5㎜の刺突孔があり、左右に筋状擦痕がある。	○		○	○	
82	南環濠	軽石製研磨具			14-5	12・13層(BT7)	3.4	多面体を呈する。刺突孔あり。側面に10㎜・8㎜の筋状擦痕が2本ある。			○	○	
83	主丘頂上	軽石製研磨具		14K		Ⅱ	2.8	自然礫を角こま状に截断したもので、自然面を残す。側面に刺突孔あり。				○	
84	主丘頂上	軽石製研磨具		15K		Ⅱ	2.5	丸みを帯び、筋状擦痕と刺突孔がある。			○	○	
85	東環濠	軽石製研磨具			J-1		2.5	自然礫を角こま状に截断したもので、上面と底面に自然面が残る。側面は面状磨耗痕。	○				
86	主丘頂上	軽石製研磨具		15L		Ⅱ	3.6	面状磨耗痕あり。不定形。截断したものかまたは破片と考えられる。一部破損。	○				
87	主丘頂上	軽石製研磨具		16K		Ⅱ	3.1	全体的に丸みを帯び、側面に面状磨耗痕、筋状擦痕と刺突孔がある。	○		○	○	
88	主丘頂上	軽石製研磨具		14K		Ⅱ	3.7	上面は滑らかに磨られ丸みを帯びている。筋状擦痕がある。			○		
89	主丘頂上	軽石製研磨具		14L		Ⅱ	4.9	全体的に磨りが入り多面体を呈する。側面に最大幅9㎜・最長23㎜の溝状擦痕あり。	○	○			
90	主丘頂上遺構	軽石製研磨具	2号竪穴		D区	1～2層	2.6	側面は面状磨耗痕からなる。底面は滑らかに磨られている。	○				
91	主丘斜面	軽石製研磨具		12N		Ⅰ	4.6	面状磨耗痕部と自然面とからなるが不定形。丸みを帯びた自然面には筋状擦痕がある。	○		○		
92	主丘頂上	軽石製研磨具		15K		Ⅱ	5.0	全体的に磨りが入る。複数の筋状擦痕がある。最長30㎜・最深4㎜。			○		
93	主丘頂上	軽石製研磨具		14L		Ⅱ	5.9	底面、側面に面状磨耗痕あり。全面に大小の刺突孔がある。	○			○	
94	主丘頂上	軽石製研磨具		15K		Ⅱ	7.9	面状磨耗痕あり。面状磨耗痕中に筋状擦痕がある。	○		○		
95	主丘頂上	軽石製研磨具		15M		Ⅱ	6.1	底面と側面に面状磨耗痕があり、他は角のとれた自然面。側面には最大幅3㎜・最長30㎜の溝状擦痕がある。	○	○			
96	主丘頂上	軽石製研磨具		12L		Ⅱ	6.4	全体的に磨りが入り長台形を呈する。上面、底面に面状磨耗痕ある。一部破損。	○				
97	主丘頂上	軽石製研磨具			1号塚	盛土	5.4	角がとれた滑らかに磨られている。割れ口は欠損か人工的かは不明。2個体接合。一部破損。					
98	主丘頂上	軽石製研磨具		15K		Ⅱ	5.7	面状磨耗痕あり。面状磨耗痕中に筋状擦痕がある。	○		○		
99	主丘頂上遺構	軽石製研磨具	2号竪穴		D区	1～2層	5.1	上面は角がとれて丸みを帯びているが、底面・側面は面状磨耗痕からなる。	○				
100	主丘頂上	軽石製研磨具		14L		Ⅱ	6.2	面状磨耗痕あり。割れた面以外は滑らかに磨られている。上面、底面に刺突孔。2個体接合。	○			○	
101	主丘頂上	軽石製研磨具		14K		Ⅱ	7.6	角がとれ丸みを帯びている。中に面状磨耗痕が2箇所ある。角張った抉りがある。一部破損。	○				
102	主丘頂上遺構	軽石製研磨具	8号竪穴			1～4層	5.8	全面磨りが入り、底面は面状磨耗痕、他は角が落ちて丸みを帯びている。刺突孔あり。2個体を接合。	○			○	
103	南環濠	軽石製研磨具			11-1		7.3	側面を除き面状磨耗痕あり。側面に最大幅13㎜・最長45㎜・最深4㎜の溝状擦痕がある。	○	○			
104	主丘頂上	軽石製研磨具		14L		Ⅱ	7.8	底面、側面に面状磨耗痕と穿孔あり。不定形。3個体を接合。一部破損。	○			○	
105	主丘頂上	軽石製研磨具		11L		Ⅱ	8.2	角がとれ卵形を呈する。面状磨耗痕部が1箇所あり、他の面に刺突孔がある。	○			○	
106	主丘頂上	軽石製研磨具		15K		Ⅱ	8.7	角がとれて扁球形を呈する。筋状擦痕と刺突孔がある。一部破損。			○	○	
107	主丘頂上	軽石製研磨具		17L		Ⅱ	8.8	上面と底面に筋状擦痕あり。側面に刺突孔あり。底面以外は滑らかに研磨している。一部破損。			○	○	
108	主丘頂上	軽石製研磨具		14L		Ⅱ	8.8	上面中央に刺突孔と筋状擦痕あり。側面は滑らかに研磨している。			○	○	
109	主丘頂上	軽石製研磨具		14M		Ⅱ	9.0	多面体を呈する。面状磨耗痕部と丸みを帯びた部分の別がはっきりしている。	○				
110	主丘頂上遺構	軽石製研磨具	2号竪穴		D区	3層	8.5	上面、側面に面状磨耗痕あり。他は自然面。全面に渡り大小の刺突孔ある。	○			○	

■石器・石製品観察表（4）

報告No.	地点大別	分類	遺構	グリッド	出土地点	層位	重さ(g)	備考	面状磨耗痕	溝状擦痕	筋状擦痕	刺突孔	円錐形穿孔
111	主丘頂上	軽石製研磨具		14L		Ⅱ	8.9	全体が滑らかで丸みを帯びている。面状磨耗痕あり。溝状擦痕が3箇所にあり、刺突孔もある。	○	○		○	
112	主丘頂上遺構	軽石製研磨具	3号竪穴			1～2層	12.4	多面体を呈する。底面に4本、側面に3本の筋状擦痕あり。最大幅6㎜最長16㎜最深3㎜。底面は面状磨耗痕。	○		○		
113	主丘頂上	軽石製研磨具			3号塚		10.6	山形の自然塊状礫であるが、底部、上部に截断面がある。一部破損。					
114	主丘頂上	軽石製研磨具		14M		Ⅱ	12.3	上面に面状磨耗痕あり。側面に筋状擦痕がある。底面は截断面。	○		○		
115	主丘頂上	軽石製研磨具		14L		Ⅱ	10.1	上面は滑らかに磨られ、長軸20㎜・短軸15㎜の刺突孔と溝状擦痕がある。底面は平らに近い。		○		○	
116	主丘頂上	軽石製研磨具		14L		Ⅱ	13.4	角がとれて丸みを帯びた俵形。4個体接合。一部破損。					
117	主丘頂上	軽石製研磨具		16K		Ⅱ	11.9	側面は筋状擦痕が入り、刺突孔がある。底面は磨りが入り溝状擦痕がある。他は自然面。		○	○	○	
118	主丘頂上	軽石製研磨具		14K		Ⅱ	13.2	全体的に磨りが入り上面がくぼむ。					
119	主丘頂上	軽石製研磨具		15L		Ⅱ	13.5	角がとれて丸みを帯びた自然塊状礫である。一部破損。					
120	主丘頂上	軽石製研磨具		14L		Ⅱ	9.6	底面に最大幅6㎜・最長37㎜の溝状擦痕あり。他の面は滑らかに磨られている。一部破損。		○			
121	主丘頂上	軽石製研磨具		17L		Ⅱ	13.7	角がとれ丸みを帯びた面に大小の刺突孔がある。截断した面にも刺突孔がある。一部破損。				○	
122	南環濠	軽石製研磨具			14-5	1～3層（BT7）	9.5	全体に磨りが入り、多面体を呈する。側面に溝状擦痕と刃物等による抉りがある。		○			
123	主丘頂上遺構	軽石製研磨具	7号竪穴		S-1		13.9	上面、底面は面状磨耗痕。上面には1個、底面には2個の刺突孔あり。2個体接合。	○			○	
124	主丘頂上	軽石製研磨具		17K		Ⅱ	15.2	多面体を呈する。底面・側面は面状磨耗痕で上面は角がとれている。刺突孔あり。	○			○	
125	主丘頂上遺構	軽石製研磨具	1号竪穴			3層	14.3	面状磨耗痕部と丸みを帯びた面からなる。不定形。	○				
126	主丘頂上	軽石製研磨具		16K		Ⅱ	16.4	面状磨耗痕部以外は丸みを帯びている。筋状擦痕が多数入る。	○		○		
127	主丘頂上	軽石製研磨具		13L		Ⅱ	22.6	扁球形のものが割れたもの。全体に磨りが入り丸みを帯びている。					
128	主丘頂上	軽石製研磨具		15K		Ⅱ	15.0	面状磨耗痕あり。中に最大幅9㎜最長25㎜最深3㎜の溝状擦痕がある。大小の刺突孔ある。	○	○		○	
129	主丘頂上	軽石製研磨具		13L		Ⅱ	13.9	割れ面以外は滑らかに磨られている。					
130	主丘頂上	軽石製研磨具		14J		Ⅰ	16.1	角がとれ扁球形を呈する。全面に渡り刺突孔があるが自然的か人工的かの別がはっきりしない。				○	
131	南環濠	軽石製研磨具			15-2	6層（BT8）	16.0	面状磨耗痕があり多面体を呈する。側面に最大径2㎜最深3㎜の回転穿孔が三角形状に並んである。	○				
132	主丘頂上	軽石製研磨具		16K		Ⅱ	15.2	2箇所に面状磨耗痕あり。丸みを帯び、側面に刃物等によるV字状の抉りがある。全面に渡って刺突孔がある。	○			○	
133	主丘頂上	軽石製研磨具		14K		Ⅱ	24.6	丸みを帯び、中に面状磨耗痕あり。円錐形穿孔が3個ある。底面にある円錐形穿孔の最大径15㎜・最深20㎜。	○				○
134	主丘頂上	軽石製研磨具		17L		Ⅱ	29.7	割れ面以外は丸みを帯びている。面状磨耗痕と刺突孔あり。4個体接合。一部破損。	○			○	
135	主丘頂上	軽石製研磨具		15M		Ⅱ	16.8	全体が磨られ、底部に面状磨耗痕と最長41㎜の溝状擦痕あり。刺突孔あり。	○	○		○	
136	主丘頂上	軽石製研磨具			1号塚	盛土	17.0	截断されているが全面を磨り、扁球形を呈すると考えられる。截断面は自然面。一部破損。					
137	主丘頂上	軽石製研磨具		16J		Ⅱ	17.8	滑らかな扁球形を呈する。上面に最大幅8㎜・最長32㎜・最深6㎜の筋状擦痕あり。溝状擦痕・刺突孔あり。		○	○	○	
138	主丘頂上遺構	軽石製研磨具	2号土坑				18.0	角がとれて丸みを帯びている。不定形。上面に刃物等による切削がある。一部破損。					
139	主丘頂上	軽石製研磨具		15K		Ⅱ	18.7	角がとれて丸い山形の自然塊状礫。溝状のくぼみがあるが自然面か加工面かはっきりしない。					
140	主丘頂上	軽石製研磨具		15M		Ⅱ	21.4	全体に磨られ、底部に面状磨耗痕あり。底部上部に溝状擦痕があり、側面に刺突孔がある。	○	○		○	
141	主丘頂上	軽石製研磨具		15K		Ⅱ	18.0	全面に渡って刺突孔があり、底面に面状磨耗痕がある。一部破損。	○			○	
142	主丘頂上	軽石製研磨具		14L		Ⅱ	16.4	面状磨耗痕あり。不定形。上面、底面に大小の刺突孔あり。2個体接合。	○			○	
143	主丘頂上	軽石製研磨具			1号塚		24.6	角がとれた扁球形の自然塊状礫を截断したもの。截断面は自然面か加工面かはっきりしない。					
144	主丘頂上	軽石製研磨具		11L		Ⅱ	25.5	角がとれて丸みを帯びている。底面は面状磨耗痕。一部破損。	○				
145	主丘頂上	軽石製研磨具		14M		Ⅱ	26.9	底面以外は磨りが入り多面体を呈する。底面は截断面。一部破損。					
146	主丘頂上	軽石製研磨具		13K		Ⅱ	22.5	角がとれて扁球形の自然塊状礫であるが、上面に刃物等による切削がある。					
147	主丘頂上	軽石製研磨具		14K		Ⅱ	27.5	滑らかな面と自然面からなる。滑らかな面には刺突孔、自然面に溝状擦痕が2本ある。一部破損。		○		○	
148	主丘頂上	軽石製研磨具		14K		Ⅱ	27.8	角がとれて全体が滑らかに磨られている。溝状擦痕と刺突孔がある。		○		○	
149	主丘頂上	軽石製研磨具		13M		Ⅱ	30.6	角がとれて扁球形の自然塊状礫であるが、全体が滑らかに磨られ、刺突孔がある。一部破損。				○	
150	主丘頂上	軽石製研磨具		13K		Ⅱ	32.9	底面の一部に面状磨耗痕あり。上面は角がとれて丸みを帯びている。側面に2本の筋状擦痕がある。破損。	○		○		
151	主丘頂上	軽石製研磨具		16J		Ⅰ	33.5	角がとれ扁球形を呈する。面状磨耗痕部に筋状擦痕が5本ある。最大幅3㎜・最長62㎜・最深5㎜。	○		○		
152	主丘頂上	軽石製研磨具		14K		Ⅱ	34.1	面状磨耗痕あり。中央に刺突孔と円錐形穿孔があり、筋状擦痕が多数存在。先細り形。	○		○	○	○
153	主丘頂上遺構	軽石製研磨具	6号竪穴		Pit 1		31.9	角がとれて丸みを帯びた先細り形である。側面と底面に溝状擦痕あり。2個体接合。	○				
154	主丘頂上遺構	軽石製研磨具	3号竪穴		7		38.4	側面に長軸20㎜・短軸17㎜のくぼみがある。一部欠損。					
155	主丘頂上	軽石製研磨具		15M		Ⅱ	37.6	角がとれた自然塊状礫であるが、側面に筋状擦痕と刺突孔がある。底部は割れ面。一部破損。			○	○	
156	主丘頂上	軽石製研磨具		15K		Ⅱ	35.0	滑らかに磨られ丸みを帯びている。大小の刺突孔（最大径10㎜・最深10㎜）とその周りに磨りが入っている。				○	

■石器・石製品観察表（5）

報告No.	地点大別	分類	遺構	グリッド	出土地点	層位	重さ(g)	備考	面状磨耗痕	溝状擦痕	筋状擦痕	刺突孔	円錐形穿孔
157	主丘頂上	軽石製研磨具		13L		Ⅱ	38.6	上面と底面に筋状擦痕あり。他の面は滑らかで丸みを帯びている。			○		
158	主丘頂上	軽石製研磨具		15K		Ⅱ	51.2	角がとれて丸みを帯びている。全面に渡り刺突孔がある。一部破損。				○	
159	主丘頂上	軽石製研磨具		14L		Ⅱ	44.2	全体が滑らかに磨られ、全面に渡り刺突孔あり。不定形。				○	
160	主丘頂上	軽石製研磨具		14L		Ⅱ	46.3	全体が滑らかに磨られ、全面に大小の刺突孔がある。くぼみ痕あり。一部破損。				○	
161	主丘頂上	軽石製研磨具		14L		Ⅱ	47.3	上面に筋状擦痕があるが截断後の磨痕で一直線上にならない。側面は湾曲した面状磨耗痕。8個体接合。	○		○		
162	主丘頂上	軽石製研磨具		15L		Ⅱ	51.8	全面に渡り大小の刺突孔がある。破損？				○	
163	主丘頂上	軽石製研磨具		12K		Ⅱ	35.7	破損部以外は全面に磨りが入る。自然面には溝状擦痕が2箇所ある。一部破損。		○			
164	主丘頂上遺構	軽石製研磨具	1号竪穴		D区	1～2層	64.4	底面以外に大小の刺突孔と円錐形穿孔（最大径12㎜・最深23㎜）がある。	○			○	○
165	主丘斜面	軽石製研磨具		12N		Ⅱ	64.7	丸みを帯びた扁球形を呈する。刺突孔あり。（最大径30㎜・最深23㎜）4個体接合。小破片接合不可。				○	
	主丘頂上	軽石製研磨具		11K		Ⅱ	0.3	自然塊状礫あるいは小破片。					
	主丘頂上	軽石製研磨具		11L		Ⅱ	1.1	全体が磨られ多面体を呈する。完形？					
	主丘頂上	軽石製研磨具		12L		Ⅱ	0.5	丸みを帯びた小破片。					
	主丘頂上	軽石製研磨具		13L		Ⅱ	1.1	角がとれて丸みを帯びている小破損。					
	主丘頂上	軽石製研磨具		13L		Ⅱ	1.1	角がとれて丸みを帯びている小破損。					
	主丘頂上	軽石製研磨具		13L		Ⅱ	19.4	自然塊状礫あるいは破片。					
	主丘頂上	軽石製研磨具		13M		Ⅱ	0.5	自然塊状礫あるいは小破片。					
	主丘頂上	軽石製研磨具		13M		Ⅱ	1.1	不定形の破片。					
	主丘頂上	軽石製研磨具		14O	13Tr		9.7	角のとれた面と湾曲した面、截断面からなる。不定形。一部破損。	○？				
	主丘頂上	軽石製研磨具		14K		Ⅱ	2.5	自然塊状礫あるいは小破片。					
	主丘頂上	軽石製研磨具		14K		Ⅱ	2.6	全体が滑らかに磨られ丸みを帯びている。筋状擦痕あり。			○		
	主丘頂上	軽石製研磨具		14K		Ⅱ	2.8	滑らかに磨られた面と截断面からなる。	○？				
	主丘頂上	軽石製研磨具		14K		Ⅱ	3.7	側面と上面に刺突孔がある。破損。				○	
	主丘頂上	軽石製研磨具		14K		Ⅱ	5.7	自然塊状礫あるいは破片。破損。					
	主丘頂上	軽石製研磨具		14L		Ⅱ	0.1	自然塊状礫あるいは小破片。					
	主丘頂上	軽石製研磨具		14L		Ⅱ	0.5	自然塊状礫あるいは小破片。					
	主丘頂上	軽石製研磨具		14L		Ⅱ	1.7	自然塊状礫あるいは小破片。					
	主丘頂上	軽石製研磨具		14L		Ⅱ	2.1	自然塊状礫あるいは小破片。					
	主丘頂上	軽石製研磨具		14L		Ⅱ	3.1	自然塊状礫あるいは小破片。					
	主丘頂上	軽石製研磨具		14L		Ⅱ	3.8	角がとれ丸みを帯びている。一部破損。	○？				
	主丘頂上	軽石製研磨具		14L		Ⅱ	6.7	自然塊状礫あるいは破片。					
	主丘頂上	軽石製研磨具		14L		Ⅱ	26.3	自然塊状礫あるいは破片。破損。					
	主丘頂上	軽石製研磨具		14M		Ⅱ	0.7	自然塊状礫あるいは小破片。一部破損。					
	主丘頂上	軽石製研磨具		15K		Ⅱ	0.3	自然塊状礫あるいは小破片。					
	主丘頂上	軽石製研磨具		15K		Ⅱ	0.5	自然塊状礫あるいは小破片。					
	主丘頂上	軽石製研磨具		15K		Ⅱ	0.8	角がとれた丸い小破片。	○？				
	主丘頂上	軽石製研磨具		15K		Ⅱ	0.9	角がとれた丸い小破片。	○？				
	主丘頂上	軽石製研磨具		15K		Ⅰ	1.1	自然塊状礫あるいは小破片。					
	主丘頂上	軽石製研磨具		15K		Ⅱ	1.4	角がとれ丸みを帯びた小破片。2個体接合。一部破損。	○？				
	主丘頂上	軽石製研磨具		15K		Ⅱ	1.8	角がとれ丸みを帯びた小破片。					
	主丘頂上	軽石製研磨具		15K		Ⅱ	1.8	角がとれ丸みを帯びた小破片。底面に筋状擦痕あり。	○？		○		
	主丘頂上	軽石製研磨具		15K		Ⅱ	5.7	くぼみと刺突孔あり。				○	
	主丘頂上	軽石製研磨具		15K		Ⅱ	6.4	角がとれ丸みを帯びた小破片。	○？				
	主丘頂上	軽石製研磨具		15K		Ⅱ	6.9	角がとれ丸みを帯びた小破片。	○？				
	主丘頂上	軽石製研磨具		15K		Ⅱ	9.5	角がとれ丸みを帯び、中央部に刺突孔がある。				○	
	主丘頂上	軽石製研磨具		15K		Ⅱ	10.6	割れ面から、割れた後に再度加工している。一部破損。	○？				
	主丘頂上	軽石製研磨具		15K		Ⅱ	33.0	刺突孔がある。3個体を接合している。				○	

■石器・石製品観察表（6）

報告No.	地点大別	分類	遺構	グリッド	出土地点	層位	重さ（g）	備考	面状磨耗痕	溝状擦痕	筋状擦痕	刺突孔	円錐形穿孔
	主丘頂上	軽石製研磨具		15L		Ⅱ	0.3	小破片。					
	主丘頂上	軽石製研磨具		15L		Ⅱ	0.5	全体が滑らかに磨られているが不定形。自然塊状礫あるいは小破片。	○?				
	主丘頂上	軽石製研磨具		15L		Ⅱ	1.0	丸みを帯びた自然塊状礫あるいは小破片。					
	主丘頂上	軽石製研磨具		15L		Ⅱ	1.5	自然塊状礫あるいは小破片。					
	主丘頂上	軽石製研磨具		15L		Ⅱ	1.6	自然塊状礫あるいは小破片。一部破損。					
	主丘頂上	軽石製研磨具		15L		Ⅱ	9.1	角がとれ丸みを帯びた小破片。一部破損。	○?				
	主丘頂上	軽石製研磨具		16J		Ⅰ	2.3	自然塊状礫あるいは小破片。一部破損。					
	主丘頂上	軽石製研磨具		16K		Ⅱ	0.3	丸みを帯びているが、平らな面は截断面か磨面か区別できない。一部破損？					
	主丘頂上	軽石製研磨具		16K		Ⅰ	0.5	不定形の小破片。一部破損。					
	主丘頂上	軽石製研磨具		16K		Ⅱ	0.5	自然面と加工面の別がはっきりしない小破片。一部破損。					
	主丘頂上	軽石製研磨具		16K		Ⅱ	0.8	不定形の小破片。一部破損。					
	主丘頂上	軽石製研磨具		16L		Ⅱ	2.2	上面に溝状のくぼみがあるが截断されてるため大きさ不明。破損。					
	主丘頂上	軽石製研磨具		16L		Ⅱ	10.5	側面に刺突孔と溝状擦痕がある。上面の截断面以外は自然面。一部破損。		○		○	
	主丘頂上	軽石製研磨具			1号塚	盛土	7.6	側面は丸みを帯び、筋状擦痕がある。他は自然面。一部破損。	○?		○		
	主丘頂上	軽石製研磨具			2号塚	盛土	1.3	自然塊状礫または小破片。					
	主丘頂上	軽石製研磨具			2号塚	盛土	1.3	自然塊状礫または小破片。					
	主丘頂上遺構	軽石製研磨具	1号竪穴		C区	3層	0.5	角がとれ丸みを帯びている小破片。一部欠損。					
	主丘頂上遺構	軽石製研磨具	2号竪穴			1層	0.4	自然塊状礫あるいは小破片。					
	主丘頂上遺構	軽石製研磨具	2号竪穴		C区	1～2層	1.3	自然塊状礫あるいは小破片。					
	主丘頂上遺構	軽石製研磨具	2号竪穴		C区	3層	1.3	全体に磨りが入る？	○?				
	主丘頂上遺構	軽石製研磨具	2号竪穴		C区	1～2層	2.8	截断面以外は丸みを帯びている。截断面は自然。	○?				
	主丘頂上遺構	軽石製研磨具	2号竪穴		D区	1～2層	0.8	破損した面以外は丸みを帯びている。一部破損。	○?				
	主丘頂上遺構	軽石製研磨具	3号竪穴			1～2層	0.7	自然塊状礫または小破片。角がとれて丸みを帯びる。					
	主丘頂上遺構	軽石製研磨具	4号竪穴		B区		0.9	底面は丸みを帯びている。上面に筋状擦痕がある。	○?		○		
	主丘頂上遺構	軽石製研磨具	7号竪穴		A区	2～3層	0.8	自然塊状礫あるいは小破片。					
	主丘頂上遺構	軽石製研磨具	11号土坑			1～2層	2.8	角が取れて丸みを帯びている。刺突孔あり。				○	
	不明	軽石製研磨具					0.7	自然塊状礫の小破片。破損。					

■石器・石製品観察表（7）　石器・ガラス玉

報告No.	地点大別	分類	遺構	グリッド	出土地点	層位	石材（素材）	長（mm）	幅（mm）	厚（mm）	重さ（g）	折断・欠損	備考
166	主丘頂上	線状溝を有する石器		12L		Ⅱ	安山岩	135	92	74	930.1		被熱
167	主丘頂上	磨石類		14K		Ⅱ	安山岩	115	83	58	760.7		
168	東環濠	磨石類			I-4	ユカ	安山岩	141	91	62	1220.3		
169		磨石類			排土		硬砂岩	161	105	79	1961.4		
170	主丘頂上	尖頭器		12L		Ⅱ	チャート	51	22	8	8.6	先端部	
171	主丘頂上	尖頭器		14L4		Ⅱ	ガラス質安山岩	95	24	13	38.1		研磨痕あり
172	主丘頂上	石鏃		12L		Ⅱ	チャート	19	14	3	0.6		
173	主丘頂上	石鏃		15K		Ⅰ	チャート	24	13	3	0.7		
174	主丘頂上	石鏃		12L		Ⅱ	チャート	29	14	5	2.0	基部	
175	主丘頂上	石鏃未完成品		13L		Ⅱ	黒曜石	23	17	6	2.1		
176	南環濠	楔形石器			L4・5	ユカ	チャート	40	28	7	6.7		
177	主丘頂上	微細剥離痕ある剥片		12K		Ⅱ	黒曜石	22	20	4	1.1		
178	主丘頂上	両面調整石器		14L		Ⅱ	片岩	50	47	8	17.9		
179	主丘頂上	スクレイパー		12L		Ⅱ	ガラス質安山岩	56	66	26	75.6		
180	主丘頂上	磨製石斧		12L		Ⅱ	蛇紋岩	111	45	18	155.9		両刃・偏刃
181	主丘頂上	磨製石斧		11L		Ⅱ	凝灰岩	97	50	18	123.8		片刃・円刃
182	主丘頂上	磨製石斧		12L		Ⅱ	蛇紋岩	77	45	14	83.2		片刃・円刃
183	主丘頂上	磨製石斧		15L		Ⅱ	凝灰岩	27	17	7	5.1	刃部	刃部欠損
184	主丘頂上	磨製石斧		15J23		Ⅱ	閃緑岩	128	63	32	458.2		両刃
185	主丘頂上	環状石斧		11K25		Ⅱ	安山岩	114	114	24	333.1	刃部（一部）	
186	主丘頂上	石核		17K		Ⅱ	チャート	15	41	25	17.2		
187	主丘頂上	原石		14K		Ⅰ	翡翠	82	75	60	448.5		
188	主丘頂上	原石		16L		Ⅰ	翡翠	102	67	54	443.1		
189	主丘斜面	原石		15N		Ⅰ	翡翠	102	66	37	252.6		
190		原石			不明		翡翠	83	93	59	576.1		
191	主丘頂上	原石		16M11		Ⅱ	翡翠	112	76	62	967.5		研磨痕あり
192	主丘頂上	原石		15M13		Ⅱ	翡翠	90	104	51	618.6		研磨痕あり
193	主丘頂上	原石		14M		Ⅰ	翡翠	22	22	10	7.5	下半	
194	南環濠	原石			14-1	1～3層（BT6）	翡翠	17	13	10	2.2		
195	南環濠	原石			13-5	3層	翡翠	20	13	4	1.8		研磨痕あり
196	主丘頂上	石核		10K		Ⅱ	緑色凝灰岩	35	53	45	61.8		
197	主丘頂上	玉作関連資料		14L2		Ⅱ	緑色凝灰岩	39	17	15	5.9	左？	
198	主丘頂上	玉作関連資料		14M		Ⅰ	緑色凝灰岩	39	14	8	3.1	左？	
199	主丘頂上	玉作関連資料		14L5		Ⅰ	緑色凝灰岩	40	24	19	16.7	右？	左側面・石核作業面
200	東環濠	玉作関連資料			I-5	底面	緑色凝灰岩	32	42	13	15.3	下	
201	主丘頂上	玉作関連資料		12K		Ⅱ	チャート	34	36	14	17.9		
202	主丘頂上	玉作関連資料		13L5		Ⅱ	翡翠	20	15	13	5.4		研磨痕あり
203	主丘頂上	玉作関連資料		16L		Ⅰ	緑色凝灰岩	19	14	9	2.9		研磨痕あり
204	南環濠	玉作関連資料			13-5	3層	緑色凝灰岩	15	10	8	1.1	上下左右？	研磨痕あり
205	南環濠	玉作関連資料			14-1	1～3層（BT6）	凝灰岩	26	14	10	2.9		研磨痕あり
206	主丘頂上	管玉未完成品		15K6		Ⅱ	チャート	36	9	9	4.5		
207	南環濠	管玉未完成品			15-3	付帯小溝	凝灰岩	15	5	4	0.5		穿孔途中
208	主丘頂上遺構	管玉	2号竪穴		No.1	3層	緑色凝灰岩	16	4	4	0.5		
209	主丘頂上遺構	管玉	2号竪穴		No.2	3層	緑色凝灰岩	15	4	4	0.4		
210	南環濠	管玉		17N5			緑色凝灰岩	14	3	3	0.1		
211	主丘頂上遺構	管玉	4号竪穴		ベルト	スイセン	緑色凝灰岩	10	2	2	0.1		

■石器・石製品観察表（8）　石器・ガラス玉

報告No.	地点大別	分類	遺構	グリッド	出土地点	層位	石材〔素材〕	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重さ(g)	折断・欠損	備考
212	主丘頂上遺構	勾玉未完成品	1号竪穴		D区	2層	緑色凝灰岩	20	12	8	3.4		
213	主丘頂上	勾玉未完成品		14M20		Ⅱ	翡翠	41	20	18	32.1		擦切痕あり
214	南環濠	勾玉未完成品			No.12ベルト		翡翠	10	7	4	0.7		
215	南環濠	勾玉未完成品			No.4ベルト		翡翠	9	6	3	0.3		
216	主丘頂上遺構	勾玉	1号竪穴			スイセン	翡翠	10	6	3	0.3		
217	主丘頂上遺構	小玉	1号竪穴		No.11	3層	ガラス	4	4	3	0.1		
218	主丘頂上遺構	小玉	1号竪穴		No.12	3層	ガラス	4	3	3	0.1		
219	主丘頂上遺構	小玉	4号竪穴		No.1		ガラス	4	4	3	0.1		
220	主丘頂上	小玉		16M16		Ⅱ	ガラス	4	4	3	0.1		
221	主丘頂上遺構	小玉	4号竪穴		No.2		ガラス	4	3	3	0.1		
222	主丘頂上遺構	小玉	4号竪穴		ベルト	スイセン	ガラス	3	3	3	0.1		
223	主丘頂上	数珠玉	3号塚			表面	水晶	8	9		0.9		
224	主丘頂上	数珠玉	3号塚			表面	水晶	7	8		0.6		
225	主丘頂上	数珠玉	3号塚		主体土坑		水晶	8	8		0.7		
226	主丘頂上	数珠玉	3号塚		主体土坑		水晶	8	8		0.8		
227	主丘頂上	数珠玉	3号塚		主体土坑		水晶	9	9		0.9		
228	主丘頂上	数珠玉	3号塚		主体土坑		水晶	9	9		1.0		
229	主丘頂上	数珠玉	3号塚		主体土坑		水晶	9	9		1.0		
230	主丘頂上	数珠玉	3号塚		主体土坑		水晶	8	9		0.9		
231	主丘頂上	数珠玉	3号塚		主体土坑		水晶	8	9		0.8		
232	主丘頂上	数珠玉	3号塚		主体土坑		水晶	9	9		1.0		
233	主丘頂上	数珠玉	3号塚		主体土坑		水晶	8	9		1.0		
234	主丘頂上	数珠玉	3号塚		主体土坑		水晶	9	9		1.1		
235	主丘頂上	数珠玉	3号塚		主体土坑		水晶	9	9		0.9		
236	主丘頂上	数珠玉	3号塚		主体土坑		水晶	8	9		0.9		
237	主丘頂上	数珠玉	3号塚		主体土坑		水晶	9	9		1.0		
238	主丘頂上	数珠玉	3号塚		主体土坑		水晶	8	8		0.7		
239	主丘頂上	数珠玉	3号塚		主体土坑		水晶	7	7		0.6		
240	主丘頂上	数珠玉	3号塚		主体土坑		水晶	7	7		0.5		
241	主丘頂上	数珠玉	3号塚		主体土坑		水晶	7	7		0.5		
242	主丘頂上	数珠玉	3号塚		主体土坑		水晶	6	7		0.4		
243	主丘頂上	数珠玉	3号塚		主体土坑		水晶	6	6		0.3		
244	主丘頂上	数珠玉	3号塚		主体土坑		水晶	5	6		0.3		
245	主丘頂上	数珠玉	3号塚		主体土坑		水晶	5	6		0.2		
246	主丘頂上	数珠玉	3号塚		主体土坑		水晶	6	6		0.3		
247	主丘頂上	数珠玉	3号塚		主体土坑		水晶	11	7		0.6		
248	主丘頂上	加工痕ある礫	3号塚			葺石	流紋岩	57	58	24	66.1		鑿による削り痕
249	主丘頂上	石仏	1号塚			掘削土	安山岩	165	100	113	1498.7		

■縄文土器観察表

報告No.	地点大別	グリッド	出土地点	層位	胎土	色調	文様等
872	主丘頂上	12K		Ⅱ	白色鉱物砂礫・チャート砂礫・石英砂礫	褐	斜行・横走する絡条体圧痕
873	北カンゴウ		A区	11～13 (BT16)	白色鉱物砂・チャート砂礫	明褐	横走する絡条体圧痕
874	主丘頂上	16K		Ⅱ	白色鉱物砂	灰褐	
875	主丘頂上	16J		Ⅱ	灰白色鉱物砂	にぶい橙	
876	主丘頂上	16L		Ⅱ	白色鉱物砂	にぶい橙	
877	主丘頂上		2号塚盛土		チャート砂	橙	半隆起線
878	主丘頂上	14L		Ⅱ	チャート砂	橙	半隆起線・単節LR
879	主丘頂上	16J		Ⅱ	チャート砂・白色鉱物砂	にぶい黄橙	単節RL
880	主丘頂上	14M		Ⅱ	チャート砂	にぶい黄橙	単節LR
881	主丘頂上	16L		Ⅱ	チャート砂	にぶい黄橙	単節LR
882a	主丘頂上	14L		Ⅱ	チャート砂少量	にぶい黄橙	単節LR、弥生後期天王山式か。
882b	主丘頂上	14L		Ⅱ	チャート砂少量	にぶい黄橙	単節LR、弥生後期天王山式か。
883	主丘頂上		2号塚盛土		チャート砂	橙～明赤褐	単節LR
884	主丘頂上	14L		Ⅱ	チャート砂	橙～明赤褐	単節LR

■古代・中世の土器観察表

報告No.	地点大別	遺構	グリッド	層位	器種	法量	残存率	胎土	色調	調整・文様等
885	付帯調査区B	H1号竪穴			須恵器杯	口：12.2	9／16		にぶい黄橙	底面回転糸切り、「七」の墨書。
886	付帯調査区B	H1号竪穴			須恵器杯	口：11.8	2／16		灰	
887	付帯調査区B	H1号竪穴			須恵器長頸壺	口：6.0	16／16	白色鉱物砂	赤褐～橙	非還元焼成、底面回転糸きり。
888	付帯調査区B	H1号竪穴			土師器杯	口：8.8	8／16		橙～浅黄橙	スス状・タール状炭化物付着、底面回転糸切り。
889	付帯調査区B	H1号竪穴			土師器小甕	口：13.3	6／16	チャート砂礫・軟質赤褐色砂礫	橙	底面回転糸切り。
890	付帯調査区B	H1号竪穴			土師器小甕	口：14.0	8／16	チャート砂礫・軟質赤褐色砂礫	橙	底面回転糸切り。
891	付帯調査区B	H1号竪穴			土師器小甕	口：13.2	15／16	チャート砂礫・軟質赤褐色砂礫	橙	底面回転糸切り。
892	付帯調査区B	H1号竪穴			土師器甕	口：22.9	4／16		橙	平行タタキ目。
893	付帯調査区B	H1号竪穴			土師器甕	口：21.3	3／16		橙	格子タタキ目、体部上半カキ目。
894	主丘頂上		13L	Ⅱ	須恵器蓋	口：15.2	14／16		暗灰黄	
895	主丘頂上		12L・13M・13L	Ⅱ	須恵器杯	口：13.6	11／16		暗灰黄	底面回転糸切りの後ナデ。
896	主丘頂上		14K・14L	Ⅱ	土師器杯	口：12.9	4／16	混入物ほとんどなし	明黄褐	
897	主丘頂上		14K・14L	Ⅱ	土師器杯	口：14.0	9／16	混入物ほとんどなし	明黄褐	底面回転糸切り。
898	主丘頂上		13L	Ⅱ	土師器小甕	口：10.9	7／16	チャート砂	橙	
899	主丘頂上		14K・14L	Ⅱ	土師器甕	口：17.3	14／16	軟質赤褐色砂礫	黄橙	
900	主丘頂上		14M3・14M	Ⅱ	土師器甕	口：19.8	8／16	軟質赤褐色砂礫・チャート砂礫	橙	格子タタキ目、カキ目状多条沈線。
901	主丘頂上		14M	Ⅱ	土師器甕	口：18.8	3／16	チャート砂礫	黄橙	平行タタキ目。
902	主丘頂上		14M	Ⅱ	土師器甕	口：22.8	3／16		黄橙	平行タタキ目。
903	主丘頂上		13L	Ⅱ	土師器甕	口：22.0	2／16		黄橙	体部上半カキ目。
904	主丘頂上	2・3号塚主体土坑 1号塚掘削土	14L・15J・16J	Ⅰ	珠洲焼鉢	口：28.0	7／16	白色鉱物砂・チャート砂礫	暗青灰	

図　　版

註

1．土器の実測図において、口径復元が困難なものは、中心線と外形線を離して示した。

2．石器実測図の網がけは、すべて摩耗痕である。

3．遺構写真図版は、6×7版フィルム(トリミングなし)を基本とした。

4．遺物写真図版の縮尺は、以下のとおりである。

土器破片資料・・・・・・・約1：3

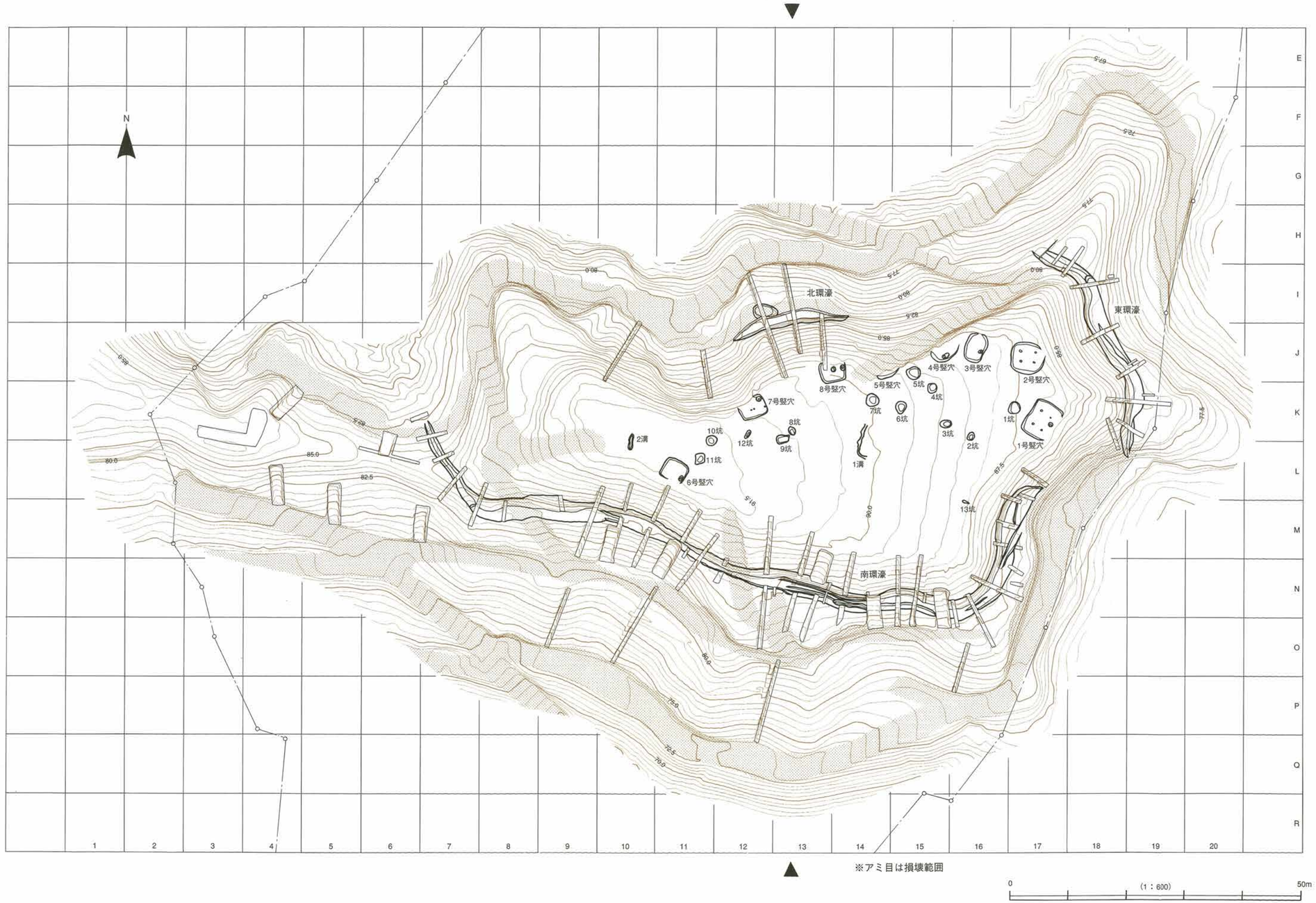
その他の土器・・・・・・・任意

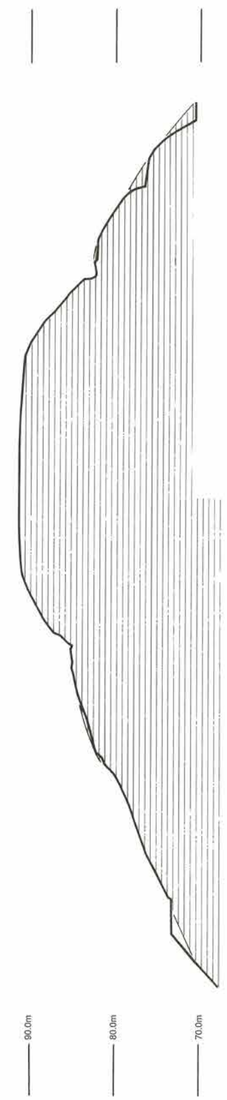
土製品・・・・・・・・・・図面図版と同一

石器・石製品・・・・・・・図面図版と同一

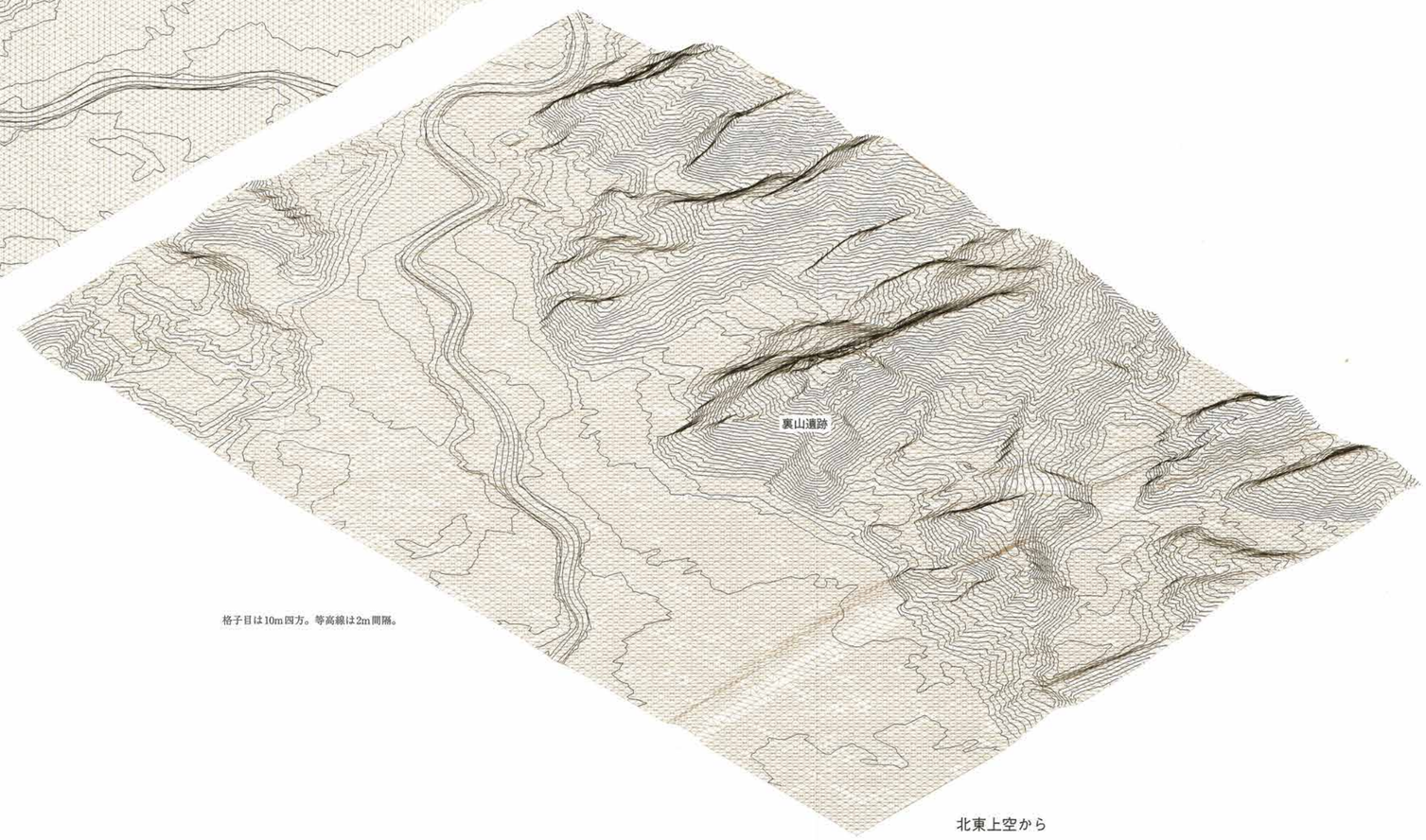
墨書礫・・・・・・・・・・約1：3

種実圧痕・・・・・・・・・任意


N
北環濠
東環濠
南環濠
1号竪穴
2号竪穴
3号竪穴
4号竪穴
5号竪穴
6号竪穴
7号竪穴
8号竪穴
1坑
2坑
3坑
4坑
5坑
6坑
7坑
8坑
9坑
10坑
11坑
12坑
13坑
1溝
2溝
E
F
G
H
I
J
K
L
M
N
O
P
Q
R
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
※アミ目は損壊範囲
0
(1：600)
50m

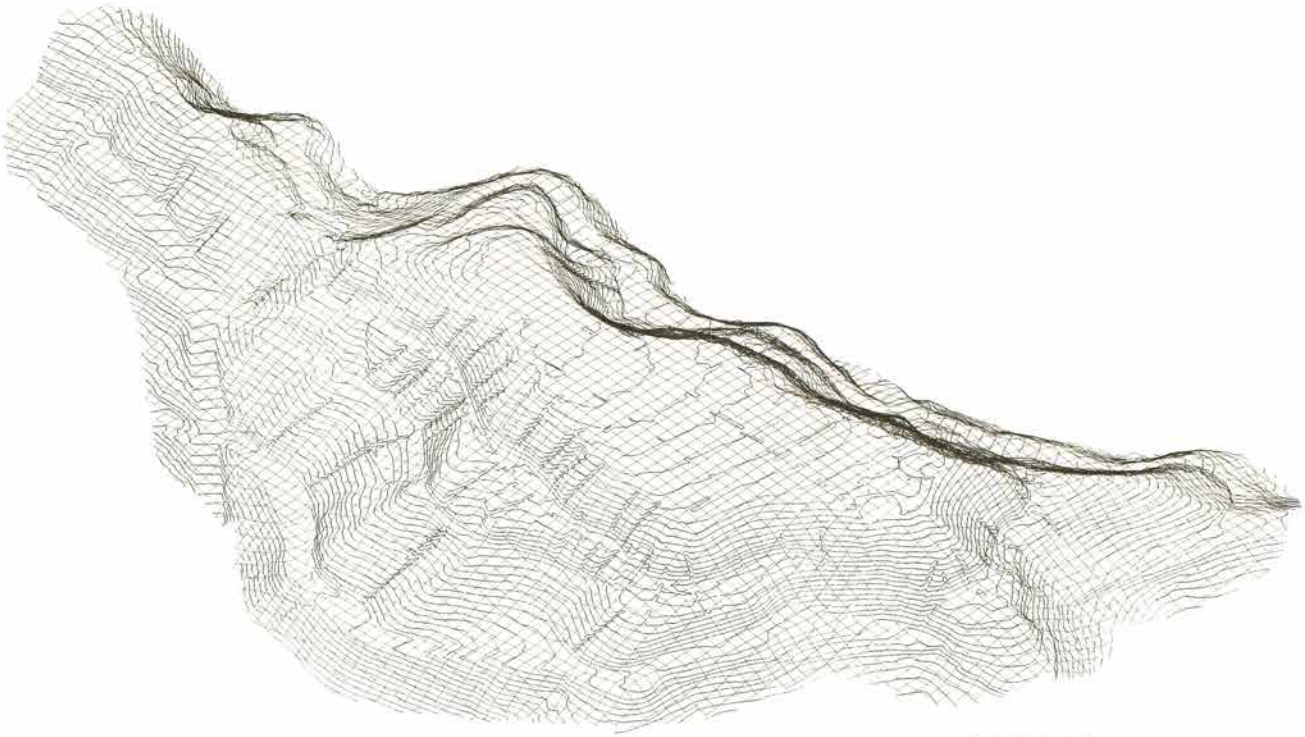

90.0m
80.0m
70.0m

南東上空から



北東上空から

格子目は10m四方。等高線は2m間隔。

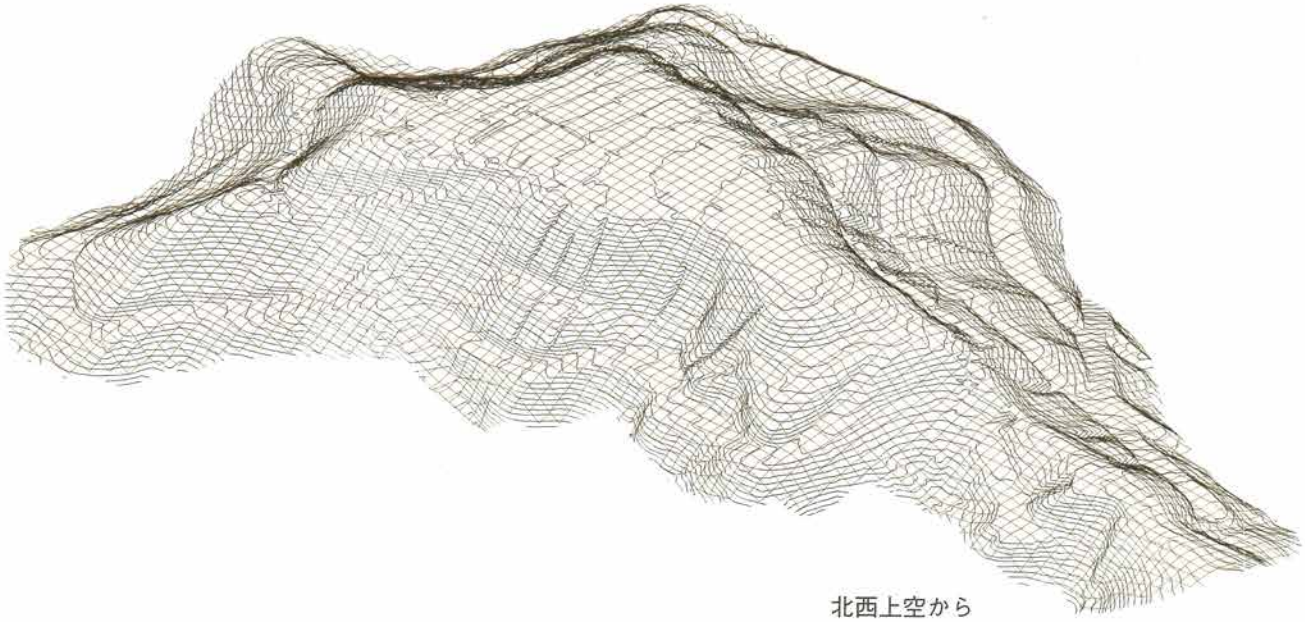


南東上空から

南西上空から

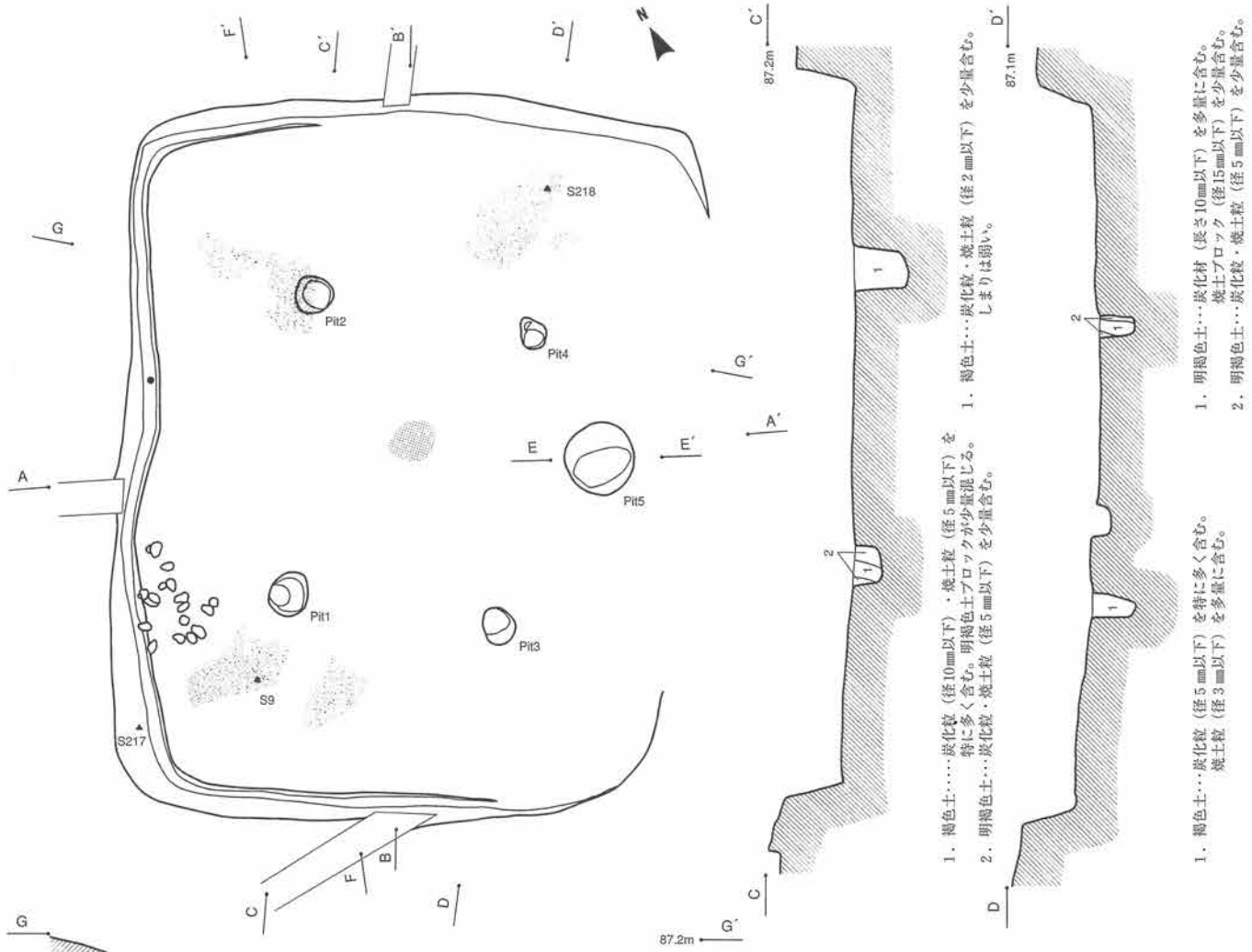
格子目は2m四方。等高線は0.5m間隔

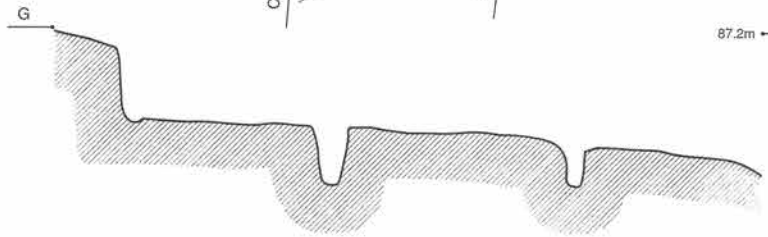
北東上空から

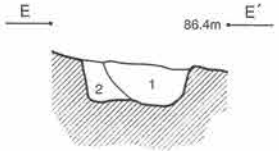


北西上空から

格子目は2m四方。等高線は0.5m間隔



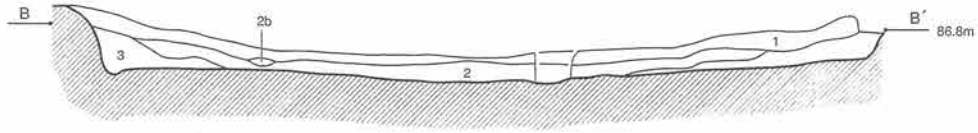




1．褐色土……炭化粒（径5㎜以下）を少量含む。
2．明褐色土…炭化粒（径2㎜以下）をごく少量含む。

0 (1：40) 1m

土層番号はB－B′と共通する。

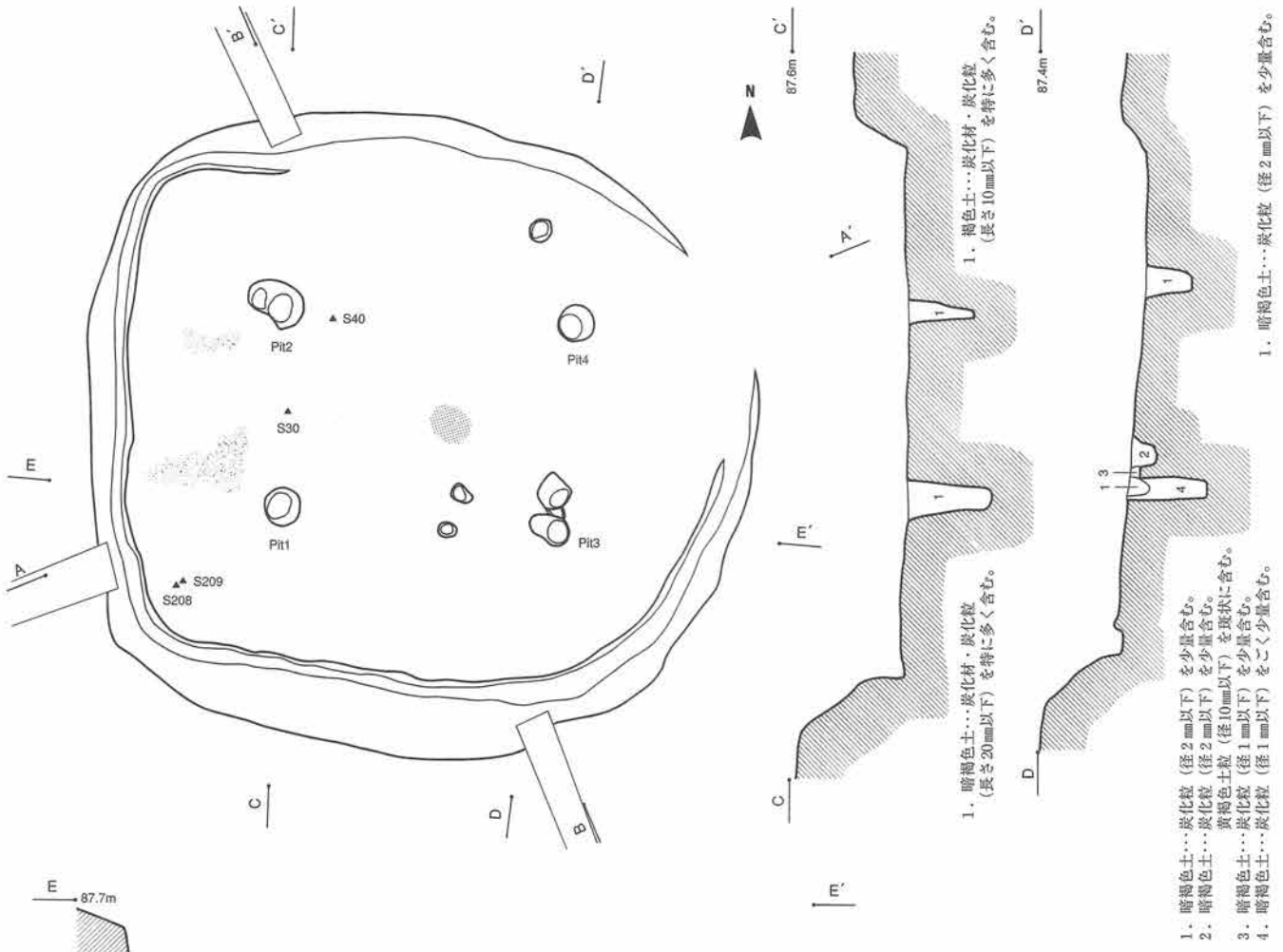


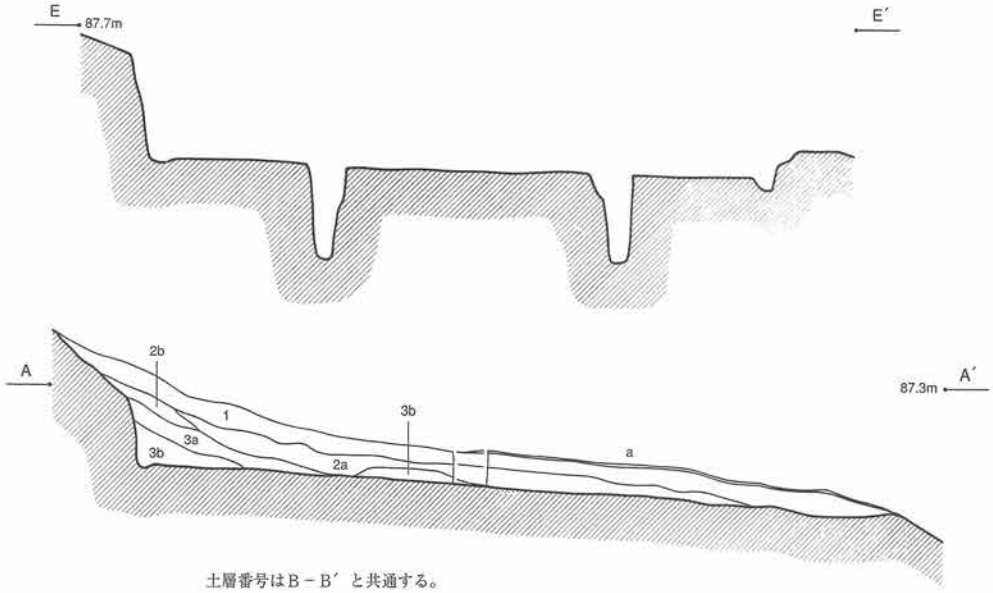
1．にぶい褐色土…炭化粒（径2㎜以下）をごく少量含む。
2．褐色土……炭化粒（径2㎜以下）を少量含む。
2b．明赤褐色土…焼土ブロックを主とし、明褐色土が混じる。
3．明褐色土……炭化材・炭化粒（長さ10㎜以下）を多量に含む。しまりはよい。

1．赤褐色土…焼土ブロックを主とし、褐色土が少量混じる。炭化材（長さ30㎜以下）を多量に含む。
2．赤褐色土…褐色土を主とし、焼土ブロックが多く混じる。炭化材（長さ30㎜以下）を多量に含む。
3．褐色土……炭化粒（径2㎜以下）を多量に含む。

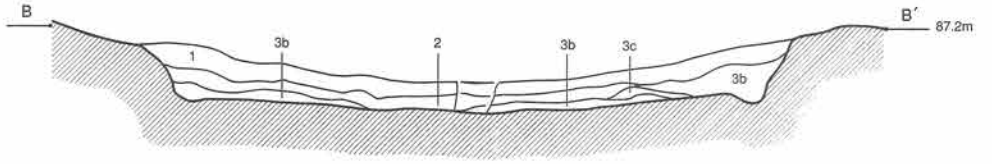
0 (1：60) 3m

2号竪穴実測図





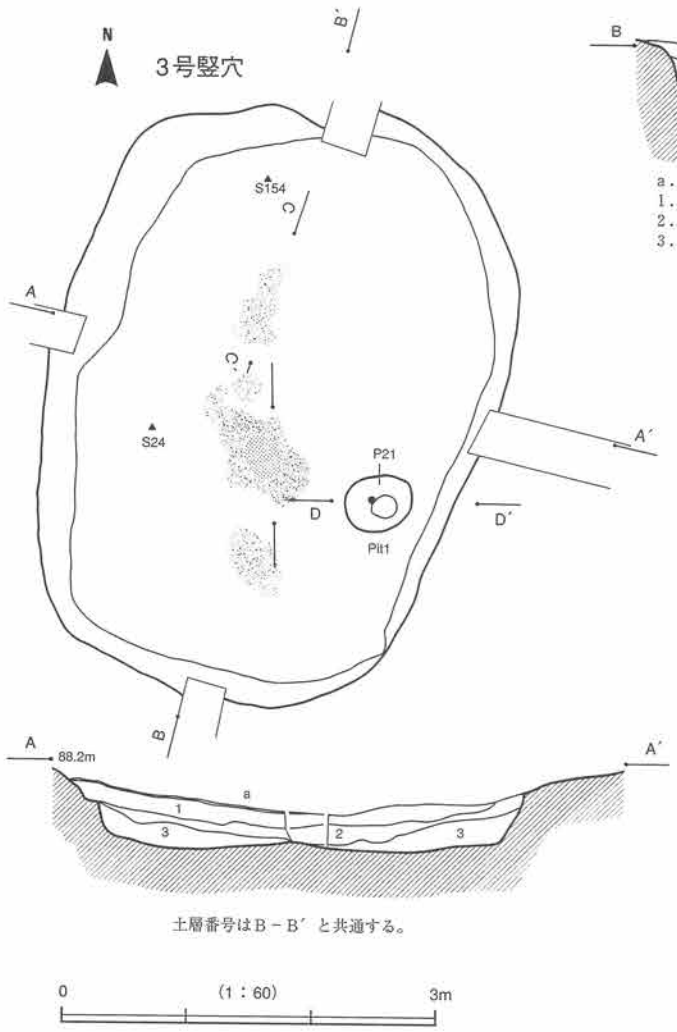
土層番号はB－B′と共通する。



a．腐植層
1．褐色土……草木根が密生する。炭化粒（径3㎜以下）を少量含む。
特にしまりがよい。
2 a．褐色土……炭化粒（径5㎜以下）を少量含む。
2・4層に比較して、しまりはやや劣る。
2 b．褐色土……炭化粒（径10㎜以下）を多量に含む。
3 a．黄褐色土…炭化粒（径10㎜以下）を多量に含む。特にしまりがよい。
3 b．黄褐色土…炭化材・炭化粒（長さ30㎜以下）を多量に含む。
特にしまりがよい。
3 c．黄褐色土…焼土粒・炭化粒（径20㎜以下）を主とし、黄褐色土が混じる。

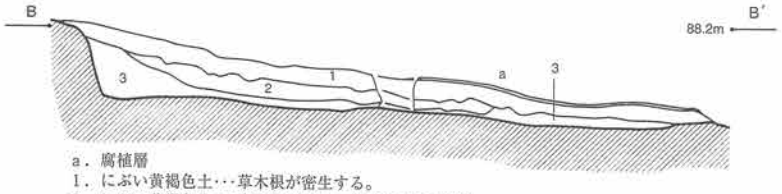
0　(1：60)　3m

3号竪穴・4号竪穴実測図

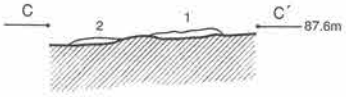


土層番号はB－B′と共通する。

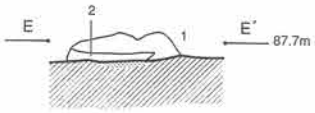
0 (1：60) 3m



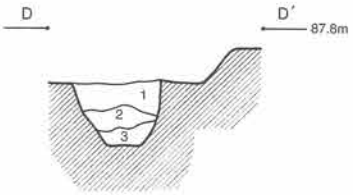
a．腐植層
1．にぶい黄褐色土…草木根が密生する。
2．にぶい黄褐色土…炭化粒（径1㎜程度）を少量含む
3．黄褐色土……炭化粒（径1㎜程度）・焼土粒（径1㎜程度）を多量に含む。
土器片を多く包含する。



1．赤色土…焼土ブロックからなる。
2．赤色土…焼土ブロックを主として、その間隙に
黄褐色土が挟在する。

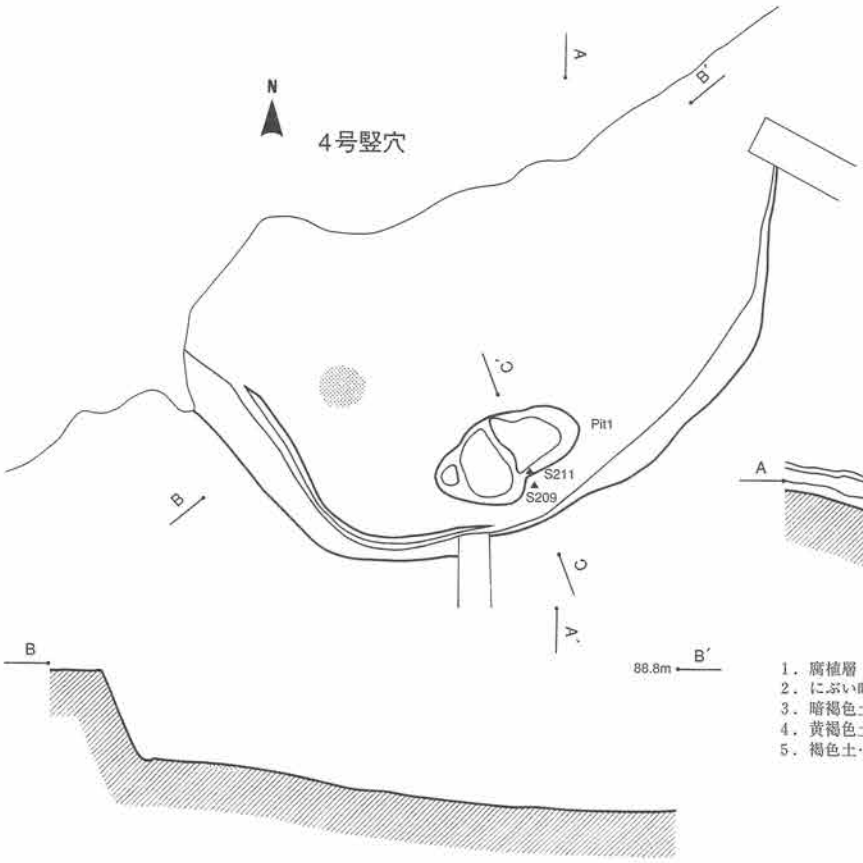


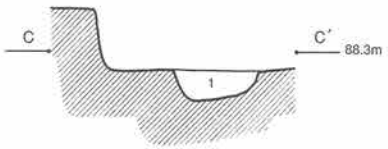
1．赤色土…焼土ブロックを主とし、黄褐色土が混じる。
炭化材・炭化粒（径10㎜以下）を多く含む。
2．赤色土…焼土ブロックからなる。ブロックの間隙に
炭化粒（径3㎜以下）を多く含む暗褐色土が挟在する。



1．明黄褐色土……板状の炭化材（長さ10㎜以下）をまばらに
炭化粒（径2㎜程度）・焼土粒（径5㎜以下）を
少量含む。
2．黄褐色土
3．にぶい黄褐色土…炭化材（長さ50㎜以下）をまばらに含む。

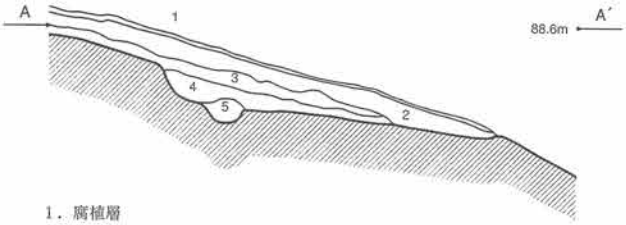
C・D・E 0 (1：40) 1m





1．黄褐色土…炭化粒（径20㎜以下）を多量に含む。
焼土ブロック（径20㎜以下）をまばらに含む。

0 (1：40) 1m

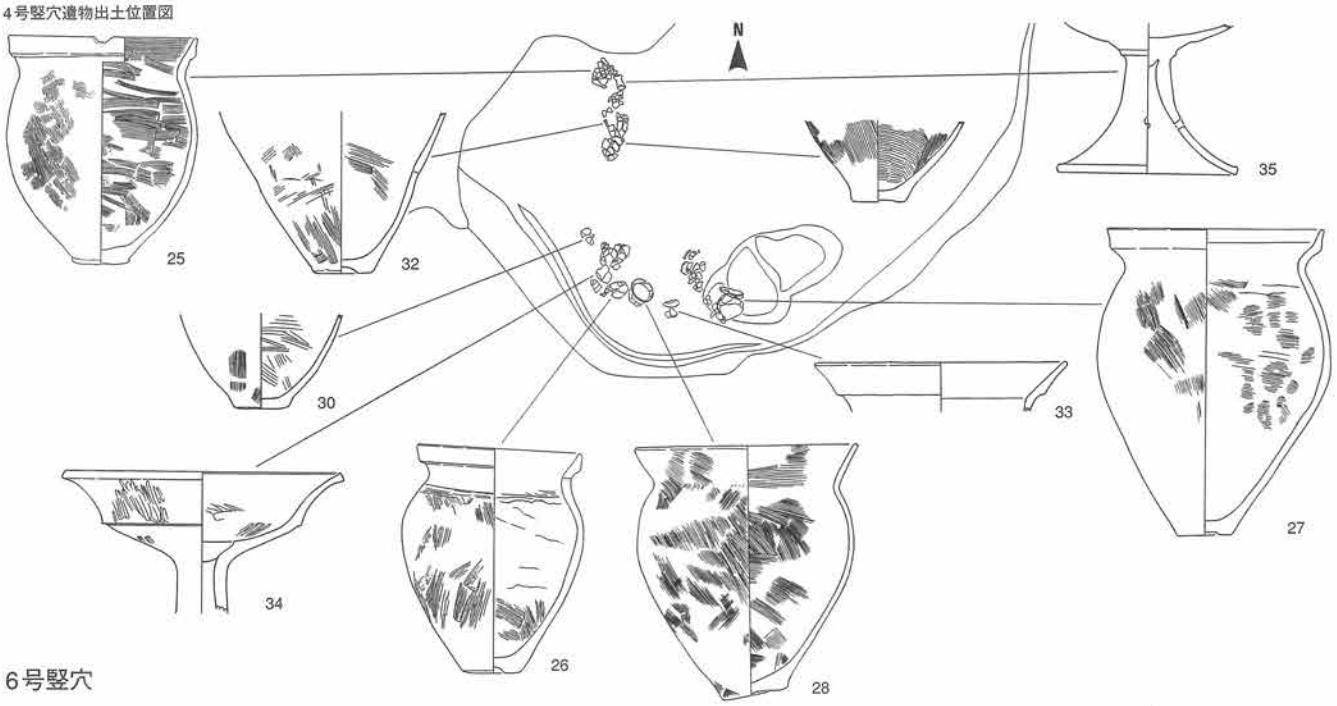


1．腐植層
2．にぶい暗褐色土…草木根が密生する。混入物はほとんどない。
3．暗褐色土……炭化粒（径2㎜以下）を少量含む。しまりはよい。
4．黄褐色土……炭化粒（径10㎜以下）を少量含む。特にしまりがよい。
5．褐色土……ピット1覆土。炭化粒（径10㎜以下）を多量に含む。
焼土粒（径10㎜以下）を底面付近に少量含む。

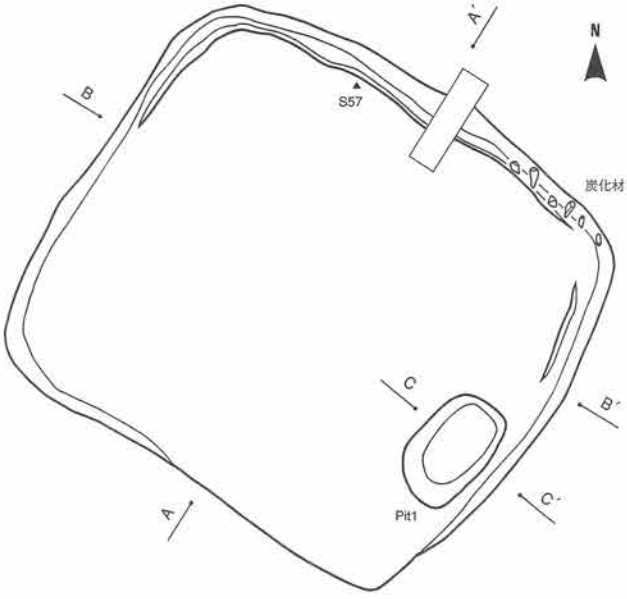
0 (1：60) 3m

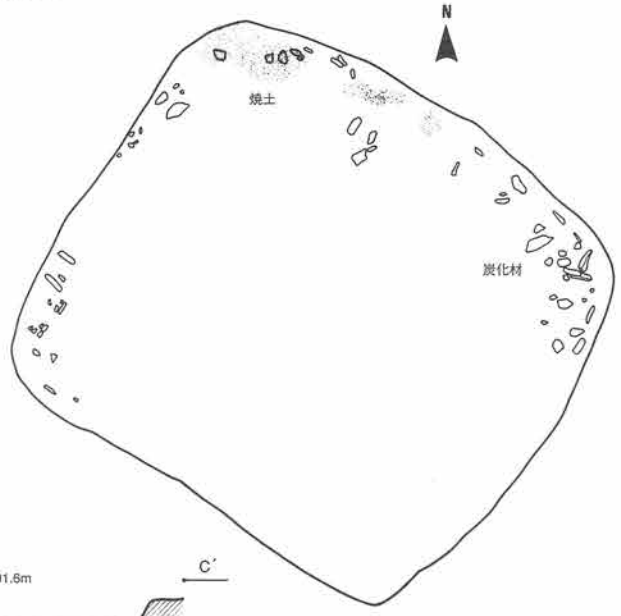
4号竪穴遺物出土位置図
6号竪穴・5号竪穴実測図

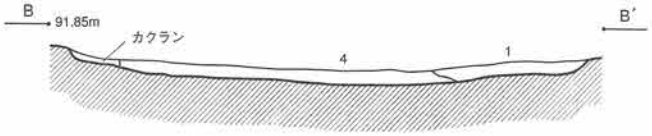
4号竪穴遺物出土位置図



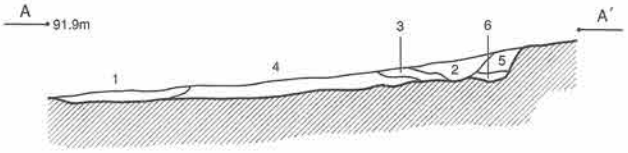
6号竪穴





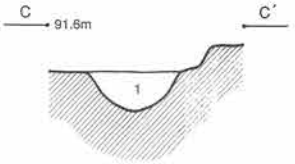


土層番号はA－A′と共通する。



1．褐色土・・・・・炭化粒（径4㎜以下）を少量含む。しまりはよい。
2．明褐色土・・・炭化粒（径2㎜以下）を少量含む。
3．赤褐色土・・・炭化粒（径2㎜以下）・焼土粒（径5㎜以下）を少量含む。
4．明褐色土・・・炭化粒（径1㎜以下）をごく少量含む。
5．赤褐色土・・・炭化粒（径2㎜以下）を少量、焼土粒（径5㎜以下）を多量に含む。
6．明褐色土・・・炭化材・炭化粒（長さ30㎜以下）を特に多く、
焼土粒（径5㎜以下）を多量に含む。

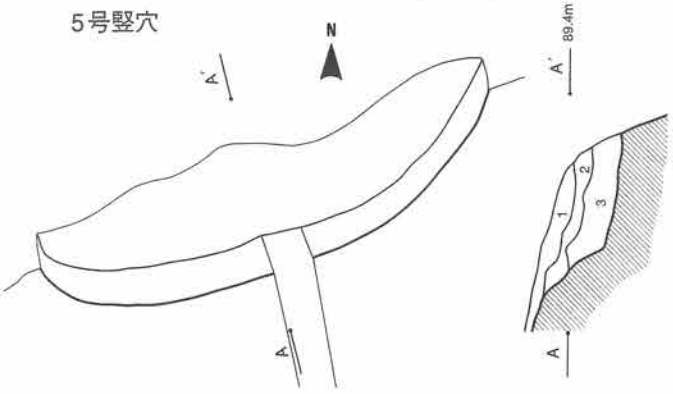
0　（1：60）　3m



1．褐色土・・・炭化材・炭化粒を多量に、焼土粒（径5㎜以下）を
少量含む。

0　（1：40）　1m

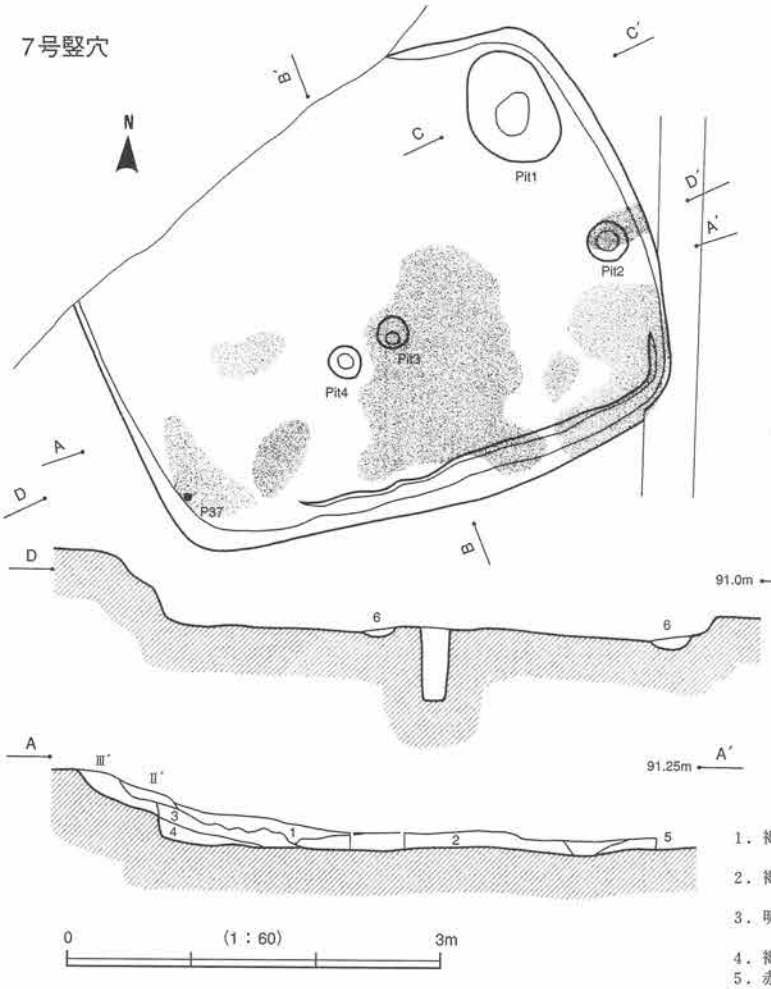
5号竪穴

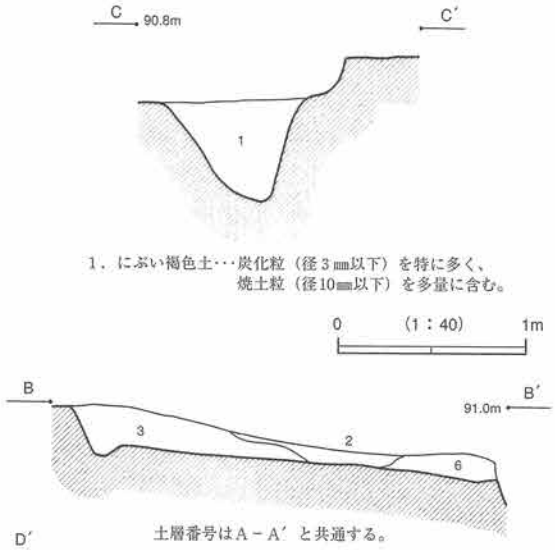


1．明褐色土・・・草木根が密生する。混入物はほとんど見られない。
2．褐色土・・・・・炭化粒（径2㎜以下）を少量含む。しまりはよい。
3．明褐色土・・・炭化粒（径5㎜以下）を少量含む。特にしまりがよい。

0　（1：60）　3m

7号竪穴





1．にぶい褐色土…炭化粒（径３㎜以下）を特に多く、
焼土粒（径10㎜以下）を多量に含む。

0　(1：40)　1m

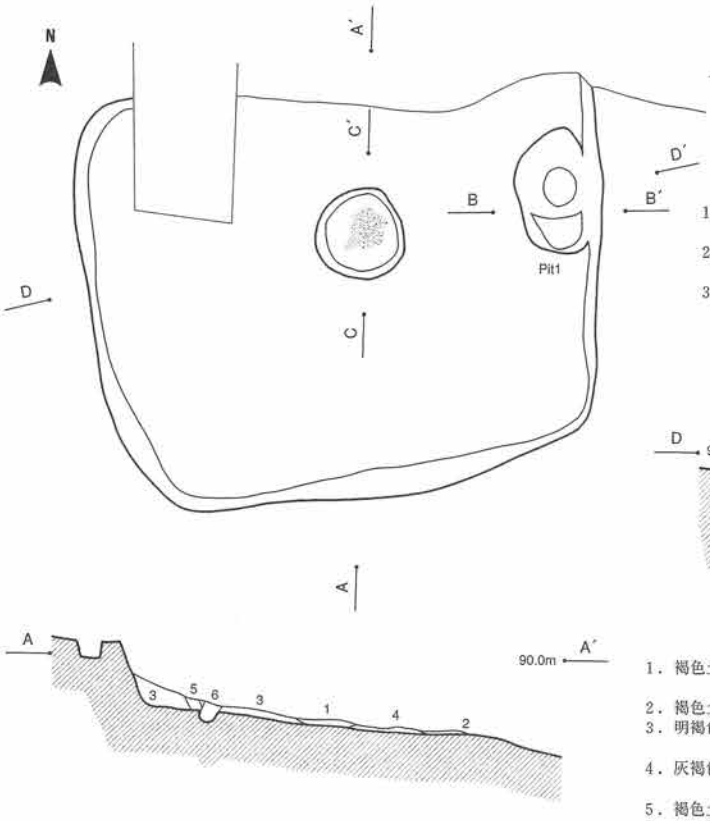
土層番号はＡ－Ａ′と共通する。

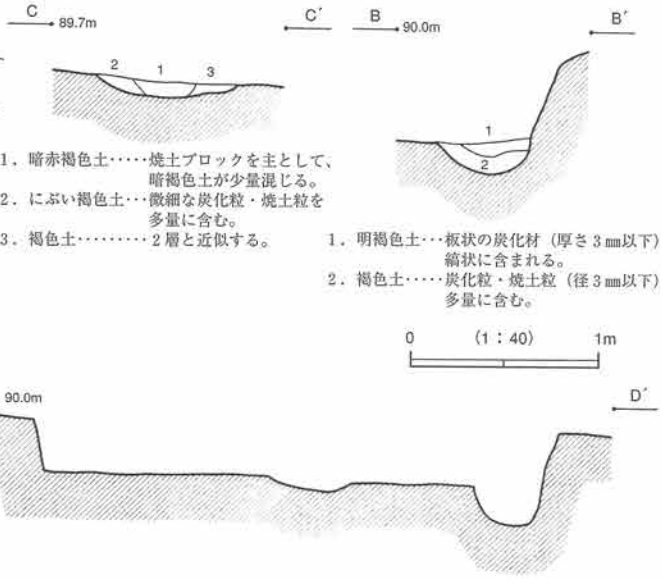
1．褐色土……焼土粒（径10㎜以下）を多量に、
炭化粒（径５㎜以下）を少量含む。
2．黒褐色土…焼土粒（径30㎜以下）・炭化粒（径10㎜以下）を
多量に含む。

1．褐色土……炭化粒（径５㎜以下）を少量、焼土粒（径10㎜以下）を
まばらに含む。
2．褐色土……焼土ブロック・焼土粒（拳大以下）を特に多く、
炭化粒（径10㎜以下）を多量に含む。
3．明褐色土……焼土粒（径10㎜以下）を多量に、炭化粒（径５㎜以下）を
少量含む。
4．褐色土……炭化粒（径５㎜以下）を少量含む。
5．赤褐色土……焼土粒（径10㎜以下）をまばらに、炭化粒（径５㎜以下）を
ごく少量含む。
6．にぶい赤褐色土…焼土粒（径10㎜以下）をまばらに、炭化粒（径５㎜以下）を
ごく少量含む。

0　(1：60)　3m

8号竪穴





1．暗赤褐色土……焼土ブロックを主として、
暗褐色土が少量混じる。
2．にぶい褐色土…微細な炭化粒・焼土粒を
多量に含む。
3．褐色土……２層と近似する。

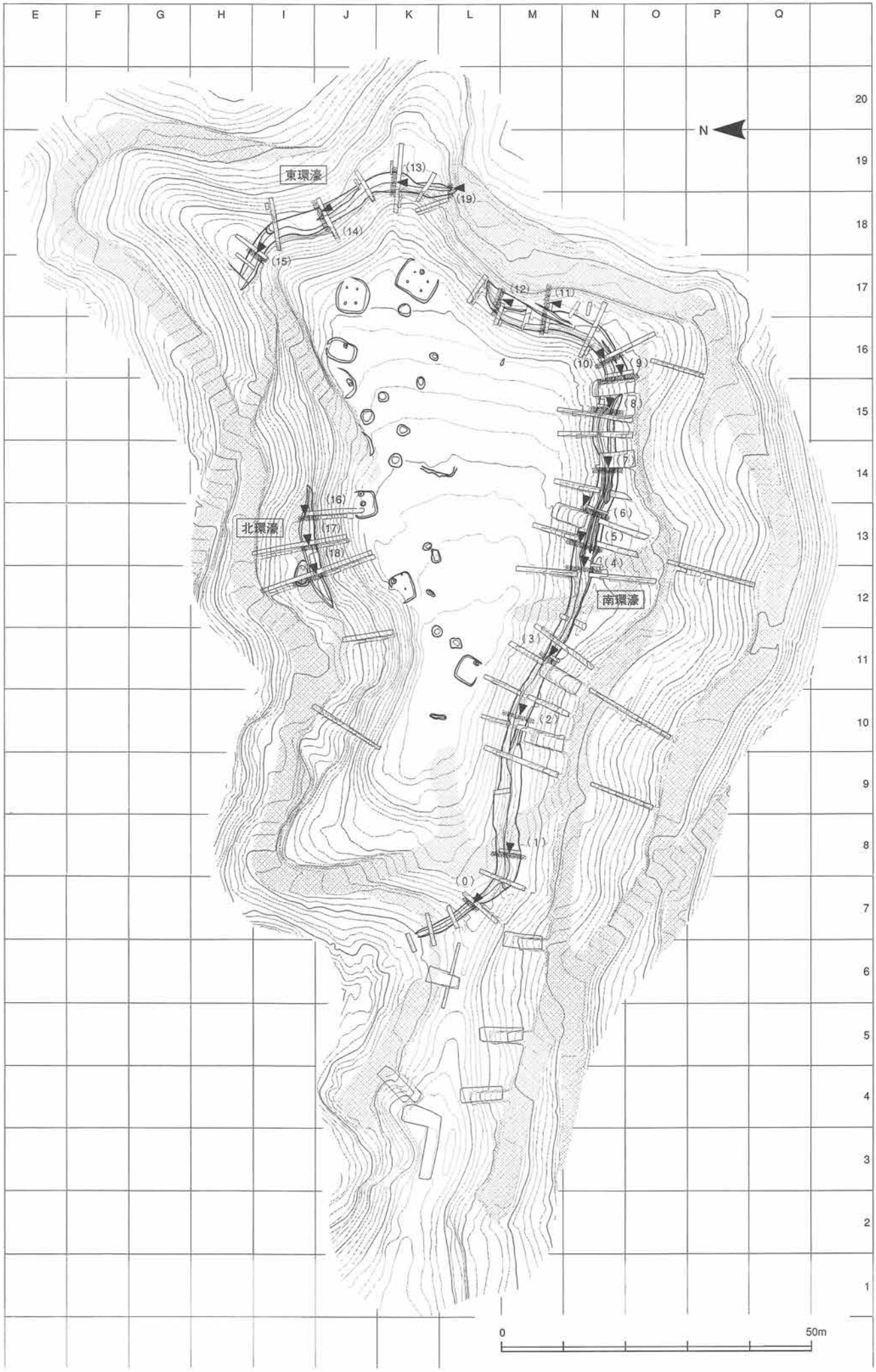
1．明褐色土…板状の炭化材（厚さ３㎜以下）が
縞状に含まれる。
2．褐色土……炭化粒・焼土粒（径３㎜以下）を
多量に含む。

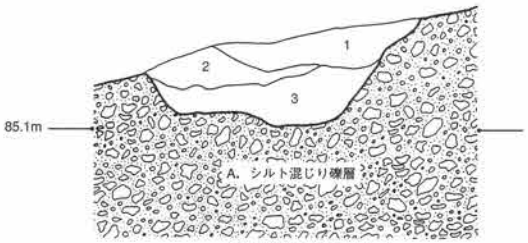
0　(1：40)　1m

1．褐色土……炭化粒（径５㎜以下）を少量含む。多量に、
炭化粒（径５㎜以下）を少量含む。
2．褐色土……１層と近似するが、色調がやや暗い。
3．明褐色土…焼土粒・炭化粒（径２㎜以下）を少量含む。
部分的に大形の炭化材を含む。
4．灰褐色土…炭化材・炭化粒（径20㎜以下）を多量に含む。
焼土ブロック・焼土粒（径30㎜以下）をまばらに含む。
5．褐色土……木根による撹乱
6．黒褐色土…木根による撹乱

0　(1：60)　3m

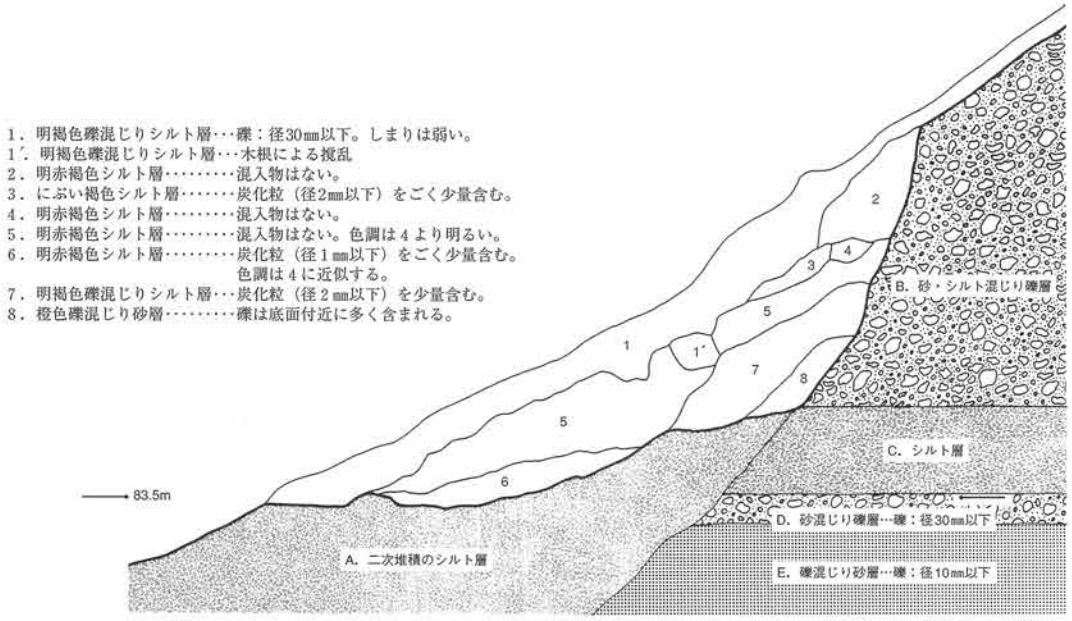
環濠断面図位置図


E
F
G
H
I
J
K
L
M
N
O
P
Q
20
19
18
17
16
15
14
13
12
11
10
9
8
7
6
5
4
3
2
1
N
東環濠
北環濠
南環濠
(0)
(1)
(2)
(3)
(4)
(5)
(6)
(7)
(8)
(9)
(10)
(11)
(12)
(13)
(14)
(15)
(16)
(17)
(18)
(19)
0
50m

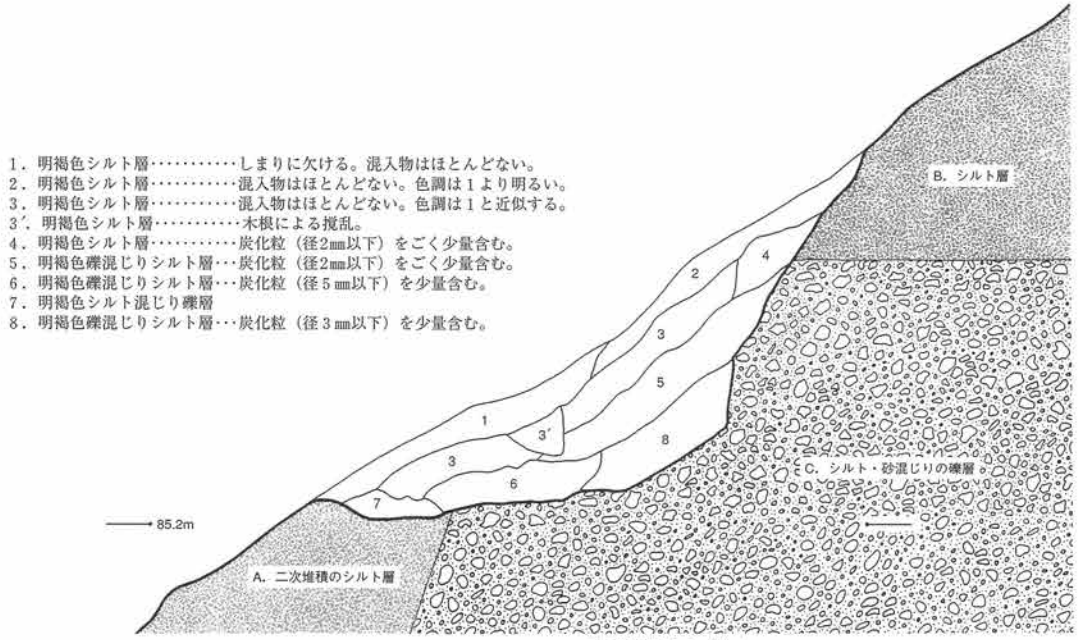


1．明赤褐色礫混じりシルト層･･･礫：径20㎜以下。
2．明赤褐色礫混じりシルト層･･･礫：径50㎜以下。色調は1より明るい。
3．明赤褐色礫混じりシルト層･･･礫：径50㎜以下。色調は1と近似する。

南環濠断面0地点



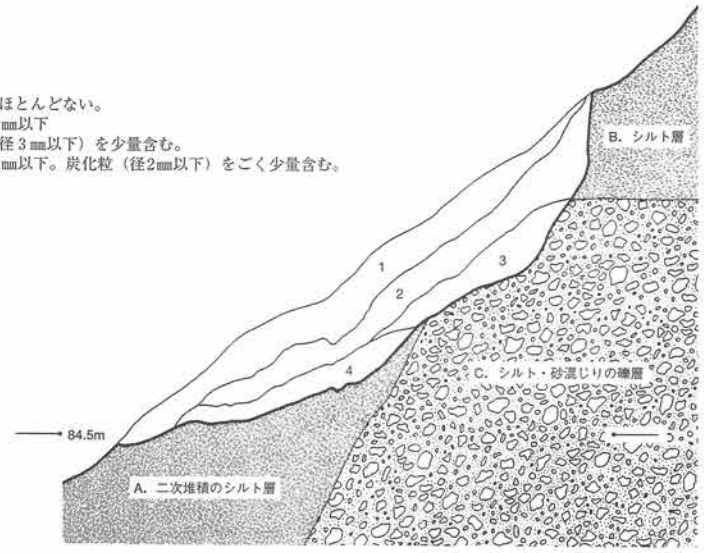
南環濠断面1地点



南環濠断面2地点

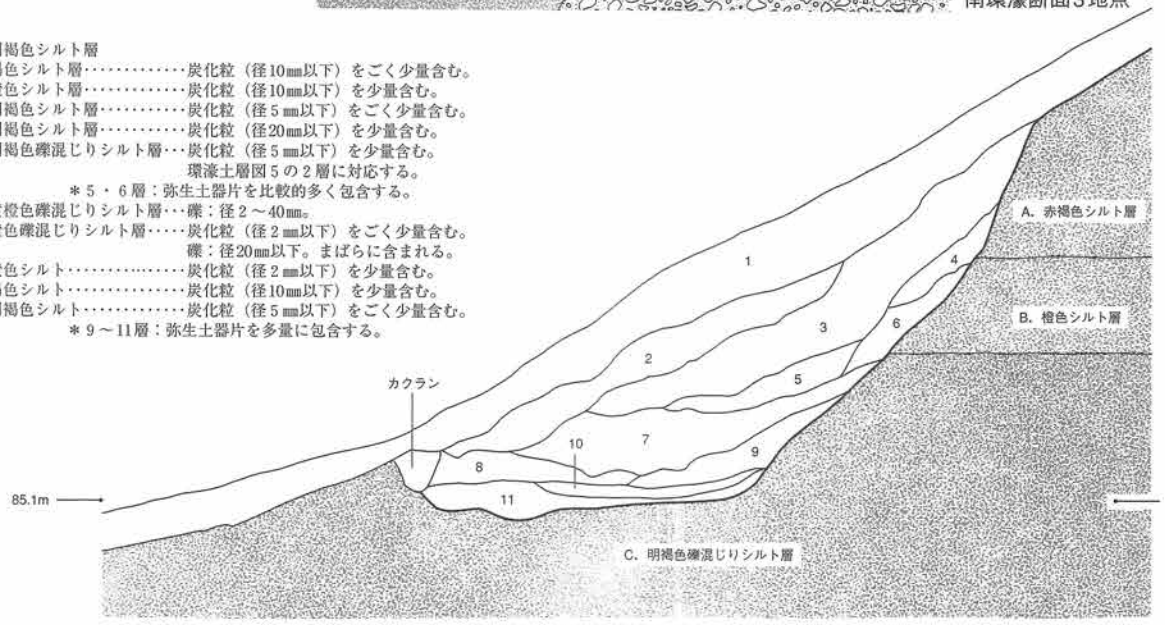
0　(1：40)　2m

1．明褐色シルト層……混入物はほとんどない。
2．明褐色シルト混じり礫層…礫：径10㎜以下
3．明褐色礫混じりシルト層…炭化粒（径３㎜以下）を少量含む。
4．明褐色礫混じりシルト層…礫：径20㎜以下。炭化粒（径2㎜以下）をごく少量含む。



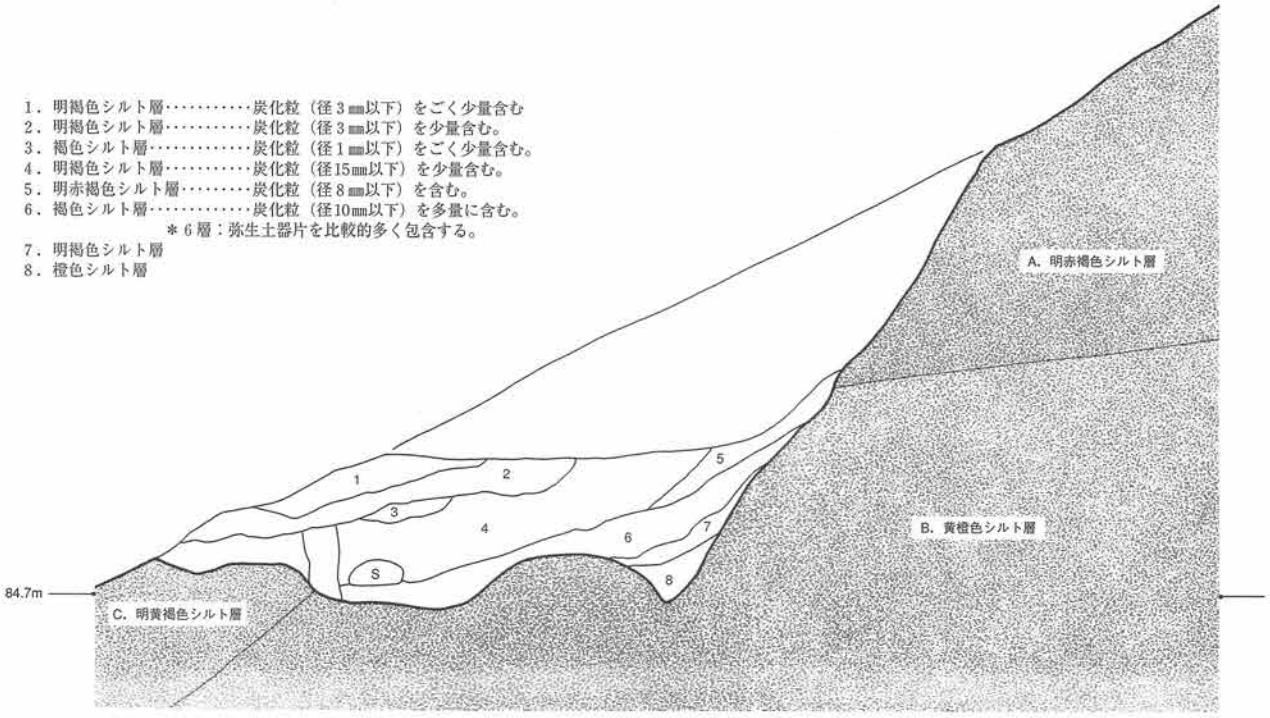
南環濠断面３地点

1．明褐色シルト層
2．褐色シルト層……炭化粒（径10㎜以下）をごく少量含む。
3．橙色シルト層……炭化粒（径10㎜以下）を少量含む。
4．明褐色シルト層……炭化粒（径５㎜以下）をごく少量含む。
5．明褐色シルト層……炭化粒（径20㎜以下）を少量含む。
6．明褐色礫混じりシルト層…炭化粒（径５㎜以下）を少量含む。
環濠土層図５の２層に対応する。
＊５・６層：弥生土器片を比較的多く包含する。
7．黄橙色礫混じりシルト層…礫：径２～40㎜。
8．橙色礫混じりシルト層……炭化粒（径２㎜以下）をごく少量含む。
礫：径20㎜以下。まばらに含まれる。
9．橙色シルト……炭化粒（径２㎜以下）を少量含む。
10．褐色シルト……炭化粒（径10㎜以下）を少量含む。
11．明褐色シルト……炭化粒（径５㎜以下）をごく少量含む。
＊９～11層：弥生土器片を多量に包含する。



南環濠断面４地点

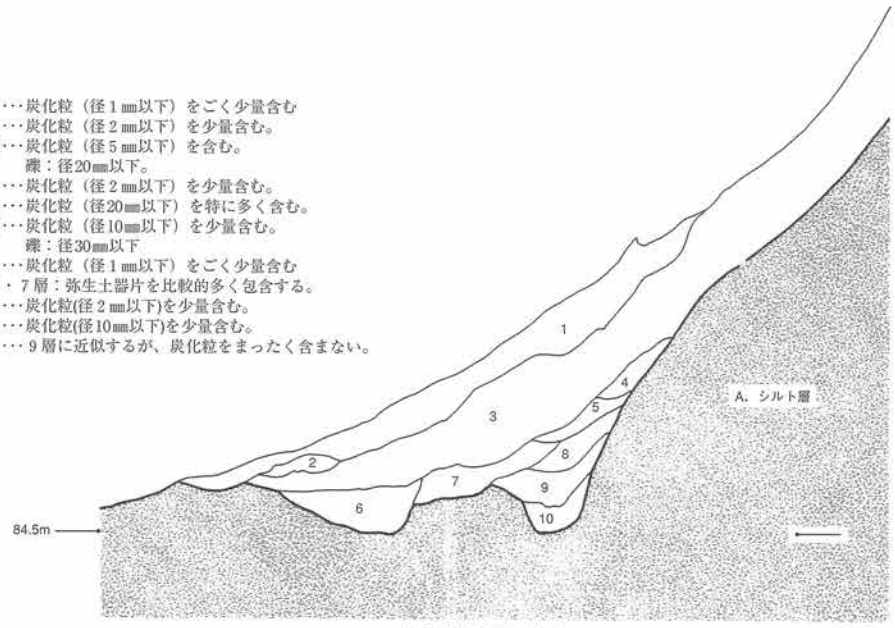
1．明褐色シルト層……炭化粒（径３㎜以下）をごく少量含む
2．明褐色シルト層……炭化粒（径３㎜以下）を少量含む。
3．褐色シルト層……炭化粒（径１㎜以下）をごく少量含む。
4．明褐色シルト層……炭化粒（径15㎜以下）を少量含む。
5．明赤褐色シルト層……炭化粒（径８㎜以下）を含む。
6．褐色シルト層……炭化粒（径10㎜以下）を多量に含む。
＊６層：弥生土器片を比較的多く包含する。
7．明褐色シルト層
8．橙色シルト層



南環濠断面５地点

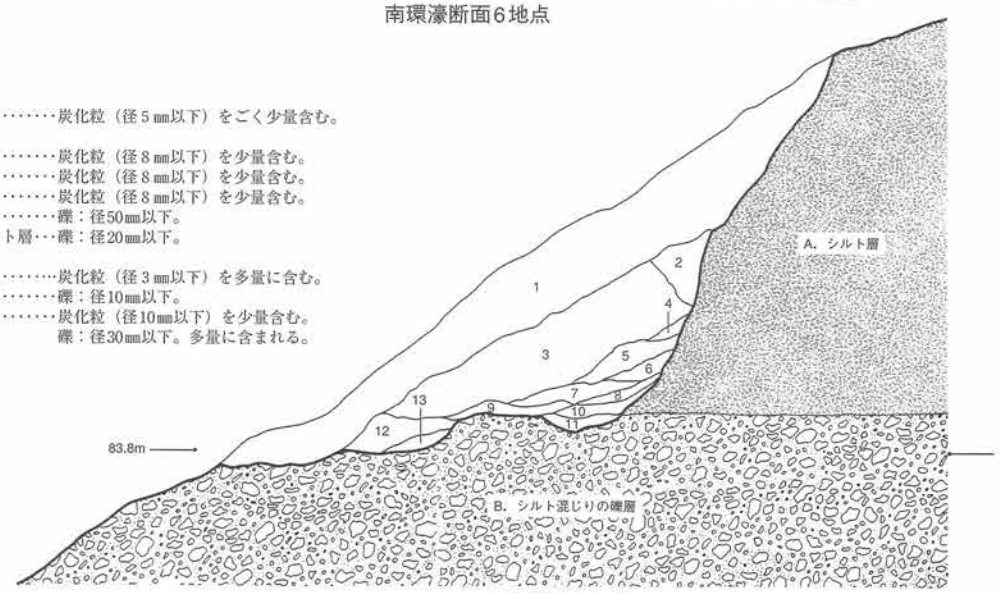
0　（1：40）　2m

1．橙色シルト層……炭化粒（径1㎜以下）をごく少量含む
2．褐色シルト層……炭化粒（径2㎜以下）を少量含む。
3．明褐色礫混じりシルト層…炭化粒（径5㎜以下）を含む。
　　礫：径20㎜以下。
4．明褐色シルト層……炭化粒（径2㎜以下）を少量含む。
5．明褐色シルト層……炭化粒（径20㎜以下）を特に多く含む。
6．黄褐色礫混じりシルト層…炭化粒（径10㎜以下）を少量含む。
　　礫：径30㎜以下
7．明褐色シルト層……炭化粒（径1㎜以下）をごく少量含む
　　＊6・7層：弥生土器片を比較的多く包含する。
8．褐色シルト層……炭化粒(径2㎜以下)を少量含む。
9．明褐色シルト層……炭化粒(径10㎜以下)を少量含む。
10．明褐色シルト層……9層に近似するが、炭化粒をまったく含まない。



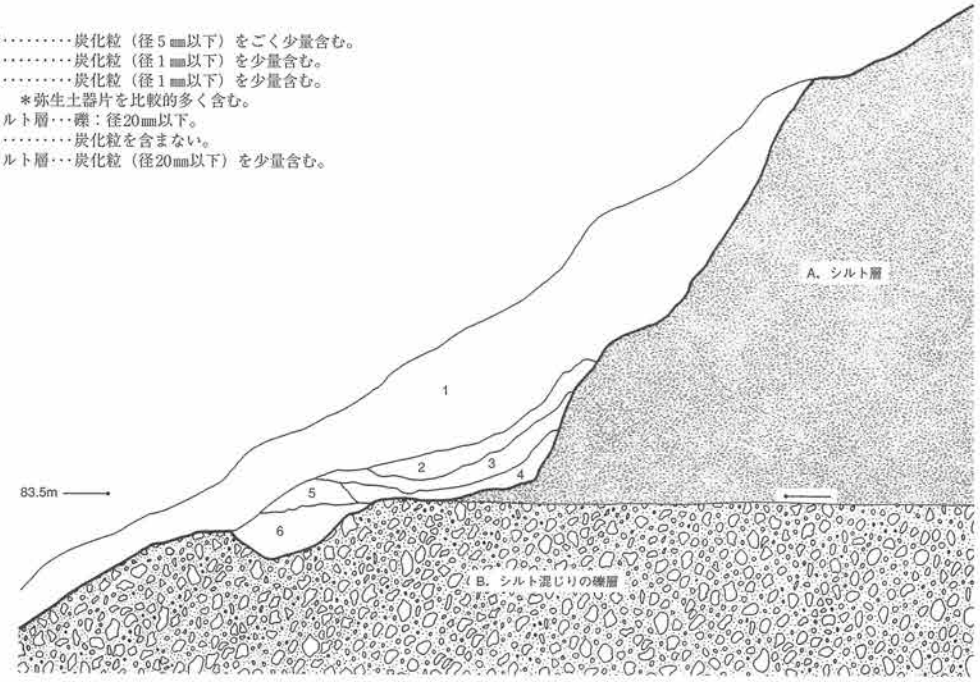
南環濠断面6地点

1．赤褐色シルト層
2．橙色シルト層
3．明赤褐色シルト層……炭化粒（径5㎜以下）をごく少量含む。
4．橙色シルト層
5．赤褐色シルト層……炭化粒（径8㎜以下）を少量含む。
6．橙色シルト層……炭化粒（径8㎜以下）を少量含む。
7．褐色シルト層……炭化粒（径8㎜以下）を少量含む。
8．橙色礫混じりシルト層……礫：径50㎜以下。
9．にぶい赤褐色礫混じりシルト層…礫：径20㎜以下。
10．にぶい赤褐色シルト層
11．褐色シルト層……炭化粒（径3㎜以下）を多量に含む。
12．明赤褐色礫混じりシルト層……礫：径10㎜以下。
13．赤褐色礫混じりシルト層……炭化粒（径10㎜以下）を少量含む。
　　礫：径30㎜以下。多量に含まれる。



南環濠断面7地点

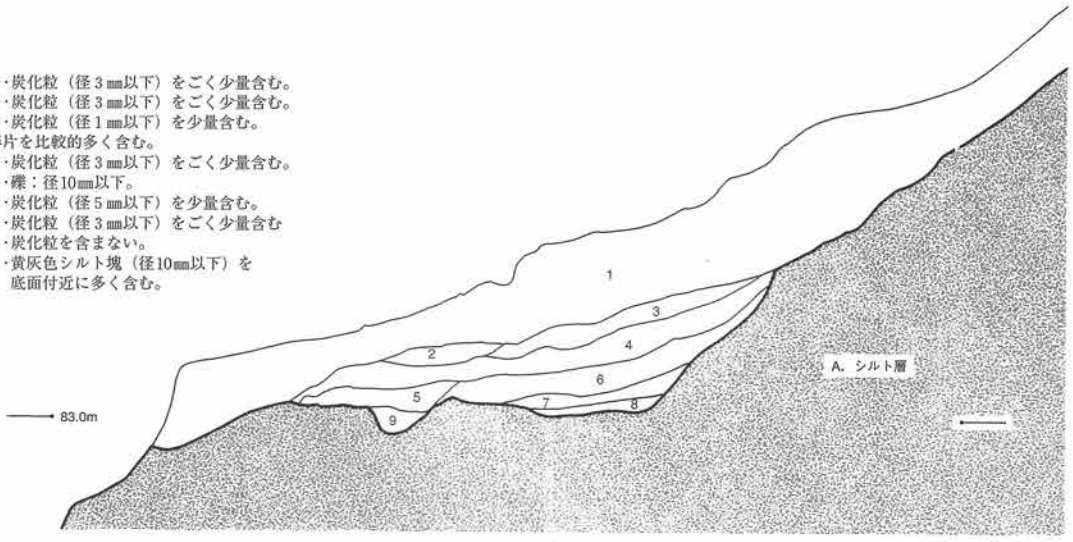
1．明赤褐色シルト層……炭化粒（径5㎜以下）をごく少量含む。
2．赤褐色シルト層……炭化粒（径1㎜以下）を少量含む。
3．橙色シルト層……炭化粒（径1㎜以下）を少量含む。
　　＊弥生土器片を比較的多く含む。
4．明褐色礫混じりシルト層…礫：径20㎜以下。
5．明褐色シルト層……炭化粒を含まない。
6．明褐色礫混じりシルト層…炭化粒（径20㎜以下）を少量含む。



南環濠断面8地点

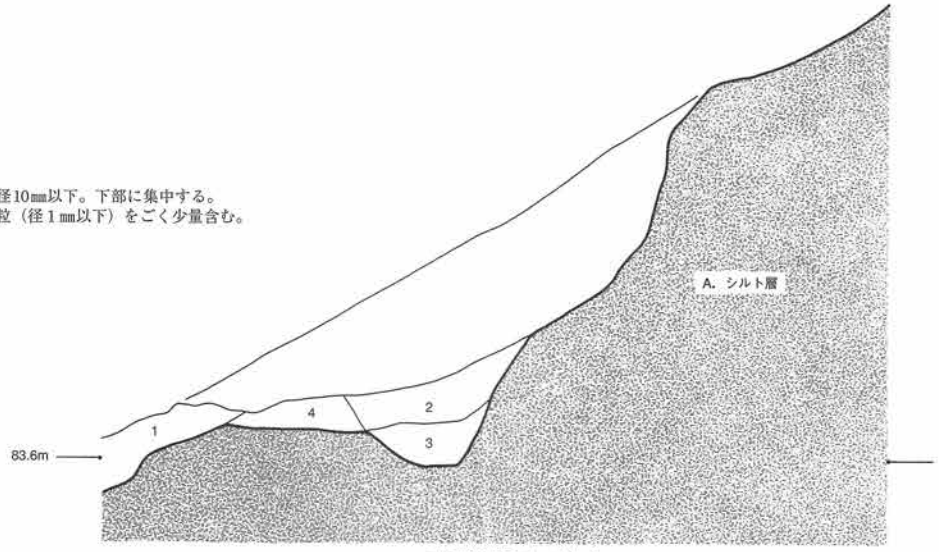
0　(1：40)　2m

1．明褐色シルト層……炭化粒（径3㎜以下）をごく少量含む。
2．橙色シルト層……炭化粒（径3㎜以下）をごく少量含む。
3．橙色シルト混じり砂礫層…炭化粒（径1㎜以下）を少量含む。
　　＊弥生土器片を比較的多く含む。
4．明赤褐色シルト層……炭化粒（径3㎜以下）をごく少量含む。
5．明褐色礫混じりシルト層…礫：径10㎜以下。
6．明褐色シルト層……炭化粒（径5㎜以下）を少量含む。
7．明褐色シルト層……炭化粒（径3㎜以下）をごく少量含む
8．明褐色シルト層……炭化粒を含まない。
9．黄橙色シルト層……黄灰色シルト塊（径10㎜以下）を
　　底面付近に多く含む。



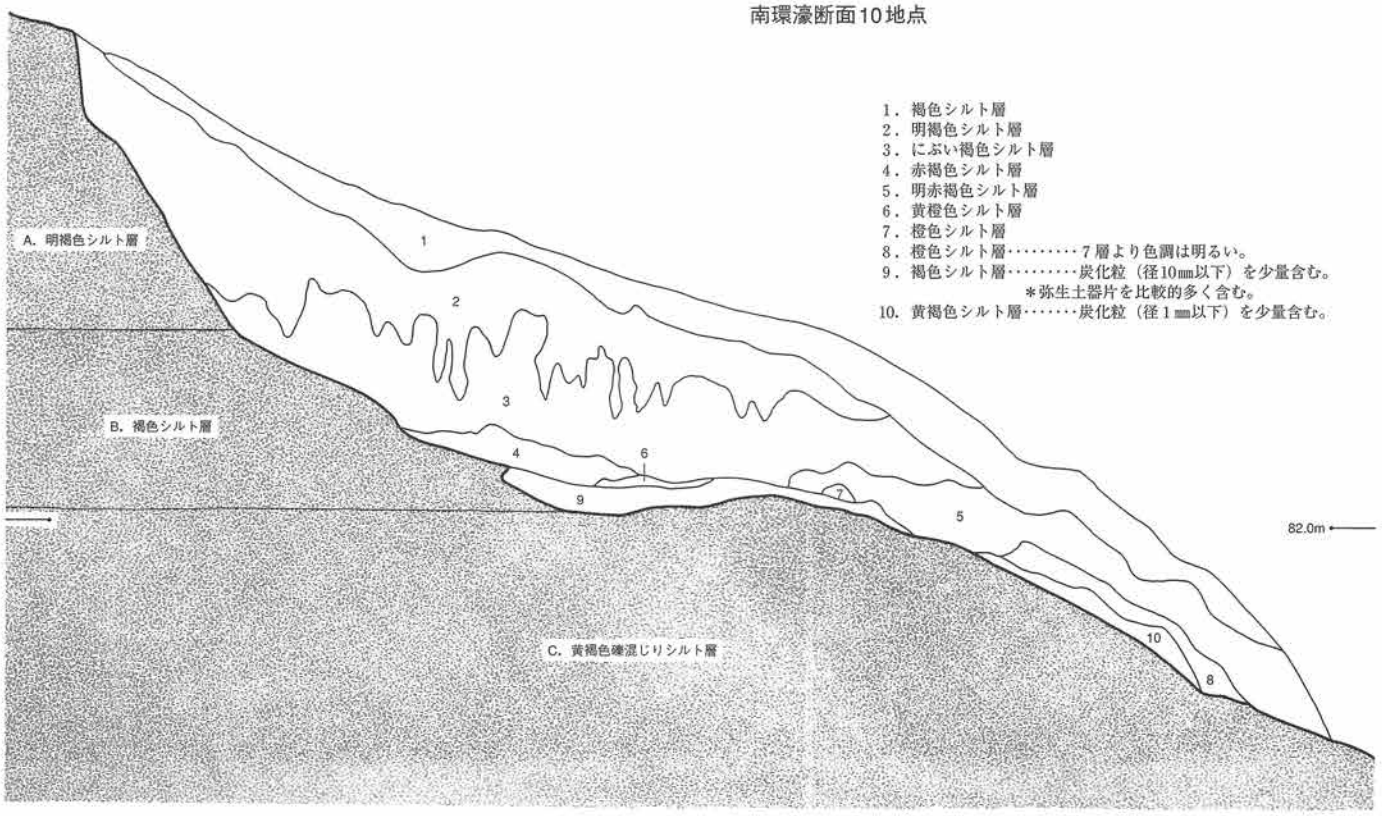
南環濠断面9地点

1．明褐色シルト層
2．明赤褐色礫混じりシルト層…礫：径10㎜以下。下部に集中する。
3．橙色シルト層……炭化粒（径1㎜以下）をごく少量含む。
4．明赤褐色シルト層



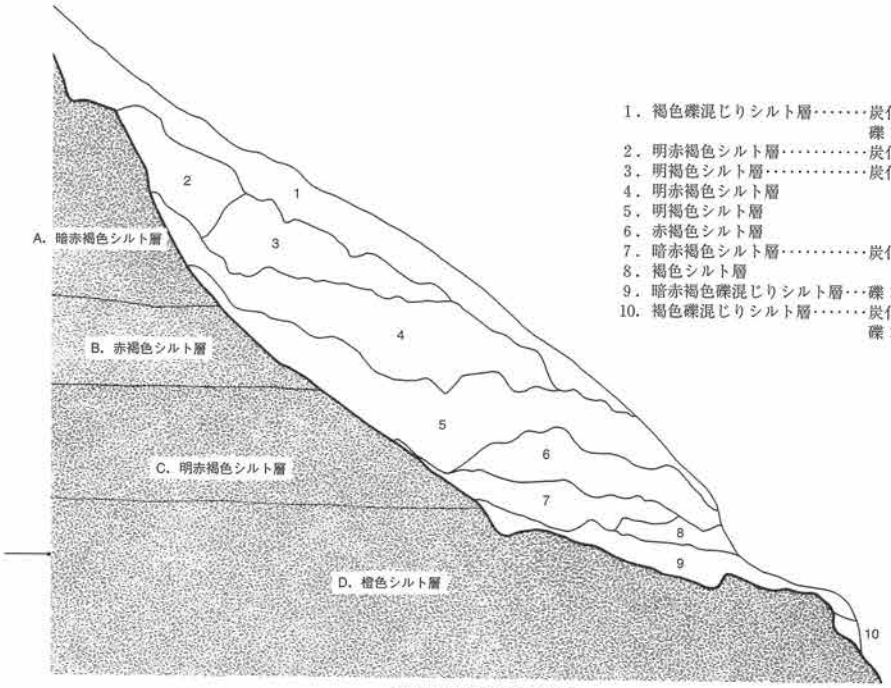
南環濠断面10地点

1．褐色シルト層
2．明褐色シルト層
3．にぶい褐色シルト層
4．赤褐色シルト層
5．明赤褐色シルト層
6．黄橙色シルト層
7．橙色シルト層
8．橙色シルト層……7層より色調は明るい。
9．褐色シルト層……炭化粒（径10㎜以下）を少量含む。
　　＊弥生土器片を比較的多く含む。
10．黄褐色シルト層……炭化粒（径1㎜以下）を少量含む。



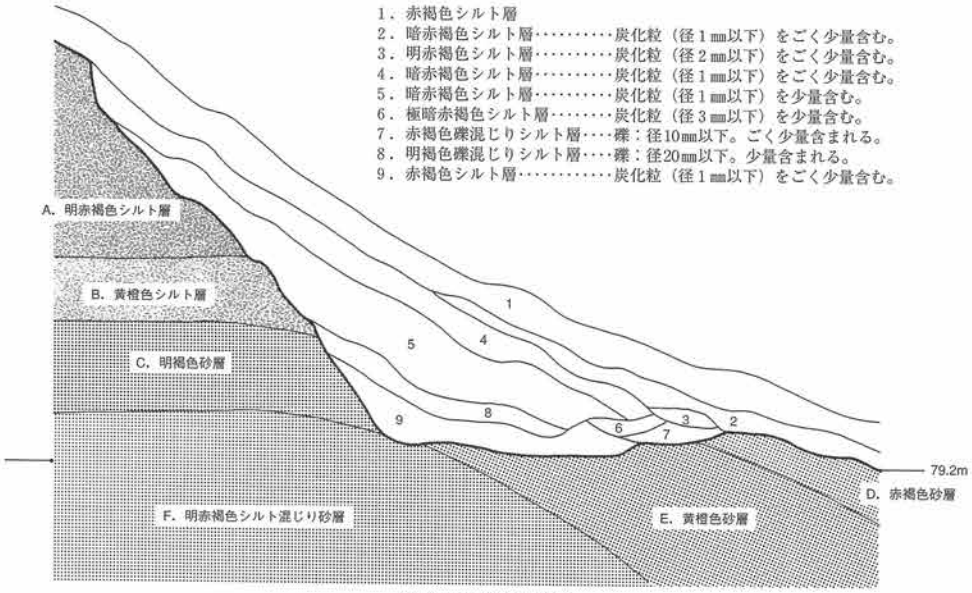
南環濠断面11地点

0　（1：40）　2m



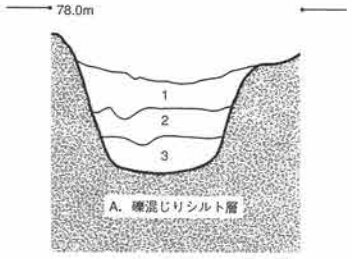
1．褐色礫混じりシルト層……炭化粒（径２㎜以下）を少量含む。
礫：径10㎜以下。
2．明赤褐色シルト層……炭化粒（径５㎜以下）をごく少量含む。
3．明褐色シルト層……炭化粒（径５㎜以下）をごく少量含む。
4．明赤褐色シルト層
5．明褐色シルト層
6．赤褐色シルト層
7．暗赤褐色シルト層……炭化粒（径２㎜以下）をごく少量含む。
8．褐色シルト層
9．暗赤褐色礫混じりシルト層…礫：径５㎜以下。ごく少量含まれる。
10．褐色礫混じりシルト層……炭化粒（径２㎜以下）をごく少量含む。
礫：径５㎜以下。ごく少量含まれる。

南環濠断面12地点



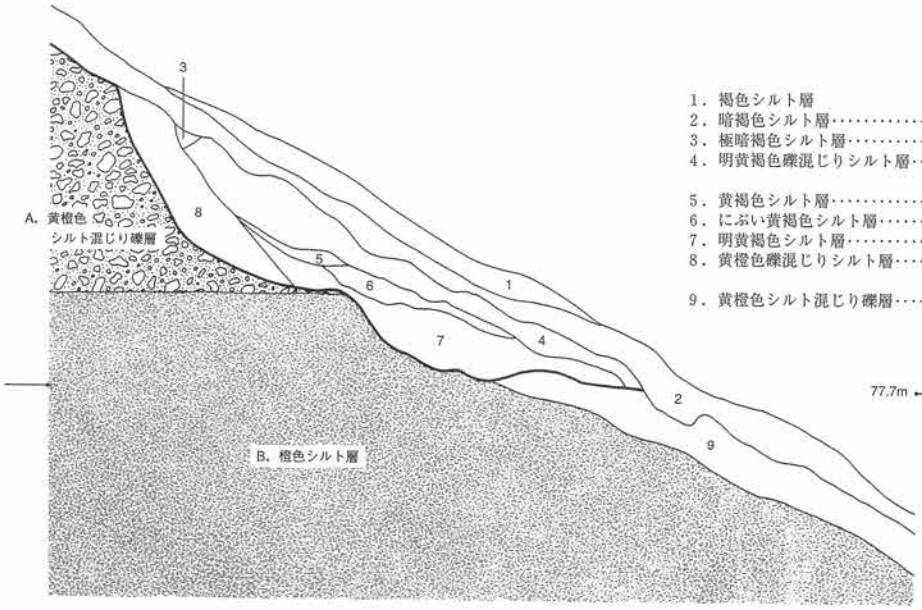
1．赤褐色シルト層
2．暗赤褐色シルト層……炭化粒（径１㎜以下）をごく少量含む。
3．明赤褐色シルト層……炭化粒（径２㎜以下）をごく少量含む。
4．暗赤褐色シルト層……炭化粒（径１㎜以下）をごく少量含む。
5．暗赤褐色シルト層……炭化粒（径１㎜以下）を少量含む。
6．極暗赤褐色シルト層……炭化粒（径３㎜以下）を少量含む。
7．赤褐色礫混じりシルト層……礫：径10㎜以下。ごく少量含まれる。
8．明褐色礫混じりシルト層……礫：径20㎜以下。少量含まれる。
9．赤褐色シルト層……炭化粒（径１㎜以下）をごく少量含む。

東環濠断面13地点



東環濠断面19地点

1．明褐色礫混じりシルト層
……礫：径30㎜以下。
2．暗褐色礫混じりシルト層
……炭化粒（径５㎜以下）を特に多く含む。
礫：径20㎜以下。
3．明赤褐色礫混じりシルト層
……礫：径10㎜以下。ごく少量含まれる。

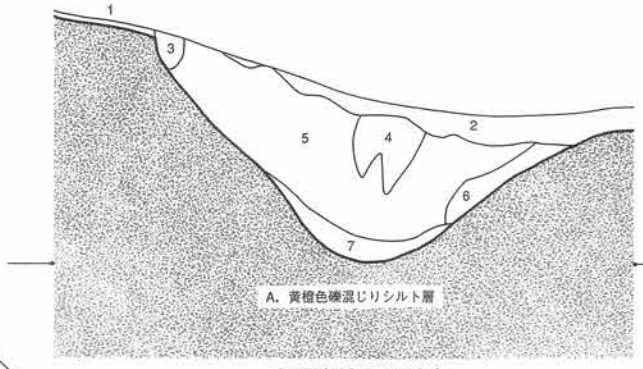


1．褐色シルト層
2．暗褐色シルト層……炭化粒（径２㎜以下）を少量含む。
3．極暗褐色シルト層……木根による攪乱。しまりに欠ける。
4．明黄褐色礫混じりシルト層…焼土粒（径２㎜以下）を少量含む。
礫：径40㎜以下。
5．黄褐色シルト層……炭化粒（径２㎜以下）を少量含む。
6．にぶい黄褐色シルト層……炭化粒・焼土粒（径２㎜以下）を少量含む。
7．明黄褐色シルト層……炭化粒（径５㎜以下）を少量含む。
8．黄橙色礫混じりシルト層……炭化粒（径２㎜以下）を少量含む
礫：径10㎜以下。
9．黄橙色シルト混じり礫層……礫：径30㎜以下。掘り出し土と思われる。

東環濠断面14地点

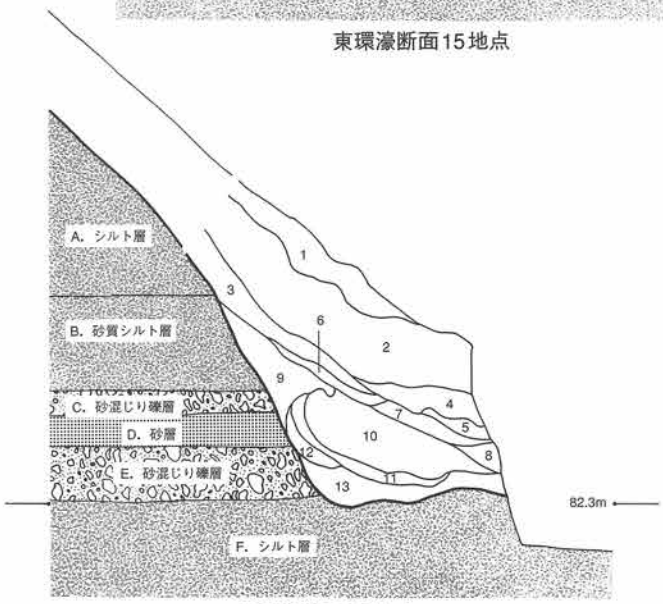
0　(1：40)　2m

環濠断面図（6）



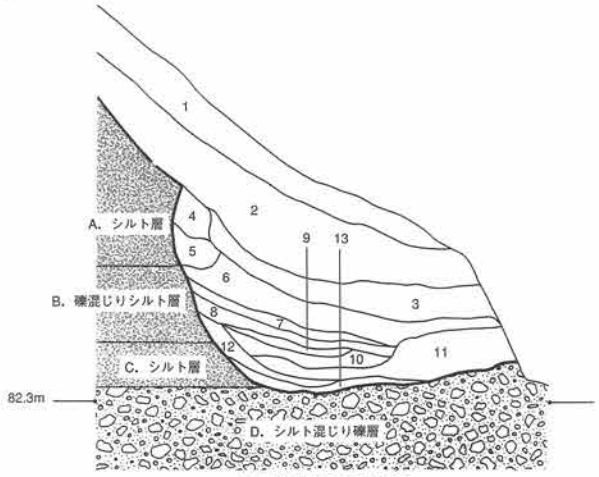
東環濠断面15地点

1．極暗赤褐色礫混じりシルト層……礫：径50㎜以下。
2．極暗赤褐色礫混じりシルト層……色調は1層より暗い。
礫：径50㎜以下。
3．暗赤褐色礫混じりシルト層……礫：径30㎜以下。
4．極暗赤褐色礫混じりシルト層……礫：径50㎜以下。
5．赤褐色礫混じりシルト層……礫：径50㎜以下。
6．明赤褐色礫混じりシルト層……礫：径30㎜以下。
7．赤褐色礫混じりシルト層……礫：径30㎜以下。



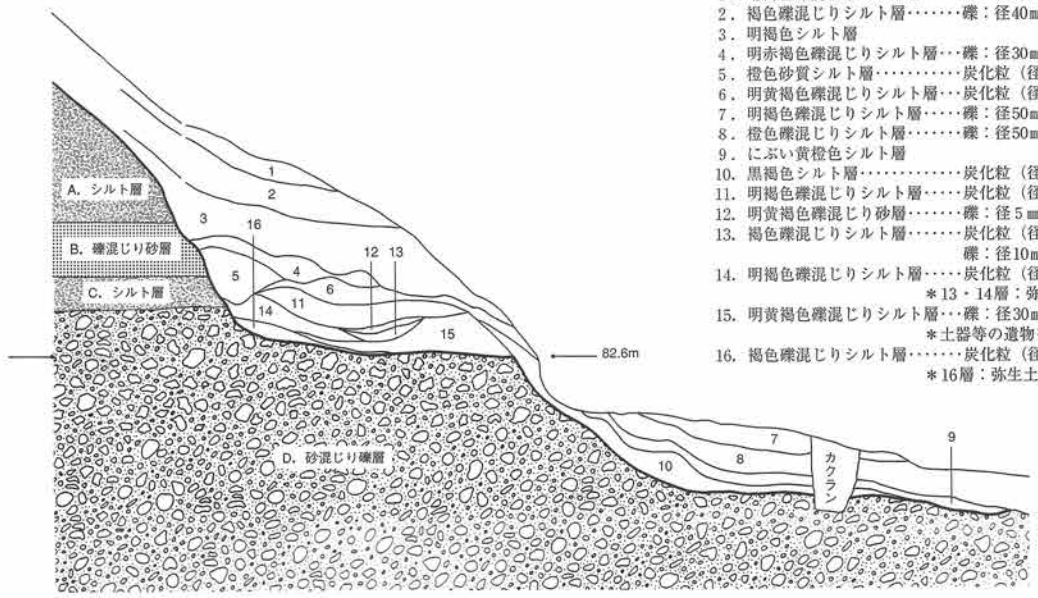
北環濠断面16地点

1．黄褐色腐植土
2．明褐色シルト層
3．橙色礫混じりシルト層……礫：径40㎜以下。多量に含まれる。
4．明赤褐色シルト層
5．明黄褐色シルト混じり礫層…礫：径50㎜以下。
6．黄橙色礫混じりシルト層……礫：径50㎜以下。
7．明黄褐色シルト層
8．橙色礫混じり砂層……礫：径50㎜以下。
9．黄橙色砂質シルト層……地山層の押し出し
10～12層を捲りあげている。
10．黄褐色礫混じりシルト層……炭化粒（径1㎜以下）を少量含む。
11．明褐色シルト層……炭化粒（径2㎜以下）を多量に含む。
最下部に焼土が少量含まれる。
12．褐色シルト層……炭化材（長さ30㎜以下）を密に含む。
13．黄褐色シルト層……炭化粒（径20㎜以下）を多量に含む
＊11～13層：弥生土器片を密に包含する。



北環濠断面17地点

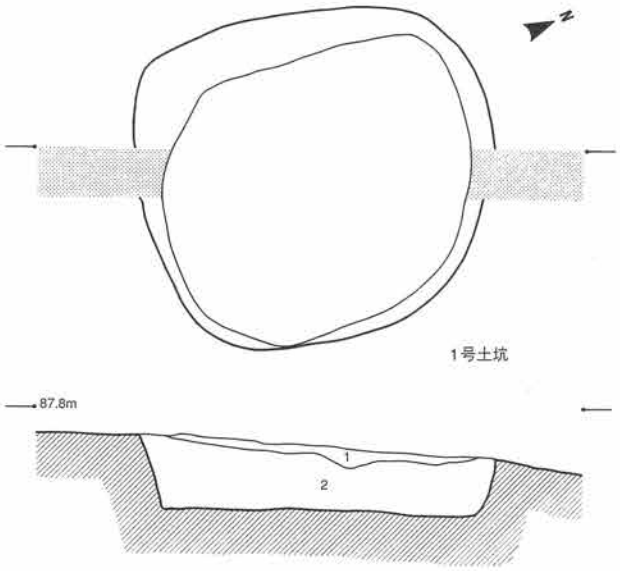
1．赤褐色礫混じり腐植土
2．明赤褐色シルト層
3．明黄褐色シルト混じり礫層…礫：径40㎜以下。多量に含まれる。
4．橙色シルト層……地山層の押し出し。
5．橙色シルト層……地山層の押し出し。4層より赤味が強い。
6．赤褐色砂礫混じりシルト層…炭化粒（径2㎜以下）を少量含む。砂礫：3㎜以下。
7．にぶい赤褐色シルト層……にぶい黄褐色のシルトブロック（径20㎜以下）を
斑状に含む。
8．赤褐色シルト層……炭化粒（径2㎜以下）を少量含む。
9．暗褐色シルト層……炭化粒（径2㎜以下）を密に含む。
10．暗赤褐色礫混じりシルト層…炭化粒（径5㎜以下）を少量含む。礫：径10㎜以下。
＊9・10層：弥生土器片を多量に包含する。
11．黄褐色礫混じりシルト層……遺物をまったく含まない。礫：径40㎜以下。
12．極暗褐色礫混じりシルト層…炭化粒を特に密に含む。礫：径10㎜以下。
13．褐色礫混じりシルト層……炭化粒（径10㎜以下）を多量に含む。礫：径30㎜以下。
＊12・13層：弥生土器片を密に包含する。



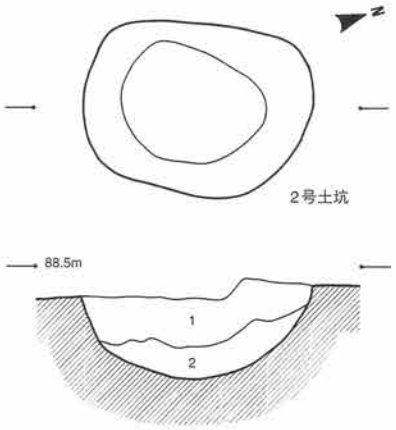
北環濠断面18地点

1．暗褐色礫混じりシルト層……礫：径20㎜以下。
2．褐色礫混じりシルト層……礫：径40㎜以下。多量に含まれる。
3．明褐色シルト層
4．明赤褐色礫混じりシルト層…礫：径30㎜以下。多量に含まれる。
5．橙色砂質シルト層……炭化粒（径1㎜以下）を少量含む。
6．明黄褐色礫混じりシルト層…炭化粒（径1㎜以下）をごく少量含む。礫：径10㎜以下。
7．明褐色礫混じりシルト層……礫：径50㎜以下。多量に含まれる。
8．橙色礫混じりシルト層……礫：径50㎜以下。多量に含まれる。
9．にぶい黄橙色シルト層
10．黒褐色シルト層……炭化粒（径10㎜以下）を特に多く含む。
11．明褐色礫混じりシルト層……炭化粒（径5㎜以下）を少量含む。礫：径5㎜以下。
12．明黄褐色礫混じり砂層……礫：径5㎜以下。多量に含まれる。
13．褐色礫混じりシルト層……炭化粒（径5㎜以下）をごく少量含む。
礫：径10㎜以下。多量に含まれる。
14．明褐色礫混じりシルト層……炭化粒（径5㎜以下）を含む。礫：径15㎜以下。
＊13・14層：弥生土器片を多量に包含する。
15．明黄褐色礫混じりシルト層…礫：径30㎜以下。多量に含まれる。
＊土器等の遺物を含まない。
16．褐色礫混じりシルト層……炭化粒（径1㎜以下）をごく少量含む。礫：径20㎜以下。
＊16層：弥生土器片を多量に包含する。

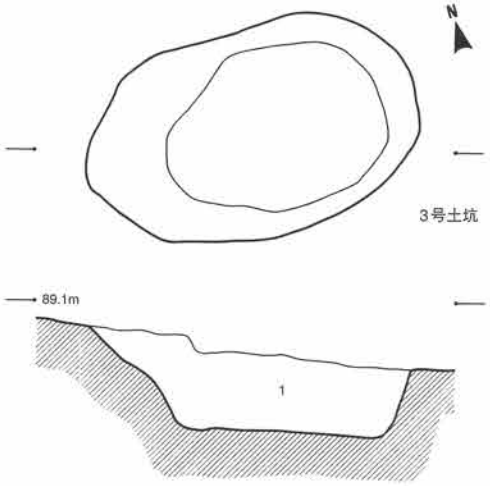
0　(1：40)　2m



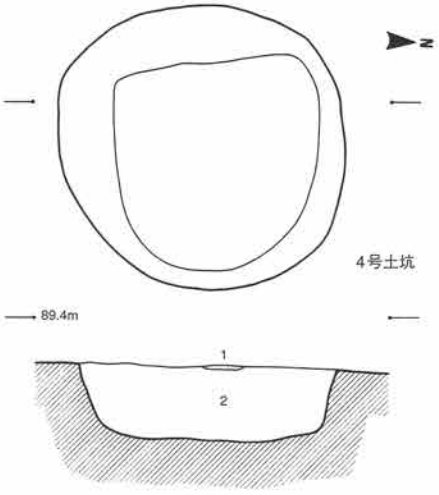
1．橙色土層・・・・・焼土粒（径10㎜以下）を少量、炭化粒（径２㎜以下）をごく少量含む。
2．明褐色土層・・・焼土粒（径５㎜以下）をごく少量、炭化粒（径10㎜以下）を少量含む。



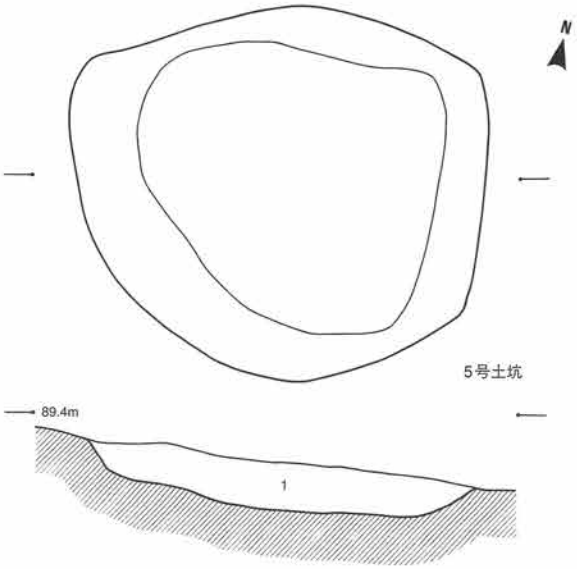
1．褐色土・・・・・炭化粒（径５㎜以下）を多量に、焼土粒（径５㎜以下）をごく少量含む。
2．明褐色土・・・炭化材・炭化粒（径10㎜以下）を少量、焼土粒（径５㎜以下）をごく少量含む。



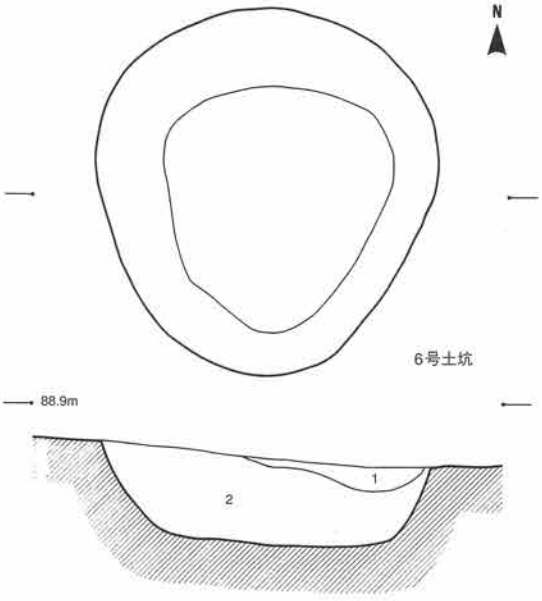
1．明褐色土・・・焼土粒（径３㎜以下）を少量、炭化粒（径１㎜以下）をごく少量含む。



1．明褐色土・・・焼土塊（径20㎜以下）をまばらに含む。
2．明褐色土・・・炭化粒（径２㎜以下）をごく少量、焼土粒（径１㎜以下）をごく少量含む。



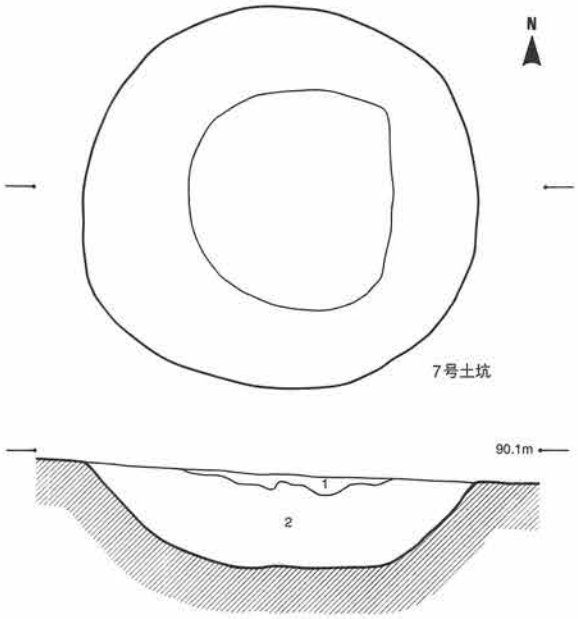
1．明褐色土・・・炭化粒（径１㎜以下）をごく少量含む。



1．褐色土・・・・・炭化粒（径５㎜以下）を少量含む。
2．明褐色土・・・炭化粒（径５㎜以下）・焼土粒（径３㎜以下）を少量含む。

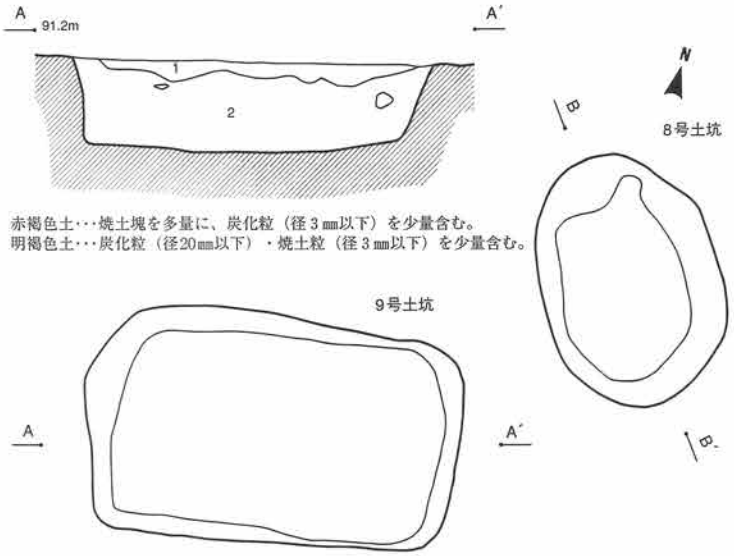
0　(1：40)　2m

土坑・溝実測図（2）



7号土坑

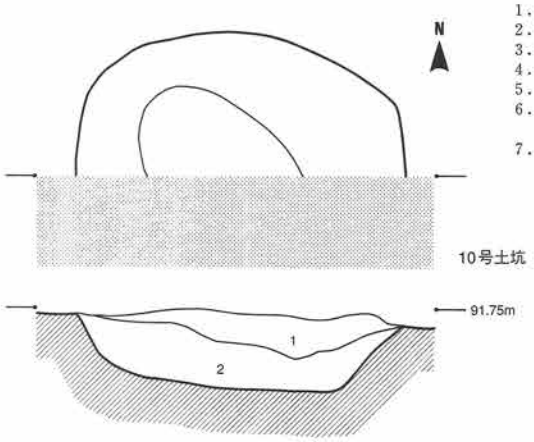
1．褐色土・・・・・炭化粒（径1㎜以下）を少量、焼土粒（径0.5㎜以下）をごく少量含む。
2．明褐色土・・・炭化粒（径5㎜以下）を少量含む。



8号土坑

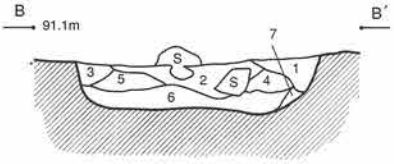
1．赤褐色土・・・焼土塊を多量に、炭化粒（径3㎜以下）を少量含む。
2．明褐色土・・・炭化粒（径20㎜以下）・焼土粒（径3㎜以下）を少量含む。

9号土坑

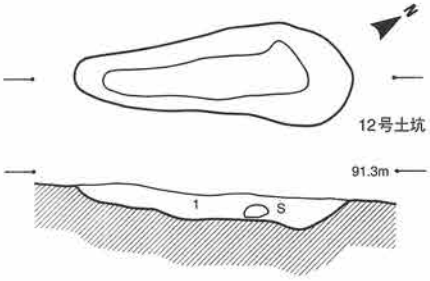


10号土坑

1．明褐色土・・・炭化粒（径1㎜以下）をごく少量含む。
2．明褐色土・・・炭化粒（径5㎜以下）を少量含む。
3．明褐色土・・・炭化粒（径1㎜以下）をごく少量含む。
4．褐色土・・・・・炭化粒（径1㎜以下）を少量含む。
5．褐色土・・・・・炭化粒（径5㎜以下）を少量含む。
6．暗褐色土・・・炭化粒（径20㎜以下）を多量に、焼土粒（径5㎜以下）をごく少量含む。
7．褐色土・・・・・炭化粒（径1㎜以下）をごく少量含む。

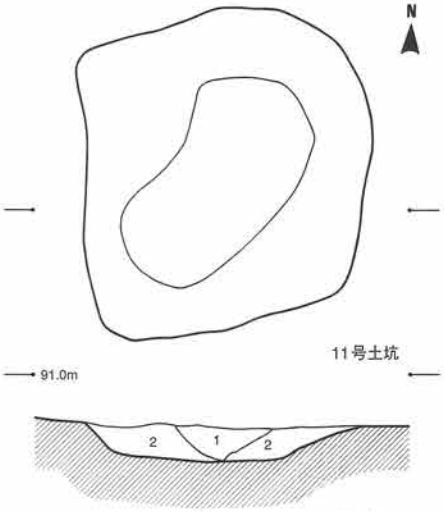


1．赤褐色土・・・焼土塊・焼土粒（径40㎜以下）を多量に、炭化粒（径2㎜以下）を少量含む。
2．明褐色土・・・炭化粒（径2㎜以下）を少量、焼土粒（径2㎜以下）をごく少量含む。



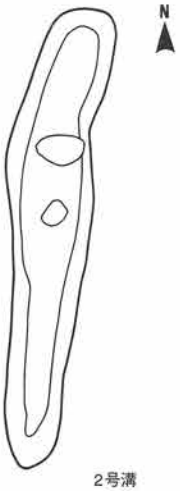
12号土坑

1．暗褐色土・・・炭化粒（径5㎜以下）を多量に、焼土粒（径2㎜以下）を少量含む。



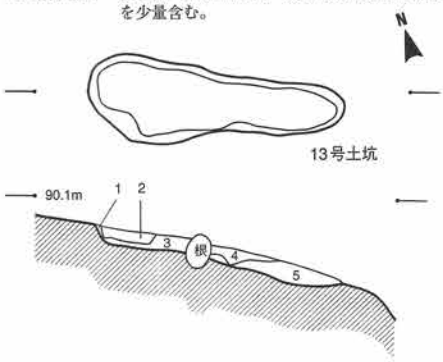
11号土坑

1．暗褐色土・・・・・炭化粒（径4㎜以下）を少量含む。
2．明褐色土・・・・・炭化粒（径4㎜以下）を多量に含む。



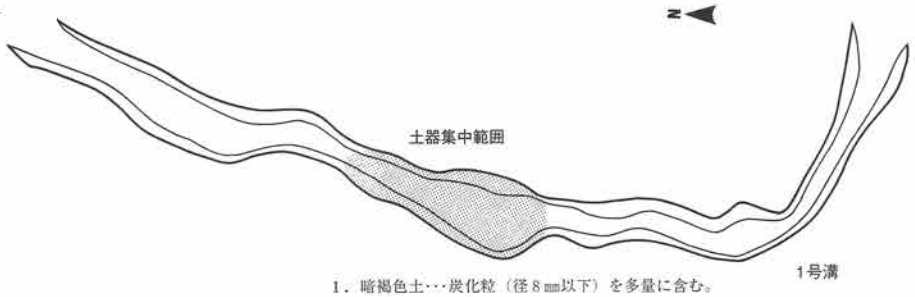
2号溝

1．褐色土・・・炭化粒（径2㎜以下）をごく少量含む。



13号土坑

1．暗赤褐色土・・・焼土を多量に含む。
2．暗褐色土・・・・・炭化粒（径10㎜以下）を多量に、焼土塊（径10㎜以下）をまばらに含む。
3．暗褐色土・・・・・炭化粒（径10㎜以下）を多量に含む。
4．褐色土・・・・・・・炭化粒（径5㎜以下）を少量含む。
5．明褐色土・・・・・炭化粒（径5㎜以下）を少量含む。



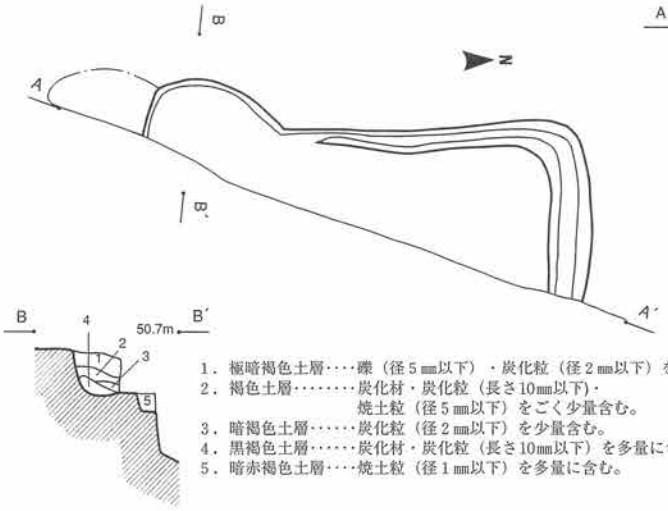
1号溝

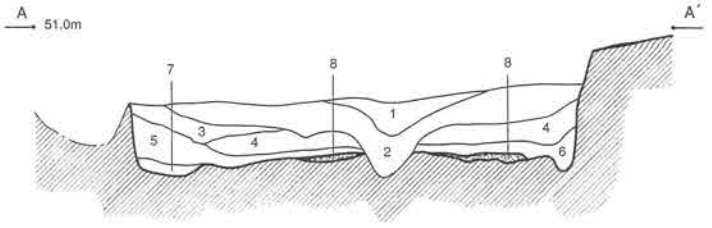
1．暗褐色土・・・炭化粒（径8㎜以下）を多量に含む。

0　（1：50）　2m
1号溝のみ

0　（1：40）　2m

H１号竪穴実測図・遺物出土位置図

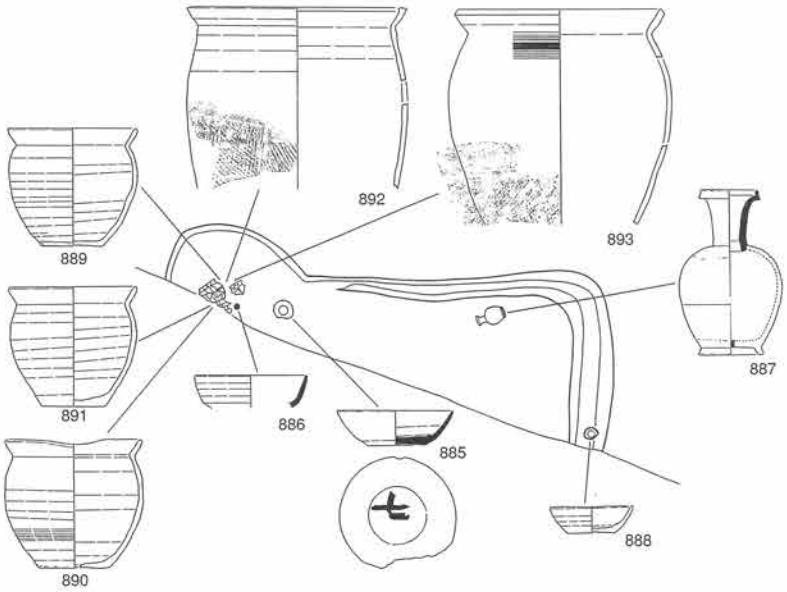




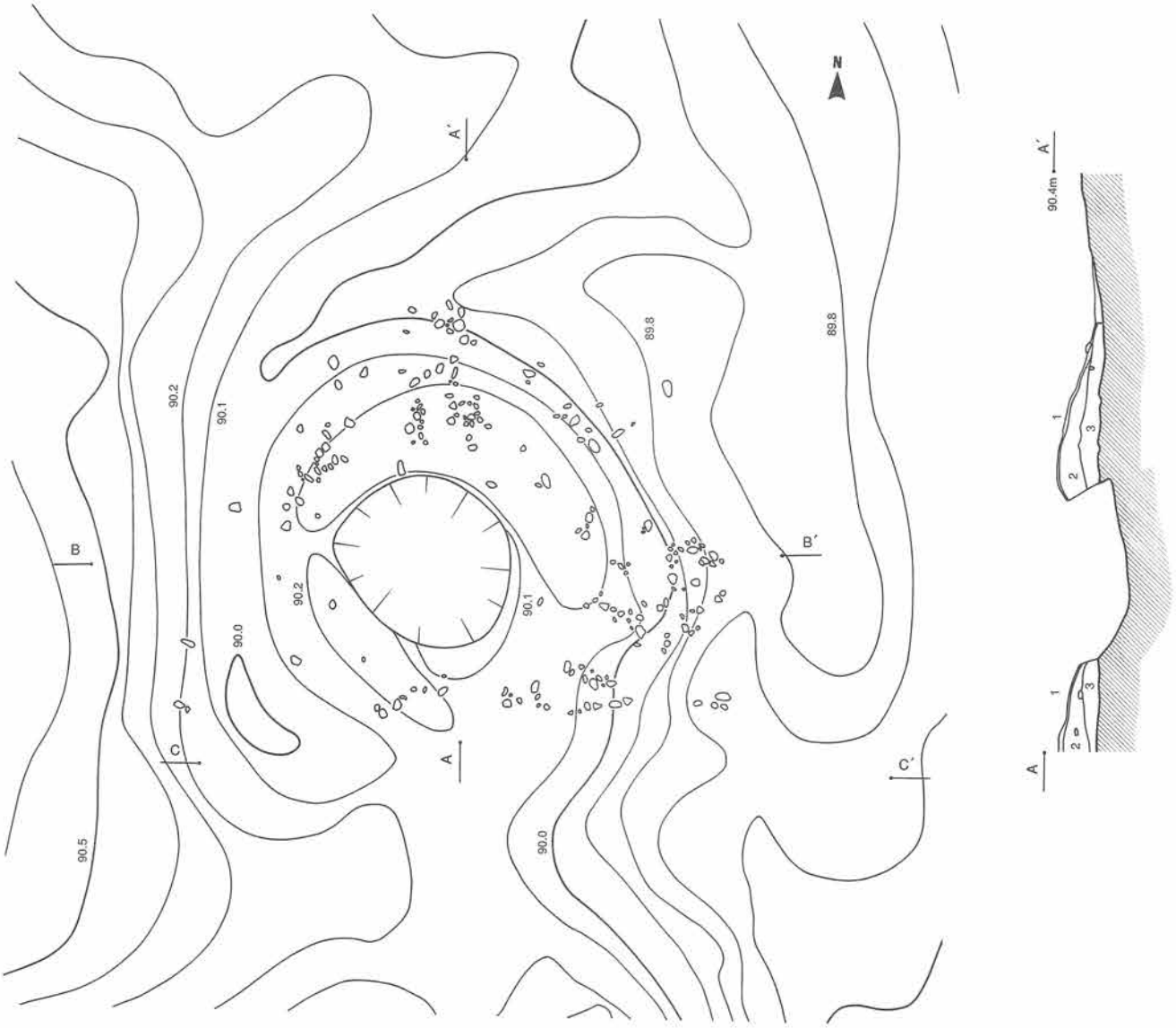
1．極暗褐色土層‥‥礫（径５㎜以下）・炭化粒（径２㎜以下）を少量含む。
2．褐色土層‥‥‥‥炭化材・炭化粒（長さ10㎜以下）・
　　焼土粒（径５㎜以下）をごく少量含む。
3．暗褐色土層‥‥‥炭化粒（径２㎜以下）を少量含む。
4．黒褐色土層‥‥‥炭化材・炭化粒（長さ10㎜以下）を多量に含む。
5．暗赤褐色土層‥‥焼土粒（径１㎜以下）を多量に含む。

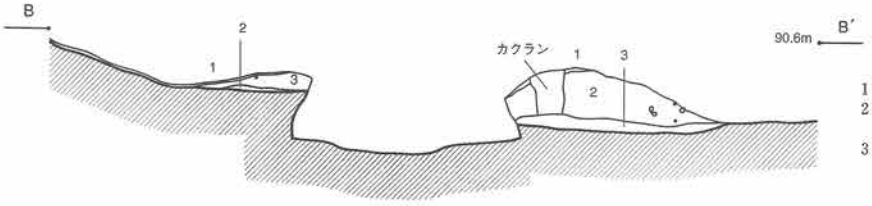
1．暗褐色土層‥‥‥‥‥礫（径５㎜以下）を少量含む。
2．極暗褐色土層‥‥‥礫（径３㎜以下）・炭化粒（径２㎜以下）を少量含む。
3．褐色土層‥‥‥‥‥炭化粒（径１㎜以下）を少量含む。
4．褐色土層‥‥‥‥‥炭化粒（径５㎜以下）・焼土粒(径㎜以下）を少量含む。
5．にぶい黄褐色土層‥炭化粒（径10㎜以下）を少量含む。
6．黒褐色土層‥‥‥‥炭化材・炭化粒（径20㎜以下）を多量に含む。
7．暗赤褐色土層‥‥‥焼土粒（径１㎜以下）を多量に含む。
8．明黄褐色土層‥‥‥床造成土。混入物は見られない。しまりは弱い。

0　(1：40)　2m

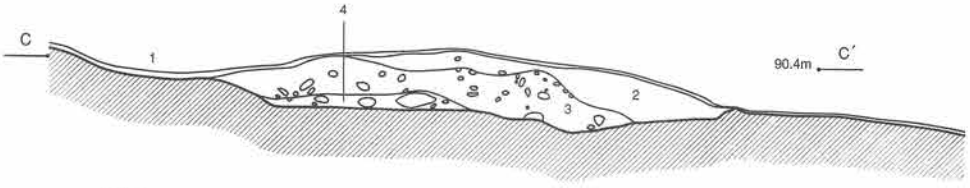


1号塚実測図



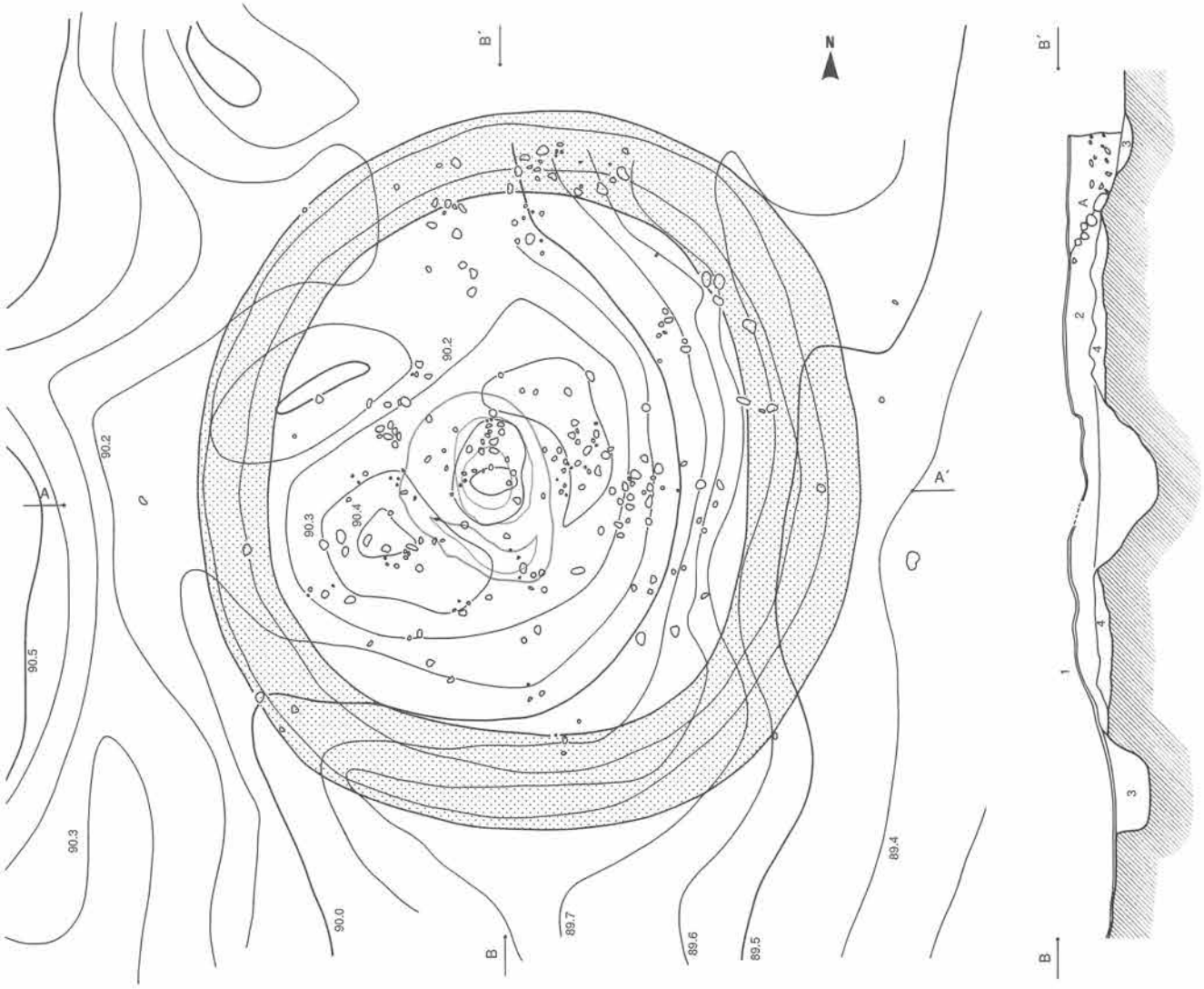


1．腐植層
2．明褐色土層･･･炭化粒（径２㎜以下）をごく少量含む。
　　Ⅱ層に近似する。
3．暗褐色土層･･･炭化粒（径２～10㎜）を少量含む。
　　塚造成時の表土層。



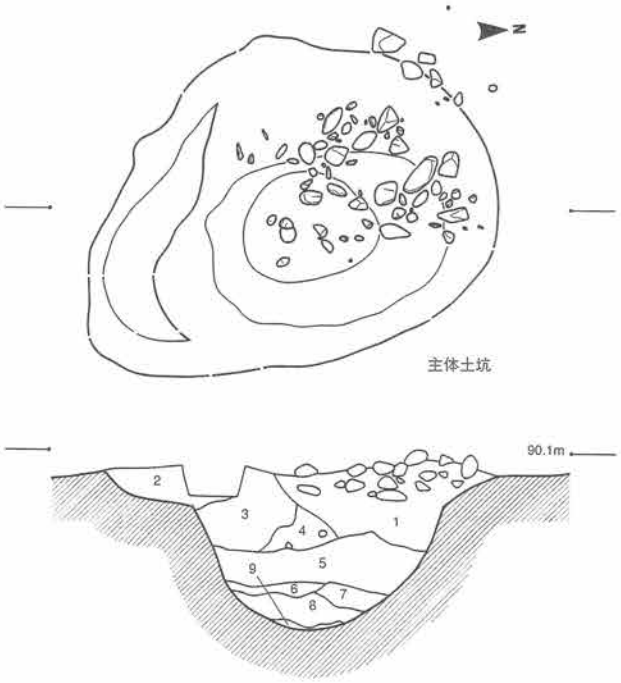
1．腐植層
2．明赤褐色土･･･炭化粒（径２㎜以下）をごく少量含む。礫（径６㎝以下）がまれに混じる。
　　１号塚主体部掘削土。
3．明褐色土･････炭化材・炭化粒（長さ40㎜以下）を少量含む。
　　礫（径30～100㎜程度）が多く混じる。１号塚主体部掘削土。
4．明褐色土･････炭化粒（径５㎜以下）が多量に含まれる。礫（径60～200㎜程度）が
　　多く混じる。１号塚造成時の盛土。

0　（1：80）　4m



1．腐植層
2．明褐色土層･･･塚封土。Ⅱ層土に近似し、炭化粒（径1㎜以下)をごく少量含む。
　　下部は色調がやや黒ずむ。弥生土器片が少量含まれる。
3．暗褐色土層
4．暗褐色土層･･･塚造成時の表土層。炭化粒（径2㎜以下）を少量、焼土粒（径2㎜以下）をまれに含む。弥生土器片が多量に含まれる。
A．1号塚主体部の掘削土。

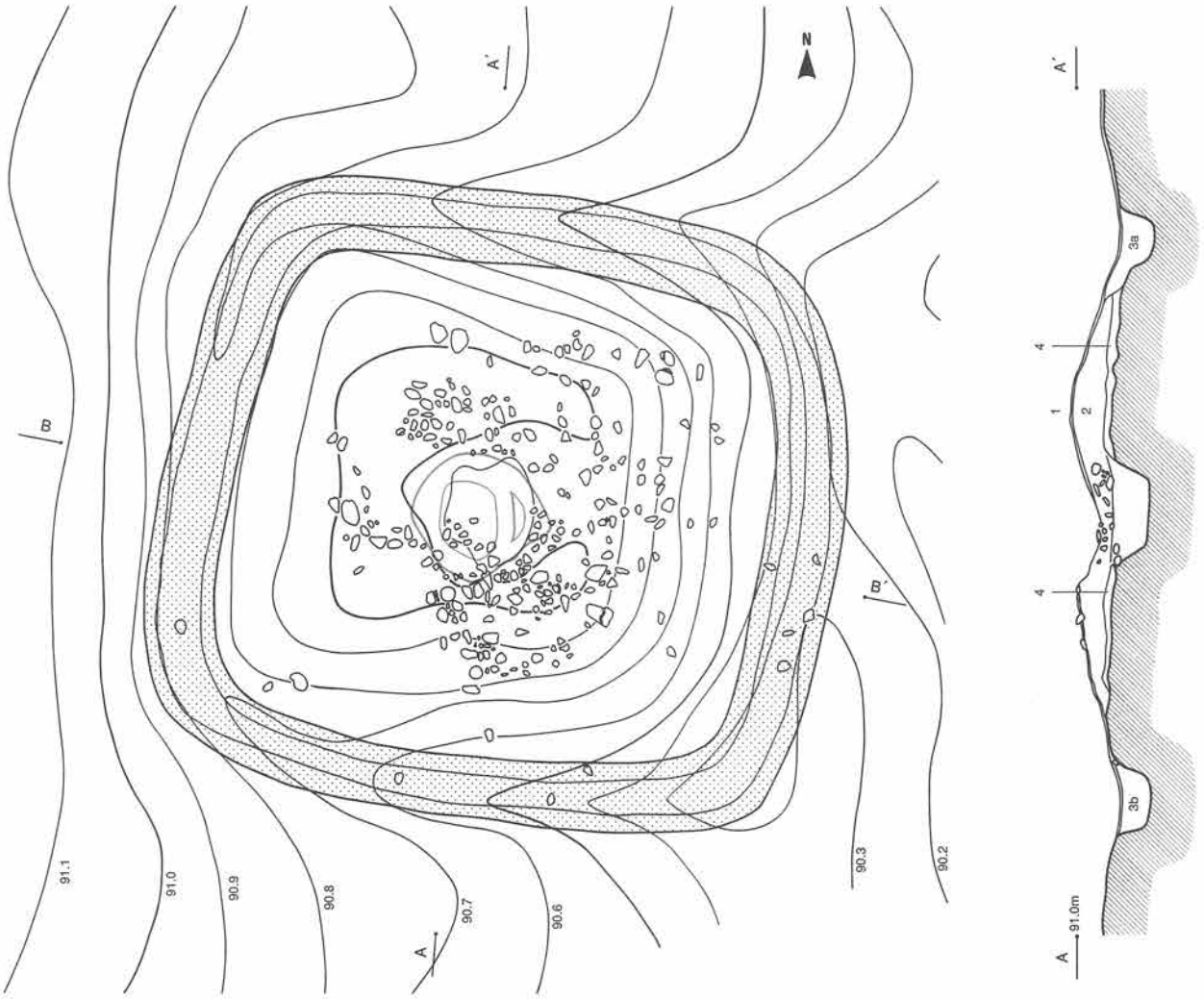
0　(1：80)　4m



1．明褐色土層････炭化粒（径4㎜程度）を少量含む。
2．褐色土層･･････炭化粒（径2㎜程度）を多量に含む。
3．褐色土層･･････炭化粒（径5㎜以下）を少量含む。
　　明褐色土塊（径10㎜程度）が斑状に多く混じる。
4．黄褐色土層････炭化粒（径3㎜以下）を少量含む。
　　褐色土塊が斑状に混じる。
5．褐色土層･･････炭化粒（径10㎜以下）を少量含む。
　　明褐色土塊（10～100㎜程度）が斑状に多く混じる。
6．明褐色土層････混入物はほとんど認められない。
7．黄褐色土層････明褐色土に褐色土がシミ状に混じる。
　　炭化粒（径3㎜以下）を少量含む。
8．暗褐色土層････炭化粒（径10㎜程度）を多量に含む。
　　明褐色土が斑状に少量混じる。他の土層に比較して、しまりに欠ける。
9．明褐色土層････混入物はほとんど認められない。

0　(1：40)　2m

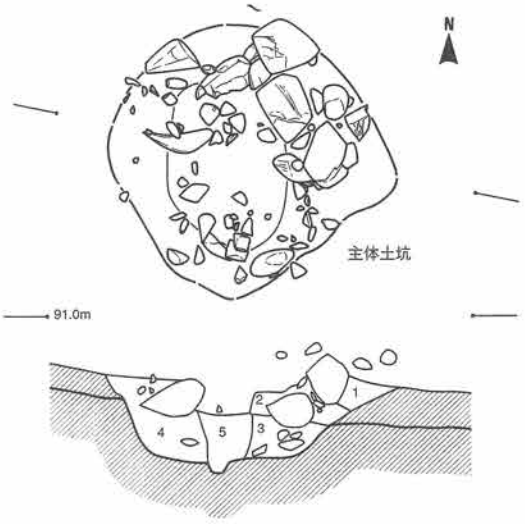
3号塚実測図



1．腐植層
2．明褐色土層‥‥塚封土。Ⅱ層に近似し、炭化粒（径1㎜以下）をごく少量含む。
　　下部は色調がやや黒ずむ。弥生土器片が少量含まれる。
3a．暗褐色土層　　3b．褐色土層
4．暗褐色土層‥‥塚造成時の表土層。炭化粒（径2㎜以下）を少量、焼土粒（径2㎜以下）をまれに含む。弥生土器片が多量に含まれる。

0　(1：80)　4m

主体土坑被覆礫

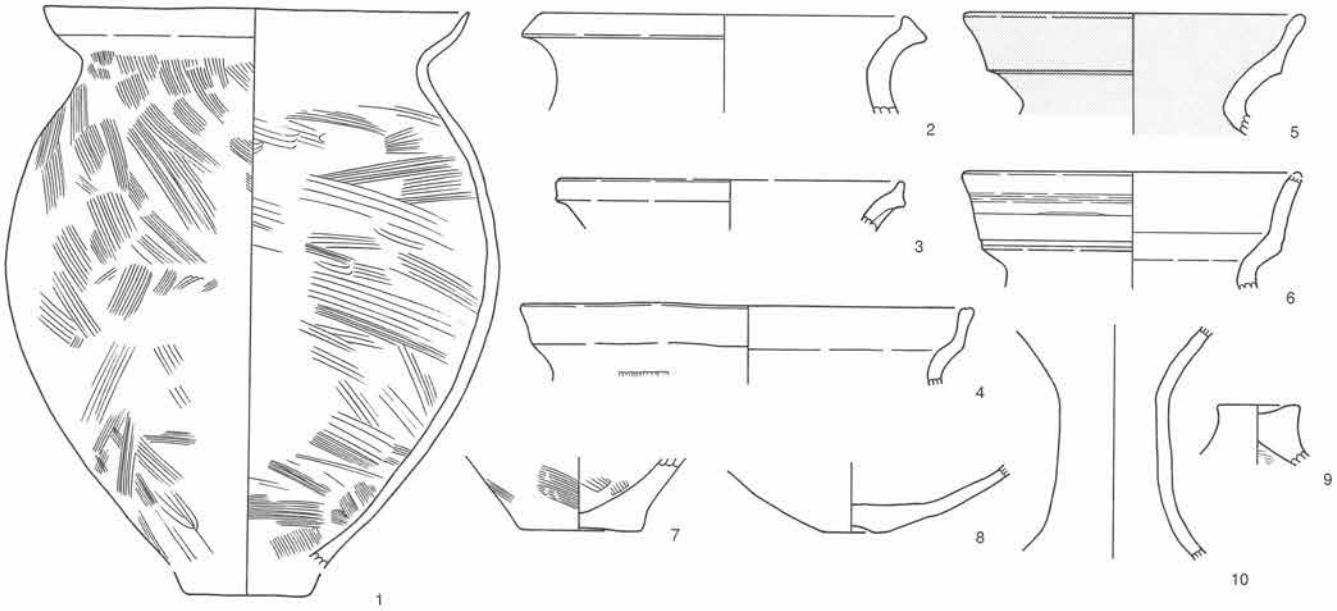


1．明褐色土層‥‥‥‥炭化粒（径1㎜以下）をごく少量含む。
2．褐色土‥‥‥‥‥‥炭化粒（径3㎜以下）を多量に含む。
3．明褐色土‥‥‥‥‥炭化粒（径1㎜以下）をごく少量含む。しまりはよい。
4．にぶい褐色土層‥‥橙色粗粒砂（風化した砂岩礫）を斑状に含む。固くしまる。
5．明褐色土層‥‥‥‥3に近似するが、しまりに欠ける。根の腐植痕と思われる。

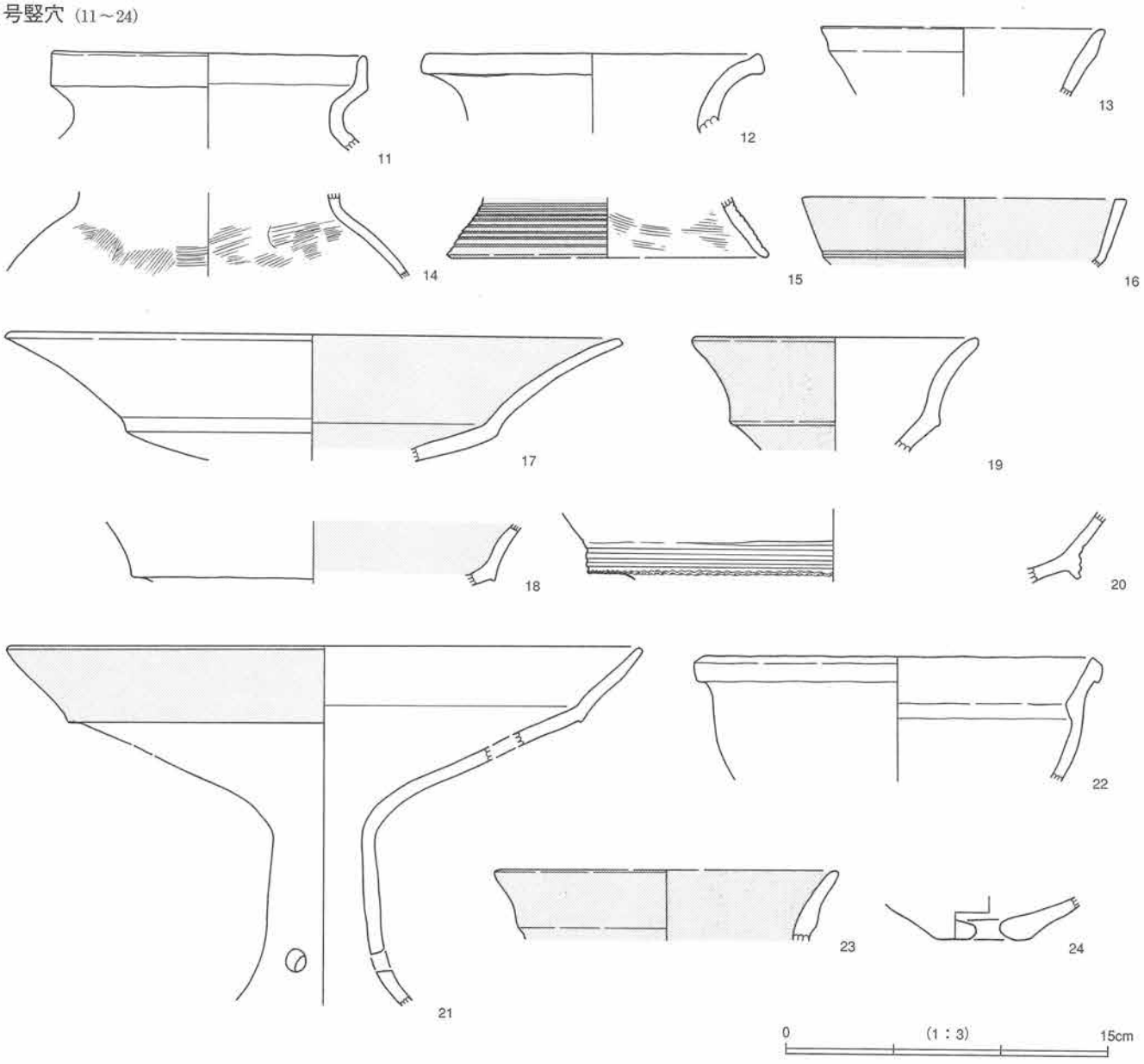
0　(1：40)　2m

弥生時代後期の土器実測図（1）

1号竪穴 (1～10)

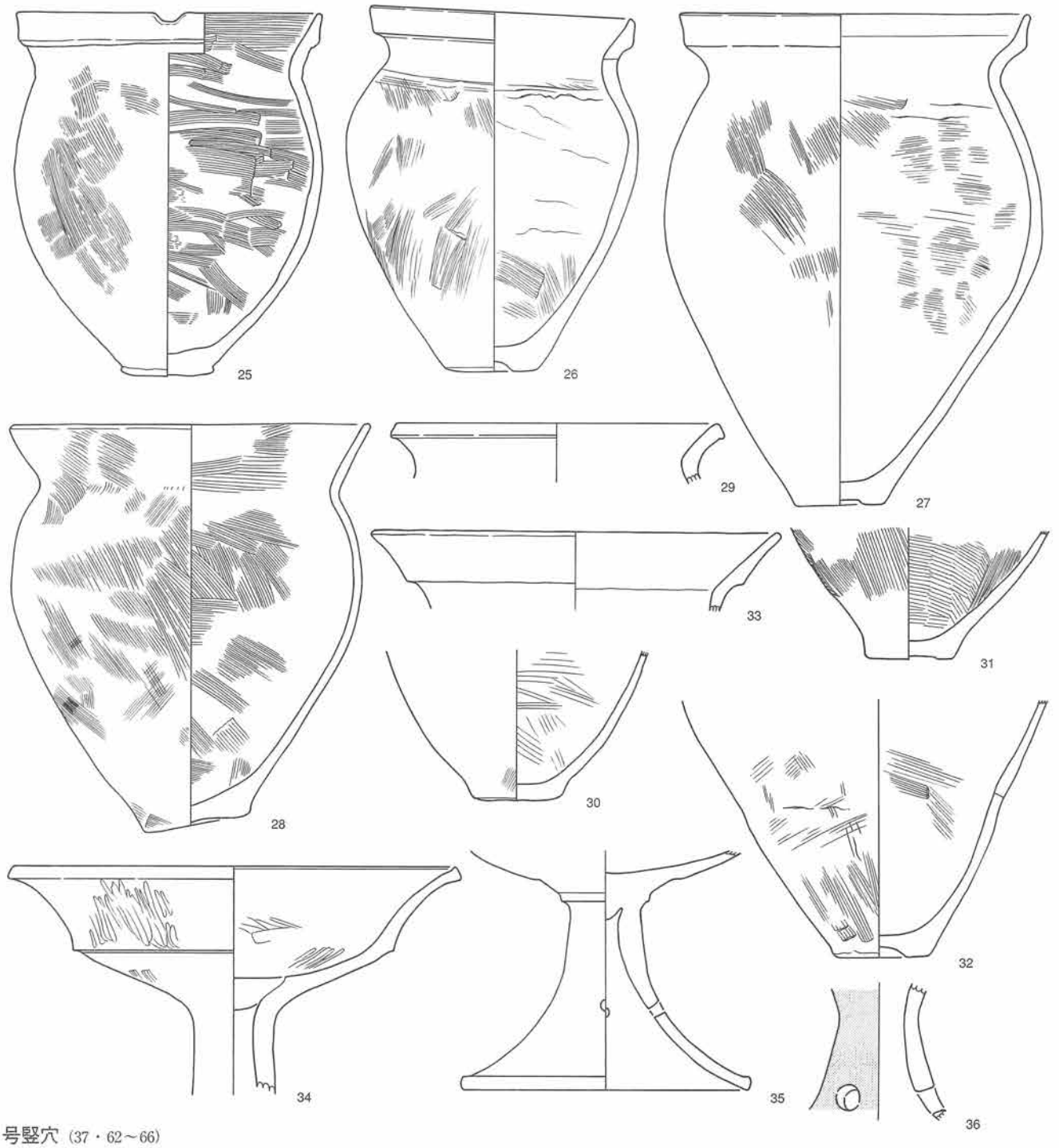


3号竪穴 (11～24)

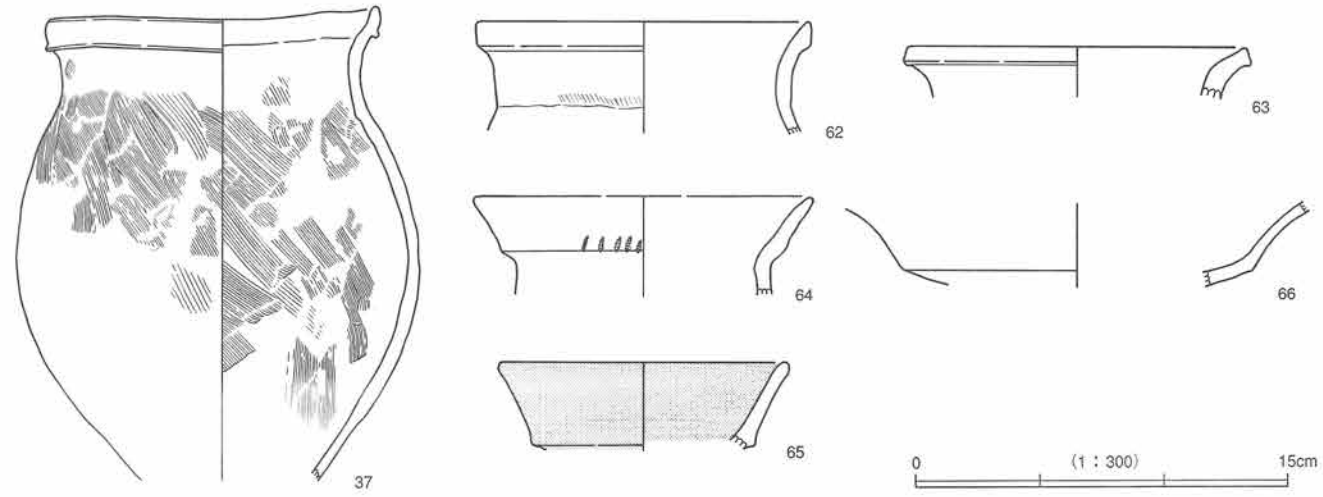


弥生時代後期の土器実測図（2）

4号竪穴（25～36）

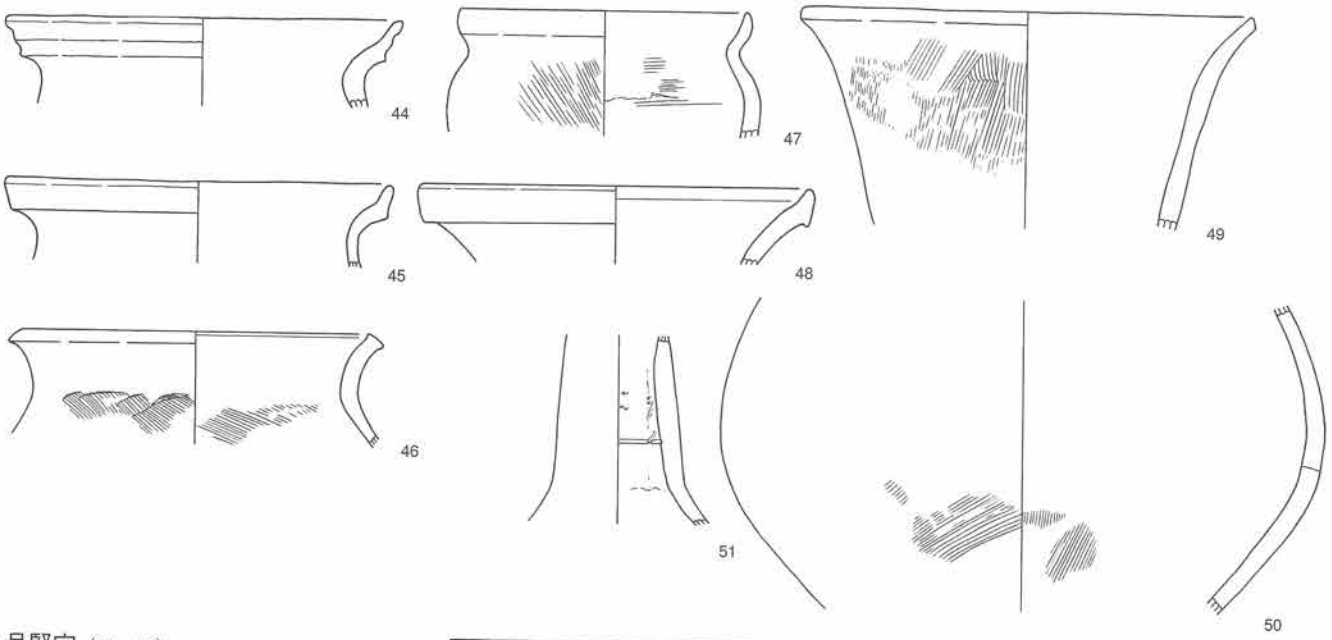


7号竪穴（37・62～66）

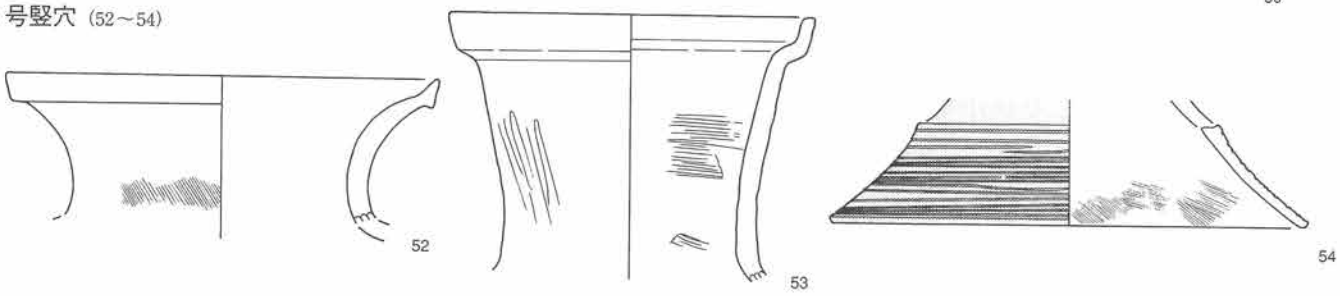


弥生時代後期の土器実測図（3）

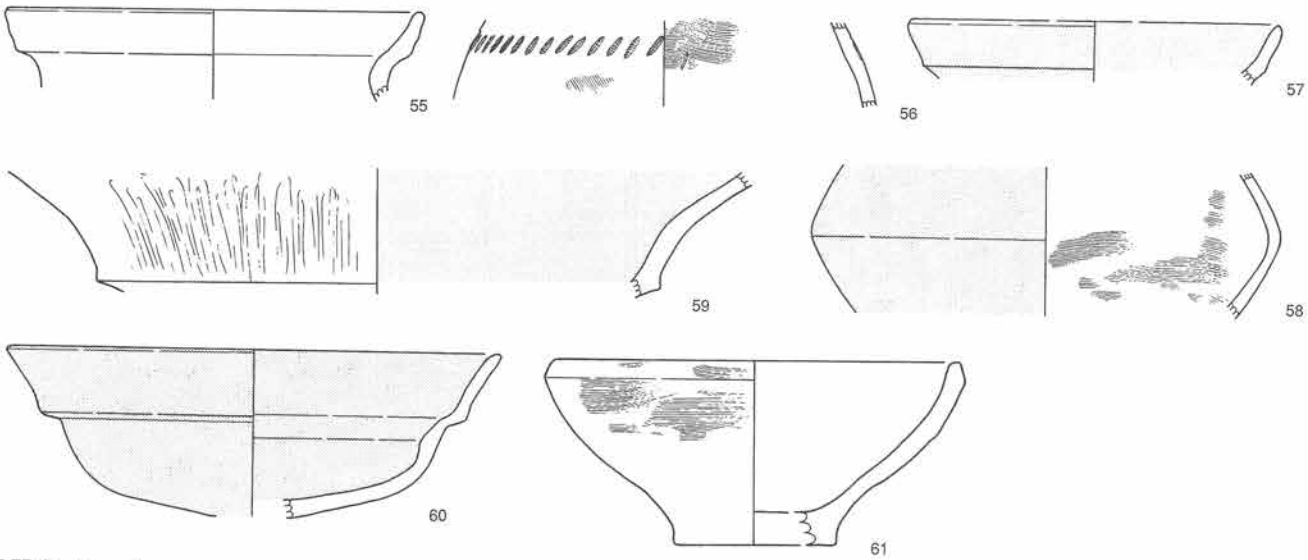
2号竪穴（44～51）



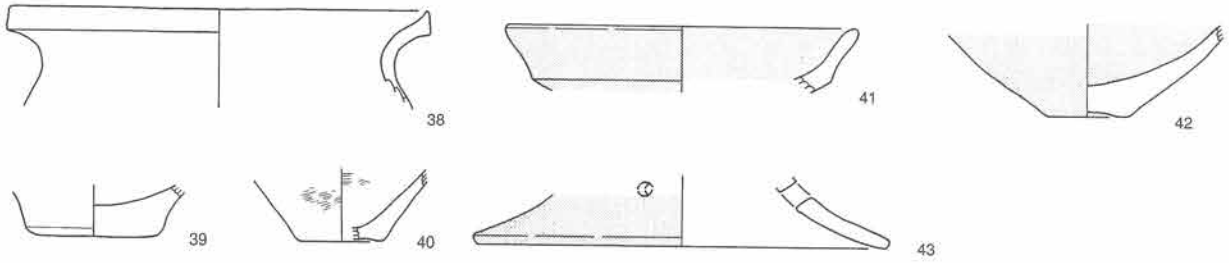
5号竪穴（52～54）



6号竪穴（55～61）



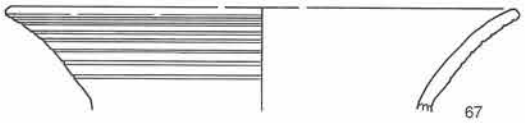
8号竪穴（38～43）

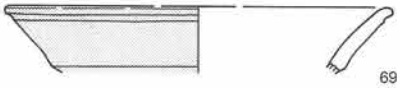


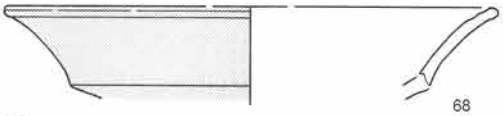
0 (1：3) 15cm

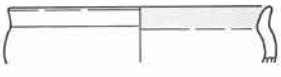
弥生時代後期の土器実測図（4）

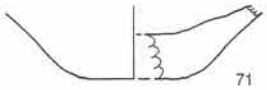
1号土坑（67～71）







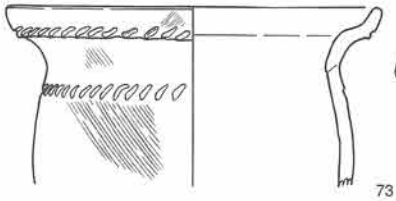


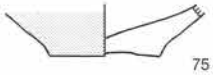


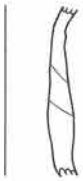
2号土坑（72）

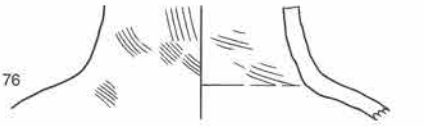
5号竪穴（77～79）

4号土坑（73～76）

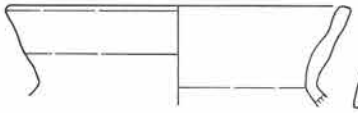




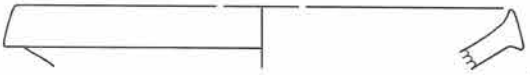




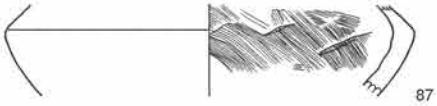
6号土坑（80～83）



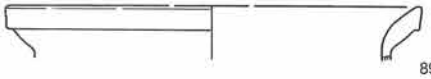
7号竪穴（84・85）

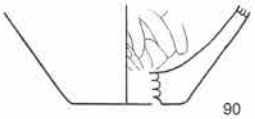


8号土坑（86～88）

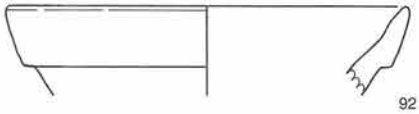


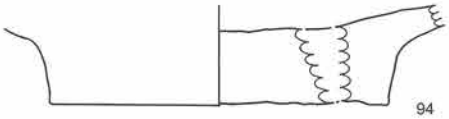
9号土坑（89～91）



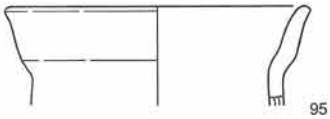


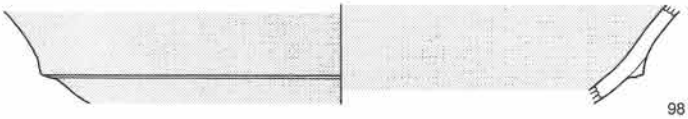
10号土坑（92～94）



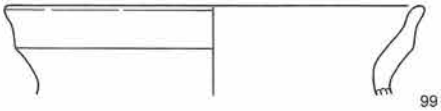


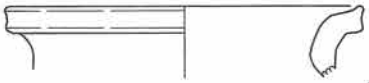
12号土坑（95～98）

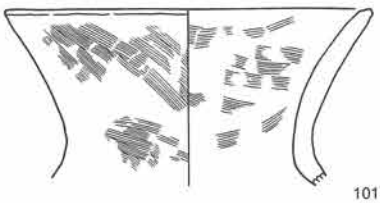


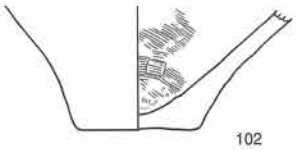


2号溝（99～105）



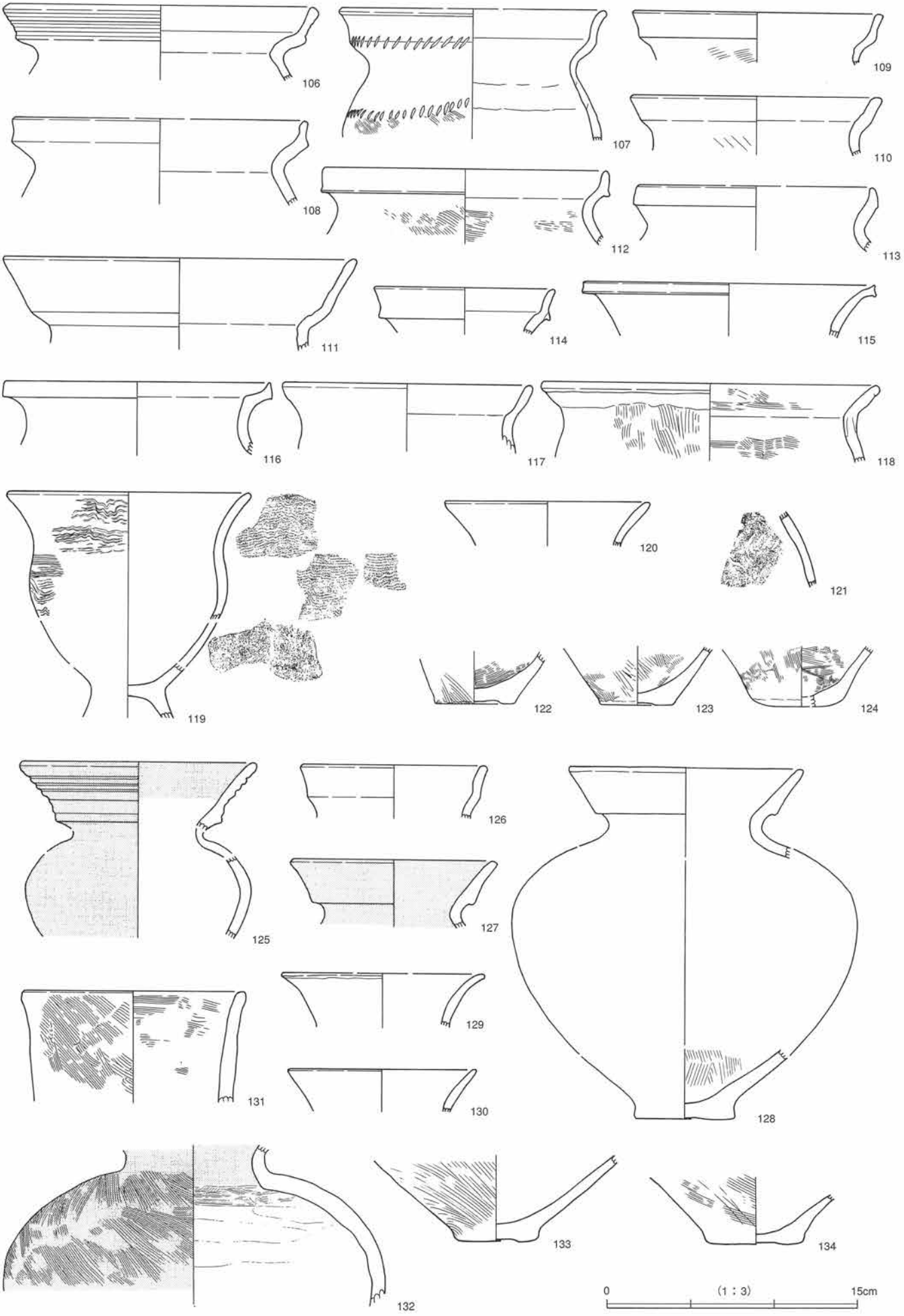




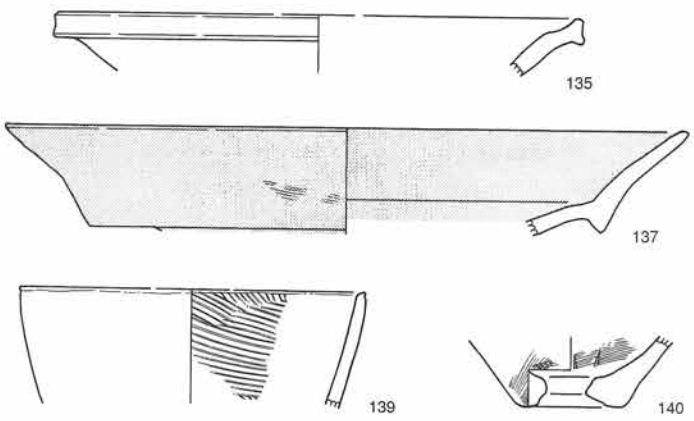


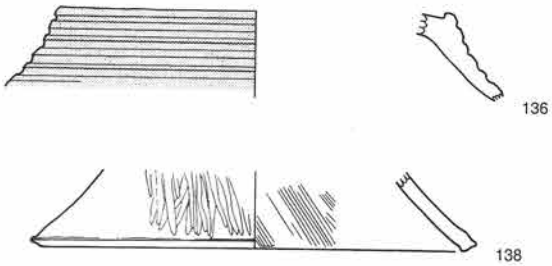
0　（1：3）　15cm

1号溝（106～134）

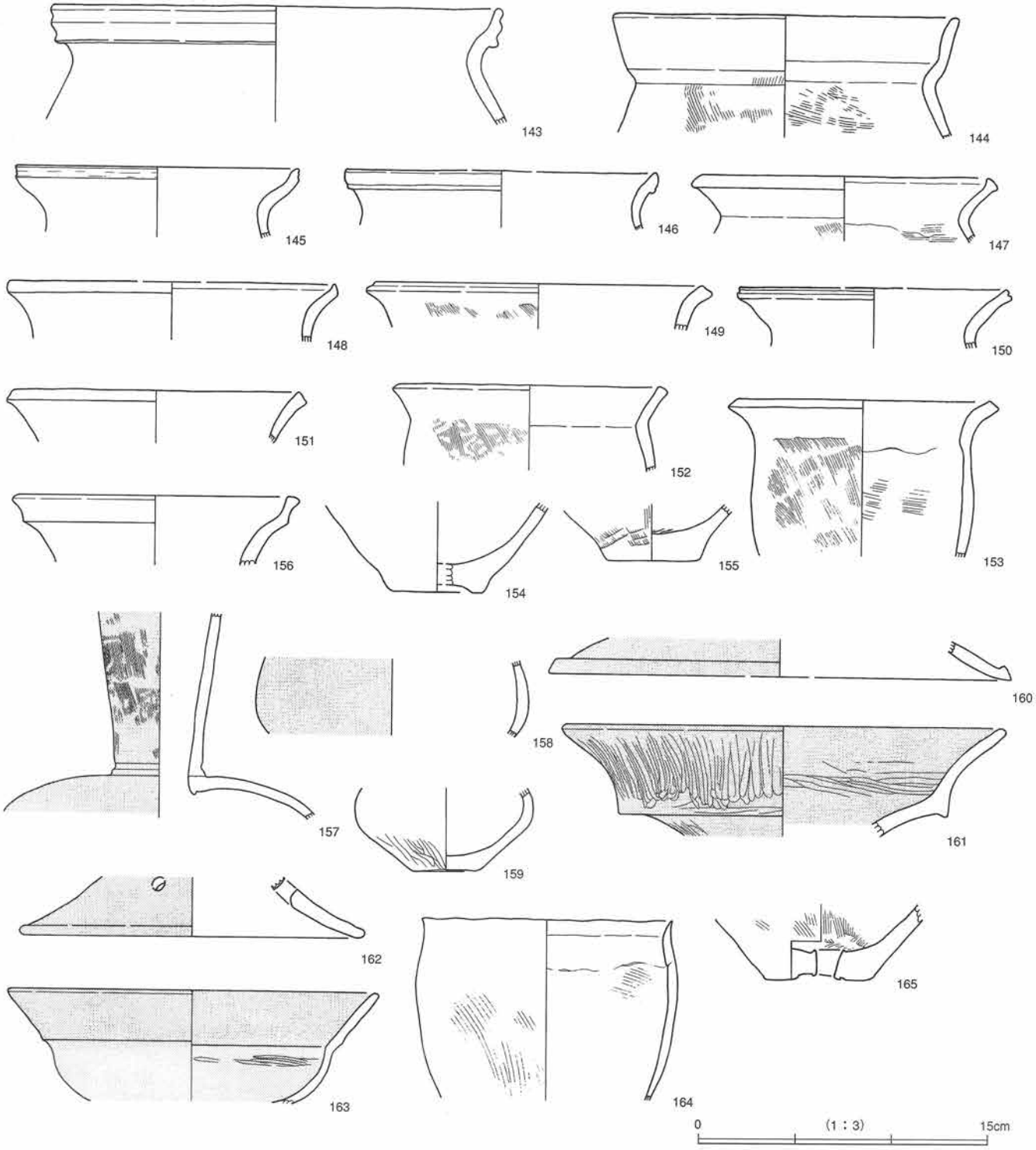

106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
0
(1：3)
15cm

1号溝（135～142）

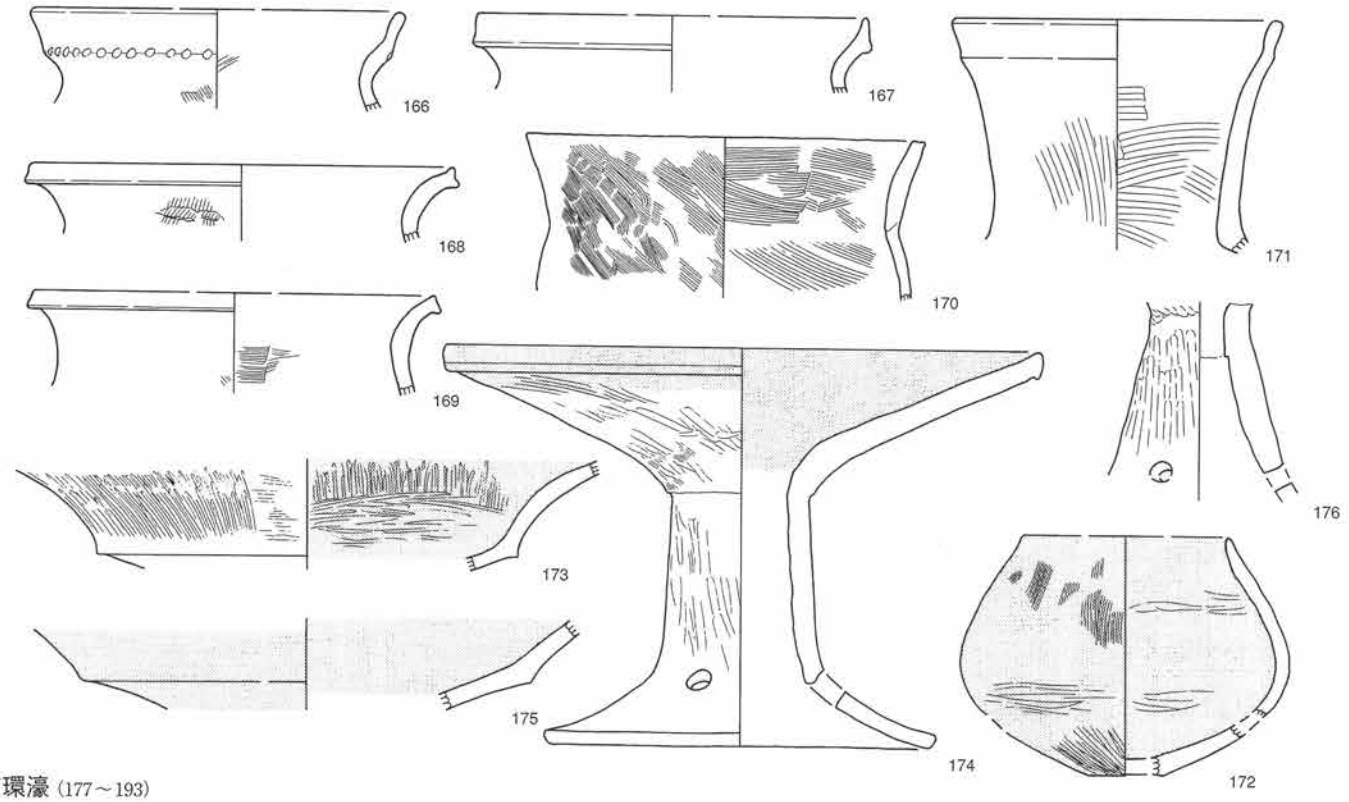




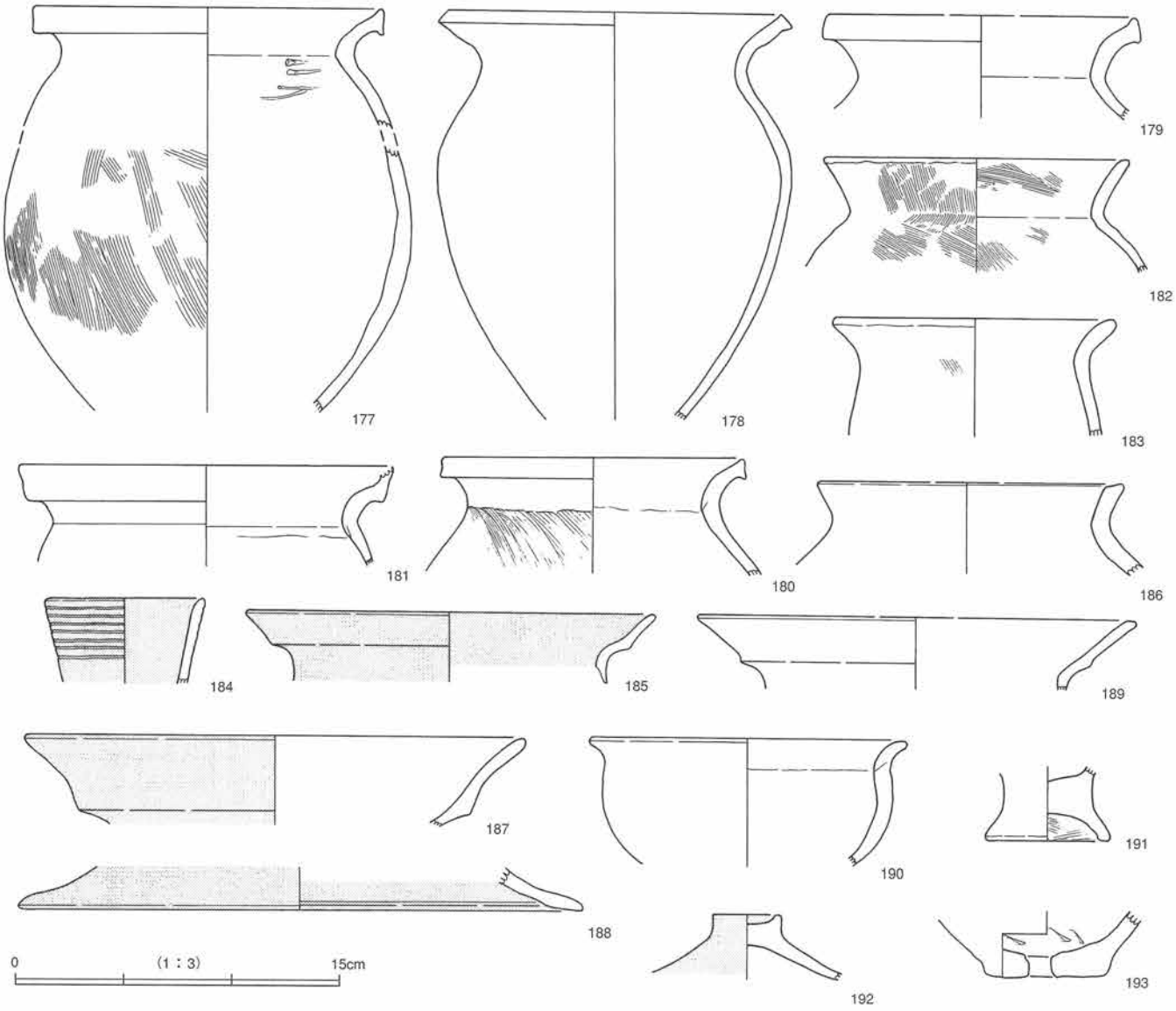
3号土坑（143～165）



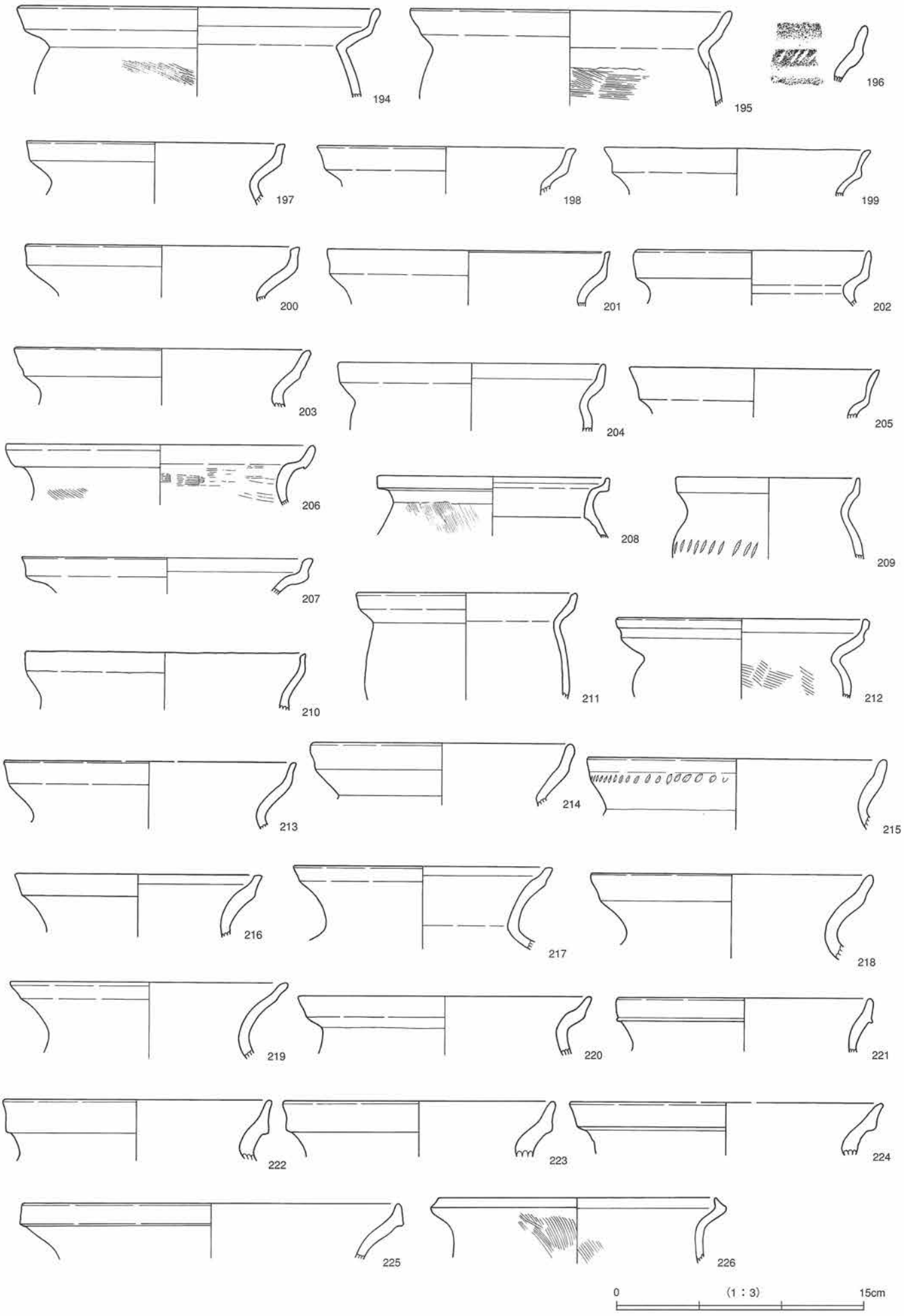
11号土坑（166～176）



東環濠（177～193）

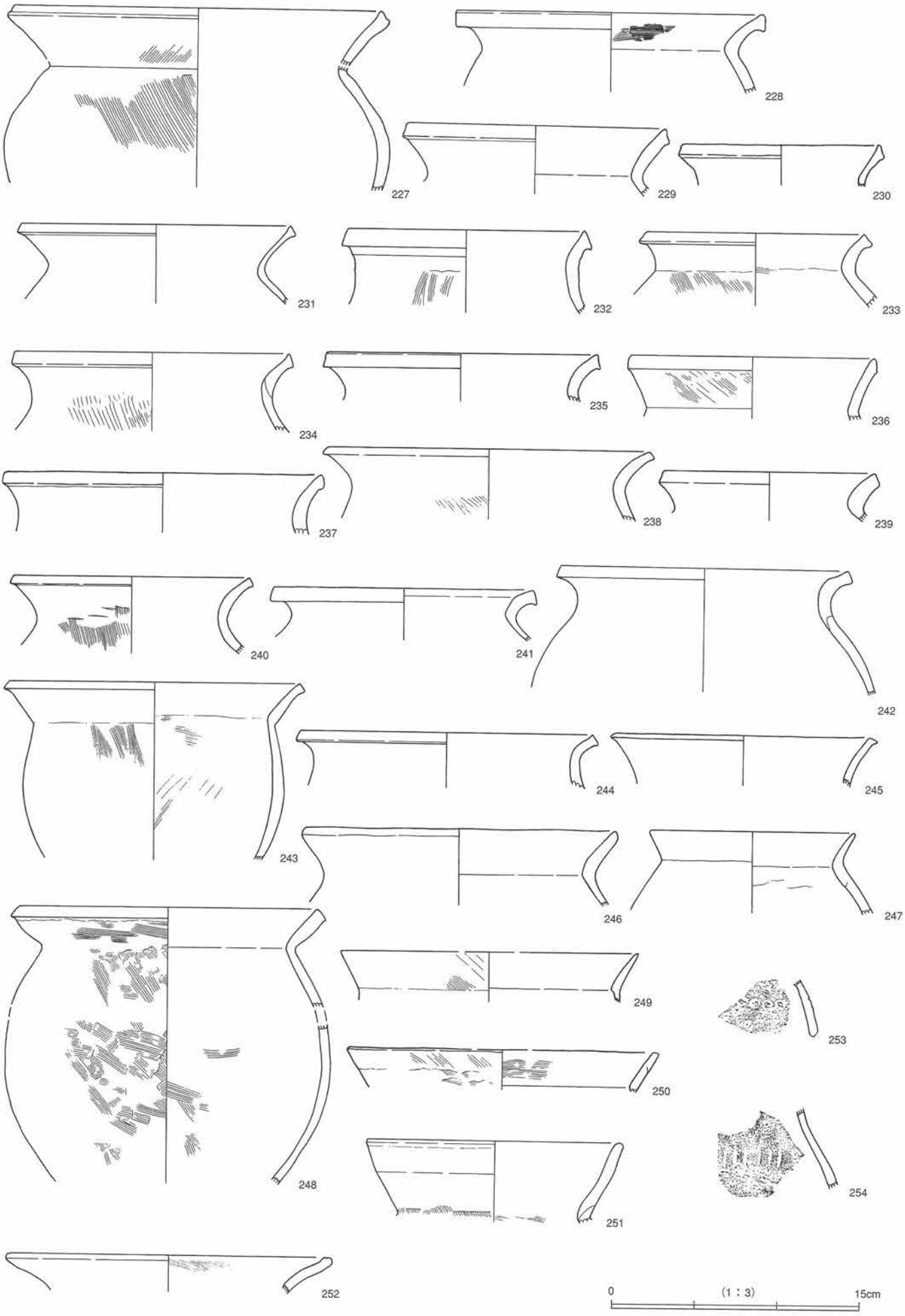


南環濠（1）

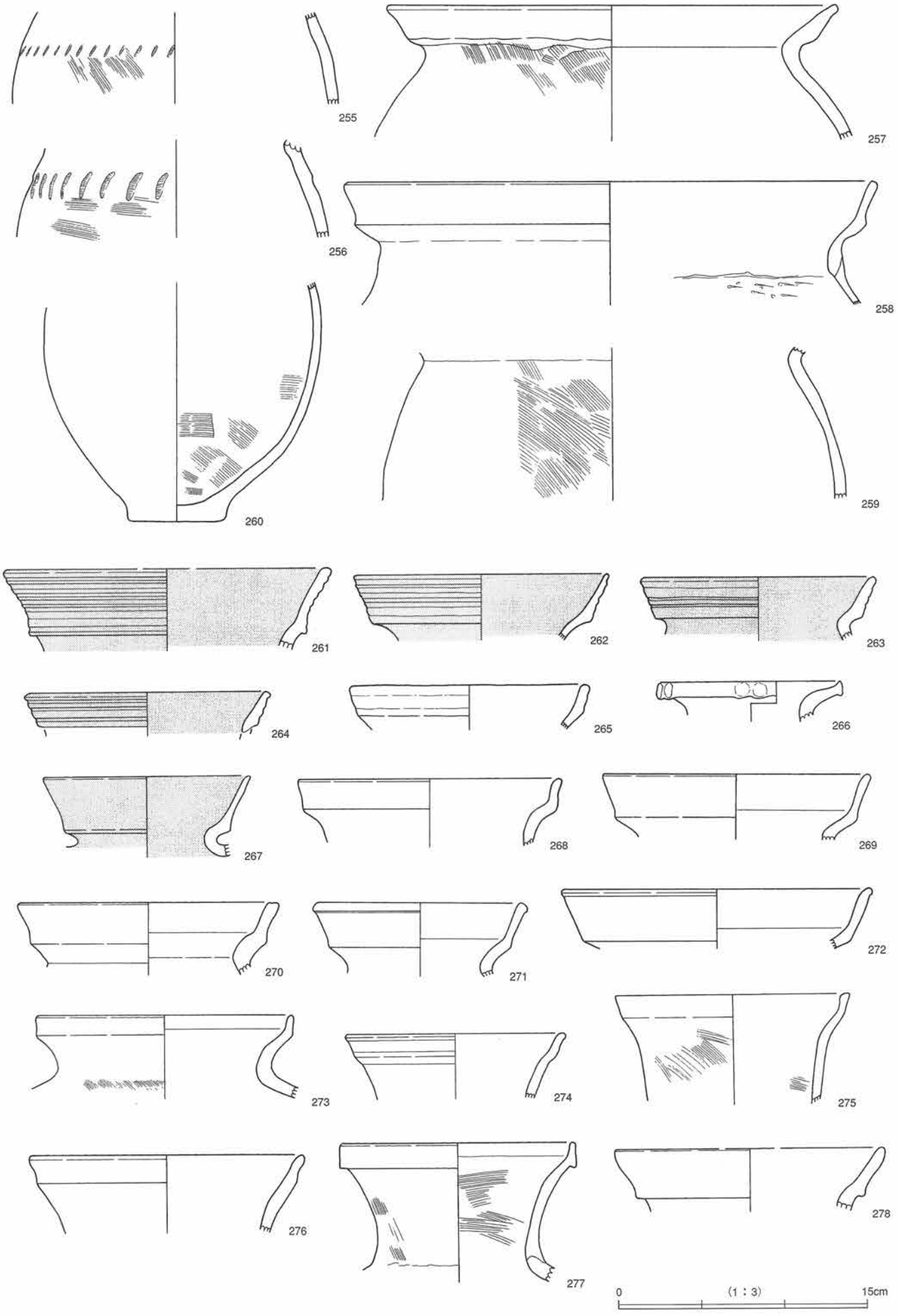

194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
208
209
207
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
0
(1：3)
15cm

弥生時代後期の土器実測図（9）

南環濠（2）

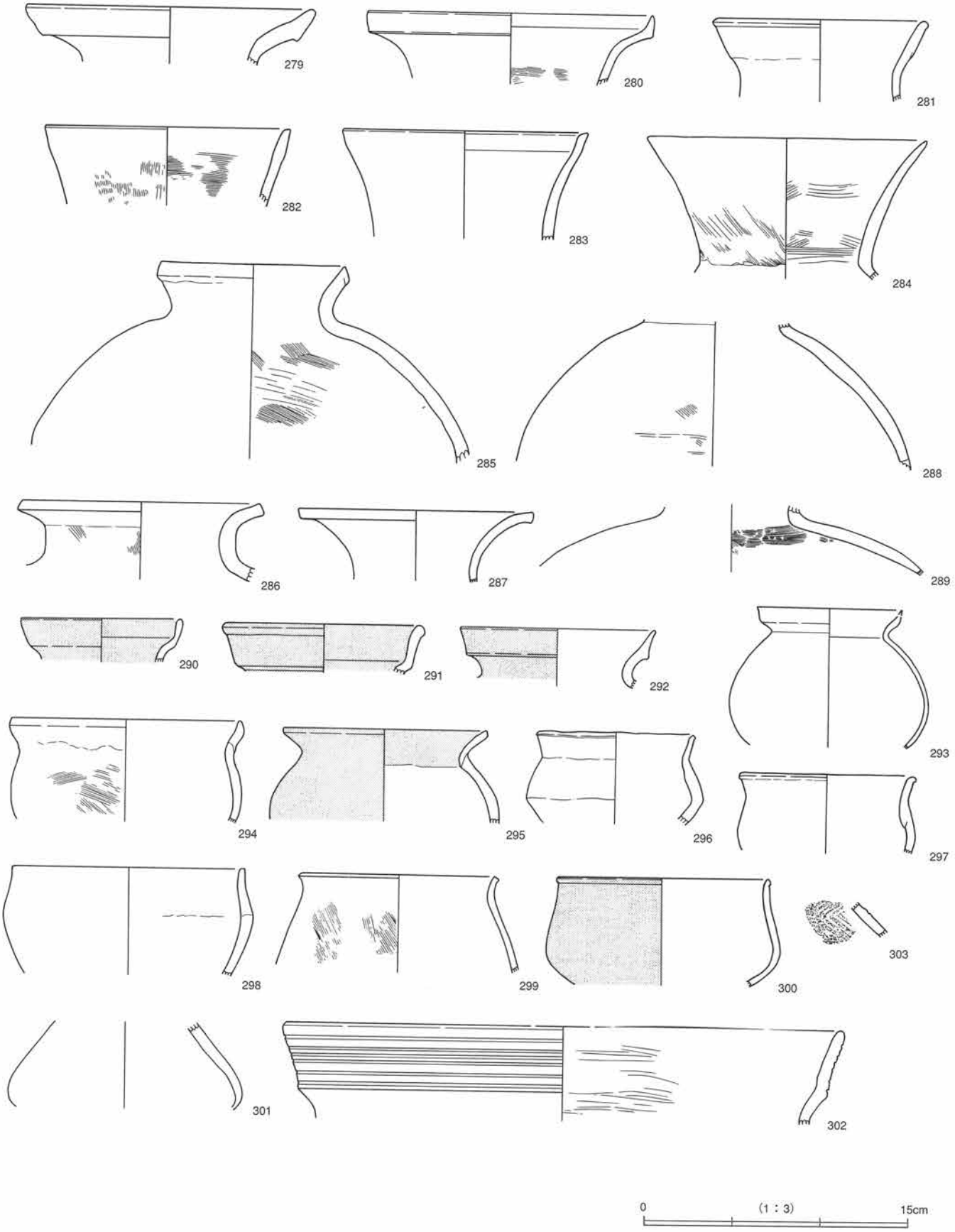


南環濠（3）

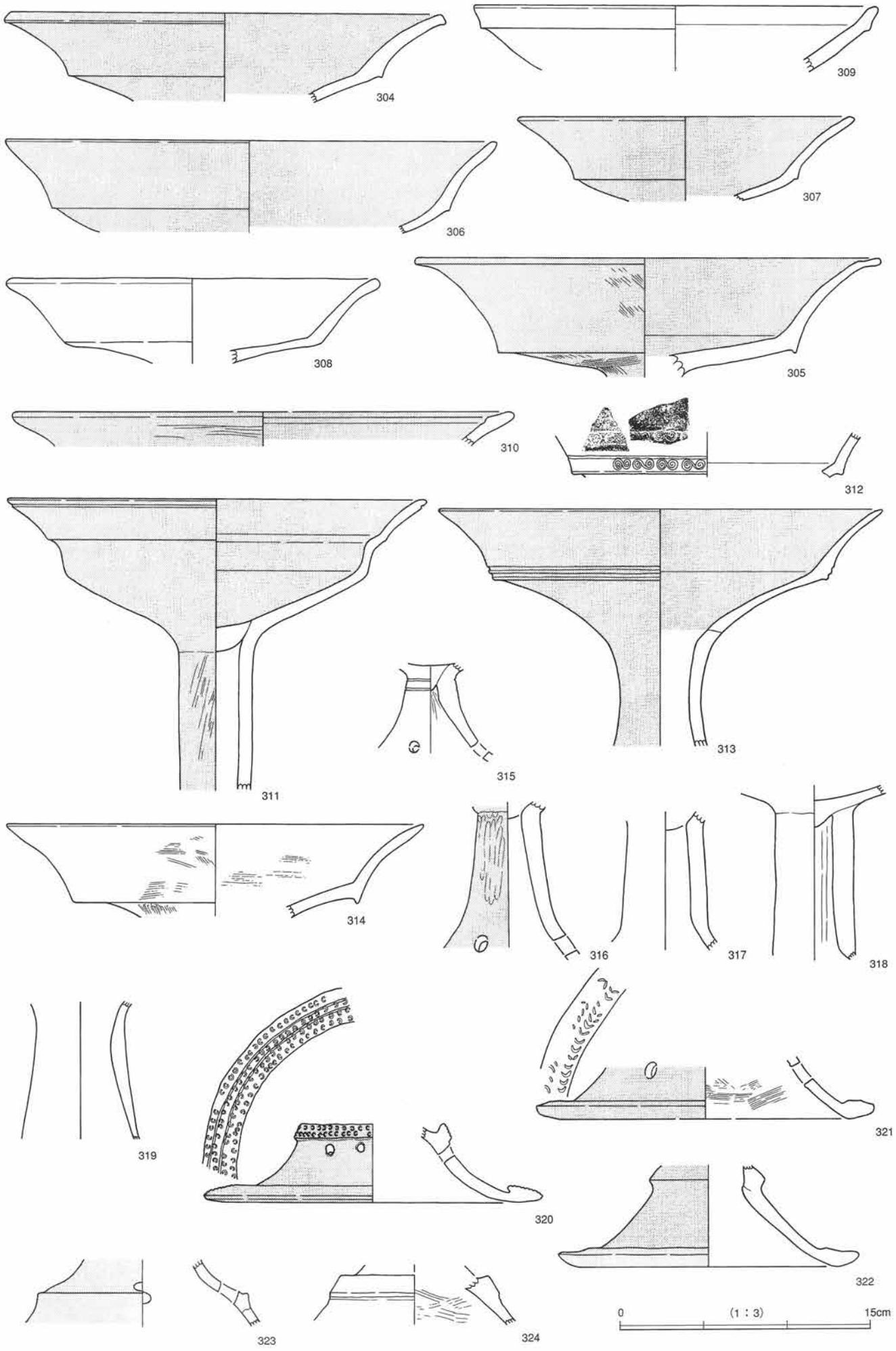

255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
0
(1：3)
15cm

弥生時代後期の土器実測図（11）

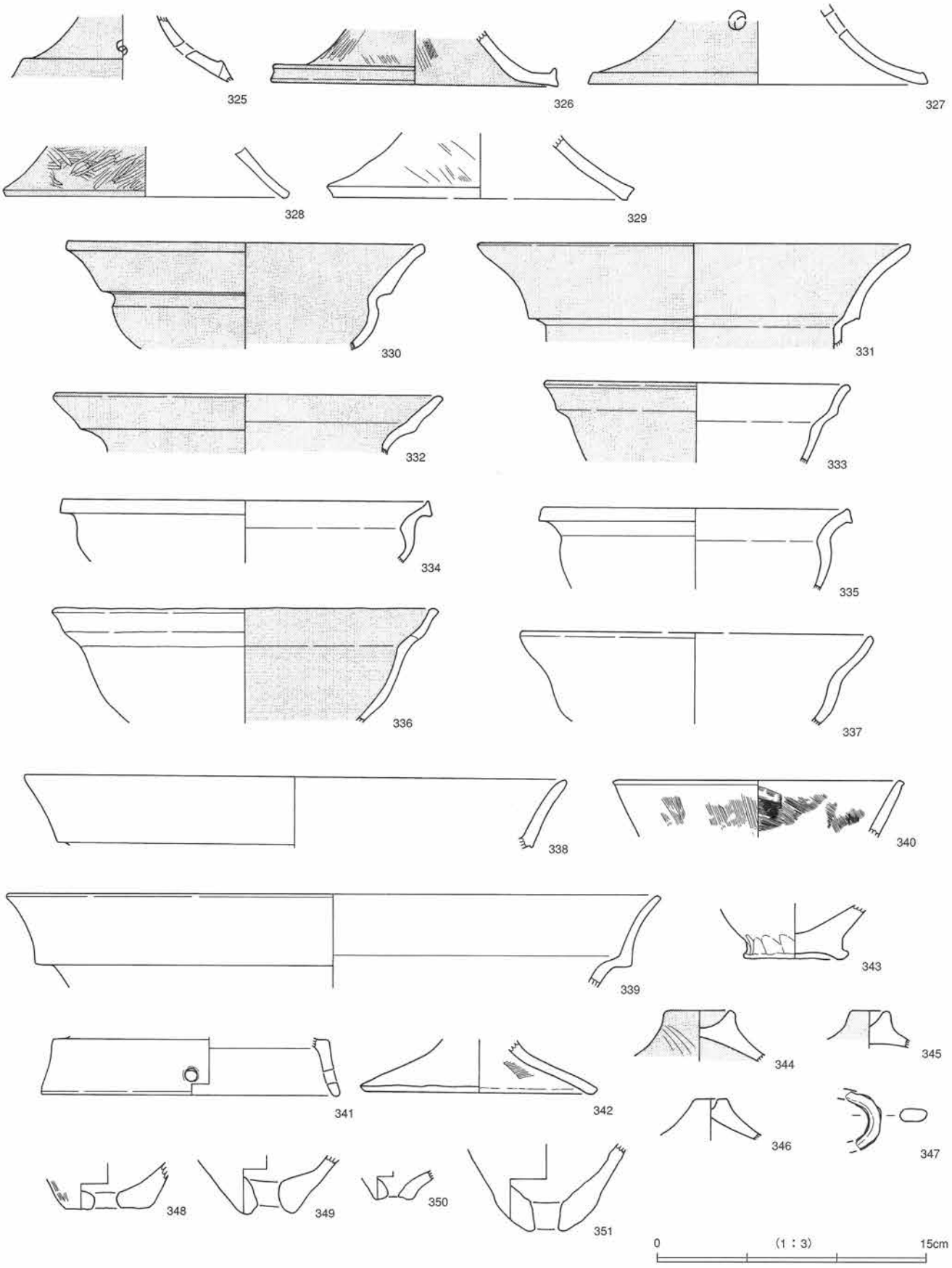
南環濠（4）



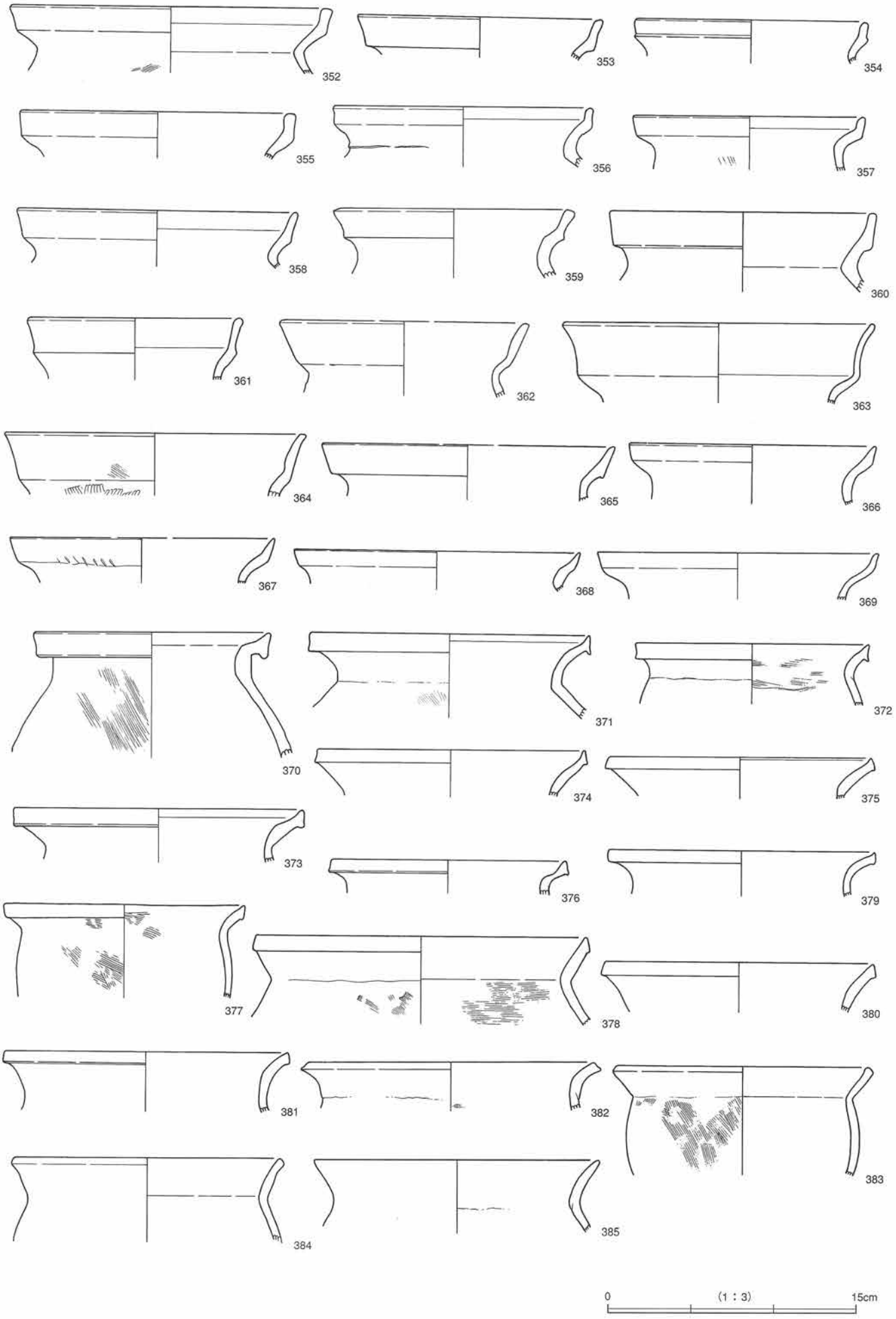
南環濠（5）


304
309
306
307
308
305
310
312
311
313
315
314
316
317
318
319
321
320
322
323
324
0
(1：3)
15cm

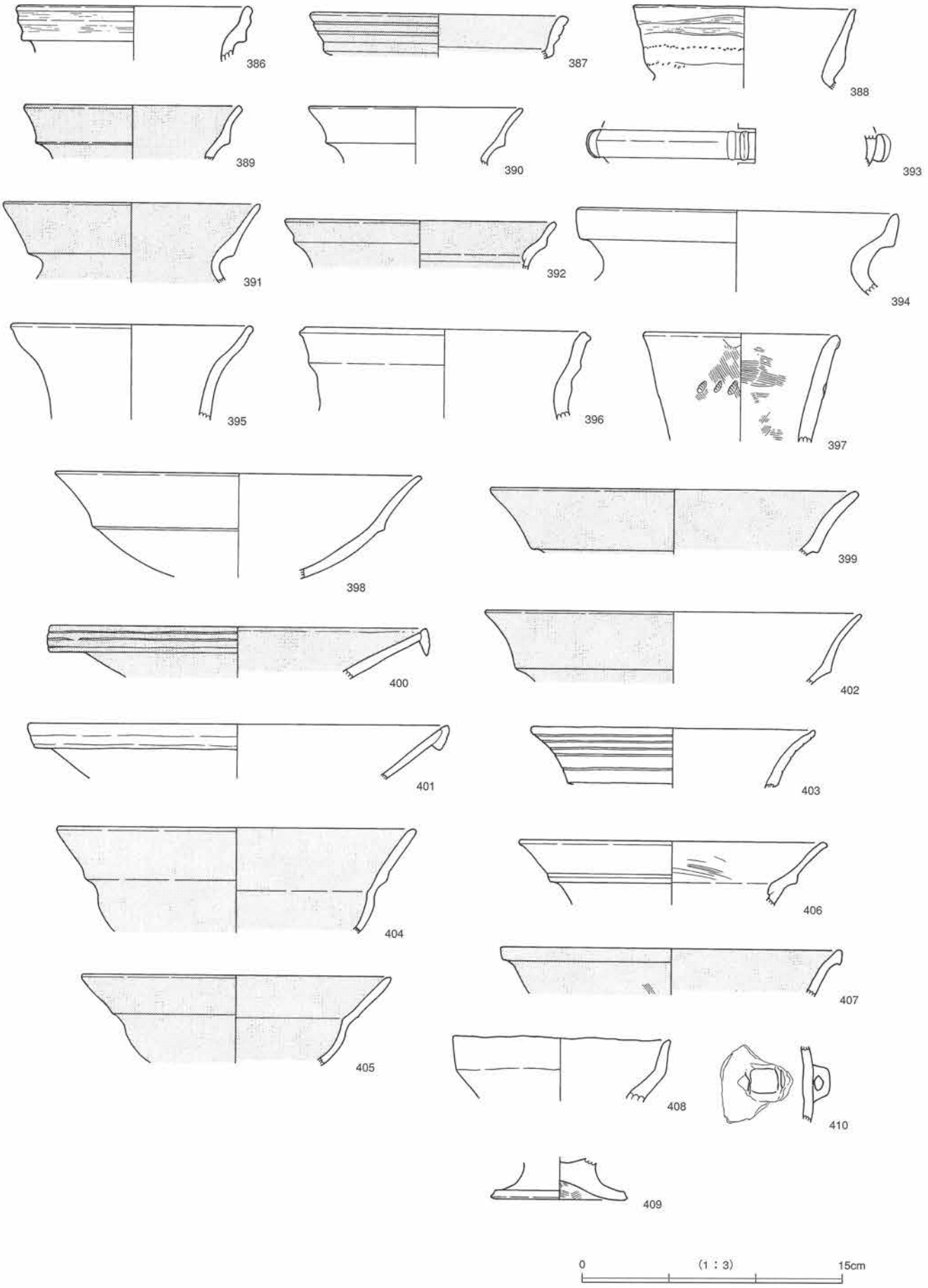
南環濠（6）


325
326
327
328
329
330
331
332
333
334
335
336
337
338
339
340
341
342
343
344
345
346
347
348
349
350
351
0
(1：3)
15cm

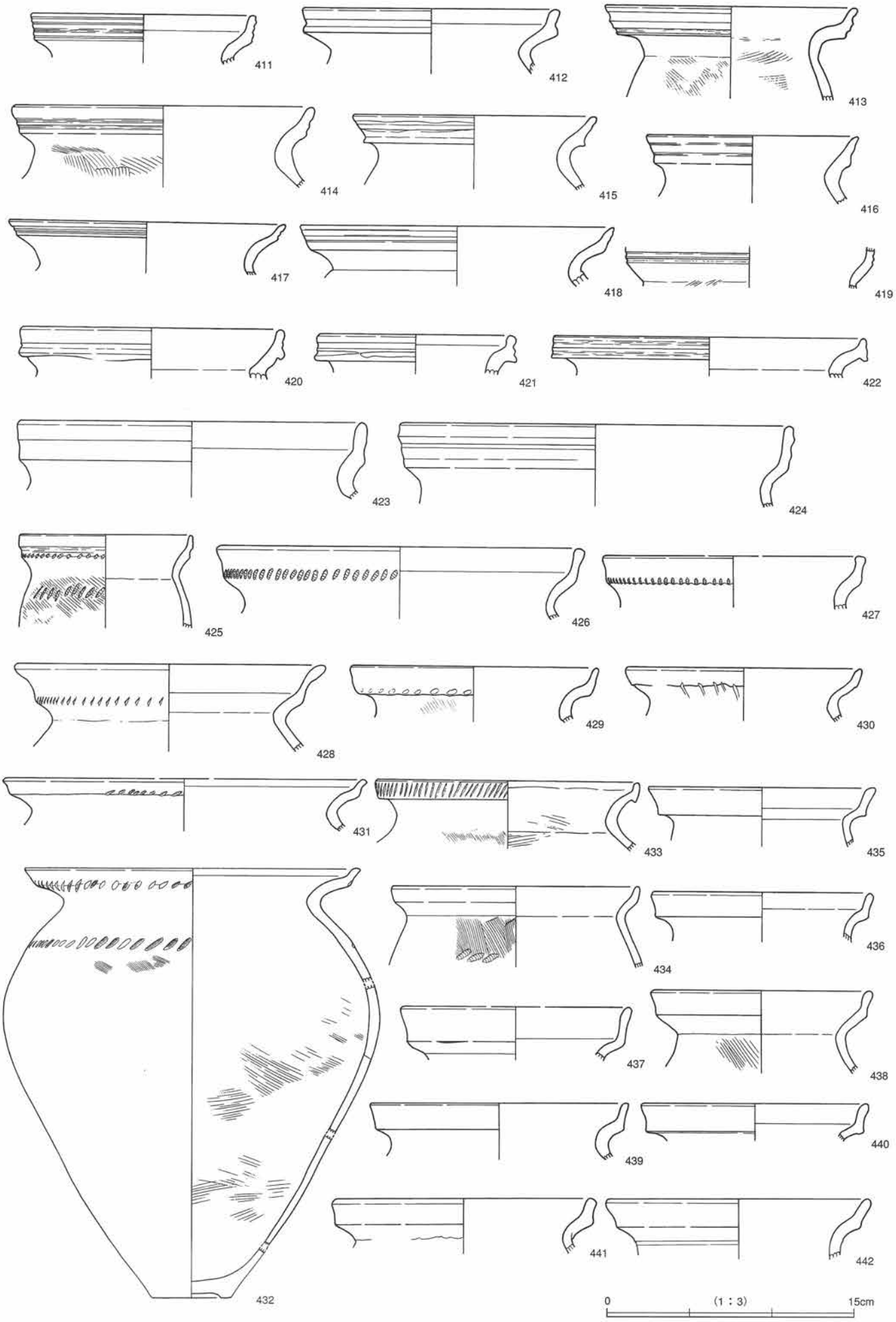
北環濠（1）


352
353
354
355
356
357
358
359
360
361
362
363
364
365
366
367
368
369
370
371
372
373
374
375
376
377
378
379
380
381
382
383
384
385
0
(1：3)
15cm

北環濠（2）

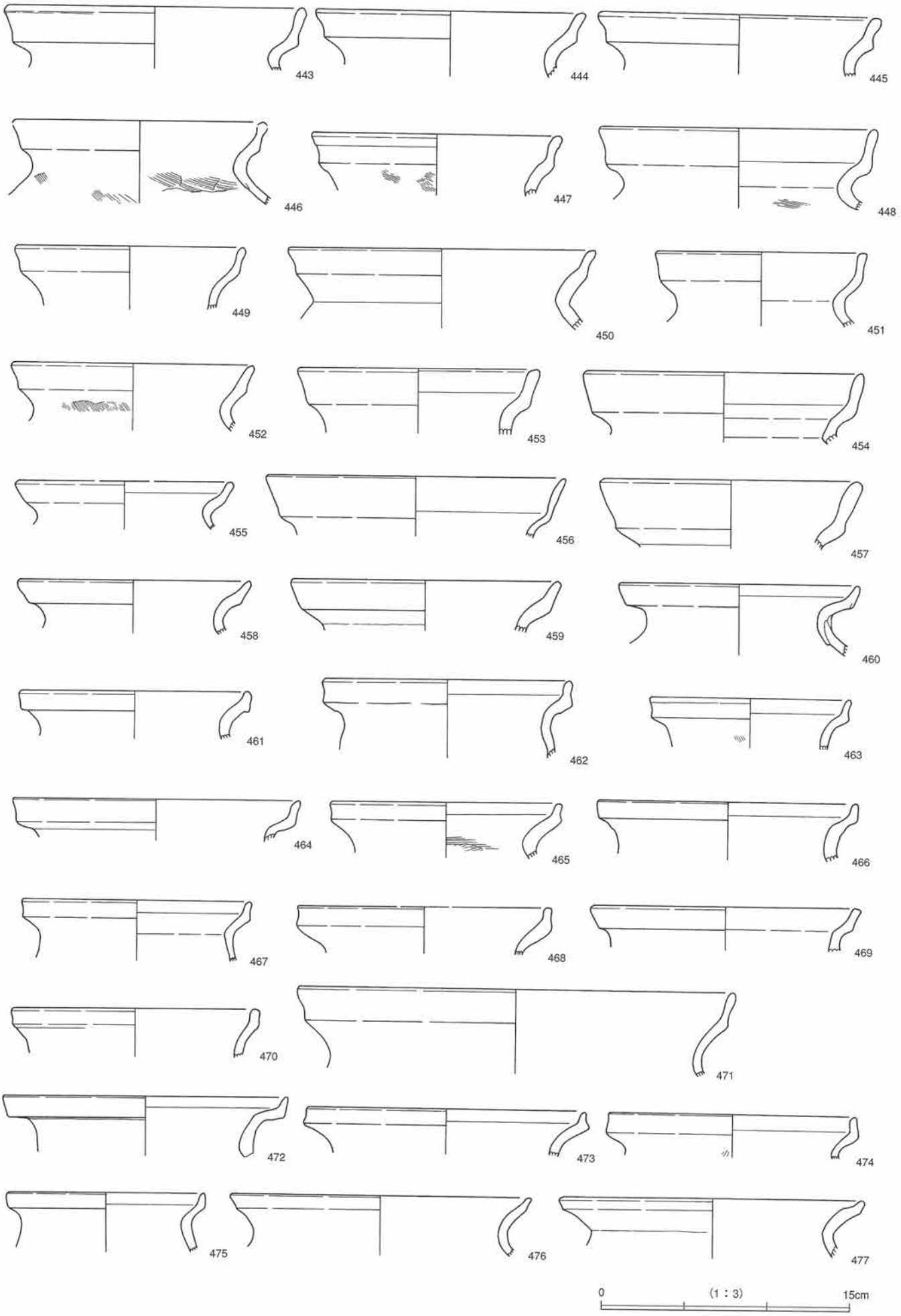

386
387
388
389
390
393
391
392
394
395
396
397
398
399
400
402
401
403
404
406
407
405
408
410
409
0
(1：3)
15cm

主丘Ⅱ層（1）

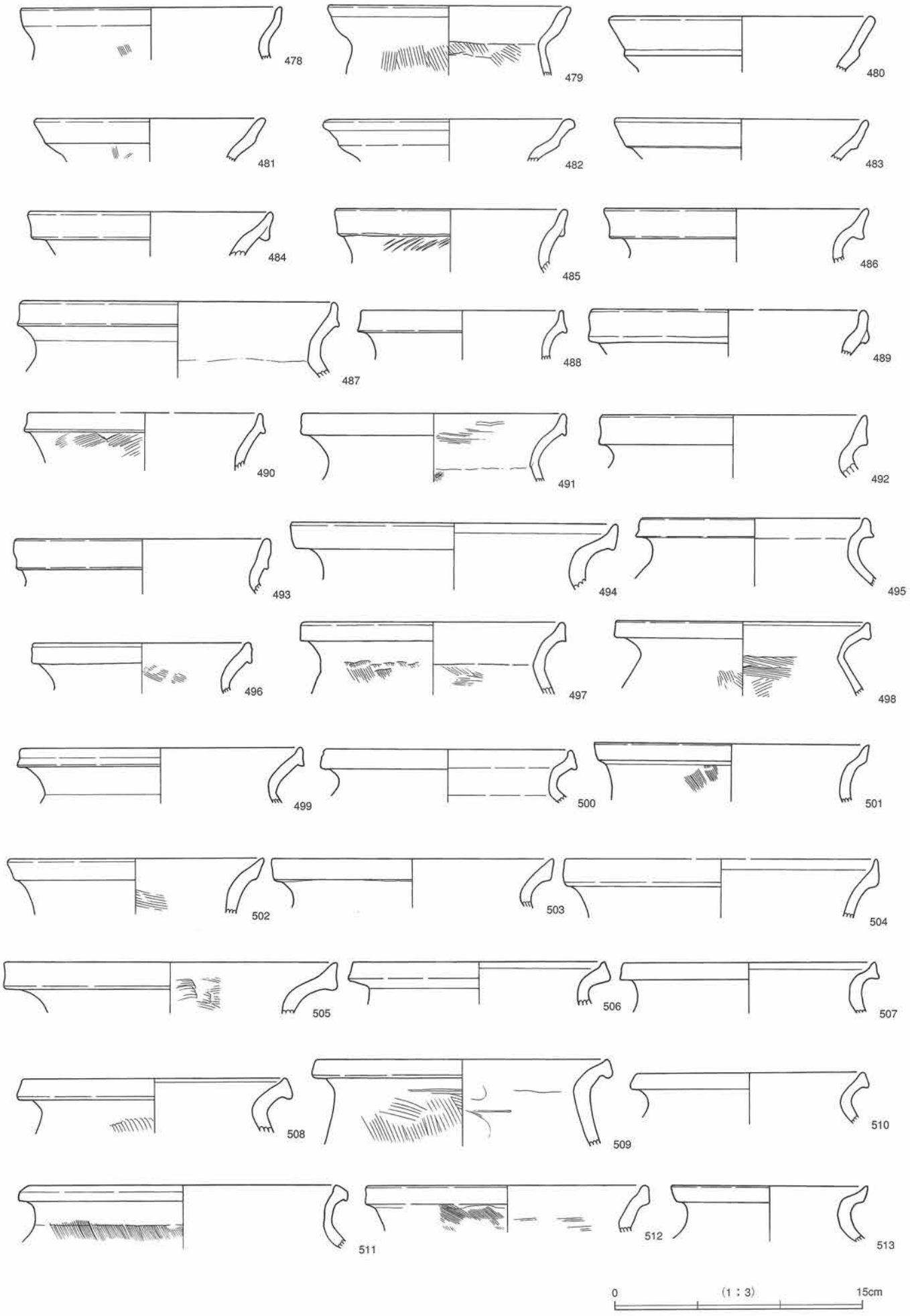

411
412
413
414
415
416
417
418
419
420
421
422
423
424
425
426
427
428
429
430
431
432
433
434
435
436
437
438
439
440
441
442
0
(1：3)
15cm

弥生時代後期の土器実測図（17）

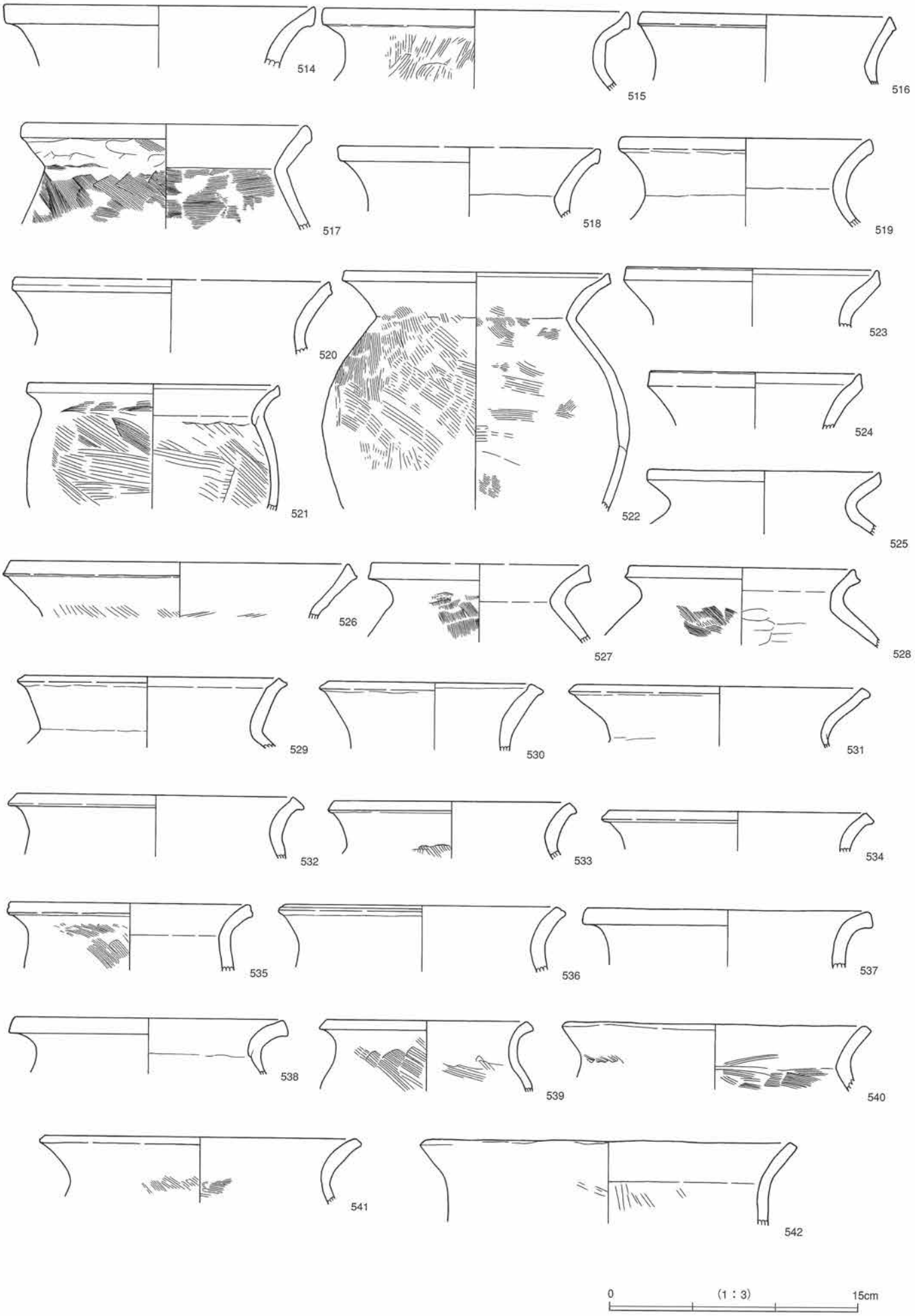
主丘Ⅱ層（2）



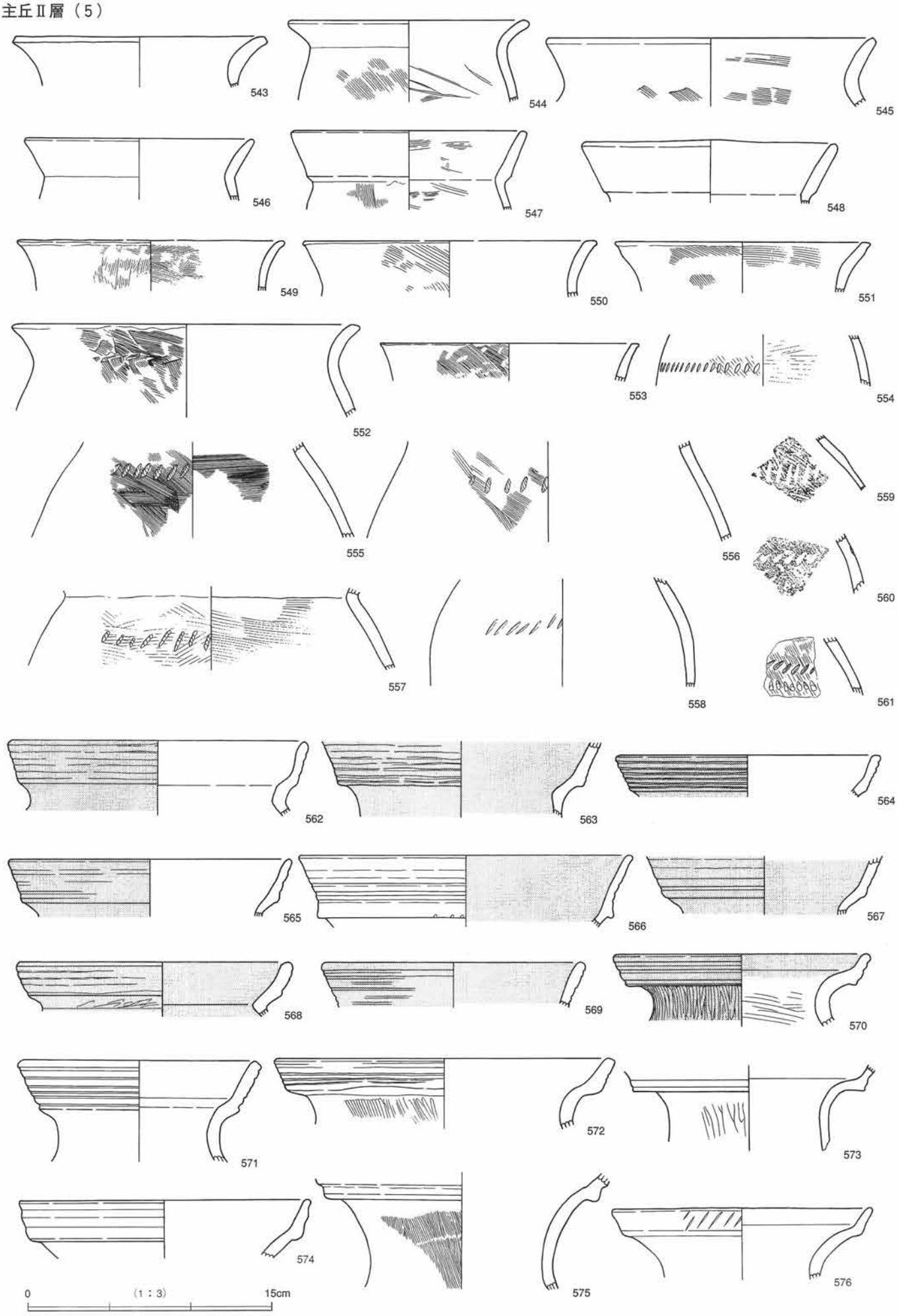
主丘Ⅱ層（3）


478
479
480
481
482
483
484
485
486
487
488
489
490
491
492
493
494
495
496
497
498
499
500
501
502
503
504
505
506
507
508
509
510
511
512
513
0
(1：3)
15cm

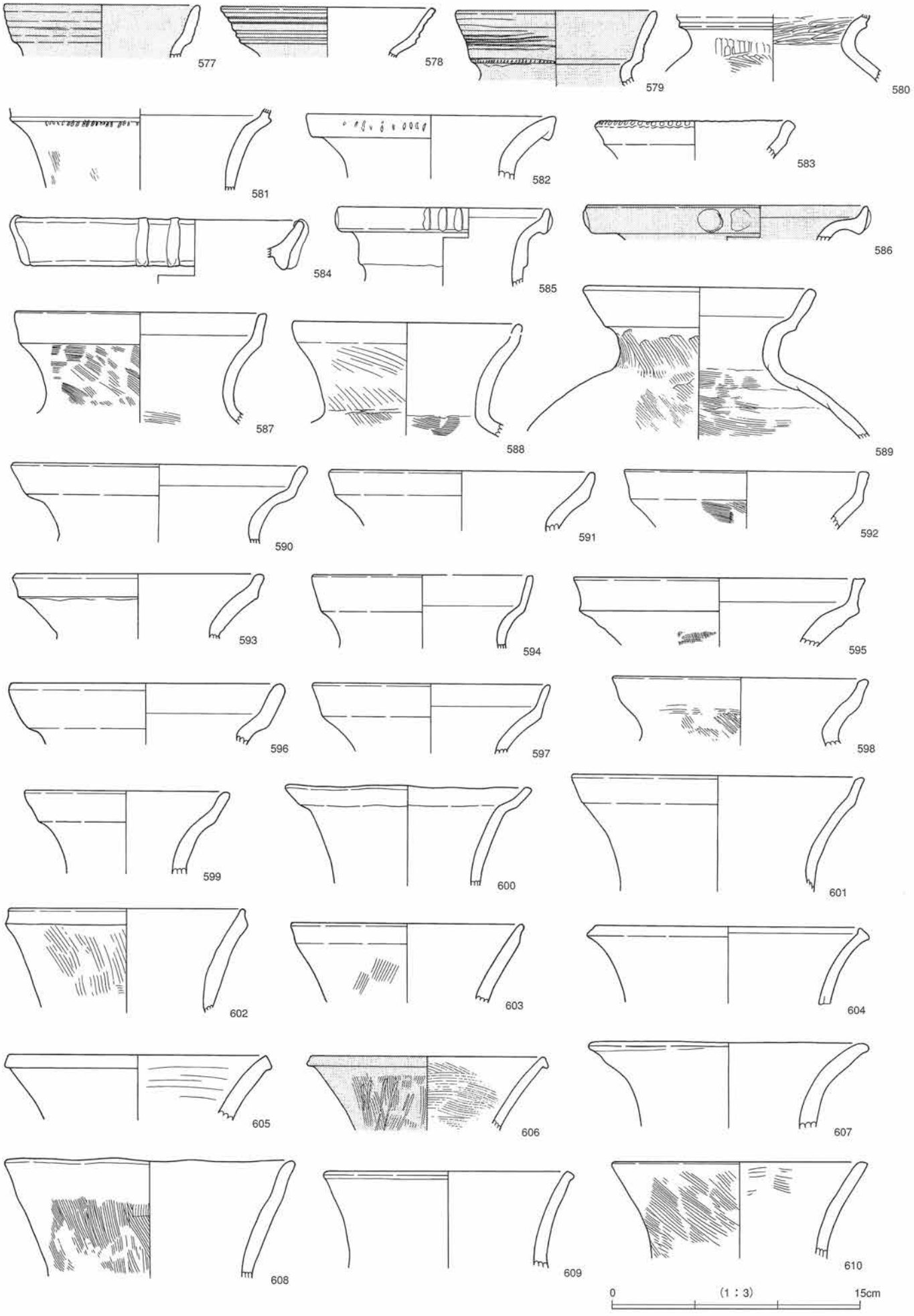
主丘Ⅱ層（4）


514
515
516
517
518
519
520
521
522
523
524
525
526
527
528
529
530
531
532
533
534
535
536
537
538
539
540
541
542
0
(1：3)
15cm

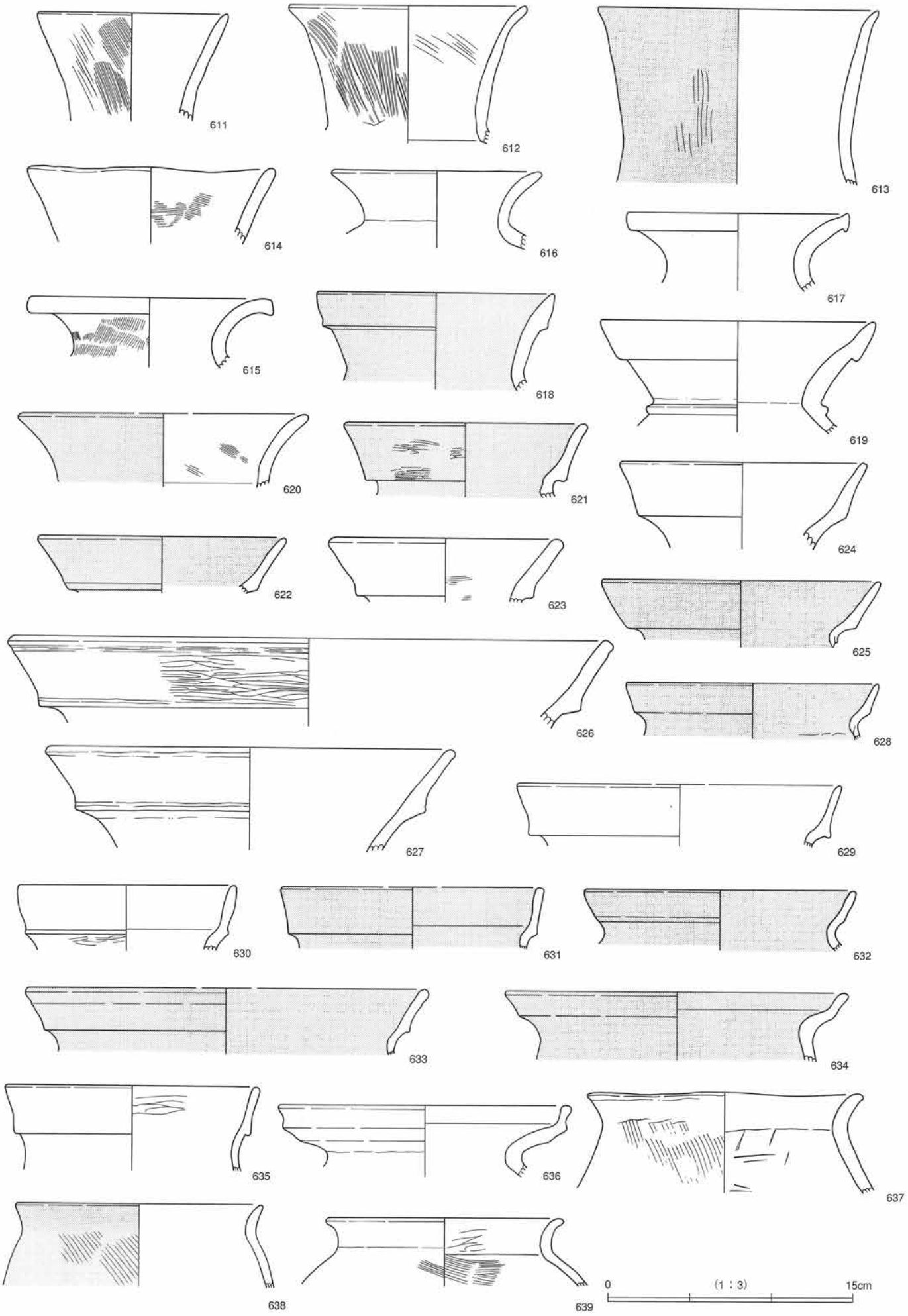
主丘Ⅱ層（5）


543
544
545
546
547
548
549
550
551
552
553
554
555
556
557
558
559
560
561
562
563
564
565
566
567
568
569
570
571
572
573
574
575
576
0
(1：3)
15cm

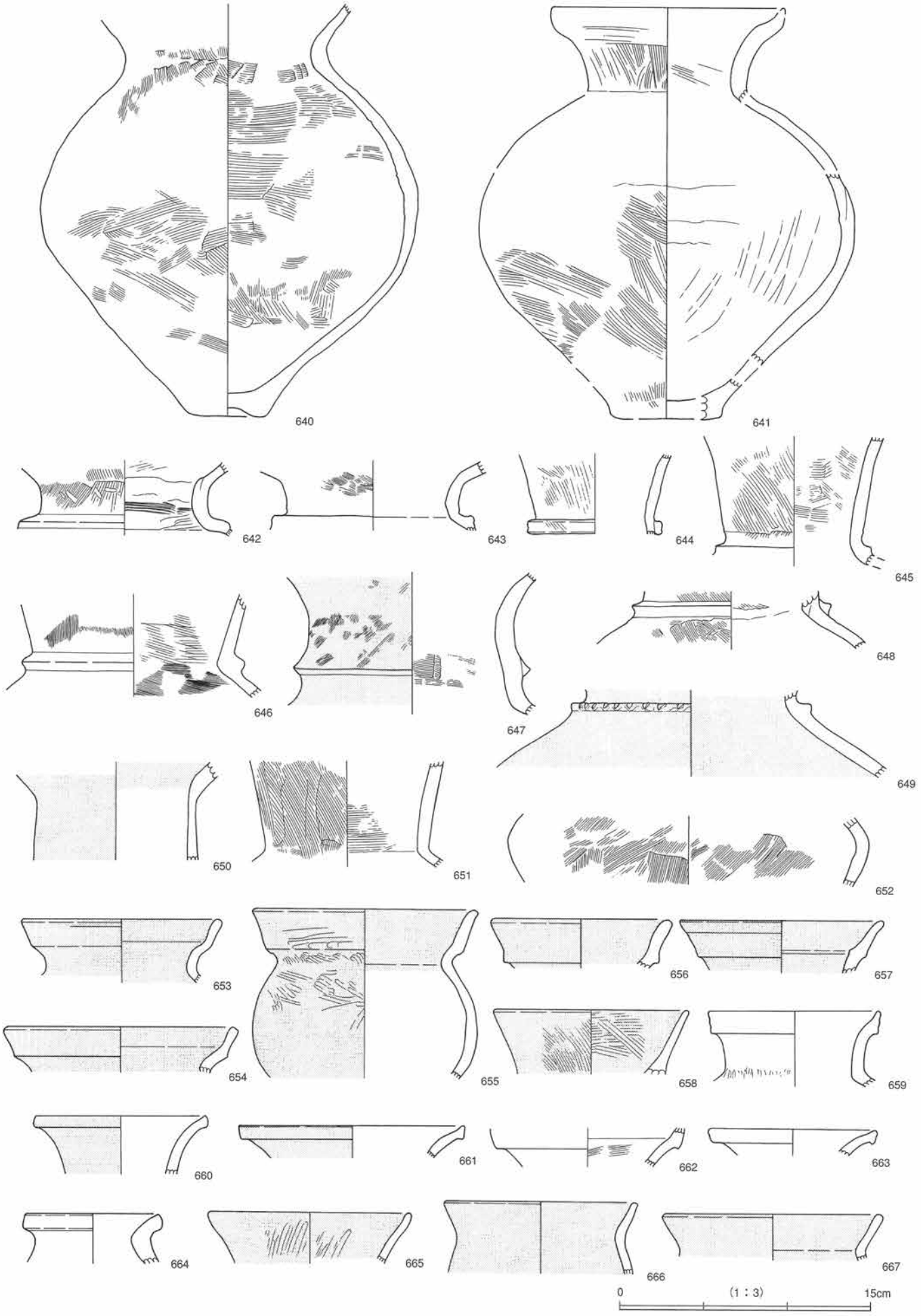
主丘Ⅱ層（6）


577
578
579
580
581
582
583
584
585
586
587
588
589
590
591
592
593
594
595
596
597
598
599
600
601
602
603
604
605
606
607
608
609
610
0
(1：3)
15cm

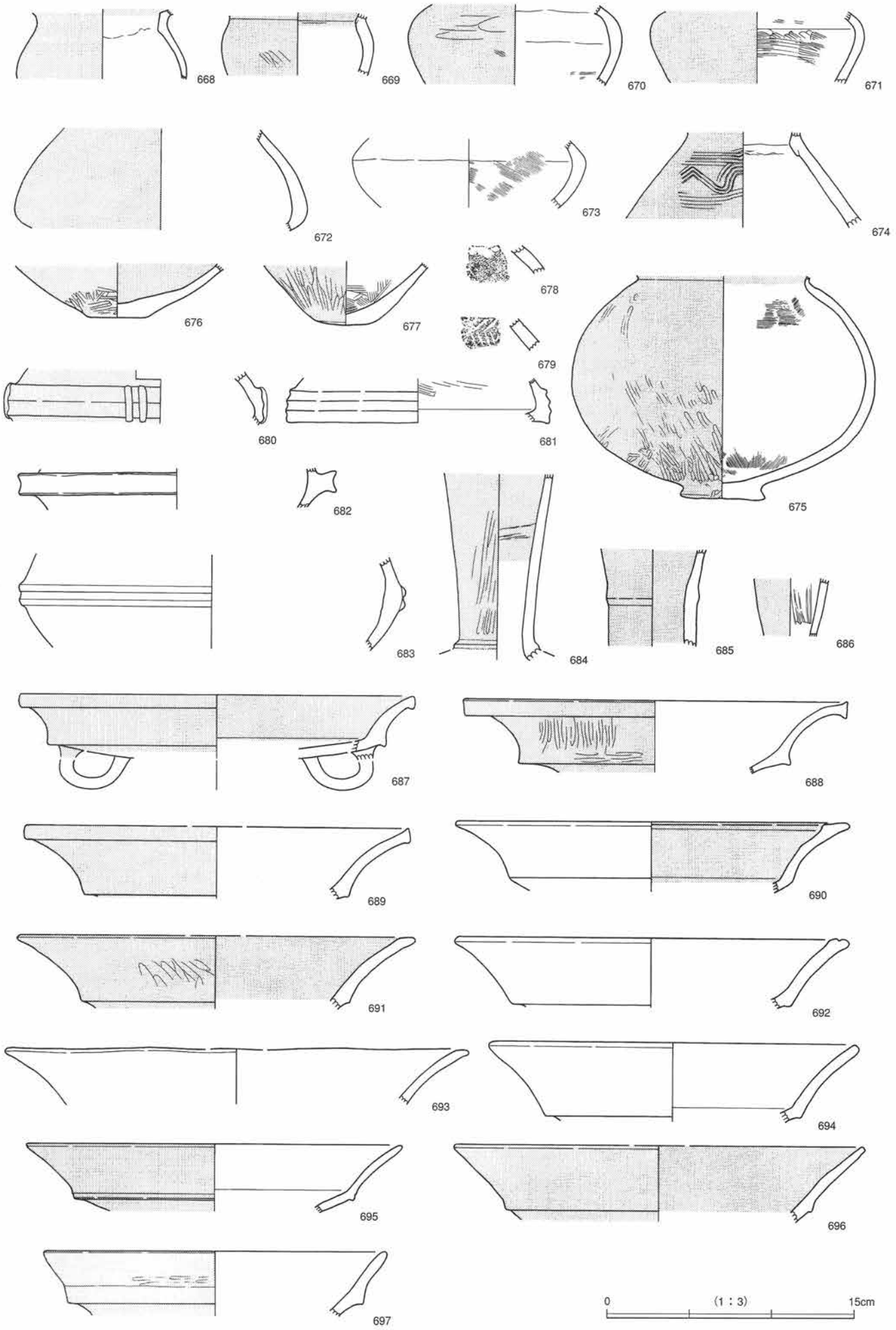
主丘Ⅱ層（7）


611
612
613
614
616
617
615
618
619
620
621
624
622
623
625
626
628
627
629
630
631
632
633
634
635
636
637
638
639
0
(1：3)
15cm

主丘Ⅱ層（8）

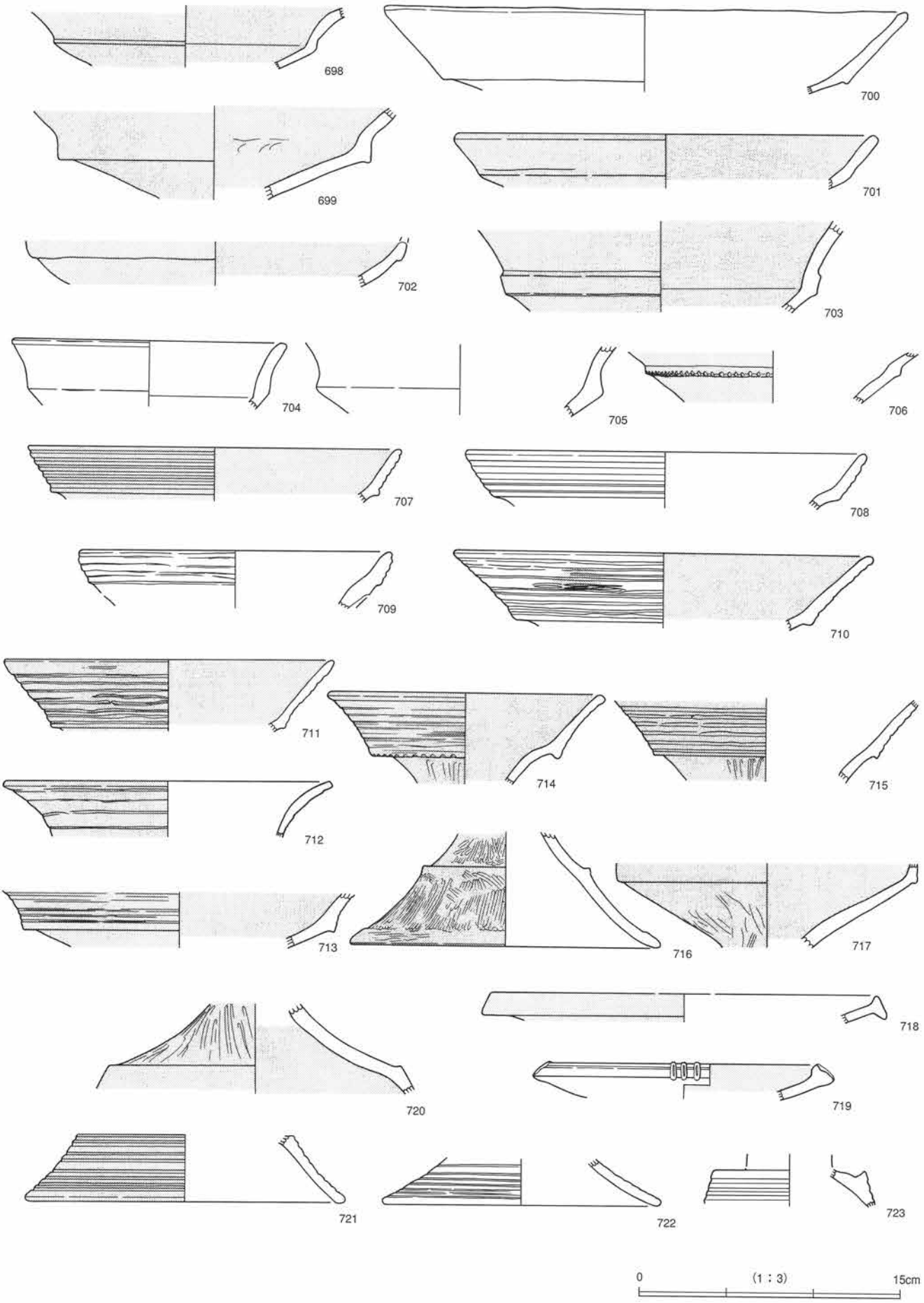

640
641
642
643
644
645
646
647
648
649
650
651
652
653
654
655
656
657
658
659
660
661
662
663
664
665
666
667
0
(1：3)
15cm

主丘Ⅱ層（9）

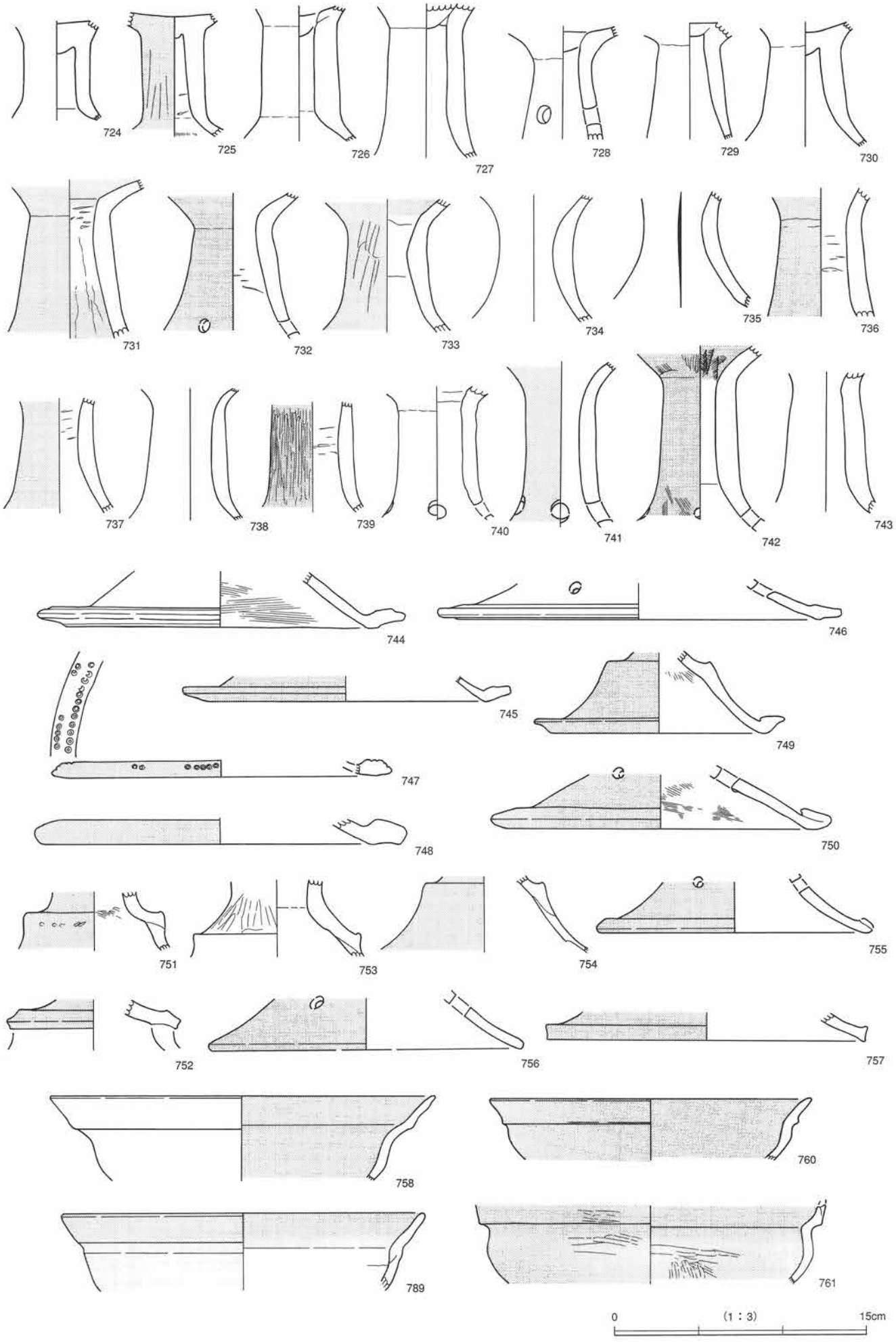

668
669
670
671
672
673
674
676
677
678
679
680
681
682
675
683
684
685
686
687
688
689
690
691
692
693
694
695
696
697
0
(1：3)
15cm

弥生時代後期の土器実測図（25）

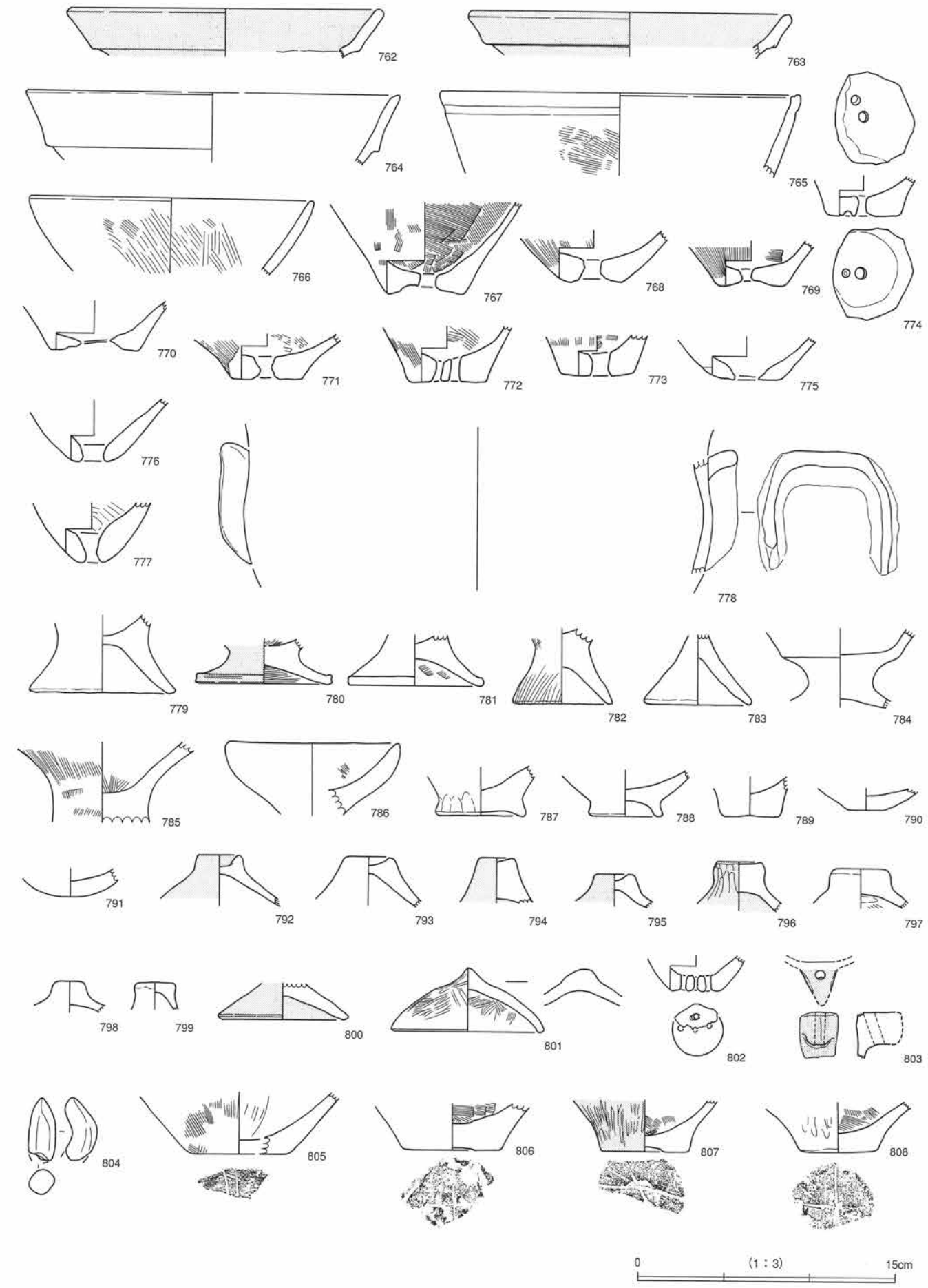
主丘Ⅱ層（10）



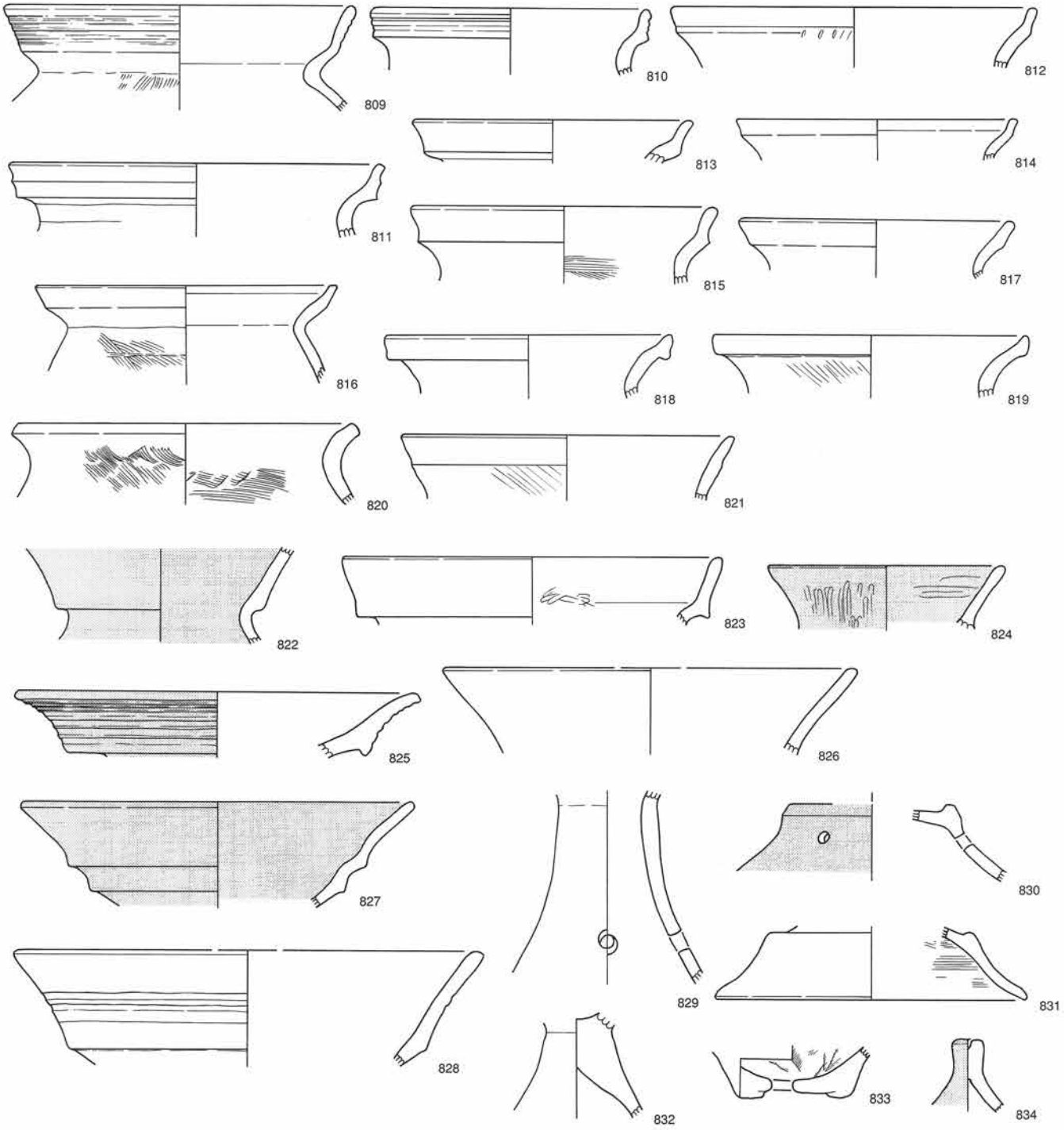
主丘Ⅱ層（11）


724
725
726
727
728
729
730
731
732
733
734
735
736
737
738
739
740
741
742
743
744
745
746
747
748
749
750
751
752
753
754
755
756
757
758
760
761
789
0
(1：3)
15cm

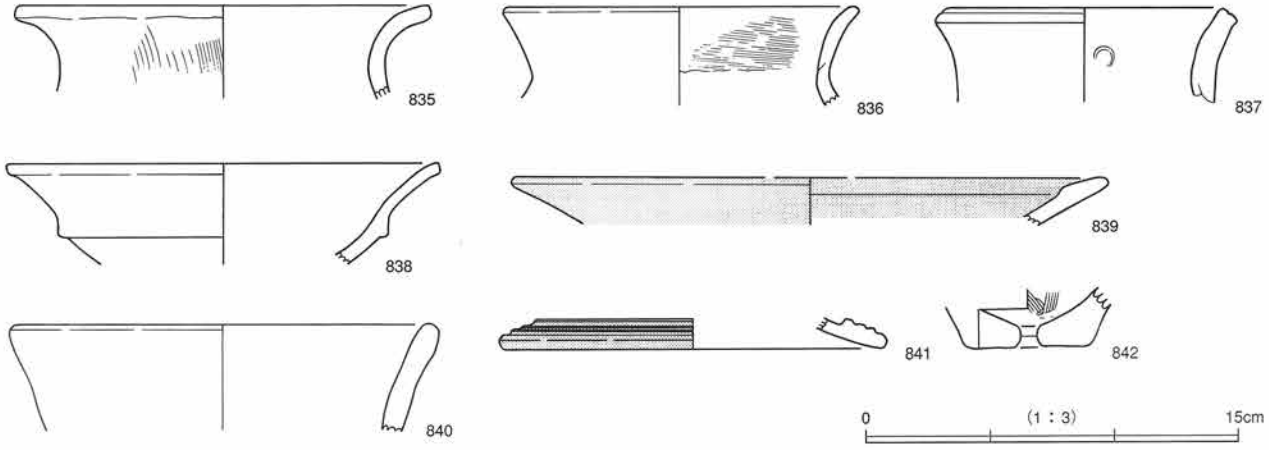
主丘Ⅱ層（12）


762
763
764
765
766
767
768
769
770
771
772
773
774
775
776
777
778
779
780
781
782
783
784
785
786
787
788
789
790
791
792
793
794
795
796
797
798
799
800
801
802
803
804
805
806
807
808
0
(1：3)
15cm

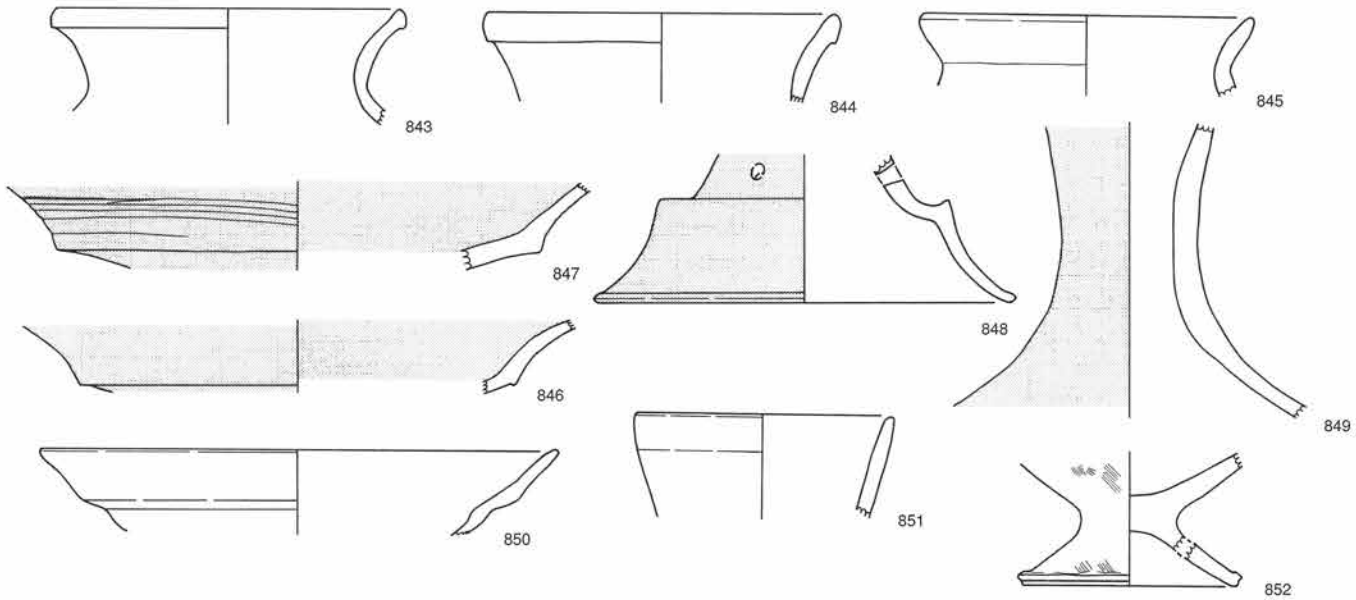
主丘・Ⅱ層以外（809～834）



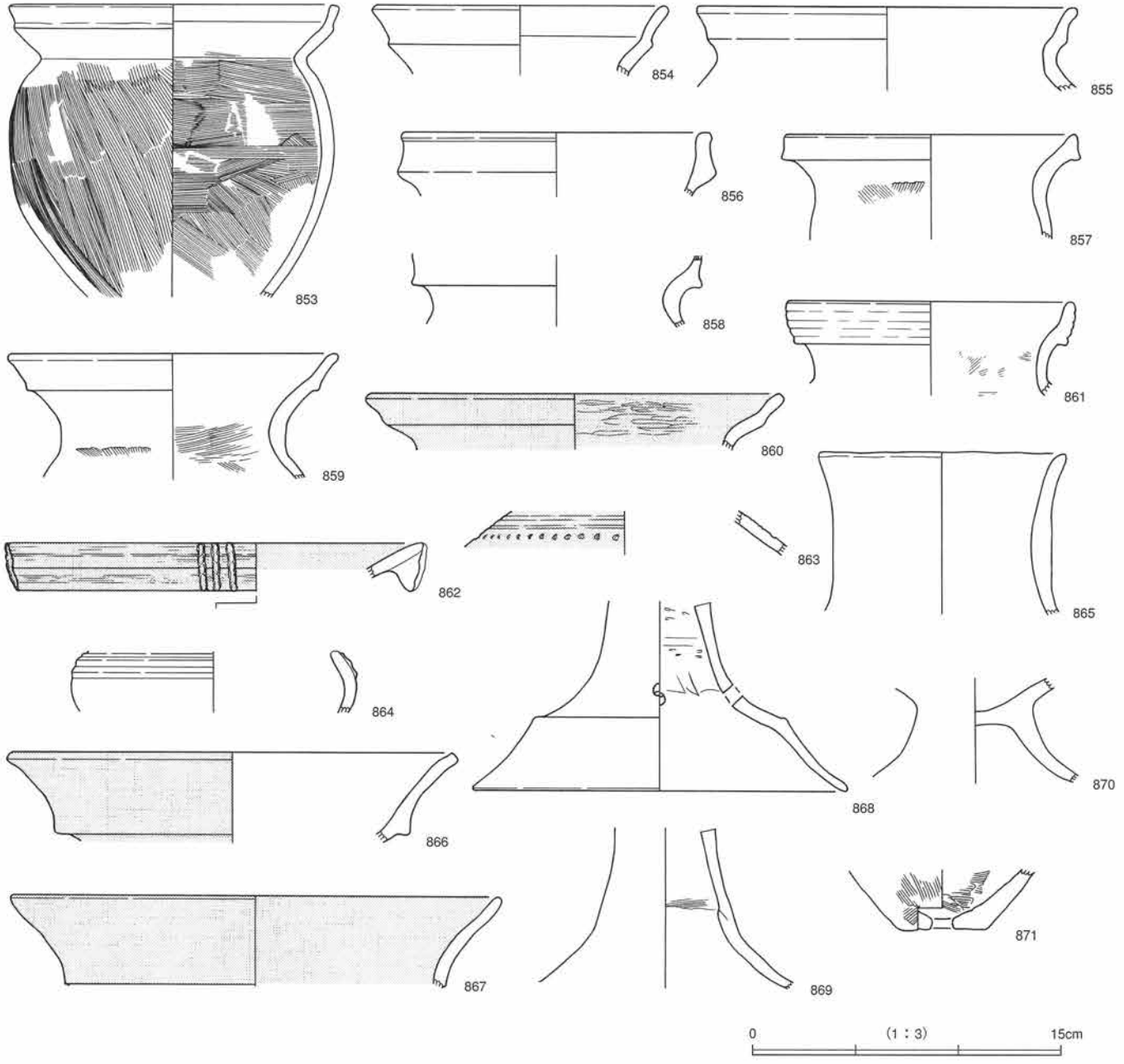
主丘斜面（835～842）

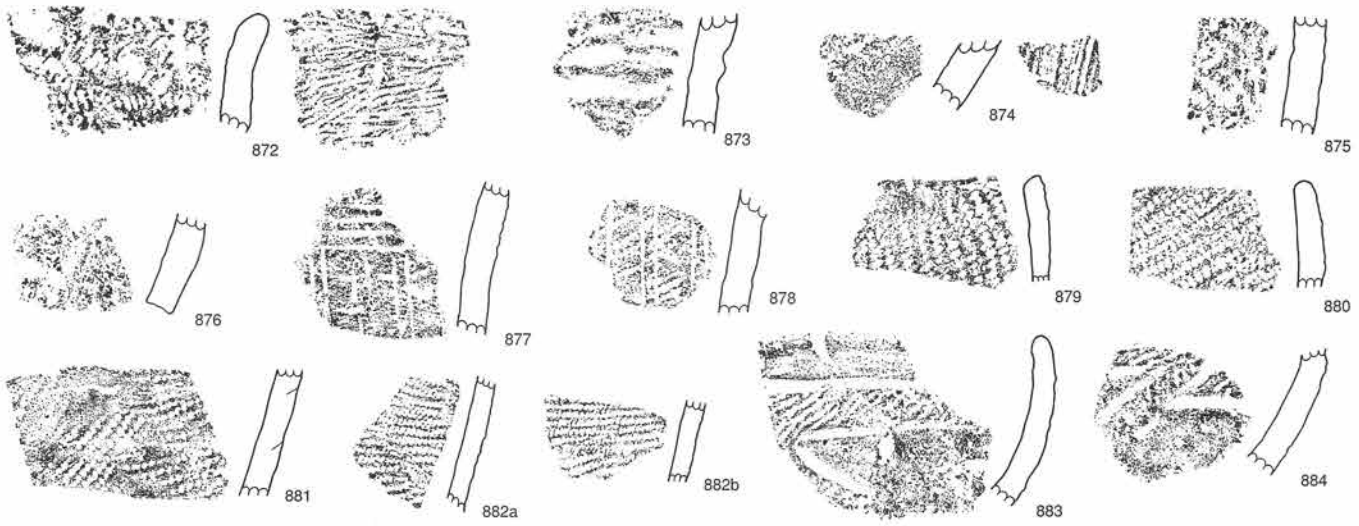


南環濠下ー東小谷（843～852）

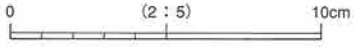


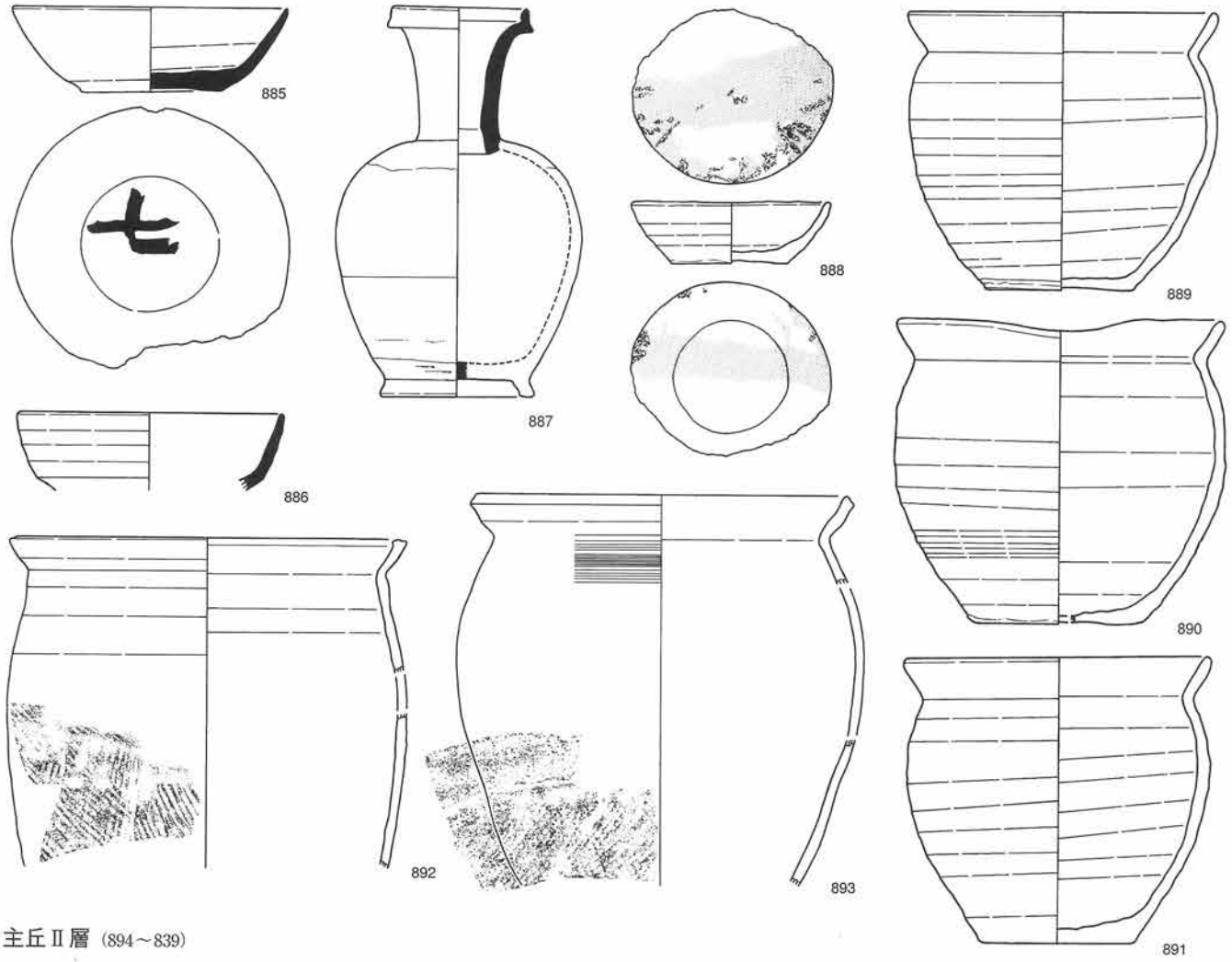
南環濠下ー西小谷（853～871）



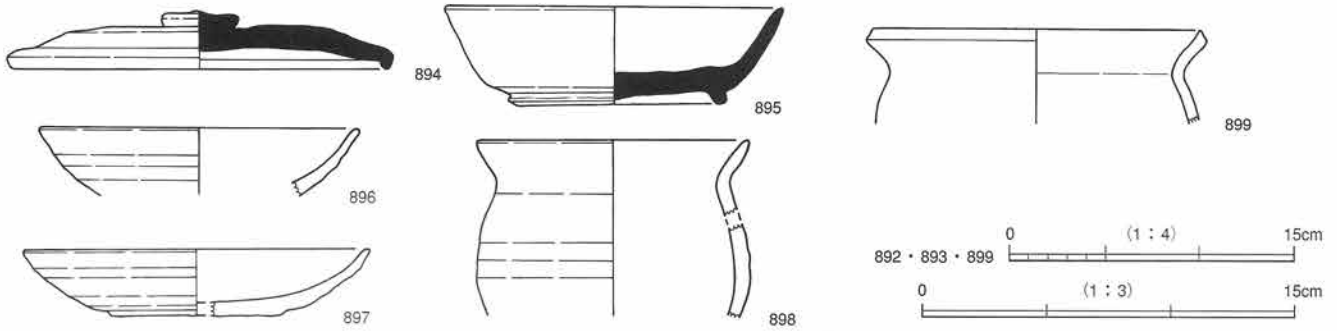


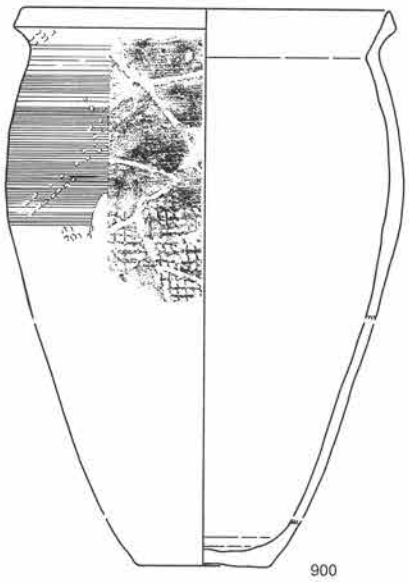
H１号竪穴（885～893）

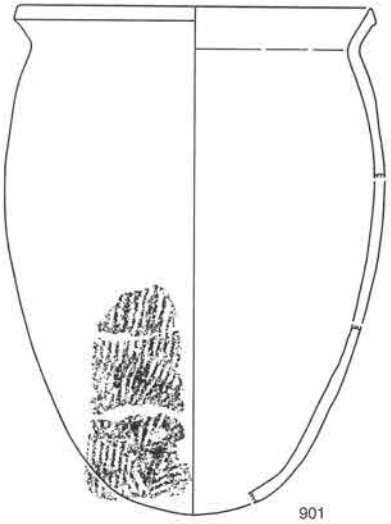


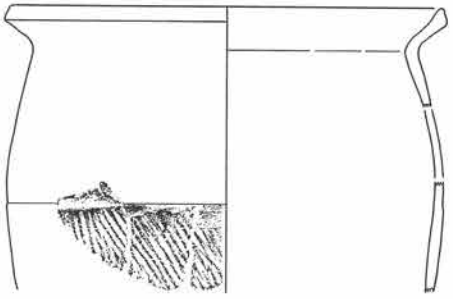


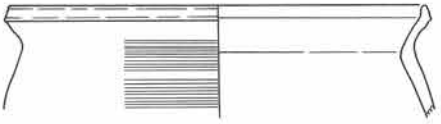
主丘Ⅱ層（894～839）

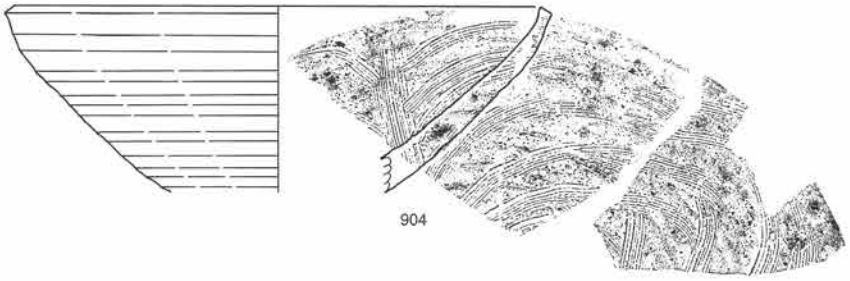


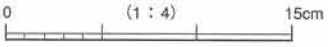

900


901

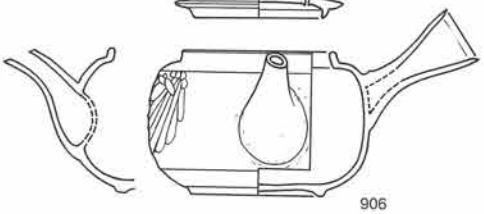

902

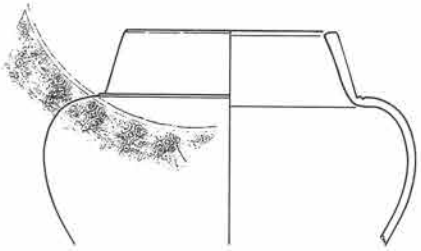

903

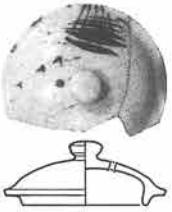

904

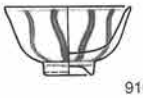


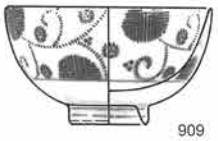
905

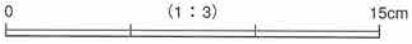

906


908

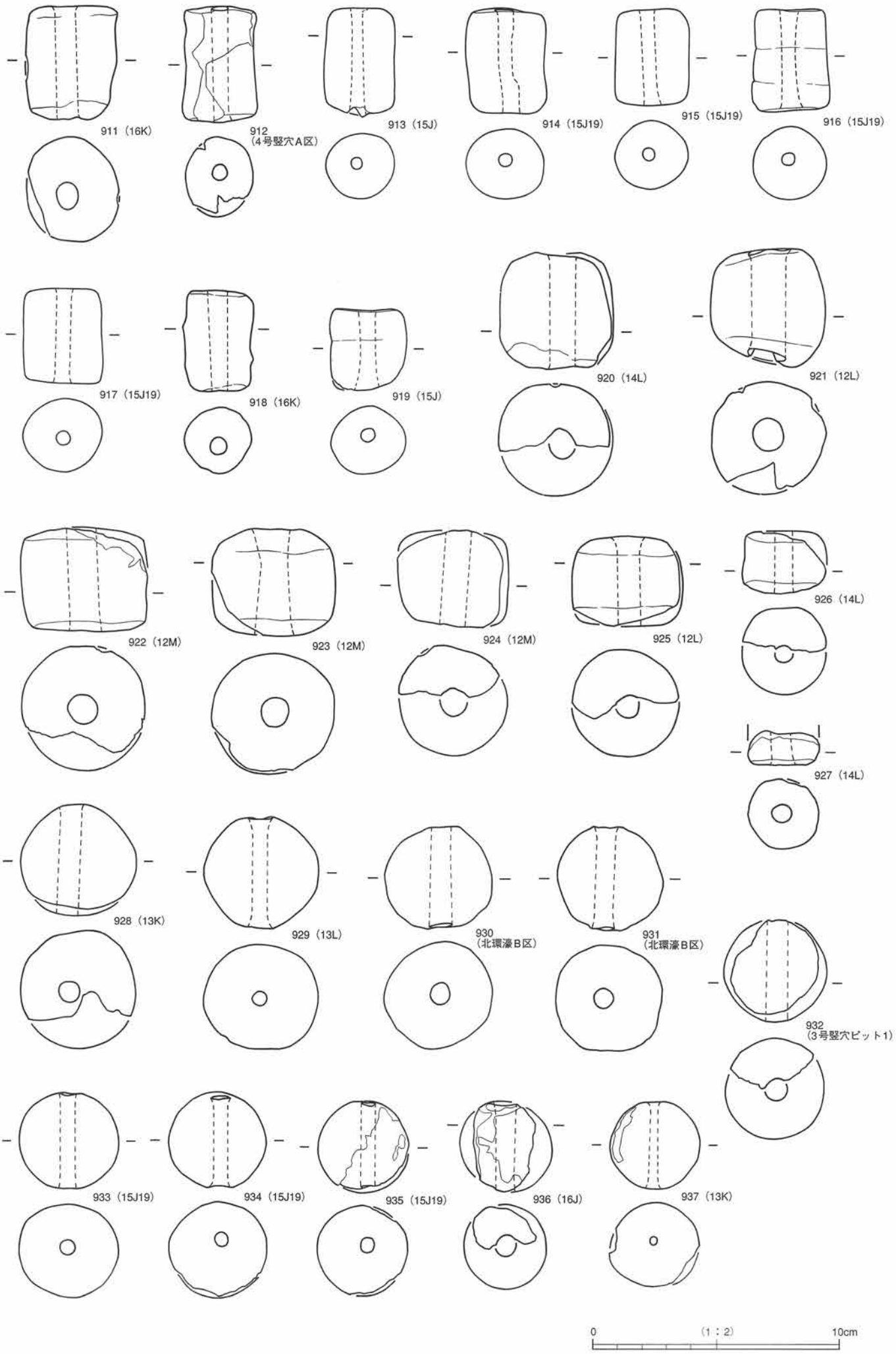

907

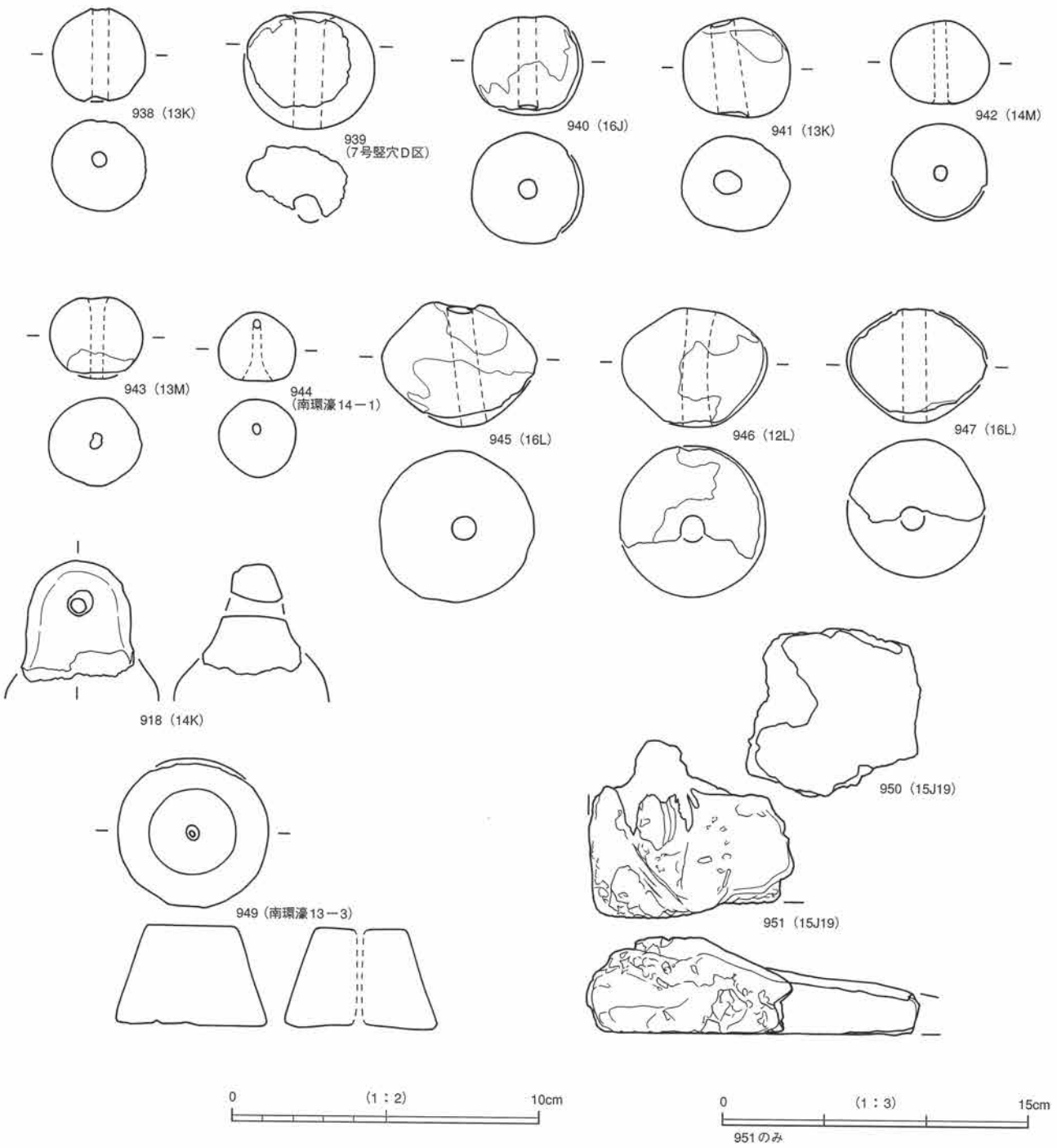

910


909

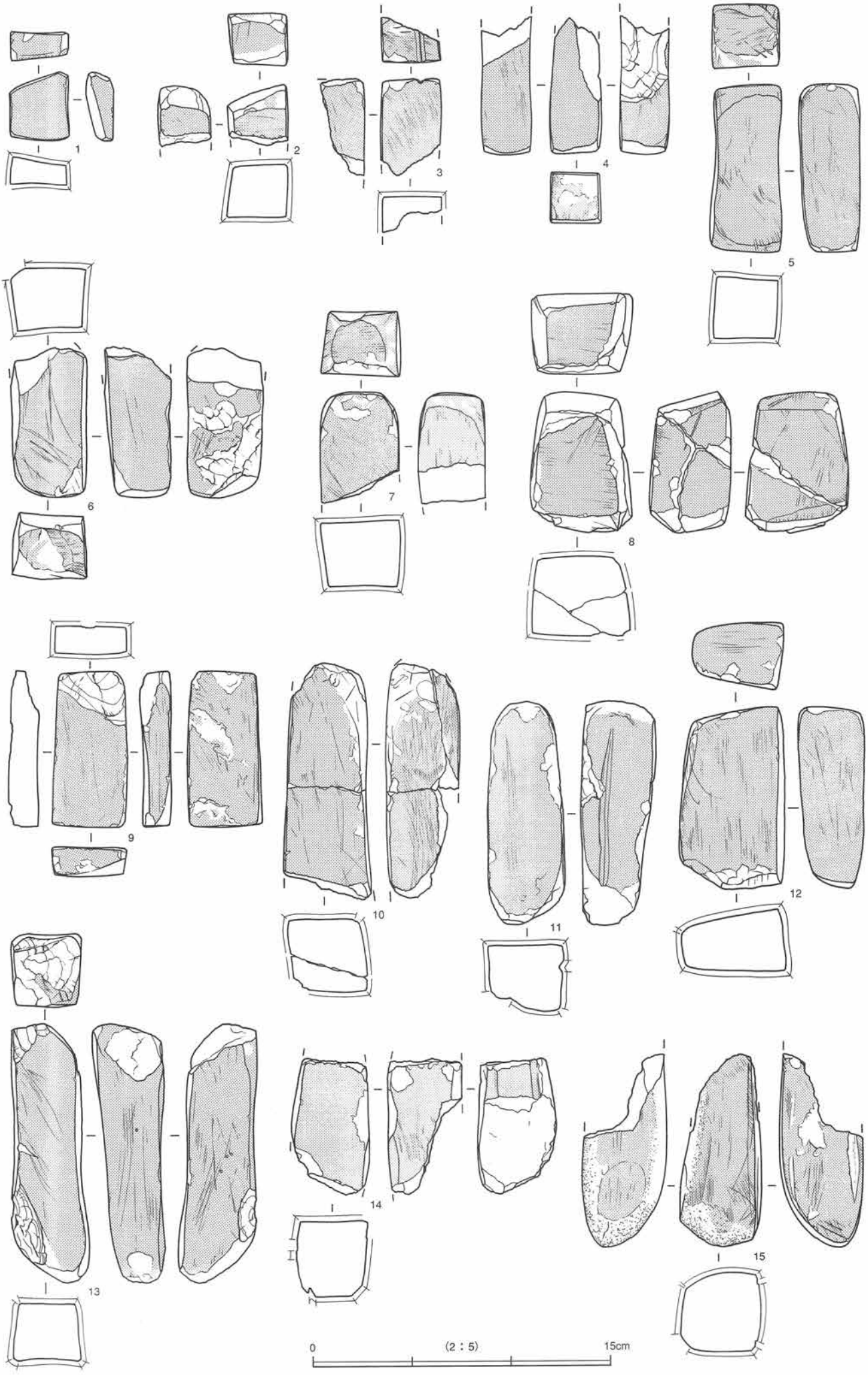


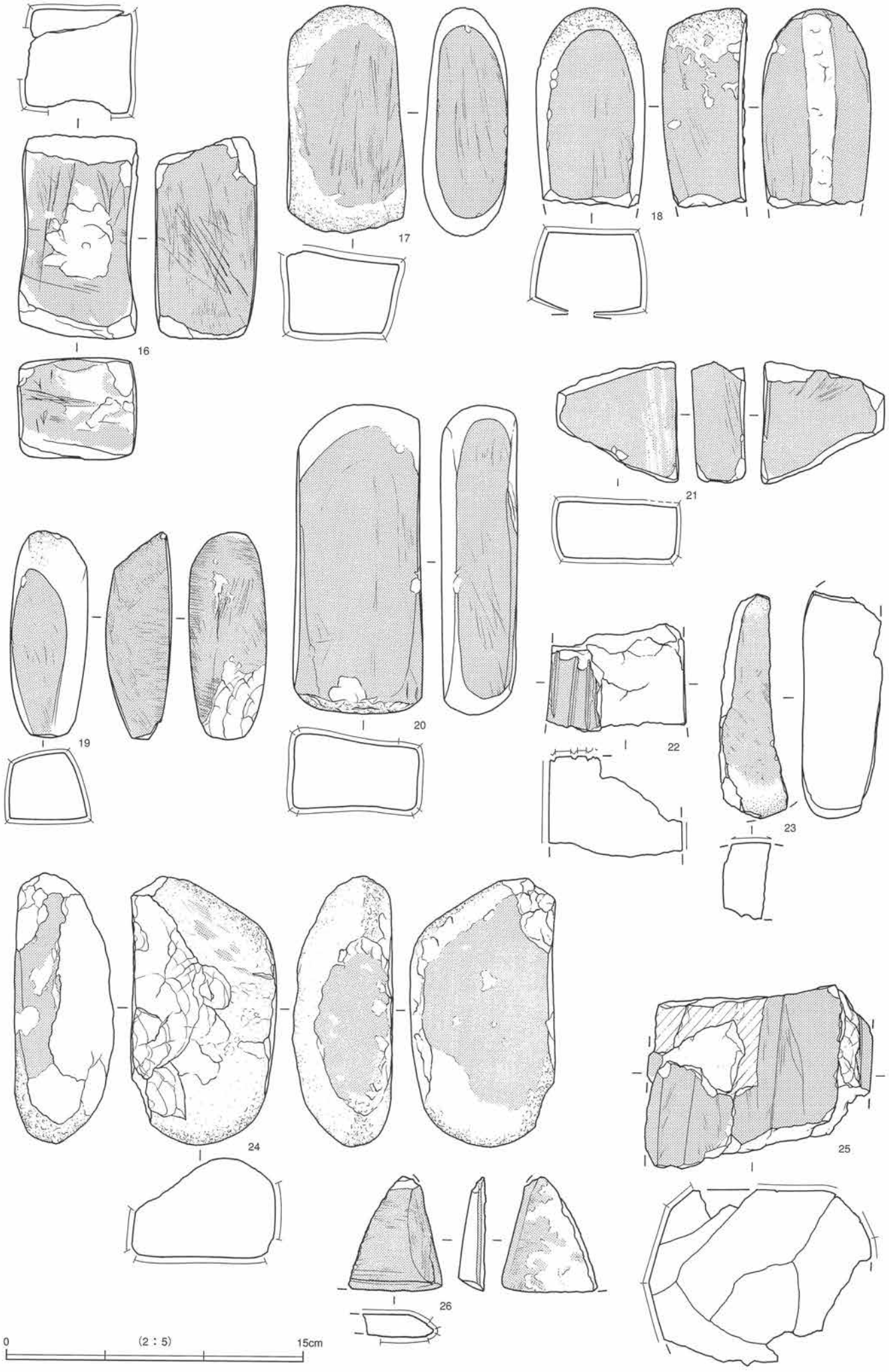
土製品実測図（1）


911（16K）
912
（4号竪穴A区）
913（15J）
914（15J19）
915（15J19）
916（15J19）
917（15J19）
918（16K）
919（15J）
920（14L）
921（12L）
922（12M）
923（12M）
924（12M）
925（12L）
926（14L）
927（14L）
928（13K）
929（13L）
930
（北環濠B区）
931
（北環濠B区）
932
（3号竪穴ピット1）
933（15J19）
934（15J19）
935（15J19）
936（16J）
937（13K）
0
（1：2）
10cm

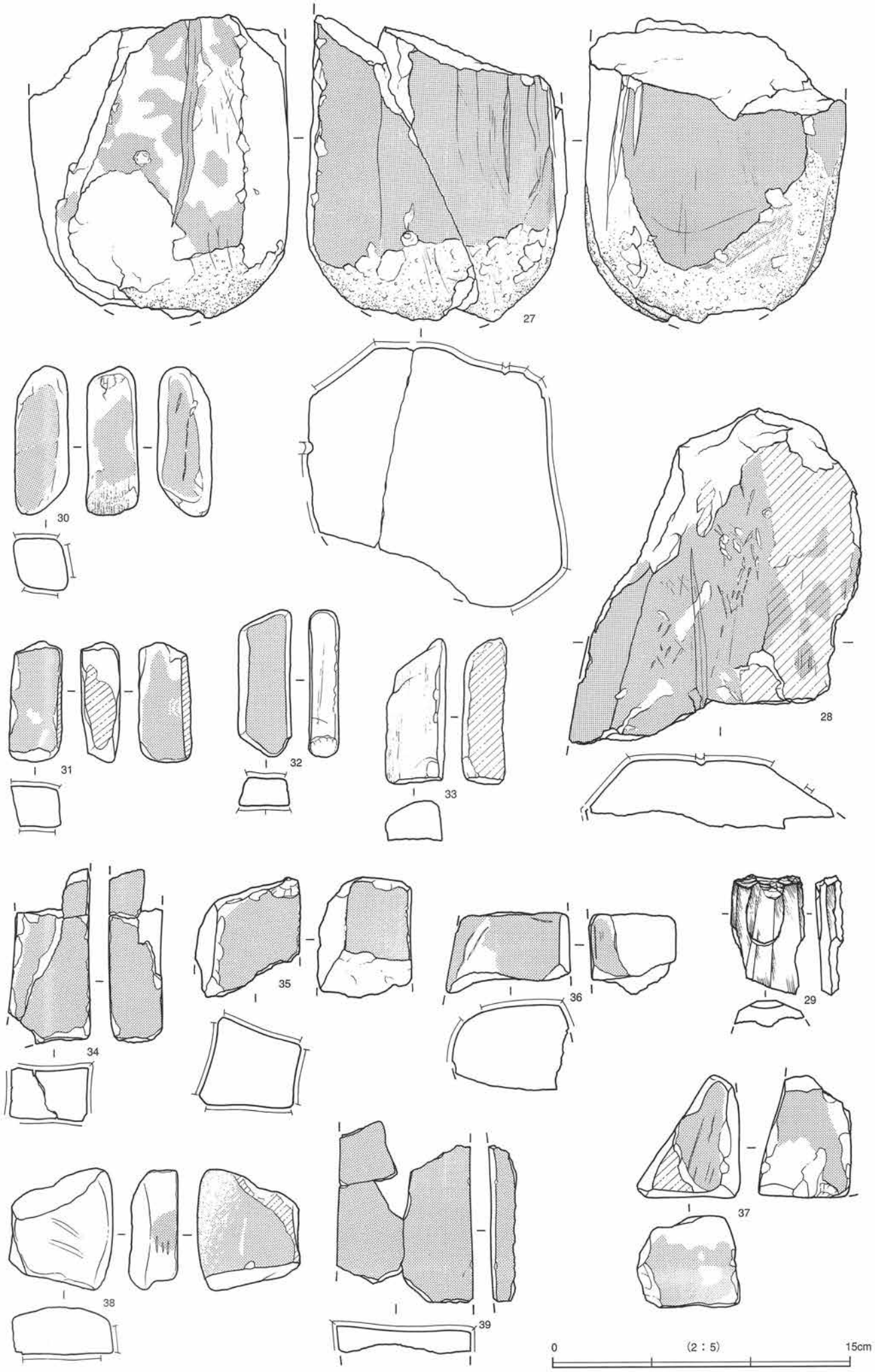

938（13K）
939
（7号竪穴D区）
940（16J）
941（13K）
942（14M）
943（13M）
944
（南環濠14－1）
945（16L）
946（12L）
947（16L）
918（14K）
949（南環濠13－3）
950（15J19）
951（15J19）
0
（1：2）
10cm
0
（1：3）
15cm
951のみ

石器・石製品実測図（1）

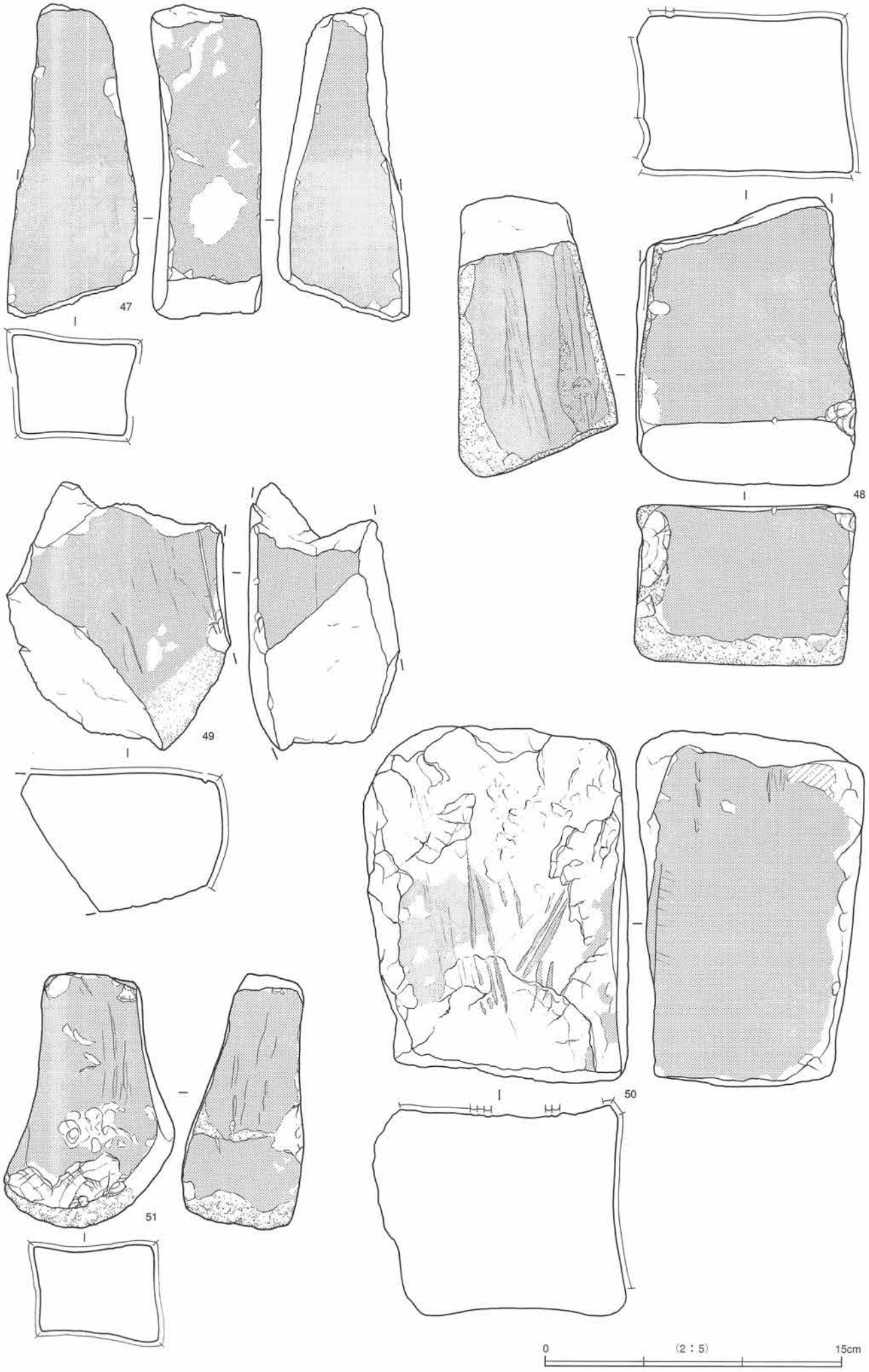


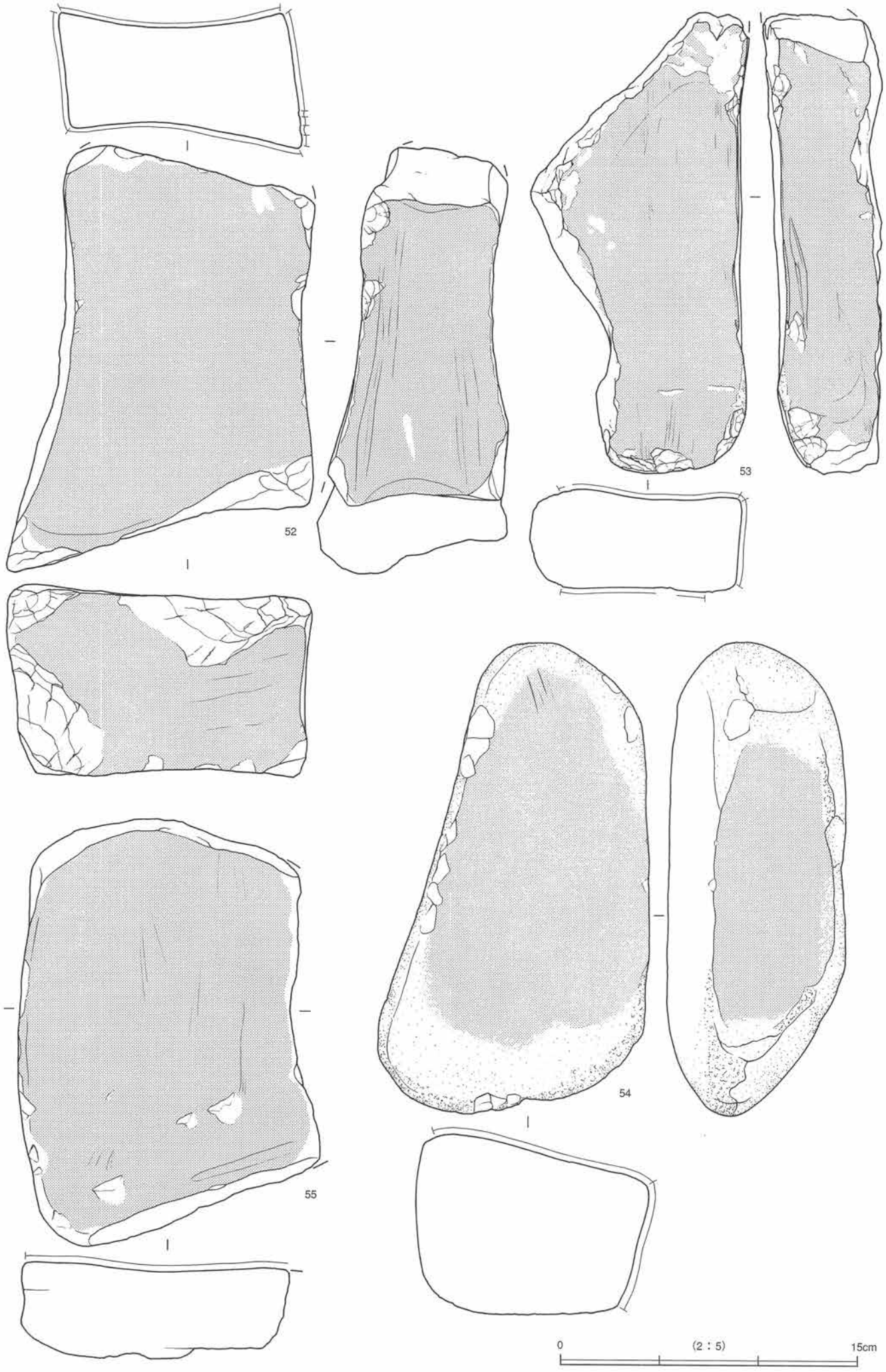

16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
0
(2：5)
15cm

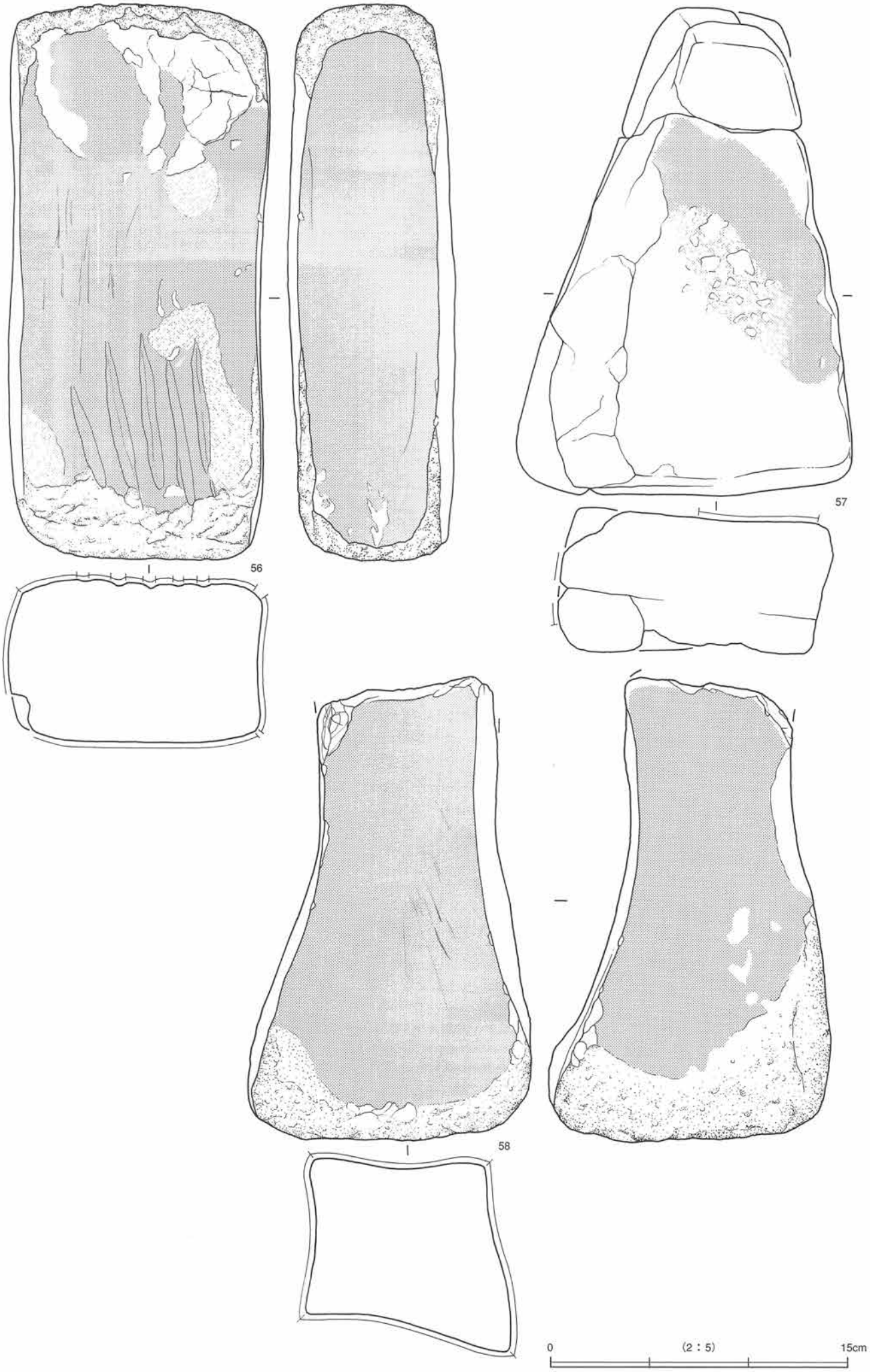
石器・石製品実測図（3）

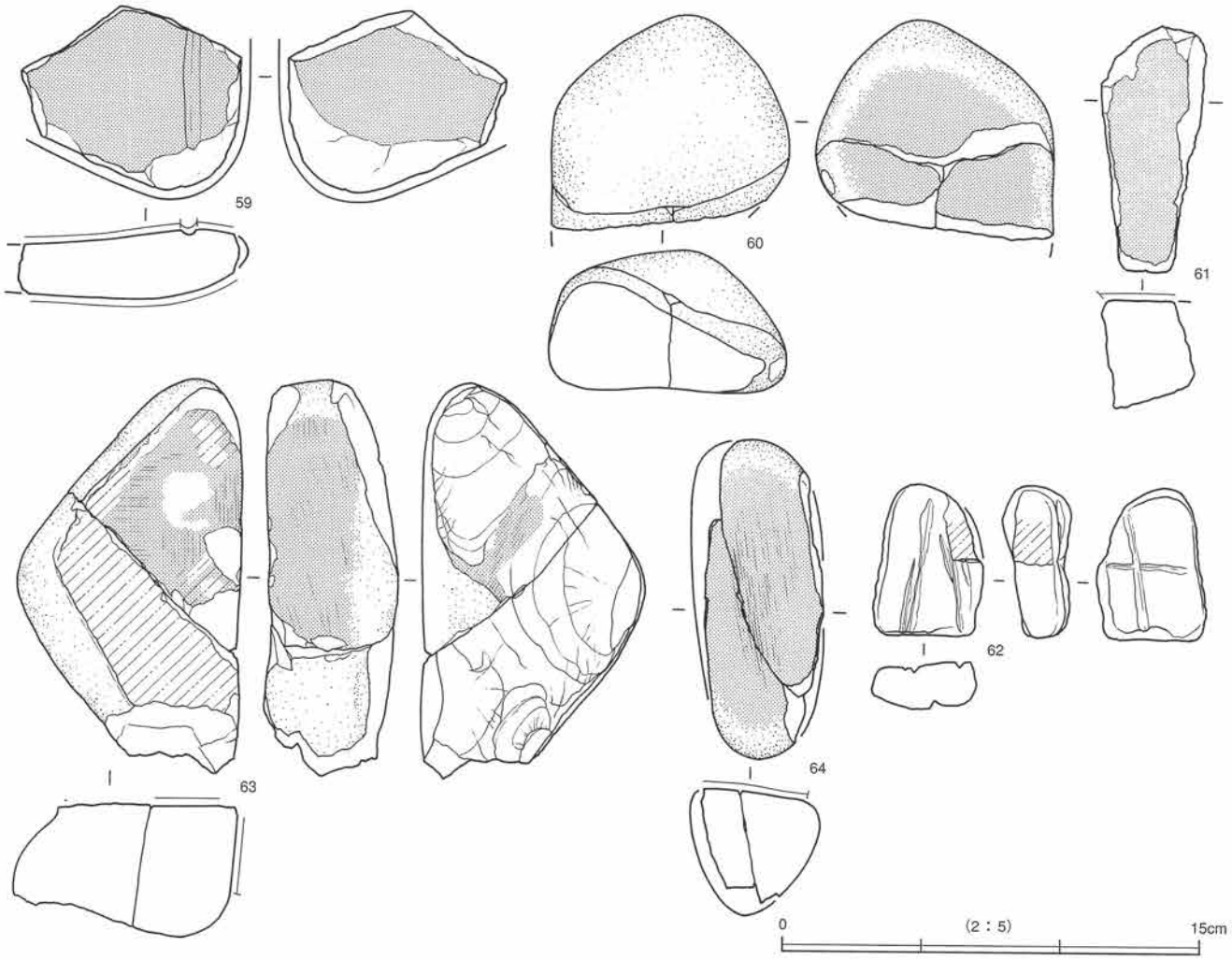


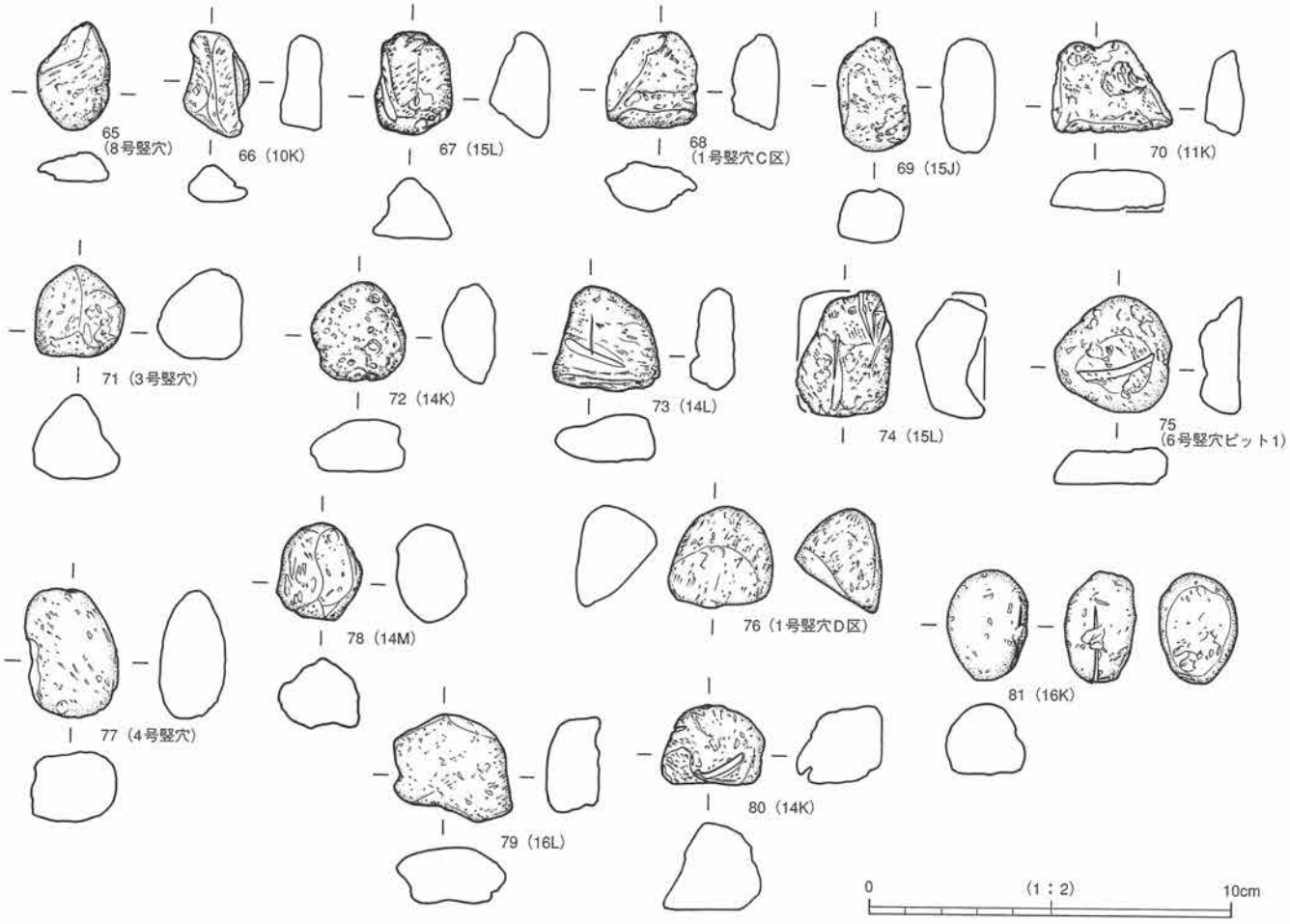
40
41
42
43
44
45
46
0
(2：5)
15cm

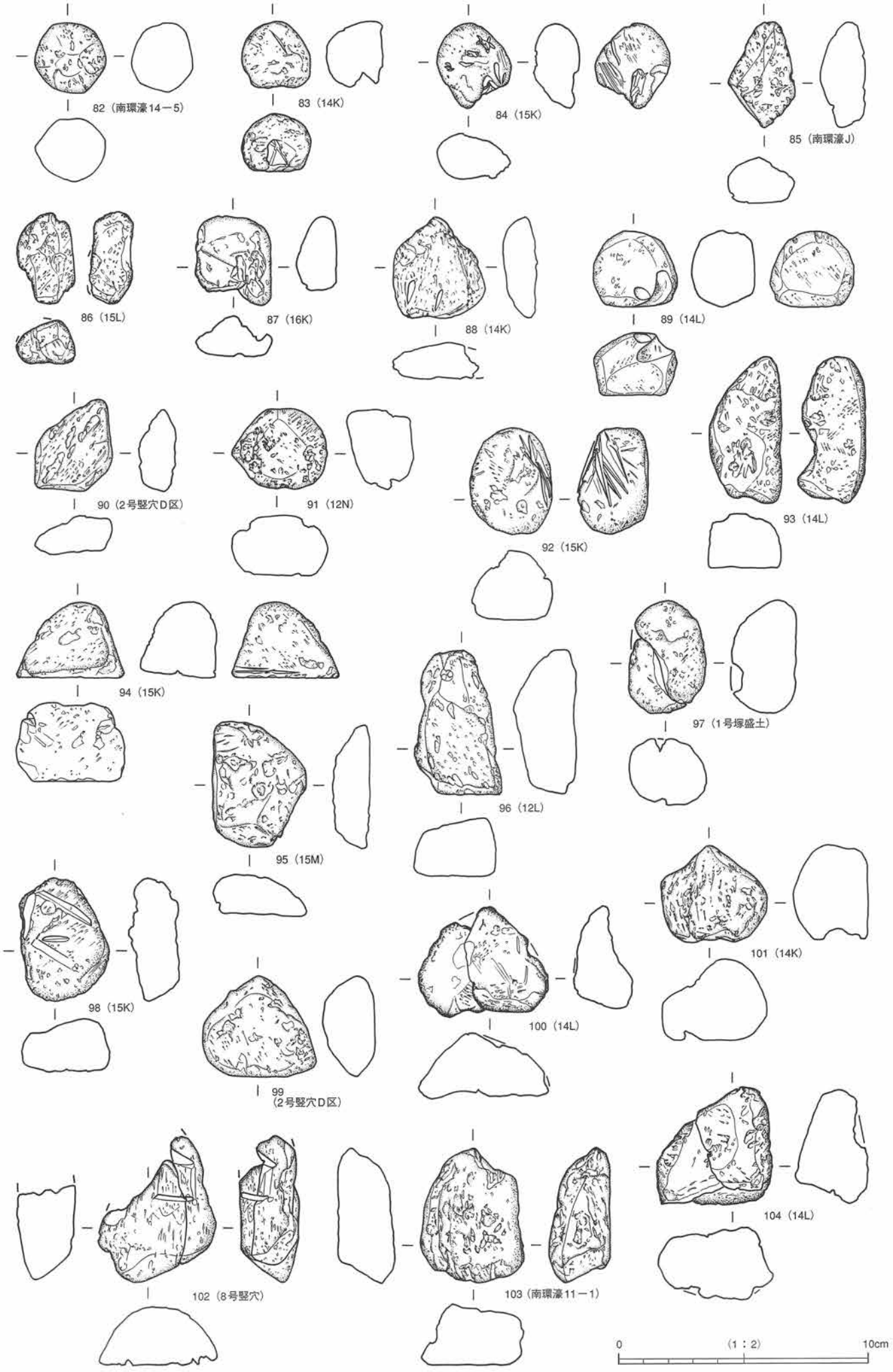

47
48
49
50
51
0
(2：5)
15cm

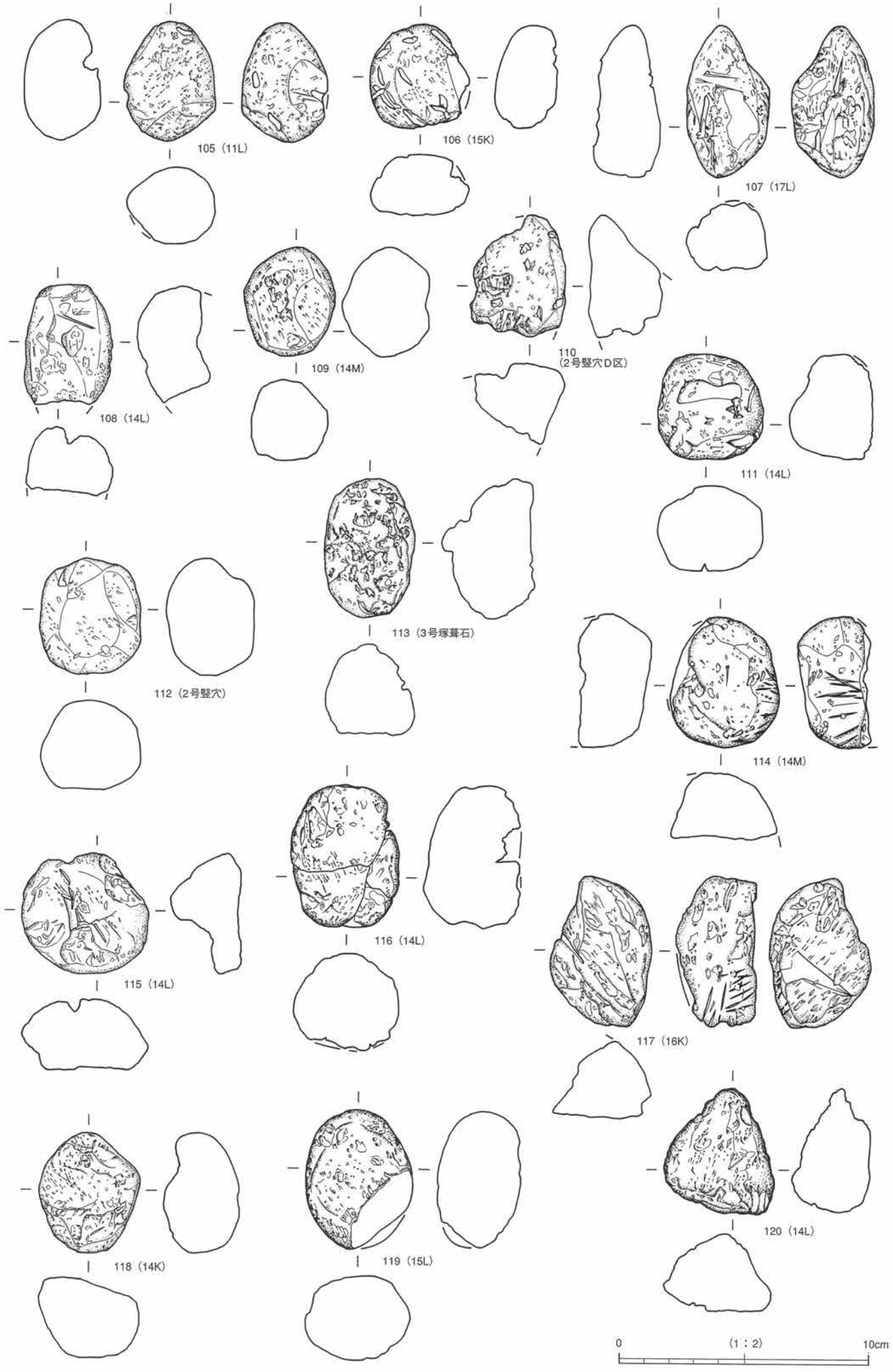

52
53
54
55
0
(2：5)
15cm

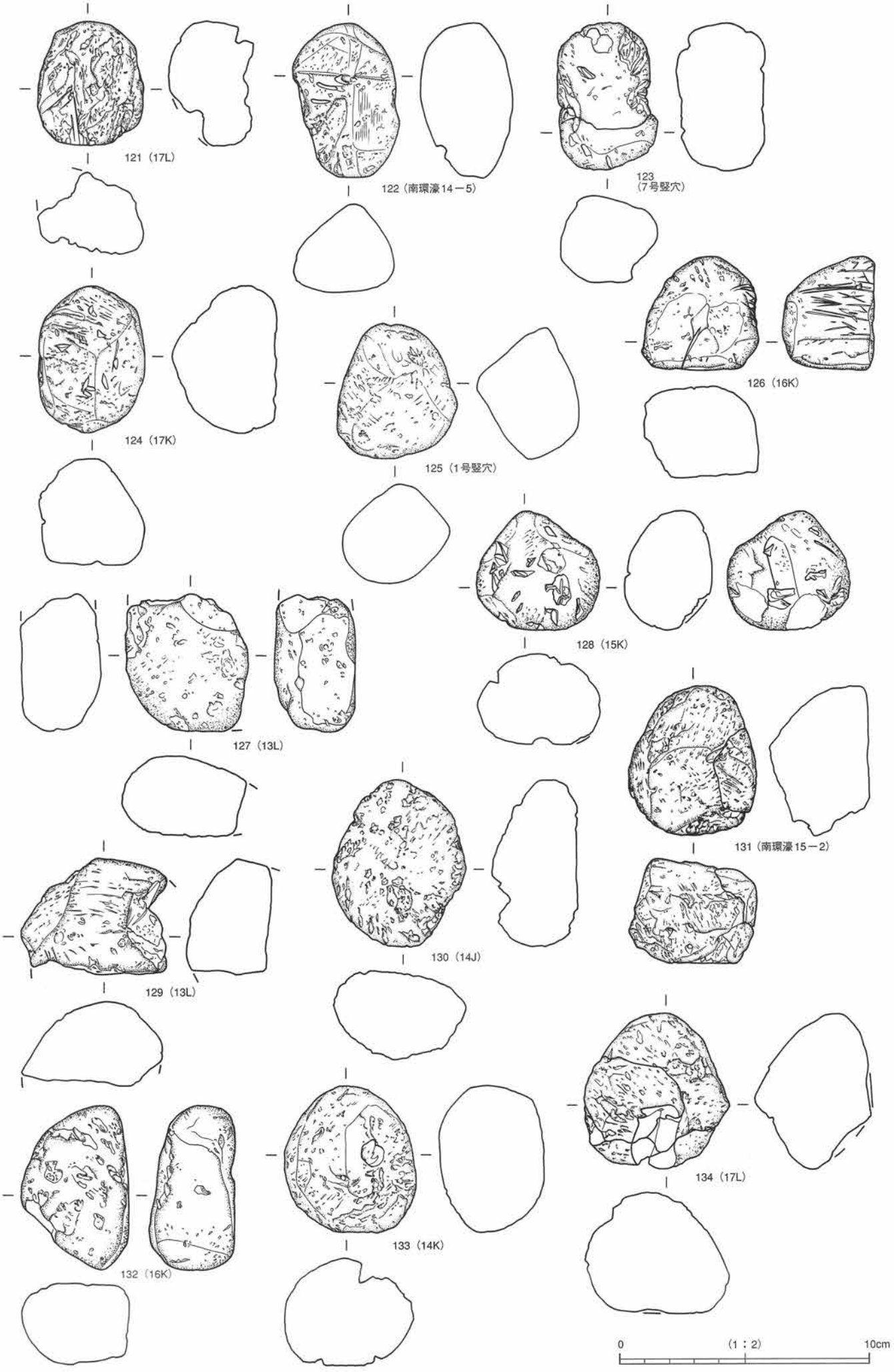

56
57
58
0
(2：5)
15cm

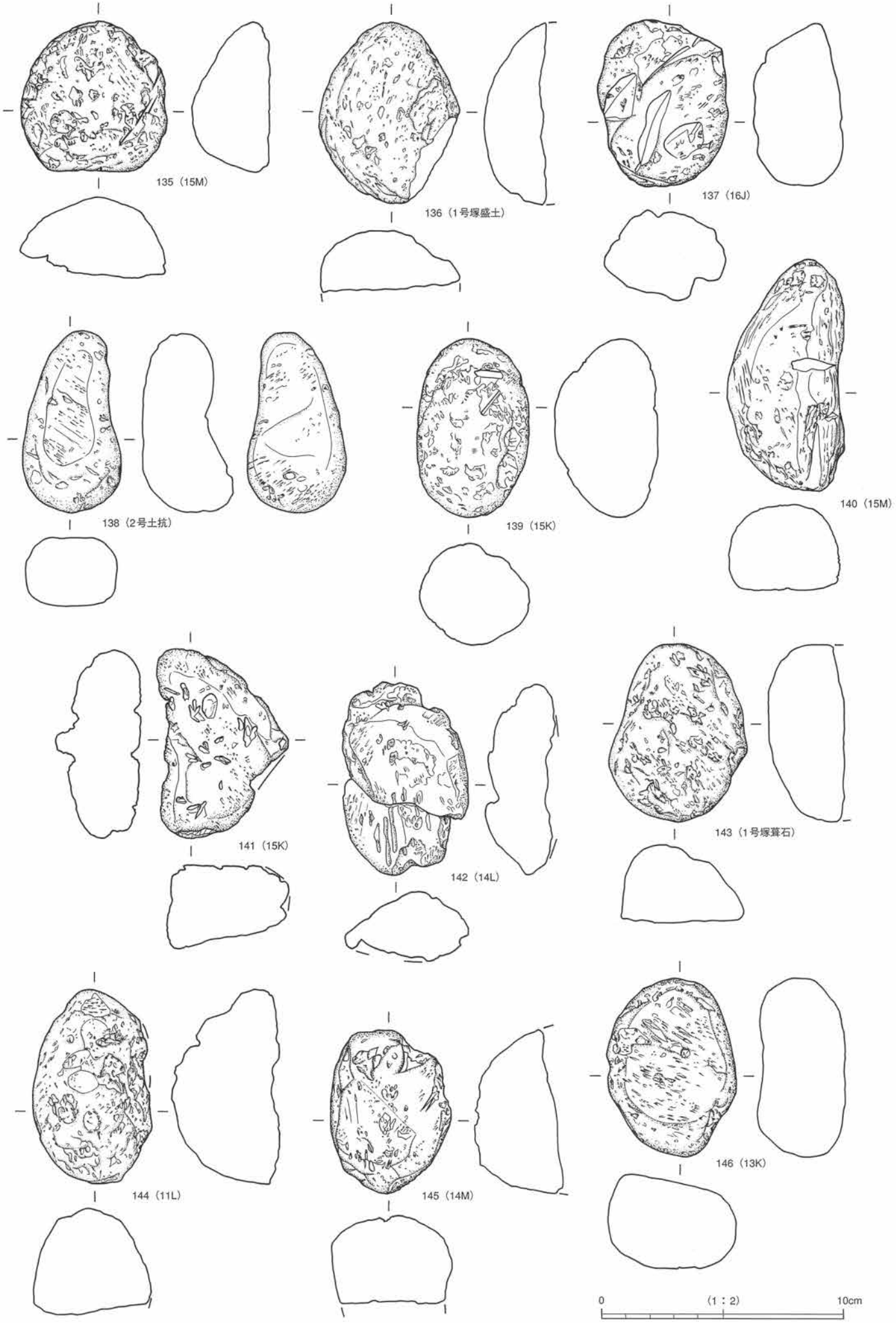

59
60
61
62
63
64
0
(2：5)
15cm

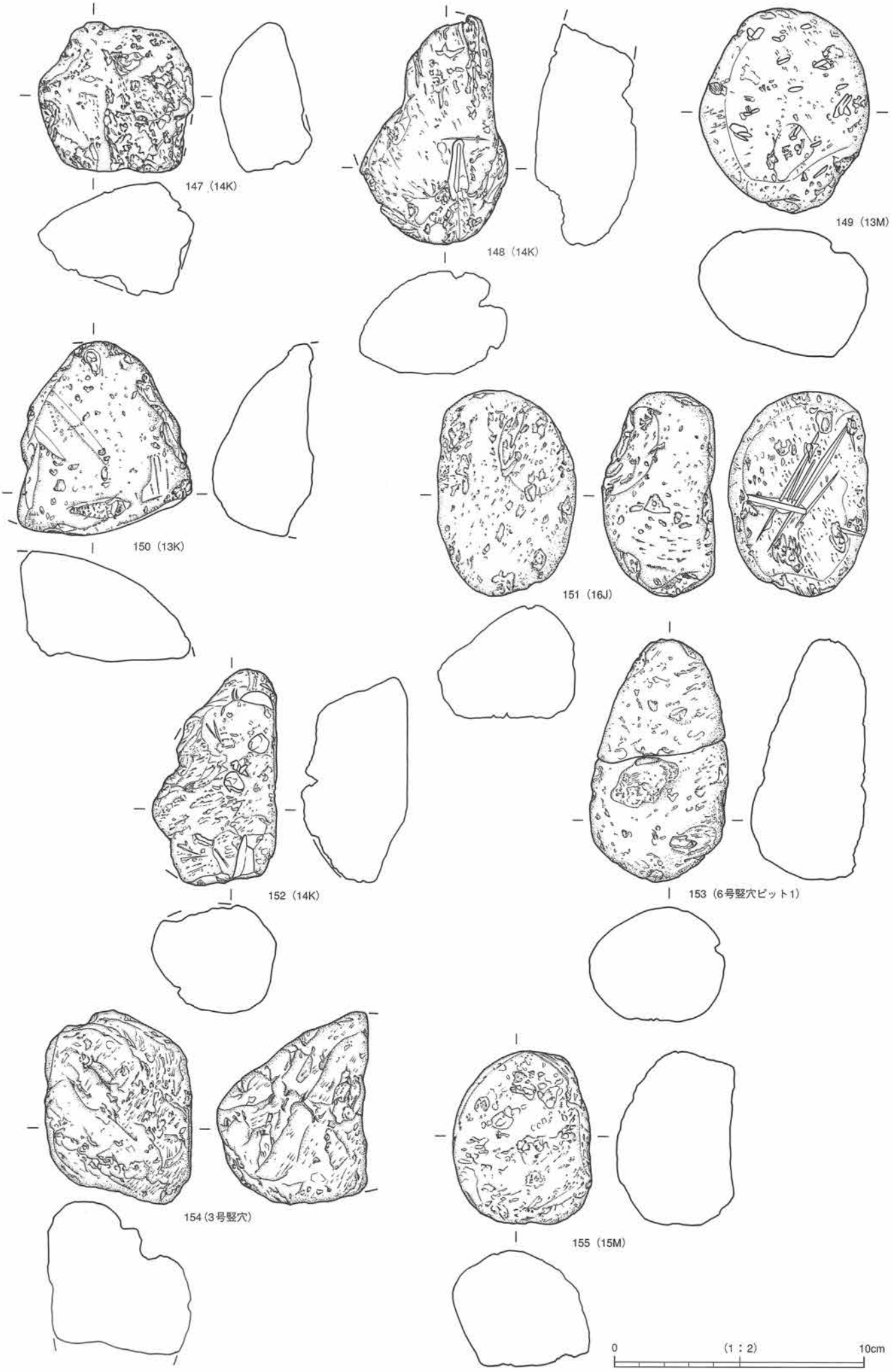

65
(8号竪穴)
66（10K）
67（15L）
68
(1号竪穴C区)
69（15J）
70（11K）
71（3号竪穴）
72（14K）
73（14L）
74（15L）
75
(6号竪穴ピット1)
76（1号竪穴D区）
77（4号竪穴）
78（14M）
79（16L）
80（14K）
81（16K）
0
(1：2)
10cm

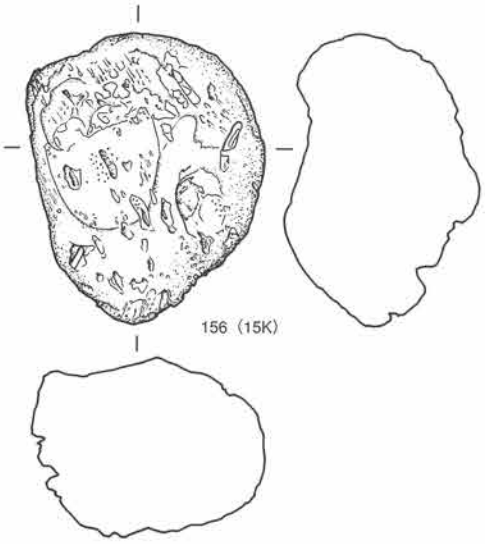

82（南環濠14－5）
83（14K）
84（15K）
85（南環濠J）
86（15L）
87（16K）
88（14K）
89（14L）
90（2号竪穴D区）
91（12N）
92（15K）
93（14L）
94（15K）
95（15M）
96（12L）
97（1号塚盛土）
98（15K）
99
（2号竪穴D区）
100（14L）
101（14K）
102（8号竪穴）
103（南環濠11－1）
104（14L）
0
（1：2）
10cm


105（11L）
106（15K）
107（17L）
108（14L）
109（14M）
110
（2号竪穴D区）
111（14L）
112（2号竪穴）
113（3号塚葺石）
114（14M）
115（14L）
116（14L）
117（16K）
118（14K）
119（15L）
120（14L）
0
（1：2）
10cm

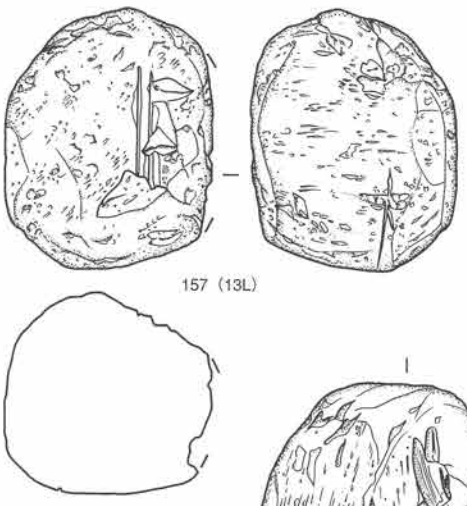

121（17L）
122（南環濠14－5）
123
（7号竪穴）
124（17K）
125（1号竪穴）
126（16K）
127（13L）
128（15K）
129（13L）
130（14J）
131（南環濠15－2）
132（16K）
133（14K）
134（17L）
0
（1：2）
10cm


135（15M）
136（1号塚盛土）
137（16J）
138（2号土抗）
139（15K）
140（15M）
141（15K）
142（14L）
143（1号塚葺石）
144（11L）
145（14M）
146（13K）
0
（1：2）
10cm

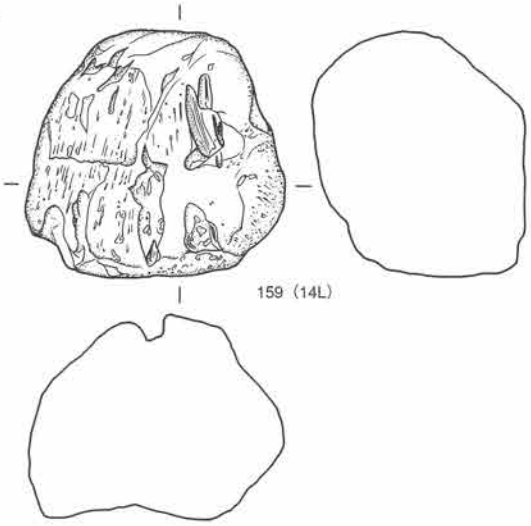

147（14K）
148（14K）
149（13M）
150（13K）
151（16J）
152（14K）
153（6号竪穴ピット1）
154（3号竪穴）
155（15M）
0
（1：2）
10cm



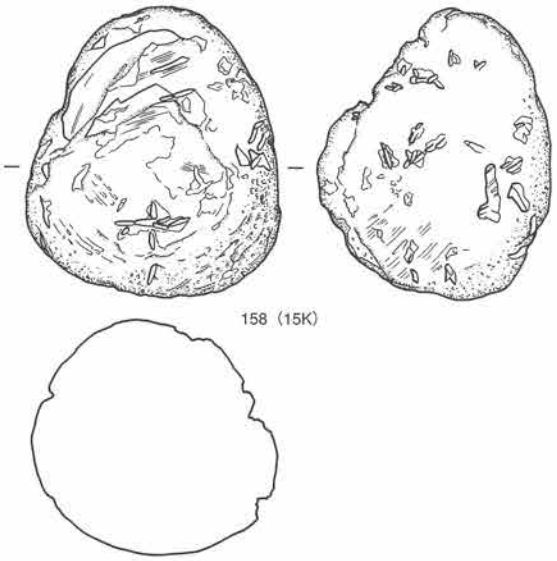
156（15K）



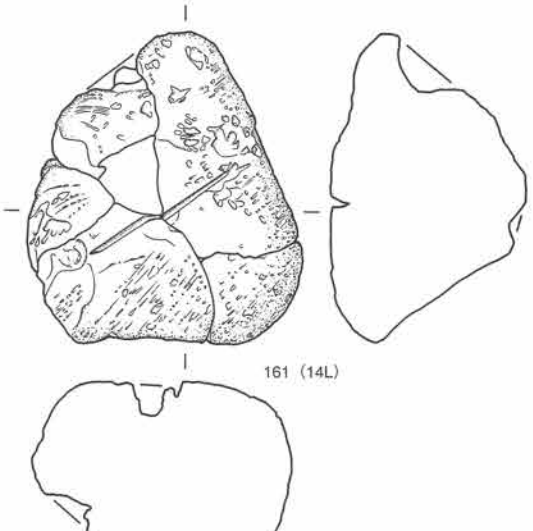
157（13L）



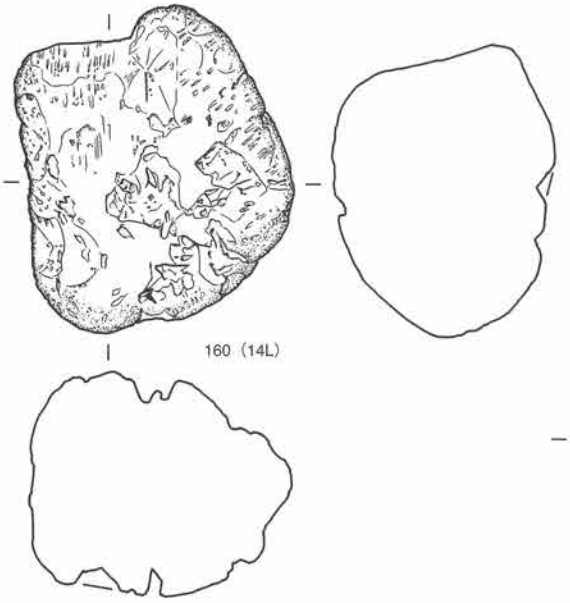
159（14L）



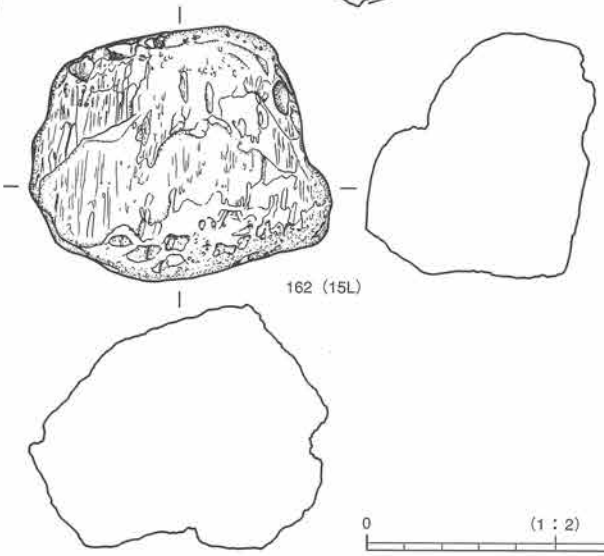
158（15K）



161（14L）



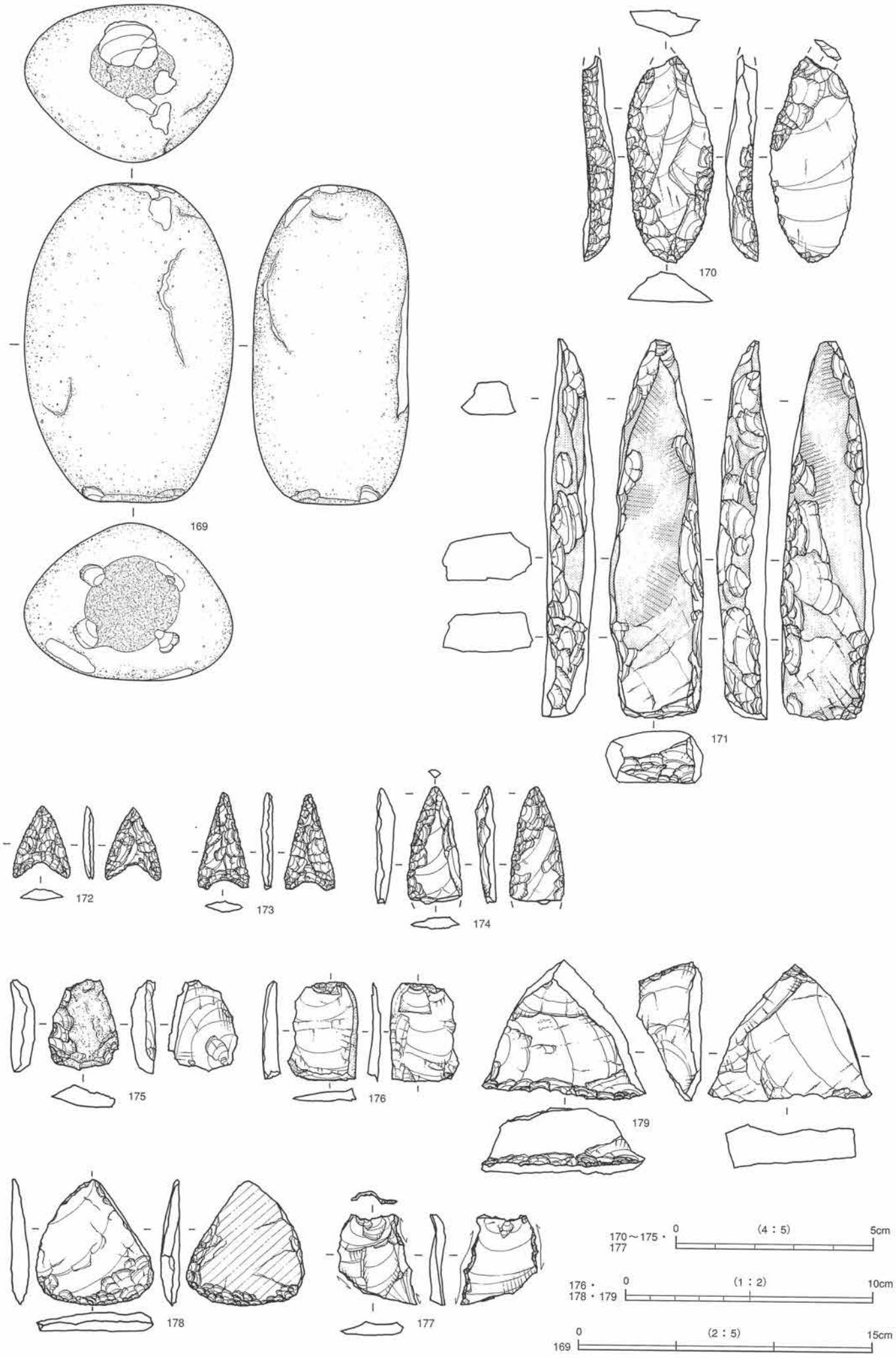
160（14L）

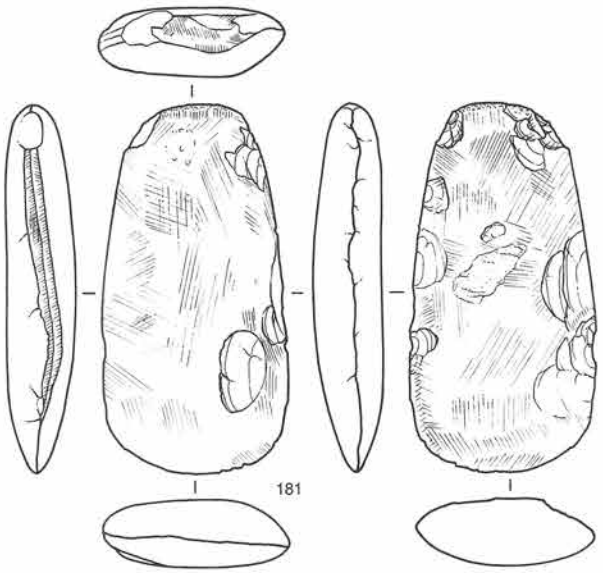


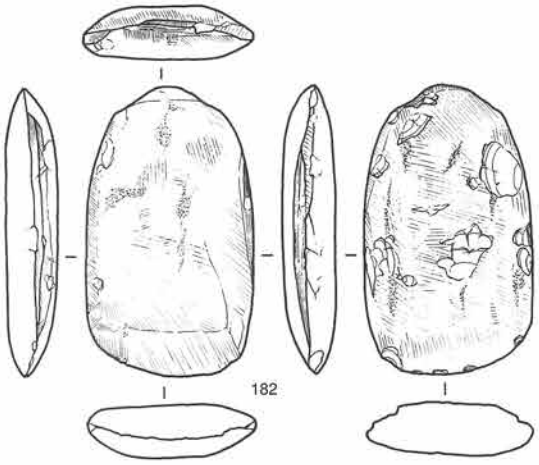
162（15L）

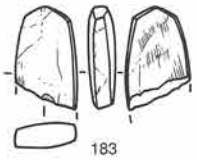
0　（1：2）　10cm

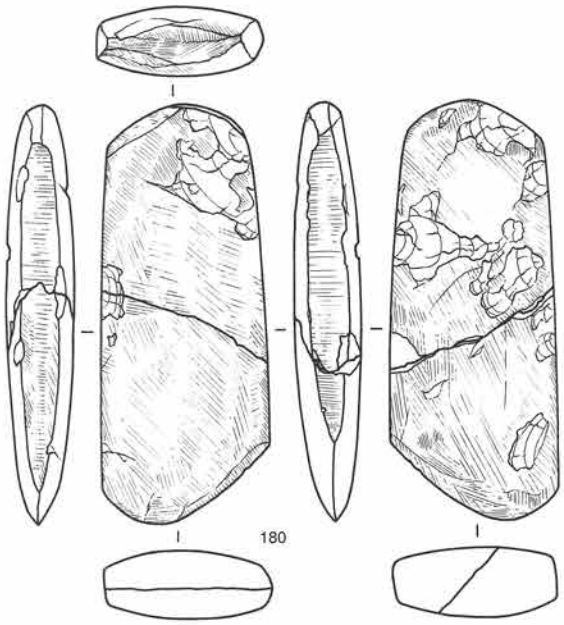
163（12K）
164（1号竪穴D区）
165（12N）
166
167
168
163～165
0
（1：2）
10cm
166～168
0
（2：5）
15cm

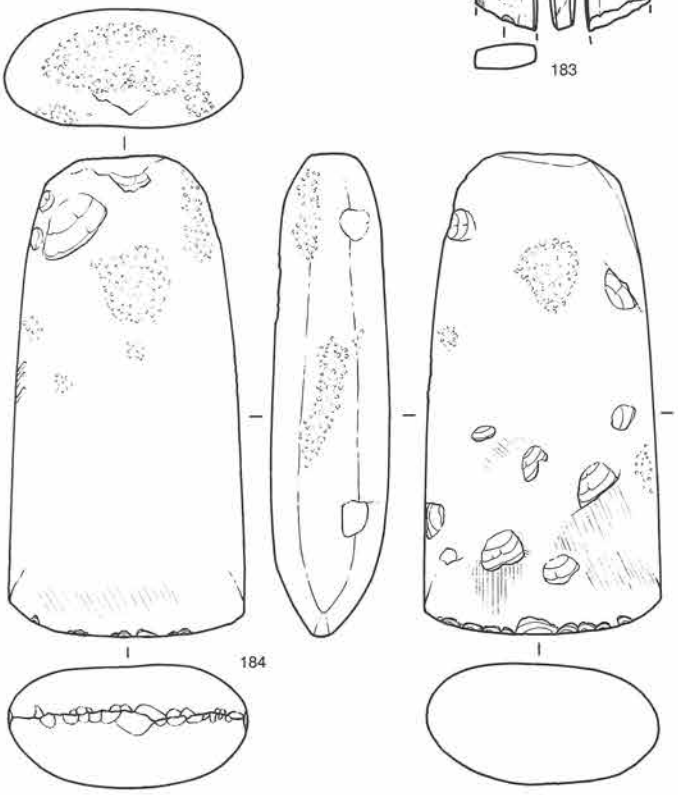

169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
170～175・177
0
(4：5)
5cm
176・178・179
0
(1：2)
10cm
169
0
(2：5)
15cm

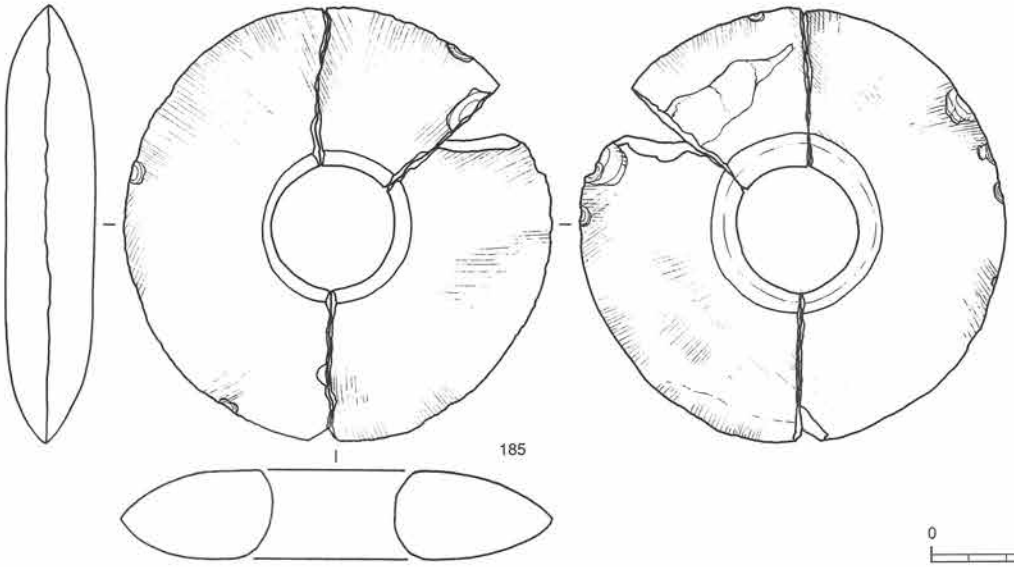




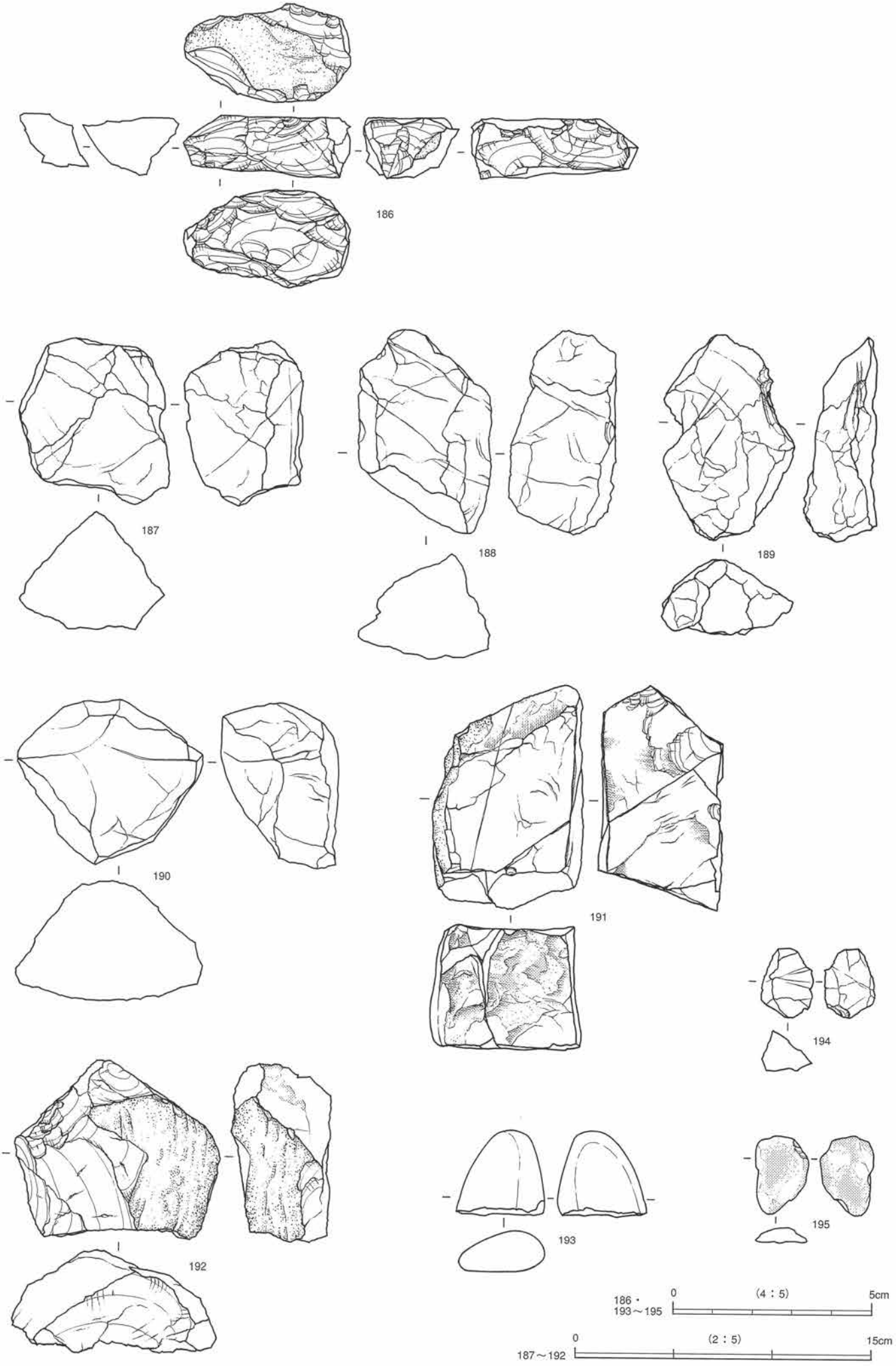


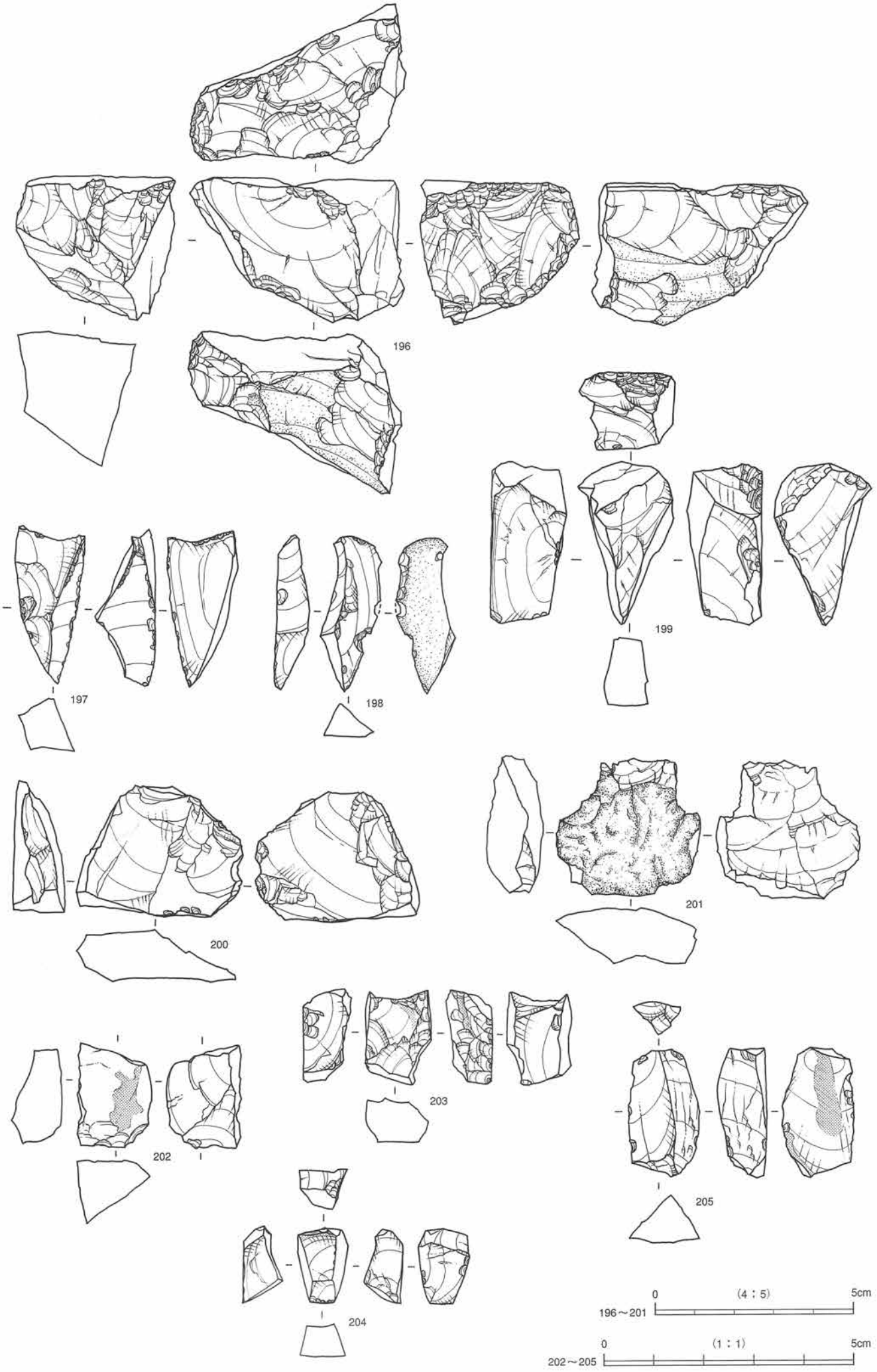


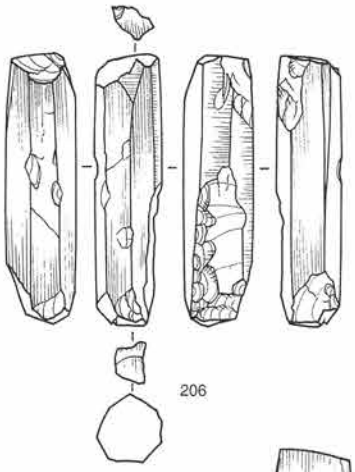


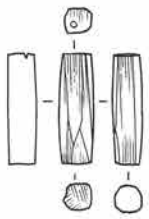


0 (1：2) 10cm

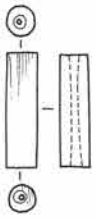

186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
186・193～195
0
(4：5)
5cm
187～192
0
(2：5)
15cm

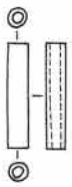

196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
196～201
0
(4：5)
5cm
202～205
0
(1：1)
5cm

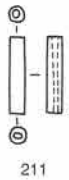

206

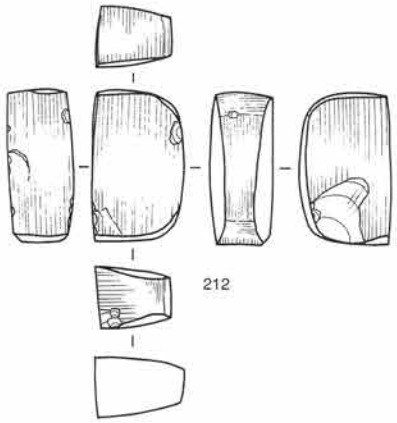

207

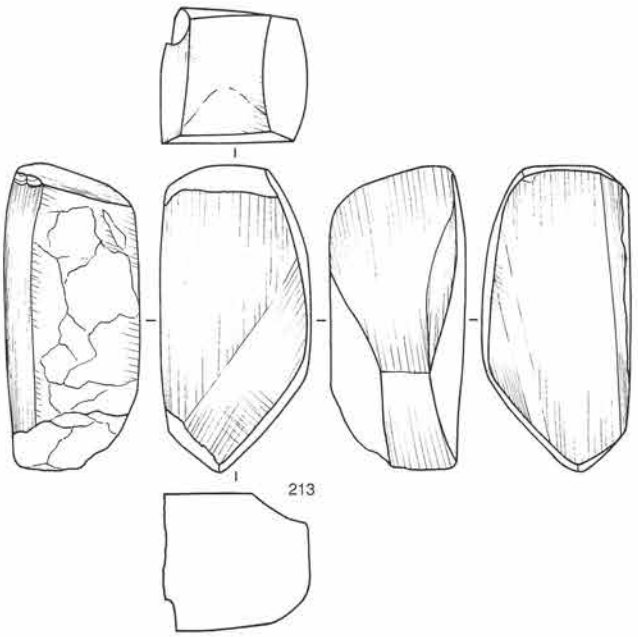
208

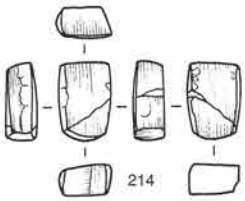

209

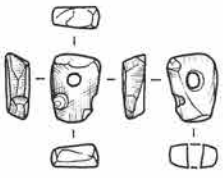

210


211


212


213


214


215

216

217

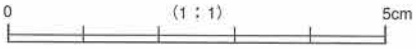
218

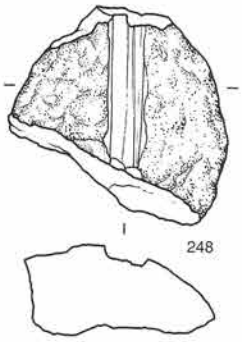
219

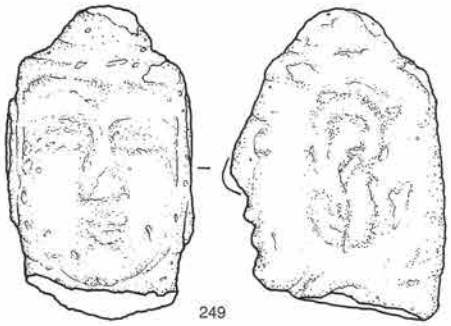
220

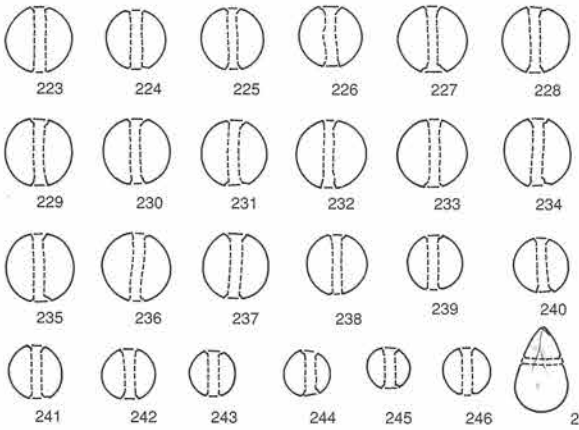
221

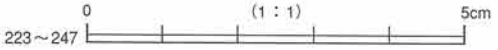
222

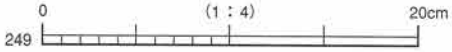

0
(1：1)
5cm

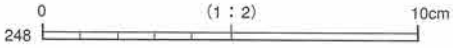

248

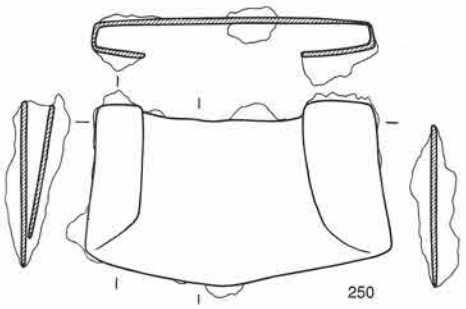

249

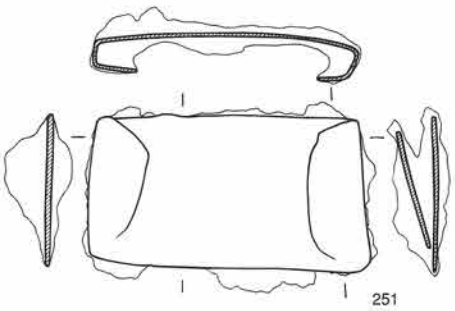

223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247

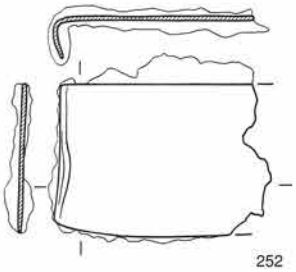

223～247
0
(1：1)
5cm

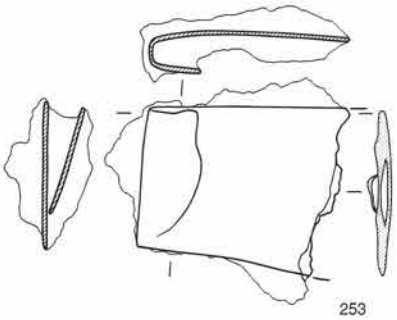

249
0
(1：4)
20cm

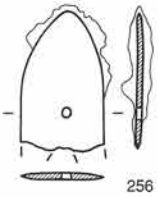

248
0
(1：2)
10cm


250

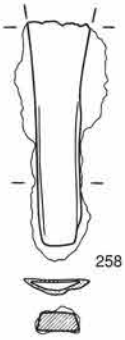

251

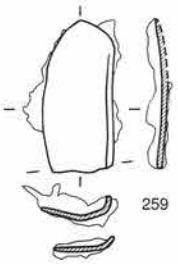

252

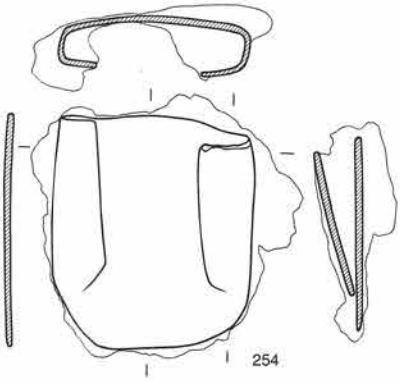

253

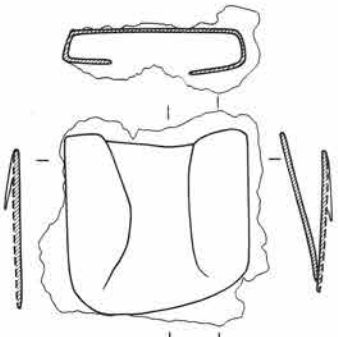

256

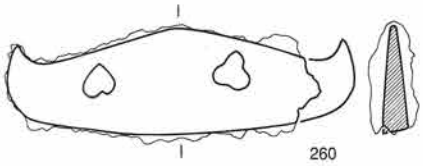
257


258

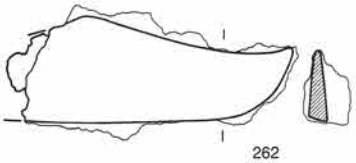

259

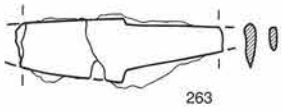

254

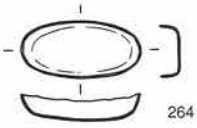

255


260

261

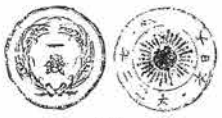

262


263

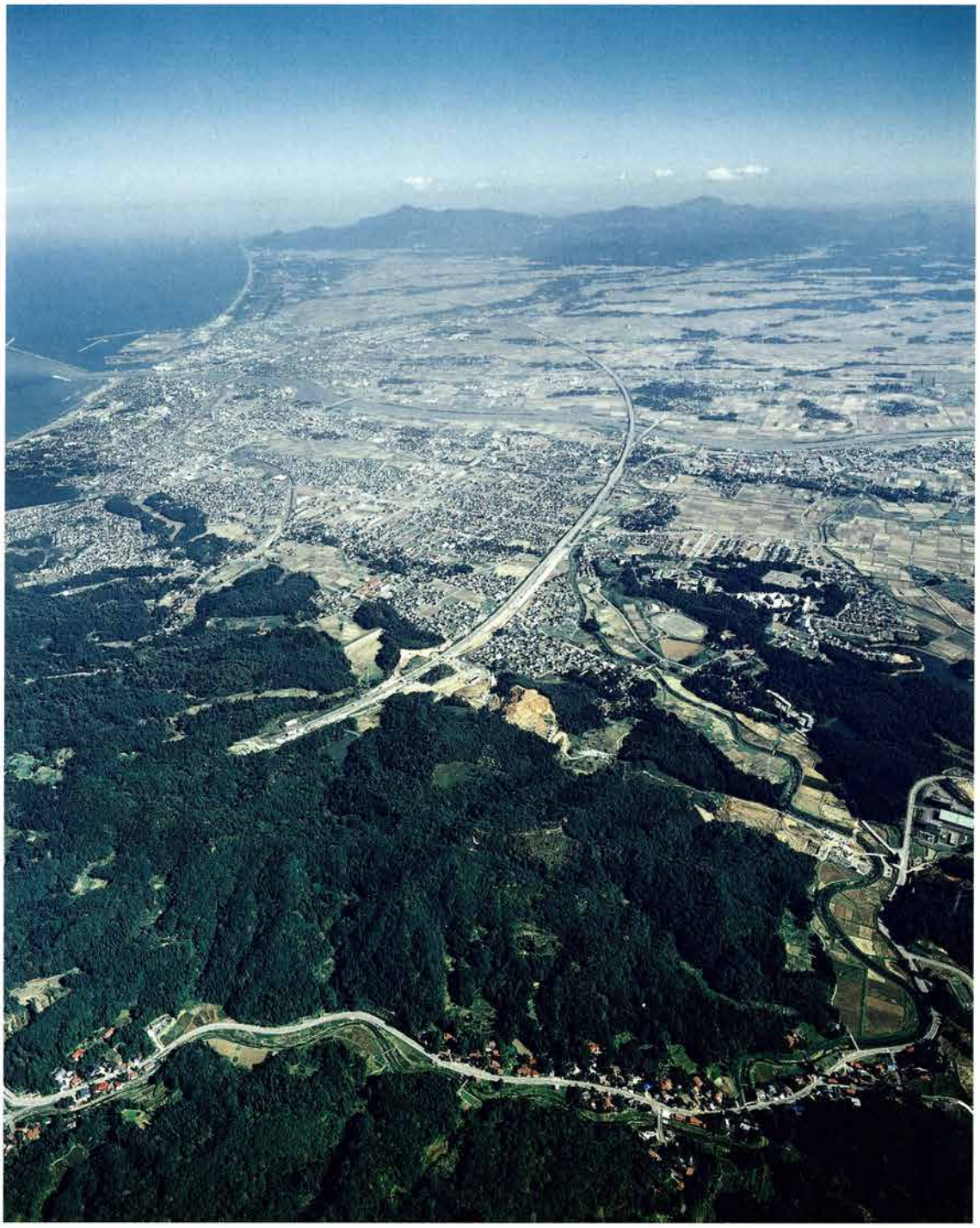

264

265

266


267

0 (1：2) 10cm



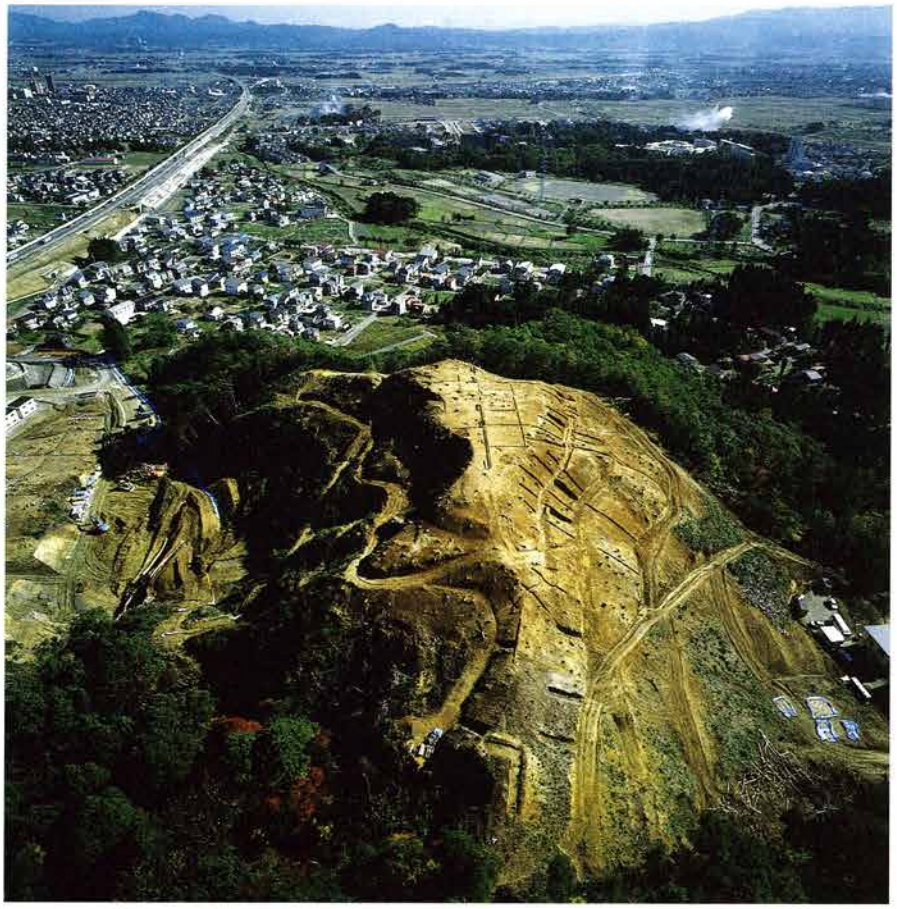
遺跡周辺の景観（1）

▲ 遺跡周辺の景観（2）

遺跡周辺の景観（3）2号竪穴から東方向

遺跡全景（1）西から

遺跡遠景　南から



遺跡全景（2）西上空から

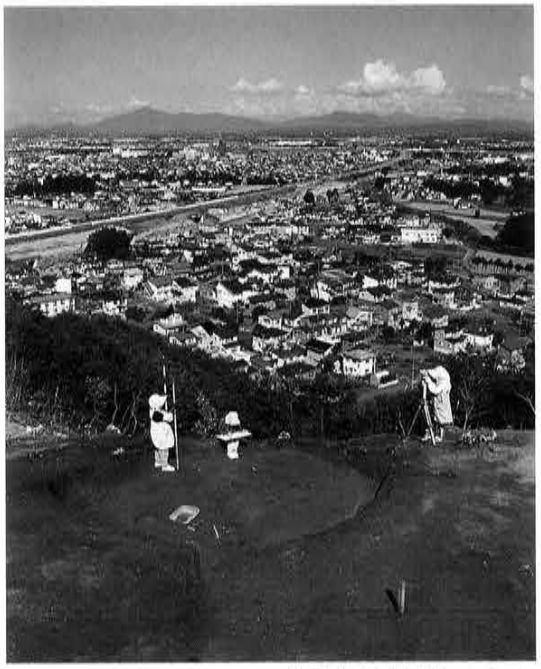
遺跡全景（3）東上空から

遺跡遠景
東から

基本層序
14Kグリッド

2号竪穴調査風景
南西から

遺跡全景（5）西上空から

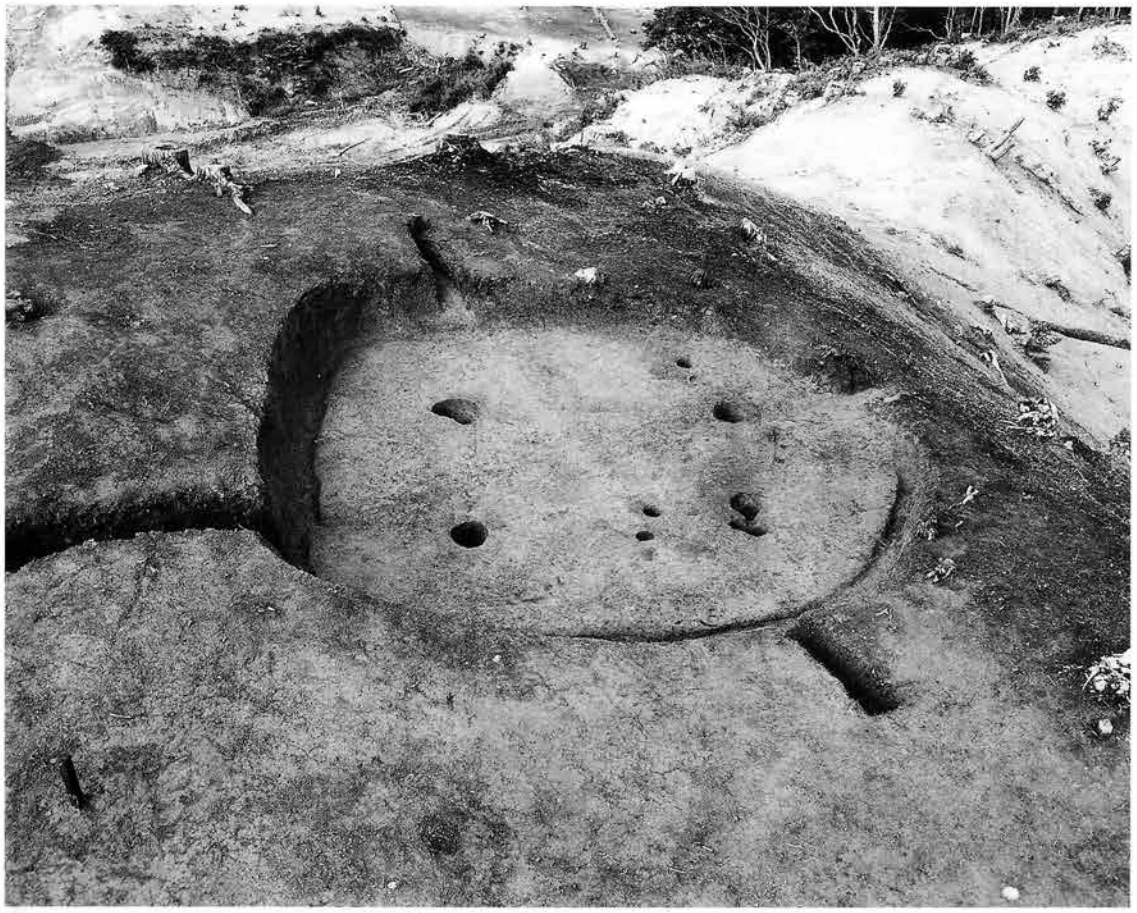


2号竪穴調査風景　西から

主丘頂上の状況　東から

1号竪穴・2号竪穴周辺の状況　東から

1号竪穴　西から

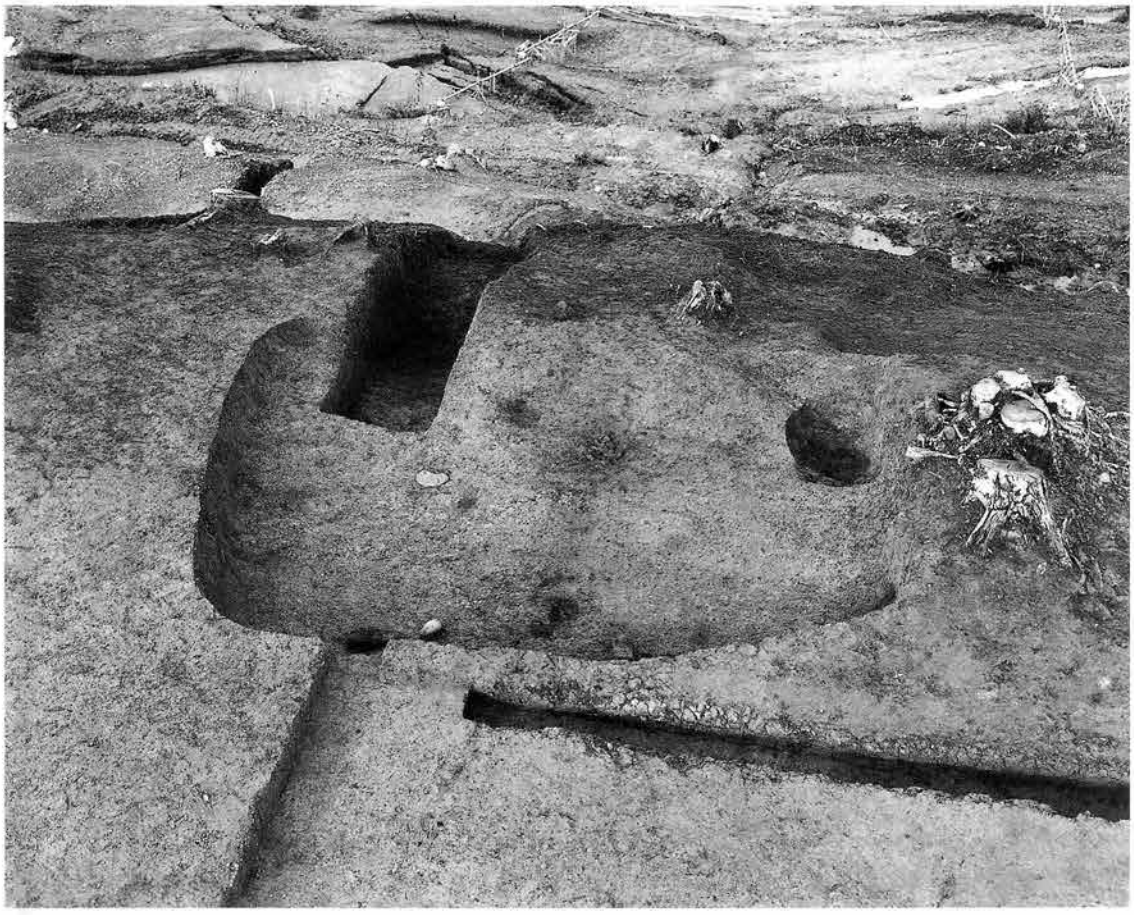


2号竪穴　南西から

3号竪穴　南から

6号竪穴　東から

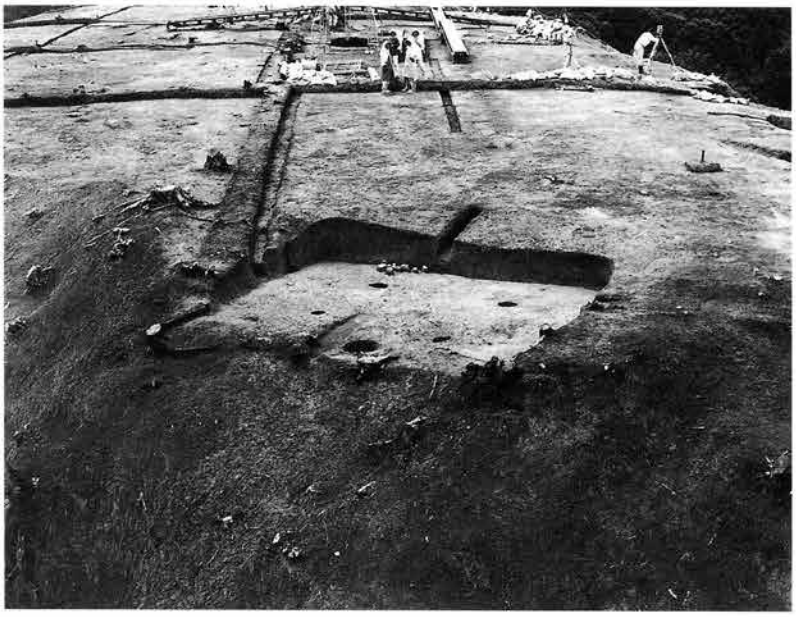
7号竪穴　北東から



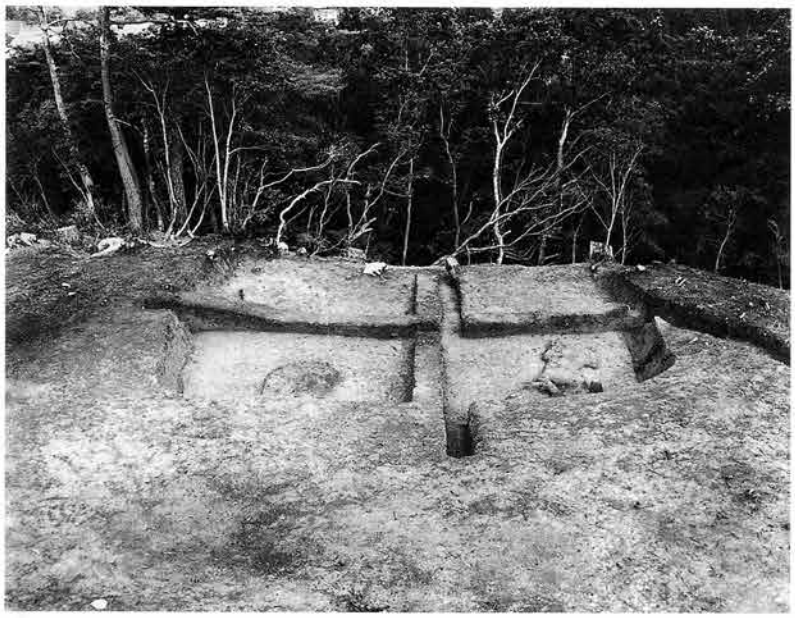
8号竪穴　南から

4号竪穴
南東から

5号竪穴
東から

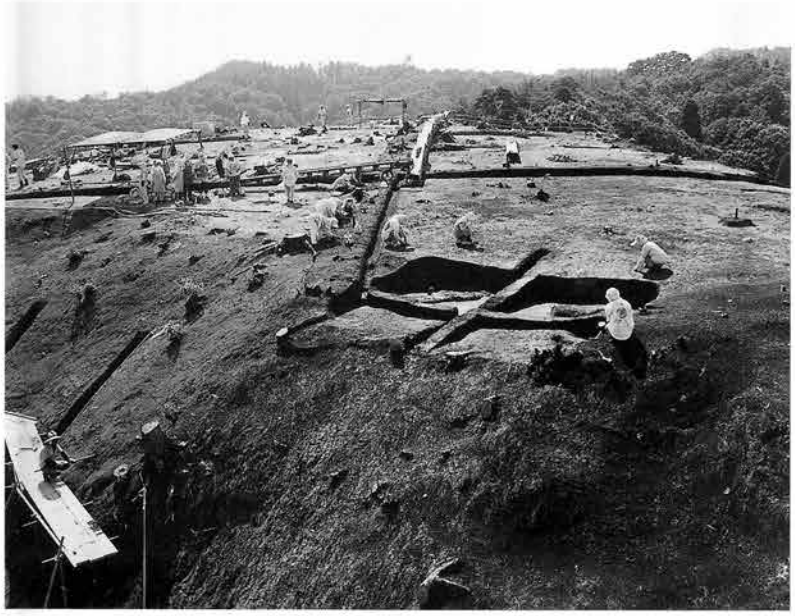


1号竪穴
東から



1号竪穴土層断面
西から

1号竪穴礫出土状況
東から

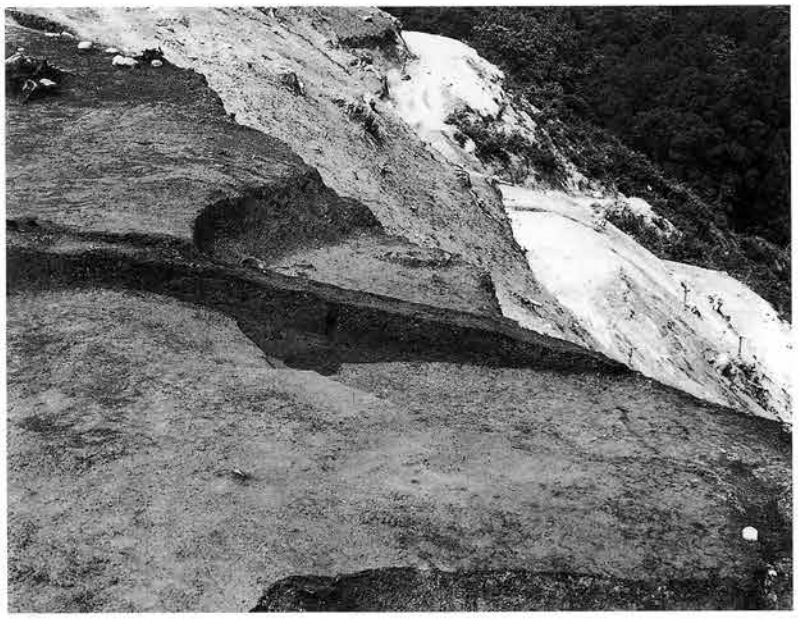


1号竪穴周辺の状況
東から

2号竪穴土層断面
南西から

2号竪穴周辺の状況
東から

3号竪穴土層断面
南から

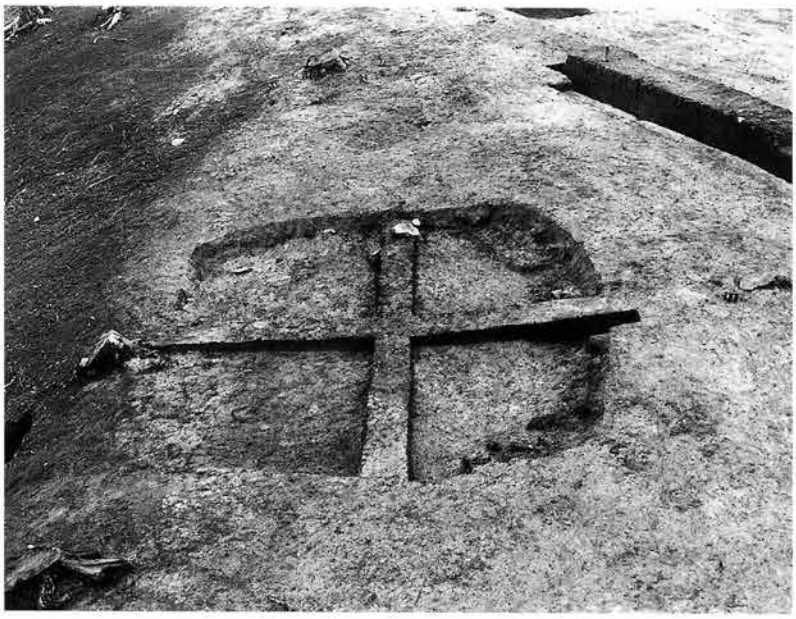


4号竪穴土層断面
東から

4号竪穴土器出土状況（1）
北から

4号竪穴土器出土状況（2）
東から

5号竪穴土層断面
東から



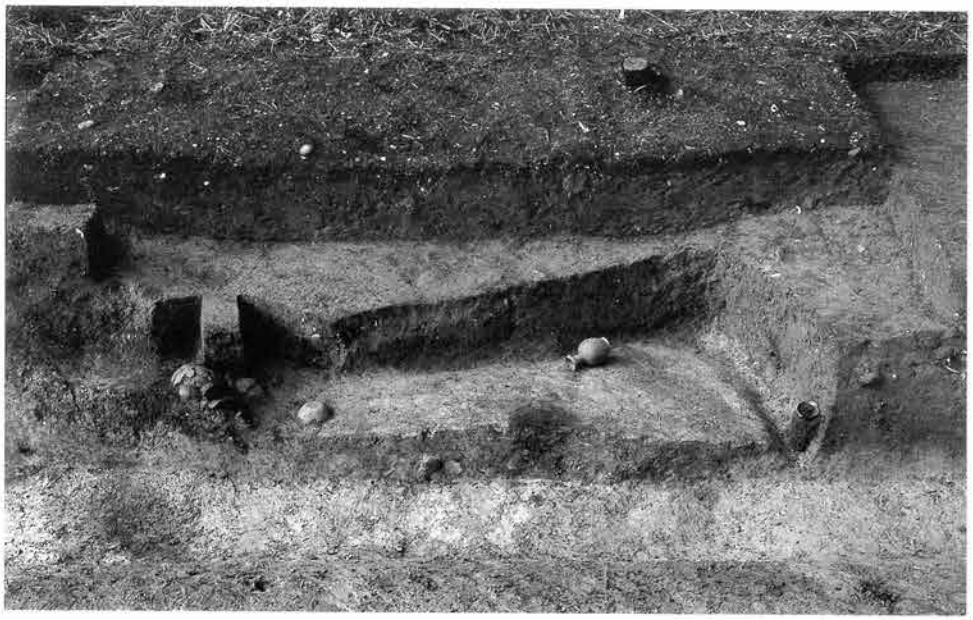
6号竪穴土層断面
南東から

6号竪穴炭化材出土状況
南西から

7号竪穴土層断面
南東から

7号竪穴炭化材出土状況
北から

8号竪穴炉断面
東から

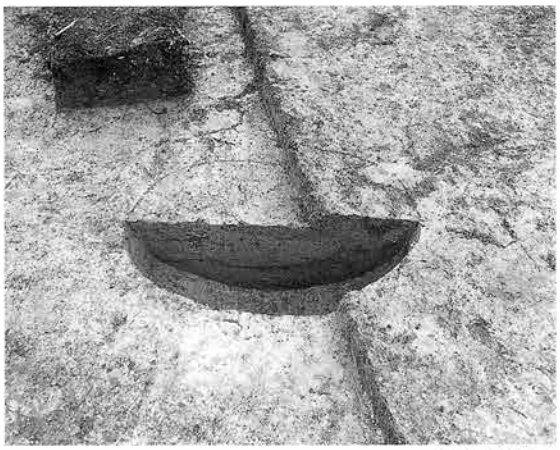


H1号竪穴
土器出土状況
東から

H1号竪穴カマド
土器出土状況
東から

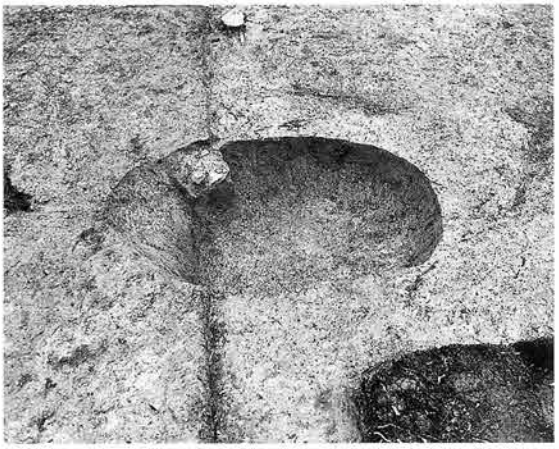
H1号竪穴土層断面
東から

1号土坑　東から

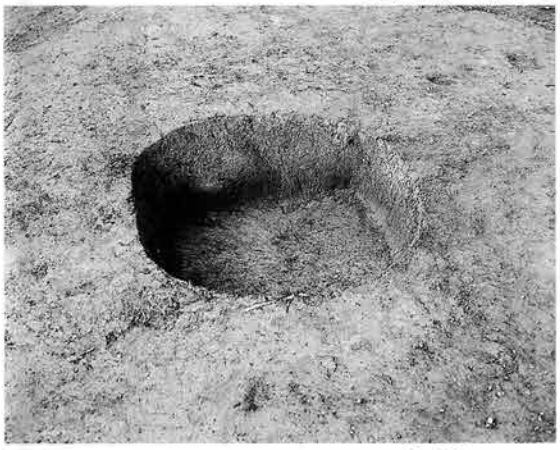


2号土坑断面

2号土坑　南東から



3号土坑　南から

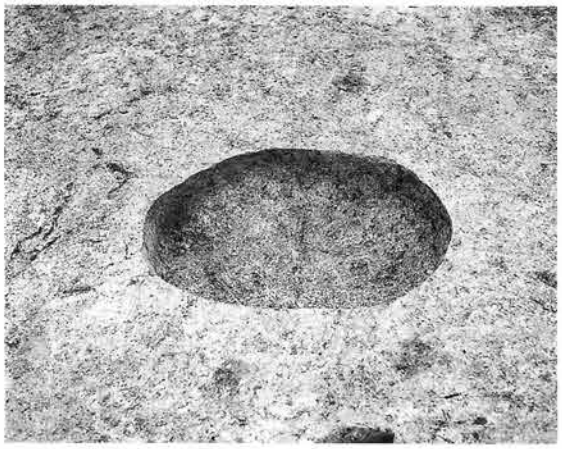


4号土坑　東から

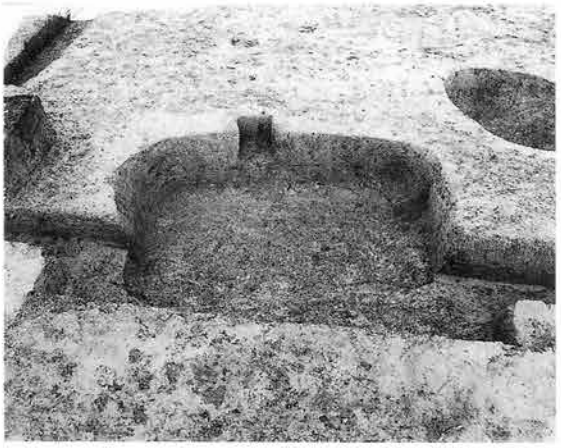
5号土坑　南から

6号土坑　南から

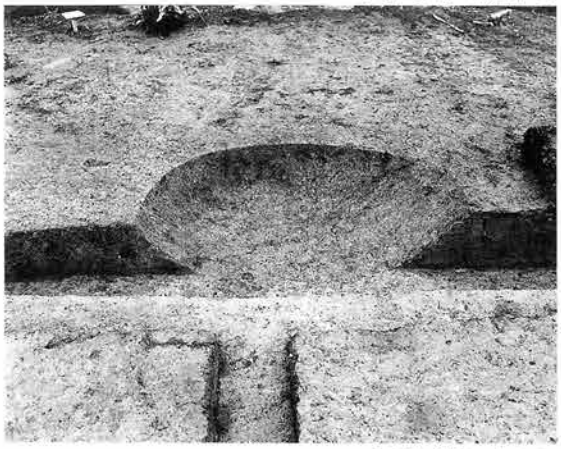
7号土坑　南から



8号土坑　南西から



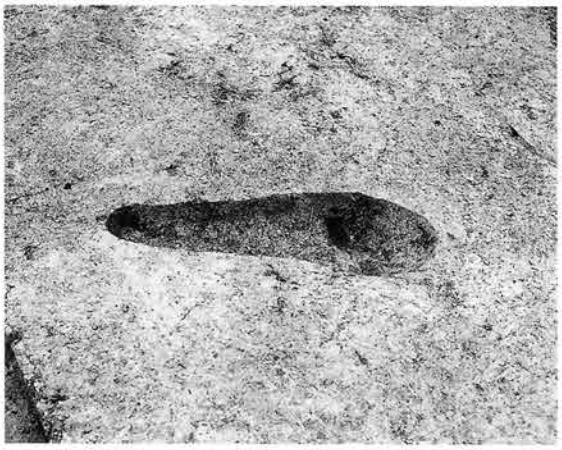
9号土坑　南から



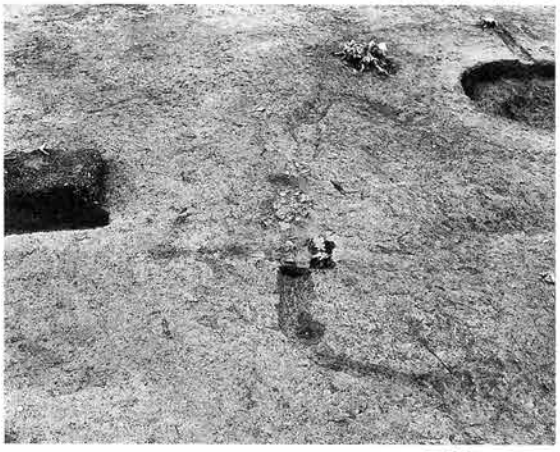
10号土坑　南から

11号土坑遺物出土状況　南から

11号土坑　南から



12号土坑　北から



1号溝　南から

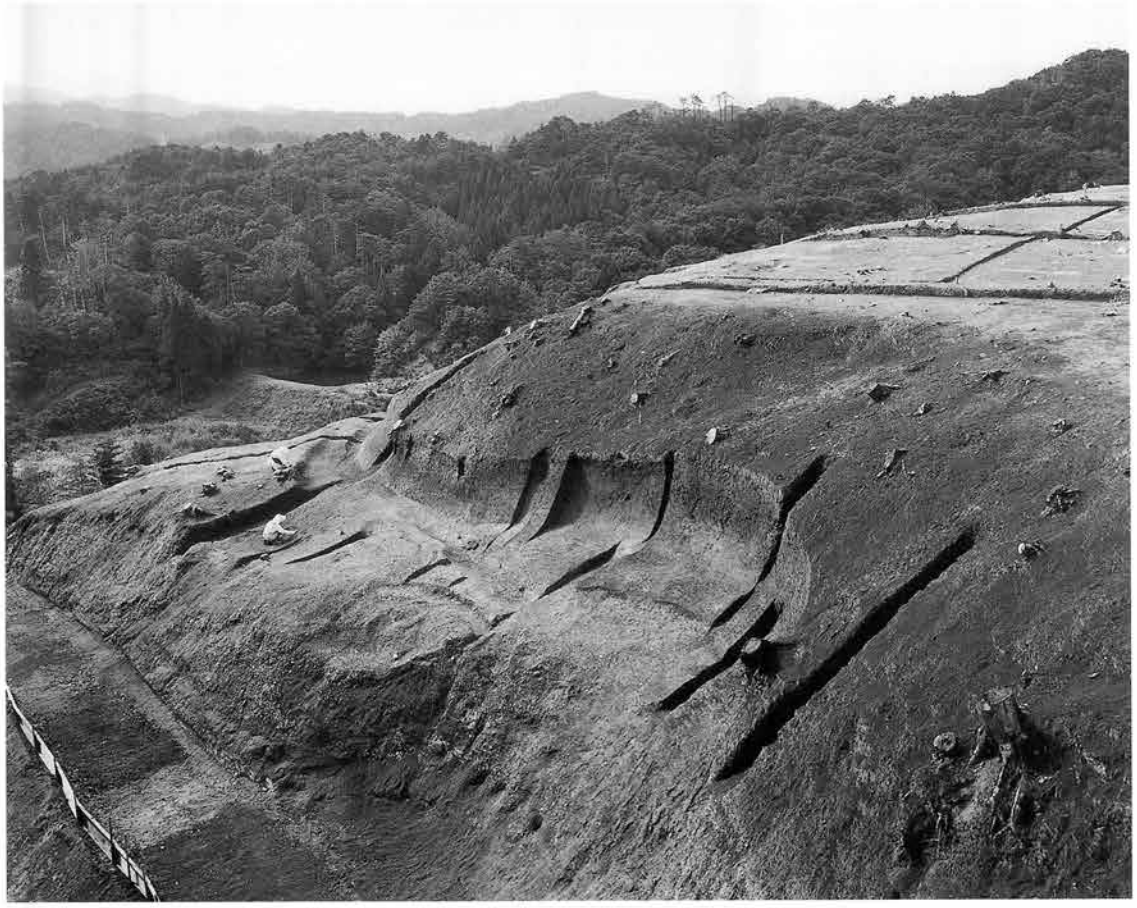
1号溝中央部の土器出土状況　南から

南環濠全景　西から

南環濠の調査風景　南から

南環濠8～15ライン　南東から

南環濠8～12ライン　東から



南環濠N～Lライン　北東から

南環濠N～Lライン・東環濠南端　南から

東環濠全景
北東から

東環濠北半部
南から

北環濠遠景
東から

南環濠断面0地点　南東から

南環濠断面1地点　東から

南環濠断面2地点　東から

南環濠断面3地点　南東から

南環濠断面4地点　東から

南環濠13ライン土器出土状況　東から

南環濠断面6地点　東から

南環濠断面7地点　東から

南環濠断面8地点　東から

南環濠断面9地点　東から

南環濠断面10地点　東から

南環濠断面11地点　南から

南環濠断面12地点　南から

南環濠M～Lライン調査風景　北東から

南環濠の足場と階段

南環濠断面19地点　南から

東環濠断面13地点　東から

東環濠断面14地点　南東から

東環濠断面15地点　東から

東環濠土器出土状況　北から

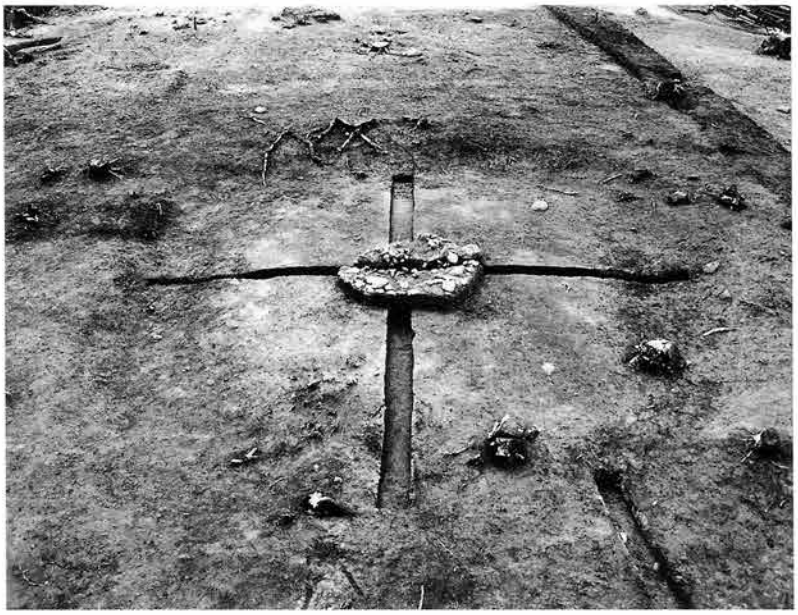
東環濠調査風景　北東から

北環濠A区土器出土状況　東から

北環濠断面17地点　東から

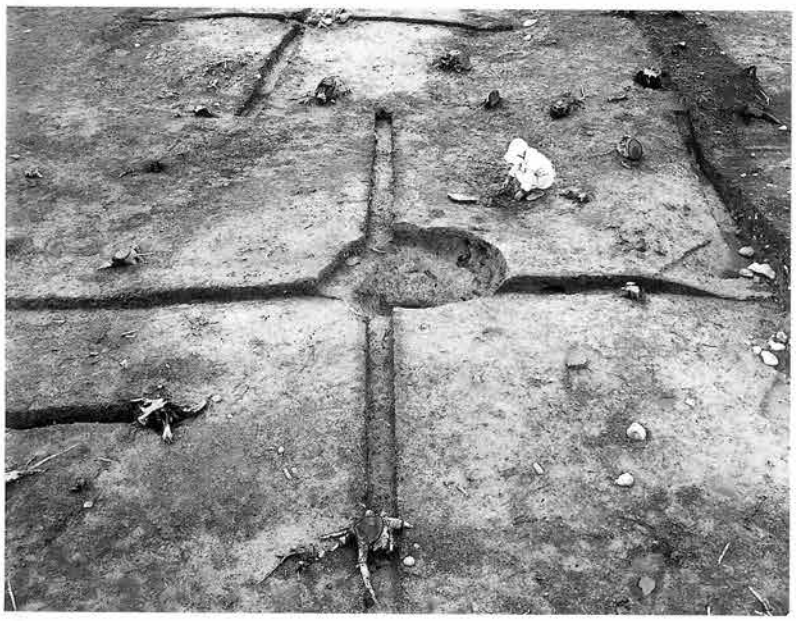
北環濠B区土器出土状況　北東から

3号塚・2号塚調査風景
東から

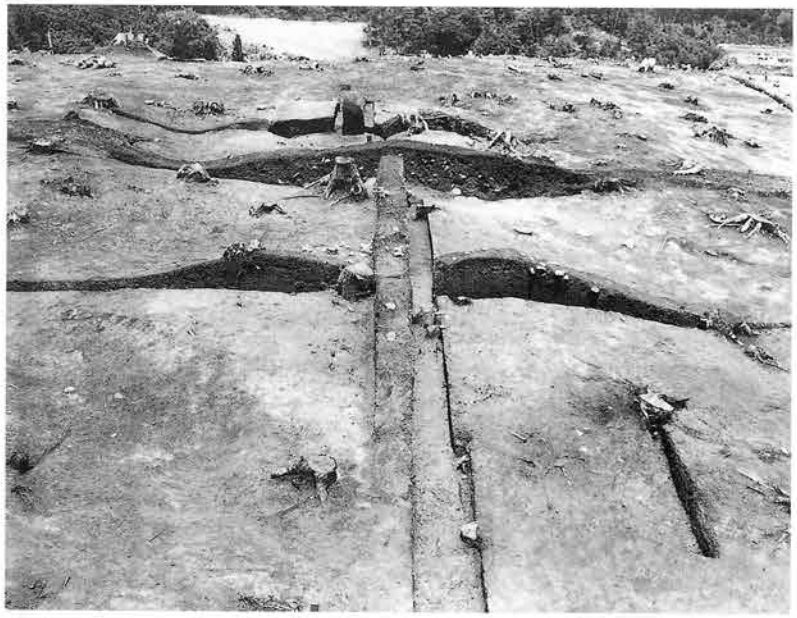


3号塚盛土除去状況
東から

2号塚盛土除去状況
東から



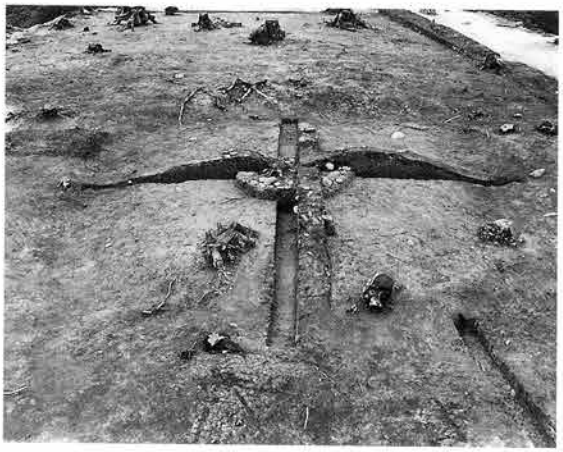
2号塚調査風景
東から



2号塚・1号塚土層断面
南から

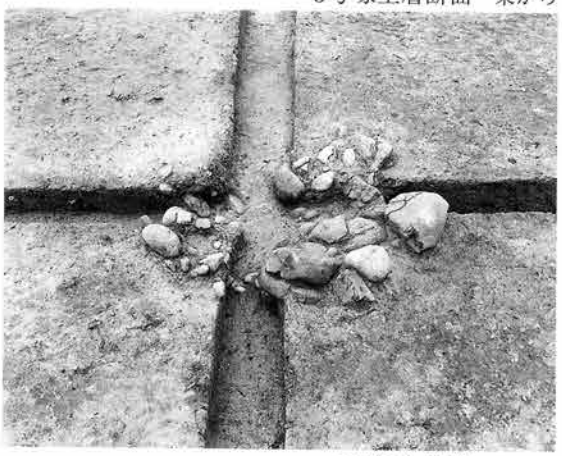
1号塚検出状況
東から

3号塚検出状況　東から



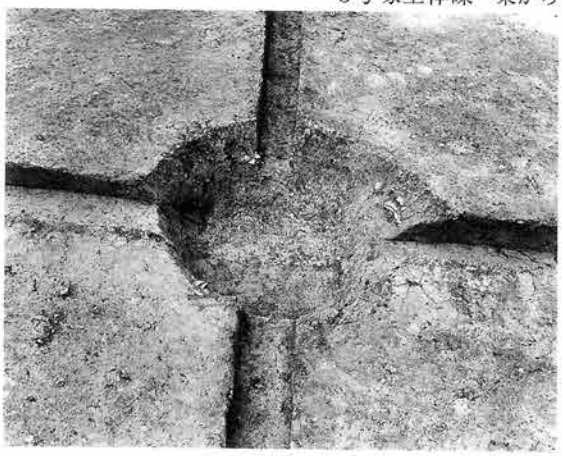
3号塚土層断面　東から

3号塚主体被覆礫　東から

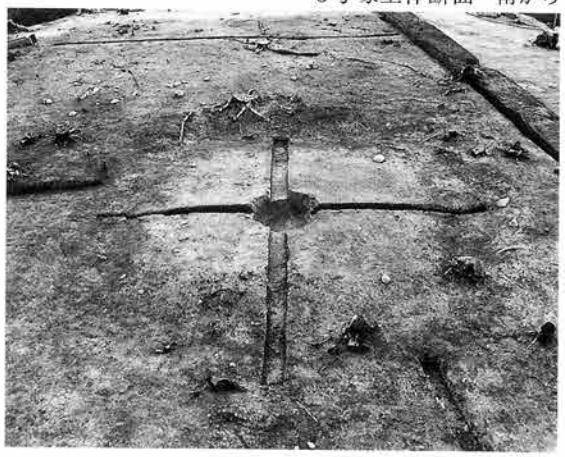


3号塚主体礫　東から

3号塚主体断面　南から

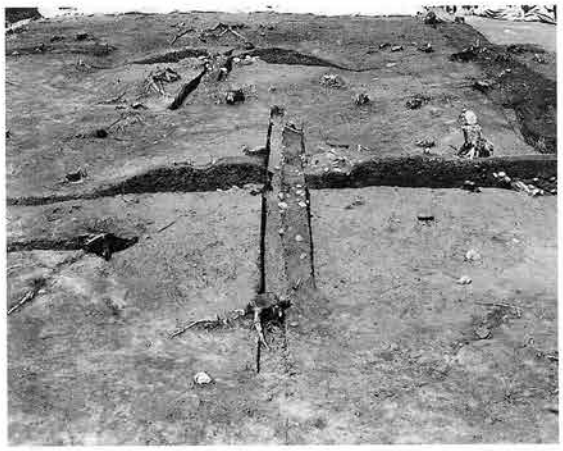


3号塚主体完掘　南から



3号塚完掘　東から

3号塚葺石（左）・主体礫（右）

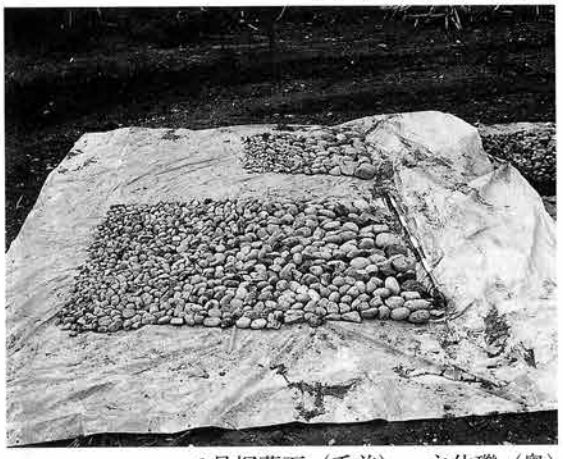


2号塚土層断面　東から

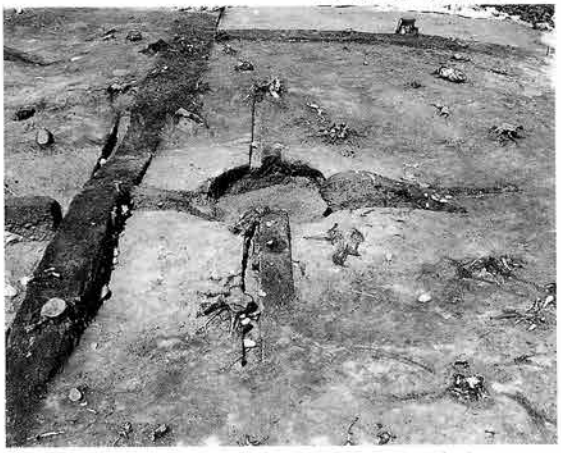
2号塚主体被覆礫　東から

2号塚主体断面　東から

2号塚主体完掘　東から



2号塚葺石（手前）・主体礫（奥）



1号塚土層断面　東から

1号塚掘り出し土土層断面　南から

1号塚の礫

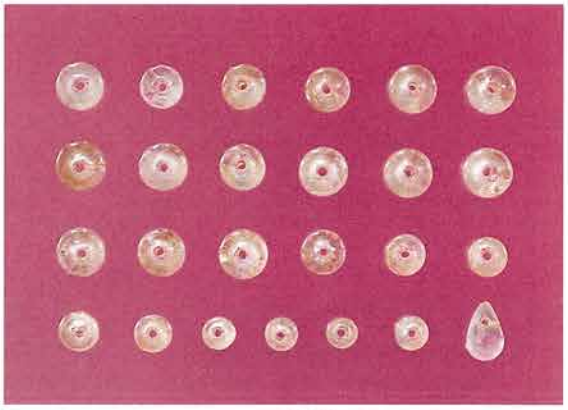
鉄器・石製品等

鉄器（弥生時代）

玉類（弥生時代）

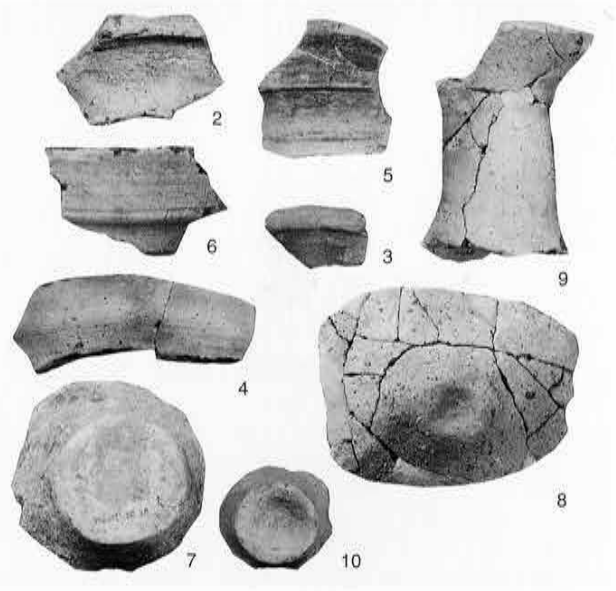
翡翠原石（弥生時代）

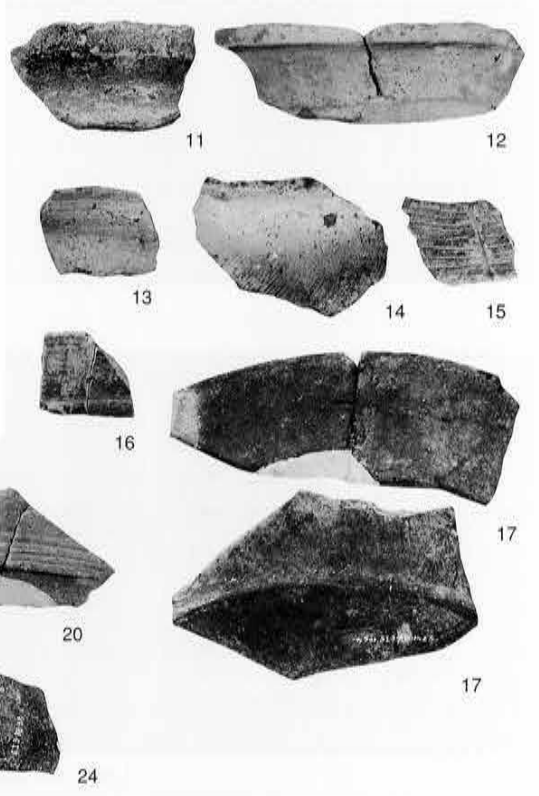
礫石経（三号塚主体土坑3号）

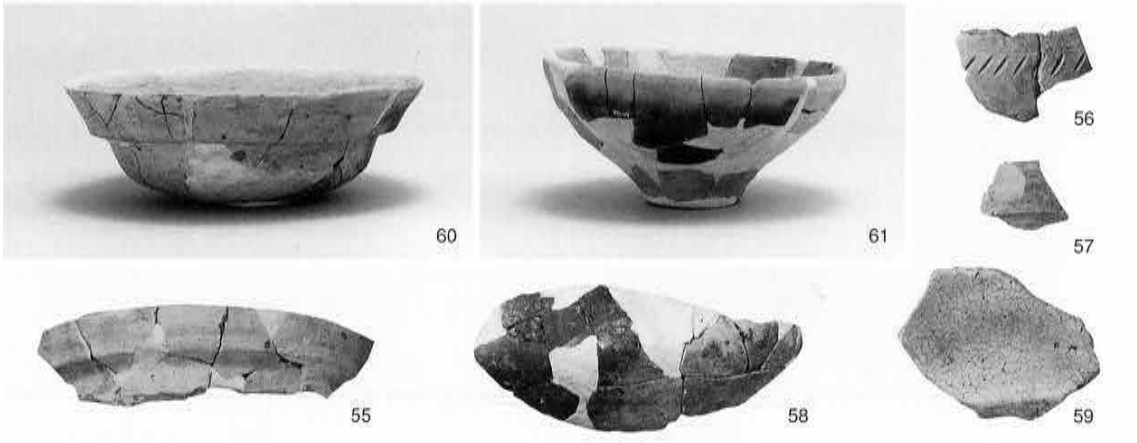


数珠（三号塚主体土坑ほか）

弥生時代後期の土器（1）







1号竪穴（1～10）　3号竪穴（11～24）
6号竪穴（55～61）

弥生時代後期の土器（2）

25

26

32

27

28

30

31

33

29

34

35

36

38

39

40

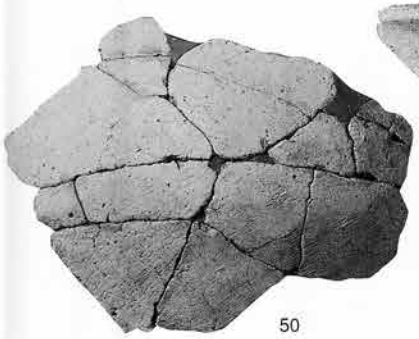
41

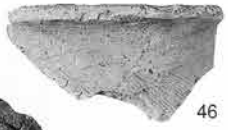
42

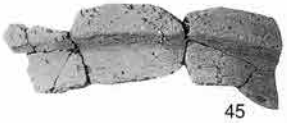
43

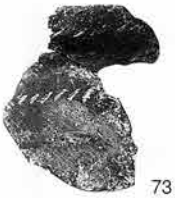
4号竪穴（25～36）
8号竪穴（38～43）

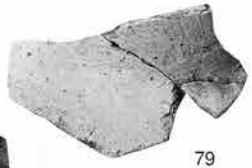
弥生時代後期の土器（3）





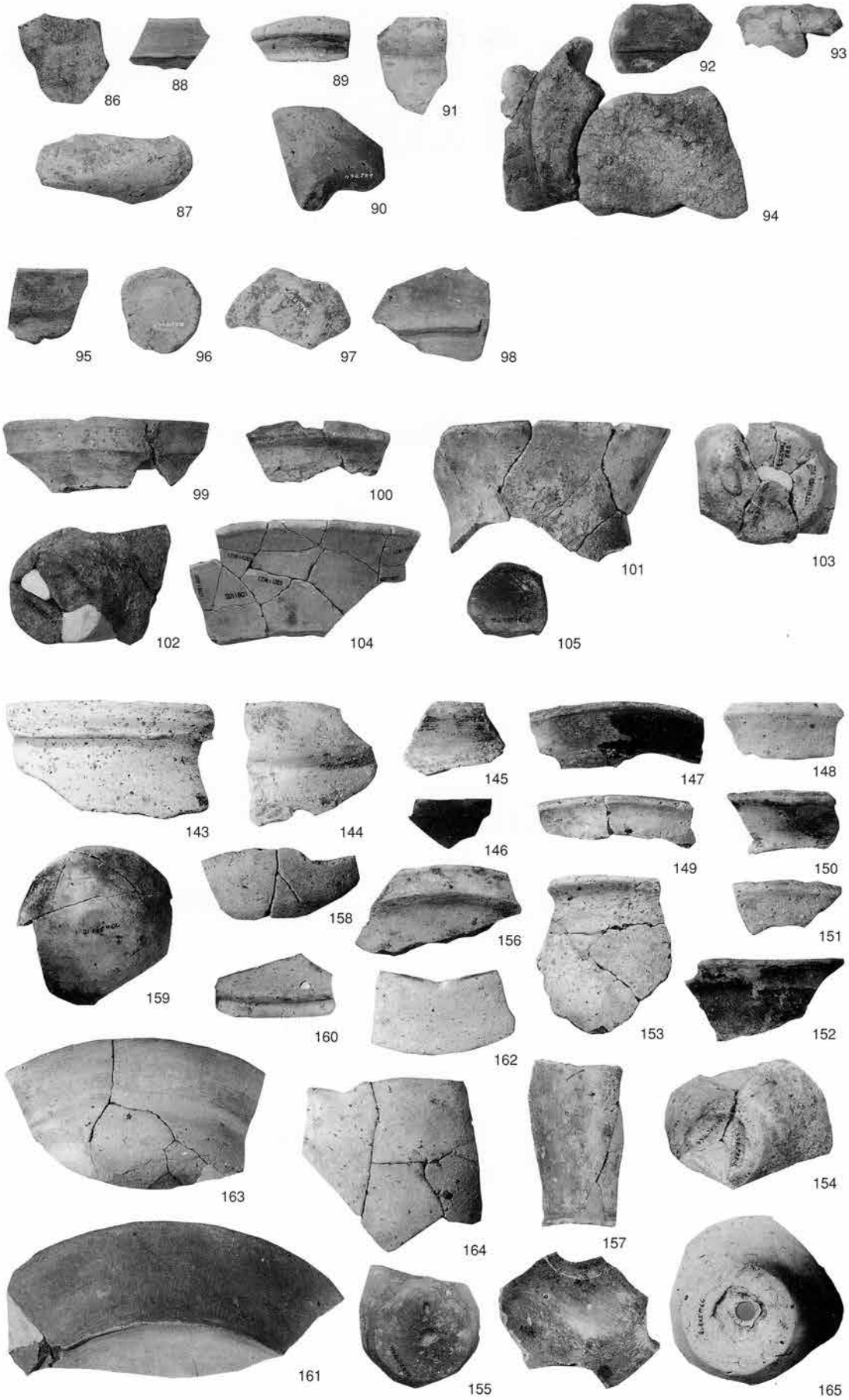






7号竪穴（37・62～66）　2号竪穴（44～51）　5号竪穴（52～54）　1号土坑（67～71）　3号土坑（72）
4号土坑（73～76）　5号土坑（77～79）　6号土坑（80～83）　7号土坑（84・85）

弥生時代後期の土器（4）



8号土坑（86～88）　9号土坑（89～91）　10号土坑（92～94）
12号土坑（95～98）　2号溝（99～105）　3号土坑（143～165）

弥生時代後期の土器（5）

127

132

106

128

112

108

109

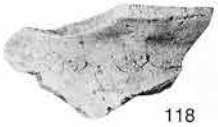
110

115

107

114

113


118

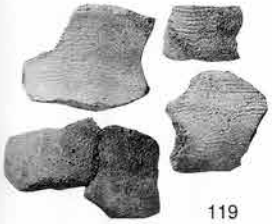
111

116

117

121

120


119

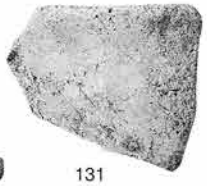
122

123

124

125

130


131

126

129

135

133

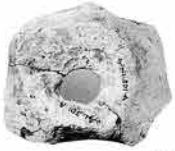
134

136

138

137

139

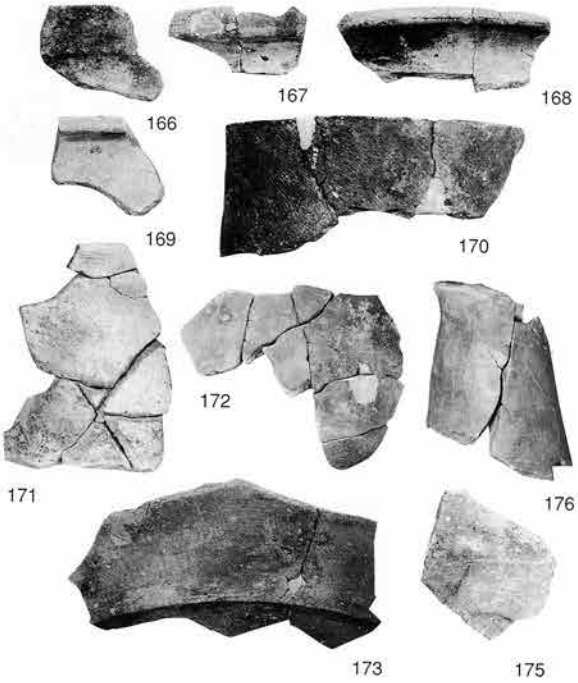

140

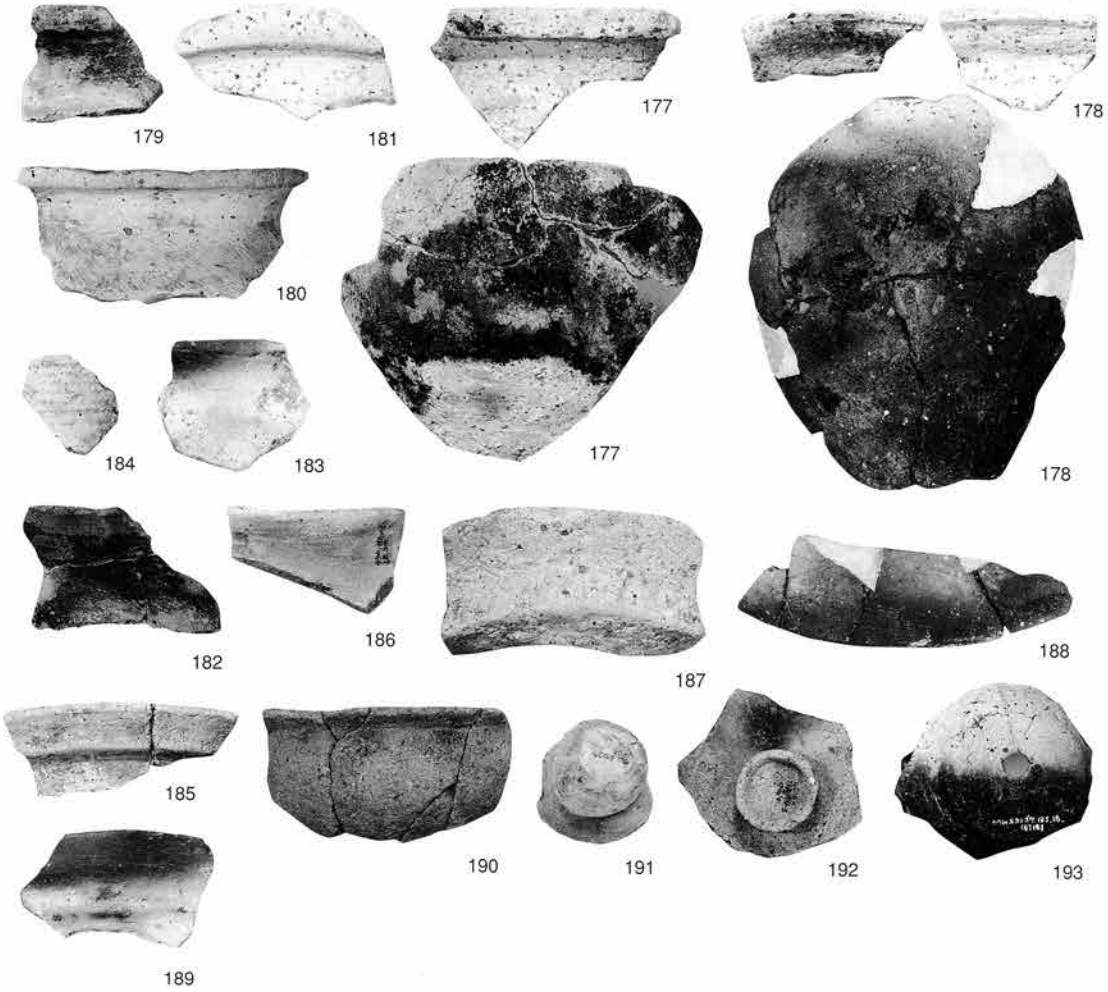
141

142

1号溝（106～142）

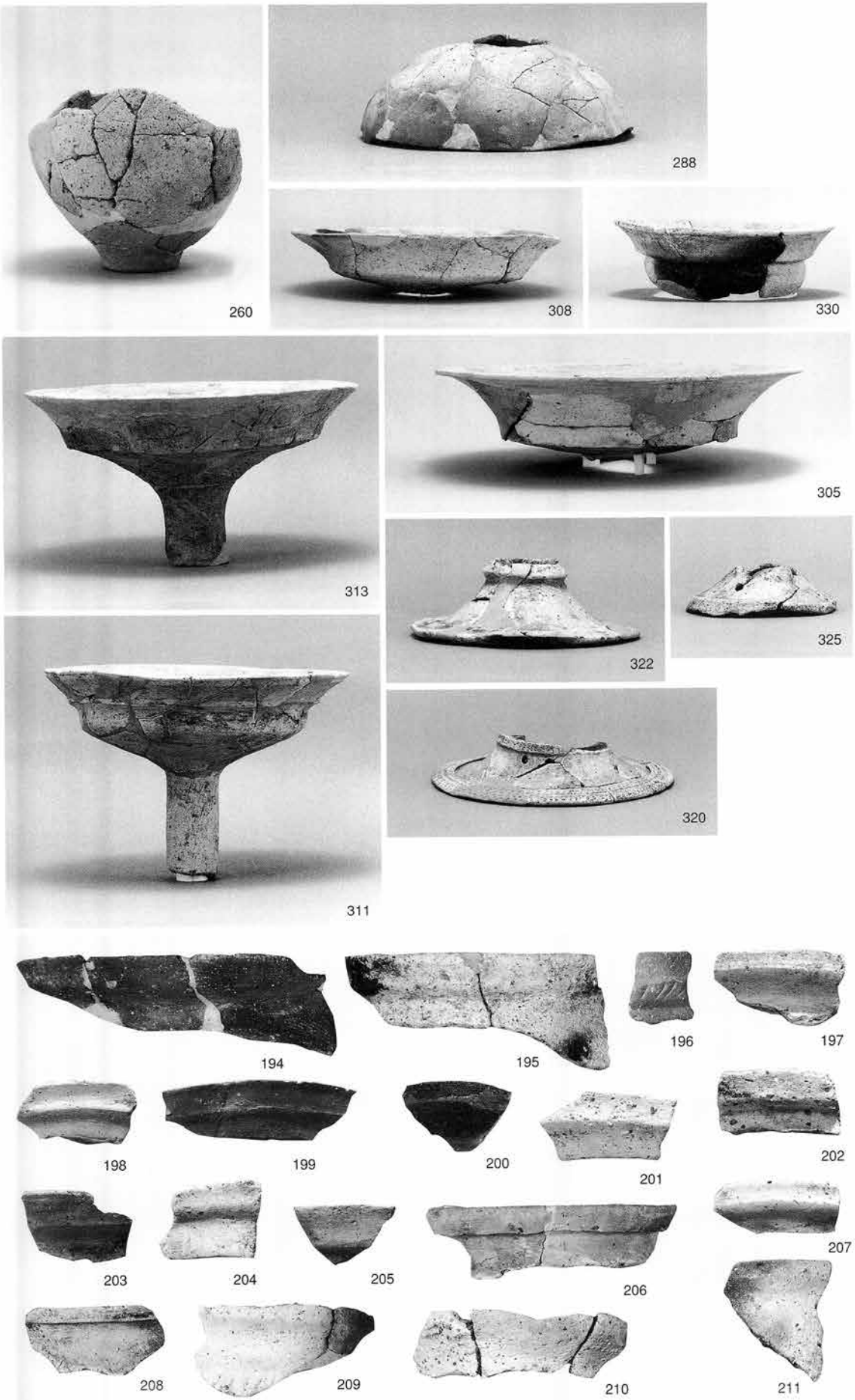
弥生時代後期の土器（6）





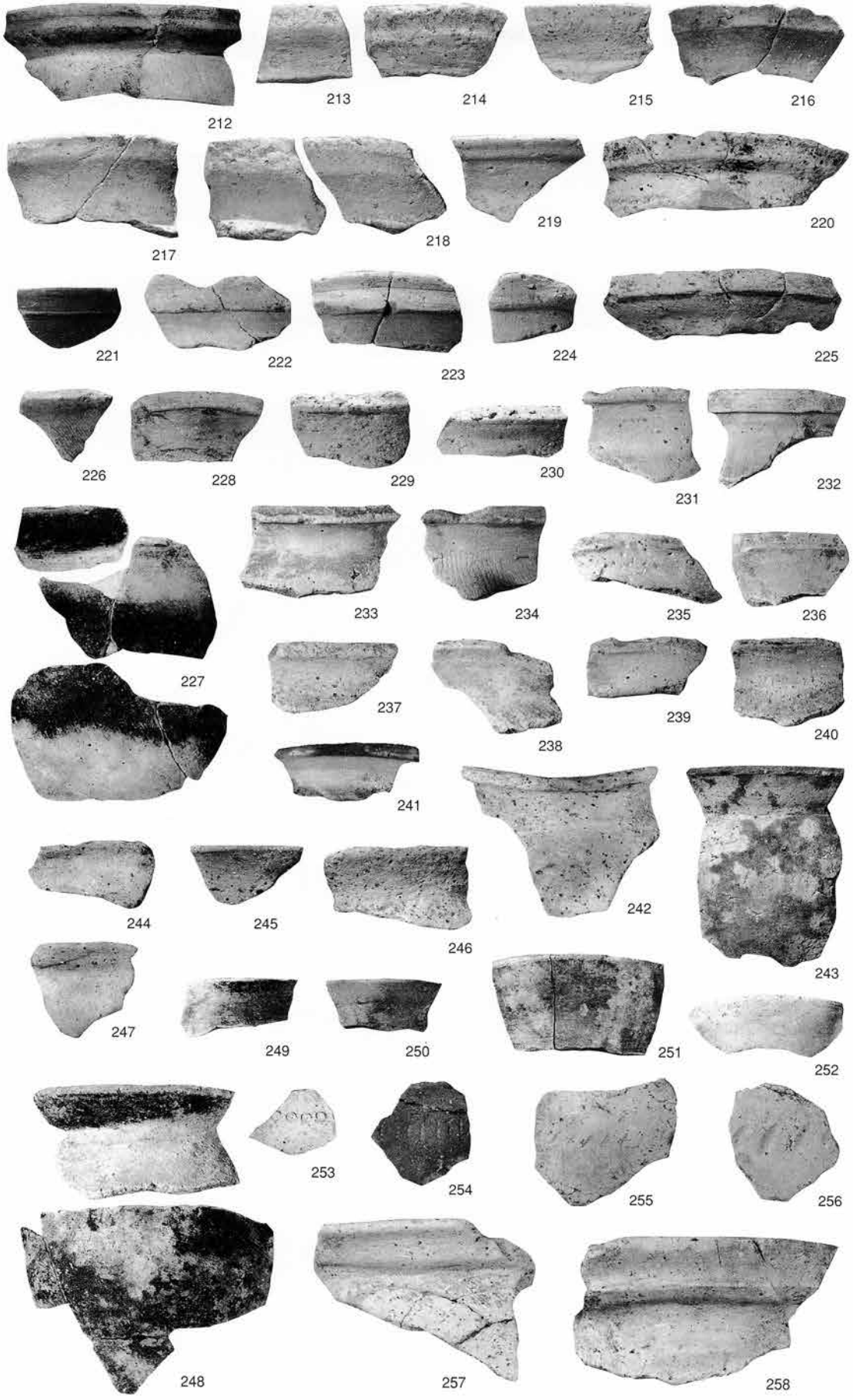
11号土坑（166～176）
東環濠　（177～193）

弥生時代後期の土器（7）



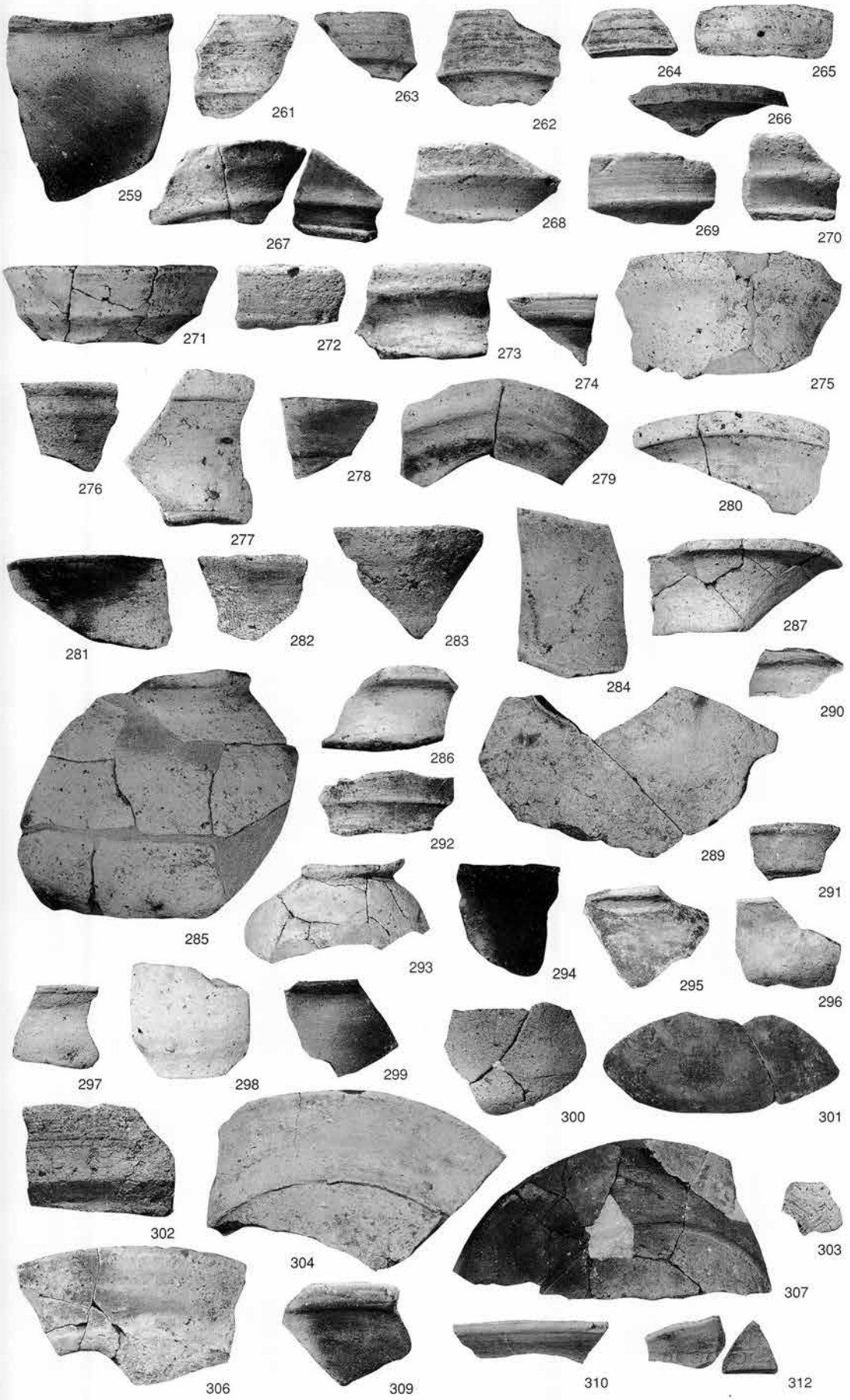
南環濠（260・288・305・308・311・320・322・325）
（194～211）

弥生時代後期の土器（8）



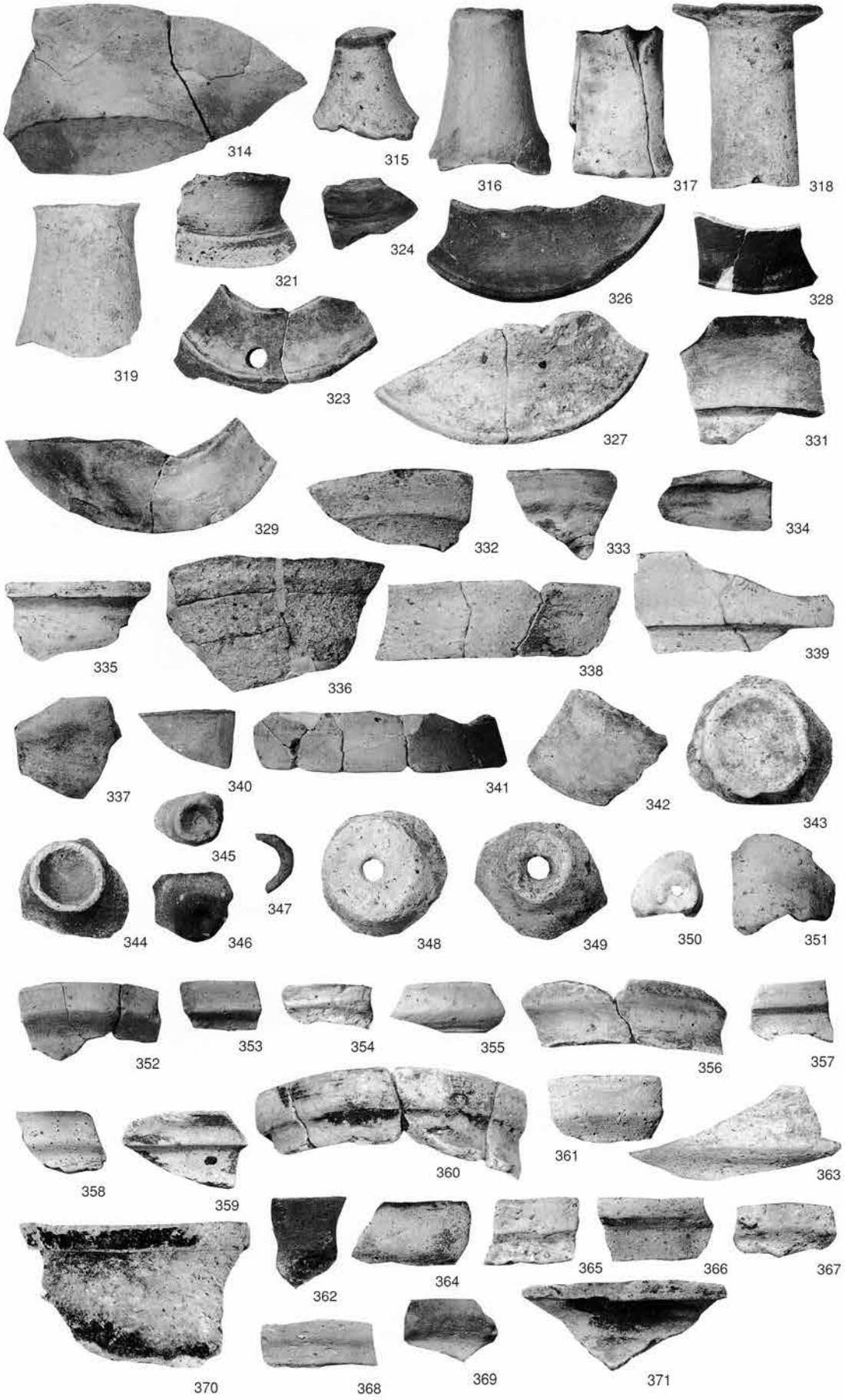
南環濠（212～258）

弥生時代後期の土器（9）



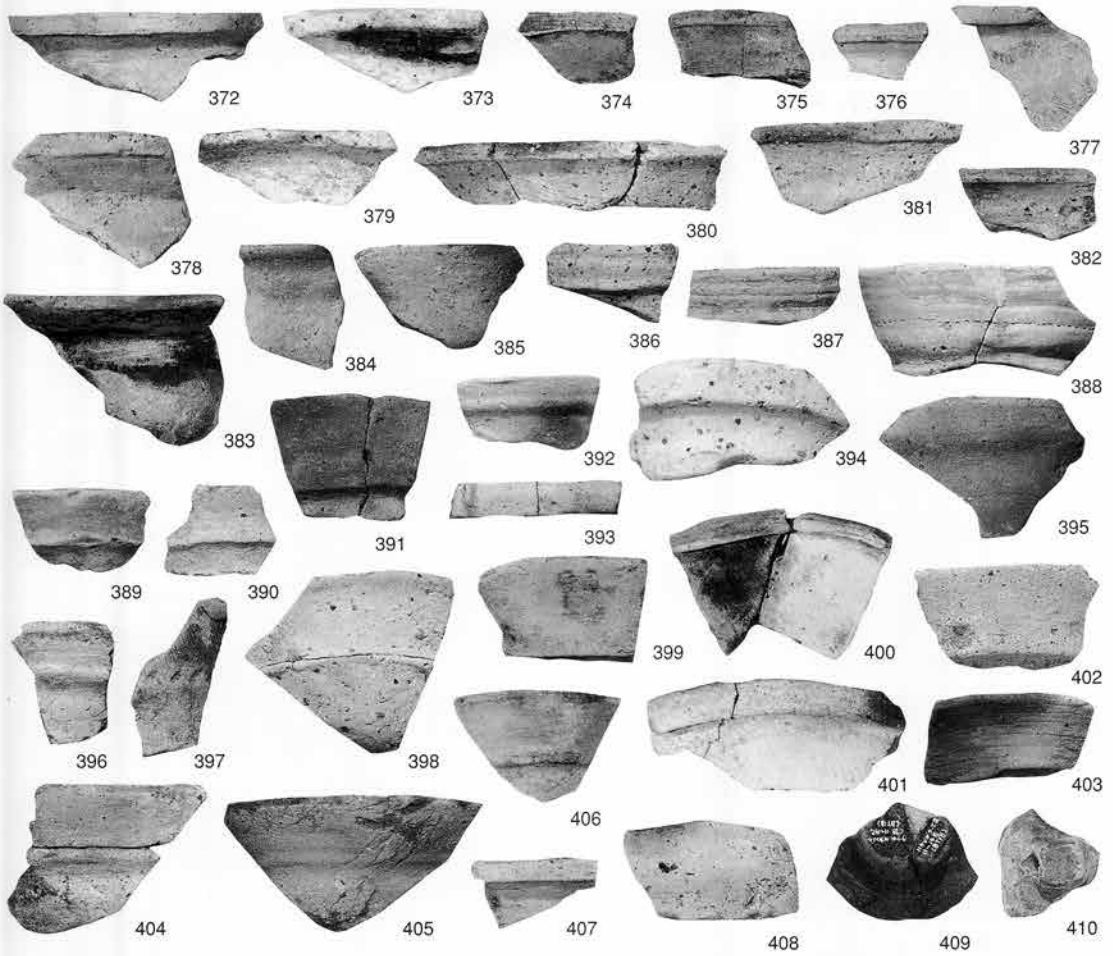
南環濠（259～312：288・305・308・311除く）

弥生時代後期の土器（10）



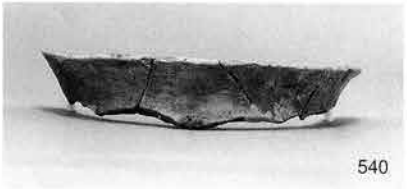
南環濠（314～351：320・322・325・330除く）
北環濠（352～371）

弥生時代後期の土器（11）



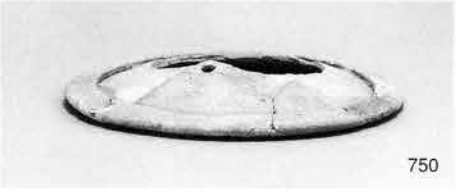
北環濠　（372～410）
主丘頂上（589・640・641・655・675）

弥生時代後期の土器（12）


540

716

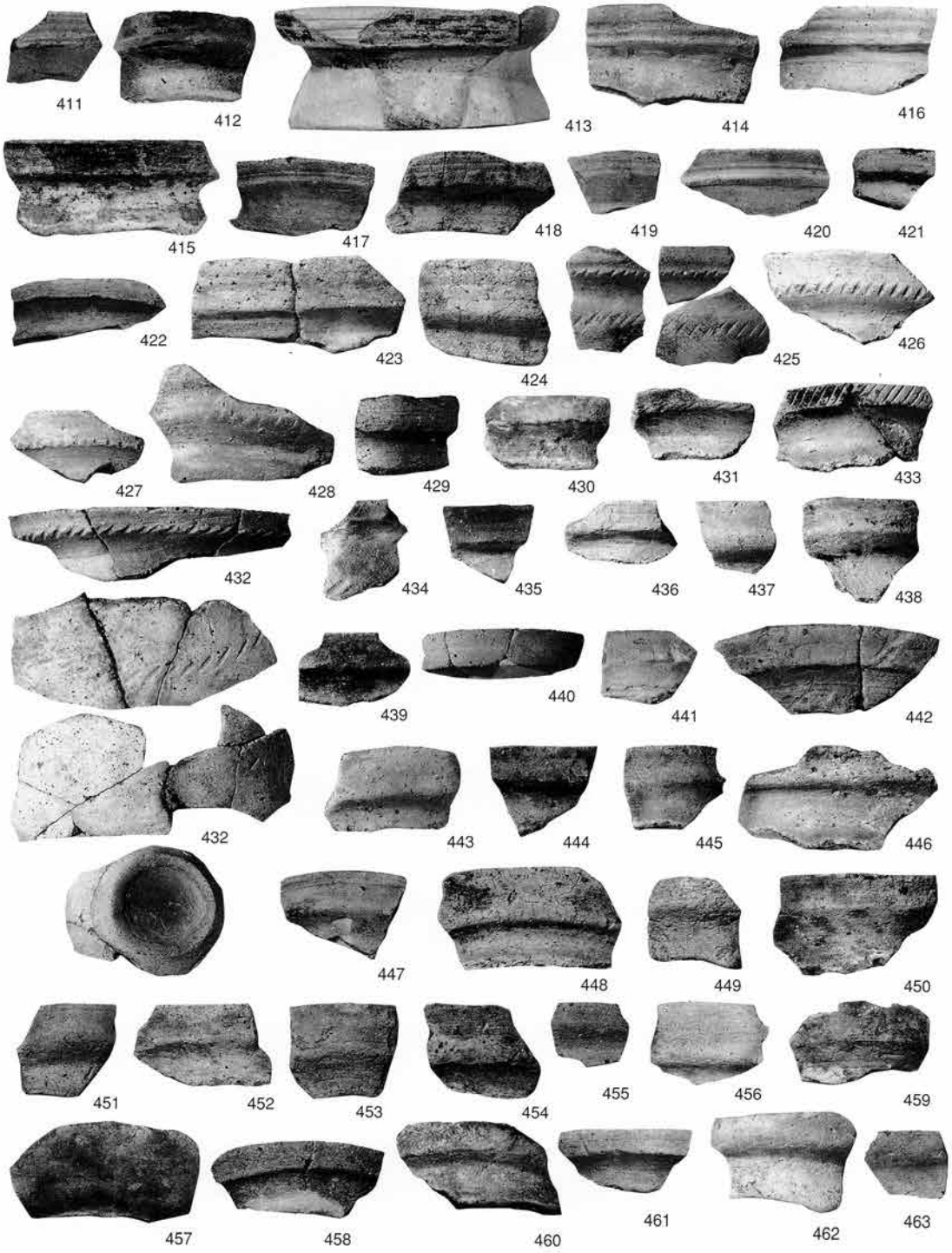
749


750

779

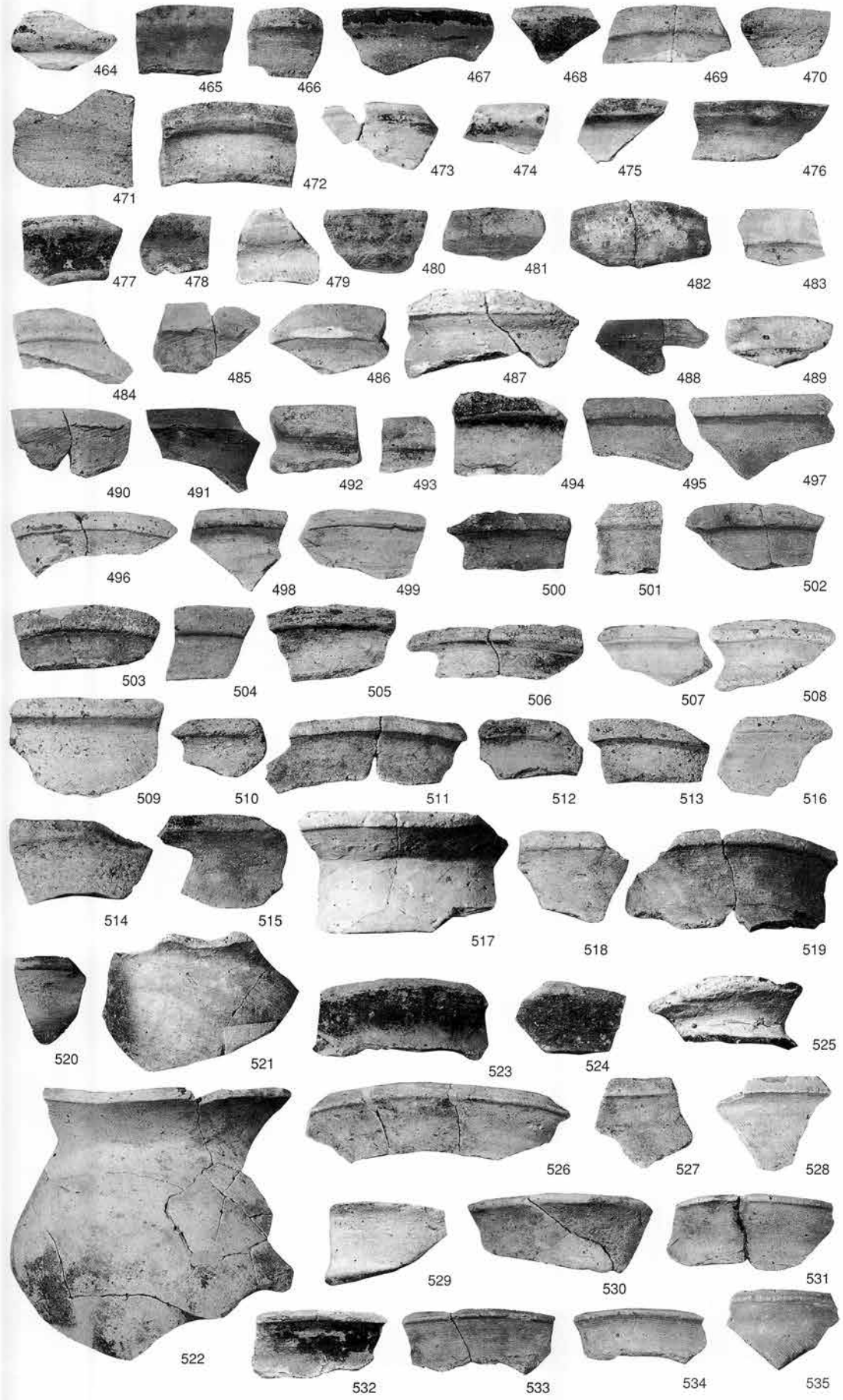
781

782



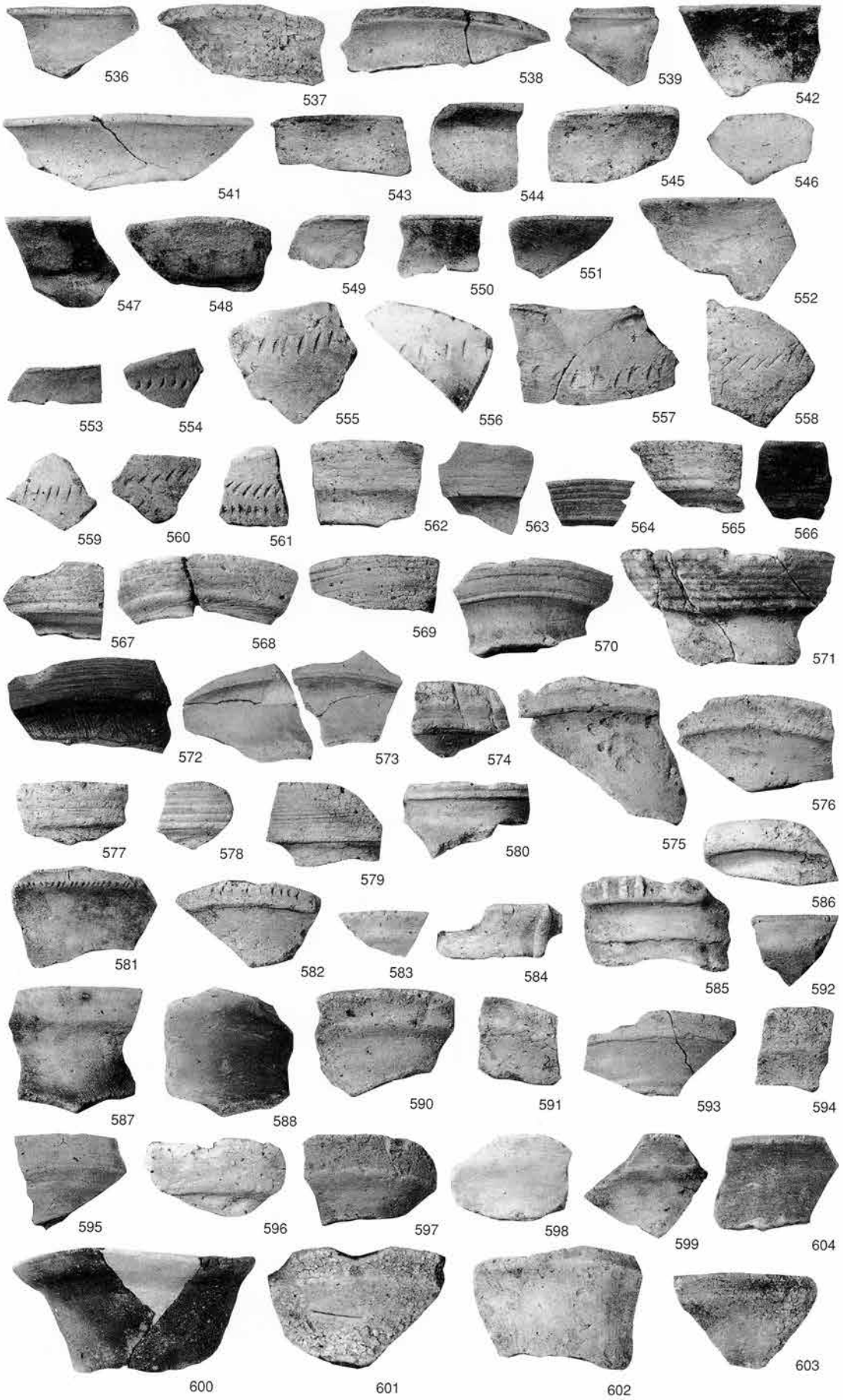
主丘頂上（540・716・749・750・779・781・782）
（411～463）

弥生時代後期の土器（13）



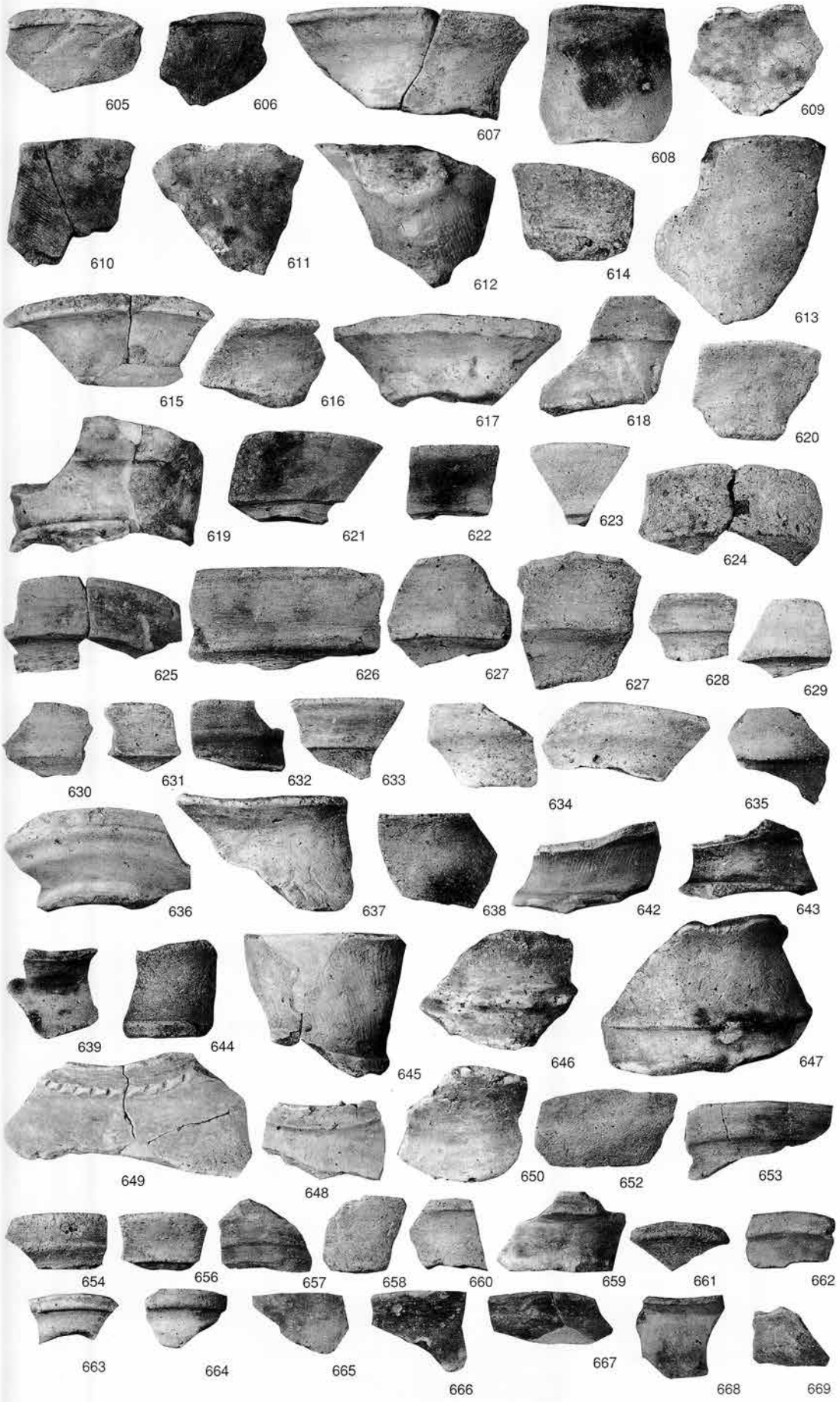
主丘頂上（464～535）

弥生時代後期の土器（14）



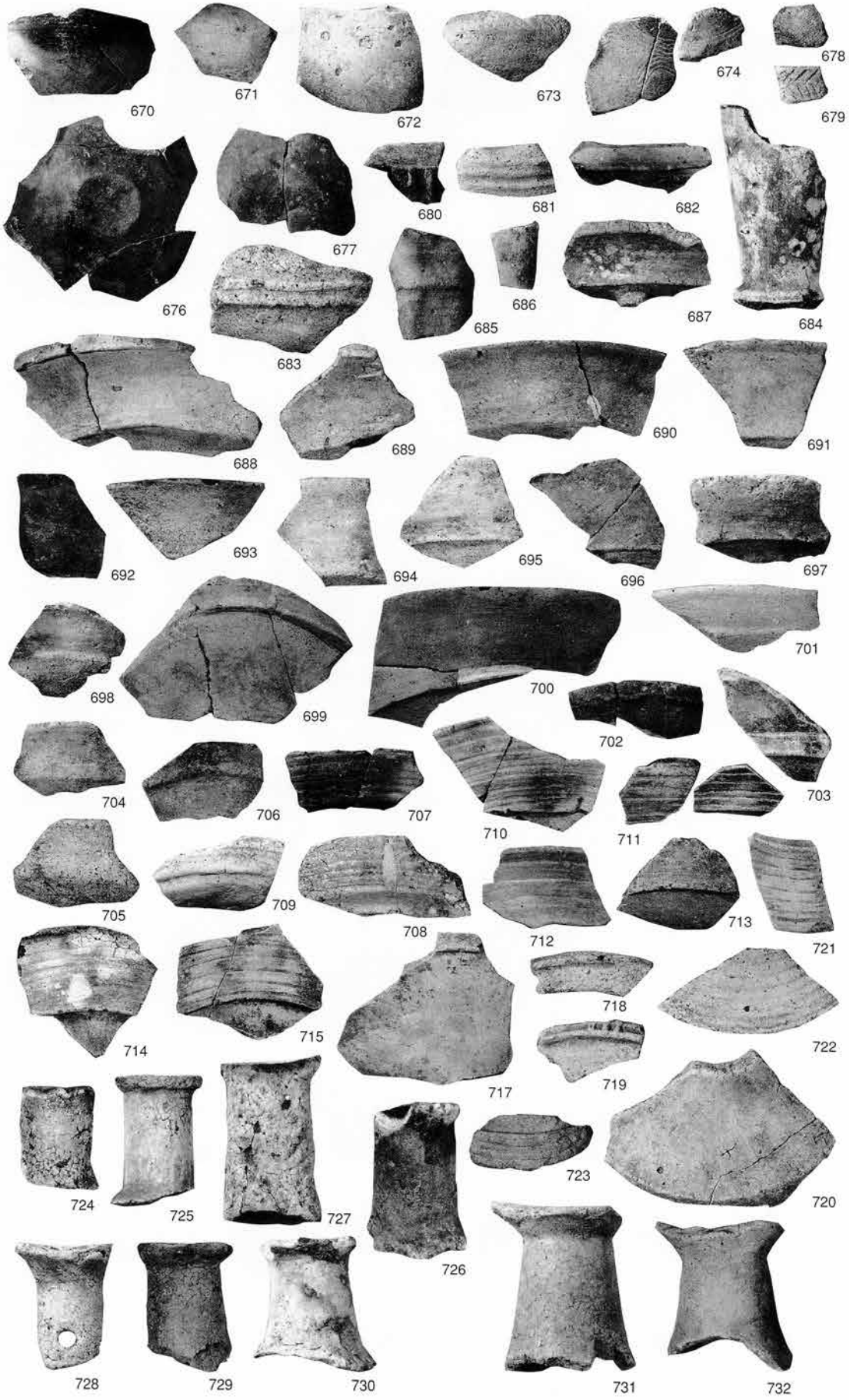
主丘頂上（536～604：540・589除く）

弥生時代後期の土器（15）



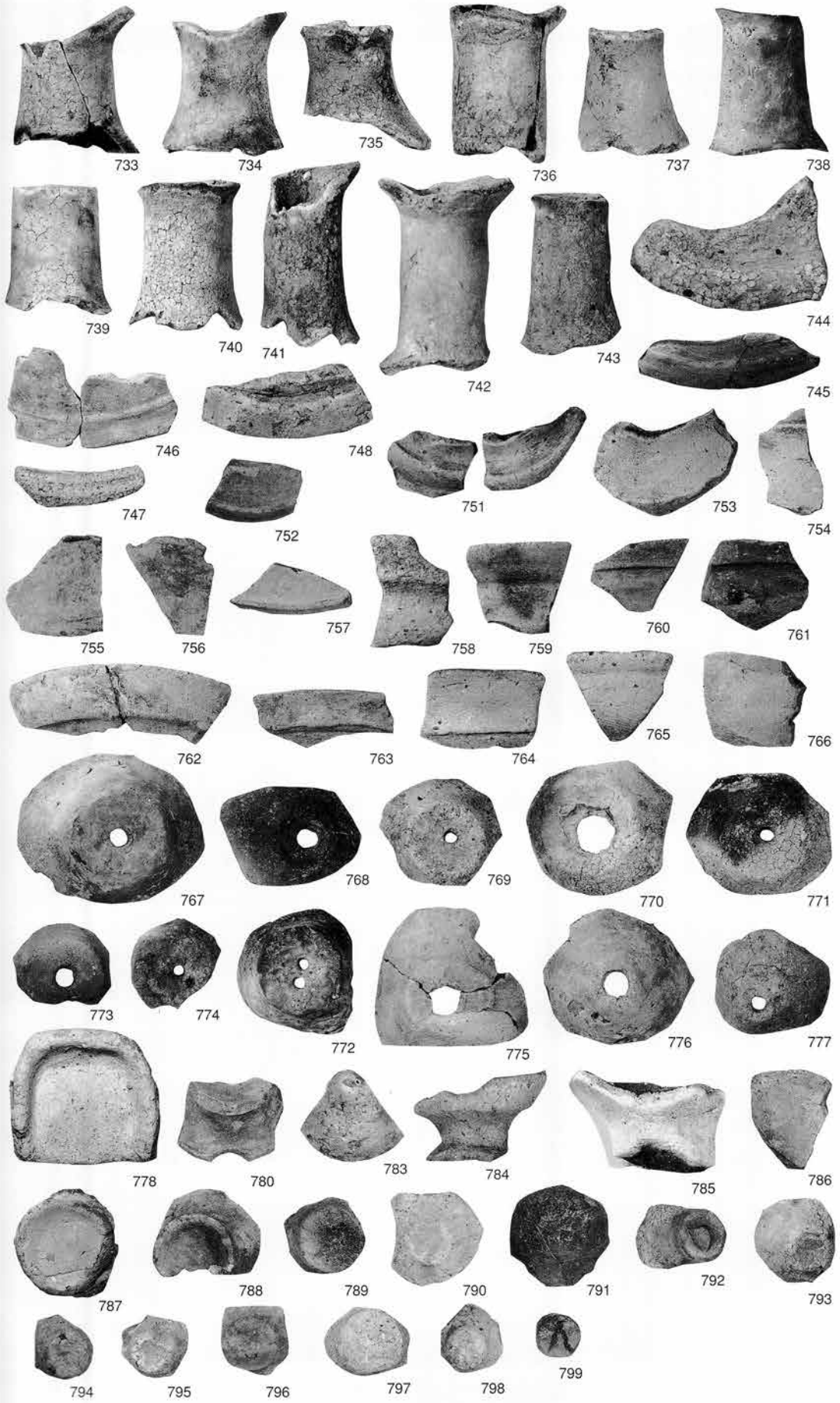
主丘頂上（605～669：640・641・651・655除く）

弥生時代後期の土器（16）



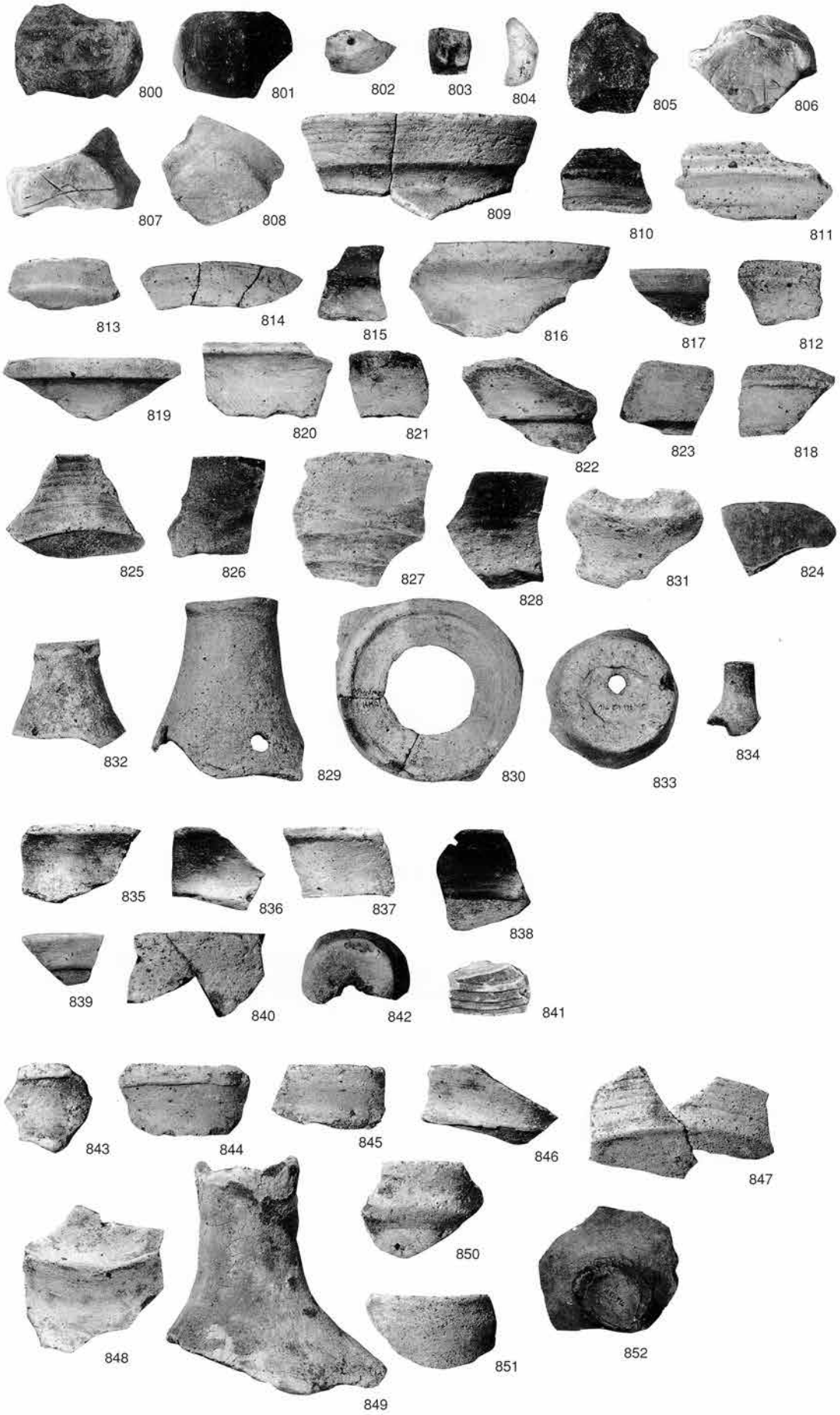
主丘頂上（670～732：675・716除く）

弥生時代後期の土器（17）



主丘頂上（733～799：749・750・779・781・782除く）

弥生時代後期の土器（18）



主丘頂上（800～834）　主丘斜面（835～842）　南環濠下・東小谷（843～852）

弥生時代後期の土器（19）・縄文土器

853

868

854

855

856

857

857

863

858

860

861

862

859

864

866

866

867

865

870

871

869

872

873

874

875

876

877

878

879

880

881

882a

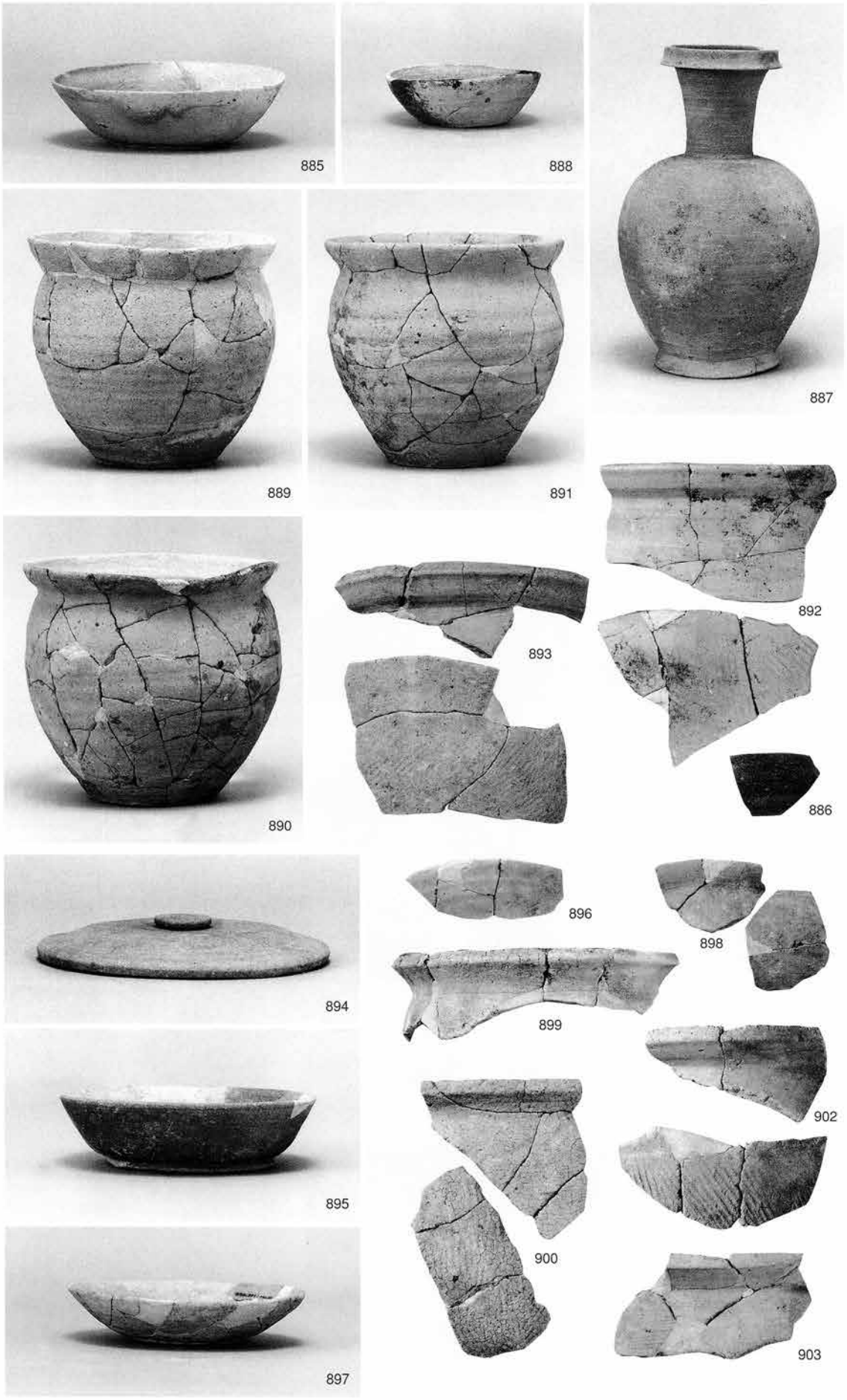
882b

883

884

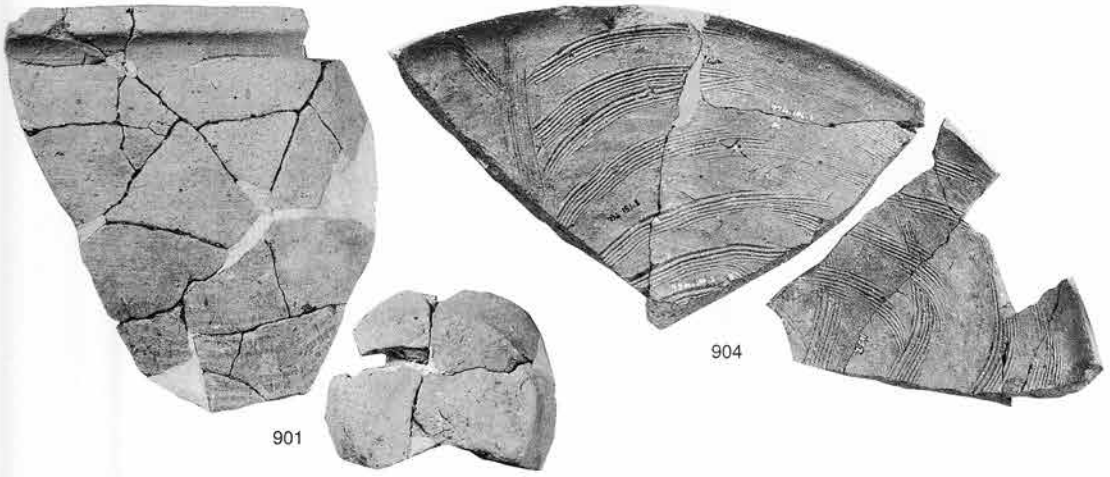
南環境濠下・西小谷（853～871）
縄文時代の土器　　（872～884）

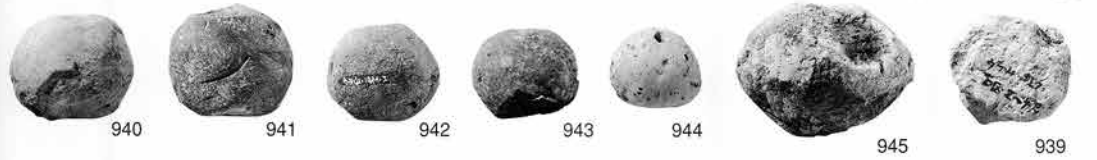
古代の土器（1）



H1号竪穴（885～893）
主丘頂上 （894～903：901除く）

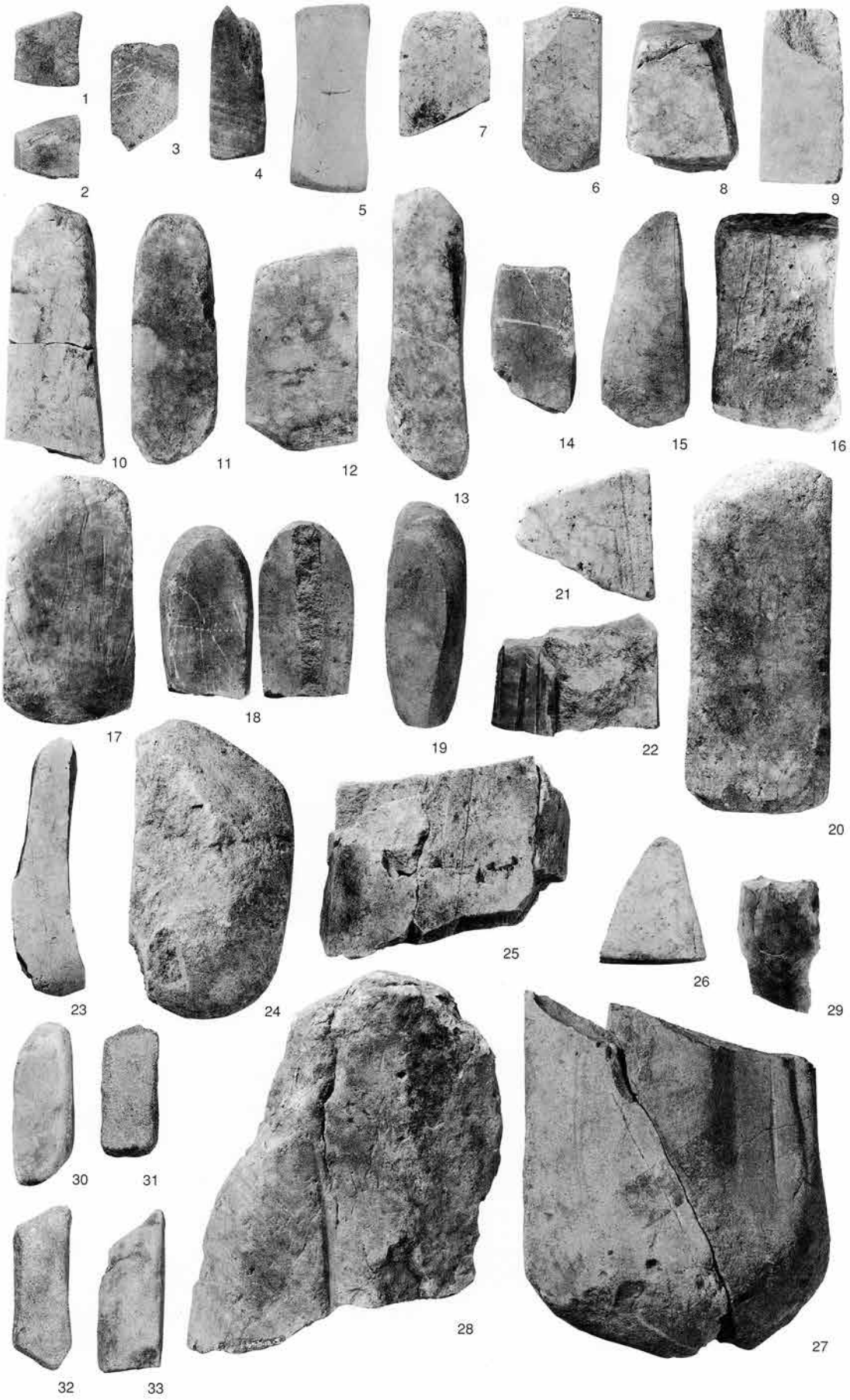
古代の土器（2）・中世陶器・土製品





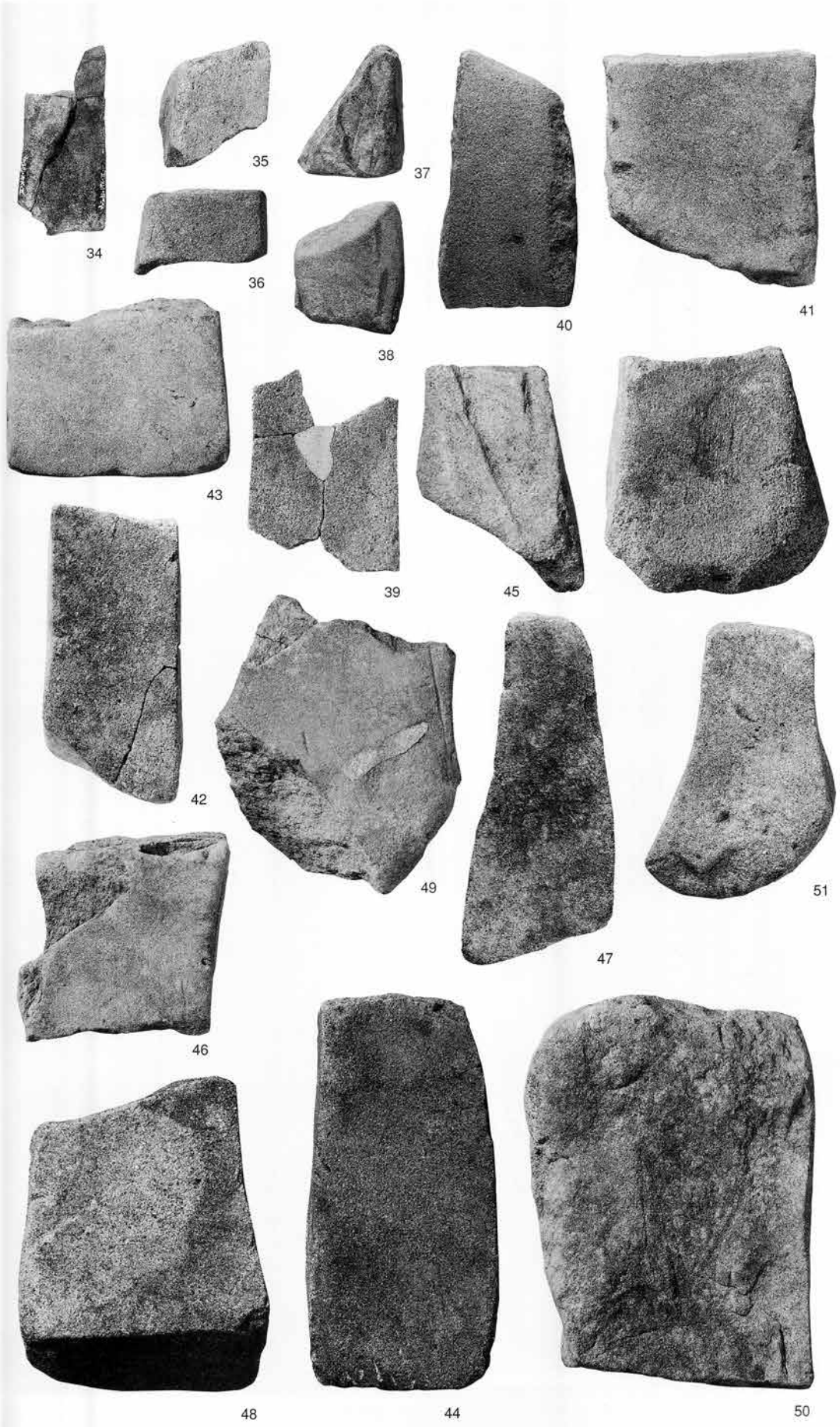
（901・904：911～951）

石器・石製品（1）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33

（1～33）

石器・石製品（2）



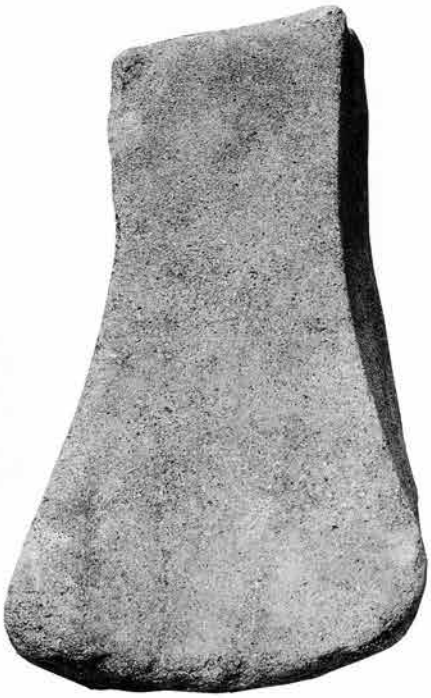
（34～51）

石器・石製品（3）

52

54

56



58

（52・54・56・58）

石器・石製品（4）

55

57

53

59

60

62

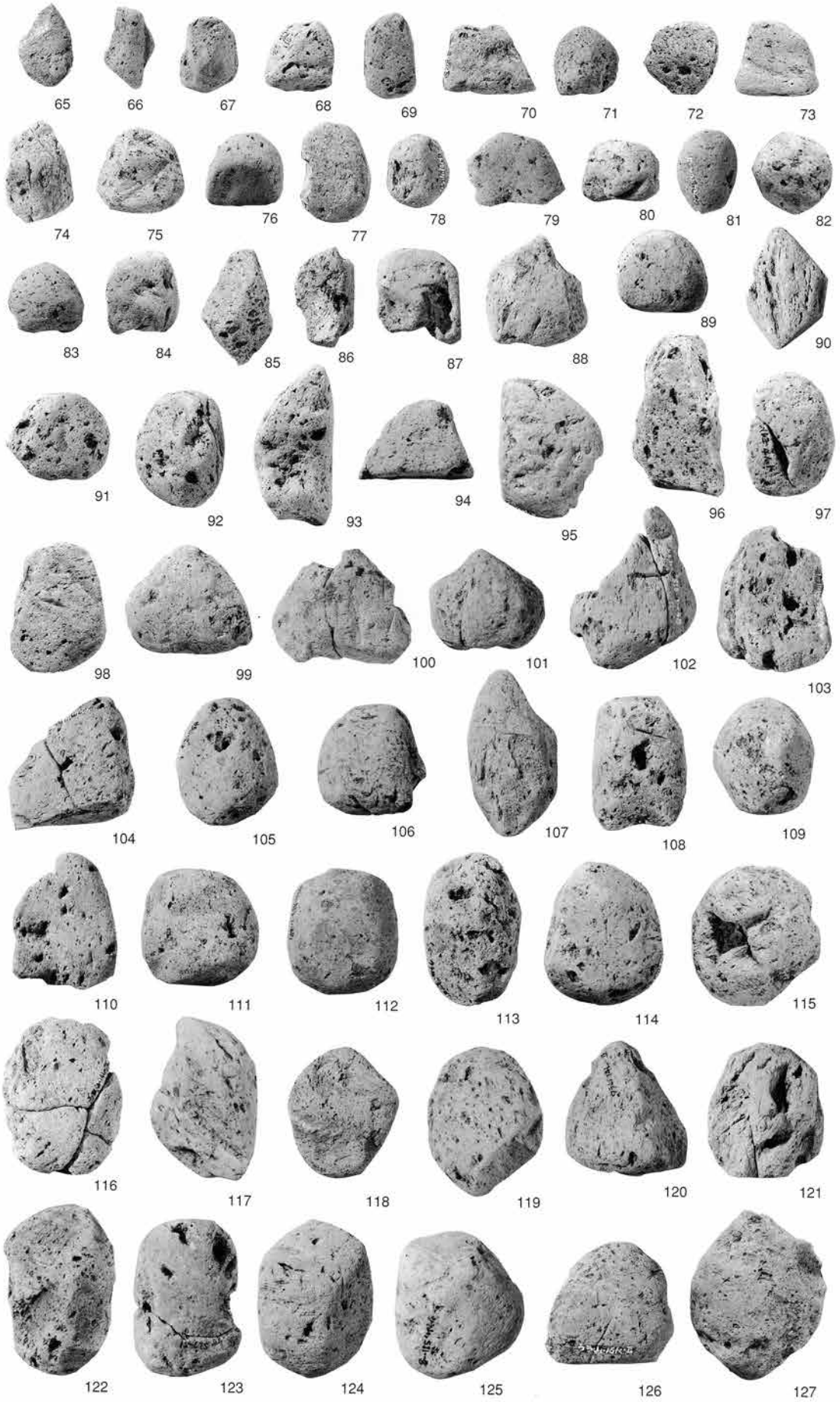
61

64

63

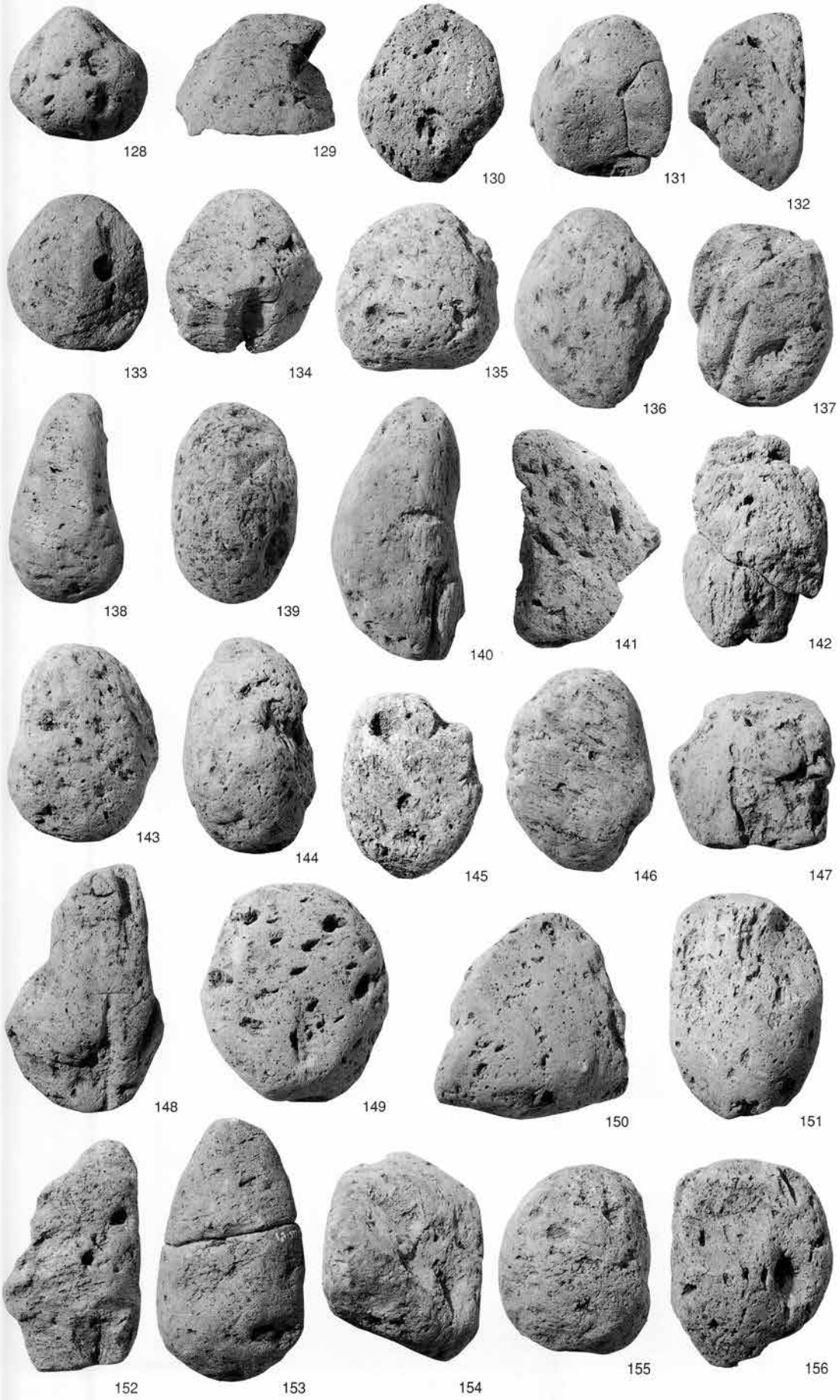
（53～64：54・56・58除く）

石器・石製品（5）



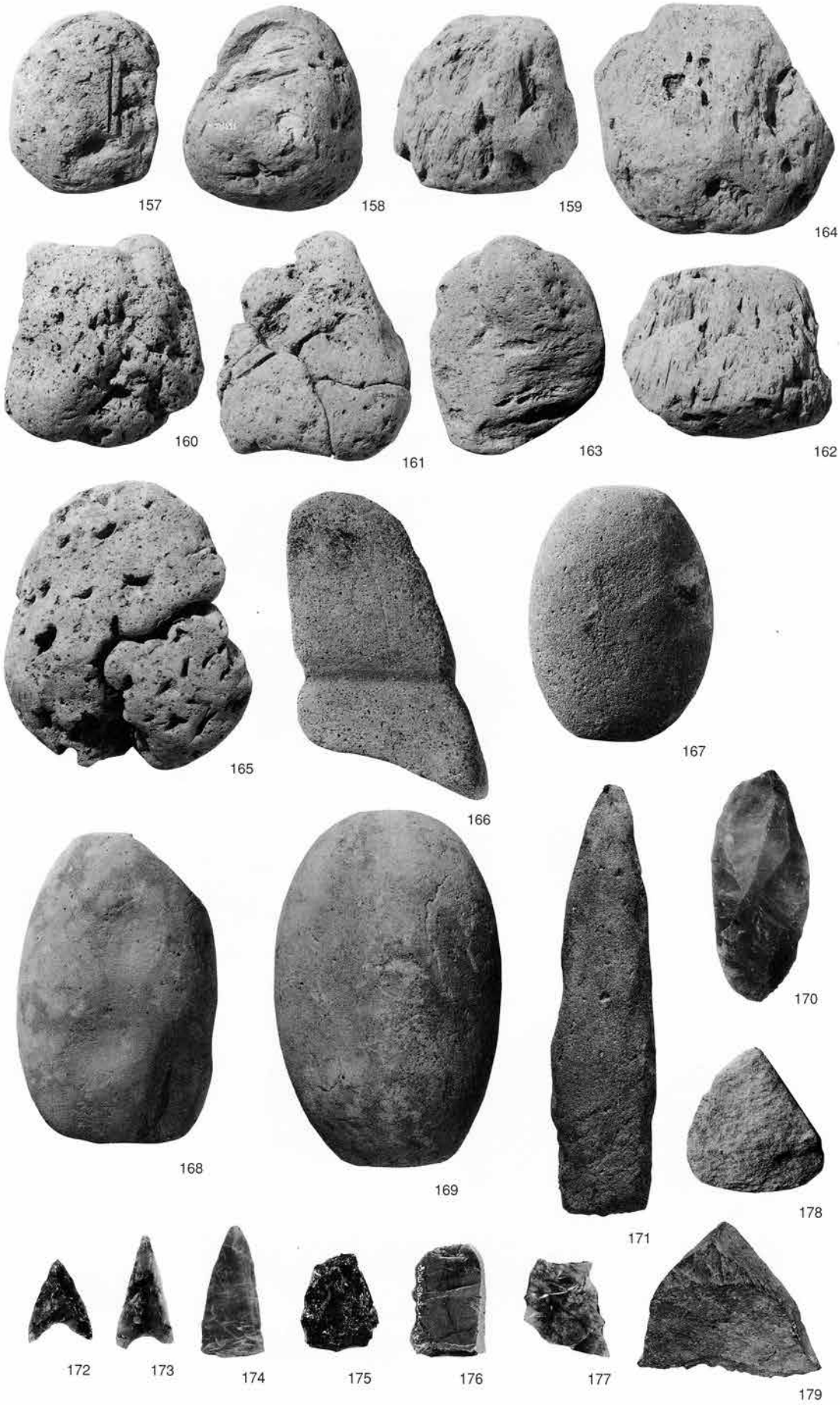
（65～127）

石器・石製品（6）



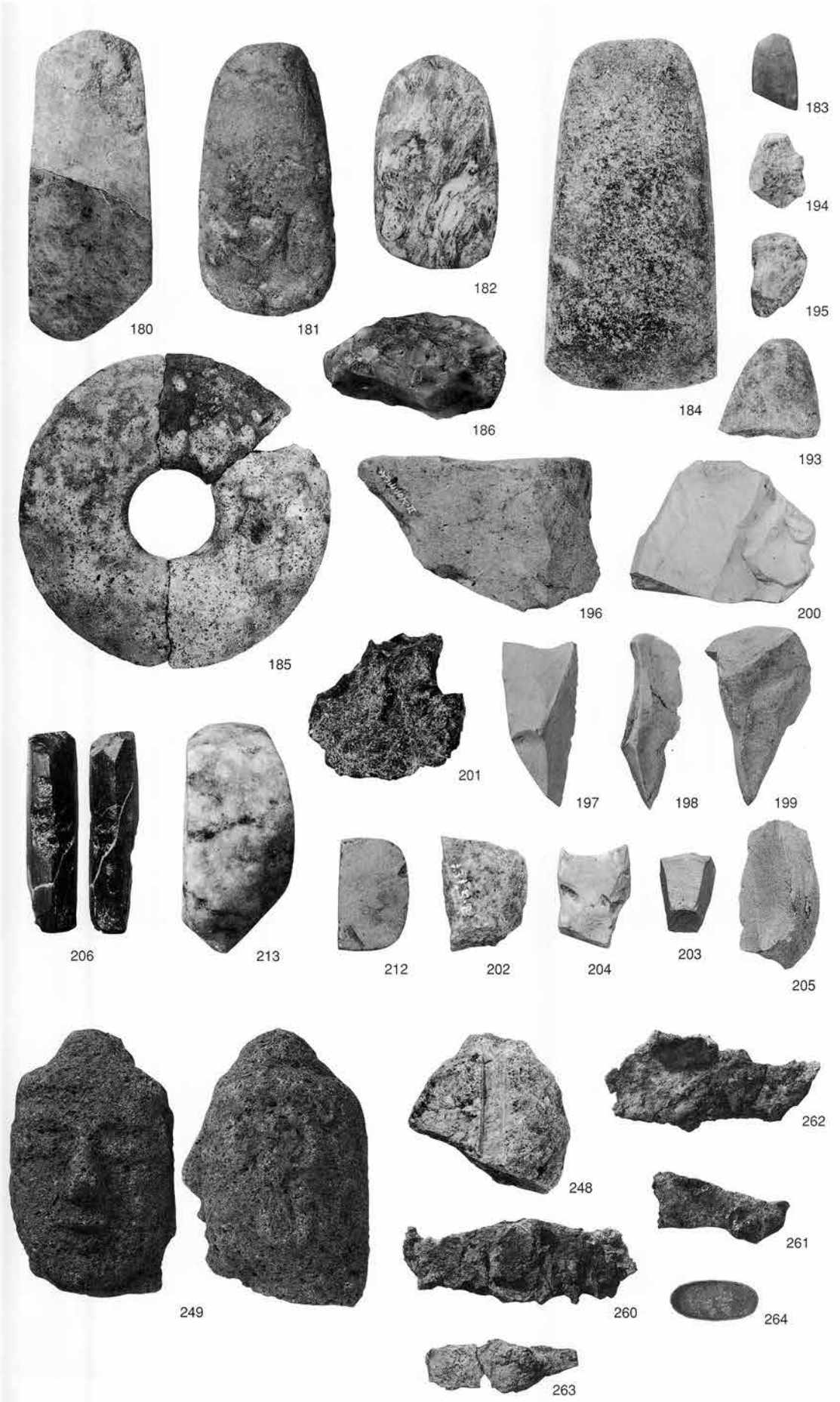
（128～156）

石器・石製品（7）



（157～179）

石器・石製品（8）・金属器



（180～186・193～199・201～206・212・213・248・249・260～264）

墨書礫（1）

1号塚1号

1号塚2号

1号塚3号

1号塚4号

1号塚5号

1号塚6号

1号塚7号

1号塚8号

1号塚9号

1号塚10号

1号塚11号

1号塚12号

1号塚13号

1号塚14号

1号塚15号

1号塚16号

墨書礫（2）

1号塚17号

1号塚18号

1号塚19号

1号塚20号

1号塚21号

1号塚22号

1号塚23号

1号塚24号

1号塚25号

1号塚26号

2号塚揖石1号

2号塚揖石2号

3号塚主体土坑1号

3号塚主体土坑3号

3号塚主体土坑3号

3号塚主体土坑3号

墨書礫（3）

地点不明1号

地点不明2号

地点不明3号

地点不明3号

地点不明4号

地点不明5号

地点不明6号

地点不明7号

地点不明8号

地点不明9号

地点不明10号

地点不明11号

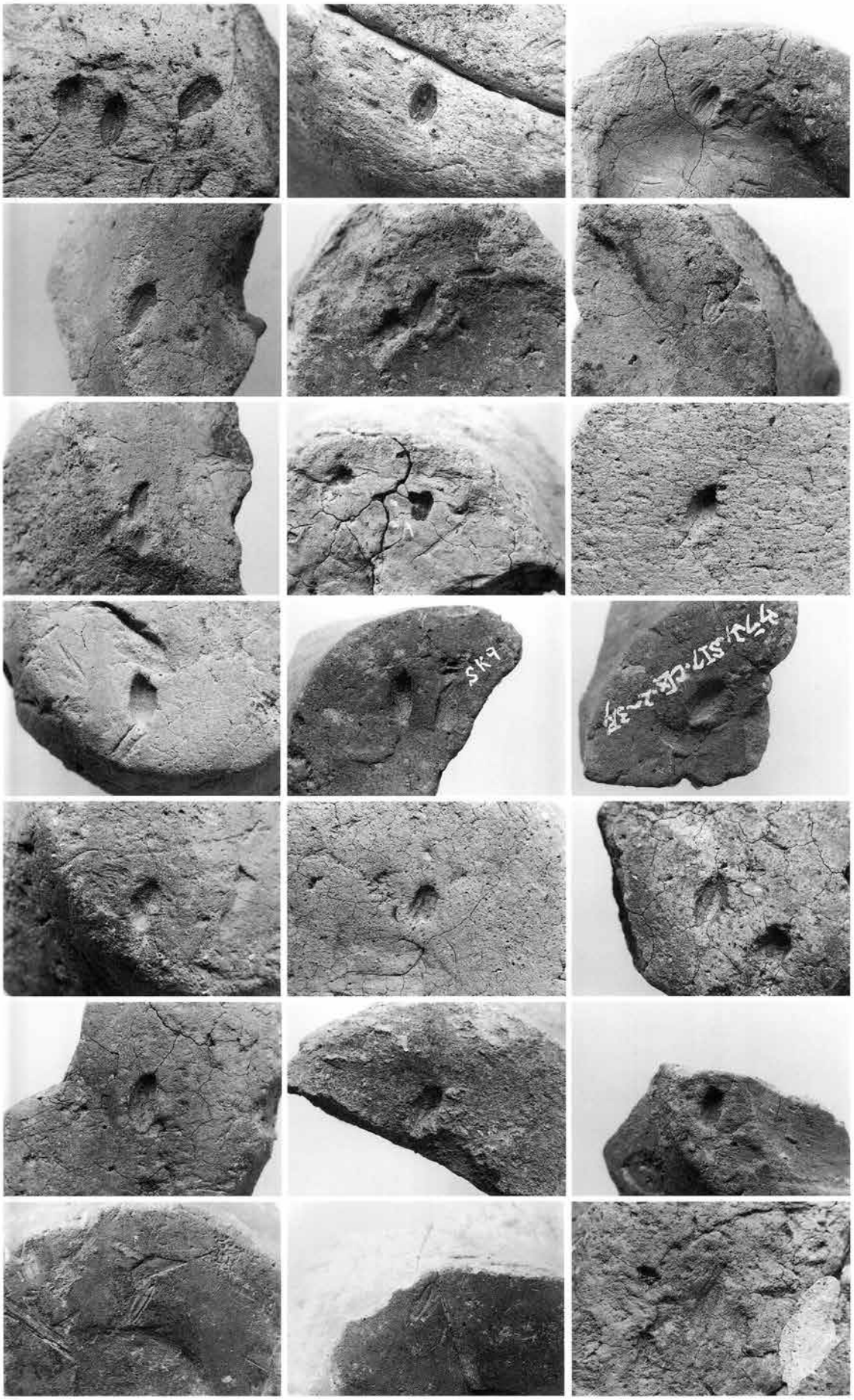
地点不明12号

地点不明13号

地点不明14号

地点不明15号

種実圧痕



報告書抄録

書　　名	裏山(うらやま)遺跡
副 書 名	上信越自動車道関係発掘調査報告書Ⅶ
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第96集
編著者名	小池義人・野水　仁・加藤　学・石田守之
	矢田俊文（新潟大学人文学部）・パリノサーヴェイ株式会社
編集機関	財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団
所 在 地	〒956-0845　新潟県新津市大字金津93番地1
発行年月日	2000年3月30日

所収遺跡	所　在　地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
裏山遺跡	上越市大字岩木字裏山1,151ほか	15-222	247	37度08分02秒	138度13分00秒	19951002～19951027 19951120～19951124 19960410～19961206 19970113～19970117	12,030㎡	上信越自動車道建設

遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
裏山遺跡	遺物散布地	縄文時代（早期・中期・晩期）		縄文土器・石器	
	集落	弥生時代（後期）	竪穴建物8基 環濠3条 土坑12基 溝2条	弥生土器 鉄器（鋤先・鉈・鉄鏃） 石器（砥石・磨製石斧・環状石斧・軽石製研磨具） 玉類（管玉・勾玉・ガラス小玉） 硬玉原石塊・有孔土製品	
	遺物散布地	古代（平安）	竪穴建物1基 土坑1基	土師器・須恵器	
	塚	中世	塚3基	珠洲焼・水晶製数珠・鉄器	

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第96集

上信越自動車道関係発掘調査報告書Ⅶ

裏山(うらやま)遺跡

平成12年3月30日　印刷
平成12年3月30日　発行

発行・編集　新潟県教育委員会
〒950－8570　新潟市新光町4番地1
電　話　025（285）5511
㈶新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956－0845　新潟県新津市大字金津93番地1
電　話　0250（25）3981
ＦＡＸ　0250（25）3986

印刷会社　㈲平電子印刷所
〒970－8024　福島県いわき市平北白土字西ノ内13
電　話　0246（23）9051

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第96集

上信越自動車道関係発掘調査報告書Ⅶ　裏山遺跡

正誤表

頁	行・表	誤	正
8	10	小林千恵子	小林智恵子
37	第15図	甕F	甕 H1